



宗第
第十
卷

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.34

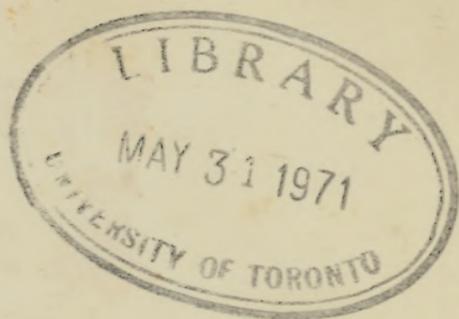
East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
V. 34

昭和
新纂

國譯大藏經

宗典部

第十卷

日本支那聖道門聖典 目次

大 乘 玄 論……………嘉祥大師撰……………	一
卷 第 一……………	一
卷 第 二……………	四
卷 第 三……………	九
卷 第 四……………	一五〇
卷 第 五……………	二二四
原 人 論……………宗密禪師撰……………	二七七
宗 門 無 盡 燈 論……………東嶺禪師撰……………	二九三
緇 門 崇 行 錄……………袿宏禪師撰……………	三九三

教	誠	律	儀	道宣律師撰	四六五
聖德太子十七憲法	聖德太子撰	四九一			
三	教	指	歸	弘法大師撰	四九五
八	宗	綱	要	凝然大德撰	五三九

日本支那聖道門聖典

第十卷	宗典部
-----	-----

【當書五卷、隋嘉祥寺の吉藏の撰なり。第一に二諦義第二に八不義六重第三に佛性義十門第四に二智義十二門、第五に教連義三門、委曲に三論宗の奥義を盡す。】

大乗玄論 卷第一

胡吉藏撰

二諦の義に十重有り。

第一には大意を標す。第二には釋名。第三には立名。第四には有無。第五には二諦の體。第六には中道。第七には相即。第八には攝法。第九には辨教。第十には同異。

【言教】如來が言語を以て示誨し給ひたる教法のこと
 【相待の假稱】一切諸法は皆これ差別界中の現象にして、生あるが故に死あり、長あるが故に短あり、方あるが故に圓あり、一各相對せり。故に各も眞實の體性無くただ假名のみにあり。これを相待の假稱といふ。
 【無所得】心に何等の一物をも存せざることを、無執着

【一】二諦とは蓋し是れ言教の通詮にして相待の假稱、虛寂の妙實、中道を窮むるの極號なり。明すらく、如來は常に二諦に依りて、法を説きたまへり。一には世諦、二には第一義諦なり。故に二諦は唯是れ教門にして、境理に關らず、而も學者に其巧拙有りて、遂に得失の異有り。所以に若し巧方便慧有りて、此二諦を學すれば無所得を成じ、巧方便の慧無くして教を學すれば、即ち有所得を成ず。故に常途の三師は辨を置くこと各異なり。開善云はく、『二諦とは法性の旨歸にして一實不二の極理なり。』莊嚴云はく、『二諦とは、蓋し是れ惑を祛るの勝境、道に入るの實津なり。』光宅云はく、『二諦とは蓋し是れ聖教の遙泉、靈智の淵府なり。』と。三說復同じからずと雖も、或は言に智解を含み、或は辭に聖教を兼ね、同じく境理を以て諦と爲す。若し廣州の大亮法師に依れば定めて言教を以て諦と爲せり。今は此等の諸師に同じからず。問ふ、『攝嶺、興皇何んが言教を以て諦と爲す。』

なること。

【有所得】有とい

へば有を捕へ、無

といへば無に滞り

凡て心に一物を存

して執着すること

【教諦】三論宗の

語。佛所説の眞俗

二諦をいふ。

【於諦】三論宗の

語。於は所依の義

佛の説法を教諦と

なし、所依の二諦

を於諦といふ。

【諦】眞實にして

虚妄ならざる義。

【性空】一切諸法

は因縁和合に依り

て生じたるものに

空して、その眞性は

空無なりといふこ

と。

【縁】心識が外境

を認知すること。

【他家】以下、

他家に就いて十種

の異を擧ぐ。

【理教】本體(理)

と現象(事)とを異

りたるものとせず

平等(理)なりと説

答ふ、「深意有り、由來理を以て、諦と爲すに對せんが爲の故に縁に對して假説するなり。」
 問ふ、「中論」には「諸佛二諦に依りて法を説きたまふ」と云ひ、「涅槃經」には「衆生に隨順
 するが故に二諦を説く」と云ふ。是れ何の諦ぞや。答ふ、「能依は是れ教諦、所依は是れ於諦
 なり。問ふ、「於諦を失と爲し、教諦を得と爲すや不や。答ふ、「凡夫の於は失と爲し如來
 の於は得と爲す。聖人の於は亦得亦失なり。而るに師云はく、「於諦を失と爲し、教諦を得
 と爲すとは乃ち是れ教を學して迷を成すればなり。本於は是れ通達、學教の於は別迷なり。
 通達は是れ本、別迷は末なり。本は是れ前の迷、末は是れ後の迷なり」と。問ふ、「何の意も
 てか凡聖の二の於諦を聞く。」答ふ、「云はく、凡聖の得失を示して凡を轉じて聖を成せしめ
 んとなり。問ふ、「於諦を失と爲さば何を以てか諦と言はんや。答ふ、「論文に自解すらく、
 諸法は性空なり。世間顛倒して有と謂へり。世人に於て實と爲せば之を名けて諦と爲す。
 諸の賢聖は顛倒性空なりと眞知す。聖人に於て是れ實なれば之を名けて諦と爲す。此れ
 即ち二の於諦なり。諸佛此に依りて説きたまへば、名けて教諦と爲すのみ。問ふ、「教を若爲
 ぞ諦と名くるや。答ふ、「數意有り。一には實に依りて説くが故に所説も亦實なり、是故に
 諦と名く。二には如來誠諦の言なり、是故に諦と名く。三には有無教を説いて實に能く道
 を表す、是故に諦と名く。四には法を説いて實に能く縁を利す、是故に諦と名く。五には
 說顛倒せず、是故に諦と名く。」
 他家と異なるに十種の異有り。一には理教の異、彼が明すらく、二諦は是れ理、三假は

【三假】因成假、相續假、相待假。

【四絕】有、空、亦有亦空、非有非空等の四句を絶するを云ふ。

【半滿】佛一代の教を判別したる半字教、滿字教。

【世諦】三論宗は教に就いて二諦を立つ、有(肯定)の教を俗諦といひ、空(否定)の教を眞諦といふ。空見の偏執を破らんが爲に俗諦の有を説き有見の迷執を碎かんがために眞諦の空を示す。

是れ俗、四絶は是れ眞なりと。今明すらく、二は是れ教、不二は是れ理なり。他家は理有りて教無し。今明すらく、教有り、理有り。二には相無相の異、他家は有無に住す、故に是れ有相なり。今明すらく、有は不有を表し、無は不無を表して有無に住せず。故に無相と名く。三には得無得の異、他家は有無に住す、故に有得と名く。今明すらく、有無に住せず、故に無得と名く。四には理の内外の異、他家は有無に住す、故に理外と名く。今明すらく、有無に住せず、故に理内と名く。五には開覆の異、他は、有は有に住す、無は無に住す、此有無は如來の因縁の有無を覆ふ。今明すらく、二諦は是れ教なり。是有は不有を表し、無は不無を表す。即ち如來の教を聞いて滯滞有ること無し。六には半滿の異、他家は唯二有りて不二無し、故に唯教のみにして理無ければ名けて、半字と爲す。今明すらく、理と教とを具足すれば名けて滿字と爲す。七には愚智の異、『涅槃』に云はく、「明と無明とを愚者は二と謂ふ」と。智者は無二に了達せり、眞俗二なれば即ち愚なり。不二なれば即ち智なり。故に知んぬ、不二は是れ理、二は是れ教なり。八には體用の異、彼は用有りて體無し、今は即ち具に體用有り。九には本末の異、不二は是れ本なり、二は是れ末なり。他は但末有りて本無し。今は具に本末有り。十には了了の異、他家の二諦は有無に住す、故に不了と名く。今明すらく、有を説くは不有を顯さんと欲し、無を説くは不無を顯さんと欲す。有無は不有不無を顯す、故に了義と名く、他は但有を以て世諦と爲し、空を眞諦と爲す。今明すらく、若は有若は空、皆是れ世諦なり。非空非有を始めて眞諦と名く。

【三性】萬法を三種に分つ。通計所執性、依他起性、圓成實性。三性に對して法の無自性なる邊より三種の無性を立つ。相無性、生無性、勝義無性これなり。

三には空有を二と爲し非空有を不二と爲す。二と不二とは皆是れ世諦なり。非二非不二を名けて眞諦と爲す。四には此三種の二諦は皆是れ教門なり。此三門を説くは非三を悟らしめんが爲なり。所依得無きを始めて名けて理と爲す。問ふ、「前の三は皆是れ世諦、非三を眞諦と爲すや。」答ふ、「此の如し。」問ふ、「若し爾らば理と教と何れか異なる。」答ふ、「自ら二諦を教と爲し不二を理と爲す有り。皆是れ轉側縁に適して防々所無し。」問ふ、「何が故に、此四重の二諦を作るや。」答ふ、「毘曇の事理の二諦に對して第一重の空有の二諦を明す。二には成論師の空有の二諦に對して、汝が空有の二諦は是れ俗諦なり。非空非有方には是れ眞諦なりとす。故に第二重の二諦有るなり。三には大乘師の依他、分別の二を俗諦と爲し、依他無生、分別無相、不二眞實性を眞諦と爲すに對して、今明すらく、若は二、若は不二、皆是れ我家の俗諦なり。非二非不二は方に是れ眞諦なり。故に第三重の二諦有り。四には大乘師復言はく、「三性は是れ俗、三無性は非安立諦を眞諦と爲す」と。故に今明すらく、汝が依他分別の二眞實不二は是れ安立諦、非二、非不二、三無性の非安立諦、皆是れ我俗諦なり。言忘慮絶方に是れ眞諦なり。文に多義を含む、後の文に當に釋すべし。問ふ、「若し有無を以て教と爲して、非有非無の理を表さば何んが非有非無の教を以て、非有非無の理を表さずして必ず有無の教を以て、非有非無の理を表すや。」答ふ、「月を以て月を指すべからず、指を以て月を指すべし。若し利根の菩薩には應に是の如く説くべし。但凡夫は有無に著す、故に有無を以て非有非無を表す。問ふ、「若し於諦を以て衆生の爲に説か

【十六知見】 智度論に出づ。十六種の誤れる見解。我見、衆生見、壽者見、命者見、生者見、養育見、衆數者見、人見、作者見、使作者見、起見、使起見、受者見、使受者見、知者見、見者見のこ

【陰界入】 五蘊、十二所、十八界、【二】 釋名を明す

ば、更に其患を増すべし、何を以て二の於諦に依りて說法するや。答へて曰はく、「凡夫は有に著し、二乗は空に滯る。今明すらく、如來の因縁の有無は假有假無なり。假有なるが故に有にあらす。假無なるが故に無にあらす。云何が患を増さんや。問ふ、「成論師の云はく、「十六知見は二諦の所攝に非ず、十六知見は道理には無し、此れ外道の横計より出でたり。故に世諦に非ず。既に世諦に非ず其れ即ち空なり。亦眞諦に非ず」と。此義云何。答ふ、「若し十六知見は外道の横計より出で、二諦の所攝に非ずと言はば、陰界入等も亦凡夫の横計より出たり。何んが二諦の所攝と云ふを得ん。若し凡夫の所見即ち是れ世諦ならば、凡夫の人應に是れ聖人なるべし。」

【二】 釋名 第二、若し他の釋の如くならば俗は浮虚を以て義と爲し、眞は眞固を以て、名と爲す。世は是れ隔別を義と爲し。第一は莫過を旨と爲す。此は是れ名に隨ひて義を釋するなり。是れ義を以て名を釋するに非ず。若し爾らば世間の諸法は字有りて義無しと謂ふべし。今明すらく、俗は不俗を以て義と爲し。眞は不眞を以て義と爲せり。若し具足して之を論ぜば、應に非俗非不俗を以て四句を遣りて俗の義と爲すべし。但し今他の浮虚是れ俗の義なるに對して、今不俗を義と爲すと明す。是を出世の法に名くるとは、字有り義有り。今引く「淨名經」に「不生不滅は是れ無常の義なり。五陰空にして所有無きは是れ苦の義なり」と。常途には眞實是れ諦の義なり、還りて諦を以て諦を釋す、義前に例して見るべし。

【四諦】迷悟兩界の因果を説明せるもの、苦集滅道の【苦諦】惑業の因によりて得たる現在の苦果のこと【境】認識の對象觀ぜらるる事理の總稱。

諦の義を解するに四家の不同有り。一に云はく、「四諦の理實は是を諦と爲す」遺教經に云はく、「日は冷ならしむべく、月は熱からしむべくとも、佛の説きたまへる苦諦は眞實に是れ苦にして、樂ならしむべからず」と。故に理實を以て諦と爲せり。第二家の云はく、「境と理とは、諦に非ず、能觀の智を諦と爲す」と。大經に云はく、「若し苦是れ聖諦ならば、地獄の衆生苦有り」と。應に是れ苦聖諦なるべし、而るに今地獄等の苦は聖諦に非ず。豈前境を諦と爲すを得んや。第三に解すらく、「能く理を詮むるの文言を取りて諦と爲す」と。第四家の云はく、「合して境智文理を取りて諦と爲す。若し單に境にして智にあらざれば亦諦に非ず。單に智文理を取れば亦諦に非ず」と。今明すらく、四の解並に是にして、並に非なり。衆生の象を摸するに象の體を得ざれども然も象を離れざるが如し。經の中に此釋無きに非ず。諸佛方便して衆生に隨從す。故に此説を作す、今還一一に之を難せん。第一の解に境理審實を諦と名くと云ふは、地獄畜生は應に是れ苦聖諦なるべく、毒蛇隰雀の多欲なるは應に是れ集聖諦なるべし。第二の解に智を以て諦と爲すと云ふは、應に權實諦と名くへし。第三の解に、文言審實を詮するを諦と爲すと云ふは、文言終に理を得ず、那ぞ諦と爲すことを得ん。第四の解に、若し境智を以て合して諦と爲すと云ふは、境智既に其れ諦に非ず。今合して那ぞ諦と爲すことを得ん。一沙は油を出すこと能はず、二沙を合して油を得ざるが如きなり。今明すらく、此眞俗は是れ如來の二種の教門なり。能表を名と爲せば則ち二諦有り。若し所表に従つて名と爲せば則ち唯一諦なり。故に只審實を以て義

【若し義に】以下
主義に依りて諦の
諦、不諦を明す。

【二智】實智とは
眞如實諦を見る智
權智とは現象の俗
諦を見る智。

と爲すに非ず。若し二の於諦ならば即ち審實を以て體と爲す。若し因縁の教諦に就かば即ち多義有り。或は誠諦の言を以て諦を釋す、此二教は不二の道を表す。教必ず差違せざれば、即ち是れ諦の義なり。名に依りて諦を釋することは是の如し。

若し義に依りて諦を釋せば諦は不諦を以て義と爲す。此は是れ堅に論ずるなり。若し横に論せば、諦は諸法を以て義と爲す。例せば、眞俗の義の中に説くが如し。俗は浮虚を以て義と爲し、俗は眞を以て義と爲し、俗は不俗を以て義と爲す。眞も亦然り。更に料簡せん。諦を不諦に待するに五條の意なり。一には二諦相望するに是れ二不諦なり。俗は眞に非ず、眞は俗に非ず、故に二諦は二不諦を成す。二には非有非無、是れ二不諦の義なり。能表は是れ有無、所表は有無に非ず。故に二不諦を成す。三には二智、是れ二不諦の義なり。眞俗既に二境なり、境は自ら不境に待す。不境は即ち是れ智なり。四には義に三種有り。一は理外の凡聖の二縁二境に就く、二は理内の凡聖の二縁二境に就く、三は堅に理の内外相望めば凡聖諦不諦の義有り。理外の凡聖は有の如きは凡に於て實なり。所以に諦と爲す。空は凡に於て實ならず、即ち是れ不諦なり。空の聖に於けるも亦然り。凡聖二人各一實一虚を行す、故に諦不諦の義有り。理内の凡聖亦然り。次に堅に論ぜば、若し理外の凡聖は皆是れ顛倒有所得の行なれば、俱に是れ凡夫なり。理内の若し凡若し聖、皆名けて聖と爲す。二諦亦然り。理外の若し眞若し俗、俱に是れ俗諦なり。理内の若し眞若し俗、皆是れ眞諦なり。理内の所行は外の所行に非ず、理外の所行は内の所行に非ずんば、

諦不諦の義有り。五には直に凡聖に就いて各自ら諦不諦有り。有の如きは凡に於ては是れ實なり。即ち此有を聖に於ては不實と爲す。只此一の有に自ら實不實有り、他の釋を須ひす。

【次に更に】以下於諦、教諦合論して三句有るを明す
【能】主動のもの
【所】受動のもの

次に更に於諦、教諦、合論して三句有るを明す。一には能は諦、所は非諦なり。二には所は諦、能は非諦なり。三には亦能亦所諦、能は諦、所は非諦とは即ち是れ於諦なり。有は凡に於て實なり。空は聖に於て實なり。兩情を取りて諦と爲す。空有の二境を取りて諦と爲すにあらず。教諦は是れ所にして能に非ずと言ふは、二智は是れ能説なり。二諦は是れ所説なり。此は境智に就いて能所を判ず、亦能亦所諦とは合して於教の二諦を取るなり。

【更に】以下、教諦に就いて三句有るを明す。

更に教諦の中に就いて復三句有り。一には能を諦と名け、二には所を諦と名け、三には亦能亦所を諦と名く。能を諦と名くと言ふは即ち是れ眞俗の二教なり。能く道を表するを以ての故に諦と名く。所を諦と名くと言ふは、眞俗の所表の理實なるが故に能表の教も亦實なり。此は實を表するに従つて名と爲す。亦能亦所とは即ち理教合して説く、理に非ざれば、即ち教ならず、教に非ざれば即ち理ならず。理教因縁此二皆實なり。故に能所皆諦なり。

【於諦に】以下、於諦に就いて三句有るを明す。

於諦に三句有り、一には皆得、二には皆失、三には亦得亦失なり。亦得亦失と言ふは凡の於て是れ有なり。此有を失と爲す、諸の賢聖眞に性空を知る、此空を得と爲す。二に

【三】 立名を明す

皆失と云ふは二つ皆是れ於なるが故に二つ皆失なり、二の皆得と云ふは、只於の二を知るに即ち不二を知る。既に二に非ず、不二に非ず、五句皆淨なり。然るに此二句には前の二句は即ち於諦なり。後の一句は即ち教諦なり。前の二句は即ち於の境なり。後の一句は教の境なり。於の境は即ち轉ぜず、教の境は即ち轉ずるなり。

【三二】 立名第三、三門もて分別す。前には立名を辨じ、次には絶名を辨じ、後には借名を辨す。立名と云ふは不眞不俗亦是れ中道なり。亦是無所有と名け、亦是正法と名け、亦是無住と名く、此非眞非俗は名無し、今假に爲に名を立つ。此名は無名の所立の名を以てす。提羅波夷は眞に油を食せざれども強ひて食油と爲すが如し。二諦も亦爾なり。其れ眞は不眞を表し、俗は不俗を表するを以て、假に眞俗と言ふ。其れ假言なるを以て名に物を得るの功無く、物に名に應ずるの實無し。『淨名經』に云はく、「無住の本に従つて一切の法を立つ、無住には即ち本無し。故に云はく、若は能若は所、皆無住を以て本と爲す」と。大品に云はく、「般若は猶ほ大地の如し、萬物を出生す。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり」と。若し用の中に就いて二諦反覆して立名を得ることを辨せば、俗は眞の爲に名を立て、第一の爲に名を立つ、世に由るが故に第一なりと言ふが如し。眞俗亦是の如し。眞は應に世に對すべし。第一は第二に對すべし。而るに今眞を俗に對し、世を第一に對すること正しく相待の義に非ず。聖人未だ必ずしも對を以て名を立てず。故に經に云はく、「法に彼此有ること無し、相待を離るるが故に」と。次に相待を明さば眞俗は當體に名を受

【俗は眞の爲に】
俗諦は眞諦の爲に
【世に由るが故に】
【第一】世諦に由る
が故に第一義諦。

【第二に】以下、絶名を辨ず。

【常樂我淨】涅槃の不變不遷(常)にして二苦を離れ(樂)大自在を得て(我)、三惑清く盡き(淨)たるをいふ

【蛇床】ひる筵。いたとり

【次に】以下佛果に就き三家の釋を難ず。

く、世と第一とは用の中の褒貶を稱と爲すなり。

第二に絶名を辨ぜば、常途の相傳に世諦は絶名ならず。成論の文を引く。劫初の時は物未だ名有らず、聖人名字を立つること観衣等の物の如し。故に世諦は絶名ならず、眞諦と佛果と三師不同なり。光宅云はく、「此一正絶名ならず。眞諦には、眞如實際の名有り。佛果には、常樂我淨の名有り。但し麤名を絶して細名を絶たず」と。莊嚴云はく、「此二皆絶名なり、佛果は二諦の外に出たり。是故に絶名なり、眞諦は本來自ら虚なり、四句を忘し百非を絶するが故に絶名なり」と。開善云はく、「眞諦は絶名なり、佛果は絶名ならず。眞諦の理は四句百非を絶するが故に是れ絶名なり。佛果は此れ世諦なり、所以に絶名ならず。若し佛智、如に冥すれば絶名なり」と。今明すらく、一往論を爲さば何爲れぞ得ざらん。然も理實の説に非ず。今問ふ、「若し劫初の物に名銘を作すは、眞諦も無名なるを以て名銘に假するは、眞と何れか異なる。」又問ふ、「火の名は當に火に即すと爲んや、火を離るとせんや、若し此火をして名火に即せしめば、火を呼んで即ち口を焼く。若し火をして名火を離れしめば、何が故に水を得ざるや。」故に知んぬ。體に即離して名有るに非ず。若し口の中に在りて火の上に在らざれば、是即ち火の絶命なり。且復從來の蛇床虎杖は世諦の絶名なり。復問ふ、「人は是れ何物か人なる。頭手等を何の意ありてか人と呼ぶや。」強ひて爲に名を立つるなり。豈皆絶するに非ざらんや。

次に佛果に三家有るを難じ、今先づ初家を難す、若使眞諦と佛果と但麤名を絶して細名

【世界悉檀】四悉檀の一。佛が衆生に、現象界の眞相即ちまことの世界觀を知らしめて、歡喜の利益を與へ給ふこと。

【第一義悉檀】四悉檀の一。佛が根本の眞理を説きて衆生をして入理の利益を得しめ給ふこと。

を絶たずと言はば、今難すらく、本絶なるを以の故に妙なり。若し絶せずんば即ち妙ならず。第二家を難じ眞諦と佛果と俱に絶名ならば、今難すらく、若し名を以て眞を求むるに眞を得ずんば、此名便ち文有りて爾も理無からん。眞諦には文有りて理無く、私陀が言ふところの涅槃の如くならん。佛果には理有りて文無くば、犢子の存するが如し。第三家を難ぜん、佛果不絶眞諦絶名ならば前の二家の初見に同じ、具に辨ぜざるなり。今明すに四句を以て之を辨ぜん。一には俱絶、二には俱不絶、三には眞絶俗不絶、四には俗絶眞不絶なり。言ふ所の二諦俱絶とは二諦皆如なり。奈んが皆不絶なることを得ん。二諦俱不絶とは是如の相を得るを名けて如来と爲す。是二如の相を得るが所以に皆不絶なり。又言はく、如来は常に二諦に依りて法を説きたまふ。「大論」に云はく、「瓶衣等の法の如きは世界悉檀には即ち有なり。第一義悉檀には即ち無なり。眞如實際等は第一義悉檀に於ては即ち有なり。世界悉檀には即ち無なり。此名字互に有、互に無なり」と。故に知んぬ、二種俱絶俱不絶なり。三には眞絶俗不絶、此文即ち多し、經に云はく、「世諦の法を以ての故に説く、第一義には非ず。四には俗絶眞不絶とは生不可説、不生亦不可説、生不生亦不可説、不生非不生亦不可説と言ふが如きなり。四句皆不可説即ち是れ世諦絶名なり。今更に一種の方言を作る。世諦は即ち實を絶して假を絶せず。眞諦は即ち假を絶し復實を絶せり。何んとならば衆生は有を計して有と爲し、無を計して無と爲す。此有無は是れ斷常の二見にして即ち是れ性實たり。今有を破るが故に不有と言ひ、無を破るが故に不無と言ふ。所以に明すらく、

佛假有假無を説いて世諦と爲すと。此れ假有なれば有と名けず。此れ假無なれば無と名けず。問ふ、『此假有は何物の有ぞ。』明すらく、此假有は實有に名けず。假無は亦是れ實無に名けず。是れ即ち此假有假無を名けて世諦と爲す。所以に其れを實有實無と名けず。故に絶と言ふ。而も此不有は假有を成ぜんが爲にして、不無は假無を成ぜんが爲なり。此れ即ち是れ假を絶せざる義なり。若し二諦俱絶と言ふは、眞諦は四句を絶し百非を離る。世諦も亦四句を絶し百非を離る。然も此義は從來無き所唯今家にのみ有るなり。二諦皆四句を絶し百非を離ると言ふは、俗は定んで俗ならず。俗は眞の俗に名く、眞は定んで眞ならず。眞は俗の眞に名く、眞が俗なれば假俗なり。俗が眞なれば假眞なり。假の俗なれば即ち百是も是すること能はざれば、百非も非すること能はず。假眞も亦爾なり。何んとならば假の俗は即ち是是、是すること能はずんば、百是も亦是すること能はず。非非非すること能はざれば、百非も亦非せず。假の眞は即ち非是も是すること能はざれば、百是も亦是せず。是非、非すること能はざれば、百非も亦非せず。是故に皆四句を離れ百非を絶するなり。二諦皆四句を離れ百非を絶すと雖も、然も二諦俱絶にして爾も大いに異なる。何んとならば俗諦の絶は即ち實を絶し、眞諦の絶は即ち假を絶す。俗諦實を絶すとは是是は即ち是れ實是なり。非非は即ち是れ性非なり。俗諦實を絶するを以ての故に是是も是すること能はざれば、百是も亦是とせず。非非も非すること能はざれば、百非も非すること能はざるなり。眞諦假を絶すとは是是と假是と非非と假非とに非ず、眞諦は性と假とを絶するが故

に、但是是を是すること能はざるのみに非ず。非是も亦是とせず、但非非を非すること能はざるのみに非ず。是非も亦非とせず、是是と非是とは、一切是すること能はず。非非は是非と一切非すること能はず。眞諦は變べて絶し世諦は實を絶せり。此れ即ち漸捨に二諦皆絶する義を明す。俗諦は實を絶し、眞諦は假實を絶す。第二は次に平道に就いて二諦俱絶の義を明す。俗は定んで俗ならず、眞に由るが故に俗なり。眞は定んで眞ならず、俗に由るが故に眞なり。眞に由るが故に俗なれば、俗は是れ假俗なり。假俗に由るが故に眞なれば、眞は是れ假眞なり。既に假俗と云ふは即ち四句皆絶えぬ。假俗なれば俗に非ず、假俗なれば不俗に非ず、假俗なれば亦俗亦不俗に非ず、假俗なれば非俗亦不俗に非ず、假身も亦爾なり。

【第三に】以下、借名を論ず。

第三に借名を論ぜば、借と不借とに就くが故に是れ絶と不絶となるのみ。若し二諦俱に絶ならば即ち是れ兩種皆借名なり。二つ俱に不絶ならば即ち相與りて借せず、今亦次に還りて前の三家の所説を辨じ、彼三家同じく明す。世諦には物有り名有り。名を以て物を召す。即ち來ることを得るが故に借名ならず。眞諦と佛果と解するに三家有り。今先づ世諦の不絶を難じ、若し世諦に物有り、即ち名有らば劫初の時、便ち應に名有るべし。聖人爲に名を立つるを須ひざるをや。若し物に本名無くんば何んが眞諦の本名無くして後に眞の爲に名を立つるに異らんや。』問ふ、『是假借の名とは、後に物の爲に名を立つるなり。何が故に借名に非ざるや。』汝若し名を以て眞を求むるに眞を去こと遠しと云はば、

【第一義諦】 眞如のこと。

我亦名を以て物を求むるに物を去ること遠し。又問ふ、「今世諦は名を以て物を求むるに、物名に應ずることを得とは今且く問はん、瓶の名を以て瓶の上に在りと爲んや、口中に在りと爲んや。」具に先に難ずるが如し。若し瓶の上に在らば、何れの處にか名有る。若し口中に在らば、瓶即ち無名なり。豈是れ絶名なるに非ずや。此れ即ち眞と何んが異なる。若し眞は本無名なり、世諦に就いて借ると言はば、今世諦の中に若し眞の名有らば其れ借と言ふべし。而るに今世諦の中に法の眞如絶離と名けて借と言ふを得べきこと有ること無し、且く復經に言はく、「第一義諦には名有り、實有り」と。何の時に名無しと謬はん。經に又云はく、「一切の諸法には、但假名のみ有り」と。但し名のみ有りて實無きが故に絶と言ふ。但し名字のみ有るが故に謂つて借と爲す。若し名有りて但假設せば、何の意ぞ。空は有に就いて名を借り、而も有は空に就いて名を借らずや。故に若し眞諦には名無し。世諦に就いて名を借ると言はば、其義不可なり。今問ふ、「若し名を以て眞を求むるに眞を去ること遠しとせば、此眞の名は眞理を表すと爲さんや不や。」若使此名、理を表せば、名に依りて理を得。何んが眞理は絶名なりと謂はん。名は即ち無用なり。此名既に其れ理を得ず、此名終に此れ浪説なり。理有りて文無しと謂ふべし。

常途に眞諦と佛果とを解するに三家有り。光宅は二種俱に妙名を絶せず。即ち借すべからず。莊嚴に云はく、「二種俱に絶なり、所以に借すべし」と。若し是れ開善明すらく「佛果は是れ世諦にして名有り。故に借すべからず。眞諦は名無し、所以に借すべし」と。此三

【常途に】以下、眞諦と佛果とを解するに三家あるを明す。

【隨他意】對手の意にかなはしむること方便。

解前に依りて之を難じたれば、此に復重ねて出さず、前に望んで見るべし。今明すらく、借は此れ假の異名なり、然も此れ經論に無き所、大小乘經に此説を載せず。恐らくは應に借の語もてすべからず。而るに今借と言ふは只是れ隨他意の語なり。今明すらく、借は此れ假の異名なり。今二諦に既に四句有り、絶不絶の義を辨す。今借と不借と此に准じて知るべし。若し二俱に絶ならば即ち二諦俱に不借ならん。二諦不絶ならば即ち二俱に借ならん。若は一絶一不絶即ち一借一不借ならん。若し二諦俱絶と言つて其借の義を論ぜば、明すらく、眞に名を説くべからず。二諦の名は法として説くべき無し。二諦俱に絶するが故に借を明さず。今眞に非ざるを以て假に眞と言ふ、俗に非ざるを俗と言ふべし。俗は眞に待するが故に説く、俗は眞に従つて名を借る。眞は俗に待するが故に説く、眞は俗に従つて名を借る。所以に二諦俱に不絶にして假に借の名を論ず。然も此借名は亦是れ不借なり。今眞は自ら眞ならざるを以て、俗に由るが故に説く、眞は自ならざるが故に、所以に他を須ふ。故に借と言ふ。若し不借ならば、明すらく、若し眞に由るが故に眞と説かば、是れ借なることを得べし、眞に由るが故に俗なり。何んが是れ借なることを得ん、故に此俗亦是れ不借なりと言ふなり。横に借名を論ずること此の如し、若し豎に論ぜば眞は不眞に従つて以て名を借る。俗は不俗に従つて以て名を借る。又問うて言はく、「若し、不眞に従つて名を借らば只應に眞を不眞と名くべし、那ぞ名けて眞と爲すことを得ん。俗も亦是の如し。」答ふ、「今明すらく、眞と不眞と一ならば、亦借することを得ず。異ならば亦借

することを得ず。因縁假の名字なるが故に借と言ふ。借は是れ待の異名なり。若し不眞に待せずんば眞と説くことを得ず。不眞に由るが故に眞なり。眞に由るが故に不眞なり。眞と不眞と因縁假説せり、故に借と言ふ。

【四】有無を明す
【因成假】一切有爲法はみな因縁所の法の故に、自性あることなく、假有の法なりといふ。
【四微】色香味觸の四種の極微なり
【相續假】一切諸法は刹那に生じ念滅と相續す。故に假と名く。

【四大】一切の色法を構成する四種の成分。地、火、水、風、火、大。

【四】有無第四。今先に假有を辨じ後に假無を辨ず。常途に明す所、凡そ三種の假名有り。一には因成假。四微を以て柱を成じ、五陰は人を成ず。故に因成と言ふ。二には相續假、前念自滅して續いて後念を成す。兩念接連せり。故に相續假と言ふ。三には相待假、君臣父子大小の如き名字不定なり、皆相隨待するが故に相待假と言ふ。若し道に入りて捉る所は三乘不同なり。聲聞は因成を用ふ、緣覺は相續を用ふ。菩薩は相待を用ふ、而るに成論は三藏を宗と爲す。多く因成を明して以て道に入る、然る所以は凡そ二義有り。一には、因成は是れ世諦の體なり。續待を用と爲す。若し體已に空しければ、用は即ち自ら遺る。二には因成は重數多し、觀行は滅より深に至る。初には五根を捉りて以て衆生を空す、次には四大四微を捉りて以て法を折く。所以に多く因成を捉る。若し是れ續待二假には、即ち此重無きが故に相ひず。今明すらく、正しく大品の中には三假を宗と爲す。一には法、二には受、三には名なり。三假を解くこと不同なり、今用ふる所、四微を以て根大を成ずるは並に法假なり。衆生假人、此は是れ受假なり。一切の名は皆是れ名假なり。名假は本にして通ず、名假の中に就いて能成の義を取りて法假と爲し、所成の義を受假と爲す。他家の法假を體と爲し、餘の二を用と爲すが如きには如かず、故に『大品』に云はく

【因續の二假】 四
成假と相續假。

【續待】 相續假と
相待假。

「波若及び五陰を法假と爲す、菩薩を受假と爲し、一切の名字を名假と爲す。内法此の如し、外法知るべし。四微四大を法假と爲し、世界を受假と爲し、一切の名字を名假と爲す」と。今明すらく、相待を本と爲すは大士の觀行を明さんと欲す、凡そ三義有り。一に相待假は通ず、是れ待に非ざる無し。因續の二假は未だ必ずしも盡く假ならず。二に相待假は實法有ること無し。病を遣ること淨有り。因續の二假は即ち實法有り、病を遣ること餘有り。三には相待假は無礙なり。長は既に短に待す、短は還つて長に待せり。因續の二假は即ち義を成ずること礙有り。唯四微を以て大を成じて、大を以て四微を成ぜず。唯前に續くを得て、後に續くを得ず。故に相待假を用ふ。若は是れ聲聞は因成を體と爲し續待を用と爲す。體空すれば、用自ら去る。今相待の體、本來不生にして今亦無減なりと觀すれば、因續の用去りぬ。從來通別の相待有り、通は是れ開避の相待なり。別は是れ相集の相待なり。人瓶衣柱の如きは是れ通の相待なり。長短方圓等は是れ別の相待なり。「問ふ」若し相待空すれば、因續自ら去るとせば、相待を觀る時何物の相待をか觀る、豈先に因成有りて後に續待有るに非ずや。答ふ、「然らず、小乗の觀行は先に法體有りて法を折つて空に入る、故に但空を見て不空を見ず。今大乘の相待を觀るとは法體を立てず、諸法は本來不生にして今即ち無滅なり、初念を無礙道と爲し後念を解脫道と爲す。是故に經に曰はく、「但空を見るのみにあらず、亦佛性の不空を見る」と。問うて曰はく、「非有非無而有而無は疎假と爲んや、是れ密假と爲んや。答へて曰はく、「此は是れ疎假なり、

【阿字】又にして一切言語の根本なり、また衆字の母なり。

【四十二字】悉曇四十二字。

【五】二諦を明す

何が故に爾る。其れ兩來にして、有無の二法に就いて辨ずるを以ての故に、是れ疎假なり、若し密假を辨ぜば有に非ず、不有に非ず、而も有、而も不有なり。其れ一法に就いて義を明すを以てなり。是れ即ち兩法を疎と爲す。一法なるが故に密なり。今何が故に此疎密を辨ず。疎密とは經の中の兩種の百非、兩種の對治を明さんが爲なり。若し苦と樂と無我等を言はば、此は是れ疎の對治なり。若し實と不實と非衆生と安と非安等を言はば密の對治なり。若し如來の涅槃は非有非無なりと言はば、此は是れ疎の百非なり。若し非因、非不因、非果、非不果と言はば、此は是れ密の義をして非を辨ずるなり。此は假に疎密有るを明す。』問ふ、『前に非有非無と言ふ、何物の非有非無なるや。』答ふ、『前の非有非無は性の有無に非ず、世諦の如の義を成ぜんが爲なり。』問ふ、『後に非有非不有を明す。何物の有不有なるや。』答ふ、『今是の如きの假有、不有なるが故に、非有非不有と言ふ。非有と言ふとは、不有が有に非ず、非不有と言ふは、有が不有を非するなり。此れ既に假を壞して眞諦の如を成ずるなり。』問ふ、『有不有、是れ何物なる。』答ふ、『諸法は本より無生なり皆阿字を以て本と爲す、是れ即ち諸法皆阿字の一の無生門に歸す、故に經に曰はく、『四十二字は皆阿字に歸す』と。』

【五】二諦の體第五。常の解は不同なり。五家有り、初家の明すらく、有を體と爲し、空を用と爲す。何が故に爾る。明すらく、世諦は是れ有なり、行者は有を折つて空に入る。空に因りて有に入ること有ること無し。故に有は是れ其本なり。空を其末と爲す。第二家

【相卽】 相互に卽ずること。

の云はく、空を以て體と爲す、有は是れ其用なり。何を以ての故に。明すらく、空を理の本と爲すは、古今常に定まれり。有は是れ世間の法なり。皆空より生ぜり。故に空を其本と爲す、有は是れ其用なり。第三に云はく、二諦に各自ら體有り。世諦の假有は是れ世諦の體、假有は卽ち空無相なれば是れ眞諦の體なるを以ての故に、二諦各體有りと言ふ。第四に云はく、二諦は是れ一體なりと雖も、義を以て之に約して異と爲す。若し有を以て來りて之に約すれば卽ち俗諦と名け、空を以て之を約すれば名けて眞諦と爲す。而るに今此二諦は唯一なり。用に約して二有り。第五に云はく、二諦は中道を以て體と爲す。故に云はく、不二にして二なれば二諦の理明かなり。二にして不二なれば中道の義を立つ。彼家有時には亦體用の相卽を作る。今は皆然らず。『問ふ、第一の解に若し有を以て體と爲し、空を用と爲すと云はば、有を以て理と爲し空を用と爲すべきや不や』體は是れ理の異名なり、既に有を體と爲すと云ふは、是れ卽ち有を理と爲さん。然も皆理を見て道を得。今若し有を以て理と爲せば、卽ち有を見て道を得ん。今の聖人皆空を見て結を斷ず。明かに知んぬ、空は是れ理なり。『問ふ、第二の解に空を體と爲し、有を用と爲せば、是れ卽ち一諦と成さん。何んが二諦と謂ふや。』汝今空を指し體を當つ。是れ卽ち但空のみ、是れ諦にして有は諦に非ず。若し空有俱に諦ならば何んが偏に一空を用ひて體と爲すことを得ん、故に然らず。『問ふ、第三の解に假有は是れ世諦の體、假有は卽ち空なるを眞諦の體と爲して、若し二諦に各體有らば卽ち應に兩理を成すべし。有は自ら有を理と爲

【三寶】佛寶、法寶、僧寶。

し、空は自ら空を理と爲して頌に反せり、何んが其相即を辨するを得ん。問ふ、「第四の解に二諦は唯一體にして義を以て之に約して異と爲すは、今何を以てか二諦は唯是れ一體ならん。是れ何物の體にして當一の有の體なりと爲さん、當一の空體なりと爲さん。何の處にか此空有を離れて別に一體有りて、而も空有を以て之に紛らするが故に、二諦の別ありと言はんや。」問ふ、「第五の解二諦同じく中道を體と爲すは今問はく、汝若し中道を用ひて體と爲すと言はば是れ二諦の攝なりと爲せんや。是れ二諦の外物なりと爲んや。」彼解して云はく、終に是れ一の無名無相なり、還りて是れ二諦の攝なり。此は是れ閑善の用ふる所なり。攝山の高麗の朗大師は本是れ遼東城の人なり。北土より遠く羅什師の義を習ひて、南土に來入して鐘山の草堂寺に仕せり。隱士周顒に値ふ。周顒因りて師に就いて學ぶ、次に梁の武帝三寶を敬信して、大師來れりと聞いて僧正智寂十師を遣して山に往いて受學せしむ。梁の武天子、師の意を得て本の成論を捨てて大乘に依りて章疏を作る。閑善亦此義を聞いて語を得て意を得ず。今の意は第三諦有り。彼は第三諦無し。彼は理を以て諦と爲す。今は教を以て諦と爲す。彼は二諦を以て天然の理と爲す。今は明すらく唯一實諦なるも、方便して二と説く。唯一乘なるも、方便して三と説くが如し。故に異と言ふ。復五の解有りと雖も、四句の計には出です。初の一は有の句、第二は無の句、第三第四は亦有亦無の句、第五の解は非有非無なり。既に束ねて四句と爲す、是れ横計なり。何んが道を扶くることを得んや。

【問ふ】以下、中道を二諦の體と爲す經文を明す。【因緣所生】因と縁との力に依りて生ずること。

【中假】中道と假名。

問ふ、「何れの處の經文にか中道を二諦の體と爲すや。」答ふ、「中論に云はく、「因緣所生の法をば、我は即ち是れ空なりと説き、亦是れ假名なりと爲し、亦是れ中道義なりとす」因緣生の法とは是れ俗諦なり、即ち是空とは是れ眞諦なり。亦是れ中道義とは、是れ體なり」と。「華嚴」に云はく、「一切の有無の法をば非有非無なりと了達す」と。故に有無を二諦と爲し、非有非無を體と爲す。經に云はく、「非有非無、假に有無と説く」と。「涅槃經」に云はく、「衆生に隨順して、二諦有り」と説く」と。故に教門を以て諦と爲す。「仁王經」に云はく、「有論無論中道は第一義諦なり」と。故に知んぬ、第三諦有り。」問ふ、「教諦は是れ一體なりと爲んや。是れ異體なりと爲んや。」答ふ、「前に言ふが如し。中道を體と爲すが故に、是れ一體なり、若し用に約して論を爲さば、亦假に二體と爲すを得。但し正義にあらざる間ふ、「若し一體なりと言はば、他家の一體と何んが異なる、答ふ、「他家は定んで一、定んで異、定んで、亦一亦異なり。今明すらく、第一重に紛るるが故に此語を作す。第二第三第四重に至りて、一と言ふべからず、異と言ふべからず。」問ふ、「於諦は是れ一體なりと爲んや、是れ異體なりと爲んや。」答ふ、「二の妄情に約して、二體と爲す、而も終に兩物有ること無し。眼病の空華の、空に異にして華無きが如し。故に一の中道を以て體と爲す。」問ふ、「假有假無を二諦と爲し、非有非無を中道と爲んや。」答ふ、「一往中假の義を聞く。故に假は中に非ず、中は假に非ず。究竟して言はば假亦是れ中なり。故に『涅槃經』の文に「有無は即ち是れ非有非無なり」と。亦中を假と爲すことを得、一切の言説皆是れ假なる故

なり。一問ふ、「何物か是れ體假、用假、何をか體中用中と爲すや。答ふ、「假有假無は是れ用假なり。非有非無は是れ體假なり。有無は是れ用中なり。非有非無は是れ體中なり。復言はく、有無、非是非無は皆是れ用中假なり。非二非不二は方には是れ體假體中なり。合して四假四中に有り、方には是れ圓假圓中なるのみ。」

【六】 中道を明す
【八不】 不生、不滅、不去、不來、不一、不異、不斷、不常。

【八迷】 生、滅、去、來、一、異、斷、常の八迷執。

【六】 中道を明す第六、初には八不に就いて中道を明し、後には二諦に就いて、中道を明す。初の中に師に三種の方言有り。第一の方言に云はく、「八不を擧して初に在る所以は一切の有所得の心を洗淨せんと欲すればなり。有得の徒は此八計の中に墮せざる無し、小乗の人の言ふが如く、謂く解の生すべき、惑の滅すべき有り。乃至衆生無明より流るれば來なり。本に反り源に還るが故に去なり。今八不は横に八迷を破し、豎に五句を窮む。彼生滅を求むるに得ざるを以ての故に、不生不滅と言ふ。生滅既に去れば、不生不滅、亦生滅、亦不生滅、非生滅、非不生滅の五句自ら崩れぬ。然も非生、非不生は既に是れ中道なり。而生而不生は即ち是れ假名なり。假生なれば生と言ふべからず。不生と言ふべからず。即ち是れ世諦中道なり。假不生なれば不生と言ふべからず、非不生と言ふべからず。名けて眞諦の中道と爲す。此は是れ二諦各論の中道なり。然も世諦の生滅は是れ無生滅の生滅なり。第一義の無生滅は是れ生滅の無生滅なり、然も無生滅の生滅は是れ生滅なり。豈是れ生滅ならんや。生滅の無生滅なり、豈是れ無生滅ならんや。故に非生滅、非無生滅を二諦と名け合して中道を明す。」

【第二の一】以下、
第二の方言を述ぶ

第二の方言に云はく、『三種の中道を明す所以は、如来得道の夜より涅槃の夜に至るまで、常に中道を説くことを顯さんが爲なり。又佛教を學する人三中を作ること成ぜざるが故に偏病に墮在す。今彼中の義は成ぜざるに對するが故に三中を辨す。』問うて云はく、『何んが佛教を學する人、三中を成ぜざるや。』答ふ、『他云はく、實法滅するが故に不常なり、假名相續するが故に不斷なり。今謂く不常は猶是れ常なり、不斷は猶是れ不常なり。唯不常を見る。何れの中にか之れ有らん。此三中成ぜざるに對せんが爲に三種の中道を明す。』今明すらく、中道とは無生滅の生滅を俗諦の中と爲す、生滅の無生滅を眞諦の中と爲す。無生滅の生滅なり、豈是れ生滅ならんや。生滅の無生滅なり、豈是れ無生滅ならんや。故に生滅に非ず、無生滅に非ず、二諦合明の中道なり。問ふ、『後に三中を明す、前と何んが異なる。』答ふ、『前に明すらく、二諦中道は是れ因縁假なり、破性の中と名く。第三に雙べて二假を泯す、稱して體中と爲す。亦た因縁表の中道と名く、故に前の悟に四重の階級有り。一には初章には四句もて性の有無を求むる不可得なるが故に、非有非無を言ひて名けて中道と爲す。外人は既に非有非無を聞いて、即ち復眞俗二諦無しと謂ひて便ち斷見を起す。是故に第二に而有而無を説いて以て二諦と爲し、其斷心を接ぐ。第三には而有而無は其れ是れ中道なり。是れ因縁の有無なりと明して、汝が性の有無に同じからざる義を顯さんと欲するが故に。第三に二諦の用中を明して、雙べて兩性を彈す。第四に次に假の有無の二を轉せんと欲するが故に、體中を明す。初に性空を明し、次いで後に假を明し、第三に

【第三の】以下、
第三の方言を述ぶ

用中を明し、第四に體中を明す。故に四階有り。此れは是攝嶺興皇始末に由來の義に對して、此四重の階級有り。此意を得れば一師の中假體用の四種を立つる意を解す。又初に性の有無を非して以て中と爲すとは此は是れ假前中の義なり。次に而有而無を名けて二諦と爲すは是れ中後假の義なり。次に假有なれば有に非ず、假無なれば無に非ざるなり。二諦合明の中道とは、此は是れ假後中の義なり。問ふ、「破性の中、因緣表の中道とは云何が中前假、中後假なるや。」答ふ、「中前假とは未だ體中を説かず、前に假を明す、即ち上の破性の中後の而有而無是なり。中後假とは用中體中を説き竟りて、方に而有而無を説くなり。正しく是れ動にして而も常に寂なり。寂にして而も常に用なり。乃ち是れ方便智もて衆生を化するなり。又中前假は用より體に入る。中後假は體より用を起す。問ふ、「第一の方言に諸師の計を出す」と、後の方言に諸師の三申成らざるを出す」と、云何が異なるや。」答ふ「第一の方言には、性の外道の八迷を破して性を破し、申を明す。但し諸師の計を出すことは諸法師亦性の義有りと計すればなり。亦言はく、正しく外を破し傍に内を破すと。故に諸師の計を出す。」

第三の方言に云はく、「世諦は即ち假生假滅なり。假生なれば、生ならず。假滅ならず滅ならず。不生不滅を世諦の中道と爲す。非不生、非不滅を眞諦の中道と爲す。二諦合明の中道とは非生滅、非不生滅なり。」問ふ、「此れ上と何んが異なる。」答ふ、「此に二の意有り、一は即ち世諦生、是れ不生なり、色即是空の如し、故に不生は即ち是れ世諦なり。眞諦の

不生とは此れ即ち相因の義なり。世諦の生に因りて眞諦の不生を明すなり。二には世諦の中の不生生滅は即ち是れ眞諦の假なり。是れ性を破して中を明すに非ず。世諦の假生は生と雖も不起なり。世諦の假滅は滅すと雖も不失なりと明さんが爲なり。故に、生滅宛然として而も未だ曾て生滅ならず。故に世諦の中は即ち是れ眞諦の假なり。問ふ、「此れ上と何んが異なる。」答ふ、「同じく生滅を俗と爲し、不生滅を眞と爲すと雖も、但し不生に三種有り。初の方言は定性の生を破して不生を明す。第二の方言は假生を破して、不生を明す。此中に異り有ることは、定性の生を破するは但破して收めず、假生を破するは亦破亦收なり。第三の方言は平道門に約して本来不生なるが故に不生と言ふ。病を破すとは言はざるなり。

第二に二諦に就いて中道を明す。此中に三意有り。第一に單の義もて單複を論じ、第二には複の義を以て單複を論じ、第三には二諦に就いて單複を論ず。初に就いて兩有り、初には正しく單複を明し、後には互に相出入することを明す。今先づ正しく單複中假の義を論ぜん。偏に一の假有を説いて無を説かず、是れ單假なり。偏に一の假無を説いて有を説かず、亦是れ單假なり。偏に一の非有を説くは即ち是れ單中なり、非無も亦爾り。雙べて假有假無を説くは是れ複假なり。雙べて非有非無を説くは是れ複中なり。次に其所以を釋せん。凡そ二義有り。一には利根の人の爲に單假を説き、鈍根の人に約して複假も説く。正しく言はば利根の者は、一を聞いて十を悟るが故に若し假有を説くを聞けば、即ち假無

【利根】 才智のするどき者のこと。
【鈍根】 智解德行のするどからざる者のこと。

【散心】 血動にし
て靜まらざる心。

を解る。乃至非有を説くを聞けば即ち非無を解る。所以に勞しく具に兩義を明し、鈍根の人の、言に隨ひて解を得るが爲にせず、若し具に説かずんば玄悟有ること無けん。所以に變べて兩義を明すなり。二は鈍根の人の爲に單を説き、利根の人の爲に複を説く。鈍根の人の圓教を受くるに堪へざるが爲に、所以に且く單義を説き其執を破す。若し利根の人は圓教を受くるに堪ふ、所以に爲に複義を説くに、便ち皆領受す。次に互に相出入するを明す。八句なり。第一には單假より單中に入る、或は言はく、假有ならば有と名けずと。有より非有に入る、無も亦例して爾なり。第二には單中より單假に出づ、或は非有を假に有と説き、非無を假に無と説くと言ふ。第三には複假より複中に入る。假有なれば有と名けず。假無なれば無と名けず。有無より非有無に入る。第四には複中より複假に出づ、非有非無を假に有無と説く。第五には單假より複中に入る、或は假有なれば有と名けず、假有なれば無と名けずと言ふ。假有より非有非無に入る。假無も亦例して爾なり。第六には複中より單假に出づ。或は非有非無を假に有と説き、非無非有を假に無と説くと言ふ。第七には複假より單中に入る。有無即ち非有なり。第八には單中より複假に出づ。非有を假に有と説き、非無を假に無と説く。次に所以を釋せば二義有り、一には衆生の執實の病を破して計に隨ひて遣る所以に、遂に多句有り。二には大士の觀行神通自在にして隔礙有ること無きが故に、或は眼根より正受に入る等なり。復委しく釋せず。【大品】に云はく、『或は散心の中より起りて滅受定に入る、滅受定より起りて散心の中に入る。』

【第二に】以下、
複の義に就て單複
を論ず。

第二に複義に就いて單複を論ず。亦二有り。初には正しく單複を明し、二には出入を明す。初に正しく單複中假を明さん、假有は是れ俗諦なり。假無は是れ眞諦なり。此は是れ單假なり。非有非無は是れ中道なり。此は是れ單中なり。假有假無を二と爲す、是れ俗諦なり。非有非無の不二を眞諦と爲す、此は是れ複假なり。非二非不二は是れ中道なり。此は是れ複中なり。正しく言へば非二は有無を盡し、非不二は非有非無を盡す。所以に是れ複中なり。次に其所以を釋せば二義有り。一往言を爲さば單中單假は義を明すこと、即ち淺く、複中複假は義を明すこと即ち深し。然る所以は單家の二諦は複の義に至る時、還りて是れ俗諦なり。單家の中道は複の義に至る時、還りて眞諦を成す。單家の中道は正しく有無の二を盡して未だ不二を盡す能はず。複家の中道は不二を盡すなり。二には單は義を明すこと即ち勝れたり、複は義を明すこと悉く劣れり。然る所以は、複假の有無は猶是れ前の單假の有の義なり、複中の非有非無は猶是れ前の單假の無の義なり。複の非二非不二は猶是れ前の單中の非有非無なり。但し前には直ちに有と言ひて即ち有無を攝得し、只直ちに無と言ひて非有非無を攝得し、只非有非無と言ひて便ち非二非不二を攝得す。言は略にして、意は廣し。所以に勝と爲す。複家の中假は言は廣くして意は劣なり。所以に勝劣有り。

【次に】以下、八
句を明す。

次に互に相出入することを明すに八句有り。第一には單假より單中に入る。假有なれば有と名けず。假無なれば無と名けず。非有非無の中道に入る。第二には單中より單假に出

づ、非有を假に有と説いて俗と爲す。非無を假に無と説いて眞と爲す。第三には複假より複中に入る。假の二なれば二と名けず、假の不二なれば不二と名けず。非二非不二の中道に入る。第四には複中より複假に出づ、非二を假に二と説いて俗と爲す、非不二を假に不二と説いて眞と爲す。第五には單假より複中に入る。假有なれば二と名けず。假無なれば不二と名けず。假の有無より非二非不二の中道に入る。第六には複中より單假に出づ、非二を假に有と説いて俗と爲す、非不二を假に無と説いて眞と爲す。第七には複假より單中に入る、假の二は有と名けず。假の不二なれば無と名けず。不二より非有非無の中道に入る。第八には單中より複假に出づ。非有を假に二と説いて俗と爲す。非無を假に不二と説いて眞と爲す。

【第三】以下、二論に就て單複を明す。

第三階に二諦に就いて單複を論ずるに兩有り。一には正しく單複を明し、二には出入なり。一には俗諦に單複を明し二には眞諦に單複を有す。假有は是れ俗諦なり。假無は是れ眞諦なり。是れ單假なり。複とは假有假不有。是れ俗諦の複假なり。假無假不無は眞諦の複假なり、非有を中道と爲すは是れ俗諦の單中なり、非無を以て中道と爲すは、此は是れ眞諦の單中なり。非有非不有は此は是れ俗諦の複中なり。非無非不無は此は是れ眞諦の複中なり。第二に出入を明すに三有り、一には俗に就く、二には眞に就く、三には交絡先づ世諦に就いて八句有ることを明す。第一には俗諦の單假より俗諦の單中に入る、假有なれば有と名けず、即ち是れ假有より非有に入る。第二には俗諦の單中より俗諦の單假に

出でて非有を假に有と説く。第三には俗諦の複假より俗諦の複中に入る、假有假不有より非有非不有に入る。第四には俗諦の複中より俗諦の複假に出づ、非有非不有、假に有非有と説く。第五には俗諦の單假より複中に入る。假有より非有非不有に入る。第六には俗諦の複中より單假に出づ、非有非不有を假に説いて假有と爲す。第七には俗諦の複假より單中に入る、假の有非より非有に入る。第八には俗諦の單中より複假に出づ、非有を假に有非有と説く。第二には眞諦に就いて八句有ることを辨ず。第一には眞諦の單假より單中に入る、假無なれば無と名けず。第二には眞諦の單中より單假に出づ、非無を假に無と説く。第三には眞諦の複假より複中に入る、假無假不無なれば非無非不無なり、第四には眞諦の複中より複假に出づ、非無非不無を假に無不無と説く。第五には眞諦の單假より複中に入る、假無なれば無に非ず。第六には眞諦の複中より單假に出づ、非無非不無を假に説いて無と爲す。第七には眞諦の複假より單中に入る、假の無不無より非無に入る。第八には眞諦の單中より複假に出づ、非無を假に無不無と説く。交絡して出入を明すに十二句有り。第一には俗諦の單假より眞諦の單中に入る、假有なれば無と名けず、有を壞して非無に入る。第二には眞諦の單中より俗諦の單假に出づ。非無を假に有と説く。第三には眞諦の單假より俗諦の單中に入る。假無なれば有と名けず、無を壞して非有に入る。第四には俗諦の單中より眞諦の單假に出づ、非有を假に無と説く。第五には俗諦の複假より眞諦の複中に入る、假有假不有より非無非不無に入る。第六には眞諦の

【七】相即を明す
 【相即】二つの別物が合して離れざること。
 【空即是色】空の實體がそのまま萬有なりといふこと。
 【色即是空】物質そのまま空無なりといふこと。

複中より俗諦の複假に出づ、非無非不無を假に有と説く。第七には眞諦の複假より俗諦の複中に入る。假無假不無より非有非不有に入る。第八には俗諦の複中より眞諦の複假に出づ、非有非不有を假に無と不無と説く。第九には眞諦の單假より俗諦の複中に入る、假無なれば有と名けず、亦不有と名けず、即ち是れ非有非不有なり。第十には俗諦の複中より眞諦の單假に出づ、非有非不有を假に説いて名けて無と爲す。第十一には俗諦の單假より眞諦の複中に入る。假有なれば無と名けず、亦非無と名けず、即ち是れ非無非不無なり。第十二には眞諦の複中より俗諦の單假に出づ、非無非不無を假に説いて名けて有と爲す。

【七】第七に重ねて相即を明し、次に二諦の相即を辨せん、經に兩文有り、若使「大經」に云はく、「世諦とは、即ち第一義諦なり、第一義諦とは、即ち是れ世諦なり。」と。此は直に即と道ひて不相離を作すが故に即と言ふ。此語小寛なり。若し「波若經」に空即是色即是空といふが如きは、此意を切と爲すなり。開善明すらく二諦は一體なり、即是の即を用ふ。龍光明すらく、二諦各體なり、不相離の即を用ふ。衆師多なりと雖も此二を出でず、今難すらく、若し二諦各體にして牛角の如くならば、并に諸の經論に違へり、難するに足らざるなり。今開善に問はく、「色即ち空なりといふ時、色の起る時空と色と同じく起るが故に色即空なりと言ふと爲んや。當色は未だ起らざるに已に此空有るが故に色即空なりと爲んや、若使色は未だ起らざる時に已に即色の空有りと言はば、即ち空は本有なり。色は即ち始めて生ず、本と始と異ると爲す。云何が相即せん、本有は是常なり、始有は無

【常無常】常住なるもの常住ならざるもの。

常なり。常無常、異なるなり、即ずることを得ざるなり。若し常無常、一體なりと言はば、俗を焼く時には應に眞諦を焼くべし。俗も生滅する時には眞も應に生滅すべし。若し一體なりと言はば、俗眞に即ずる時には俗も應に是れ常なるべし。二諦俱に常ならん。若し眞は俗に即ずる時には眞は應に無常なるべし、二諦俱に無常ならん。若し是れ一體にして而も俗は無常、眞は常なりと言はば、我も亦言はん、一體なるが故に俗は常にして眞は無常なりと。次に難ぜん、汝が色即空といふは分際有りと爲んや、分際無しと爲んや。若し分際有らば異體にして相即ずることを得ず。若し分際無くば即ち混じて一體と成して皆常、皆無常ならん。分際無くば一を得て即ち二諦を失す。分際有らば二諦を得て相即ず。若爲が通ぜんや。龍光は二諦異體なり。聞善は一體なり。今明すらく、二諦は一に非ず異に非ず、四句を離るるを體と爲す。今明すらく、一に非ず異に非ず、不相離の即に非ず、即是の即に非ず、四句を離るるを即と爲すなり。若し於諦もて論を爲さば、謂く、二諦各體なり。兩情に約して異と爲す。若し無所有に約して論を爲さば、空有皆無所有なり。故に一體と言ふ。若し教諦もて論を爲さば、用に約して二體有り。中道に約して論を爲さば終に是れ一體なり。問ふ、「若し爾は他の一異と何の異りか有る。」答へて曰はく、「他人の二諦は定んで境、定んで理、定んで一、定んで異なり。今明すらく、於諦は空華の如く眼病の故に空華を見る一異有ること無し。華無きが故に空と一體なりと言ふことを得ず。教諦とは非有非無なるを假に有無と説く。未だ曾て有無ならず、二體有る事を得ず。亦一

體と言ふ事を得ず。故に他人と異り、既に有無無し、何物の即不即をか論ぜん。四句皆流しぬ、彼は色有り空有り、色を以て空に即するが故に前の難に著きぬ。今明すらく、色畢竟空なり、何物を將空に即せんや。衆生の色を見んが爲の故に色即空なりと言ふのみ、一の方言有りて云はく、假名に有を説いて世諦と爲す。假名に空を説いて眞諦と爲す。既に假有なりと明す。即ち非有を有と爲す。既に假空なりと明す。即ち非空を空と爲す。非有を有と爲せば、空に異なるの有に非ず。非空を空と爲せば、有に異なるの空に非ず。空の異なるの有に非ざれば、有を空の有と名く。有に異なるの空に非ざれば、空を有の空と名く。有を空の有と名くるが故に、空の有即ち有の空なり。空を有の空と名くるが故に有の空即ち空の有なり。

【八】 攝法を明す
色心事理等
の一切萬有のこと

【八】 攝法第八に二諦に法を攝するを論ぜん。當に盡くと爲んや、盡きざるとせんや。常に三の解有り。第一に莊嚴に云はく、二諦に法を攝すること盡きずと。然る所以は著し是れ惑因は虚果を感ず。此れ即ち世諦なり、虚果なるが故に空とすべし。即ち是れ眞諦なり。而るに常住の佛果の體は虚假に非ず、故に世諦に非ず、復空とすべからず。故に眞諦に非ず。『仁王般若』を引いて云はく、『二諦の外に超出せり。』第二に開善の解するに、二諦に攝盡せり。故に云はく、法として總べざる無く、義として該ねざる無きは、眞俗の理なりと。之を舒ふれば即ち法として是ならざる無く、之を卷けば即ち二諦ならんのみ。故に大品に云はく、『設ひ一法として涅槃に出過する者有りと、我亦如幻、如夢と説かん。』大

【涅槃】 迷妄を脱し、眞理を窮めて寂滅無爲の法性を究め、不生不滅の法身の眞證に歸するをいふ。

涅槃も空なり、如來も空なり。第三に治城解して云はく、佛果を眞諦の所攝と爲す、而も俗諦に非ず。然る所以は佛果は是れ眞實の法なり。復虚假無し舉體妙絶なり、故に眞諦なり。譬を擧ぐれば水の本は澄淨なり、風潮の因縁を以ての故に、波浪を生ず。若し風息めば浪靜にして、木の水の清に還復するが如し。内本に合すれば唯眞諦の理のみ顯れぬ。煩惱の風起りて生死の浪を致す、生死既に息めば、一眞の理に還る。故に『大經』に云はく、『世諦は生死の時には生と名け、生死ならざれば盡きぬ。不生死は即ち是れ佛果なり、生滅を世諦と言ふ。今並に同じからず。第一の解に佛果は二諦の外に出づるとは『大品』に云はく、『法の法性を出たる者を有と見ず、是を般若と相應すと名く。』今還りて一法の二諦の外に出たる有らば、即ち相應に非ざるなり。第二の解に同じからざることは、若し佛果を二諦の攝と爲すと云はば、即ち佛果は定んで二諦の内在に在り、定んで是れ有無なり、『成論』に云はく、『佛在世なりと雖も有無に攝せず。況んや滅後をや。』中論に云はく、『如來は在世にしても有も無と言はず、如來は滅後にしても有も無と言はず。云何が有無の所攝ならんや。』第三の解に同ぜずとは、若し佛果は唯是れ眞諦にして世諦無しと言はば、即ち機照の能を失するなり。問ふ、『今時、明す所の二諦に法を攝すること盡くるや、盡きざるや。』解して云はく、『大乘經』に具に二文有り、此れ並に是れ如來の方便縁の爲の說なり。有時には縁の爲に二諦に法を攝し盡すと説く。有時には縁の爲に法を攝し盡きすと説く。具に盡不盡の二種の法門有るなり。又攝盡せしめんと欲すれば即ち盡きぬ。攝盡せざらし

めんと欲すれば即ち盡きず。妨礙する所無し。何とならば一家に單複六種の二諦有り、前後に三種の二諦を明す。有時は三諦有り、有諦無諦非有非無中道第一義諦なり。有時は三諦を攝して二諦と爲す。有無は並に世諦なり。非有非無を第一義諦と爲す。乃至二不二を世諦と爲す。非二非不二を第一義諦と爲す。此義に就いて二諦に出づること有ること無きをを得り。

【問ふ】以下、佛の二諦を學するに得失あるやを明す

問ふ、『佛の二諦を學するに如何が得失ある、請ふ爲に之を陳べよ。』答ふ、『十句有り。一には、定性の二諦を失と爲し、因縁假名の二諦を得と爲す。』問ふ、『今只成論を擧げて三假の義の失門に墮せざるを明さん。彼が明すらく、三假を世諦と爲し、三假の空を眞諦と爲す。三假に即して常に四忘せり。四忘に即して常に三假なり。三假に即して常に四絶なるが故に、有は自ら有ならず。四絶に即して常に三假なるが故に、空は自ら空ならず。故に性の義に非ず。』今問ふ、『三假を世諦と爲し、四絶を眞諦と爲すとは世諦の有は眞空に待すと爲んや。』彼答へて云はく、『世諦は眞諦に待すとは、即ち世諦を能待と爲し、眞諦を所待と爲す。二諦は便ち是れ相待假なり。何んが三假を世諦と爲し、四絶を眞と爲すと云ふことを得ん。若し三假の世諦の有は眞空に待せず、既に相待せず、便ち自性を成ぜり。故に答ふべからざるなり。眞諦の名は是れ世諦の攝なりと爲んや。眞諦の攝なりと爲んや。若し是れ世諦の攝ならば即ち世諦還りて世諦に待し、長還つて長に待す、若し眞諦の名は眞諦の攝と爲すとせば、眞諦には名無し、何んが名を攝することを得ん。』問ふ、『相

待假は成實師の云はく、「成已りて而して待す」と。中假師の云はく、「待し已りて成す」と。此れ云何。答ふ、「然らず、論文に自破して云はく、「未だ成せざるに云何が待せん、成已りて云何が待せん、今の義は待の時は即ち是れ成なり。成の時は即ち是れ待なり。故に前後の失無し。二には、有無門。山中の興皇和上、攝嶺の大朗師の言を述ぶ、「二諦は是れ教なり」と。又言はく、「五眼は理外の衆生及び一切法を見ず、此は是れ二諦の外なり」と。二諦には攝せず、理内の二諦は宛然として有なり。大師の意を解せず、理内理外に異有りと執す。三には、有本無本門もて得失を明す。他は本無し。今の義は本有り。不二正道は是れ有無の本なり。華嚴に云はく、「正法の性は一切言語の道を遠離せり。一切の趣と不趣と悉く皆寂滅の性なり。故に有に非ず無に非ず、亦有亦無に非ず、非有に非ず、非無に非ず。故に遠離一切趣と言ふ」と。問ふ、「何が故に二諦を以て教門と爲す。答ふ、「有無を以て教と爲すに、略して五義有り。一には、理に對して二諦は是れ教と明す。理は無二なるを以ての故に非有非無なり。今有と説き無と説く、故に有無を教と爲す。二には、聖人の體に望めば有無未だ嘗て有無ならず、今有無を説くは此れ教の縁の爲なり。故に有無を教と爲す。三には、見を抜かんが爲なり。舊義には有無は是れ理なりと執す。如來既に久し、即ち二見の根深くして、傾拔すべきこと難し。攝嶺の大師緣に對して病を斥く。二見の根を抜いて、有無の兩執を捨てしめんと欲す。故に有無を説いて能く不二の理に通ず。有無は是れ畢竟に非ず、應に有無の中に住すべからず。有無を教と爲す。四には、有無は

【問ふ】以下、二諦の教不教を違ぶ
 【二智】眞俗二智
 眞智とは眞諦を見る智。俗智とは俗諦を見る智。

是れ諸見の根なるを以て一切經論に盛に二見を呵し、有無を斥く。凡夫の有に著し、二乗の無に著するが如し。又愛多なる者は有に著し、見多なる者は無に著し、又四見多なる者は有に著し、邪見多なる者は無を執し、又佛法の中には五百の論師有を執して畢竟空を開きて、刀もて心を傷くるが如し。方廣は無を執して因果を信ぜず。又九十六種の外道の所執有無を出でざるが爲なり。諸佛出世して復有無は是れ二諦なりと云はば、便ち諸見の心を増さん、何に由りてか抜くべき。故に今有無は是れ教門と明して、能く不二の理に通ず。應に有無の中に住すべからず、諸見を息めんと欲するを以ての故に、經論に有無は是れ教門と明す。五には稟教の徒は有無は是れ教と聞いて、能く正道に通じて凡を超えて聖を成ず。故に有無は、是れ教なり。問ふ、「何なる文を以て二諦是れ教なりと證するや。」答ふ、「文處甚だ多し。一經一論を擧げん。論に云はく、「佛は二諦に依り法を説きたまふ。故に二諦を教と爲す」と。「大品」に云はく、「菩薩は二諦の中に住して衆生の爲に法を説きたまへり、有に著する者の爲には空と説き、空に著する者の爲には有と説きたまふ」と。經論に佛菩薩皆二諦は是れ教なりと明す。」

問ふ、「若し五義二文を以て二諦を教と爲すを證せば、今亦五難二文を以て二諦の教に非ざるを明さん。一には若し二諦是れ教ならば、佛説きたまふ時には即ち有り、説きたまはざるときは即ち應に二諦無かるべし。若し爾らば本二諦を以て二智を生ず。佛二を説きたまはざれば即ち二智無からん。既に二諦無くば、佛は何を所照としてか二智有らん。二には

【六度等の行】布施、持戒、忍辱、禪進、禪定、智慧

若し世諦は是れ教ならば六度等の行は皆是れ世諦なり。佛世諦を説きたまはざるときは、即ち世諦無し。便ち六度等の行無からん。若し爾らば但詮教の法實のみ有りて、便ち涅槃の法實無からん。三には二諦を境と爲して二智を發生すれば、二諦を境界の法實と名く。

若し二諦是れ教ならば、但詮教の法實のみ有りて亦境界の法實無からん。若し教は智を生ずるが故に、轉じて、境と名くと言はば、佛教を説きたまはざるときは、即ち教の轉ずべき無し。便ち境有ること無し。四には若し二諦是れ教ならば色等の萬法は皆是れ世諦なり。世諦既に是れ教なり。色等の萬法亦應に是れ教なるべし。若し爾らば佛世諦を説きたまはざるときは、即ち色等の萬法無し。五には世諦是れ教ならば、世諦は唯教の火のみ有りて、應に實の火の用無かるべし。若し火唯是れ教ならば、口中に火を説くに即ち應に口を燒くべし。

【次に】以下、二文もて二諦の教に非ざるを證す。

【十二因縁】三界の迷の因果を十二に分ちて、衆生輪廻のさまを示したるもの。無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死これなり。

次に二文もて二諦の教に非ざるを證せん。若し眞諦是れ教と言はば、經に云はく、「有佛無佛、性相常住」と。而るに教は即ち有佛には方に有り、無佛には即ち無し。何んが即ち常住なるを得ん。經に云はく、「十二因縁は有佛無佛常に自づから之れ有り。」故に知んぬ、世諦は教に非すと。答ふに二諦に二種有り、一には於諦。二には教諦。於諦とは色等未だ會て有無ならず、而も凡に於て是れ有なるを俗諦と名け、聖に於て是れ空なるを眞諦と名く。凡に於て是れ有なるを俗諦と名く、故に萬法失せず。聖に於て是れ空なるを眞諦と名く、故に有佛無佛性相常住なり。教諦とは、諸佛菩薩は色の未だ會て有無にあらざるを

了して衆生を化せんが爲の故に、有無を説き、二諦を教と爲し、此有無に因りて不有無を悟らしめんと欲す。故に有無は是れ教なり、而るに舊義に二諦は是れ理なりと明すは、此は是れ於諦なるのみ。於諦を教諦に望むは、但に不二の理を失するのみに非ず。亦能表の教を失す。問ふ、「凡に於て是れ有なる、既に失せば、聖に於て是れ空なるも亦是れ失なりや不や、答ふ、「一往凡夫に對して聖を明して得と爲す。若し教諦に望めば皆是れ失なり。色未だ曾て有無にあらず、有無の解を作すを以ての故に失と爲す。問ふ、「經に云はく、一切世諦若し如來に於ては即ち是れ第一義諦なり。亦是れ失なりや、答ふ、「一往於諦は但に不二の理を表するを得ざるのみに非ず。亦能表の教をも得ず、但是れ謂情の所見なるのみ。若し兩種の二諦を識らば、即ち五難自ら祛る。問ふ、「此通有りと雖も、猶未だ今説は、色の有無は是れ教諦なりと見るべからずとは有無を説かず、即ち教諦無けん。答ふ、「説を以て教と爲すは、佛説きたまはざれば即ち教諦無きなり。問ふ、「若し爾らば唯恆に二の於諦有るのみ、即ち因縁の有無無けん。答ふ、「一切法は常に是れ二の於諦の有無なり。亦恆に是れ因縁の有無なり。若し二縁に於ては即ち是れ二の於諦の有無なり。諸佛菩薩は此色即因縁の有無なりと了す、然も於と教とは未だ曾て二於二教ならず。若し因縁の有無は未だ曾て有無ならず。此の如きの有無は能く不有不無なり。故に名けて教と爲す。問ふ、「他も亦因縁有無を云ふ、今と何んが異なる。答ふ、「今の因縁有無と言ふは、此は是れ方便の説なるのみ、聖は衆生を教化せんが爲の故に是れ有無と説く。此有無を叙べて教と爲すな

り。他は道理既に是れ有無なりと明す。故に今と同じからず。但此一意を取りて正答と爲すなり。問ふ、「有無を佛菩薩に望めば卽是因縁の有無なり。卽是因縁は境なり。云何が是れ教と言はん。」答ふ、「是因縁の有無之を兩望すべし、智を發するは卽ち境なり、能く不有不無の不二を聞くは卽ち是れ教なり。問ふ、「佛有無を照せば、有無を境と名く、佛有無を説きたまへば、有無是れ教門なり。他亦云はく、有無を照せば有無是れ境なり。有無を説けば有無も亦是れ教なり。今と何んが異なる。」答ふ、「他は但二於の定性の有無を得。此有無は不有不無を聞くを得ず、故に教ならざるなり。又因縁の有無は是れ境なるのみ。定性の有無は境に非ざるなり。何んとなれば有自ら有ならず、無に因るが故に有なり。無は自ら無ならず、有に因るが故に無なり。是有は無に因るが故に有なれば、有は是れ無の有なり。此因縁の有無を悟りて能く二慧を生ず。既に是れ定性の有無なり。卽ち斷常の二見を生ず。故に境と名くるを得ず。

【次に】以下、説不説門もて得失を明す。

次に説不説門もて得失を明す。他は但世諦は説、眞諦は不説なりと明す。世諦は是れ三假なり、假の故に可説なり。眞諦は是れ四絶なり。絶なれば不可説なり。衆師は此一解に同じ。今問ふ、「世諦は唯可説、眞諦は不可説ならば豈定性に非ざるや。」答ふ、「今の義は世諦は可説なりと雖も説は卽ち眞の不可説なり、眞の不可説は卽ち俗の可説なるが故に是れ定性に非ず。問ふ、「俗は卽ち眞なるが故に不可説ならば、此は是れ俗の不可説と爲んや、是れ眞の不可説と爲んや。還つて是れ眞の不可説ならば、若し爾らば卽ち俗には不

可説の義無けん。豈定性に非ずや。答ふ、『今總じて經論を觀るに、具に四句有り。一には世諦は説、眞は不説なり。二には眞は説、世は不説なり。三には俱説なり。四には俱不説なり。此四句に多くの門有り。今具に之を叙せん、一に世諦には生滅を説き、眞諦には生滅を説かず。故に世諦説、眞諦不説と云ふ。二には眞諦には不生滅を説き、俗には不生滅を説かず。故に眞諦は説、世諦は不説なり。三に世諦には生滅を説く、眞諦は無生滅と説く。故に二諦俱説なり。四に世諦には無生滅を説かず、眞諦には生滅を説かず。故に二諦俱に不説なり。』問ふ、『此四句は何處にか出でたる。』答ふ、『釋論の初卷に云はく、『人等は世諦の故に有なり。第一義の故に無なり。如法性等は第一義の故に有なり。世諦の故に無なり。』即ち是れ斯義なり。二には生滅を明すは此は是れ世諦の説なり。不生滅は是れ世諦の不説なり。不生不滅は是れ眞諦の説なり。非不生非不滅は是れ眞諦の不説なり。是れ即ち二諦俱説俱不説なり。三には生滅を説き、不生滅を説くは皆是れ世諦の故に説く。眞諦には生滅を説かず、亦不生不滅を説かず。故に云はく、世諦は説、眞諦は不説なり。四には眞諦は説と雖も説かざる所無し。問ふ、『世諦には説くと雖も而も所説無し。無所説は即ち眞諦に入る。眞諦には所説無けれども而も説かざる所無し。還つて是れ世諦なり。何れの處にか世諦の不説、眞諦の説有らん。』答ふ、『有所得定性の義は此の如きのみ。世諦は自ら是れ説なり、若し所説無きは即ち眞諦に屬す、眞諦は自ら所説無し、若し説有るは還つて世

【一色】一の色法
または色蘊なり。

諦たに屬ぞくす。此このの如ごときの眞しん俗ぞくは皆みな是これ障しょう礙がいの法ほう門もんなり。今いま明みすらく、諸しよ佛ぶつ菩ぼ薩ざつ無む所じよ得とくの空くう有う縁えん無む礙がいなるが故ゆゑに、空くうは是これ有うの空くうなり。有うは是これ空くうの有うなれば、有うなりと雖いへども是これ空くうなり。空くうは是これ有うの空くうなれば、空くうなりと雖いへども有うなり。有うは是これ空くうの有うなれば、有うなりと雖いへども是これ空くうなり。説せつは是これ不ふ説せつの説せつなり。不ふ説せつは是これ説せつの不ふ説せつなり。説せつは是これ不ふ説せつの説せつなるが説せつに、説せつと雖いへども不ふ説せつなり。不ふ説せつは是これ説せつの不ふ説せつなるが故ゆゑに、不ふ説せつと雖いへども常じょうに説せつなり。故ゆゑに世せ諦たは不ふ説せつにして而しかも眞しんは説せつなることを得うるなり。『問とふ、『中ちゆう論ろんに云いはく、俗ぞく諦たには言ごん説せつ有あり。第一だいいち義ぎ諦たには言ごん説せつ無なし。諸しよ人の言ごんはく、眞しん諦たには名み言ごん無なし、一切いっけつの名み言ごんは皆みな是これ世せ諦たなり。若もし言ごん教けうを眞しん諦たと爲なさば、言ごん教けう生じやう滅めつするが故ゆゑに、眞しん諦たは應まに生じやう滅めつすべし。若もし眞しんに生じやう滅めつ無なくば、汝なんぢ今いま何を以もつてか眞しん諦たも並ならに是これ教けうなりと言いふや。』答こたふ、『言ごん教けうを以もつて眞しん諦たと爲なすにあらす。乃すなはち言ごんはば眞しんを説せつき俗ぞくを説せつくが故ゆゑに眞しん俗ぞくと言いふのみ。四しには顯けん不ふ顯けんもて得とく失しつを明あす、有う所じよ得とくの有う無むは定ぢやう住ぢゆうの有う無むにして道だうを顯けんすこと能あたはず。無む所じよ得とくの有う無むは方まに能あたく道だうを顯けんす、故ゆゑに顯けん不ふ顯けん門もんと言いふ。五ごには理り教けう得とく失しつ門もん。他たは但ただ理り有ありて教けう無なし。今いまは理り教けう有あり。六ろくには淺せん深しん門もんもて得とく失しつを明あす。他たは但ただ空くう有あを明あして二に諦たと爲なすが故ゆゑに淺せんなり。今いま四し重じゆうの二に諦たを明あす、故ゆゑに深しんと言いふ。七しちには理りの内外ないがい門もんもて得とく失しつを明あす。一いちには理り外がいの義ぎ、二にには理り内ないの義ぎなり。若もし心しん理り外がいに行いずるが故ゆゑに理り外がいと云いふ。心しん理り内ないに行いずるが故ゆゑに理り内ないと云いふ。八はちには無む定ぢやう性じやう門もんもて得とく失しつを明あす。一いち色の如ごとき未いまだ曾かつて自じ性じやうならず、亦また是これ假かに非あらず、性じやうの縁えんに於おては性じやうを成じやうじ、假かの縁えんに於おては假かを成じやうじ、理りの内外ないがい得とく無む得とく亦また然しかり。一いち色の如ごとき、未いまだ曾かつて眞しん俗ぞくならず。食じきの人ひと

【不淨觀】衆生の不淨なることを九想に顯て觀ずること。詳張て觀ずる。夢想、壞想、血塗、散想、骨想、燒想。

【六塵】色、聲、香、味、觸、法。この六境は心神を汚し眞性を覆ひ昏ますものなるが故に塵といふ。

【三無性】唯識宗にて、三性(遍、圓、依)に對して法の無自性なる邊より三種の無性を立つ。相無性、生無性、勝義無性これなり。

【九】辨教を明す【無方】諸法はみな圓融の妙理を具するが故に、機に隨ひ、時に應じて、一種に解釋して一方に定めざるを無方といふなり。

は色を見て淨と爲し、不淨觀の人は色を不淨と爲す。九に相待門に約して得失を明す。問ふ、「此れ何の人をか對治するや。」答ふ、「凡そ三義有り。一には攝論を學する人、三性を執せざるも、三無性の理を存するが爲なり。三性とは依他分別眞實なり、分別性とは即ち是れ六塵を識と爲し分別せらるるが故に分別性と言ふ。依他性とは本識を種子の所依と爲すが故に依他と名く。眞實性とは二無我真如なり。三無性とは塵の無相を知るが故に分別無相性と言ふ。依他無生性とは本識の無生を知るが故に無生性と言ふ、無我の理の無性を知るが故に眞實無生性なり。三論に無性法亦無と云ふは、他家は三無性を遣らず。今の論には、三無性を遣るが故に言ふ。皆相待することを得るなり。十には得失を泯すの門、若し上來の諸義を見て失と爲し、内外無く性假を泯すを以て得と爲す。故に皆失と爲す、若し能く得無く、失無くんば、何を以て之に目くと知らず。強ひて稱して得と爲す。故に十門を以て他と今との二義を分別するなり。

【九】辨教第九、常途の諸師頓漸無方の三種もて教を判す、漸教の中に於て五時の二諦有り。初の四諦教の時には事理の二諦なり。般若教の時には空有の二諦なり。『淨名經』には褒貶の二諦なり。『法華經』には三一の二諦なり。涅槃教には常無常の二諦なり。今のは通じて、空有の二諦を明す。問ふ、「若し爾らば涅槃經に明す空とは、二十五有なり。不空とは大涅槃なり。空を以て世諦と爲し、妙有不空を以て第一義諦と爲すや。」答ふ、「此は

【灰身滅智】 身も心もすべて無くすること。小乗の無餘涅槃にして、阿羅漢は之を最後の目的となす。

【報佛】 因位の願行に酬報して成就したる萬徳圓滿の佛身をいふ。

【一〇】 同異を明す

三修比丘の昔日の灰身滅智を無餘涅槃と爲すに對して、今日妙有不空といふなり。是れ二諦を判ずるに非ず、若し汝が問ふ所のごとくならば、何が故に經に迦毘羅城も空なり、大涅槃も亦空なりと云ふ。亦空にして並に空なり、豈空を第一義と爲し、有を世諦と爲すに非ざらんや。問ふ、「四重の二諦は文證有りや。」答ふ、「文證甚だ多し、經に云はく、或は世諦を説いて第一義諦と爲し、或は第一義を説いて世諦と爲し、或は空有を説いて世諦と爲し、非有非無を第一義諦と爲す。問ふ、「三華嚴經」は是れ釋迦の所説なりと爲んや。答ふ、「釋迦に兩名有り、盧舍那と釋迦となり、盧舍那をば普遍淨と名く、乃ち是れ功德の名なり。釋迦は性の名なり。又見者は同じからずして二佛を有す、故に舍那は淨土に在りて法を説きたまふ。釋迦は穢土に在りて法を説きたまふ。故に見者に約して修するは報佛と爲す。短なるは化佛なり。乃ち此方の釋迦を本と爲し、十方の分身の釋迦を迹と爲すが如し。故に言ふ、舍那を本と爲し釋迦は是れ迹なり。」

【一〇】 同異を明す第十。兩師有り。一には空假名。二には不空假名なり。不空假名とは但性質無くして有なり、假の世諦は全無なるべからず。鼠糞粟の如し。第二の空假名とは、謂く、此世諦、體を擧げて不可得なり。若し假有の觀を作さば體を擧げて世諦なり。無の觀を作さば體を擧げて是れ眞諦なり。水中に爪を案じて手もて爪を擧ぐれば、體を出さしむるが如きは是れ世諦なり。手もて爪を案じて體を沒せしむるは、是れ眞諦なり。今義を明すに此兩義に就いて三階と爲す。一往俱に前の二解を非せん、食粟に同じからざること

は假有の法、恆に空ならず、假の壁内の空無性なる、豈即ち有の是れ空なるに非ずや、亦
 第二の解に同じからざる所以は、若し没しぬれば體を擧げて空なり。即ち復世諦無けん。
 若し出づる時には體を擧げて俗有なり、復眞諦無けん。亦並べて有の時、便ち空の時、
 便ち有なることを得ず。第二階に會する時には亦並べて會するを得。復有なりと雖も而も
 空なり、空に即して而も有なり。但空と言ふ時亦有を失せず。有と言ふ時亦空を傷けず、
 還つて第一の不容世諦の義に同じ。而して未だ始より一の有として空ならざること有らず。
 一の空として有ならざること有る無し。空の時擧體空なり、有の時一切有なり。亦還りて
 第二の空世諦の義に同じきを得。第三階には一をば取り一をば捨つ。頑に食粟に垂いて案
 爪を取用す。従來の二諦は案爪の義を成せず、従來は二の理各別なること有り、豈稱して
 案爪の二諦と爲すを得んや。今始めて此義を用ふることを得。唯是れ一爪にして本出沒に
 非ざるを以て、譬へば唯是れ一道にして有に非ず無に非ざるが如し。而も爪は用の中に有
 時には出で、有時には沒す。二諦の用に譬ふ、或時には俗と説き或時には眞と説く、所以
 に始めて是れ案爪の義なり。此譬へば亦小分の説なり。爪は沒する時は出ならず、出の時
 は沒ならず、今は有の時空ならず、空の時有ならざること有ること無し。此處には齊しから
 ず、出沒を擧げて譬と爲すことを得ず、今出には別出無し、還りて是れ沒せるもの出なり。
 沒に別の沒無し、還つて是れ出づる者の沒の故に空に別の空無し。有なる者を説いて空と
 爲す、有別の有無し。空を説いて有と爲すが故なり。次に周顛、三宗の二諦を明す。一には

不空。二には空假。三には空假なり。空假とは開善等の用なり、空假とは四重の二諦の中
の初重の二諦なり。空と雖も而も宛然として假なり。假と雖も而も宛然として空なれば空
有無礙なり。問ふ、『若し假空とは假生不生といふ時當に實の生ならずと爲んや。假の生な
らずとせんや。』答ふ、『不生に三種有り、若し假生不生とせば此は性實の生無き義なり。二
には、自ら假生不生の假生ならざるを世諦の中道と爲し、眞諦の假を用ひて世諦の中と爲
す有り。三には假生即ち不生を明す。不生に安んじ眞諦に置く、若し不生不滅を合論する
に三種の不生不滅有り。一には性の生滅にあらすして俗諦を明す、二には假の生滅にあら
ずして眞諦を明す。三には俗諦を有と爲すが故に不生を明し、眞諦無とするが故に不滅を
明す。二諦合論の故に不生不滅と言ふ。』

大乘玄論卷第一 終

大乗玄論 卷第二

胡吉藏撰

八不の議に六重有り。

第一には大意を辨じ、第二には三種の中道を明し、第三には智慧中道を論じ、第四には雜問、第五には單諸句を論じ、第六には不有の有を明す。

【一】大意を明す
八不、不生、不滅、不去、不異、不來、不斷、不常。

【一】第一に大意を辨ずとは、八不とは、蓋し是れ諸佛の中心衆聖の行處なり。故に『華嚴經』に云はく、『文殊法常に爾なり。一切無畏人は、一道もて生死を出づ』と。更に異趣無し。即ち是れ論初八不なり。故に堅に衆經を貫き横に諸論に通ず。故に經に云はく、『不一亦不二、不常亦不斷、不來亦不出、不生亦不滅。』又經の中に百非を明す、非と不と及び無との名亦一法に目くることを得、通じて亦其異無きにあらず。一向一種なることを得ず、後に別して之を明す、異とは不有と非有と及び無有との如き不異の義を得ず。食の如き無食とは則ち未だ曾て食に有らず。若し不食と言ふは則ち是れ食無きに非ず。故に異り有るを知るなり。異ると雖も而も諸法を洗ふが爲に、即ち三字を明せば異ならず。還つて是れ一意なり。八不を以て洗除して盡く諸法を淨む。故に經の中に具に百非有り。即ち還つて是百不百無等なり。故に多く所關の義有り、所以に堅に群經の深奥に入り、横に諸論の廣大

【横に】以下、横に諸論に通ずといふを明す。

【三修】勝三修、劣三修あり。勝三修とは善薩此を修す、常修（法身の體は常住なりと觀ず）、樂修（涅槃の樂を觀ずること）、

に通ずるなり。明すらく、經の深處は即ち是れ八不なり。不は即ち一切の法を不するなり。不を以て義を明す、故に知んぬ其れ深奥なり。成論等の釋の如き、百非百不及び絶等と言ふと雖も而も理存すること有り。得と謂へば還りて失を成す。即ち是れ小乘の觀行有所得にして、斷常の心を離れず、經の深處に關るに非ざるなり。今明すらく、不を以て義と爲せば、義は即ち該廣なり。堅と言ふは之を縱と謂ひ、縱は只是れ深なり。即ち經の深旨に非不非無等と言ふが如き亦復無等をせず、經の深處なり。

横に諸論に通ずとは、横は只是れ廣、濶の稱なり。亦藥病を對治せんが爲なり、有無相治等の如きは、悉く是れ横論なり。有と言ふが如き、即ち横と爲せば不有を堅と爲す。亦絶を横と爲すが如き不絶を堅と爲す。若し不絶を横と爲せば、則ち非絶非不絶を堅と爲す。不の義は初に據るを以て是の如きの深不は亦不に於て、何れの所か不せざらん。言を横と爲すが如きは不言を堅と爲し、横堅亦不定なり。隨つて之を望す。若し有無斷常相治するを横と爲せば、病息み藥除くが故に堅と爲す。故に以て處に隨つて論ずることを得、而して八不の堅に經の深に入るとは深義の經なり。横に諸論に通ずとは、論の破病の用を辨ずるなり。經未だ始より横無きにあらず、三修八倒斷常相破するが如きなり。論未だ始より堅を明さざるにあらず。十二門論に言ふが如し。若使有有ること無くば、云何が當に無有るべき、有と無とは既に無なり。有無を知る者は誰ぞ。豈遠堅の義に非ずや。故に經に深堅の不義を明すは、不義不有の有なるが故に、未だ始より横無きにあらず。論に辨じて藥

我修（眞我の自由なるを觀ず。劣三修とは、聲聞此界の萬有は無常なりと觀ず）、非樂修（萬有悉く苦なりと觀ず）、無我修（我も無く我の所有物も無しと觀ず）。

【八例】凡夫の四倒と二乘の四倒。凡夫四倒とは世間の實相なる非常と、非我を我と、非淨を淨と倒計す。二乘四倒、涅槃の實相なる常を非常と、樂を非樂と、我を非我と淨を非淨と倒計すること

【二】三種の中道を明す。

と病とを明す、樂と病とを無くして不を明せば、未だ始より堅無きにあらず。不は一切を不す、不を以て義を明す。豈窮深ならずや。深義亦不なる即ち是れ菩薩の觀行なり。若し此深遠有ると謂はば即ち是れ聲聞觀なり。然るに不の義は止に經の深に入るのみに非ず。亦廣く衆行を明す。波若の因を行じて涅槃の果に會ふ、皆八不の爲に不せらる。此深勝の法を不す、不を以て深義と爲す。深義亦不なり。但不不の名を釋するに、故く如不生とは諸の論師の言はく、『此法不生なれども、而も種種に生相を釋すること有るを妨げざるなり。今明すらく、此不は生を不す、生本來不生にして十方の横に互り、三世の豎に通じて、一切の佛法皆同じく不生に非ざる無きなり。成實論師の如きは云はく、『眞理を不生の理境と名く』と。今大乘の義は若し理有らば是の如く生なり。一法として是れ有にして不生なるもの有ること無し。若し理存すること有りて是れ不生なりと言はば、亦應に有存して是有に非ざるべし。本有常住不生等の如く、是の如く破して之を求む。今明すらく、諸法は不生なり、不生の故に無生と名く。無生法忍既に兩り、不生ならば何んが滅の生に對すること有るを得ん。生の故に方に滅す、既に不生なれば亦復不滅なり。有無三時等を以て滅相を検求するに不可得なり。論に乳を破するが如し、乳の時に於て滅せず亦異時に滅せず。具に彼論に出でたり。

【二】第二に三種の中道を明す。成論師八不を解くこと同じからず。一には云はく、八不は並に是れ眞諦の中道、亦是れ眞諦なり。二には云はく、不生不滅は是れ中道なり。即ち

【世諦の】以下世諦の中道を明す。

是れ眞諦の不有不無の中道なり。餘の六不は是れ俗諦の中道なり。今謂く、然らず、彼は大乘論の意を解せず、乘の義の意もて判ずること此の如きのみ。今云はく、八不に三種の中道を具す。即ち是れ二諦なり。但し成論師は三種の中道を解す。一には、世諦中道、二には眞諦中道、三には眞俗合論の中道なり。

世諦の中道とは世諦は三假を出でず、故に三假に依りて中道を明す。一には因成假。不一不異に中道を明すなり。何んとならば一柱四微を攪りて一と爲れば、是れ不一にして一なり。四塵同じく一假を成ずれば不異にして假實殊なるが故に異なり。故に不一の一なり。故に不異の異なり。故に不一不異なり。因成に中道を明すなり。二には、相續。不常不斷に中道を明す。但し相續假同じからず。一には云はく、補處に續假を明すなり。二には云はく、前の玄と後の一とに續假を明す、識心の終、想心の初、中央に當りて假と爲すが如し。三に龍光、聞善に傳へて云はく、續假を明さば後起りて前に接ぎ、前轉じて後と作る。即ち是れ生と至と共にして假を成ずるなり。三師の説不同なりと雖も、而も相與に續くが故に不斷なり。滅するが故に不常なり。不斷不常に相續中道を明すなり。三には、相待假に中道を明す、即ち是れ有開避の相待にして、色心等の法の如く、名けて通待と爲し、亦是れ定待と名くるなり。長短君臣父子等の法の如きは、自ら短ならず、長に形るが故に短なり。長は自ら長ならず、短に形るが故に長なり。此の如きは相奪の待なり。乃至君臣父子等なり。名けて別待と爲し、亦是れ不定待と名くるなり。通別殊なりと雖も、悉く是れ相待假

【眞諦の】以下、
眞諦の中道を明す

もて中道を明す。假にして眞に非ず。理に稱當するが故に虚に非ず。眞に非ず、虚に非ず。通じて世諦の中道を明すなり。

眞諦の中道は名無く相無し、名に寄りて相待す。眞は眞無に待するが故に、無は非無を表す、亦復有に非ず、非有非無を眞諦の中道と名くるなり。

眞俗合の中道とは俗諦有と言ふが如く、有は實有に非ず、眞諦を無と名く。無は定無に非ず、非有非無と名けて兩合の中道と爲すなり。

梁の武帝、開善寺の藏法師に勅して義疏を作らしむ。法師講務に閑無く、諸の學士共に議して安城寺の開公、安樂寺の遠子を出して法師に代りて疏を作らしむ。此二人は善能く語を領し精しく外典を解し、二遍を聽きて成就せり。十四卷を一部と爲して上る。法師に簡ばしむるに、法師自ら手に疏を執りて一遍を讀む、印可して之を言ふとき亦去送することを得。此疏に云はく、二諦中道は云何が物を談するや。諸法起とは未だ法性に契はざるを以てなり。既に未だ契はざるが故に有る。則ち此有は是れ妄有なり。其れ空なるを以ての故に是れ俗なり。虚體は即ち無相なり。無相は即ち眞なり。眞諦は有に非ず、無に非ざれども而も無なり。其れ妄有に非ざるを以ての故に、俗は有に非ず無に非ずと雖も而も有なり。其れ假有なるを以ての故なり。與物は體を擧げて即ち眞なるが故に有に非ず。體を擧げて即ち俗なるが故に無に非ず。則ち非有非無は眞俗一の中道なり。眞諦は無相なるが故に、有に非ず。無に非ず。眞諦の中道なり。俗諦は是れ因假なり、即因は即果に非

【外典】 佛教以外
の書籍。

【又汝】以下、不
一不異を中道と爲
すを明す。

す、故に非有なり。果を作らざるに非ざるが故に非無なり。此非有非無は俗諦の中道なり。龍光の三種の中道を作れると、開善の三種の中道を作れるとは言方少しく異なり、緯師は二體有り、藏師は一體なり。而も意趣は是れ同じく並に是れ有所得なり。終に恐らくは斷常を離れず、須らく一一に之を破すべきなり。先づ俗諦の中道を破せん、汝が因成の中道とは、假名不一の一なり。實法は不異の異なり。且く問はん、不異の異とは、是れ二の名、二法に名くと爲んや、一法に名くと爲んや。若し汝四塵は是れ異なり、異は四塵に目くと謂はば、四塵は其れ實に異有り。何んが不異の異と言ふことを得ん。不異の名復摩假の上に安ずることを得べきや。汝言ふ假名は不一の一なりと。一の名は假に名けて實に目くるを得ず、實をば不一と名く、只兩名を二法に名くるを見る。云何が是れ中道ならん。若し二の名、二法に名けて、而も名けて中道と爲さば、總別の二の名は二法に名く、亦應に中道なるべし。色心の二名は二法に名く、亦是れ應に中道なるべし。若し色心異なるが故に、中を辨ぜずと言はば、三聚假を成ずるが如きは、寧ろ假實に中道を明すことを得んや。若し相成の故に中道と名くと言はば、色心相因の故に亦中を論ずることを得べきなり。又汝不一不異を中と爲すと言はば、不一は四塵を除き、不異は假名を除く。假を除き實を除かば、何を以てか中と爲さん、兩つ除すれば則ち物無く、大虚を名けて中と爲すべからず。故に中を安ずるに所無し、故に虚妄の說なり。開善の義を破せん。汝と言ふは即ち此有は是れ妄有なり。既に妄有の有と言ふ。簡妄有の法、那ぞ是れ中道なりとするを得

【次に】以下、相續の中道を破す。

【有爲の法】爲作造作せらるるもの即ち衆縁の合離に依りて生滅する法をいふ。

ん。妄有は則ち顛倒の別名なり、故に中道に非ざるなり、又言はく、即因は即果に非ざるが故に非有なり。果を作すこと無きに非ざるが故に非無なり。此非有非無は俗諦の中道なりとは、此は是れ何物の中道なる。小兒の戯れに似たるに非ざるべけんや。百草の中を觀て、佛法の中に關るに非ず、正しく是れ外道の義なり。百論に云はく、迦毘羅の弟子、僧伽經を誦して云はく、『泥團は即ち瓶に非ず、故に非有なり。瓶を作さざるに非ず、故に非無なり。有無に非ざるを中道と爲す。』若し爾らば豈正しく是れ僧伽の義に非ざらんや。

次に相續の中道を破す。續假に三説有り、雖も、人の盛に用ふる所は後起接前の義なり。問ふ、『無常念念に住せず、豈前を轉じて後を作り、後起りて前に續いて前を滅せざらむる義を得んや。』彼答へて云はく、『有爲の法に二義有り、一には念念滅し續を論せず。二には應に滅すべくして滅せず、相續假を論ずるなり。』今謂ふ然らず。若し應に滅すべくして滅せずと言はば、亦應に有なるべくして不有なるべし。而も諸法は新新に生滅すること有るに非ざること無し。『居士經』に云ふが如し。即生即老即死寧ぞ應に滅すべくして滅せざる有らんや。體を擧ぐるも遂に滅せず、復誰か滅せんや。若し體を擧げて滅せば復誰か在りて滅せざらんや。而も滅する者は刹那念念に恆に滅して、會て滅せざるにあらず。滅せざる者は恆に滅せず。只斷常の兩片を見る。何んが中道を得ん。彼謂く、『一法に此滅不滅の二義有り、故に中道を明すことを得。』と。今謂く、然らず。一法に滅有り不滅の義有るは、滅の義邊には一法として滅せざる有ること無し。體を擧げて消亡す。何れの處にか不滅の義

【次に】以下、相待假の中道を明す

有りて相續の假を辨ぜんや。又汝是れ一法を中と爲すと爲んや、是れ二名を中と爲すと爲んや。若し二名を中と爲せば二名何物に名くるを二法に曰くと爲んや、一法に曰くと爲んや。若し二名を二法に目けば只兩名兩法を見る。何んが是れ中なることを得んや。若し二名を一法に名けば只一法の上に、兩名有ることを見る。童子の上の眼目二名の如く、寧ぞ是れ中道を得んや。汝何れの處の一法に安いてか滅不滅の義有りと言はん。一法の上に安かば一法是れ何物にして是れ心なりや、是れ虚空なりや。是れ心ならば心是れ事有の故に中に非ざるなり。應に滅すべくして滅せざる兩義復相違せり、故に中に非ざるなり。若し一名を中と名けば色的一名の如く、名の一色亦應に是れ中道なるべし。向の無と向の有との二義上の兩名目の如くならば、只二名を二義に名くることを見て中道を見ず。若し兩ら除けば則ち所無し。所無くば何をか中と爲んや。

次に相待假の中を明すことを破せん。彼云はく、因成假を體と爲し、相續を用と爲し、相待假の立名と爲す。若し假の故に眞ならず、不眞は是れ虚なり、理に稱當すれば虚ならずと言はば、此假虚は是れ理に當れり。理に當るが故に虚ならず。何を以て言ふや。若し外道の説を虚と爲すが故に、此れ虚ならずと言はば、他の假は稱理に當らず。汝が假は理に當る假虚なり。不虛不眞は何れの處に安かんや。又若し長短に約して中を明さば亦然らず、五尺を以て短と爲し、一丈を長と爲す。長は自ら長に在りて短に在るにあらず、短は自ら短に在りて長に在らず、只長短の兩片を見る。中の名何れの處にか出づるや。若

【次に】以下、眞諦の中道を破す。

し長は、自ら長にして、長則ち短なるべからずとは、亦應に只長を用ひて中を成すべし、若し自ら短らざれば二物共にして一長を爲すべし。二物共にして長ならば定んで是れ誰の長ぞや。又不短不長不被不此を名けて中と爲すと云はば、此れ即ち兩除を成じて所無からん、所無くば何をか名けて中と爲んや。是の如く應に廣く破すべし、論の品品に悉く相俵を破するが如く、自ら文中に現げることとは、燃可燃品の中に破するが如し。

次に眞諦の中道を破せん。彼云はく、眞は不生不滅無相無名なり、所以に名に寄せて眞と名け、無なれども無に非ず、有なれども有に非ず、名に寄せて中道と名くるなり。今云はく、然らず。若し眞には名無くとも名に寄せて眞と名け中と爲すと云はば、能寄有りや、所寄有りや不や。若し所寄有らば即ち所名の物有らん。若し所寄能に非ず、所に非ざれば則ち眞理無くして、邪見に同じきなり。若し眞は是れ世帯の假名もて、寄せて眞諦と名くと云はば世諦虚假なり。何者をか眞と爲さん。眞を名けて實と爲す、世諦は浮虚なり、何んが實と名くるを得ん。

【又眞諦】以下、眞諦絶名に就いて述ぶ。

又眞諦絶名何んが勞して名に寄すべき。名若し寄すべくば則ち應に絶なるべからず、絶すれば、則ち寄すべからざるなり。又行人眞を尋ねて眞を得、得ば云何が中道と名けん。若し名に寄せて眞と名くとも所寄の理寄すべからざれば、只寄すべからず、是れ名なり、何んが是れ無名と謂はん。若し名に寄せて眞と名く、眞理には名無く相無しとは亦應に智眞に會ふと言ふべからず。眞に合はざるが故に、亦人眞に會つて結を斷する無けん。若し

【次に】以下、合
の二諦に中道を辨
ずるを破す。

實利會ふべしと言はば、亦應に實利に名有るべし。若し世諦には中有り、眞理には中不中
無しと言はば、此れ乃ち是れ世諦には中道ありて、眞理には中無し、云何が眞諦の中道と
言はん。開善の義は本虚體、即ち無相なり。無相は眞諦なりと言はば、虚は是れ俗の理、
無相は是れ眞の理なり。既に二の理有り、即ち是れ二物なり、云何が是れ中道とならん。
又眞理は非有非無なれども而も無なり。此に而無の無は非無を無と爲す、既に非無と言は
ば那ぞ是れ無ならん。若し有に對するの無と言はば、此無は是れ徧無なり、故に中に非ず。
次に合の二諦に中道を辨ずることを破せん。彼言はく、『世諦をば非無と言ひ、眞諦をば
非有と言ふ、非有非無は合明の中道なり。』今謂く、然らず。既に兩捨と言ふ、何んが中道
と名けん。又非無は則ち是れ有世諦なり、非有は只是れ眞諦の無なり、兩名兩處なり、
兩名兩處は同じからず、何んが中道と名くることを得んや。開善の義は本云はく、『體を
舉げて即身なるが故に非有、體を舉げて即俗なるが故に非無なり。則ち非有非無は眞俗一
の中道なり。』今云はく、然らず。既に體を舉げて即身と言はば即ち是れ相無く、名無けれ
ば則ち俗を失す。復何物有りてか相即と言つて、非有非無を中道と爲んや。故に三種の中
道有りと雖も、之を検するに所無く當無し。故に但語言のみ有りて、佛法の中道に非ざる
なり。

【阿梨耶識】 第八
識のこと。
【六識】 眼、耳、
鼻、舌、身、意の
六識をいふ。

次に地論の中道を破せん。彼言はく、『阿梨耶識は本來不生不滅、古今常に定まる、始に
非ず終に非ず、但眞に違するが故に妄想を起す。』故に彼言はく、『六識と熾惱と隨つて梨耶

【今大乘】以下、
八不に約して三種
の中道を明す。

を覆す、名けて如来藏と爲す。後に十地の解を修して分分に妄想と六識とを斷除して、六識既に盡くれば妄想の解も亦除く。眞を顯して用を成ずるを名けて法身と爲す。譬へば風起りて雲除き、風息んで皎日獨り朗なるが如し。法身既に顯すれば諸の應能有り、所以に不生に生を現じ、不滅に滅を現す。不因不果なれども因果等の諸用一に非ず。故に經に云はく、『佛の眞法身は猶し虚空の如く、物に應じて形を現すこと水中の月の如し』と。今謂く、然らず。法身は本有なり、何の因の可得と爲さん。若し因の得と爲せば則ち本有に非ず、無因ならば則ち外道の義に同じからん。若し本有なりと言はば、何を以てか中道と名けんや。又本來此四句百非清淨法に有らば、自ら應に顛倒を遣るべし。那ぞ急に煩惱の爲に覆はれ、後に十地の解を修得して尙能く煩惱を遣らん。本來常定の法身は之を遣るのと能はず。翻成せる末の修解は、惑を却けては本即ち能はず、末も亦能はざるなり。

今大乘無所得の義は八不に約して三種の中道を明す。言方新舊同じからずして、而も竟に異趣無きなり。山中の師寂正に對して之を作る、語は不語に待し、不語は語に待す、語不語並に是れ相待の假名なり。故に假の語なれば語と名けず、假の不語なれば不語と名けず。不語と名けざれば無と爲さず。語と名けざれば有と爲さず。即ち是れ不有不無世諦の中道なり。但相待假なるが故に可有を生と説き、可無を滅と説くなり。故に生滅を以て合して世諦と爲すなり。眞諦も亦然り。假の不語なれば不語と名けず、假の非不語なれば非不語と名けず。非不語と名けざれば非不無とも爲さず、不語と名けざれば非不有とも爲

【二諦】以下、二諦合明の中道を明す。

さす、則ち是れ非不有非不無眞諦の中道なり。相待假なるが故に、可有を不滅と説き、可無を不生と説くは、即ち是れ不生不滅なるが故に合して眞諦と爲すなり。

二諦合明の中道とは、假の語なれば語と名けず、假の不語なれば不語と名けず。非語非不語は即ち是れ非有非不有非無非不無二諦合明の中道なり。生滅不生滅の合して明すこと此に類して尋ねべきなり。今明すらく、必ず他に對すべきが故に起る、他は有の有すべき有れば則ち生の生すべき有り、滅の滅すべき有り。生の生すべき有れば、生是れ定生なり。滅の滅すべき有れば滅是れ定滅なり。生是れ定生なれば生は滅の外に在り。滅是れ定滅なれば、滅は生の外に在り。生は滅の外に在れば生は滅を待たず、滅は生の外に在れば滅は生を待たず、生は滅に待せざれば、生は則ち獨り存せり。滅は生を待たざれば、滅は則ち孤立せり。斯の如く生滅は皆是れ自性にして因縁の義、宗に非ざるなり。今は則ち兩らず、有の有すべき無し、空を以ての故に有なり。生の生すべき無く、亦滅の滅すべき無し。但世諦を以ての故に、假名に生滅を説く。假生の生なれば定生に非ず、假滅の滅なれば定滅に非ず。生は定生に非ざれば、滅の外に生滅し、滅は定滅に非ざれば、生の外に滅無し。滅の外に生無ければ滅に由るが故に生なり。生の外に滅無し、生に由るが故に滅なり。滅に由るが故に生なれば、生を獨り存せず。生に由るが故に滅なれば、滅は孤立せず。此生滅は皆是れ因縁假名なり。因縁の生は生なれども而も起らず、所以に不生なり。因縁の滅は滅すとも而も失せず、所以に不滅なり。故に不生不滅を名けて世諦の中道と爲すなり。餘

【次に】以下、世諦、眞諦の生滅、不生不滅を述ぶ。

【次に】以下、二諦合の中道を述ぶ

の句は之に例して尋ぬべし、復具に出さざるなり。

次に明すらく、世諦の生滅に有るに對するが故に、眞諦を不生不滅と名く。所以に空の有を世諦の假生假滅と爲し、有の空を眞諦の假不生假不滅と爲す。此不生不滅は自の不生不滅に非ず、世諦の假の生滅に待して、眞諦の假の不生滅を明す。世諦の假生滅は既に生滅に非ず、眞諦の假不生滅は亦不生滅に非ず。故に不生非不滅を眞諦の中道と爲すに非ざるなり。餘の句の不生は之に例して知るべし。

次に二諦合の中道を明さん、有を世諦と爲さば、生有り滅有り。空を眞諦と爲さば、不生不滅なり。此不生不滅は即ち是れ生滅の不生滅なり。此生滅は即ち是れ不生滅の生滅なり。不生滅の生滅なれば、是れ則ち生滅に非ず。生滅の不生滅なれば、是れ即ち不生滅に非ず。故に生滅に非ず、不生滅に非ず、是れ二諦合明の中道なり。生滅既に關り、餘の句は應に例して解すべし。

又論に、不常不斷を釋する文に言はく、有人は不生不滅を受けず、不常不斷を信ず。成實師、文を釋して云はく、『相續を以ての故に、常に念念に生滅して、自ら顧みざれば斷と爲す、斷常を見るを以ての故に、所以に不常不斷を信ぜず。』廣く破すべきこと前に説くが如し。論に言はく、『有人は不生不滅を受けず、不常不斷を信ず。』とは、一に云はく、不生不滅を受けずとは、即ち是れ不生不滅を悟り、而も不常不斷等に於て未だ悟らず、故に不常不斷を信ずと言ふ。斷常を有と見るを以ての故なり。二に云はく、長安の影法師の云はく、

【不一不異】以下
不一不異に就いて
述ぶ。

『是れ不常不斷を信ぜざるに非ず。但自ら人有りて得悟不同にして、解心未だ遍からず、諸法の不生不滅を知ると雖も、而も未だ不常不斷を悟らず。』前に説くが如し。今謂く、諸法究竟じて不生なれば、理は自ら不滅なり、不生を以ての故に、何んが常有ることを得ん。無常を以ての故に、何んが斷有ることを得ん。若し論の文に望んでは、後の解を勝と爲す。文に言はく、『不生不滅と不常不斷とを聞くと雖も、猶六門は諸法を成すと謂ふは、未だ悟らざるなり。故に若し例せば不生不滅を聞くと雖も、猶六門は諸法を成すと謂ふは、未だ悟らざるなり。故に『大品經』の相行品に云はく、『行亦受けず、不行亦受けず、不行亦受けず、非行非不行亦受けず、不受も亦受けざるなり。』又『成論』の賢聖品に云ふが似如し、作者にあらず信作にあらずと知る等を是を上人と名くるなり。不常不斷とは、若し有を以て有と爲せば、則ち常は是れ實の常なり、斷は是れ實の斷なり。今空を以ての故に、有なれば常なれども常と名けず。斷なれども斷と名けず。世諦は假名に常有り、斷有りと説く。假の常なれば常ならず。假の斷なれば斷とすべからず。即ち是れ不常不常世諦の中道なり。

不一不異とは、然も不一は或は二乃至百千等に對すべし、而るに不異に對すと言ふは一に異なる、之外の二三等は悉く是れ異なり、謂く一異有るなり。但し成論師は假實を明すに一異の義有り、若し有を以ての故に有なれば、即ち是れ實の一異なり。前に破するが如きなり。又論に説くが如し。若し一有りと言はば、應に諸法に成ぜらるべからず、不一を以ての故に手足等の諸分もて、身を成するが如き、何んが異相と言ふを得ん。異相亦不可

【不來不出】以下
不來不出に就いて
述ぶ。

得なり、故に論に破して云はく、若し一には應に芽莖等は別なるべからず。若し穀に芽葉等の別異すべき有りと謂はば、等しく是れ異相なり、何んが樹等の芽葉と名けざらんや。故に知んぬ、異にあらす、亦復一にあらす、故に諸法本來不生なり、何んが一異有ることを得ん。但し一は是れ不一の一なり、異は是れ不異の異なり。假の一は一と爲すべからず、假の異なれば異と爲すべからず、既に一無く異無し、即ち是れ世諦の中道なり。

不來不出とは既に不來と言ふ、則ち應に不去に對すべし、而るに不出と言ふは義に所兼有り、止に此八のみに非ず、則ち應に無量有るべし。不來には則ち應對して不去有り、不出には不入有るに應對して是れ互に擧ぐるのみ。凡そ二の義有り、一には所兼有りて止に八事有るに非ずと示すなり。二には異なりと雖も、而も内に所兼有ることは既に不來有れば則ち不去有り。既に不出有れば則ち不入有り。不生不滅不有不無等の一切諸法相攝門なり。成論と外道の師等との所計の如き、或は言はく、『冥初より來微塵世性等より來る。』と亦初より流水し反去出離する等の如し。今大乘に義を明す、出に由るが故に去なれば、出は即ち是れ去なり。入に由るが故に來なれば、入は即ち是れ來なり。若し來去有りて來去を作すと説かば、即ち實來實去なり。今明すらく、空の來去を以ての故に、來去と名けず、世諦を以て來去を假説すれば、來と雖も來なるべからず。去と雖も去なるべからず。故に來なれども所從無く、去なれども所至無し。故に『金剛般若經』に云はく、『若し如來に來有り、去有りと言はば、是人佛の所説の義を解せず。若し空の故に來去を説くと言はば、

【問ふ】以下、不生不滅に就いて述ぶ。

【但し】對を明すに二義あるを述ぶ

則ち來に所從無し、去なれども所至無し。故に如來と言ふなり。又『淨名經』に云はく、『文殊に對へて言はく、「來の相ならずして來り、見の相ならずして見るや」と。文殊答へて云はく、「居士の言の如く、來は更に來ならず、去は更に去ならず、若し來に所從有らば則ち來り已りて更に來らん」と。若し去に所至有らば則ち去り已りて更に去らん。今來に所從無く、去に所至無し。故に論に云はく、『蛇の穴より出で、鳥の來りて樹に栖む等の如き、是の如き等の相當るを見ず。』故に知んぬ、來出有ること無きなり。

問ふ、『八不の中に何が故に不來不出は是れ法を攝して、所兼有りと云ひて、而も不生不滅等は非なるや』答ふ、『不生不滅等も亦是れ法を攝す、不生の如きは則ち一切の有生等を攝すること皆盡す、不滅は則ち一切の滅無等を收む。此二自足して收攝し悉く盡きぬ。但し得悟の者不同なるが爲に、不生不滅を聞くと雖も、而も不常不斷を信す。故に須らく不常不斷を説くべし、觀行をして周普せしめんと欲するが故なり。今不來不出も亦然り、而も攝法と言ふは若し應に不來は不去に對し、出は即ち入に對すべし、來出既に對せず、故に來を以て去を攝し、去もて入を攝するなり。生滅既に對なり。對なるが故に攝と言はず。不生の外の如き、是の如きの不生豈攝せざるを得んや、須らく此意を得て之を釋すべく尋ねべきなり。

但し對を明すに二義有り。一には對治の不淨觀の食欲を治し、慈悲の願悲を治する等の如き、皆是れ相對治するをもて、對の義を明す。二には相對名味敵對す、大經に言ふが

如し。常に樂ひて諸の對治門を觀察す、謂ゆる苦樂乃至恆不恆なり、恆を應に不暫と不恆とに對すべし、而も除切無きにあらず、亦是れ攝法の意なり。苦樂對義は則ち切なり、止二法を明す、異なる外は是の如く攝せず。若し苦と言ふは不苦と苦に異なる外、是の如きの不苦には義を攝すること則ち廣遠なり。淨と不淨との如き、淨を穢に對する等、一切例して然り。皆除切の意有り、尋ぬべく復法に歷りて辨すべからざるなり。三種の中道を作るに相に多種の勢あれども、意は終に是れ同じ、但方言異なるのみ。今二種の方法もて作る前の所説の如きなり。

問ふ、『何が故に世諦は假生假滅、眞諦は假不生假不滅なるや。』答ふ、『二種の勢有り、一に世諦には性を破して性空を明す、即ち是れ假生假滅なり。眞諦には假を破して因縁の空を明す、故に即ち是れ假不生假不滅なり。』問ふ、『世諦には性を破して性空を明せば、性を世諦の中道と爲し、應に性有を用て世諦と爲すべし。既に假有を以て世諦と爲せば、則ち假空を用て中道と爲すべきや。』答ふ、『今明すらく、別に性空有ること無し、只假を名けて性空と爲す、功用に従つて名を作す、誰か能く此性を空する。假能く此性を空すれば、假は性空を作ると名くるなり。性空邊の故には、即ち是れ中道なり。假の故には即ち世諦と名くるなり。二には、假生假滅は自ら是れ非不生不滅の中なり、假不生假不滅は自ら是れ非不生不滅の中なり。即ち是れ表の義なり。但し横に兩ながら相望すれば、自らはれ因縁の義なり、即ち二執を遣るなり。又攝嶺師の云はく、『假の前に明すらく、中は是

【三】智慧の中道を明す。
 【方便の慧】權智のこと。佛菩薩が方便を以て衆生を眞實の道に導き給ふ智慧。
 【實慧】實智のこと。眞諦の理を達観する眞實の智慧のこと。

【戲論】謬れる見解のこと。愛論見論をいふ。鈍根の人は愛論を起し、利根の人は見論を起す。

れ體中なり。假の後に明すらく、中は是れ用中なり。中の前に明すらく、假は是れ用假なり。假の後に明すらく、假は是れ體假なり。故に非有非無なれども、而有而無なれば是れ體中なり。假有なれば有と名けず、假無なれば無と名けず、故に非有非無なれば、是れ用中なり。非有非無なれども、而有而無なれば是れ體假なり。假有なれば有と名けず、假無なれば無と名けざるは、是れ用假なり。故に用中假は皆能表の教に屬す、假無く中無きは乃ち是れ所表の理なり。

【三】第三に智慧の中道を明す。言ふ所の二智の中道とは、二智とは、是れ方便の慧と及以實慧となり。亦三の中道を具す。實の方便なり。豈方便と言ふべけんや、豈非方便と言ふべけんや。方便の實なり、豈實と言ふべけんや、豈不實と言ふべけんや。則ち是れ二慧に各中道を明す、實の方便なれば、則ち方便に非ず。方便の實なれば則ち實に非ず、實に非ず、方便に非ず、名けて二慧合明の中道と爲す。然も非實非方便を名けて、一の正觀と爲し、非眞非俗を名けて、一の正中と爲す、亦是正境なることを得。故に『金光明經』に云はく、『無量甚深の法性に遊ぶ。但し是れ境の智なれば、是れ則ち智に非ず。既に是れ智の境なれば、是れ則ち境に非ず。智に非ず。境に非ず。眇然として際無し。前に境智を開くと雖も、竟に開く所無し、今智境を泯すと雖も、未だ曾て是れ合ならず。若し能く此の如く演說すれば、即ち能く諸の戲論を滅す、故に亦能く是因縁を説くこと有り。是故に龍樹は敬を致せるなり。問ふ、『何が故に二諦の三種の中道に例して、假方便智なれ

【二縁の故に】凡
聖の二縁を指す。

【順忍違忍】順境
の故に順忍、違境
の故に違忍と名く
【内智】如來の内
智。

ば方便智に非ず。假の實智なれば、實智に非ず。方便に非ず。實に非ざるに中道を明す。假の非方便智なれば、不方便智に非ず。假非實智なれば、不實智に非ず。不方便に非ず、不實智に非ざる合明の中道等にあらざるや。答ふ、「亦得、但多種の勢を示さんと欲するのみ。」又二智中道を明す。然るに諦と智とは前に非ず後に非ず、又一時に非ず。故に諦に非ず智に非ず、諦智因縁は假名にして、不二にして二なり。故に如來は内智は明審にして潜謀密照せり、外に彰にして口に吐くに諦と名くるなり。然も諦は二に非ず、亦復一諦にあらす、此れ二縁の故に二と言ふなり。二諦の中に説くが如し、而も智は能、諦は所なるに由りて、尋ぬるに此智は何に因りてか得ると。亦諦を悟るに由るが故に生ず。故に諦は能、智は所なり。能所因縁にして、不二不二なり。乃ち主は應に波若にして、此能所則ち通ずべきなり。若し佛は自然の人なれば、則ち佛智は是れ能、諦は是れ所なり。若し弟子此に望めば佛の諦は能、論主の智は所なり。然も此能所は復何んが定めん、智生ずることは境に託する諦は則ち境なり。論主の智は能照、境は是れ所照なり。但し此諦は則ち是れ論主の所なり。佛は因に非ず、果に非ざれども、而も如來を名けて果と爲す。波若は因に非ず、果に非ず、假に名けて因と爲す。故に假に名けて説くる所差別不同なり。或は生忍、法忍、順忍、違忍、無生忍等と名く、十地をば亦十忍と名け、三十心をば亦三十忍と名く、即ち是れ一の無量、無量の一等なり。然も二諦に中道を明すは、諦智因縁不二なり。亦前に非ず後に非ざれども、前縁の爲に因縁前後方便の教を聞く。若し内智明審にして、外に

根縁を照すこと無くば何んが能く此諦を吐かん。故に智は能、諦は所なり、但し佛智は空
 ならざるのみ。必ず諦に由るが故に發すれば、諦は能、智は所なり。是れ論主は只諦の能
 を智の所と爲し、智の所を諦の能と見、能所不一不異なりと悟る。二諦既に中道を論ず、
 智に在りて亦中道と名く、事に觸れて悉く得るなり。但し波若は因に非ず、果に非ず、
 佛に非ず、菩薩に非ず。故に假に佛菩薩と名く。佛の菩薩の所行を名けて因と爲し、名け
 て波若と爲す。菩薩の佛の所行を名けて果と爲し、名けて薩波若と爲す。故に無差別に差
 別して因を説いて十地と爲す。始は則ち歡喜より法雲に終るまで、五忍三十心は是れ堅論
 に非ざるなり。波若を至論すれば言の名くべきに非ず、能に非ず、所に非ず、第一義の中
 に行ふを無學の所行と爲す。諸佛は能行なり、行は亦不受、不行は亦不受行、不行は亦不
 受非行、非不行は亦不受、不受は亦不受なり。能説是れ因縁とは正しく二智の中道を明す。
 能説は是れ佛智なり、能く因縁の八不の正教を説くなり。又言はく、是れ論主、佛の正經
 を稟けて、智を生ずれば智は所、諦は能なり。論主は悟を得て智を生ずれば、智は能、論
 は所なり、能く論を造りて經を中ぶるが故に、佛と論主と師弟相成して其道は無異なり。
 即ち是れ如來の室に入りて、如來の座に坐するなり。論主歸敬して、佛能く因縁の正經
 を説きたまへるを稟學して解を得。解は佛に因る。今經を申べ論を造り、三寶に歸敬して
 外道に殊とす。因縁の經は經常にして、從出する所無きなり。諸説中の第一とは、如來
 復種種に法を説いて、常に及ぼして道に合ふと雖も小乘教を説くに、未だ是れ了義の言な

【二智の中道】以下、
【權實】權智、實智を指す。

【凡そ】以下、三種の相對を明す。
【一には】善惡の相對を明す。
【無記】善にも惡にもあらざる性質即ち非善非惡の中間性のこと。

らず。乃ち是れ大乘の由漸なり。八不は顯了究竟の説なるが故に、八不には扱束皆盡きぬ。諸佛は此一致に同じ、故に第一と言ふ。又佛弟子の説、仙人の説、諸天の説、變化人の説は未だ是れ第一ならず。今佛の因縁の教を説きたまふが故に、第一と云ふなり。

二智の中道は、諦に由るが故に智なり。二諦の中道は、智に由るが故に諦なり。所以に諦の智、智の諦なり、諦に非ず智に非ず、假に中道と名く。佛意は權實是れ因縁なり、前に説くが如し。又有人、言はく、論主の能説は下の論を生ず、今亦此言に乖かず、但今佛智明密にして、根縁を變達し能く此二諦の八不の正教を吐いて、諸法因縁一道清淨なりと明すが故に、戲論の門の盡くることを歎ぜんと謂ふ。故に言はく、論を爲りて其意を明すべし。故に佛の圓智能く誠諦の言を説きたまふ。故に是れ智是れ諦なるを顯す。故に龍樹、佛の所爲を學ぶに、智の未だ足らざるが故に、其智諦の名を没するなり。若し未だ波若に應はざるより以來應に所爲有るべし、戲論に非ざる莫し。若し教を解き、理を體すれば能く戲論を滅す。凡夫、二乗の心の所行は戲論に非ざる無く、理外に行する心は戲論に非ざる無し、應に須らく消滅して之を損すべし。

凡そ三種の相對有り、或時には四種なり。一には、善惡相對の惡は是れ墮墜にして理に乖いて出の功無し。故に十惡を戲論と爲す。善は是れ清昇にして理を扶けて出の義有り。故に十善は戲論に非ず。『成實論』に亦云はく、『一等の四執を戲論と爲す。』と。又言はく、『三性の中に善惡は戲論に非ず、無記は是れ戲論なり。何んとなれば善惡の二性には、果の記

【二には】有相無相の相對を明す。
【有相無相】有相とは、心に執著せられたる境界のこと。無相とは、執著を離れたる境界のこと。
【五逆】殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血

【三有】欲界、色界、無色界のこと

すべき有り、故に戲論に非ず。無記は汎淡にして得果の功無し、故に名けて戲論と爲す。今『華嚴經』に依るに、云はく、『唯善は解論に非ず、惡と無記とは並に是れ戲論なり。』惡は亦苦果を得と明せども、但是れ趣向歸理得佛の義に非ず、故に名けて戲論と爲す。唯善法のみ能く佛果を得。故に『大經』に云はく、『復疊華千斤なりと雖も眞金の一两には如かさるなり。』

二には有相無相を相對して之を明す。亦有漏無漏の相對とも言ふなり。有相は是れ分別なるが故に戲論と爲し、無相は無分別なるが故に戲論に非ず。有相の善は還りて戲論に屬す、故に『大品經』に云はく、『相善は不動不出なれば乘と爲さざるなり。』故に『佛藏經』に云はく、『人の爲に有相の法を説く、是れ衆生の惡知識なり。衆生の爲に無相の法を説く、是れ衆生の善知識なり。』有相は理に乖く。故に經に云はく、『寧ろ五逆を起すとも一念も有相の心を起さざれ。』經に此語を作す所以は、相心は理を傷くこと大なるが故に、所以に重なりと明す。實には是れ兩罪盡く重なり。而も五逆を起すものは五逆は但身を損惱して、而も心用を妨げず、理に近くの義を得。有相の心は理を傷くるが故に、理に近く義を得ること無し。故に相善を求むる比丘は則ち佛を遠離す、所以に相心現前すれば定めて波若の義無きなり。五逆の事起ると雖も而も心を用ひて理を見る義を妨げざるなり。有漏は即ち有相、無漏は則ち是れ無相なり、有漏の善は唯三有の果報を得るも、未だ生死を出離すること能はず、正しく是れ不動不出なり。故に戲論と名く。無漏の法は生死を破裂す、故に

【三には】以下、
一異の相對を明す

戲論けろんと名なげざるなり。又地攝成數等の師しは恐おそらくは相善さうぜんを求もとむる比丘びくの宗しゆに落おちん。彼か之しを聞きいて驚怖きやうふせん。而しかも大乘無所得だいじやうむじやくとくの宗しゆを聽ゆるすに人ひと此意このいを見るみのみ、彼師かのしの徒やからは此意このいを覺さること有あること無なきなり。

三さんには、一異相對いちいさうたいにして有相うさうは是れ戲論けろん、無相むさうは戲論けろんに非あらずと言いふと雖いへも、若ちし是れ有相うさうの無相むさうに異ことなれば便たは是れ戲論けろんなり。相無相さうむさうは異ことならずと見る、乃すなはち戲論けろんに非あらずと名なく、乃至乃至、善惡ぜんあく、生死しやうじ、涅槃ねはん、解惑げかく等は並ならびに類るして然しかり。故ゆゑに『大經だいじやうきやう』に云いはく、『明みやうと無明むみやうとを凡たん夫ふは二にと謂いひ、智者ちしやは其性そのしやう無ななりと了達りやうだつす。』故ゆゑに『大品經だいひんきやう』の三慧品さんゑいひんに云いはく、『諸しよの二有にるを有所得うじやくとくと名なけ、二有にること無なきを無所得むじやくとくと名なく。』又『大經だいじやうきやう』に云いはく、『有所得うじやくとくの者ものは道無だうなく、果無くわなし、無所得むじやくとくの者ものは道有だうあり、果有くわありなり。』若しし異いを以もつて非ひと爲なし、不二ふにを是ぜと爲なさば此これ則すなはち不二ふにを識しらず、還かへつて戲論けろんを成じやうす。復また須すならく之これを遣やるべし、一無いちなく二無ふにきが故ゆゑに有時あるときには四法しほふに就つて、四句しきうを行なすことを辨べんず、是れ戲論けろんなり、四句しきうを行なぜざれば則すなはち戲論けろんに非あざるなり。故ゆゑに『反折論はんせつろん』に云いはく、『若し諸法しよほふ有あると言いはば是れ増益ぞうやくの謗ぼうなり。若し諸法しよほふ無なると言いはば損減そんげんの謗ぼうなり。若し諸法しよほふ亦有またあり亦無またなくと言いはば是れ相違さうゐの謗ぼうなり。若し諸法しよほふの非有ひあり非無ひなると言いはば是れ戲論けろんの謗ぼうなり。若し諸法しよほふの非非有ひひあり非非無ひひなると言いはば是れ無慚むざん愧けいの謗ぼうなり。』故ゆゑに『思益經しやくやくきやう』に云いはく、『一切いっせつの法ほふは邪じやなり、一切いっせつの法ほふは正しやうなり。』又『大品經だいひんきやう』に云いはく、『菩薩ぼさつ無なくして、色しきの無常苦等むじやうくとうを行なすれば並ならびに是れ戲論けろんなり。』故ゆゑに凡たを厭えんれ有所得うじやくとくの行心ぎやうしんは波若はにやくに於おいて紛然ふんぜんとして、乖そむけば則すなはち戲論けろんの師しなり。故ゆゑに因緣門いんねんもんの中なかに一も不可

【斷德】一切の煩惱業を斷盡せる徳。

【四】 雜問を明す

得なり。二も亦不可得なり、亦一亦二、非一非二、非不一非不二は皆不可得なり。五句三味の如き、二乘と共にせざる廣大の用なり、故に四對と此三と出無く離無し、何んとなれば諸の有所得は別に住處有らば、其出を論ぜん。今謂く、本自ら住せず、今亦出無く住無し。出無きが故に戲論に非ず。若し戲論の滅すべき有りて、是れ無戲論なりと言はば亦是れ戲論なり。亦是れ戲論なるが故に今明すらく、八不の戲論は止戲論を滅するのみに非ず、不戲論も亦滅す。滅とは是れ小乘斷徳の滅に非ず、此は是れ大乘摩訶衍の淨悟なり。諸法は本來生ぜず、今亦滅せず、畢竟淨なるを滅と名く。故に善と言ふなり。故に戲論は無戲論の論なれば因縁具足せり。方便もて假に不一不二道平等と名くるなり。戲論の善は是れ善巧權行なるが故に善と名く。善とは能なり。問ふ、戲論不戲論は等しく皆滅し、即ち前來の明す所の記無記、乃至不二善惡等、道に望むに悉く非ならば、戲論既に非なり。不戲論も亦是れ戲論なりや。答ふ、須らく之を識るべし、只八不不二の善は是れ戲論に非ず。若し是不二還りて戲論を成ぜば、不二不戲論なりと謂ふには非ず。八不の不するに非ざるよりは、則ち戲論は滅せざるなり。何んが絶の、絶と不絶とを絶するに異ならん、即ち絶無く不絶無し。豈言を以て絶不絶と言ふべけんや。

【四】 第四に雜問。難して問ふ、『八不に中假の二諦を明す、自心の所作なりや、出處有りや。』答ふ、『文有り理有り、文は則ち八不は處處の經論に散出せり。但善薩瓔珞本業經』の下卷に云はく、『二諦の義とは不一亦不二、不常亦不斷、不來亦不去、不生亦不滅なり。』

【身子】 舍利弗のこと。

【問ふ】 以下、八不の佛説に就きて述ぶ。

又『大經』の二十五師子吼品に云はく、『十二因縁不生不滅、非常亦不斷、不一不二、不來不去、非因非果は中論と次第して少異すとも、而も意は同じ。』理とは則ち二諦、是れ教なり。故に假生假滅等は是れ世諦なり。『假不生假不滅は是れ眞諦なり。故に具に中假の義を明すなり。』問ふ、『八不の不生不滅等とは、教の不生不滅なりや。理の不生不滅の不生不滅等なりと爲んや。』答ふ、『具に兩の不生不滅等を含めり、但し理を正と爲す、教は則ち謗なり。』問ふ、『何を以てか之を知る。』答ふ、『彼經の中に八不を列ね竟りて云はく、『相即すれば聖智無二なり、故に是れ諸佛菩薩の智母なり』と、『大經』に云はく、『涅槃の體は有無に非ず、亦有亦無に非ざるなり』と、『大品經』の相行品に身子、佛に白さく、『諸法の實相は云何。有佛の云はく、諸法は無所有なれども是の如く有なり、是の如く有なれども無所有なり、是事不知なるを名けて無明と爲す』と。『中論』に大意を序して云はく、『不生不滅は畢竟空を聞いて便ち二諦を失す。』又四諦品に云はく、『諸法は無生なりと雖も、而も一諦有るなり』と。故に知りぬ、具に中假を含すれども、而も中を正宗と爲し、二諦を傍と爲すなり、具には二諦の中に説くが如し。』

問ふ、『八不は是れ佛説ならば、龍樹『中論』を造る時に即ち經の中の八不を引いて、論の初に安く、非なりと爲んや。』答ふ、『定判すべからず、或は賓伽は經の中を引いて安處せり。或はいふべし、龍樹は經の中の八不を引いて、無畏論の初に序せり。故に注論者は中論の序意の初に安くなり。而も應に是れ釋論の中の八不を牽いて安處するに非ざるべし。大論』

【青目】六世紀頃
の空宗を相承して
中論を註せりとい
ふ。

の中の難處に至りて、即ち中論を指して正觀論と爲し、正觀論の中に説くが如しとなす。故に知んぬ、釋論は中論の後に造れるなり。又亦いふべし、青目は千年の中に世に出でて、中論を注す、或はいふべし、釋論の中の八不を引いて、中論の序意に安處す。問ふ、『釋論の中に正觀論を指すは、何んが必ず是れ中論なるや。』答ふ、『中論の觀法品に云はく、正觀論の稱あり、故に知んぬ、中論は是れ正觀論なり、故に相傳して云はく、中論は是れ釋論の骨髓なり。』問ふ、『八不八非八無是れ一なりや、是れ異なりや。』答ふ、『亦いふべし一なり、亦いふべし異なり、是れ一は眼目の異名なり。異とは八不は中を正と爲す、故に八不には對無し、非等には對有り、故に異なり。』問ふ、『八不の中の不生不滅は兩不と云ふことを得とせんや、得すと爲んや。』答ふ、『既に不生不滅と云ふ、那ぞ兩不に非ざらんや。』問ふ、『不生と復不滅とは兩過を所不と善ふ、所以に兩不と言ふは不生と復不滅と兩過を不と善ふ、故に兩不を論ずることを得、滅を不生を不するが故に應に是れ兩中なるべきや。』答ふ、『雙べて生滅を除く、始めて是れ正中なり。』問ふ、『若し雙べて生滅を除く、方には是れ正中ならば應に生滅を雙べて除くべし、唯是れ一の不なるや不や。』答ふ、『生にあらず滅にあらず、雙べて生滅を不す、所以に一中なり。』問ふ、『若し雙べて除くが故に一の正中ならば、亦應に雙べて二諦を除くが故に、一の正中則ち三種の中無かるべしや。』答ふ、『實に是れ一道正中なり、病を除かんが爲の故に三種の中を辨す。亦執を除くが故に兩不二中並に義を得るなり。』問ふ、『假生なれば生にあらず、假滅なれば滅にあらず、不生不

滅を名けて世諦の中と爲す。假不生なれば不生に非ず、假不滅なれば不滅に非ず。非不生非不滅を名けて眞諦の中道と爲すは、世諦の不生不滅の中と、眞諦の假不生假不滅と若爲が異なるや。答ふ、『假を安いて中の不生等に簡異するが故に則ち殊なり。』問ふ、『假不假は寧が異ならんや。』答ふ、『假生假滅に對して、假不生假不滅を明す。此假不生等は皆是れ不二中道の用なり、假生假滅と假不生假不滅等を除いて不生非不生、不滅非不滅は方にはれ正中なり。故に假不生假不滅は假生假滅の如く、悉く是れ假なり、亦是れ用なり、亦是れ末なり。不生不滅の中は非不生非不滅の中の如く、皆是れ體なり。亦是れ體なり。體用と中假等と開くと雖も蹤跡無く、體に非ず、用に非ず、中に非ず、假に非ずとも、強ひて體用中假等と名くるなり。』

【問ふ】以下、因緣所生の法に就いて述べ。

問ふ、『中論の四諦品に云はく、「因緣所生の法をば、我は即ち是れ無なり、亦是れ假名なり、亦是れ中道なり」と説く、則ち是三義は云何。』答ふ、『此假を明すに多種の勢あり、今一種の意もて之を釋せん、此一偈に三句有り、即ち八不に勝れたり、八不は正しく是れ一中道の句なり。因緣所生と言ふは、是れ因緣所生の生滅の法なり。此所生の生滅は既に因緣より生ず、故に生と爲すべき無く、滅と爲すべき無し、只是れ空の生、空の滅なり。所生既に空なり、能く此生滅を生ずるの因緣も亦空なり、能生所生既に並に無なるか故に、我説は即ち是れ無と言ふなり。故に中論の觀法品に云はく、「生の時は空の生なり、滅の時は空の滅なり」と。涅槃論に云はく、「王宮の生は生なれども、而も起らず、雙林の滅は

【王宮】佛八相中の降生を指す。
【雙林】佛の八相の中の涅槃を指す

【大乘論に】大乘論に依りて因縁所生の義を述ぶ。

滅なれども、而も無にあらざるなり」と。亦是れ假名とは、即ち是れ第三の句は假を以ての故に、能生の因縁有り、假を以ての故に、所生の生滅有り。假生なれば生と名けず、假滅なれば滅と名けざるなり。假の生滅を以て、生滅と名けず。故に即ち是れ第三の句の不生不滅の中道なり、故に亦是れ中道義と云ふなり。

大乘論に義を明すに、二種の法門有り。一に云はく、義次、二に謂く、根縁次なり。義次とは必ず前後相生の始終の次第を須ふるなり、根縁とは疾有れば即ち除き、縁有れば即ち説く、必ずしも前後相生を用ひざるなり。因縁の義を明さば、則ち總なり、若し因縁を識る者をば名けて佛法と爲す。因縁を識らざれば則ち佛法に非ず。故に中論の四諦品に云はく、「若し因縁を見るは、則ち佛と法とを見るなり」と。今外の因縁を破するは、則ち總じて衆病を破するなり。佛の因縁を申ぶるは、則ち總じて佛教を申ぶるなり。故に因縁は論の初に在るなり。」

問ふ、「二諦は亦總じて衆教を收ひ、此中論既に二諦を宗と爲すと言はば、若し學教の流正しく二諦に迷へり。何んが破二諦品に題せざるや。答ふ、「亦得不得なり。得とは、外人の不生不滅畢竟空を聞きて、便ち二諦を失す、二諦を申べんと欲するが故に論を造り、佛の二諦に迷ふが故に諍論を生ず。此が爲に論を造る。亦二諦は論の初に在ることを得。不得とは、二諦は語局れり、因縁は則ち通ぜり、二諦は但是れ二にして不二に非ず。但是れ教にして理に非ざるを以てなり。若し是れ教と理と二と不二と並に是れ因縁なれば、義

は則ち總なり。」

問ふ、『因縁既に總なり、何が故に因縁を以て宗と爲さざる。』答ふ、『二諦を宗と爲す、豈因縁を離れんや、但し諸佛の説法は常に二諦に依る、今正しく外人と共に佛の二諦を争ふ、故に二諦を以て宗と爲すなり。又青目、品意を序して云はく、『因縁は即ち是れ八不なり、八不は即ち是れ因縁なり。八不既に論の初に貫いて亦論の首に標すなり』と。問ふ、『何を以てか八不は即ち是れ因縁なりと知らんや。』答ふ、『偈及び長行並に文證有り。偈には能説は是れ因縁と言ふ、即ち能く八不の因縁を説く。長行に云はく、『因縁相と説く、謂ゆる不生不滅等なり』と。問ふ、『八不は是れ因縁なり、若し因縁を破せば即ち八不を破し、若し八不を申べば、即ち應に因縁を申ぶべきや。』答ふ、『若し因縁は即ち是れ八不なりと體すれば、假にして破すべき無し。但し外人は因縁は即ち是れ八不なりと識らず、八不は自らはれ眞諦、因縁は自らはれ世諦なりとす。彼因縁を解すること僻するが故に、所以に破因縁品といふなり。』

【小】小乗の教法のこと。

【大】大乘の教法のこと。

【一】大事因縁。最も大事なる因縁といふこと。佛が衆生済度の爲に、種種の因縁を結んで此世に出現し給ふをいふ。

問ふ、『龍樹佛教に稱つて申ぶと爲んや、教に稱らずして申ぶと爲んや。若し教に稱つて申べば、佛、前に小を説き、後に大を説けり。今何が故に前に大を明し、後に小を説くや。若し教に稱らずして申べば、即ち是れ顛倒なるや。』答ふ、『四義有り。一には龍樹は佛の本意に稱つて、佛教を申ぶるなり、所以は何ん。諸佛の出世は、一大事の因縁の爲の故なり。謂く、一乗の道なり、但し淺鈍の縁の爲に曲げて小教を爲す、今佛の本意を申ぶるが故に

前に大を申ぶるなり。二には中百兩論互に相開避することを明さんと欲す。百論は前は淺、後は深なり。中論は前は深、後は淺なり。三には佛自ら前に小を説き、後に大を明せり。中論には自ら大乘を説く、實に小を説かんと欲せず、但外人の大乘の觀行を學するに堪へざるが爲の故に、論主更に爲に小乘を説くなり。四には小乘は大乘より出づと示さんと欲す。是故に前は大、後は小なり。問ふ、「因縁の語は通ぜり、故に生と不生とは皆是れ因縁なり。八不は但是れ不生なり、云何が因縁は即ち是れ八不なりと言はんや。答ふ、「八不の不生は此は是れ因縁の不生なり。故に不生は即ち生なることを得。故に中論に云はく、「經の中に説くが如し、若し因縁を見れば即ち法を見ると名く、法を見るは即ち佛を見るなり。若し因縁を見ざれば、即ち法を見ず、法を見ざれば、即ち佛を見ざるなり。此は是れ因縁を借りて不因縁を破するなり」と。故に大經に云はく、「是諸の外道は一法として、因縁より生ぜざること有ること無し」と、佛性は爾らず、因より生ぜず、故に是は不因縁を借りて因縁を破するなり。」

【佛性】 本來自性
 清淨の無爲涅槃に
 して、眞如法性の
 ことをいふ。
 【問ふ】 以下、佛
 性に就きて述ぶ。
 【無因等の外道】
 諸法は原因無くし
 て自然に生ずと主
 張する外道のこと

問ふ、「佛性は既に因縁に非ず、是れ因無しや不や。答ふ、「亦得。故に『涅槃』に、「因無し而も體は是れ果なり」と云ふ、然も佛性は因に非ず。亦果に非ざるなり。故に中論に具に二の義有り、無因等の外道の計を破するが如し。故に十二因縁を説く、此は是れ因を借りて無因を破す。又文の中に四縁生を破す、故に是れ非因縁を借りて因縁を破す、正法に至論すれば、未だ曾て是れ因縁及び不因縁ならざるなり。問ふ、「能説は是れ因縁善滅諸戲論と、

【十二因緣】無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死。
 【四緣】因緣果のうち、緣を四種に分つ。因緣、等無間緣、所緣緣、増上緣。

【六因】六種の因相應因、俱有因、徧行因、異熟因、能作因、同類因。

因緣所生法と、二處の因緣なり。是れ因緣は是れ同なりや、是れ異なりや。『答ふ、一既に兩處と云ふ、寧ぞ是れ同じきを得んや、復は是れ小假名因緣なり、那ぞ異なるを得ん、而も意は同じなり。今大乘に因緣の義を明す、因とは依因習因生因等の如き、並に是れ緣を説いて因と爲す。若し四緣等の如きは皆是れ因を説きて緣と爲す。若し緣は因を緣とすれば、因は即ち是れ緣にして、緣の義は因と爲す。若し因は緣を因とすれば、緣の義亦因なり、故に因と緣とは義通ず。八不の不生不滅等を因緣と爲すと云ふは、但因緣の義は無差別なり。差別して聞いて三の義と爲す。一には、當體に因緣の名を得、只八不は是れ因緣なるが故に。何んとなれば、不生に因るが故に不滅なり。不滅の故に不生なり。則ち八不は是れ因緣なり。只八不の不生等は是れ言説なるが故に、因緣に非ざること無し。故に相當是れ因緣なりと云ふ。八不を名けて因緣と爲す。佛の八不は一切を不するが故なり。二には、八不は是れ因緣の本なるが故に因緣と名く、則ち因緣の空は因緣を壞するが故に、八不は因緣に非ず、既に八不は一切の不生不滅等と亦不因緣と不不因緣とを不す。豈當體は是れ因緣なることを得んや、是故に因緣の本なり。三には因緣を破し已りて名を得、『毘曇』に六因等を辨じて諸法等を明すが如きなり。今明すらく、八不は一切を不す、因緣の法無きことを辨じて、外道の因緣の義を破す、故に因緣と名く。然も備に此三義有り、遂に悟を得ること不同にして、抑洩に淺深の異無きにあらず。具に三義有り、觀因緣品と名くるなり。問ふ、『能説の因緣とは唯邪説是れ戲論なりと障ふるや、邪觀亦是れ戲論なりや。答ふ、一通

【問ふ】以下、戲論、不戲論に就きて述ぶ。

有り不通有り、何んとなれば二にして不一なれば、通なり、不二にして二なれば別なり。』問ふ、『若し通なれば、邪觀は亦是れ邪說なりや不や。』答ふ、『既に未だ邪言ならず、云何が是れ邪說なるや。』問ふ、『若し未だ邪言ならず、未だ是れ邪說ならざるは、亦未だ戲言ならず、未だ是れ戲論ならざるや。』答ふ、『戲論とは、是れ譬を借るの名なり、故に邪觀と名く、道に於て剋獲する所無きこと、小兒の戲論の如くなるのみ。』問ふ、『未だ邪說ならず、已に是れ戲論とは、未だ正說ならずして、已に是れ正說の經なりや。』答ふ、『前の如く無差別の差別なれば、即ち得ず。差別の無差別なれば亦之を明すこと有り、故に『大經』に云はく、『迦葉佛の時に、此經無きに非ず、但し説きたまはざるのみ』と。』

問ふ、『不戲論を以て戲論を止む、亦戲論を以て戲論を止むるや不や。』答ふ、『亦通して得るなり。』問ふ、『若し戲論を以て戲論を止めて、不戲論ならしめば亦應に不戲論を以て、不戲論を止めて戲論を成じ、反決せしむべきや。』答ふ、『兩途既に皆止むと言ふ、故に相與に息めしむ。故に戲論は戲論を止めて、尙不戲論ならしむ。豈況んや不戲論は不戲論を止めて、而して戲論を成さしむるをや。』問ふ、『既に戲論を以て戲論を止めば、即ち言を以て言を止むるや。』答ふ、『得。自ら不聲を以て聲を遮すること有り、自ら聲を以て聲を遮すること有るなり。』問ふ、『若し言を以て言を止め、亦應に相は相を出さずば、病を以て病を治す。即ち應に長を以て長に待すべきや。』答ふ、『相待は相成を論じ、相顯發するに就いて論を爲す。止と治とは去離する所有らしむ、故に此義即ち通ず、所以に例せざるなり。』問

【四顛倒】 正理を顛倒したる四種の見解。凡夫の四種の間の實相なる非常を常、非樂を樂、淨を倒計す。二乗の四倒、涅槃の實相なる常を非常、樂を非樂、我を非我、淨を非淨と倒計す。

【五】 單複の諸句を明す。

ふ、『上に云はく、常無常等の四句並に戲論なれば、四句悉く戲論なりや、不や。』答ふ、『有所得の四句並に是れ戲論なり。無所得の方便もて、四句を説けば、悉く戲論に非ず、亦是れ正説なり。』問ふ、『無所得の四句は戲論に非ざれば、亦應に無所得の顛倒は戲論に非ざべきや。』答ふ、『無所得の假名に四句を説くは、則ち便なり。假にも顛倒を安んずれば、則ち便ならず、何が故に爾る。衆生には顛倒は多く、不顛倒は少なきを以ての故に、若し任せて之を論ずれば、正善具に成算すれども、四顛倒を演説するに即ち倒なり。』問ふ、『若し有所得の四句は皆是れ戲論なり。無所得の四句は、並に戲論に非ざるや。』答ふ、『一往相對して論ぜば、常は是れ戲論なり。無常は戲論に非ず、又無常は是れ戲論なり。常は戲論に非ず、復常無常は俱に是れ戲論なり。非常非無常は戲論に非ず。始終を總括して之を明す。凡そ相心の四句を論ずるに、有所得を成ぜば並に此れ戲論なり。後の方便に就かば皆戲論に非ず、故に反折論に謗と云ふなり。』

【五】 第五に單複中假の義を辨するに三意有り。一には、單の義を明して單複を論ず。二には、複の義を明して單複を論ず。第三には、二諦の單複の義を辨す。初に就いて兩有り。一には正しく單複を明し、二には互に相入を得ることを論ず。今先づ正しく、單複の中假の義を論ぜん。若し偏に假有と説いて、無と説かざるは是れ單假なり。偏に假無と説いて、有と説かざるは亦是れ單假なり。偏に一の非有と説く、是れ單中なり。偏に一の非無と説くは、亦是れ單中なり。雙べて假有假無と説くは、是れ複假なり。雙べて非有非無と説く

は複中なり。問ふ、「何の意もてか、單複の句を明すや。」答ふ、「凡そ二義有り。一には一往利根の人の爲に單假を説き、鈍根の人の爲に複假を説く。利根の人は一を聞いて十を修行す、若し假有と説くを聞けば則ち假無を悟解す、乃至非有と説くを聞けば則ち非無を解す。所以に勞しく具に二義有ることを明さざるなり。鈍根の人は言に随つて、解を得るが爲に、若し具に説かざれば懸に悟ること能はざるが故に、所以に雙べて二義を明すなり。二には鈍根の人の爲に、單假を説き、利根の人の爲に、複假を説く。鈍根の人は圓教に堪へざるを以ての所以に、單の義を説いて其病執を破す。若し利根の人は圓旨を聞くに堪へたり。所以に複假の義を説いて、便ち能く領持するなり。次に互に相入出することを明すに、八句有り。第一には、單假より單中に入る。或は言はく、假有なれば有と名けず。有より非有に入る、無も亦然り。第二には、單中より單假に出づることを明す、或は言はく、非有なれども假に有と説き、非無なれども假に無と説く。第三には、複假より複中に入るを明す。假有なれば有と名けず、假無なれば無と名けず、則ち是れ有無より非有非無に入る無も亦然るなり。第四には、複中より複假に出づることを明す。非有非無なれども有無と説き、非無非有なれども無有と説くことを明す。第五には、單假より複中に入るを明す。或は言はく、有より非有非無に入り、無より非無非有に入る。第六には、複中より單假に出づるを明す。或は言はく、非有非無なれども假に有と説き、非無非有なれども假に無と説く。第七には、複假より單中に入るを明す。有の無なれば則ち有に非ず、無の有なれば

【滅盡定】不相應法の一。二無心定の。一切の心想すべし。滅盡して寂靜となる定にして無色界の第四非想非非想處天に屬する禪定なり。

【第二には】以下復の義に就いて單復を論ず。

則ち無に非ず。第八には、單中より復假に出づるを明す。非有なれども假に有と説き、非無なれども假に無不無と説く。次に然る所以を釋するに二義有り。一には、衆生執實の病を破して、計に隨ひて遣る。所以に遂に多句を成すなり。二には、大士の觀行融通自在にして、滯礙有ることを無きを明す。故に「地持」に云はく、「有無の方便より非有非無に入る」『華嚴經』に云はく、「或は散心の中より起りて滅盡定に入る、滅盡定より起りて散心の中に入る。則ち是れ廻轉總持出入無礙の方便なり。

第二には、復の義に就て、單復を論ず、復に二有り、初に正しく單復を明し、後には出入の義を明す。初には正しく單復中假を明す。假有は是れ世諦なり、假無は是れ眞諦なり、此は是れ單假なり。非有非無は是れ中道なり。此は是れ單中なり。假有假無を二と爲す、是れ俗諦なり。復假なり。非有非無の不二は是れ俗諦なり。復中なり。二不二是れ眞諦なり。是れ復假なり。非二の非不二は是れ中道なり。此は是れ復中なり。正しく非二非不二と言ひて、盡く有無と非有非無との所以に正中なり。次に其所以を明すに二義有り。一往言を爲さば、單中單假は、義を明すこと則ち淺く、復中復假は、義を明すこと則ち深きなり。然る所以は、單の義の二諦は復の義に至る時、還つて俗諦なり。單家の中道は復の義に至る時、還つて眞諦と成る。單家の中道は有無を止めて、未だ不二を盡すこと能はず、復家の中道は二を盡して、復不二を盡すなり。二には、單に義を明す。則ち勝復に義を明

【第三に】以下二論に就いて單複を論ず。

すは翻つて劣なり、然る所以の者は複假の有無は猶是れ單假の有の義なり。複假の非有非無は猶是れ前の單假の無の義なり。又復中の非二非不二は猶是れ前の單中の非有非無の義なり。但前には直に有と言つて便ち有無を攝得し、止無と言ひて便ち非有非無を攝得し、止非有非無と言ひて便ち非二非不二を攝得す、言は略にして意は廣し、所以に勝と爲す。複假の中假は言は廣くして意は略なり、所以に劣と爲す。後に互に相出入することを得るを明すに八句有り。第一には、單假より單中に入る、假有なれば有と名けず、假無なれば無と名けず、非有非無の中道に入るなり。第二には、單中より單假に出づ、非有なれども假に有と説くを俗と爲す、非無なれども假に無と説くを眞と爲す。第三には、複假より複中に入る、假二なれば二と名けず、假の不二なれば不二と名けず、非二非不二の中道に入る。第四には、複中より複假に出づ、非二なれども假に二と説いて俗と爲す。非不二なれども假に不二と説いて眞と爲す。第五には、單假より複中に入る、假有なれば二と名けず、假無なれば不二と名けず、假の有無より非二非不二の中道に入るなり。第六には、複中より單假に出づ、非二なれども假に有と説いて俗と爲す。非不二なれども、假に無を説いて眞と爲す。第七には、複假より單中に入る、假二なれば有と名けず、假の不二なれば無と名けず、二不二より非有非無に入るなり。第八には、單中より複假に出づ。非有なれども、假に二と説きて俗と爲し、非無なれども、假に不二と説いて眞と爲す。

第三に二論に就いて、單複を論ずるに復二有り。一には、正しく單複の義を明し。二には、

出入の義を論ず。正しく明すに復兩有り。一には、俗の單復。二には眞の單復なり。假有は是れ俗の單なり、假無は是れ眞の單なり。複假とは假有假不有は是れ俗諦の複なり、假無假不無は是れ眞諦の複なり。非有を中道と爲すは是れ俗諦の單中なり。非無を中道と爲すは是れ眞諦の單中なり、非有非不有は是れ俗諦の複中なり。非無非不無は是れ眞諦の複中なり。第二には、之に出入することを明すに三有り。一には俗を明し、二には眞を明し、三には交絡を明す。先づ世諦に約して八句有ることを明さん。第一には、俗諦の單假より俗諦の單中に入る、假有なれば、有と名けず、即ち有より非有に入る。第二には、俗諦の單中より俗の單假に出づ、假に非有を説いて有と爲す。第三には、俗の複假より俗の複中に入る、假有假不有なれば、非有非不有なり。第四には、俗諦の複中より俗諦の複假に出づ。云はく、非有非不有を假に有非有と説く。第五には、俗諦の單假より復中に入る、假有なれば有に非ず、假有なれば非有に非ず。第六には、俗諦の複中より單假に出づ。非有非不有を説いて一の假有と爲す。第七には、俗諦の複假より單中に入る、假の有非有は非有に入る。第八には、俗諦の單中より複假に出づ、非有を假に有非有と説く。第二に眞諦に就いて、亦八句有ることを辨せん。第一には、眞諦の單假より單中に入る、假無なれば無と名けず。第二には、眞諦の單中より單假に出づ、非無を假に無と説く。第三には、眞諦の複假より複中に入る。云はく、假無假不無なれば非無非不無なり。第四には、眞諦の複中より複假に出づ、云はく、非無非不無を假に無不無と説く。第五には、眞諦の單假より

複中に入る、假無なれば無に非ず、假無なれば無に非ず。第六には、眞諦の複中より單假に出づ、云はく、非無非不無を假に説いて無と爲す。第七には、眞諦の複假より單中に入る、云はく、假無假不無より一の非無に入る。第八には、眞諦の單中より複假に出づ、云はく、非無を假に無不無と説く。第三に二諦の交絡に約して、出入を明すに十二句有り。第一には俗諦の單假より眞諦の單中に入る、云はく、假有なれば無と名けず、有を壞して非無に入る。第二には、眞諦の單中より俗諦の單假に出づ、云はく、非無は有に乖かざれば有と名けず、無を壞して非有に入る。第三には、眞諦の單假より俗諦の單中に入る、云はく、假無なれば有と名けず、無を壞して非有に入る。第四には、俗諦の單中より眞諦の單假に出づ、云はく、非有は無に乖かざれば、非有を假に無と説く。第五には、俗諦の複假より眞諦の複中に入る、云はく、假の有は非有より非無非不無に入る。第六には、眞諦の複中より俗諦の複假に出づ、云はく、非無非不無を假に有と説く。第七には、眞諦の複假より俗諦の複中に入る、云はく、假無假不無なれば非有非不有なり。第八には、俗諦の複中より眞諦の複假に出づ、云はく、非有非不有を假に無不無と説く。第九には、眞諦の單假より俗諦の複中に入る、云はく、假無なれば有と名けず、亦不有と名けず、即ち是れ非有非不有なり。第十には、俗諦の複中より眞諦の單假に出づ、云はく、非有非不有を假に説いて無と爲す。第十一には、俗諦の單假より眞諦の複中に入る。云はく、假有なれば無と名けず、亦不無と名けず、則ち是れ非無非不無なり。第十二には、眞諦の複中より俗諦の單假

【六】 不有の有を明す。

【諸法實相】 萬有のありのままのすがたには、相對と絶對との二面ありて、相對的方面よりいへば萬有互に異なれども、絶對的方面よりいへば萬有みな平等にして對なり。而してこの二面は全く同一にして、相對同一のままで絶對そのままで絶對なれば一色一香といへども皆虚妄のものなしといふこと。

に出づ、云はく、非無非不無を假に説いて有と爲す。

【六】 第六に不有の有を料簡す。若し單複の諸句を了すれば、則ち不有の有の義を解す。

若し單複を了せざれば、不有の有亦解し難し。故に須らく廣く辨ずべし。此意は兩大經の宗に望みて之を明す。一經は無の所有を宗と爲す、故に經に云はく、『正法の寶城は善有なり。一經は有の所無を宗と爲す。』故に大品の第三卷 相行 品に云はく、『身子、佛に白して云はく、『諸法の實相は云何』佛の言はく、『諸法無所有なれども是の如きの有、是の如きの無所有、是事不知なるを名けて無明と爲すなり』不有と有と若し相對せば、解釋するに十六の意有り。第一には、不有の有とは其道非有非無なりと明せども、結して有と爲す。故に不有の有と言ふ。然るに只正道を結んで有と爲し、其用を論せず。體に二相無きが故に、若し結して有と爲せば、結して無と爲すを得ず。結して無と爲せば、結して有と爲すを得ず、此は是れ結獨の義なり。只道は有に非ず復無に非ず、是れ有に非ざれども而も結して有と爲す、故に不有の有と言ふなり。不無の無に約して類して然るなり。第二には、不有の有とは假の上に就て之を明す。三假の有は、是れ不有の有なり、假有は是れ有の故なり。今の假有は是れ不有の有なり。第三には、不有の有とは、道は有に非ず無に非ず。而も側に出すが一用を出すが故に不有の有と言ふ。然も道は有に非ず、而も起用は應に雙びて起るべし、而も但一用を起すが故に、側に出すと云ふなり。不無の無も亦然り。第四には、不有の有とは、明すらく、用は假有にして是れ有に非ず、故に不有と言ふ。用を結

して體に歸す、體は是れ有なるが故に今は不有の有と言ふなり。此は前の體の上うへに約やくして不有の有と言ふに異なるなり。亦第三の體有是れ有にあらざれども、而も一の有の用を起すにも異なるなり。此れ但し不特を以て用と名く、用は是れ有なるにあらず、而も體は是れ有なるが故に不有の有と言ふなり、不無の無は之に類せよ、第五には、不有の有は有執を破せんが爲の故に、執者は有は是れ有なりと謂つて、不有を有と爲すを知らず、故に今破者は、有は有に非ざるが故に有なり、乃ち是れ不有の有なりと明す。此は是れ有を以て有を破するなり。但し能破は是れ不有の有なり、所破は是れ有の有なり、不無の無に約して類せよ。第六には、不有の有とは、無執を破するが爲なり、法は是れ無なりと執す。今不有の有を以て之を破す、若し有の有を以て無を破せば、此れ乃ち是れ敵の義なり、故に執して去らず。今不有の不有を以て無を破するに、無にして而も去ることを得。故に不有の有と言ふ。不無の無も亦爾り。第七には、不有の有とは一切有を破す、若は有の有、若は不有の有は皆不特を以て之を不す。故に不有と言ひ、而して一切の有の用を起す。若は有の有、若は不有の有は用と爲すが故に、合して不有の有と言ふ。不無の無、亦類せよ。不特を以て一切の無を不す、故に不無と言ふ。一切の無を起すを用と爲す、故に合して不無の無とす。第八には、不有の有とは、重進して義を明す、不有を明すは則ち一切の有、一切の無を不す、合して空するが故に不有と言ふ。一切の有、一切の無を起すを用と爲す、故に合して不有の有と言ふ。不無の無も亦爾り。不無は一切有無を不するを以ての故に、不無と言ふ。一

一切の有無を起すが故に不無の無と言ふ。然も一切の有無の用を起す、此用は應に是れ有なるべし、何んが是を無と言ふを得ん、然も今本に望んで言を爲す、此有無は不有無より起るが故に此れ有無なり、故に是れ無なり。又他より起る所皆無體なり、故に是れ無なり。第九には、不有の有とは、横門に義を明す、有自ら有にあらず、無を以て有と爲すが故に、不有の有と言ふ、然も無を以て有と爲すが故に、是れ不有を以て有と爲すなり、故に不有の有と言ふ、不無の無も亦類せよ。有を以て無と爲すが故に不無の無と言ふ。第十には、不有の有とは只不特を以て、此有の有を不すが故に、不有の有と言ふ。前の合用の不有の有が有の有を破するにも異なり、前の不特を以て、一切の有をば無に合して一切の有無を起すを以ての故に不有の有と言ふにも異なり。今は但單に一の不特を用ひて、此有の有の執を不して盡さしめて、而も起さしめず、故に不有の有と言ふなり。不無の無も亦關るなり。第十一には、不有の有とは、合して八意を具することを明す。何者をか八意と爲ん。一には不有の有は非有に屬す。一には不有の有は非無に屬す。一には不有の有は非亦有亦無に屬す。一には不有の有は非非有非非無に屬す。一には、不有の有は有に屬す。一には不有の有は無に屬す。一には不有の有は非非有非非無に屬す。一には不有の有は亦有亦無に屬す。一には不有の有は非有非無に屬す。何んとなれば初に不有の有と言ふ、豈是れ有なるべけんや、是れ有に非ざるが故に非有に屬するなり。第二に不有の有は是れ無にあらずるが故に非無に屬す。第三に不有の有は既に是れ有無にあらずるが故に、亦有亦無に屬せず、故に非亦有亦無に屬すと云ふなり。

第四に不有の有は非有無に屬せざるが故に、非非有非非無に屬すと言ふ、然も不有の有は
 廻ち有無の二句に屬すべし、豈是れ有無に非ざらん、故に非非有非非無と言ふなり。第五
 に不有の有は有に屬すとは不有を以て有と爲す、豈是れ有ならずや。第六に不有の有は無
 に屬すとは、只不有を以て有と爲す、此れ本に望むが故に是れ無なり。第七に不有の有の
 亦有亦無に屬すとは、既に雙べて不有の有を明す、豈是れ亦有亦無にあらずや。第八に、
 不有の有の非有非無に屬すとは、不有の有なれば有と名けず、不有の有なれば無と名けず、
 故に非有非無と名く。故に此一章門の中に、合して八意を明す。正しく八意相次第する爲
 の故に煩しく離して明さず。而も前の十章は合して説くべからず、故に離して辨するな
 り、不無の無亦是の如きなり。第十二に、不有の有の兼用を明すとは、不有の有の故に斷
 過を離る。何んとなれば若し不有にして復有ならずば是れ斷なるべし、今に不有の有なる
 が故に斷過を離る。亦常過を離るとは、若し有を以て有と爲せば是れ常過なるべし。今は
 只不有を有と爲す。故に常過を離る。是の如く一異、有無、是非、即離等の過は皆免れぬ。
 不無の無も亦爾り。第十三に、不有の有に若し諸法を攝せば、有に得因得果一切の法等を
 攝す、故に不有の有と言ふ。不無の無も亦然り。第十四に、不有の有は諸法に類すとは、
 不有の有は既に上の十意八意及び相益相攝等を具す。不因の因、不果の果は是の如し。不
 常不生等一法なりと雖も皆上の意を具す。故に謂ふべし、是の中に無量を解し、無
 量の中に一を解す。是の如く展轉して非實の智を生ずるは即ち畏るる所無きなり。第十五

に、不有の有得失の意とは、經に試みに問ふが如し。答へて、諸法不有の有なりと言ふを、即ち得と爲す。即ち五義を具す。一には不二の義を得、二には不自假名の義を得。三には相待の義を得、四には無所得の空の義を得、五には中道の義を得るなり。若し答ふる者諸法是れ有を有と爲すと言はば、即ち五義を失す。故に不有の有は道非道の義を判するなり。不無の無亦類せよ。第十六には、不有の有離門は義を明すとは、向に合して不有の有と言ふ、今、有時は、復須らく單に不有と言ひ、有時は應に須らく單に有と言ふべきなり。今此中に單に不有と言ふは、此れ有の義を明さんと欲するが爲なり。何んとなれば我不を以て此有を不して以て此有を不せず、故に不有は是れ有なることを得。若し不を以て無を不せば、是れ無ならしむべし。而も今不を以て有を不するが故に、只不有是れ有なり。事小乘に義を明すが如し。色は即ち是れ好なれば此色は非好なるべからざるが故に、不有是れ有なる義を得。此義を得るが故に聞いて破を畏れず、訶を得て瞋等ならざるなり。

【次に】以下、有を破するの主義を論ず。

次に有と言ひ反つて有を破するの義を成ずることを得。何んとなれば我本有を破するが故に有と言ふ、世人惡を耐ばずして惡と言ふが如き、此惡の言は豈此惡を除かしめざらんや。今の有も亦然り。我此有を耐ばず、故に有と言ふ、豈此を破せざらんや。又直に有と言つて有の因縁を説くに、故に是れ破有の義なり。單に無と言ふも亦然り。次に單に有と言ふは則ち是れ中道なり、有は方に是れ中道に非ずと言ふを得ず。何んとなれば直に有と言ふ。是れ是非の有亦此有の有に非ず。此有既に是是の有、復非非の有に非ず、豈是れ中

【次に】以下、性空の意を釋す。【性空】一切の諸法は因縁和合に依りて生じたるものにして、その實性は空無なりといふこと。

道に非ざるか。又有の故に自ら是非有り、我直に有と言つて其れ是と言はず、復非と言はず。故に此有は即ち是非を離れたり、故に是れ中道なり。若し有は是非を離ると雖も、而も此有るが故に中道に非ず、汝中道は有無を離ると雖も、而も此中に有るが故に、是れ中道なるを得ば、何んが我有是非を離るるが故に是れ中道なるを得るを妨げんや。且自ら我直に有と言ひて亦此有を有と言はず、知んぬ此有無し。故に是れ中道なりと言ふ、單無も亦然るなり。次に單に有を明すに、一切の諸法を具足す、何んとなれば此有は是れ無の所有なるが故に若し有の所無ならば、即ち一切の法を失す。今は是れ無所有を有と名く、故に一切の法を具足す。單に無と言ふも亦然り。但し是れ無所得の故に無と言ふ。此無は豈一切の法を具足せざらんや。

次に性空の意を釋せば、然も有無なるが所以に諸法有ることを得。意無礙なりとは、正しく有の性空に由るが故に爾り。今須らく性空を釋すべし、亦是れ多意あり、但八意を辨ぜん。一には、本性は是れ空なりと明す、但縁に遇ふが故に有なり。有止めば本性に還るが故に、性空と言ふなり。二には、本性は是れ空なりと明せども、而も末は是れ假有なり、是の如きの意の故に性空なり。三には、一本性常に空にして不空の時有ること無し、故に性空と言ふなり。四には、只因縁の諸法は是れ空なりと明す、故に性空と言ふなり。五には、性有を破して此空を得るが故に性空と言ふなり。六には、無性の法を破して此法は止空のみにして性有りと明す、故に性空と言ふなり。七には、無が所有の法なれば性は是れ空なり

と明す、故に性空と言ふなり。八には、有が所無の法なれば性空なるが故に性空と言ふなり。今、略して八意の異相を明す、而も大意は異なること無し、但是れ一の性空なり。是の如きの諸法の性空は義に隨ひて便ち用ふ。一を用ひて即ち之を度して須らく意を得べし、空の中に羅紋を織るが如きなり。性空既に爾り、畢竟亦然なり。次に性空に因りて得失待不待を辨する義を明す。此性空を失するが故に失なり、失は得に待せず、性空を得るが故に得と爲さば、得は即ち失に待せず。何んとなれば正しく得失反するが爲の故に失既に得を失す、故に失は得に待せず、得は失を得、故に得は失に待せず、此れ分際ぶんげいの義なり。第一に須らく意を得べし、最も急事なり。中道は假を絶するが故に假に待せず、假は絶せざるが故に、假、中に待するが如きなり。次に劍閉の意を辨ぜん、然も得失は劍閉けんぺいに由るが故に、須らく釋すべきなり。但し劍閉は自ら横堅有り、判するに自ら一の望有りて取る。横は開を能と爲す、堅は即ち斂なり。菩薩諸行を習行する、道に望すれば即ち是れ自行、是れ斂なり。若し衆生に望すれば即ち是れ化他亦是れ能なり、但し他を化せざる時も、是れ化他なり、只自行は即ち是れ化他なり。是の如く不有の有は病藥相治去留成壞理内外有無得反順等の種種の用有り、具に列ぬべからず。大意是の如し。問ふ、『既に不有の有に多種の勢力有らば、不有に亦他種の勢ありや不や。答ふ、亦得、假有還りて有の不有に結するなり、又假有不有は理を表し體を結するなり、餘は例して尋ぬべし。』

大乘玄論 卷第三

胡吉藏撰

佛性義十門

一には大意門。二には明異釋門。三には尋經門。四には簡正因門。五には釋名門。六には本有始有門。七には内外有無門。八には見性門。九には會教門。十には料簡門。

【一】 大意を明す
【六味】 苦味、酸味、甘味、辛味、鹹味、淡味。

【佛性】 因果に通じて而も因果に味まされざる眞如法性を云ふ。

【二】 異釋を明す

【正因佛性】 一切の衆生が具へたもてる眞如の理、これ正しく佛となるべき本性なり。

【一】 甘藥、山に停まりて由來已に久し、圓珠、水に沈みて實自ら時積れり。其流處に隨ひて六味同じからず、鏡うて瓦石を捉へて、三乘、異を成せり。謬りて羊角の刀と言ひ、復如縛の像に據る、敢て佛意を承け、弱言を經布せり。庶くは影の鏡中に現ずることを得て、面還りて所を得ん。少して郷土を失するを名けて弱喪と爲し、本に反ることを知らざるを稱して無明と曰ふ、識を蕩して原に還るを目けて佛性と爲す。

【二】 異釋の第二。古來相傳して佛性を釋すること不同なり、大きに諸師有り、今正しく十一家を出して以て異解と爲す。十一師に就いて皆名字有り、今は復據列せずして直ちに其義を出すのみ。第一家に云はく、衆生を以て正因佛性と爲す。故に經に正因と言ふは謂く、諸の衆生なり。緣因とは、謂く、六波羅蜜なり。既に正因と言ふは、謂く、諸の衆生なりと。故に知んぬ、衆生を以て正因佛性と爲す。又一切衆生に悉く佛性有り

【緣因】緣因佛性のこと智慧を縁助して益益明ならじむる六度等の修行【六波羅蜜】布施持戒、忍辱、精進禪定、智慧。佛の【無上菩提】佛の最上なるが故にいふ。

と言ふ、故に知んぬ是れ正因なり。第二師は六法を以て正因佛性と爲す。故に經に云はく、『不足六法不離六法。』と。六法と言ふは、即ち是れ五陰及び假人なり。故に知んぬ六法は是れ正因佛性なり。第三の師は心を以て正因佛性と爲す、故に經に云はく、『凡そ心有るは、必定じて當に無上菩提を得べし。』と、心識は木石無情の物に異なるを以て、研習すれば必ず成佛することを得。故に知んぬ、心は是れ正因佛性なり。第四の師は、冥傳不朽を以て、正因佛性と爲す、此釋は前の心を以て正因と爲すと異なる。何んとなれば今直に神識に冥傳不朽の性有りと明す、此用を説いて正因と爲すのみ。第五の師は、苦を避け業を求むるを以て、正因佛性と爲す、一切衆生は避苦求樂の性有らざる無し、實に此避苦求樂の性有り、即ち此用を以て正因と爲す。然も此釋復前の心を以て正因と爲すの説に異なるなり。今は只避苦求樂の用を以て正因と爲すのみ。故に經に云はく、『若し如來藏無くば苦を厭ひ涅槃を求することを得ず。故に知んぬ、避苦求樂の用を正因佛性と爲すなり。第六の師は、眞神を以て正因佛性と爲す、若し眞神無くば那ぞ眞佛を成ずるを得ん。故に知んぬ、眞神を正因佛性と爲すなり。第七の師は、阿梨耶識自性清淨心を以て、正因佛性と爲すなり。第八師は、當果を以て、正因佛性と爲す。即ち是れ當果の理なり。第九の師は、得佛の理を以て正因佛性と爲すなり。第十の師は、眞諦を以て正因佛性と爲すなり。第十一の師は、第一義空を以て、正因佛性と爲す。故に經に云はく、『佛性とは第一義空と名く。故に知んぬ、第一義空を正因佛性と爲すなり。但し河西の道朗法

師は曇無讖法師と共に「涅槃經」を翻じて、親しく三藏を承け、「涅槃の義疏」を作りて佛性の義を釋するに、正しく中道を以て佛性と爲せり。爾後諸師皆即法師の義疏に依りて、涅槃を講じ乃至佛性の義を釋することを得。師心に自ら作りて、各異解を執し悉く皆涅槃所破の義を以て、正解と以爲り、豈是れ經の中に喩ふる所の解象の殊に非ずや、象を離れずと雖も一人として象を得る者有ること無し、是故に應に須らく破洗すべし。

今一に問はん、若し立することを得ば、以て正因と爲すを得べく。義若し成ぜざれば豈邪因を取りて、正因と爲すにあらずや。大いに略して言はば、十一家有り。其間細論すれば更に諸釋有り。今時に用ふること有る者無きが故に、復之を出さず。然も十一家大いに明すに三の意を出でず。何となれば第一家は衆生を以て正因と爲し。第二は六法を以て正因と爲す。此兩釋は假實の二義に出でず、衆生を明すなり。即ち是れ假人なり。六法とは即ち是れ五陰及び假人なり。次に心を以て正因と爲し、及び冥傳不朽避苦求樂及以眞神阿梨耶識、此五解は、復體用眞僞不同なりと雖も、並びに心識を以て正因と爲す。次に當果と得佛理、及眞諦と第一義空と有り。此四家は並びに理を以て正因と爲すなり。今次第一に須らく之を破すべし。第一師の衆生を以て正因と爲すは今只問はん、何者か是れ衆生にして、此を以て正因と爲すと言ふや、經に云はく、「若し菩薩に我相人相衆生相有れば、則ち菩薩に非ず。」又言はく、「如來は衆生は即ち衆生に非ずと説き、正因をば本菩薩と爲せり。」經に既に説いて、「衆生相有るは即ち菩薩に非ず。」と言ふ、寧ぞ衆生を以て正因と爲

すを得んや。故に知んぬ、衆生有るは皆是れ妄想なり、何んが妄想顛倒を以て正因と爲すを得べきや。又若し衆生を以て正因と爲さば只問はん、昔日初教に已に衆生有りと明すや不や。若し初教に已に衆生有りと明さば、便ち應に初教に已に正因佛性を明すべし。彼釋して言はく、「所教に已に衆生を明せども、但し未だ正因と爲すと説かず。若し爾れば後教に衆生を説いて、正因と爲すは還りて初教の衆生を指し、以て正因と爲すや不や。若し爾れば初教の衆生理の中に已に是れ正因なり。若し理の中に已に是れ正因ならば、則ち理中に已に佛性を明すなり。若し初教に已に佛性を辨ずと言ふべからずとは、云何が衆生を以て、正因と爲すや。又汝經を引いて一切衆生に悉く佛性有りと云ふ。故に知んぬ。衆生は是れ正因佛性なりとは、然らざるなり。既に衆生に佛性有りと云はば、那ぞ衆生は是れ佛性なりと言ふを得んや。若し衆生は佛性なりと言はば、一切衆生は悉く佛性有り、一切佛性悉く佛性なりと言ふを得べけんや不や。若し得ざれば、故に知んぬ、衆生と佛性とは異り有り。衆生は佛性と云ふを得ざるなり。

又第二家を難ぜん。經に云はく、「佛性とは不即六法不離六法」と。此は是れ何なる語か。横に之を引いて、此文即ち佛性を明すと。是れ六法に即するに非ず、復是れ六法を離するに非ず、何の時に六法は是れ佛性なりと明すや。若し不離六法と言ふが故に六法は佛性なりとせば、復不即六法と言ふが故に六法は是れ佛性に非ざらん。此語若爲が通するを得ん、明に知んぬ、解せずして經を讀むを以ての故に、所以に謬を致すのみ。

次に中に五家有るを問はん、復五解の言は異にして或は體或は用なりと雖も、而も皆是れ心家の體用なり。前の第三家の、心を以て正因佛性と爲すは然らず。經に云はく、「心正因佛性なりと言はんや。時に此の如きの謬り有らんことを畏るるが故に、即ち下の經に云はく、「心は是れ無常、佛性は常なり。故に心は佛性に非ざるなり。經に既に分明に心は佛性に非ずと言ひ、而も強ひて是と言ふは豈佛と共に謬ふに非ずや。心既に成ぜず、心家の諸用冥傳不朽避苦求樂等悉く皆同境なり。『大涅槃經』に處處に皆佛性を明せり、是故に時人佛性を解る者悉く涅槃を引いて證と爲せり、何の處の文にか、冥傳不朽避苦求樂を正因佛性と爲すと辨するや。」『勝鬘經』に云はく、「若し如來藏無くば、苦を厭ひ涅槃を樂求すことを得ず。」とは、此れ正しく如來藏佛性に由るが故に、所以に衆生の、苦を厭ひ樂を求めんことを得と明す、何の時か厭苦求樂は是れ正因佛性なりと明すや。彼師云はく、當果を指して如來藏と爲す、當果の如來藏有るを以ての故に、所以に衆生、苦を厭ひ、樂を求むるを得と云ふは然らず、性品に云はく、「我とは即ち是れ如來藏なり。如來藏とは即ち是れ佛性なり。佛性は本來と有り。貧女の寶藏の如くなり。」と明す。何んが勞しく、當果を指して如來藏と爲し、且當果の體猶尙未だ有らざれども、而も能く衆生をして苦を厭ひ樂を求めしむとするや。豈是れ漫語の者に非ざらんや。若し人に據りて證せば、舊來誰か此の如きの釋を作る、此は是れ光澤法師一時に推畫し此の如きの解を作れり。經

【五眼】肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼。

【摩訶衍】大乘のこと。

【師資】師弟に同じ

に證句無く師の傳ふる所に非ず。故に用ふべからざるなり。

乃至第八阿梨耶識も亦佛性に非ず、故に『攝大乘論』に『是れ無明の母、生死の根本なり』と云ふ。故に知んぬ、六識七識乃至八九より設使、百千無量の諸識あるも皆佛性に非ず、何を以ての故に。皆是れ有所得にして、五眼の見ざる所なるが故に。次に第三四家有り。並びに理を以て正 因佛性と爲す、小異無きにあらず。前の兩家は當果と得佛との理を以て正 因佛性と爲すは、言はく是れ世諦の理なり。次に兩家有り眞諦と第一義空とを以て正 因佛性と爲すは、此は是れ眞諦の理なり。第一義空を以て正 因佛性と爲すは、此は是れ北地の摩訶衍師の用ふる所なり。今問はん、若し涅槃の文に據りて第一義空を以て佛性と爲さば、下の文に即ち空と言ふは、空と不空とを見ず、名けて佛性と爲すなり。故に知んぬ、中道を以て佛性と爲して空を以て佛性と爲さざるなり。眞諦の佛性と爲すとは、此は是れ和法師小亮法師の用ふる所なり。今問ふ、『眞諦を佛性と爲すは何の經に出づる所ぞ、是れ誰にか承習する。師資有ること無く、亦證句無し。故に用ふべからず、當果を正 因佛性と爲すは、此は是れ古舊の諸師多く此義を用ふ、此は是れ始有の義なり。若し是れ始有ならば即ち是れ作法なり。作法は無常なり、佛性に非ざるなり。得佛の理を佛性と爲すとは、此は是れ零根僧正の用ふる所にして、此義最も長ぜり。然も闕けて師資相傳無し。學問の體要す須らく師に依りて承習すべし。

今問ふ、『得佛の理を以て正 因佛性と爲すとは、何の經に明す所ぞ、承習是れ誰ぞ。』其

師既に心を以て正、因佛性と爲せり。而も弟子は得佛の理を以て正、因佛性と爲すとせば、豈師に背いて自ら推書を作るに非ずや、故に用ひざるなり。通じて十一家を論ずれば、皆得佛の理を計りて、今總じて得佛の理を破す。義は十一の解に通じて、事既に廣し。宜く三重を作りて之を破すべし。第一には、有無の破を作り、只問はん、得佛の理は、當に有と爲んや、此理當に是れ無なりと爲んや。若し是れ有なりと言はば、有は已に事を成す、理と爲すと謂ふに非ず。若し是れ無なりと言はば無は即ち理無し、即ち二邊に墮して理と言ふことを得ざるなり。第二には、三時の破を作り、只問はん、得佛の理は是れ已理なりと爲んや、是れ未理なりと爲んや、是れ理、時に理有りと爲んや。若し已理なりと言はば則ち理已なれば用ひられず。復理有ること無けん。若し未理なりと言はば、未理の故に未有ならん。若し理時に理有りと言はば、若し法已に成ずれば則ち是れ已なり。若し法未だ有らざれば則ち未に墮す。故に別の第三の法を稱して理と爲すこと無し。第三には、即離の破、只問はん、得佛の理は當に空に即すと爲んや、當に空に離すと爲んや。若し空に即すと言はば早已に是れ空なり、復理有ること無けん。若し空を離れて此理有りと言はば空は離すべからず、豈空を離れて理有りと言ふを得ん。又空を離れて理有りと、則ち二見を成ぜよ。經に云はく、『諸有の二は道無く果無し』と。豈二見顛倒を以て正、因と爲すべけんや、此三條を作りて推求するに不可得なり。唯四衆の義の壞のみに非ず、十一の計に通じて皆碎けん。

問ふ、「他を破することは闡るべし、今の時何者をか正因と爲んや。」答ふ、「一往他に對せば須らく併せて反すべし、彼れ悉く有と言はば、今は則ち皆無なり。彼衆生を以て正因と爲すを、今は非衆生を以て正因と爲す。彼六法を以て正因と爲すを、今は非六法を以て正因と爲す。乃至眞諦を以て正因と爲すを、今非眞諦を以て正因と爲す。若し俗諦を以て正因と爲すを、今は非俗諦を以て正因と爲す。故に非眞非俗の中道を正因佛性を爲すと云ふなり。藥を以て病を治するには、則ち此説を須ふ。他に對しては雨りと雖も、又須らく横堅に之を論すべし。故に此非衆生の義に淺有り深有り。横に論ずれば藥と爲す、則ち向に辨ずるが如し。堅は則ち道に望む、只非衆生等は即ち是れ正因なり。若し是と言はば是れ是に非ず、亦何者の非衆生をか衆生と説かんや。但し非衆生を衆生と説く、此衆生豈其れ是有と言ふべけんや。豈其れは無と言ふべけんや。豈其れ是れ亦有亦無非有非無と言ふべけんや。若し此衆生を識らば、何爲れぞ正因に非ずと問はん。乃至六法眞諦の義も亦此の如し。若し徹了深悟すれば、此れ則ち正因佛性義已に具足せり、前は是れ横論の一重、此は復是れ堅論の一重、便ち兩重を成して正因の義を論するなり。」

【三】 尊經を明す
 【聲聞性】佛の教誨の聲を聞きてさとることの出來る性と云ふこと。
 【群支佛性】獨覺ともいふ。飛花落葉等によりて無師獨悟することの出來る性と云ふこと。

【三】 尊經第三 既に佛性を識る。應に須らく遍く衆經を讀むべし。由來舊く辨ずらく、阿含經の中に亦佛性を明す。但小妨有るのみ。故に一切衆生に悉く聲聞性有り、悉く群支佛性有り、悉く佛性有りと云ふ。阿含既に雨り其餘の諸經も佛性を説く語は有り、但甚だ分明ならず、是の如く衆經に佛性を明すも、亦復何んが嫌はん。故に新に「金光明經」に

【隨喜】 他人の善因を修し善果を得るを見てよろこぶこと。
【佛種性】 本來自性清淨の無爲涅槃にして、眞如法性のことをいふ。
【法界】 眞如のこと。

云はく、「若し了義は身を説けば即ち是れ大乘なり、即ち如來藏なり、即ち如來性なり。」
『華嚴經』に云はく、「菩薩隨喜して心に如來の性を斷ぜず。」又言はく、「佛種性を斷ぜざらんと欲せば、當に菩提心を發すべし。」又『華嚴』の性起品には、「即ち是れ佛性の義を明す、寶王如來性より離世間の因を起して、法界の果に入るを得、前の因果を結し後の因果を生ず。故に『華嚴』に佛性を明すに、因有り果有り、未だ正因緣因の名を作さず。亦未だ果と因果との稱を作さず。具足して佛性の義を明すが如きに至りては、即ち涅槃の中に辨ずる所の如し。故に具に因有り因有り、果有り果果有りと明す。今時一師毎に『涅槃經』を以て證と爲せり。然も此一教は處處に皆佛性を明す。故に哀數品の中の瑠璃珠の喩、亦是れ具足して佛性の義を明す、是の如く如來性品に皆佛性の義を明す、乃至師子吼、迦葉に廣く佛性の事を明す。義乃ち顯然たり。故に一師の引ける所の文句は、師子吼の文を以て正と爲すなり。故に師子吼菩薩問うて言はく、「云何が佛性と爲す。何の義を以ての故に名けて佛性と爲す。是の如く凡そ五佛性を問ふ有り如來次第に答へたまへり。『第一の間に答へて言はく、『善男子、汝云何が佛性と爲すと問はば、善男子、佛性とは第一義空に名く、第一義空をば名けて智慧と爲す。』斯れ則ち一往第一義空を以て佛性と爲す。又第一義空を名けて智慧と爲すと云ふなり。豈由來の義に異らずや。今は只境を説いて智と爲し、智を説いて境と爲す。復云はく、言ふ所の空とは空と不空とを見ず、此に對して言を爲せば亦應に云ふべし、言ふ所の智とは智と不智とを見ず、即ち空を見ずとは空を除き、不空

を見ずとは不空を除き、智を除き又不智を除いて二邊を遠離するを聖中道と名く。又言はく、是の如き二見を中道と名けず、無常無斷なるを乃ち中道と名く、此れ豈中道を以て佛性と爲すに非ずや。是を以て不空を除けば、則ち常邊を離る、又空を除けば即ち斷邊を離る。智と不智とを見ざるの義も亦是の如し。故に中道を以て佛性と爲すなり。是を以て文に佛性と云ふは、即ち是れ三菩提の中道の種子なり。是故に今明すらく、第一義空を名けて佛性と爲し、空と不空とを見ず、智と不智とを見ず、無常無斷なるを名けて中道と爲す、只此を以て中道佛性と爲すなり。若し此を以て前の十一師に足せば則ち第十二の解と成る。然も若し正道を識とすれば知んぬ、道に一有ること無し、豈復二有りて其間を釋せんや。而も第一義空を佛性と爲すと言はば、是れ由來辨ずる所の第一義空に非ず。彼は第一義空は但境にして、而も智に非ずと明す、斯は是れ偏道なり。今智慧と言ふも亦由來明す所の智慧に非ず。彼は智慧は但智にして、境に非ずと明す。斯れ亦是れ偏道の義にして中道と謂ふに非ざるなり。但中道の義は識り難し、具には二諦の中に辨ずるが如し、中に非ず邊に非ず中邊に住せず、中邊平等なるを假に名けて中と爲す。若し是の如きの中道を了すれば、則ち佛性を識る。若し今の佛性を了すれば、亦彼中道を識る。若し中道を了すれば、即ち第一義空を了す。若し第一義空を了すれば、即ち智慧を了す、智慧を了し、即ち『金光明』の諸佛の行處を了す。若し『金光明』の諸佛の行處を了すれば、則ち此經に光明をば名けて智慧と爲すと了す。若し智慧を了すれば、即ち佛性を了す。若し佛性を了す

【四】 正因を明す

れば、即ち涅槃を了するなり。

【四】 簡正因第四。但正因識り難し、今兩種を作りて之を検するに、一には、車輪を作

りて義を明す、無始終の檢なり。二には、三世を作りて義を明す、有始終の檢なり。無終

の義とは即ち涅槃に云ふが如く、十二因縁、不生不滅、不一不二、不常不斷、不來不去、

不因不果なり。又言はく、佛性とは、因有り因有り果有り果果有るなり。是れ無始終の義

を以て、四句を作りて之を明す。言ふ所の因とは、即ち是れ境界因、謂く十二因縁なり。

言ふ所の因因とは、即ち是れ縁因、謂く十二因縁所生の觀智なり、境界已に是れ因なり、

此觀智、因を因として有なるが故に、因因と名く、好く十二因縁を體すれば、應に是れ因

を因として有なるが故に因因と名くべし。彼向には前に望む、此は即ち後に望む、皆是れ因

因なり。言ふ所の果とは、即ち三菩提因に由りて得るが故に名けて果と爲す。言ふ所の果

果とは即ち是れ大般涅槃なり。菩提に由るが故に、涅槃を説いて以て果果と爲すを得。菩

提は即ち是れ智なり、涅槃は即ち是れ斷なり、智に由るが故に斷を説くなり。此は是れ無

始終の義なり、何んとなれば所生の觀智は因を因として而も有なるが故に因因と名くるが

如し、十二因縁も亦因を因として有なれば又是れ因因なり。既に互に因と因因と爲すが故

に、是れ始終無きなり。第二には、三世有始終の檢を作るとは、凡そ三句有り。一には、

是因非果は即ち是れ境界因なり。故に經に言はく、『是因非果は佛性の如きなり。二には、

是果非因は即ち是れ果果性なるが故に、經に言はく、『是果非因を大涅槃と名く。』と。三に

【三菩提因】 應得りて因行を修しま

さに菩提の果を得べきが故にいふ、加行因（その上に

ますます善行を加ふるをいふ）圓滿因（加行により圓滿したるをいふ）。

【大般涅槃】 大滅

度と譯す。大乘の

涅槃のこと。佛の

は、是因是果は即ち了因及び三菩提の如きなり。斯れ即ち亦因亦果は後に望みては因と爲り、前に望みては果と爲る。既に境界は是因非果、涅槃は是果非因なりと言ふ、所以に名けて有始終の義と爲す。問ふ、一先に四句を明し、後に三句を説くに正因有りや否や。答ふ「未だ正因有らず。問ふ、一若し前に四句を明し、後に三句を説く、既に並びに正因に非ざれば、未だ知らず、何者をか正因と爲すや。答ふ、一前の四句に明す所の因果は、因は是れ傍因、果は是れ傍果の義なり、然る所以は因は則ち果に異り、果は則ち因に異なるなり、豈是れ傍義に非ずや。故に先に因有り因有り果有り果有りと言ふ、皆未だ是れ正因ならず、若し非因非果と言はば、乃ち是れ正因なるのみ。後に説く三句は、是因非果、是果非因、是因是果にして、皆未だ正と名けず。若し非因非果と言はば、此れ乃ち是正なり、故に經に非因非果を名けて佛性と爲すと云ふ。故に四句の中に於て更に第五の句を足して方に是れ正因なり。三句の中に於て更に第四の句を足して方に是れ正因なり。所以に佛性は因に非ず果に非ずとも、而も因と説き果と説く、不因にして因なれば境智を聞く。故に二因有り、謂く、因と因因となり。不果にして果なれば智斷を聞く、故に二果有り、謂く、果と果果となり。正因に至論すれば豈は是れ因果ならんや。故に非因非果、即ち是れ中道を名けて正因と爲す、故に中道を以て正因佛性と爲す。故に經に云はく、一佛性は是れ三菩提の中道の種子なり。所以に佛性は即ち是れ中道の種子なり、亦いふべし、中道の因を以て、正種子と爲すことを得。若し單道の義ならば、此中に應に須らく師子吼の文を眼見す

【境と了】 境界因と了因となり。

べし、然も先に正因佛性を云ふ、非因にして因なるが故に二因有り、謂く境と了との二因なり、非果にして果なるが故に二果有り、謂く菩提と涅槃となり。今此二因二果は並びに正因に非ず、非因非果正因に由るが故に此因果有り。所以に此二因二果は並びに皆是れ傍なり。若し非因非果は乃ち是れ正因なり、故に若は縁、若は了、並びに正因に非ず、非縁非了は乃ち是れ正因なり。若し菩提涅槃は並びに正果に非ず、非菩提非涅槃は乃ち是れ正果なり。問ふ、「若し爾らば、則ち六種の佛性を成ぜよ。何んとなれば因の中に縁因了因有り、復正因有り、豈三因に非ずや。果に菩提と涅槃と有れば、則ち二果を成ず。復菩提非涅槃有るを名けて正果と爲す、豈六種の佛性に非ずや。」答ふ、「亦六種の佛性なるを得ん。今則ち爾らず。然る所以は、但因の中には名けて佛性と爲す、果に至れば便ち性佛を成ず、故に因に在るを但名けて非因と爲す。果に在れば則ち名けて非果と爲す、只是れ一箇の非因非果なり。今佛性を辨するが爲の故に經に正因と爲す、所以に但五性のみ有り、六性と爲さざるなり。」

【五】 釋名を明す

【五】 釋名第五。釋名には二種有り。先に通名を釋し、次に別名を釋す。通名不同にして三家有り。第一の解に云はく、佛性の兩字は皆是れ果の名なり、佛をば覺者と名く、此故に宜しく因に非ざるべし。性は不改を以て義と爲す、果體既に常なり、所以に不改なり。因中暗識するが故に覺者に非ず、既に其れ遷改すれば性と名くるを得ず、但衆生は必ず當に此佛性を得べきの理有り、故に悉有佛性と言ふなり。第二の師釋するに、佛性とは

此は是れ因の中なり。第一の家を難じて云はく、經に既に一切衆生悉有佛性と云ふ、云何が因中に此名有ること無しと言はん。因中の衆生に覺の義有り、故に是れ佛なり、必當の理有りて不改なれば性と名く。第三家は字を分ちて解釋す。佛は是れ果の名なり、性は是れ因の名なり、還りて第一の家を擧げて難を爲す。衆生は愚暗癡惑のみ。然も未だ智慧有らず。若し覺法有らば佛覺を許すべし、而も即ち衆生に都て覺有ること無し。云何が衆生是れ佛なりと言はん。乃ち生死の小智を研きて終に果地の大覺を成ず、其果を始めて名けて佛と爲す。故に佛は是れ果の名なり、但し衆生は必ず當に此を得べきの理改まらざるが故に、名けて性と爲す、性は只是れ理なり、所以に性は是れ因中なり。然も此三説今並びに用ひず、皆須らく之を洗ふべし。還りて三家の義を以て自ら相難破するなり。問ふ、今の義は云何が當に因に在りと爲んや、當に果に在りと爲んや。當に因果に在りと爲んや。答ふ、今の時義を明す。在無く不在無きが故に無在無不在と云ふ、佛の所説なり。只此の如きの義を以ての故に名けて佛性と爲す、無在無不在と雖も、在と説き不在と説く。佛性は因に在り、性佛は果に在り、故に果の因を佛性と名け、因の果を性佛と名く。此は是れ不二の二の義なり。不二の二なるが故に、二は則と非二なり。故に二の不二は是れ體、不二の二は是れ用なりと云ふ。體を以て用と爲し、用を以て體と爲す、體用平等にして不二中道なる方に是れ佛性なり、一切諸師佛性の義を釋するに、或は佛性是れ因にして果に非ずと言ひ、或は是れ果にして因に非ずと言ふ。此は是れ因果の二義にして佛性に非ざる

【邪見】因果の道理を無視する妄見一切の妄見は皆正理に違したるものなるが故に邪見と名づくべきものなりとも、因果を無視する妄見は、其過最も重きが故に特に名づく。

【寂滅】生も滅も共になくなりたる無爲寂靜になりたる境界のこと。涅槃の譯なり。

【次に】以下別名を釋す。
【觀智】觀心、觀法をなす智慧、事理を觀する智慧。

【正遍知】等正覺に同じ。佛は正理を窮め盡して知らざることなきが故に正遍知の名あり

なり。故に經に云はく、『凡そ二有るは皆是れ邪見なり。』故に知んぬ、一切の諸師は佛性を知らずして各一處を執し、是非を評論して佛性を失へるなり。若し因果平等不二なりと知る、方に乃ち稱して名けて佛性と爲すことを得。故に經に『非因果平等不二なりと稱して名けて涅槃と爲すことを得。故に經に云はく、『佛は一切衆生畢竟寂滅なりと知る。是れ涅槃の相なり。復更に滅せざるなり。』

次に別名を釋せば、先に正因果佛性は非因果平等なりと言ふ、非因果にして因なるが故に二因有り、謂く、境界因と了因となり、非果にして果なるが故に二果有り、謂く、菩提と涅槃となり。境界因と言ふは即ち是れ十二因縁なり、能く觀智を生ず、是れ觀智を生ずるを以ての故に境界因と名く。能く觀智を生ずるの前縁なるを以ての故に亦縁因と名く。了因と言ふは、觀智能く佛果を了出するが故に了因と名く。既に佛果を了出するの縁因なるが故に、有時には了因を呼んで以て縁因と爲す。菩提は此には正遍知道と言ふ、是は智に従つて名と爲す。涅槃とは此には寂滅と言ふ、是れ則ち斷に従つて目と爲すなり。前の四句に因有り、謂く十二因縁なり。正しく十二因縁を言はば菩提の正因に非ず、而も因と言ふは其能生の觀智を以て、因の與に因と作る、故に名けて因と爲す。若し此に例せば大涅槃も亦是れ正觀の正果に非ず。菩提果を以て果と爲すが故に、亦應に單へに名けて果と爲すべし、若し涅槃果と與に果と爲すが故に宜しく果果と名くべしと言はば、十二因縁も亦

爾るべし、因の與に因と作るが故に應に因因と名くべし。而も經に因因と云ふは、謂く、十二因縁所生の觀智なり。此れ因を因として而も有なるが故に因因と名く。若し爾らば十二因縁も亦因を因として有り、何が故に因因と名けざらん。然も復例すれば通じて此の如きの義有りと雖も、但十二因縁は因と作りて因の始なるが故に單に名けて因と爲す。所以に經に是因非果と云ふなり。觀智は十二因縁に従ひて生じ、因に因りて有るが故に因因と名くるなり。所以に有果とは、則ち是れ三菩提にして、觀智の因に従つて有なるが故に名けて果と爲す。若し三菩提は是れ觀智の正果なるが故に、單に果と名くと言はば、觀智も亦是れ三菩提の正因なり。亦應に單に有因と名くべし。若し觀智とは因に従ひて有なるが故に宜しく因因と名くべしと言はば、三菩提も亦果に従ひて有なるが故に直ちに名けて果と爲くべし。而も爾らずして正しく三菩提を言はば、酬因の始なるが故に直ちに名けて果と爲す。涅槃は三菩提果に従つて有なるが故に果果と名く。然し此四種の兩因、兩果は、並びに皆是れ傍にして正と名くるを得ず、非因非果を乃ち正因と名く、不因の故に二因有り、不果の故に二果有り、所以に此因は是れ不因なり。此果は是れ不果なるが故に、非因非果を乃ち名けて正と爲す。然し非因非果は、自ら正と名くべし、但其れ因に在るが故に正因と名く。共果を則ち呼んで正果と爲す、然も此義終に復定言すべからず、故に或時には呼んで道と爲し、或時には呼んで中と爲し、或時には呼んで正因と爲す。若し言を濟しくして取れば亦得ず、何んとなれば其正と言へば、果自ら正ならず、因亦正に非ず。亦是れ

非因非果に非ず、亦是れ非因非果に非ざるにあらす。問ふ、「若し爾らば是れ何ん。」答ふ、「此中には是れ無し。故に當に以て超然として言解の旨を悟り、此悟心を點じて以て正因と爲すこと得べし。此觀心に付きて言の述ぶべきに非ず、故に迦葉は毎に不可思議なりと歎ずるなり。」

【六】 本有始有を明す。

【本有】 はじめよりあること。先天的に實在せること

【法身】 無色無形の理佛のこと。

【性淨涅槃】 諸法實相の理のこと。この理は不生不滅なるが故に名づく

【方便淨涅槃】 善巧の化益終りて應身また滅したる所をいふ。

【六】 本有始有第六。問ふ、「佛性は是れ本有と爲んや、是れ始有と爲んや。」答ふ、「經に兩文有り、一に云はく、衆生の佛性は譬へば暗室の靦釜、力士の額珠、貧女の寶藏、雪山の甜藥の如くして、本より自ら之有りて今に適するに非ざるなり。所以に『如來藏經』に九種の法身の義有りと明せり。二に云はく、佛果は妙因より生ず、驢馬の直なるを責めて駒の直なるを責めざるなり。明すに當に蘇を服するに今已に臭しと善ふべし、食の中に已に不淨有り、麻の中に已に油有り、則ち是れ因の中に言ふの過なり。故に知んぬ、佛性は是れ始有なり。經に既に兩文有り、人釋して亦兩種を成す。一師の云はく、衆生の佛性は本來自ら有り。理性の眞神なる阿梨耶識なるが故に、涅槃に亦二種有り、性淨涅槃本來清淨なり、方便淨涅槃は修に從つて始めて成するなり。第二の解に云はく、經に既に佛果は妙因より生ずと説く、何んが食中に已に不淨有るべき。故に知んぬ、佛性は始有なり。復有人の言はく、本有は當に於く、故に本有と名く。」と。問ふ、「若し爾らば、便ち是れ本有なるや。」答ふ、「復始有の義有り。」又問ふ、「若し始有ならば、應に是れ無常なるべきや。」答ふ、「我復本有の義有り、此れ何んが二人劫張王の互答を作すに異らんや。」彼若

【法輪】 教法のこと。諸佛の教法はよく衆生の迷妄を破砕すること、恰も車輪の轉じて瓦礫を碎くが如くなるが故に法輪と名づく。

【無我】 人我なきこと我は常一主宰の義にして吾人は五蘊合成の假身に上り靈妙なる常一主宰の主體あるが如く思ひ實我の見をなせども、吾人の身體には何處にも別に主體と認むべきものなく、即ち蓮の我も離蓮の我も非即非離蓮の我もなきが故に無我といふ。

し本有ならば應に如來藏經諸喩の如くなるべし。若し始有と言はば、應に是れ無常なるべし、而も本有は當に於くと言ふ、此は是れ何の語ぞ、定めて本、定めて當なりや。無量の世界、無邊の佛智、應に圓ならざるべきや。若し無邊の如く照と言はば、自ら之を破すべし。何んが勞しく更に難せん。照若し窮盡ならば即ち是れ有邊ならん。照若し盡きざれば智は則ち圓ならず、此難那ぞ去ることを得ん。本有始有の義も亦是の如し、一切有所得の義自ら死せざること無く、而も、人覺せざるのみ。故に一切諸人は其中に網羅せざること無し。若し本有を執すれば則ち始有に非ず、若し始有を執せば則ち本有に非ず、各一文を執して經の意を會通することを得ずして、是非諍競して佛の法輪を滅するを作す、具に陳ぶべからず。但し地論師の云はく、佛性に二種有り。一には是れ理性、二には行性なり、理は物の造るに非ず、故に本有と言ふ。行は修を籍りて成するが故に始有と言ふ、若し有所得の心は之に望めて、一往文を消して旨を得るに似たり。然も經の意を尋惟するに未だ必ずしも此の如くならず、何んとなれば、但大聖善巧方便して、物の宜しき所に遂つて病を破し法を説けり、何んが曾て説いて理性本有、行性始有なりと言ふや。例せば如來藏の義を説くに、『楞伽經』には無我を説き如來藏と爲す。涅槃には我を説いて如來藏と爲すが如し、此兩文復若爲配當せんや。本有始有、其義亦兩り。若し理性は本有にして始に非ず、行性は始有にして本に非ずと言はば、更に執して病を成じて聖教樂に非ざらん、而も世間淺識の人は但其語を見て定んで以て是と爲して以て迷執を成するなり。

【迷執】凡夫は萬有の實相を認むること能はず、妄りに假相に執着して妄念絶ゆることなきをいふ。
【今一家】以下一家の相傳を明す。

【常樂】常住にしてうつりかはりなく苦みなくして樂しきこと。

今一家相傳して佛性の義を明さば、非有非無非本非始にして亦當現に非ず。故に經に云はく、「但世俗文字の數を以ての故に三世有りと説く。」菩提に去來今有りと謂ふに非ず、非本非始なるを以ての故に、因縁有るが故に、亦説くことを得べきが故に、涅槃の性品に明すが如し。佛性は本有にして貧女の寶藏の如く、而も諸の衆生教を執して病を成すが故に、下の文は即ち始有なりと明す。故に知んぬ、佛性は本に非ず始に非ず、但衆生の爲に説いて本始と言ふなり。問ふ、「若し佛性は本始に非ずと言はば、何の義を以ての故に本始と説く。」答ふ、「佛性を至論すれば理實に本始に非ず、但如來方便して衆生の無常の病を破せんが爲の故に、説いて一切衆生、佛性本來自有と言ふ、是因縁を以て佛道を成ずることを得。但衆生方便無きが故に執して佛性の性、現相常樂なりと言ふ。是故に如來、衆生の現相の病を破せんが爲の故に、本を隠して始を明す。佛性を至論すれば但是れ本始に非ざるにあらず、亦是れ非本非始に非ず。本始を破せんが爲の故に、假に非本非始と言ふ。若し能く本始非本始を悟るを得れば、是非平等にして始めて正四佛性と名くることを得べし。衆生是に因りて深く保たば佛道を成じ、若し是の如くならざれば佛性に非ざるなり。若し廣く本有始有の義を論ずれば、譬せば新故の如し、何んとなれば第一念は是れ新、第二念は是れ故なり。譬へば新米の初出の者は是れ新にして、次の者は復是れ新に非ざるが如し。亦第一念を故と爲し第二念を新と爲すことを得、先者を故と名け後に始めて起るは是れ新なり。是れ則ち先後皆新と名くることを得、故に新新生滅と言ふべし。初後皆故と

【無明】大煩惱地
法の一。六煩惱の
一、心所の名、す
べて事に闇き精
神作用をいふ。癡
煩惱のこと。

名くるを得。故に初の故なれば後も亦故なりと言ふ、新故既に初後に通ぜり、本有始有の義亦復然り。新故の義初後に通ぜり、但初故を説いて新と名け、久の新を故と名く、定んで知んぬ、何者をか新と爲し何者をか故と爲さん。故に知んぬ都て新も無く故も無し。故に十號を釋する文に云はく、『上者をば新と名け、下者をば故と名く、大涅槃には新無く故も無しと體る。既に大涅槃には新無く故無しと言ふ。亦大涅槃には本無く始無しと體ると言ふを得ん。此は一往、無本無始の義を明すなり。然も無本無始の義、此は是れ清淨の體なり、何んが言に寄る本始の義を失せんや。今事に約して之を論ぜば、無明の初念始めて起るを新と爲し、佛果後に起るを故と爲すが如き、何んが先の兩念相望して、初念を新と爲し、後念を故と爲すに異らんや、亦佛果始めて起るを則ち新と名け、無明住地既に久しきを、此を則ち名けて故と爲すを得。何んが兩念相望して初念を故と名け、後念を新と名くるに異らん。然も本始は只是れ新故なり、本は只是れ故、始は只是れ新なり。無明の初念佛果と相望して既に皆是れ新なるを得、皆是れ故なるを得、亦皆是れ始なるを得、皆是れ本なるを得。無明と佛果と既に得ること此の如し。生死の涅槃も亦爾り。皆是れ始を得、皆是れ本を得。是故に生死を始と爲し、涅槃を始と爲し、生死を本と爲す。生死始有なり。涅槃は本有なり。何んが第一念を新と爲し、第二念を故と爲すに異らん。生死は本有なり。涅槃は始有なり。何んが第一念を故と爲し、第二念を新と爲すに異らんや。故に生死涅槃は是れ本有にあらず、是れ始有にあらず。而も終に是れ

無本無始なり。今假に名けて説くが故に、更に互に本始と爲すに異ること無し。經に本有今無本無今有と言ふ、本若し是れ有ならば、今則ち是れ無なり。本若し是れ無ならば、今則ち是れ有なり。故に、今本を皆有と名くるを得、皆無と名くるを得。此文の意は終に無本無今の義を明さんが爲なり。故に下の文は即ち結して、三世有法無有是處と言ふ。故に知んぬ、三世は皆有と言ふを得ず。但し今假に名けて説くが故に本有今無本無今有なり、生死、涅槃に通じて皆是れ有無なり。若し假名を悟りては有と論じ無と論じ竟に至りては終に是れ有も無く無も無し。故に三世有法無有是處と言ふ、何んが新故本始を説いて竟に至れば終に是れ新故本始の義有ること無きに異らんや。當に知るべし、新故を説き、本來新を指して故と爲し、故を指して新と爲す、本始亦爾り。本を指して始と爲し、始を指して本と爲す。始を指して本と爲すが故に此本は是れ始の本なり。本を指して始と爲すが故に、此始は是れ本の始なり、本の始なれば始に非ず、始の本なれば本に非ず。故に竟に至りては終に是れ無本無始の義なりと云ふなり。

【七】 内外有無を明す。

【信等の五根】 三十七道品のうち、信根、精進根、念根、定根、慧根のこと。

【七】 内外有無を辨ずる第七。今佛性内外有無の義を辨ぜん。此重最も解し難し。或は理外には佛性有りて、理内には佛性無しといふべし、或は理内には佛性有りて、理外には佛性無しといふべし。今先づ理の内外を辨じて次に有無を説かん。然も由來亦理内外凡夫及び内道外道有りと言ふ。故に信等の五根未だ立せざる者は、理外に心を行すれば外の凡夫と名く、五根立せる者は理内に心を行すれば内の凡夫と名くるが故に、理内に心を行

【常樂我淨】涅槃の不變不遷(常)にして大自在を得て(我)三惑清く盡き(淨)たるをいふ。

【今次に】以下、佛性の有無を述ぶ

【阿羅漢】聲聞四果の一。三界の見思の煩惱を斷盡し盡智、無生智を得て無學位に住し世間の供養を受くるに堪へたる聖者をいふ。

じ、理外に心を行すと云ふ。既に此語有り、亦即ち是れ理内外の義なり、但舊師等甚だ分明ならずして此名教を作るのみ。經に言はく、復次に道に二種有り、一には外、二には内、外道の道は常無く樂無し、内道の道は常有り樂有り、菩提の解脱も亦復是の如し。聲聞の菩提には常無く樂無し、諸佛菩薩の所有の菩提は常樂我淨なり、解脱も亦然り。問ふ、「菩提は只是れ道なり。何が故に兩び出すや。」解して云はく、「菩提とは是れ所行の道、先に明す道は是れ能行の道、能所を異と爲すなり。」又若し一切諸法に生滅有りと言はば、皆是れ理外、悉く外道に屬す。若し一切諸法に生滅無しとは、皆是れ理内は則ち内道に屬す。故に今明すらく、發心して不生不滅を悟る、般若の中に辨する所の如し。名けて内道と爲すなり。理の内外を分つこと竟る。

今次に佛性の有無を明さん。問ふ、「理外の衆生に佛性有りと爲んや、理内の衆生に佛性有りと爲んや。」答へて曰はく、「理外の衆生に佛性有りやと問するに此れ問を成さず、何んとなれば理外に本自ら衆生有ること無し、那ぞ問うて理外の衆生に佛性有りや不やと言ふことを得ん。故に炎中の水を問ふが如し、本自ら曾て有らず、何んが更に炎中の水何の處よりか來ると問ふことを得ん。是故に理外に既に無生無く亦佛性無し、五眼の見ざる所なり。故に經に云はく、「若し菩薩、我相、人相、衆生相有れば即ち菩薩に非ず。」是故に我と人と乃至今の人と佛性有ること無し、但凡夫に佛性無きのみならず、乃至阿羅漢にも亦佛性無し。是義を以ての故に但草木に佛性無きのみならず、衆生にも亦佛性無し。

【一闢提】本來解
 脱の因を缺きて、
 到底成佛すること
 能はざるもの。無
 情有情のこと。無
 【二乘の人云云】
 聲聞緣覺の二乗の
 ことをいふ。二乗
 は成佛すべき根
 礎に壞れて、佛果
 を證るべき因種を
 有せざるが故に名
 づく。維摩經に維
 摩が二乗を叱して
 根敗壞種と稱した
 ることあるより起
 る。根敗二乗とも
 いふ。

大乘玄論卷第三

若し佛性有りて明さんと欲せば、但衆生に佛性有るのみにあらず、草木にも亦佛性有り。此は是れ理外に佛性無きに對して、以て理内に佛性有ることを辨するなり。問ふ、『衆生には佛性無く草木に佛性有ること昔より來、未だ曾て聞かず。經文に有りて爲んや、當に自作なりと爲んや。若し衆生に佛性無くば成佛すべからず、若し草木に佛性有らば草木乃ち成佛せん、此は是れ大事なり、輕しく言ひて人をして驚怪せしむべからざるなり。』答ふ、『少しく聞くものは怪多し、昔より來、事有り是故に經に言はく、『諸の比丘有りて大乘を説くを聞きて皆悉く驚怪して坐より起ちて去る。』是れ其事なり。今更に略して愚見を擧げて以て來問に酬いん。大涅槃の哀救百品の中に失珠得珠の喩有り、以て衆生に喩ふ。迷へるが故に失すれば佛性無し。悟るが故に得れば佛性有り、故に云はく、一闢提には佛性無ければ殺すとも亦罪無きなり。又一乗の人は焦種の如くなりて呵す、永く其根を絶ちて根敗の如くなる士なり、豈是れ凡聖に佛性無しと明すに非ずや。衆生尙佛性無し。何に況んや草木をや。此を以て證知するに、但草木に佛性無きのみにあらず、衆生にも亦佛性無きなり。又『華嚴』に明すらく、『善財童子彌勒の樓觀を見て、即ち無量の法門を得。』と。豈是れ物を觀じ性を見て即ち無量の三昧を得るに非ずや。又『大集經』に云はく、『諸佛菩薩は一切諸法は是れ菩提に非ざることを無しと觀す。』此は佛性に迷ふが故に生死と爲す、萬法悟れば即ち是れ菩提なりと明す。故に聲法師の云はく、『道遠からんや、物に即して眞聖遠からずや。悟れば即ち是れ神なり。』若し一切諸法は是れ菩提に非ざること無くば、何ん

【唯識】 宇宙の終極的實在はただ心に於て外現なり。はその變現なり。

【如】 時により處によりてすべて變異なきこと。口にいふべからざる諸法の本體、本覺、理性、眞如。

が是れ佛性に非ざることを無きを得べからざるべき。又『涅槃』に云はく、『一切諸法の中に悉く安樂の性有り。』亦是れ經文なり。『唯識論』に云はく、『唯識には境界無く、山河草木皆是れ心想なりと明す。心の外に別法無く、此れ理内の一切諸法依正不二なりと明す、依正不二なるを以ての故に衆生に佛性有れば、則ち草木に佛性有り。此義を以ての故に但衆生に佛性有るにあらず、草木にも亦佛性有るなり。若し諸法平等なりと悟れば、依正の二相を見ざるが故に理實に成と不成との相有ること無し、故に假に成佛と言ふ。此義を以ての故に若し衆生成佛する時、一切草木も亦成佛することを得。故に經に云はく、『一切諸法皆如なり、彌勒に至りて亦如なり。若し彌勒、菩提を得るとき、一切衆生皆亦應に得べし。』此れ衆生と彌勒と一如無二なるを以ての故に、若し彌勒菩提を得るとき、一切衆生も皆亦應に得べしと明すなり、衆生既に爾り草木も亦然るなり。故に知んぬ、理通するが故に、作らんと欲せば往いて得ざることを無し、是故に大乘無礙と名くることを得。此は是れ通門に義を明すなり。若し別門を論ぜば則ち然るを得ず、何を以ての故に。衆生には心迷有るが故に覺悟の理有るを得と明す。草木には心無きが故に迷はず、寧ろ覺悟の義有るを得んや。喩へば夢には覺し、不夢には則ち覺せざるが如し。是義を以ての故に衆生には佛性有り。故に成佛し、草木には佛性無きが故に成佛せずと云ふなり。成と不成とは皆是れ佛語なり、何の驚怪か有らん。上來より此に至るまで理外には佛性無く、理内には佛性有ることを明すなり。

【滅度】大患永く滅して四流を超越する義にして涅槃に入りぬれば、永く生死の大苦を滅し、煩惱の潮流を超越するが故に滅度といふ。

【闍提】一闍提のこと、斷善根なり前註。

【定】念を斂め心を一境に止めて散ぜしめず、その境に専注せしむるをいふ。

第二に理外に佛性有りて、理内には佛性無きことを明す。『般若經』に云ふが如し、是の如く無量の衆生を滅度するも、實には衆生の滅度を得るもの無し。『華嚴』に亦云はく、『平等の眞法界には一切衆生入る、眞實には所入無し。』既に一切衆生入ると言ふ、當に知るべし是れ理外の衆生入るなり、而も實には所入無しとは此れ理内に入りて復衆生無し、故に實に無所入と言ふなり。是に知んぬ、理外には衆生有るが故に入ることを得るなり。是の如く滅度すれば實に度するもの無く亦此釋を作るなり。此至理の内には實に衆生滅度を得るものなし、當に知るべし、理内には既に衆生無し、亦佛性無し。理外には衆生の度すべき有り、故に理外の衆生に佛性有りと云ふなり。然し本理内に有るが故に理外と説く、理内既に理外無し。豈復有らんや。先には則ち交互して義を辨ずることを成ぜんが爲の故なり、理外に若し無ければ理内則ち有り、理内に若し無ければ理外に則ち有り。或時は内外俱有と言ひ、或時は内外俱無と説く。故に經に云はく、『闍提の人には有り、善根の人には無し、善根の人には有り、闍提の人には無し、二人俱有、二人俱無なり。』問ふ、『那ぞ此れ不定の説を作すことを得る。』答ふ、『此れ豈定有ることを得んや、故に『涅槃經』に云はく、『若し人有りて一闍提の人定んで佛性有り、定んで佛性無しと説くを、皆佛法僧を謗ると名く』と。今既に佛法僧を謗ることを欲せざれば、豈敢て定判せんや。義の中に自ら四句有るが故に内外有無不定なり。此不定の説を作す所以は、佛性は是れ有無に非ずと明さんと欲するが故に、或時には有と説き、或時には無と説くなり。問ふ、『若し定を非と爲すと云

ばば、不定を是と爲すや』答ふ、『若し不定を是と爲すと云はば、還つて復定を成す、定既
 に是に非ず、不定亦非なり、具に論に破するが如し。但定を破す。故に不定と云ふ。四句
 有ること前の如し。若し洗淨し已れば、復不定なれども而も定と爲す、亦何んが無定なる
 を得んや。今只不定を定と爲すに就いては理外の衆生、理外の草木有り、理内の衆生理内
 の草木有り、何者か佛性有り、何者か佛性無からんや。若し不定に定説を爲さば、經中に
 但衆生を化すを明して、草木を化すと云はず。是れ則ち内外の衆生に佛性有り、草木に佛
 性無きなり。然りと雖も觀心に至りて之に望するに、草木衆生豈復異り有らんや、有れ
 ば則ち俱有なり、無ければ則ち俱無なり。亦有亦無、非有非無、此四句皆悉く並びに觀
 心を聽すなり。佛性に至りて、有に非ず無に非ず、理内に非ず理外に非ず。是故に若し有
 無、内外、平等、無二なりと悟ることを得れば、始めて名けて正因佛性と爲すべきなり。
 故に『涅槃論』に云はく、「衆生に佛性有るは、密に非ず、衆生に佛性無きも亦密に非ず、衆
 生即ち是れ佛なり、乃ち名けて密と爲す」と。所以に衆生に佛性無しと言ふを得るは、佛
 性を見ざるが故に佛性衆生に無く、衆生に見ざるが故に亦衆生に佛性有りと言ふことを
 得。如來藏に依るが故に亦佛性に衆生有りと云ふことを得。如來藏の生死の爲に依持建立
 を作るが故なり。

【八】 見性を明す

【八】 見性を明す第八。迦葉問うて云はく、『何か諸の菩薩能く難見の性を見るや。』
 師子吼問うて言はく、『若し一切衆生に佛性有らば、何が故に一切衆生所有の佛性を見ざ

【十住】五十二位の中、第十一位より第二十位迄。心を眞諦の空理に安住するが故に住といふ。

【十地】五十二位のうち四十一位より五十位迄。大地が草木を動かさずして生長せしむる如く、この位の菩薩は中道の佛智を持ちて動かさず、(自行)、又よく衆生を化益する(化他)が故に地と名づく。

【慧眼】諸法の空理をみる智慧の眼のこと。

【地前】五十二位のうち初地以前の位のこと。

る。十住の菩薩何等の眼を以て、了了見佛せざる、何の眼を以て了了に見するや。性品に答ふ、『見』に二種有り。一には、十地或は十住と言ふ、名けて慧眼見と爲す、珠喻を擧げて釋す。二には、外道凡夫を名けて信見と爲す、或は羊角の如し、或は火聚等の如し。師子吼品に慧眼見を明す、故に見すること了了ならず、佛眼見するが故に則ち了了なり。經の文此の如く判釋すること多言なり、十住の菩薩方に佛性を見ること猶羅刹の如し。九住以還未だ佛性を見ず。但し『華嚴經』には初發心の時便ち正覺を成すと云ふ。若し此の如くならば初發心の時は則ち佛性を見ず。故に一師の云はく涅槃に明す所の十地は、應に是れ地前なるべし、未だ得眞悟の菩薩なるが故に性を見すること明ならず、而も『華嚴』に明す所の十地は佛智慧より出づ、此は是れ眞悟の菩薩なり。故に初發心の時は便ち正覺を成すと云ふ。但、地論師は行位に據りて判す。行は通じ位は別なり、涅槃は位別の義を辨す。故に菩薩の位智猶未だ極まらず。故に十地菩薩の性を見すること明ならず。九地は猶未だ見ず、『華嚴』に行通の義を明すが故に初發心時は便ち正覺を成すと云ふなり。又涅槃經に云はく、『十地菩薩但其終を見て其始を見ず、諸佛如來始終俱に見たまへり。諸師此文を釋するに種種不同なり。或は言はく、十地の菩薩未だ無明を斷ぜず、故に其始を見ずと言ひ、伏惑已周して佛を去ること近きが故に、終を見ずと言ふなり。又云はく、十地の菩薩終を去ること近きが故に見と云ひ、終は無明住地を去ること遠きが故に見ずと言ふ。又云はく、十地は初地を去ること遠きが故に、其始を見ず、但し其終を見ると言ひ

佛は既に衆惑已に盡きて因圓に果備るが故に、始終俱見と云ふ。一師の云はく、因果本來不二なり、乃ち是れ二無く不二無し、故に名けて不二と爲す。復不二なりと雖も因果の二を開く、菩提心を因と爲す。佛は則ち是れ果、此は是れ一重の聞なり。又果は頓に階すべからずと明す。所以に因中に、開の十地と爲す、此は是れ第二重の聞なり。是の如く一一の地の中に於て、或は更に開して三と爲し、乃至四と爲し、初地の先を開して十廻向と爲すが如し、乃至十住等は斯れ則ち初地を始と爲し、十地を終と爲す。初に非ず、故に其始を見ずと云ふ、則ち是れ第十なるが故に終を見ると言ふ。亦對して初地は始を見て終を見ずと言ふことを得べきなり。果既に開かず、所以に始終俱に見る、此故に是れ無始終が始終なり。不見にして見るなり。

【九】 會教を明す

【九】 會教第九。經の中に佛性、法性、眞如、實際等を明す有り、並びに是れ佛性の異名なり。何を以てか之を知る、『涅槃經』に、自ら佛性を説くに種種の名有り。一の佛性に於て、亦是は法性涅槃と名け、亦是は般若一乘と名け、亦是は首楞嚴三昧師子吼三昧と名く。故に知んぬ大聖隨緣の善巧もて、諸經の中に於て名を説くこと不同なり。故に『涅槃經』の

【法界】 眞如萬有の本體。

【首楞嚴三昧】 別して諸三昧の行相の多少淺深を知ること。菩薩この三昧を得れば諸の煩惱魔及び魔人もよく破壊することを得ずといふ。

中に於て名けて佛性と爲す、則ち『華嚴』に於て名けて法界と爲し、『勝鬘』の中に於ては名けて如來藏自性清淨心と爲し、『楞伽』には名けて八識と爲し、『首楞嚴經』には首楞嚴三昧と名け、『法華』には名けて一道一乘と爲し、『大品』には名けて般若法性と爲し、『維摩』には名けて無住實際と爲す。是の如き等の名は皆是れ佛性の異名なり、故に經に云はく、

【理實】理とは萬有の本體。實とは萬有の現象なり。

【般若】智慧と譯す。

【第一義空】涅槃のこと。涅槃は凡情の有を離れたるが故に亦空と名づ

「無名相の法、假名の相もて説き、一法の中に於て無量の名を説き、一名の中に於て、無量の門を説く」是義を以ての故に、名義異ると雖も、理實無二なり。問ふ、『若し理實無二ならば何の義を以ての故に種種の名を説くや。答ふ、『若し名に依りて義を釋せば所以無きに非ず。何んとなれば、平等の大道を諸の衆生の覺悟の性と爲せば、名けて佛性と爲す。義、生死に隠れたれば如來藏と名け、諸識を融じて性究竟清淨なるを名けて自性清淨心と爲す。諸法の體性と爲せば、名けて性法と爲す。妙實不二なるが故に、名けて眞如と爲す、盡原の實なるが故に、名けて實際と爲す。理動靜を絶せば、名けて三昧と爲し、理に所知無く、所不知無ければ、名けて般若と爲す。善惡平等にして妙運不二なれば、名けて一乘と爲す。理用圓寂なれば名けて涅槃と爲す。此の如きの諸義は喩の如し、何の譬にか似たる。虚空の不動、無礙にして種種の名有り、諸の名有りと雖も實に二相無きが如し、是を以ての故に名字異なりと雖も理實無二なりと云ふ。』

問ふ、『若し眞如法性並びに是れ佛性の異名なりと言はば、經に眞如法性亦是れ空の異名なりと説く。今未だ知らず、佛性はれ二諦の中の第一義空なりや不や。若し是と言はば既に是れ空なりと言ふ、那ぞ此を以て佛性と爲すことを得んや。諸經を會通して相違せざらしめば善にして則ち善し。然も新に異響を聞いて未だ深旨を見ず、一切諸人並びに皆同じく疑ふ。願くば爲に開示して以て疑滯を遣るべし。答ふ、『涅槃經』に佛性は第一義空と名くと云ふ。豈是れ空を佛性と爲すに非ずや。若し空を以て空と爲すとは佛性に非ざるな

【二乘】 聲聞、緣

覺。

【有所得】 有といへば有を捕へ、無といへば無に滯りすべて心に一物を存して執着すること。

【無所得】 心に何等の一物をも有せざること。無執着なること。

り。故に下の文に云はく、言ふ所の空とは、空と不空とを見ざるを名けて佛性と爲す。二乗の人但空を見て不空を見ず、佛性を見ざるなり。故に知んぬ、有所得の人に於ては、但空のみにして、佛性に非ざるにあらず、佛性亦佛性に非ざるなり。若し無所得の人に於ては但空のみにして、佛性と爲すにあらず、一切の草木並びに是れ佛性なり。問ふ、一若し皆是れ佛性ならば、非と言ふことを得ず。若し佛性に非ざれば是と言ふべからず。何の所以か有りて一切並びに非なりと言ひて、而も復即ち一切並びに是なりと言ふ、豈是れ過分の答に非ずや。答ふ、『平等佛性の理を至論すれば、空に非ず、不空に非ず、有に非ず、有に非ず、法性に非ず法性にあらざるに非ず、佛性に非ず佛性にあらざるに非ざるなり。一切並びに非を以ての故に、能く一切並びに是なることを得。何んとなれば平等の理は、空有に非ざるを以ての故に、假に法性と名く、空有にあらざるに非ざるが故に、假に空有と名く、法性に非ざるを以ての故に、假に佛性と名く、空有法性にあらざるに非ざるが故に、假に法性と名く、佛性に非ざるを以ての故に、假に法性と名く、空有は佛性にあらざるに非ざるが故に、假に佛性と名く。當に知るべし、平等の大造無方無住なるが故に、一切並びに非なり、無方無礙なるが故に、一切並びに得なり。若し是を以て是と爲し、非を以て非と爲さば一切の是非並びに皆是れ非なり。若し是無く非是無く、非無く非無無けれども、假に名けて是非と爲すと知らば、一切の是非並びに皆是れなり。故に知んぬ、上來十一家の所説の正因は、是を以て是と爲すが故に、並びに正因佛性に非ず。若し諸法平

【一〇】 料簡を明す

等無二にして是無く非無きとは、十一家の所説並びに是れ正 因佛性なることを得。
【一〇】 料簡第十。然も料簡の中に應に得失の義を論ずべし。若し本來清淨ならば、何の因縁の故にか失する。本既に失せず、今云何が失する、若し後に失せば先に亦應に失すべし。既に清淨ならば、後に亦應に淨なるべし。答ふ、『此義は第九の卷に純陀の疑を解する差別無差別の義を説くが如し、若し廣く辨ぜば備に涅槃一部を擧げ來りて解釋すとも、猶亦盡すべからず。此義卒了すべからず、宜しく後問を待つべきなり。』

一乘義三門。

一には釋名門 二には出體門 三には同異門。

【一】 釋名第一。一乘とは乃ち是れ佛性の大宗。衆經の密藏、反三の妙術、歸一の良藥なり。之に述はば即ち八軸冥きこと夜遊の若し。之を悟れば即ち八軸の白日に對するが如きなり。釋名とは唯一理のみ有り、唯一人に教へ、唯一因を行じ、唯一果を感ず。故

【一】 釋名を明す
【反三の妙術】 法華經の良藥
に於て、三乘は各異なるものなりとの謬見を除去して三乘そのまま一乘なりと顯示すること。
【薩婆若】 梵音、サルワヂユニヤール(śālavajñāna)一切智と譯す。諸佛の果上の智慧をいふ
【涅槃】 梵音ニルヴァーナ(Nirvāṇa)寂滅と譯す迷妄を脱し、眞理を窮めて、寂滅無爲の法

に名けて一と爲す。『法華論』に云はく、一には謂く同の義なり、如來の法身、聲聞の法身、緣覺の法身、三乘同一の法身なり、故に名けて一と爲す。乘とは運出を義と爲す。運出に三種有り。一には、理を以て人を運ぶ、因により果に至るは『大品』に云ふが如し。是乘は三界より出で薩婆若の中に到りて住す。二には、徳を以て人を運ぶ、『法華』に云ふが如し、是の如きの乘を得る。諸子等をして喜戲快樂せしむ。三には、自を以て他を運ぶ、『涅槃』

性を究め、不生不滅の法身の眞證に歸するをいふ。
【二】 出體を明す

【六度】 布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。
【了因】 了因佛性を指す。
【問ふ乗は】 以下乗の體に就きて論ず。

に云ふが如く涅槃の船に乗り、生死の海に入りて群生を濟度す。

【二】 出體第二。一乗の體とは正法なり。中道を體と爲す。『攝論』には性乘行、乘果乘と云ふ、『中邊分別論』に云はく、『乘に五義を具す。一には乘本、謂く眞如佛性。二には乘行、即ち福慧等。三には攝、謂く慈悲等。四には乘障、謂く、智障無明なり。五には乘果、即ち佛乘なり。』唯識論』に云はく、『乘に三體六義あり。三體とは、一には自性。二には乘隨。三には主得なり。六義とは、一には空の如くにして四謗を出離す。二には因、謂く、福慧なり。三には一切衆生を攝す。四には境界眞俗なり。五には障、即ち皮肉心なり。六には果、謂く無上菩提なり。』十二門論』に云はく、『乘に四事を具す。一には乘本、謂く諸法の實相なり。二には乘主、婆若の導に由りて萬行成就することを得。三には乘行、餘の一切行なり。四には果、謂く、薩婆若なり。』法華論』に云はく、『亦三種を明す、一には乘體、謂く如來平等法身即ち是れ佛性なり。二には乘果、謂く、如來大般涅槃なり。三には乘緣、即ち是れ六度、了因なり、此れ猶三種佛性なり。果果性を説かざるは、果果性は果門に屬す、境界性は因門に屬するが故に廣説すれば五有り、略説すれば唯三なり。』

問ふ、『乘は何を以て體と爲すや。』答ふ、『經論に種種説くと雖も三種に過ぎず、謂く、理行果なり、今正法を以て體と爲す。』問ふ、『理是れ不動なり、云何が運出と名くるや。』答ふ、『其れ不動なるを以ての故に、能く衆生をして運出せしめ、別して之を論ずれば、願忍を運と爲し無生忍を得るを出と爲す、通論すれば一に皆運出せり。因乘は自運運他なり。』

問ふ、『乘は何を以て體と爲すや。』答ふ、『經論に種種説くと雖も三種に過ぎず、謂く、理行果なり、今正法を以て體と爲す。』問ふ、『理是れ不動なり、云何が運出と名くるや。』答ふ、『其れ不動なるを以ての故に、能く衆生をして運出せしめ、別して之を論ずれば、願忍を運と爲し無生忍を得るを出と爲す、通論すれば一に皆運出せり。因乘は自運運他なり。』

問ふ、『乘は何を以て體と爲すや。』答ふ、『經論に種種説くと雖も三種に過ぎず、謂く、理行果なり、今正法を以て體と爲す。』問ふ、『理是れ不動なり、云何が運出と名くるや。』答ふ、『其れ不動なるを以ての故に、能く衆生をして運出せしめ、別して之を論ずれば、願忍を運と爲し無生忍を得るを出と爲す、通論すれば一に皆運出せり。因乘は自運運他なり。』

【問ふ】以下大品の理教、行果の四乗を明す。
【開權】法華經に於て、三乘方便の權教を開除して、一乘眞實の教を顯すこと。

果乘と理乘とは自らは運ばざれども而も能く他を運ぶ。問ふ、「此經に乗を明す。正しく何を以てか體と爲すや。答ふ、「若し因果の用に就かば、果を以て宗と爲す。若し正法の體に就かば、正法を以て宗と爲す。今若は因、若は果皆正法なりと明さば、皆正法なり。故に運の故に正法を以て宗と爲す。有人言はく、「此經には萬善を乘體と爲す」と。有人言はく、「果の萬德を以て宗と爲す」と。有人言はく、「境智を宗と爲す」と。今明すらく用に就かば此義無きに非ず、而も乘の深體を得ざるが故に正法中道を以て、經の宗と爲し、一乘の正體と爲す。」問ふ、「三論の學者は恒に有所得の義を彈ず、云何が異説を用ふる」と稱するや。答ふ、「破相を宗と爲すと言はば、是れ有所得の義なり、今無所得を中ぶるには諸師の義、皆得皆非なり、用を得て體を得ざればなり。異執永く消えて同じく一極に歸するときは執として破せざる無く、義として攝せざる無し。巧に用ふれば甘露の如く、拙く服すれば毒藥を成するなり。」問ふ、「大品に理教行果の四乗を明す、今と何んが異なるや。答ふ、「彼經は開權を明す。此と異りと爲す。問ふ、「勝鬘」と「法華」と何んが異なる。答ふ、「法華」には三乗を會して、懶悟の菩薩の爲に説く、正しく三乘に對す。「勝鬘」には懶悟の菩薩の爲に説く、聲聞、緣覺に對せず、但人に對して説くに此と異りと爲す。問ふ、「若し爾らば「法華」は究竟の説なり、何が故に「涅槃」の教を須ふる。答ふ、「失心の子は涅槃を須ふ、不失心の子は涅槃を須ひず、但鈍根の衆生の爲の故に説く、是を以て大通智勝佛、燃燈佛は涅槃には説かず。利根の衆生なるが故に又此經に三事を明す、一は車、二は牛、三は僕從なり。車とは

【靈鷲山】 耆闍崛山のこと。釋尊說法の地として有名なり。
【三身の壽量】 法華、應の三身の壽命。

因果萬行萬徳なり。牛とは亦因果に通ず、中道の正觀、斷常の垢を離れたれば白牛と爲す、正觀に由るが故に、萬行を引いて生死を出す。此れ即ち婆若導萬行を成ず。「問ふ、
『婆若は是れ乘なり、云何が牛に喩ふるや。』答ふ、『一法兩義なる引導は牛の如く、運義は車（しや）の如し、餘は爾らず、運出の故に車の義有り、引導の能無きが故に牛の義無し、界内を儀従と爲す。果地の牛とは眞慧を牛と爲し、六通無垢なれば白牛と爲し、五道に駕遊し衆生を運出するなり。』儀従とは即ち界外の因を儀従と爲す。』問ふ、『此經に未だ正因佛性を明さず、此義は何んぞや。』答ふ、『此人經味を得ざるなり、『法華論』に云はく、「七處に正因の性を明す」と。今略して四處を出さん、諸法從本來常自寂滅相とは、此は自性住佛性を明す、又同入法性と云ふは、此は是れ佛性の異名なり。又開示悟入、佛の知見と云ふ。論に知見を釋するに佛性なりと明す。普賢菩薩及び惡人記を授く、正因の性有るが故なり。』問ふ、『有人の言はく、「此經に未だ常住を明さず。此義云何。』答ふ、『此は是れ小乘の氣分なり。此經には諸法從本來常自寂滅相とは、此は是れ法常住の義なり。常在靈鷲山とは、人常の義を明す、我淨土不毀とは此は依報常の義に名く。依報、正報、入法は皆常なり。云何が是れ無常ならんや、論に依りて壽量品の文を釋するに、三身の壽量、法報の二身是れ常なり。』問ふ、『有人の三を遣りて一存すと言ふ、此義得と爲んや。』答ふ、『此は是れ有所得の義なり、『大品』に云はく、「三に非ず一に非ざるが故に大乘と名く」と。此經には示すべからず、言辭相寂滅なりといふ。此を以て四句を超え、百非洞遺すとも、強ひて乘を

【三一】聲、緣、菩の三乘と一佛乘となり。

【三一開會】以下三一の開會に十門あることを明す。

【方便】方便教の意、機根未だ熟せずして眞妙の法を受くること能はざる者の爲に、眞實の大道に歸入すべくしてだてとして暫く教ふる淺近なる法門。

【眞實】眞實教のこと眞實究竟の法門。

【鹿苑】釋尊成道三七日の後、鹿野苑の五比丘を濟度し給ひし地。

【香積佛土】香積如來の止住する國、芳香積郁たりといふ。

明すを説いて三一を二と爲し、非三非一を不二と爲す。不二を麤と爲し、非二不二を妙と爲す。二不二非二非不二を麤と爲し、言忘慮絶を妙と爲すなり。

三一開會に凡そ十門有り、一には開三顯一、二には會三歸一、三には廢三立一、四には破三明一、五には覆三明一、六には三前明一、七には三中明一、八には三後辨一、九には絶三明一、十には無三辨一なり。開三顯一とは、昔の三乘は是れ方便なりと聞く、今の一乘は是れ眞實なりと示す、故に開三顯一と云ふなり。會三歸一とは、彼三行に會ひ、一佛乘に歸するが故に汝等が所行是れ菩薩道と云ふなり。廢三立一とは、昔の三教を廢し、今の一乘教を立つるが故に、諸菩薩中正道直捨方便但說無上道と云ふなり。破三明一とは、

其三異を執するの情を破して、以て一乘の道を明すなり。覆三明一とは、如來三一の兩縁に趣きて、當に三一の教有るべし、昔は則ち三を以て一を覆ふ、今は則ち一を以て三を覆ふなり。三前明一とは未だ鹿苑に趣きて三を説かざる前、寂滅道場にして已に一實を明すの教を三前明一なりと謂ふ。三中明一とは鹿苑に趣くより三乘を説く、佛果第一、緣覺第二、聲聞第三は、謂く三中明一なり。三後辨一とは三乘の後の法華の教門なり、彼三乘を會して、同じく一道に歸するを以て、謂く、三後の一なり。絶待一とは無言世界の如し、

外には言無くして示すこと無し、内には慮無くして識無し、故に一三を論ぜざるのみ。即ち此れ佛事を爲すが故に、則ち復は是れ一なるが故に絶待一と云ふなり。無三辨一とは香積佛土の如く、彼土に二乘の名字有ること無し、謂く、無三辨一なり、但し清淨の大菩薩

佛土の如く、彼土に二乘の名字有ること無し、謂く、無三辨一なり、但し清淨の大菩薩

【佛乘の中】以下
佛乘の中に就て眞
身應身を聞く。

衆のみ有り、謂く、一有るなり。前の五種は義に就いて一を論ず、後の五種は時處に約す。諸文不同にして教門に差別あり、故に五を開くなり。問ふ、『云何が會三歸一と名くるや。』答ふ、『若し會三歸一を識らんとせば、先づ須らく一を開きて三と爲すを知るべし。一を開して三と爲すとは、昔の大乗の因を指して説いて小乘究竟の果と爲すなり。今は還つて小乘究竟の果を指して、即ち是れ大乗の因なりといふ、故に會と名く。問ふ、『小乗の人は是れ究竟なりと謂ひて、是れ因に迷ふと爲んや、是れ果に迷ふと爲んや。』答ふ、『實に是れ大因、是れ小果を謂ふが故に、是れ因に迷ふなり。』問ふ、『何の義を以ての故にか一乘は是れ三乘の中の佛乘なりと明し、復何の義を以てか一乘は是れ三乘中の佛果に非ずと明すや。』答ふ、『若し三乘を明すに、出世の乘を攝すること盡きぬ。故に二乗の方便に對して、佛乘是れ眞實なりと明す、故に文に唯此れ一は事實、餘二は即ち非眞と云ふ、所以に一乘是れ三乘の中の一なりと明すなり。』

佛乘の中に就て復眞應を開く、昔二乗の人の爲に佛の方便身を説く、故に佛乘は是れ方便身なり。則ち今教に、佛身は是れ眞實なりと明すを以ての故に、眞實乘は、方便の佛に異るなり。師子坐の長者の、着弊垢衣の長者に異なるが如し。是を以て今昔兩教に約して、佛に權實の不同有りと明す、是故に一乘は三乘の中の一に非ざるなり。問ふ、『此經の中、始末に或は佛、則ち三乘並に是れ方便なり。又唯此れ一は事實、餘二は則ち非眞と云ふ、則ち二のみ。是れ方便なり兩安相違せり、何を以てか會通するや。』答ふ、『此二文は猶是れ

【人天の五乗】人乗、天乗、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘。

【増上縁】四縁の一。色心萬法に通じ一法の結果に對して皆増上の用あるをいふ。

一義にして相違無きなり。一佛乘に於て方便して三と説き、次に一乘は是れ實、二は是れ方便なりと云ふ。人の手の内に實に一菓有り、方便して三菓と言ふが如し、次第に論ぜば一菓は是れ實、二は是れ方便なり。故に方便して三及び二を説く、是れ方便猶是れ一義にして相違せざるなり。』問ふ、『三を會して一に歸すと爲んや、二に會して一に歸すと爲んや。』答ふ、『此れ亦是れ一義なり。』智度論に云はく、『一佛乘に於て開して三分と爲す。人一斗の米を分ちて三聚と爲し、亦三聚を合して一聚と爲すことを得、亦二聚を會して一聚に歸すと云ふを得るが如し。三を會するも二を會するも猶是れ一義にして相違せざるなり。若し究竟して言ふことを爲しては中道を宗と爲す。論には性乗と云ふ。若し中に就いて談を爲さず萬善を乘體と爲す。萬善の中に般若を以て體と爲す、報習兩善には習因を取りて乘體と爲す、報因は生死に住すれば取らず。』問ふ、『若し爾らば應に人天の五乗を會して一乘と爲すべからず。』答へて曰はく、『人天は是れ報果にして、此れ乘體ならんや。習因の義有るが故に會す、乃ち是れ増上縁の義なり。別して論を爲せば、有漏の善は乘體に非ず。無漏の善を乘體と爲す。乘に二種有りて有漏の善を遠乘と爲し、無漏の善を近乘と爲す。乘に二種有り、一には動乘、二には不動乘なり、萬行を動乘と爲し如來藏の佛性中道を不動乘と爲す。』問ふ、『乘は運出を以て義と爲す。中道佛性は運出にあらず。云何が名けて乘體と爲す。』答ふ、『其不動なるを以ての故に能く萬善をして動出せしめず、亦行者をして生死を動出して彼涅槃に住せしむるが故に名けて乘と爲す。小乘初教には果を以て乘

【三車】羊車、鹿車、牛車、法華經譬喻品にあり。

【五】 同異を明す

【三乗教】一乗教の對。聲聞、緣覺、菩薩の三乘に區別を立てて、その行證みな異なりと教ふる教法をいふ。權大乘のこと。

と爲す、故に三車は門外に在りと言ふ、此は是れ盡無生智の果なり。大乘には因と果とを乘と爲す。問うて曰はく、『若し大乘には、因果を乘と爲すは何が故ぞ。經に佛果の上に於て、更に一乗の法を説くこと無しと言ふ。』答へて曰はく、『此は自ら運ばざる義に約して他を運ばずとは言はざるなり。』

【五】次に同異第三。有人言はく、因成假を乗用と爲す。一善は満たざれば乗用を成さず、故に合して萬を爲して方に運用有り。例せば梁椽等の如し、假に非ざれば即ち用有ること無し。二に言はく、相續を用と爲す、若し實法は念念に自滅して運用有ること無し。故に相續して用有るを爲すと。三に云はく、相待をいと爲す、此中に果一なるが故に因も一なり、善既に衆多なり、此一果を以て萬善を一にす。今明すらく、萬善に悉く運出の義有り、亦百流一に自ら向海の義有り、海一なるを以ての故に百流を一と爲さざるが如し。問うて曰はく、『若し因成に力有るに非ず、復相續に非ず。云何が一念實法の善に運出有るや。』答へて曰はく、『不運を以て運と爲し、不續を續と爲すが故に、終に是れ相待を本と爲す。是を以て相待に乗用有り。次に經文を引く。問うて曰はく、『經に十方佛土中唯有一乘法無二亦無三と云ふ、云何が無二無三と名くるや。』答へて曰はく、『有人の言はく、無二とは聲聞緣覺の二無く、無三とは偏行六度の菩薩無し。又昔の三乗は皆是れ方便なり、今の教別に一車有りて昔の三に異なるなり。』問ふ、『何を以てか然るや。』答ふ、『經に佛方便力を以て示すに三乗教を以てすと云ふ。通じて三を以て方便と爲す、則ち三を以て方便と

【三車四車の論】

法華經譬喻品の長者鬻兒の文を解するに、三乗家は謂く、一乗とは三乗の中、菩薩乘と同體なり、三の乗に二を廣して一を立つるのみ、三の外に別乘あるにあらず、されば宅内の三車と宅外の大自牛車と別物にあらず、三車中の牛車と、依つて之を三車家と稱す。然るに一乘家は謂く、三乗中の菩薩乘は實因實果あるにあらず、但是れ假説なり、三乗と開會して眞實の一佛乘と説く、教理行果並に彼と異なれり、されば羊鹿牛の三車の外に別に大自牛車の一車あり、權實合せて四車ありと、依つて一乗家を呼ぶに四車家の稱起り、互に相諍論せり。

大乘玄論卷第三

爲せば則ち一を以て眞實と爲す、則ち昔の三乗を會して、今の一實に歸するなり。又願賜我等三種寶車と云ふ。昔既に三を索む、今便ち一を賜ふ。故に與へざる所を索め、索めざる所を與ふ。故に知んぬ、別に大車有りて、昔の三に異なり。小か文理を以て之を推るに、則ち四車有り。

評して曰はく、三車四車の評論紛紛として、由來久し、之を了すれば則ち一部に通ずべく、之に述はば則ち八軸皆塞ぐ。今八文を以て之を徴して方に此釋の謬りたることを見ず。第一の文に云はく、如來は但一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を説きたまひ、餘乘有ること無し。若二若三此文次第に三乗を列ぬるなり。但し一佛乘を以てとは、謂く、佛乘を第一と爲すなり。無有餘乘若二若三とは、緣覺を第二と爲し、聲聞を第三と爲すこと有ること無し、此文を以て之を評にするに則ち三車のみ有り。則ち四を執するを謬と爲す。問うて曰はく、『經に常に三乗を列ぬるに、次二次第を作らず。今何を以て然るや。』答へて曰はく、『佛乘を以て第一と爲し、緣覺を第二と爲し、聲聞を第三と爲す。此れ上より數へて下に至る、豈次第に非ずや。』問うて曰はく、『何が故に、此次第を作るや。』答へて曰はく、『此れ正しく三乗の有無の義を判するなり。初句は唯一佛乘のみに有ることを明し。次の句に無二無三といふは、餘乘無きを明す。唯一佛乘のみ有るを以ての故に、佛乘を實と爲す。二無く三無きが故に、一乘を方便と爲すなり。又『普同品』の中に亦佛乘を列ねて、初と爲し。次に緣覺に及び、後に聲聞を明す、今と同じきなり。第二の文に云はく、尙二乘無し、

【像末】 像法末法のこと。像法とは佛滅後五百年の正法。末法とは佛滅後千五百年の正像二時過ぎて後一萬年間をいふ。

何に況んや三有らんや。大いに攀泥を論ずれば、皆勝を擧げて以て劣を況す。若し第三は是れ偏行六度の菩薩なりと言はば、三乗の中には佛乘を勝と爲し、二乗を劣と爲せり。若し第三と言はば、乃ち應に三を擧げて、餘二を況すべし。云何が二を擧げて第三を況するや。三とは偈に云はく、唯此一事のみ實にして、餘の二は則ち眞に非ずと。唯此一事とは、即ち一佛乘のみ實なり。餘の二則ち非眞といはば、緣覺と聲聞との此二は眞に非ざるなり。則ち偈の文を以て、長行の無二無三の意を釋するなり。佛は、像末は鈍根にして、經を尋ぬるに解せざらんことを恐るが故に、轉勢して之を頌め、煥然として悟り易からしむ。第四の文に云はく、諸佛の語は異ること無し。唯一にして二乘無し、全く前に同じ。第五の文に云はく、但一乗の法を以て、諸の菩薩を教化し、聲聞の弟子無し。此文は最も分明なり、既に但一乘を以て菩薩を教化すと云へば、則ち菩薩のみ有るなり。聲聞弟子無しとは、則ち餘の二乘無きなり。六には信解品に云はく、「密に一人を遣す」と。七には化城喻品に云はく、「世間に二乘にして減度を得る有ること無し」と。唯一佛乘のみ減度を得るのみ。八に偈に云はく、「唯一佛乘のみ有り、息慮の故に二と説く」と、諸文甚多し、略して八證を擧ぐるに、此釋既に非なり。則ち四乘の義謬なり、會三も亦失せり。復有人の言はく、但三乗のみ有り。三に會して一に歸すとは、三の中の佛乘に歸して、三の外に別に一有るに非ざるなり。評して曰はく、若し但三乘有りとせば八證に違せず。經の首尾を尋ぬるに復六文を審す。佛方便力を以て三乘經を示したまふ。則ち知んぬ三乘は皆是れ

方便なり。云何が二の方便を會して、一の方便に歸せんや。又云はく、「一佛乘に於て分別して三と説く」と。又云はく、「一佛乘に於て宜しきに隨つて三と説く」と。又諸子三を索むるに父皆與へず、明らけし、三の趣、索むべき無きなり。一を以て機に賜ふ有り、若し三の中の一は是れ實有ならば、諸子は索むる所無く、父は賜ふ所無きなり。又虚しく門外を指して、三車有りと明すも、諸子門を出でて三の見るべき無し。若し三の中の一は是れ實有ならば、父虚しく指すに非ず。子出でて應に見るべく、又三の中の一は是れ實ならば、則ち會二歸一にして、會三歸一と名くべからず。」

問ふ、「四を立つれば則ち八證に違し、三を辨ずれば復六支を害す。請ふ之を會通して蒙諦無からしめよ。」答ふ、「世間の淺識すら言相違せず。況んや復一切智人の説應に鉅楯すべけんや。又如來八萬の法藏乃至塵沙の法門を説きたまふなり、尙二言無し。況んや一經の中に應に兩説有るべけんや。此を以て之を推するに、是に知んぬ失學人に在り、何んが復敢て大聖を嫌はん。今明す所は八證六文猶一意なるのみ。且く二文を會して餘は皆領すべし。一に方便説三と云ひ、次に唯一是實餘二非實と云ふは、唯一佛乘も衆生を引導せんと欲す。故に方便して三と説く。實を考へて言はば唯一佛乘のみ。是れ實にして餘の二は眞に非ず。是故に三と説き、二と説くも、猶一の意なるのみ。近喩を假設して以て遠旨を況せば、父の手中に唯一菓有るのみ、諸子を引かんと欲して一菓を説いて、三菓と爲すが如し。實を考へて論ぜば、唯一菓のみ有りて二菓無し。是故に二文相違無きなり。三二既

【次に】以下、四句を論じて、その異を述ぶ。

に明なるを以て、會の義領すべし。隨『法華論』を見るに、十方伽土中尙二乘無し、何に況んや三有らんと釋する、今の意と同じきなり。論に云はく、「是は此れ遮とは、二乘に涅槃無く、唯佛の究竟無上菩提のみ大涅槃有ることを明すのみ」と。此は但二乘有ること無く、唯佛乘のみ有ることを明し、偏行六度の菩薩無しと言はず。故に光宅は旨を失す。

次に四句を論ず。問ふ、「會三歸一と破三歸一に開三顯一と廢三立一と何の異りか有る。」答ふ、「會三歸一とは、乃ち教を會し、行を會し、緣を會するなり。教を會すと云ふは、昔三乘五乘の教を聞くことは、並に一道を顯せんが爲なり。所表の道は既に一なり、能表の教をも亦復一と言ふ。故に一切の教を皆大乘と名くるなり。行を會すとは、汝等が所行是れ菩薩の道なり。如來昔三行を有と説くは、一道に趣かんが爲の故に、三行を修せしむ。所期の道は無二なり、能趣の行豈三ならんや。言ふ所の人を會すとは、如來の出世は本菩薩を教へんが爲に餘人を教へず。三の所行既に是れ菩薩の道なり。能行の人は皆菩薩を成するなり。故に文に「但爲教菩薩無聲聞弟子」と云ふ。教を會すれば正しく是れ一時なり、行及び人に會すれば遠く佛に至らしむるなり。問ふ、「會に幾種か有る。」答ふ、「自ら融會を會と稱する有り。自ら會歸を會と稱する有り、向に明すが如し。融會を會と稱すとは、既に三を會して一に歸し竟んぬ。緣は即ち疑つて云はく、三若し一に歸せば、何が故に三と説く。是故に釋して言はく、昔方便を以ての故に三と説く。今如實を以ての故に三と説く。此は是れ今昔三一の義を融會すれば、亦會と名くるなり。若し是れ會歸の義ならば、

【融會】差別隔歴なきこと。

【身子】佛十大弟子の一、舍利弗

【問ふ】以下、索車の主義を明す。

正しく三行に就く、融會の義ならば、宜しく教門に就くべし。然る所は、若し三因を會して同歸作佛する、是の如きの義は行を會するを正と爲し、教門作佛を用ひず。故に教は會歸に非ざるなり。問ふ、『有人の言はく、此經には未だ佛性を明さず。但緣因を明す。復言はく、覆相して常を明すといふ、此義云何。答ふ、『乃ち是れ成論淺悟の徒、此の如きの失有り、大寶に値ひて取らず、深經に遇ひて求めず。豈弱喪と窮子と舍宅を反走するに異ならん。此經に云はく、「常に靈鷲山に在り、常に此に在りて滅せず。劫火燒盡する時我淨土毀れず、既に依正兩報常住なり」と言ふ。又『法華論』に壽量品の文を釋するに、法身の壽量、報佛の壽量、化身の壽量有りと云ふ。豈常に非ずや。又處處に法性を明せり、法性はこれ佛性の異名なり。身子言はく、「我等同じく法性に入る、云何が如來小乘の法を以て、濟度するを見ん」と。又方便品の初に佛知見を明す、即ち是れ佛性なり。乘に三種有り、理乘は即ち是れ中道佛性、行乘は即ち是れ緣因佛性、果乘は即ち是れ果佛性なり。因因性と境界性とは正因に屬し、果果性は果性に屬す。故に五性を聞せざるなり。

索車の義第二。問ふ、『是れ三人三を索むと爲んや。是れ二人三を索むと爲んや。答ふ、『舊經師云はく、三人は三尊を索むるなり、何を以てか然りと知る。下の文に云はく、「爾時諸子各父に白して言はく、願くば我等に三種の寶車を賜へ」と。故に知んぬ、三人は三を索むるなり。又三を索むる所以は、實に三乘無く、但昔一佛乘に於て方便して、三と説くなり。是れ方便行なるを以て索むるなり。

【習氣】 煩惱の餘
 薫を習氣といふ。
 【正使】 煩惱の體
 のこと煩惱は靈魂
 を驅使して迷界に
 流轉せしむるが故
 に使といふ。

評して曰はく、今十義を以て之を推するに、應に三人の索有るべからざるなり、一には、本三車を以て三果に譬ふ。故に云はく、今此三車は皆門外に在り。二乗の人は内外に出でて許車の處に至りて、果を覓むるに得ざらば果を索むと言ふべく、菩薩の人は未だ許處に至りて、佛果を覓むるに得べからざるにあらず。何んが佛果を索むること有らんや。答へて曰はく、「素意を原ぬれば、本昔は有、今は無と爲す、是故に索ぬるのみ。若し今昔俱に有らば必ず索めざるなり。大小乘經の始終を尋ぬるに、皆佛乘是れ有なりと明す。初教に佛乘は是れ有なりと明すが如く、『法華』に至りても亦佛乘は是れ有なりと明す。始終佛乘は是れ有なりと有すを以ての故に、索めざるなり。開ふ、一乘は何物を以てか障となす。答ふ、『大論』に既に六度を以て大乘の體と爲す。六弊は即ち是れ障なり。若し乘出の義を取らば、即ち生死に著するを以て障と爲す。若し乘の廣大の義を取らば、即ち狭劣を以て障と爲す。若し出世無所得の六度を以ての故に能く動出せば、即ち有所得の六度を以て通障と爲し、六弊を別障と爲せ。譬の中に三車門外に在ると云ふは、此れ總相の説なるのみ。昔の義に依らば、二車は三界の正使門の外に在り。佛果は習氣無知門の外に在り。二乗の人は正使の限域を以て、門と爲し、佛は無智習氣の限域を以て、門と爲す。昔は二乗の人蓋無生智は、三界の正使門の外に在りと説けり。今は二乗の人は正使を斷じ、盡すも商も車を見ず、是故に索むるのみ。昔佛果は習氣無知門の外に在りと説き、今菩薩、正使を斷じ盡せば、習氣無知、即ち盡きて即便成佛しぬれば亦索むる無きなり。」

【伽耶】 佛成道の
伽耶地。

【地上】 菩薩五十
二位の階位中、初
地即ち歡喜地以上
【地前】 菩薩五十
二位の階位の中、
十地以前即ち十信
十住、十行、十廻
向の菩薩をいふ。

問ふ、「何の時にか車を束むる。審ふ、一舊に云はく、羅漢を得已りて後、法華の前に束
むる有り。又難すらく、「若し未だ法華を説かず、已に疑を生ぜば、身子、果を得竟りて應
に「我今自於智疑惑不能了爲是究竟法爲是所行道」と言ふべし。豈法華を待ちて方に此釋の
索有らんや、故に今明すらく、法華を待ちて方に束むるなり。次に一乘の壽量の果を論ぜ
ば有人の言はく、未だ常住を明さず。又難すらく、若し五百を度して未だ常ならず、亦應
に未だ五百を度せざるべく、即ち是れ常なるべし、若し未だ度せざる常に非ず、則ち已に
度を、是れ常なるべし。又經に佛五百を度すと云ひ、未だ度せずと言ふは、佛は昔三百
を度すと明す、亦應に未だ度せざるべし。若し昔三百を度すと云ひ、佛實に度すとは今
亦應に實に五百を度すべきなり。若し經に願するが故に、遂に五百を度せば、則ち已に三
相を免る、何の事もてか常に非ざらん。今釋する所は、壽量中に亦具に三身を明す。『法華
論』に云はく、「王宮に生を現じ、伽耶に成佛するを名けて化身と爲す。久已成佛し乃至復倍
上數の故に名けて報佛と爲す」と。如實、知見、三界の相、無有生、死、若退若出とは、法
身佛を明すなり。但し三身不同なり。若し『法華論』に三身を明さば、佛性を以て法身と爲
し、修行して佛性を顯すと爲し、衆生を化するの義を化身と爲す。若し『攝大乘論』
に明す所は、隠れたるを如來藏と名け、顯れたるを名けて法身と爲すのみ。此二を皆法身
と名く。應身の中に就いて自ら開して二と爲す、菩薩を化するをば報身と名け。二乘を
化するをば化身と名く。或は云はく、地上を化するを報身と名け、地前を化するを化身と

名く。『地論』、『法華論』は是れ菩提留支の出す所、『攝大乘』は是れ眞諦三藏の翻する所。此三部は皆天親の述作する所なり。而も義を明すに異有ることは或は當譯の人の其意を體せざるなり。今融せんと欲せば衆經及び論を會すべし。或は二身、或は三身、或は四身、今總束して四句と爲す。一には、本迹を合して『金光明經』の如し。但し一の本迹を辨するなり。故に眞法身は猶ほ虚空の如く、物に應じ形を現じ水中の月の如しと云ふ。二には、本を開き迹を閉く、此の如く大凡論するに四佛有りと明す。本を開して二身と爲す、一は法身、二は報身なり。法身は即ち佛性なり、報身は、謂く、因を修し迹を滿ざるなり。二身と爲し菩薩を化するをば舍那と名け、二乗を化するをば釋迦と名くるなり。三には、本を開き迹を合す、『地論』、『法華論』に明す所の如し。本を開けば、謂く、二身なり、謂く、佛性はれ法身、佛性の顯れたるを報身と爲すなり。四には、迹を開し本を合す、『攝大乘論』に明す所の如し。佛性及び佛性の顯れたるを合し皆法身と名くるなり。迹身を閉して二と爲す。菩薩を化するをば舍那と名け、二乗を化するをば釋迦と名く。此皆經論の義に隨ひ之を説く。違せざるなり。亦皆其意を體らざるが故に、評論を起すのみ。若し常無常とは、別して言を爲さば法應二身を常と爲し、化身は無常なり。通じて言を作さば三身は俱に常、俱に無常なり。化身は大悲を以て體と爲すが故に、是れ常なり。法身は隱顯有るが故に、義説すれば無常なり。應身は始起の義なれば、是れ無常なり。『金光明經』に應化二身は無常と云ふは、迹を開き本を合するなり。二問ふ、『三身に幾の名か有る。』答ふ、『經論不

同なり。法身、舍那身、釋迦身、亦是法身、報身、化身と名け、亦是法身、應身、化身と名け、又は佛所見身、菩薩所見身、二乘凡夫所見身、法身と名け、亦是自性身と名け、又は法性身と名く。「問ふ、「若し是の如くならば、應に六身八身有るべく、應に一佛身に本迹二身有るべし。何が故に但三身を明すや。」答ふ、「法華論」に依らば二身を自徳と爲し、化身を化他の徳と爲す。「擇論」には法身を自徳と爲し、二身を化他の徳と爲す。若し爾らば法身を自徳と爲し、化身を化他徳と爲し、應身は亦自亦化他なり。故に三身を立つ。亦はいふべし、法身を體と爲し、報身を相と爲し、化身を用と爲す。體相用の故に三身を立つるなり。

涅槃義三門。

一には釋名門。二には辨體門。三には八倒門。

【一】涅槃とは蓋し是れ安心の本宅、凡聖の同じく歸する所なり。故に聖公云はく、「九流は是に於てか交歸し、群聖は是に於てか冥會す」諸の「方等經」に亦盛に此説を談ぜり。摩訶をば大多勝と言ふ。大いに二種有りて教大、理大なり。理大とは文に云はく、言ふ所の大とは之を名けて常と曰ふ。莫先を相と爲し涅槃に二家有り。一に云はく、有翻。二に云はく、無翻なり。無翻に四家有り。一に云はく、佛西國に在りて涅槃したまへり、東土に此語有ること無し、故に無翻なり。二に云はく、涅槃の一名に衆名を含む。其れ猶一音に無量の音を含むが故に、一音に法を説いて以て異類各解するがごとし。三に曰はく、涅

【一】 釋名門を明す。

【一音】 一音教のこと。佛は別に説法し給はざるも、衆生よく佛聲を聞きて種種に利益を得るといふ意。

【斷徳】三徳の一
 一切の煩惱惑業を
 斷盡せる如來の徳
 をいふ。

繫の一名に衆義を含むが故に、常樂我淨等有り。四に云はく、涅槃の一名に衆名を含まず、亦衆議を含まず。但し涅槃の一名を以て通じて諸法に名く。其れ先陀波の一名四寶なるが若し。同じく無翻なり。有翻に六家あり。一には無爲と云ひ、二には無累と云ひ、三には解脱と云ひ、四には寂滅と云ひ、五には但滅と云ひ、六には滅度と云ふ。若し涅槃不翻と言はば、漢地の衆生には應に利益無かるべし。二には、大本には大覺尊將欲涅槃と云ひ。六卷に此文處に當りて、大牟尼尊今當滅度と云ふ。經に既に翻有り、云何が翻せざらん。今有翻の第六家に同じ。但し彼は一向有翻なり。今明すらく、相待の涅槃には翻有り、絶度ならば、法も亦應に度なるべし。生起涅槃には人法俱に有り、亦應に滅法度とも言ふべし。開善云はく、「滅度の名は皆無法に目け、度をば永滅と言ふ」と。今明すらく、若し凡夫の滅は永滅ならざるが故に、度を明さず、暫滅の故に滅と名け、亦應に暫度の故に度と名くと言ふべし。靈正云はく、「滅は無を主とし、度は有法に目け、斷徳を擧げて妙有と目く、間體は煩惱を生ぜざれば涅槃と爲す」今明すらく、若し煩惱を生ぜざるを涅槃と名け、智に由らざる滅を涅槃と名くるや、今明すらく、涅槃は四句を離れたり。中道の正觀は永く免れたれば正度と爲す。人を持て之を怙みて人に目け、法を持て之を怙みて法に目く。度を至論すれば人に非ず法に非ず、此は是れ正度なり。此正法有所得を離れて、假名の義なるを名けて正度と爲す。涅槃に名無し、強ひて爲に名を立つるなり。

【二】辨體を明す

【初地】十地の第一地。歡喜地。

【二】辨體第二。靈正の云はく、涅槃の體とは法身是れなり。此法身を尋ねれば更に遠き物に非ず。即ち昔の神明は今の法身を成す。神明既に是れ生死萬果の體なり。法身も亦是れ涅槃萬徳の體なり。今明すに然らず、用を以て體と爲して涅槃の深體に及ばず。今中道の正法を以て、涅槃の體と爲すなり。開善云はく、「總て萬徳の體無果なるを滅度と爲すと明し、經の初に三徳を明すことは、昔日の二種の涅槃に簡異す。有餘の時には、身智解脫に在りて滿たす。無餘の時には解脫滿ちて身智在らず。今日の涅槃には身智解脫に在りて、三徳の中に滿てり、法身を體と爲し、波若解脫を用と爲すなり」今明すらく、萬徳三徳を體と爲せば、此を離れて別の涅槃の用の望むこと無からん。若し法身を體と爲すと云はば萬徳有ること無し。云何が是れ涅槃の體ならんや、今明すらく、涅槃の體とは、正法を體と爲す。而も正法は能所、四句、百非を絶てり。故に「中論」の涅槃品に云はく、「有も亦涅槃に非ず、無も亦涅槃に非ず、亦有亦無、非有非無も亦涅槃に非ず。得無く至無し」得無しとは、因果の得る所に非ず。至無しとは、至るべき處として無きなり。開善云く、「凡夫は會ならず、冥ならず。初地以上は亦會亦冥なり。佛果は冥にして會ならず」又云はく、「金剛以還は會にして冥ならず。佛果は亦會亦冥なり」

今明すらく、若し初地以上は冥の義ならば、應に常なるべきや。亦常亦無常俱に有りや。佛果冥一ならば知一と爲んや。境一と爲んや。一は何に口くる所ぞ。若し智、境と成らば智無けんや。彼云はく、「至亡彌存なり」至亡の義なれば一を成じ、彌存の義なれば衆生を

【度衆生】衆生を濟度すること。

【問ふ】以下、涅槃に就て、地論、成論、正法の異を述ぶ。

度す。彼云はく、「初地以上は境に稱へて智なれば、是れ會の義なり。而も有なれば非常方所にして冥一なるを得ず。佛果には萬累永く絶ちて、方所有ること無きが故に冥なり。若し一を成せば、度衆生の義有ること無く、彌存成せず」今明すらく、波若無知の故に冥なり。知らざる所無きが故に彌存なり。縁の爲の故に冥なり。縁の爲の故に彌存なり、定んで冥存の有るに非ざるなり。地論に云はく、「性淨方便淨涅槃あり。性淨涅槃とは、是れ本有の理の顯現するを性淨涅槃と名くるなり。緣修の萬徳を方便淨涅槃と名くるなり。二涅槃の體は別異なり」今明すらく、二涅槃の體は別無く、一に非ず。異に非ず、亦一亦異に非ず、四句を絶すを涅槃の體と爲す。成實師云はく、「本有始有の涅槃の體は一なり。若し一ならば始有一なりと爲んや、本有一なりと爲んや。何の處にか本有始有を離れて、別に涅槃の一なること有らん」今明すらく、本有に於て始有と名け、始有を本有と名く。本有を離れて始有有るに非ず、始有を離れて本有と名くるに非ず。四句を離れたるを、本有始有の二涅槃の體と名くるなり。地論師の性淨涅槃に二種の解有り。一に云はく、本有萬徳有り。二に云はく、本有萬徳無し。但是れ萬徳の體なり、故に萬徳と言ふ。問ふ、「修成涅槃に假に萬徳有り。正法涅槃にも萬徳有りや不や。答ふ、「若し有ならば亦非なり、無ならば亦非なり、四句皆非なり。故に無受を涅槃と名くと言ふ。五種の不受を五不受三昧と名くるなり。」

問ふ、「地論師の性淨涅槃。成論師の本有涅槃。今日の正法涅槃は何の異ることが有ら

【阿摩羅議】梵音アムラ(Amra)無垢、白淨、清淨と譯す、淨議家の所謂第九識なり。

【毘曇】俱舍宗のこと。

【有餘】有餘依涅槃のこと。阿羅漢が煩惱障を斷じて涅槃を得たる場合に、猶ほ異熟の苦果たる五蘊假和合の依身の殘餘するありて、全く灰身滅智せざるをいふ

ん。「答ふ、『地論師は阿梨耶識。攝論師は阿摩羅識。成論師は成佛の理顯現するを名けて法身と爲す。定んで是れ有法なるが故に、常を以て經の宗と爲す。今明すらく、中道を佛性と爲す。中道に何の隱顯か有らん。若し常を以て經の宗と爲さば、大論に云はく、「無常一邊常を一邊と爲し、是れ常を究竟と爲すに非ず、純陀と哀歎には生死苦無常に對して、佛果は常樂なりと明す。後の迦葉に至りて涅槃は常に非ず、無常に非ず、有に非ず、無に非ず、因に非ず、果に非ずとす」と。今明すらく、四句百非洞達するを涅槃の體と爲す。常と無常とは、是れ用なり。諸の法師、但其用を得て深體を識らず。但涅槃を解するは、外道の三師、小乘の二説、方等の四計に同じからず、檀提婆羅門は此身即ち是れ涅槃なりと計す。蓋し欲界を涅槃と爲すこと明かなり。阿羅羅仙人は無想を計して涅槃と爲し、此は色界を計して涅槃と爲し、鬱頭蘭弗は非想を計して涅槃と爲す。三の外道は三有を以て涅槃と爲す。小乘の二師と毘曇は無爲を計して涅槃と爲す。是れ常、是れ善本有なり。煩惱の外に在り、煩惱を斷じて得を起して之を得て行者に屬す。成論の明す涅槃は但是れ無法なり。大乘の四種とは、一に明すらく、涅槃は是れ妙有を體と爲し、是れ世諦の法なり。二に云はく、空を以て涅槃と爲す。即ち是れ實相の第一義諦と名く。三に云はく、涅槃は眞に非ず俗に非ず、二諦の外に出でたり。四に云はく、四句を超出する、方には是れ涅槃なり。唯四師は大いに二義を明せり。成實明すらく、本有始有なり。地論師は性淨方便淨なり。攝論師は四種の涅槃なり。一は本性寂滅涅槃。二は有餘。三は無餘。四は無住處涅槃

【無餘】無餘依涅槃のこと異熟の苦果たる五蘊和合の身體もすべて滅して今は全く所依なきが故に名づく。即ち灰身滅智したる處に顯はるる涅槃。

【報障】衆生が惡業に依りて地獄畜生等の惡果報を受け爲に正道を聞くを得ざるをいふ。【業障】惡業の障り。惡業は正道を障蔽する故に業障といふ。【三業】身、口、意の三業。

【無段生死】三界生死の果報のこと【變易生死】變易不思議生死のこと

槃なり。法身の故に生死に住せず。應化二身の故に涅槃に住せず。次に無我真如の理、又は三無性の理を用ひて、無住處涅槃と名く。諸師同じく釋すらく、涅槃に三徳を備ふ。謂く法身般若解脱なり。三徳を涅槃と爲す所以は、略して四種の義有り。生死と涅槃と相對するに、生死に三の障有り。謂く、煩惱業苦なり。報障に對するが故に法身と名け、業障に對するが故に解脱を辨じ、煩惱障に對して波若を説く。二には、如來の三業自在なることを顯さんと欲するなり。法身有るが故に、身業自在なり。波若を具するが故に、口業自在なり。解脱有るが故に、意業自在なり。三には、境として照せざること無ければ、名けて婆若と爲し、惑として應ぜざること無ければ法身と名く、累として盡さざること無ければ解脱と稱す。故に三徳を宗と爲す。四には、二乗の三徳の圓ならざるに對せんが爲なり。身智有るときは解脱足らず、解脱亦圓なるときは則ち身智無し。故に如來の三徳圓備と名く。成論に云はく、「佛果を妙有と名く」若し爾らば應に是れ妙爲なるべしや。若し妙の故に爲に非ずば亦妙の故に有に非ざらん。彼云はく、「有は是れ法體なり。爲は即ち是れ相なり。佛果は是れ法體の有にして、已に生滅の相を離るるが故に、是れ有爲に非ず」並べて云はく、若し涅槃、相を離るるが故に爲に非ずとは、亦應に始を離るべし。故に生に非ざるなり。若し始起の故に生と名けば、亦始起の故に爲と名けん。又竝に若し有なれども、面も爲に非ざれば、亦應に爲なれども、而も有に非ざるべし。成論師の云はく、「四種の生死有り。流來生死。分段生死。八地已上は變易生死。七地は

【三阿僧祇】三無數劫のこと菩薩が佛果を得るまでに經たまふ修行の年時。

中間生死なり一攝論師云はく、「七種の生死有り。三界分段を三種と爲す。變易に四種有り、初二三地を方便生死と爲し、四五六地を因縁生死と爲し、七八九地を有有生死と爲し、第十地を無有生死と名く」夫人經に言はく、「有漏の業因四住を縁と爲して、分段生死を感ず。無漏業因無明住地を縁と爲して、變易生死を感ず」今方便生死と言はば、即ち是れ無明住地なり。因縁生死とは即ち是れ無漏の業なり。有有生死とは即ち是れ生住二相なり。無有生死とは即ち是れ滅相なり。若し通じて論を爲さば、一一の地に皆四種を具す。地前の三阿僧祇、地地の三阿僧祇、三十三の阿僧祇なり。今經論に望するに定り無し。若し無量阿僧祇と言はば、是れ小劫なり。三十三阿僧祇と言はば、是れ中劫なり。三阿僧祇劫に成佛すとは是れ大劫なり。有人言はく、「初發心より五住煩惱を斷ず、同躰同細なり」又言はく、「地前に四住の煩惱を斷ず」又攝論師は地前に四住の上心を伏し、初地已上に方に種子を斷ず。成論師明すらく、地前に見諦を伏し、初地に上品を斷じ、二地に中品を斷じ、三地に下品を斷じ盡す。四地に修道の上品を斷じ、五地に中品を斷じ、六地に下品を斷じ盡す。七地に習氣を斷じ、八地已上に無明の三品を斷じ盡す」今明すらく、十信に見一處住地を伏し、十解に欲愛住地を伏し、十行に色愛住地を伏し、十廻向に有愛住地を伏し、初地初心に四住地を斷じ盡す、初地已上に十重の無明を斷ず。地持論に云はく、「二障は三處に過ぐ、地前には一向に伏す。」初地より十地に至るまで、煩惱障を斷じ盡す。初地より智障を斷じて金剛心に至りて智障習氣を斷ず。問ふ、「他家と何んが異なるや。」答ふ、「他家の生死

は此に在り。涅槃は彼に在り。衆生は生死に在り。佛は涅槃に在り。今明すらく、生死は
 即ち涅槃なり。故に『中論』に云はく、若し如來の性を求むれば、即ち是れ衆生の性なり。涅
 槃性を求むれば、即ち是れ世間の性なり。故に經に云はく、「明と無明とを愚なる者は二と
 謂ひ、智者は其性無二なりと了達す。若し生死を捨て別に涅槃を取らば、是を愚人と爲し、
 生死を離れざるなり。若し生死涅槃と差別有ること無しと知らば、方に涅槃を得るなり。
 他家は前に煩惱有りて、後に智慧を起して彼煩惱を斷す。内外大小乘皆煩惱生ずる有り
 て、今斷滅すと言はば即ち煩惱滅せざるなり。今煩惱を求むるに、本より生ぜず、今亦滅
 無し。若し能く是の如く知らば、前念を無礙と爲し、後念を解脫と爲す。故に能く惑を斷
 す。外人は煩惱と不煩惱との二を見る。即ち明と無明とを愚者は二と謂ふに同じ」と。今明
 すらく、煩惱と不煩惱とは本二相無し。故に能く惑を斷す。爾ふ、「何を以てか知ることを
 得ん。地前をば分段と爲し、初地已上をば變易と爲んや。」答ふ、「涅槃』には初地の菩薩は
 二十五有を破して、金剛三昧を得と云ひ、『法華論』には、初地以上には有無雙照して、變
 易身を受くと云ふなり。若し麤小入大の聲聞は、初發心より變易の果報を受くるなり。『問
 答』、『成論師は一向實行の聲聞無しと云ふ、此義は理と爲んや否や。彼言はく、『夫人經』に
 三乘の初業は法に於て愚ならずと云ふが故に。』答ふ、「此義然らず。一切經論に皆聲聞有り。
 『法華經』の中に「內秘菩薩行外現是聲聞」とは權行聲聞なり。故に權實の二種の聲聞あり。
 『夫人經』に法に愚ならずとは、是れ利根の人に於て、是れ鈍根の能く爾るに非ざるなり。』

【三】 八倒を明す
【八倒】 凡天の四倒。二乗の四倒。

【不淨觀】 衆生の不淨なるを九想に分つ。辟裏想、青瘀想、壞血、血塗漫想、膿血想、虫噉想、散想、骨想、燒想。

【三】 八倒第三。問ふ、「經に三修八倒を明す。何等か是れ三修比丘なるや。」答ふ、「三修とは、一には常無常。二には苦樂。三には我無我なり。常とは凝然なり。無常とは遷流なり。樂とは愜愈なり。苦とは逼惱なり。我とは性實なり。無我とは不自在の通稱なり。修とは習の義なり。然も此三種相對合辯して名けて三修と爲す、離して説かば即ち是れ六修なり。若し具足しては應に是れ四修なるべく、離せば即ち八修なり。謂く、淨不淨なり、淨不淨を除いて但三修六修を明す所以は、不淨觀は是れ遠方便なり。因の中に不淨觀を除くが故に、果の中に淨觀を除く。若し八倒治するに對せば、應に八修を辨すべし。因の中には苦無常無我不淨なり。果の上に常樂我常を取るが故に八修なり。有人の言はく、「六修は皆是れ俗觀なり」と。又言はく、「果の上の三修は一向俗觀なり。因の中の前の三修は是れ俗なり。無我は是れ眞なり」と。今明すらく、通じて皆是れ俗、皆是れ眞なり。八倒とは前倒は常樂我淨外道の時に四倒を起す、謂く、常倒、樂倒、我倒、淨倒なり。佛は四倒を破するが故に、無常苦無我不淨と説く。比丘佛果の上に更に苦無常無我不淨を起し、更に後の四倒を起す。謂く、無常倒、苦倒、無我倒、不淨倒なり。前の倒と後の倒とを合せて論するが故に八倒有り。外道の起すには、生死に常樂我淨有りと計す。佛初めに四諦を説きて四倒を破して、生死の中には但苦無常無我不淨のみ有りて、常樂我淨有ること無しと説きたまへり。比丘此を聞きて、但生死のみ苦無常無我不淨なるに非ず。佛果も亦苦無常無我不淨なり。後の四倒を起すが故に。「涅槃」に云はく、「但生死苦無常無我不淨なり。」

【八倒】 八倒の體を明す。

佛果は是れ常樂我淨なり」と。其佛果苦無常無我不淨を破するが故に、八修八倒有り。若し外凡夫の八倒を起すは是れ見諦の煩惱なり。若し學人の八倒を起すは是れ修道の煩惱なり。若し羅漢の八倒を起すは是れ界外の煩惱なり。

八倒の體とは、謂く三倒是れなり。一には心倒、二には想倒、三には見倒なり。謂く、一切の心の了別、是れ心倒なり。一切の心の想像、皆是れ想倒なり。一切の心の決了を見倒と名く、今用ふる所なり。生死の中の四倒は、正は生死の無常苦に迷ひ、傍に佛果の常樂に迷ふ。果の上の四倒は、正は佛果の常樂に迷ひ、傍に生死の無常苦に迷ふ。然る所以は生死常なりと計し、但無常を識らざるに非ず、亦常をも識らず。佛無常なりと計すは、但常を識らざるに非ず、亦則ち無常をも識らず。問ふ、『若し常を計するは、正は無常に迷ひ、傍に常法に迷ふ、無常を計するは、正は常に迷ひ、傍に無常に迷ふは無常を解るの解りなり。即ち常を解り常を解るの解りなり。即ち無常を解ると言ふことを得るや不や。』答ふ、『惑性は浮漫なれば、一惑兩迷なりと言ふことを得、解性は漫ならず。無常を解るの解なれば常を解らず。常を解るの解なれば無常を解らず。倒を起す人とは、外凡夫の人は前の四倒を起すなり。内凡の位に入りて復之を起さず。後の四倒は内凡位に入り、乃至羅漢之を起す。『智度論』に云はく、『三倒生ずる時には前に想心を起し、後に見倒を起す。此は輕より重に至る。斷ずる時には前に見倒を斷じ、後に想心を斷ず。四倒の體とは『婆沙』に云はく、『慧數を以て體と爲す』と。前の倒は是れ凡夫、後の倒は是れ聖にして、合論して

八倒を具するなり。外の謂く、「無常を常と見るを倒と爲し、無常を無常と見るは倒にあらす」と。今「中論」に依るに、倒と不倒とは皆倒なり。前後の八倒、前後の八行は皆倒なり。故に十六倒なり。常、無常、亦常、亦無常、非常、非無常、四句皆倒なり。我樂淨に皆四句あり、皆生死の十六倒なり。佛果の上の苦無常無我到各四句あり、合して十六倒なり。併合して三十二倒なり。」

【問ふ】 斷伏を明す

問ふ、「前に斷伏を明す。何なる文を以てか初地に見諦と思惟とを斷ずることを證するや。」答ふ、「三住論」に云はく、初地に見諦を斷じ盡す。又三界の思惟を斷ず。問ふ、「何なる文を以てか初地以上に十重の無明を斷ずることを證するや。」答ふ、「相續解脫經」には、二十二愚を斷すと云ひ、初地に二愚を斷じ、第十地に二愚を斷じ、金剛心に二愚を斷す。合して二十二の無明と爲す。「攝論」には、十重の無明を斷すと云ひ、初地に凡夫性無明を斷す。問ふ、「何の意を以てか、初地に凡夫性の無明を斷ずるや。」答ふ、「地前に猶習有るが故に、二種の我を離るるとも未だ生法二空を眞證せず。初地以上には、生法二空を眞證するなり。凡夫性の無明を開して二と爲し。一には一切法を障ふる無明なり。二には三惡道を潤す無明なり。」問ふ、「何をか人の斷伏と爲すや。」答ふ、「内凡夫は惑を伏し、聖位斷なり。有人言はく、「十解の六心を外凡夫と爲し、七心以上を内凡夫と名く」と。今明すらく、若し位退に就いて論を爲さば、十信の六信を外凡夫と爲し、七信以上を内凡夫と名く。若し發心に就いて論を爲さば、未だ十信に入らざるを外凡夫と名け、十信の初心を

【三惡道】 地獄餓鬼畜生の三惡道なり

【增上慢】殊勝の法及び證を得ずして、得たりと思ひたかぶること。

【惑】正道のさばりとなるもの煩惱のこと。煩惱は有情の心性を迷惑するが故に惑と名づく。

【次に】假伏中斷を明す。

内凡夫と名く。問ふ、『空智を斷ずと爲んや、有智を斷ずと爲んや。』答ふ、『經に云はく、佛増上慢の人の爲に煩惱を斷ずと説く。實には斷ぜざるなり。又經に斷と云ふ。何者か是なるや。若し煩惱有りと言はば斷ずること能はず。煩惱無くば何の所斷ぞや。若し斷と言はば、惑を見て斷ずと爲んや。若し惑を見て斷ぜば即ち明と闇と並ぶ。云何が煩惱を斷ぜん。若し見せずして懸に斷ぜば、天竺の燃燈は振旦の闇皆破せよ。此の如く之を推するに、即ち畢竟じて斷ぜず。此の如く了悟する、即ち是れ斷なり。有所得の人は、空解は斷じ、有解は斷ぜずとす。今明すらく、有所得の人は空有俱に斷ぜず。無所得は空有俱に斷ず、自ら中伏假斷する有り、性の有無を求むるに、不可得なるが故に、非有非無と名くるが如し。但性の有無を伏して猶未だ斷ぜざるなり。次に假有假無を明す。即ち性の有無始めて斷ず。既に假有假無を識りて、畢竟じて定性の有無有ること無しと知る。故に假斷と名く。

次に假伏中斷と云ふは、性の有無に對して、假の有無を説いて以て性の有無を伏す。故に假伏と云ふ。假有なれば有ならず、假無なれば無ならずと悟るを中道と爲す。前の性の有無の惑斷の故に、假伏中斷と名く。亦假伏假斷中伏中斷なることを得る。假の有無を識りて、即ち性の有無永く斷ずるが如きを名けて假斷と爲す、自ら假の有無を識り、但性を伏すること有るなり。問ふ、『金剛心に惑を斷じ盡すや。』答ふ、『聞善の云はく、『佛地に惑を斷じ盡す』と。』夫人經に佛智の所斷と云ふは、佛菩提智の所斷なり。今明すらく、金

剛心かうしんに惑わくを斷だんじ盡つくす。『夫人經』に斷だんと云いふは、解脫げだつ道だう未來みらいを遮しやして生しやうぜず、正まさしく是これ金剛心かうしん無礙道むがいだうの中ちゆうに斷だんす。『問』ふ、『地前ぢぜんを無礙むがいと爲なし、初地しよぢを解脫げだつと爲なすと云いふを得うるや不ふや。』答こたふ、『問』善ぜん云いはく、爾にり。今いま謂いはく、然しからず、初地しよぢに自おのづから開ひらいて無礙むがい解脫げだつと爲なす。『問』ふ、『金剛』は轉てんと爲なんや、謝しゃと爲なんや。答こたふ、『毘曇』は則すなはち謝しゃなり。『成實』は則すなはち轉てんなり。金剛若こんぼうにし謝しゃして別べつに佛果ぶつぐわ有あらば、云い何が波若はにや變へんじて薩波若さばにやと名なけん。金剛こんぼうを轉てんじて成じやうずとは、云い何が無常むじやうを轉てんじて後ごに常じやうならん。今いま明めいす所ところは應まをに轉謝てんしゃ及び不轉ふてん不謝ふしゃ有あるべく、若もし金剛こんぼう本ほん不生滅ふじやうめつなりと了悟れうごすれば、即すなはち金剛こんぼう是これ佛ぶつなり。故ゆゑに不轉ふてん不謝ふしゃなり。經きやうに云いはく、『一初衆生いつしよじやうしやう本來寂滅ほんらいじやくめつにして、復更またさらに滅めつせず、妄謂まういの心こころに於おいて生滅しやうめつの見けんを息やすむ』と。故ゆゑに名なけて謝しゃと爲なし、了悟れうごを得う。之この生滅しやうめつは無生滅むじやうめつなりと悟さとるが故ゆゑに名なけて轉てんと爲なす。

大乘だいじやう玄論げんろん卷まき第三だいさん 終

大乘玄論 卷第四

胡吉藏撰

二智義十二門。

一には翻名門。二には釋名門。三には釋道門。四には境智門。五には同異門。六には長短門。七には六智門。八には開合門。九には斷伏門。十には攝智門。十一には常無常門。十二には得失門。

【一】 翻名を明す

【梵本】 梵語を以てかかれたる經本

【一】 然るに昔江南に在りて『法花玄論』を著し、已に略して二智を明せり。但し此義既に衆聖の觀心、法身の父母有り、必ず須らく精究すべし。故に重ねて之を論ず。此義若し通ずるときは則ち方等の衆經は言を待たずして、自ら顯る。具に梵本を存せば、應に波若波羅蜜、漚和波羅蜜と云ふべし。故に此經に云はく、『智度は菩薩の母なり、方便を以て父と爲す。』と。智は則ち波若にして、度は波羅蜜なりと謂ふ、但し波若を翻すること不同なり、或は智慧と言ひ、歡法師の云ふが如し。秦には智慧と言ひ、或は翻じて遠離と爲し『放光經』に出でたり、則ち釋道安用ふるなり。或は明度と翻す、『六度集經』に出でたり。或は清淨と翻じ、亦『大品』に出でたり、歡法師之を用ふるなり。但し波若は具に智慧、明淨、遠離等の義を含む。釋經の人は隨つて其一を取り、以て用ひて之を翻せり。波

【翻じて】以下、
慧を翻ずるを述ぶ

若は衆惑を斷じ、生死名相の法を遠離するを以ての故に、遠離と云ひ、明了にして暗無し。故に稱して明と爲す。體は穢染を絶すれば名けて清淨と爲し、達照解知すれば名けて智慧と爲す。諸義有りと雖も、多く智慧を用ひるなり。智慧に單複あり、又名は不同なり。或は單に名けて智と爲し、釋論及び此經に稱して智度と爲すが如し。或は但名けて慧と爲す、釋論に云ふが如し。波若をば秦には慧と言ひ、或は俱に智慧と翻す、衆經多く爾るなり。今詳に此意を會するに、義各由有り、通じて之を言はば則ち智を慧と爲し、慧を指して智と爲す。廣略不同なりと雖も異り無きなり。

翻じて慧と爲すとは凡そ四義有り。一には十度の不同を分たんと欲し。二には空有の義異を開き、三には因果の差別を明し、四には凡聖に就いて異と爲す。十度とは第六をば波若と名く。此には翻じて慧と爲す。第十をば闍那と云ふ、此には名けて智と爲す。問ふ、「闍那をば智と爲し、衛門をば翻じて何物とか爲さん。」答ふ、「此には明と云ふ、猶是れ智見の義なるのみ。空有の義異るとは、空を照すを慧と爲し、有を鑒るを智と爲す。故に此經に云はく、「一相門を知りて慧業を起し、種種の相門を知りて智業を起す」と。因果の差別とは論に云はく、「因をば波若と名け、果をば反つて薩婆若と名け、薩婆若をば一切智と名く」と。則ち知んぬ、波若は之を名けて慧と爲す、慧の名は既に劣なれば宜しく因の中に在るべし。智は則ち決つたるが故に果地に居するなり。又佛空有を照すこと皆盡きぬ、加ふるに一切を以てす。菩薩は未だ窮まらず、但慧と名くるなり。因中には智と名け、果

をば一切智と名くと云ふを得ず。亦因をば智慧と名け、果をば一切智と名くと云ふを得ず。但因をば名けて慧と爲し、果をば智と爲すと云ふべし、則ち因果に優劣の義を彰すなり。凡聖の異とは『涅槃經』に云ふが如し。波若とは一切衆生にあり、此を名けて慧と爲す。慧の義は既に通ぜり、則ち凡聖に並に有り、十大地の中の定慧の數の如し。毘婆舍那は之を目けて見と爲す。謂く、一切の聖人明かに理を見るなり。闍那をば智と爲し、通達決了なり。次に翻じて智と爲すに凡そ三の義有り。一には、慧の名は既に劣なり。智は則ち勝と爲す。今波若を稱歎せんと欲して、名けて智と爲す。二には、其名語の便なることを顯さんと欲して、智度と云ふが如し。若し慧度と言はば則ち言便ならざるなり。三には、智は則ち是れ慧なり、名は異れども體は同じと明さんと欲す。故に隨つて其一を擧ぐ。

【次に合して】以下、智と慧とを合して述ぶ。

次に合して智慧と稱するに亦三義を具す。一には、波若、具に空有を鑿んとするが故に、名に智慧を含む。慧は則ち空を照し、智は便ち有を鑿ん。二には、波若は果及び因に通ずることを顯し、因の中の波若をば慧と爲し、果地の波若をば智と爲す。故に三徳の中に波若の徳有り。三には、六度義に十を含むことを明さんと欲す。經の中に但六度を明して、十を明さざることは、波若の名既に智慧を含むを以て第十の智度は其中に蘊在せり。『問ふ、既に三名を具せり、何の翻を以てか正と爲すや。』答ふ、『慧を正翻と爲し、餘は皆義立なり。然知る所以は、多に従ふ論なり。此經に云はく、「慧と方便となり」と。『釋論』に云はく、「波若道と方便道となり」と。『涅槃』に云はく、「波若には一切衆生あり。闍那をば智と

【一切智】内外一切の法相及び言教に了達したる智慧をいふ。

【六度】布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。
【十度】六度の中智慧より更に四度を開きて十度となす。即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、方便、願力、智なり。
【次に】以下、無翻の義を述ぶ。

爲し則ち諸の菩薩に配つ」と。故に智は波若に非ず。又第六をば慧と名け、第十をば智と爲す。皆彼此の三名有り。故に知んぬ。慧を以て正と爲す。又論に云はく、「波若をば佛に屬せず、二乘に屬せず、但菩薩に屬す」と。菩薩は則ち道慧、道種慧なり。佛は一切智、一切種智を具す。又云はく、「波若は諸法實相の慧に名く」と。是の如き等の諸文は一に非ず。故に慧を以て正翻と爲す。問ふ、「若し慧を以て正翻と爲さば何が故に經の中に多く智慧と云ふや。」答ふ、「經の中には多く六度を説くが故に、多く智慧と云ふ、少しく十度を説くが故に、少しく慧を明すなり。又六度の名は皆復翻有り、布施等を單に施と名けざるが如し。波若も亦爾るなり。復是れ慧なりと雖も、上の五に對せんと欲して亦復名を存す。故に智慧と云ふなり。」

次に無翻の義を辨せん。有人言はく、「波若の名五義を含めり」と。正翻して宜しく慧を以て其名に當つべからず。釋論の七十一卷に云ふが如し。波若は實相に定まり、甚深極重なり。智慧は輕薄なるが故に、波若と稱ふること能はず。此を招提之を用ふ。今謂く、然らず。釋論には乃ち不可稱の義を明して、不可翻には非ざるなり。問ふ、「稱と翻と何んが異なるや。」答ふ、「稱は則ち天竺に已に明せり。翻は則ち震旦に來りて、彼を反じて此と爲す。前後不同にして義門各異なり。又論に云はく、「波若は實相に定む、故に不可稱なり、多含の故に言はず、故に不可稱なり」と。故に此釋は謬りと爲す。復或人言はく、「波若は稱すべからず」とは、此に實相波若を稱すること能はずと明す。實相波若は性常住なり。

觀照の智慧は境に會して始めて生ず。故に實相を深重と爲し、觀照の智をば輕薄と爲す、北人の釋なり。是れ亦然らず、經に五數を以て波若を數じて實相を數ぜず、云何が實相深重なりと言はんや。又言はく、「波若は實相に定まる、則ち實相をば所定と爲し、波若をば能定と爲す」と。若し實相を深重と爲すとせば、實相を以て還つて實相を定むべきや。復或人言はく、「智慧は輕薄にして波若を稱すこと能はず」とは、此は是れ世間の智慧、二乘の智慧にして菩薩の大智慧を稱すること能はざるのみ。何んとなれば大智慧は實相の理を照して道は衆行を成ず。餘の淺智慧豈能く稱せんや。此れ南方の人の釋なり。今謂く、然らず。經に智慧は般若を稱すること能はずと云ひて、淺智慧は深慧を稱すること能はず。又淺深俱に名けて慧と爲す。則ち俱に是れ輕薄なり、並びに波若を稱すること能はざるなり。」

【今論に依りて】
以下、論に依りて
釋す。

今論に依りて之を釋せば論に云はく、「波若は實相に定まるが故に、深重なれば智慧は稱すること能はず」と。言ふ所の定とは定は是れ契會の名なり。夫れ萬化宗無きに非ず、而も之に宗たる者は無相なり、虛宗は契無きに非ず、而も之に契するものは無心なり。故に聖人は無心の妙慧を以て、彼無相の虛宗に契へば、即ち内外並びに冥し、緣智俱に寂なり。智慧は是れ知照の名なり、豈能く絶觀の般若を稱らんや。同ふ、「波若は云何が能く實相を會するや。答ふ、「實相に由りて波若を生ずるが故に、波若は能く實相に契會するなり。同ふ、「此釋に依らば猶是れ淺智にして、深智を稱すること能はざるなり。答ふ、「深とは則ち

【今總じて】
總じて問ふ。

以下

愚智にして皆絶せり。淺とは則ち猶知照有り、淺智は深智を稱らざるには非ずや。問ふ、
「實相に定まるといふは既に是れ契會の名なり。舊く冥會の義を釋すると何んが異なる。」答
ふ、「語は同じして意は異なるなり。但し冥會を釋するに二師有り。一に云はく、則ち會は
是れ冥なり。符合を以ての故に明なり、冥契して乖かざるが故に會なり、優劣無きなり。
此は莊嚴龍光の義なり。二に云はく、會は是れ符合の名なり、冥は是れ混一の義なり。
則ち冥は勝れ會は劣なり。何んとなれば因中に凡そ四義有り、故に未だ冥ならず。一には
惑未だ盡きず。二には體に生滅有り。三には智は未だ周圍ならず、四體は方所に依るが故
に但會と稱す。佛果は此四義を離れたり、所以に冥を談す。冥と無生を一同爲せば則ち境
智は分れず、應照の異無し。無生は俗に乖かざれば、冥も亦會を妨げず。佛果は體を擧げ
て冥なり、體を擧げて會なり。會なるが故に應照十方に滿てり。冥なるが故に一切皆絶せ
り。

今總じて之を問はん。冥とは既に境と混一ならば、智は境と成すと爲んや、境と作さず
と爲んや。若し境と作さずば云何が一と言はん。若し智を境と作さば、境既に知無し、智
も亦知無かるべし。智既に知有らば則ち境も亦應に爾るべし。其れ一なるを以ての故に。
若し法と性と同じく絶するが故に、冥會と言へども猶法性と異ると言はば、則ち會冥の日
に於て猶境智を見て二と爲せり。何んが經に菩薩と波若と相應すと云ふことを得ん、應と
不應と、合と不合とを見ざるや。又四義を具するが故に方に冥を成せば、波若教には佛智

猶生滅有れば、則ち冥と稱ふることを得ず。亦等法性の義無きが故に實相の義無きなり。」問ふ、「云何が甚深極重と名くるや。」答ふ、「夫れ可稱を論すれば則ち極重と名けず。良に極重に由るが故に、故に不可稱なり。論主、經の不可稱の義を釋せんと欲するが故に重と云ふなり。」問ふ、「但應に重と言ふべし、何が故に甚深と云ふや。」答ふ、「重の義を簡釋せんと欲するが爲なり、重物の重の如くに非ず。乃ち是れ甚深なるが故に重と云ふのみ。」問ふ、「但甚深と言へ。何が故に復極と云ふや。」答ふ、「三乗は同じく實相に契ふ。但し二乗は猶兔馬の未だ其原を盡さざるが如し、所以に般若の名を得ざれば、甚深極重と名けず。今二乗を簡異にして菩薩は其原を照盡すれば、波若と名くることを得と明さんと欲するが故に、甚深極重と云ふなり。」問ふ、「智慧は何が故に輕薄と云ふや。」答ふ、「波若の體は縁觀を絶せり。智慧の名は觀を主とす。波若の體は智慧を絶せり。智慧の名は知照を主とす。波若の體は名字を絶す。智慧は則ち猶名言に涉るが故に、波若の重なるに對して智慧の輕なるを明す。波若の深なるに對して、智慧の淺なるを辨す、淺は猶薄のごときなり。」問ふ、「波若の體は智慧を絶す。何が故に智慧の名を立つるや。」答ふ、「知らず、何を以てか之を曰けん。強ひて智慧と名くは智慧の名を立つと雖も、實には波若の體を稱せず。」問ふ、「但應に波若の體は深重にして、波若の名は輕薄なり。智慧の體は深重なり。智慧の名は輕薄なりと言ふべし。云何が乃ち波若は深重なり、智慧は輕薄なりと言はん。」答ふ、「今梵本に依らば則ち波若の體は深重にして、波若の名は輕薄なりと云ふ。但此意を用ひては則ち應

に智慧の體は深重にして、智慧の名は輕薄なりと云ふべし。此義顯れ難きを恐るるが故に釋經の人は此方の智慧を借りて、梵文の波若を稱すること能はざるなり。問ふ、「不可稱」と不可量と何んが異なるや。答ふ、「經に五數有り。謂く、大事の故に起る、不可稱事、不可量事、無等事、不可思議事より起るなり。既に別に無量等事有るが故に起る。則ち稱は量に非ざるなり。不可量といふは則ち無有邊際を取る、不可稱は甚深唯至りて重なるを明す。例せば法稱品に舍利もて、波若の經卷を稱すること能はずと明すが如し。今智慧の名義は絶觀の波若を稱する能はざるなり。問ふ、「論に云はく、「波若は多智にして、慧は少なるが故に稱すること能はず」と。云何が多少と爲すや。答ふ、「前には重輕に約して不可稱を釋す。今は多少に就いて不可稱を明すなり。謂く、少は多を稱すること能はざるなり。但し多少を解すること不同なり。有人言はく、「實相は則ち法として在らざること無きが故に多なり。智慧は之を局つて心に於く故に少なり」と。今謂く、然らず。前には實相を定むるに就いての故に不可稱を明し、今は所含の義に約して不可稱を明す。般若の體は愚智に非ずして、能愚能智なり。智慧は唯智を主とす、故に波若は多、智慧は少なり。又波若は實相に定まる、實相既に通じ、波若も亦通ぜり。智慧は爾らず、故に少と云ふなり。」問ふ、「已に波若の翻不翻の義を知んぬ。方便復云何ぞや。答ふ、「常啼品に漚和、俱舍羅大師方便力と云ひ、漚和をば方便と爲し、俱舍羅をば名けて勝智と爲す。波若の巧なるを名けて漚和と爲し、其用既勝は勝智と名くるなり。淨名には方便を以て父と爲し、其生

【二】 釋名を明す

成の能を取る。『大品』には「漚和を以て師と爲し、訓誨の徳有ることを明し、善巧に物を化し、二乗を證せざるは皆大師の力なり。」

【二】 釋名の第二。復二門有り、一には權實を釋し、二には大の義を解す。通じて之

を言はば二智は皆實の如くにして、照せば並べて名けて實と爲す。皆善巧有れば悉く方便と稱す。別に就いて之を言はば、即ち波若をば實と名け、漚和をば方便と稱す。略して八義有り。一には、波若は實相の境を照せば、所照に従つて名と爲す、故に稱して實と爲す。二には、波若は實相より生じ、能生に従つて名を受く、故に稱して實と爲す。三には、實の如くにして照すが故に當體を實と名く。論に波若、波羅密、實法不顛倒と云ふ、體は虛妄を離れて、顛倒の慧に非ず、故に名けて實と爲す。四には、凡夫顛倒不實の慧に對するが故に、波若を歎じて實と爲す。五には、二乗の未だ實ならざるに實と謂ふに對するが故に、波若を明して實と爲す。六には、方便の用に對して波若を以て體と爲すが故に實と名く。七には、虚に對して實を明す。未だ是れ好實ならず、虚に非ず、實に非ざるを乃ち妙實と名く。八には、虚實を二と爲し、非虚實を不二と爲す。一と不二とは皆不實と名く。二不二に非ざるを乃ち名けて實と爲す。是故に論に云はく、「念想の觀已に除き、言語の法亦滅す」と。

【方便といふ】以下、善巧方便の義に就て十對を論ず

方便といふは是れ善巧の名なり。此義に多門あり、今略して十對を論ぜん。一には、直に空有を照すを名けて波若と爲す。空を行ずれども證せず、有に涉れども着すること無し。

故に方便と名く。此照と巧とは更に二體無し。巧と雖も而も照なり、故に名けて實と爲す。照と雖も而も巧なり、故に方便と名く。問ふ、「空有を照すと並びに實と名けば、空有の二境を應に俱に眞と稱することを得べしや。」答ふ、「能照の智を皆實智と名け、所照の境を同じく實境と稱す。實智の中に空智と有智と有り。實境の中に眞境と俗境と有り、此を別と爲すなり。」問ふ、「既に眞俗有り、云何が皆實境と名くるや。」答ふ、「是れ如實智の境なるが故に、實境と名け、智に従つて名を受く。又實に是れ眞俗にして、妄りに之を稱するに非ず、當體を實と名くるなり。二には、空を照すと爲し、有に渉るを方便と爲す。釋論に波若は得に畢竟空に入らんと云ふが如し。方便は將に畢竟空を出でんとす。空は是れ實相なるを以ての故に名けて實と爲す。波若は空を照すが故に名けて實と爲す。復空を照すと雖も、即ち能く有に渉る、此用既に巧なれば名けて方便と爲す。問ふ、「若し爾らば復有を照すと雖も能く空を鑿む。此用亦巧なれば、應に是れ方便なるべしや。」答ふ、「此照巧なりと雖も、但實智を體と爲すが故に、其巧名を隠して其實の稱を與ふるなり。」三には、内に靜鑒するを以て實と爲し、外に反動するを權と爲す。問ふ、「此義は前と何んが異なる。」答ふ、「此は若は照、若は巧の靜鑒の義を皆名けて實と爲し、外に反動するを以ての故に、名けて權と爲すと明すなり。」四には、波若をば實と爲し、五度をば方便と爲す。然る所以は波若をば空解と爲す。空解なるが故に實と名く、五度をば有行と爲す。有行なるが故に權と名く。問ふ、「此れ上の照空を實と爲し、有に渉るを權と爲すとは何んが異なるや。」

答ふ、「前には空を照し有を照す。皆是れ智慧なり、故に二解を以て權實を分つ。今は解と
 行とに約して以て二門を開く。空解を實と爲し、有行を權と爲せば上と異なるなり。」問ふ、
 「有行を何が故に權と爲すや。」答ふ、「復空を照すと雖も、即ち能く行を起す。此義既に巧
 なり、故に權と爲す。又空は是れ實相、有は實相に非ざるが故に、空解を實と爲し有行を
 權と爲すなり。」五には、照空を實と爲し、空も亦空なりと知りて即ち能く空を證せず。故
 に名けて權と爲す。然る所以は二乗は空を知らずして亦復空を以て妙極と爲せり、故に空
 は但空なりと名く。所以に空を證する菩薩は空も亦空なりと知れば、不可得空と名く、故
 に空を證せずして即ち能く有に涉る、故に名けて權と爲す、此は直に空の義を知るを明す
 なり。實と爲せば實の義は即ち劣なり。空も亦空と知りて即ち能く有に涉る、此用既に勝
 れたり、故に名けて權と爲す。然も此二慧は更に兩體無し、初には觀心未だ妙ならず、故
 に但能く空を照す、既に轉精巧にして即ち空も亦空なりと知る。既に空も亦空なりと知
 りて假名を壞せずして即ち能く有に涉る。始終之を論ずれば猶是れ一の慧なり、巧と未巧
 とに約するが故に權實を分つなり。六には、苦無常を知るが故に名けて實と爲す。而も滅
 を取らざれば名けて方便と爲す。生死の身は實に是れ苦空、無常、過愚の法なるを以て、
 實の如く之を照すが故に實と爲す。二乗は此を知りて即ち之を滅せんと欲するが故に方便
 無し。菩薩は知ると雖も身を安んじ、疾を處して自ら行じ、人を化す、故に方便と名く。
 七には、身の病は故に非ず、新に非ずと知るが故に、名けて實と爲し、厭離せざれば稱し

【淨名】 維摩の異名なり。

て方便と爲す。此は但有門に就いて權實を分つなり。八には、淨名、跡を毘那に託するに不疾の身をば實と爲し、現疾の迹をば權と爲す。此は虛實の義に據りて以て權實を明すなり。九には、上の空有の二を照すを以て、非空有の不二を照すを實と爲す。非空非有は即ち是れ一實諦なり。一實諦を照すが故に名けて實と爲す。非空非有なりと雖も、而も空有宛然たり。不二を動ぜずして善巧に能く二なり、故に方便と名く。十には、空有を二と爲し、非空有を不二と爲す。二と不二と照すは皆方便と名け、非二非不二を照すを實と名く。淨名、言を杜ぎ、釋迦空を掩ひたまへり、乃ち名けて實と爲す。權實に多くの門あり、略して此十對を開く。即ち一途の次第なり。

【並に】 經論に就いて大の義を論ず

並に經論有り、文に隨ひて之を用ふべく、大の義を論ず。問ふ、『何が故に波若をば、摩訶と名け、漚和をば摩訶と名けざる。』答ふ、『通じて皆大と稱することを得、上に漚和俱舍羅大師方便力と云ふが如きなり。別して之を言はば波若を大と稱するに略して十義を明す。一には、實相は擴にして邊無く、深にして底無く、一法として法性の外に出でたる有ること無し。波若は實相を照すが故に大慧と名く。漚和は巧なりと雖も實相を照せず、故に大と名けず。』問ふ、『二乘は亦實相を照す。何んが大と名けざる。』答ふ、『二乘は未だ其邊を盡さず。菩薩は原底を照窮す。故に名けて大と爲す。』三には、三乘の實智は皆波若の中より生ず。然る所以は所照の實相既に一なり。即ち能照の波若も無二なり。但し根性堪へざるが故に一の波若に於て開して三乘の智慧と爲す。三乘の智慧は波若の觀中に攝入す。故

【法華に】譬喩品の長者窮子の喩なり。

【彼岸】具には到彼岸といふ。凡夫が煩惱に繫縛せられて生死の海に漂ふを此岸といひ、覺者のよく生死の海を超えて涅槃の岸に達するを彼岸といふ。

に名けて大と爲す。問ふ、「云何が波若に於て三乗の慧を出生するや。」答ふ、「實相に由るが故に波若を生ず。波若に由るが故に菩薩有り。菩薩に由るが故に佛有り。佛に由るが故に三乗有り。即ち波若を體と爲す、故に三乗を出生す。所以に大と名く。」問ふ、「三乗は同じく實相を觀す、乃ち實相を以て本と爲す。云何が波若を以て本と爲すや。」答ふ、「要す諸佛菩薩は波若を體悟するに由りて然る後に三乗の教を説く。始同じく實相を觀するを得るが故に、波若を本と爲す。問ふ、「波若は本にして三乗を出生せば、應に是れ三乗通教なるべきや。」答ふ、「勝鬘」の攝受正法は五乗を出生すること、猶ほ大地の四寶藏を出すが如し。『涅槃』に云はく、「即ち是れ聲聞藏なれば聲聞を出生し、即ち因緣藏なれば緣覺を出生し、即ち大乘藏なれば菩薩を出生す。是れ三乗通教なるべきや。又『法華』に明すが如く、長者の宅内に但七珍を具するのみに非ず。亦奩器等の物有り、長者の大宅と名け通宅とは名けず。波若も亦爾るなり、具に三乗の慧有りと雖も、菩薩の法を名けて、三乗通教と名けず。」問ふ、「若し三乗通教に非ずば、何が故に三乗同じく觀ぜよと勸むるや。」答ふ、「三乗の人同じく實相波若を觀ぜよと勸むるなり。三乗の人同じく摩訶波若を學せよとは勸めず。」問ふ、「摩訶波若は何が故に三乗通學に非ざるや。」答ふ、「論に云はく、「波若をば二乗に屬せず」と。然る所以は既に摩訶般若と稱す。即ち是れ大乘なり。二乗には非ずと簡つ。故に知んぬ波若は獨り菩薩の法なり、又此波若をば波羅蜜と名く。波羅蜜とは佛道の彼岸に到る。二乗は佛道の彼岸に到らざれば波羅蜜に非ず。故に摩訶波若波羅蜜は、獨

菩薩の法にして二乗には屬せざるなり。』問ふ、『經には但聲聞等を得んと欲し、當に波若を學すべしと云ふ。云何が乃ち當に實相波若を學すべしと言ふや。』答ふ、『釋論に此判を作す。之れ文を尋ねて自ら當に見るべきなり。又理を以て之を推するに、必ず二乘の人學ぶに摩訶波若を勸むるに非ず。摩訶波若は既に是れ菩薩の觀智なり、豈二乘をして學せしめんや。』涅槃に云ふが如く、下智觀の故には聲聞の菩提を得、上智觀の故には菩薩の菩提を得。此れ即ち三乘同じく中道を觀すと明す、豈下智をして上智を學ばしめんや。』問ふ、『摩訶波若は乃ち是れ獨り菩薩の法なり、波若教の中に説く、『三乘の人は同じく實相を觀ず』と。即ち是れ三乘通教ならんや。』答ふ、『若し爾らば涅槃經の中に、三乘の人同じく中道を觀すと説く。應に是れ三乘通教なるべしや。』問ふ、『若し三乘通教に非ざれば、何が故に二乘の人をして説かしめんや。』答ふ、『長者の付財に凡そ二の意有り、一には慧に菩薩に教へんと欲し、二には密に二乘に教ふ。此れ乃ち三乘を息めて同じく菩薩と成らんと欲す。云何が乃ち三乘通教と言はんや。三には實相に由りて波若を生ず。實相既に所依無し、則ち波若も亦着無し。波若著無きを以て、能く道、衆行を成ぜり。亦所著無きが故に三界に住せず、二乘に中息せずして直に佛道に趣く。引導の能有るを以ての故に名けて大と爲す。』問ふ、『五度は本は度には非ず、波若引導の故に名けて度たり。亦應に五度は本は眼に非ず、波若引導の故に眼有ることを得べきや。』答ふ、『通ずれば義も亦類せり。別すれば即ち齊しからず。五盲は眼有るに隨つて道に趣き城に入れば度の名を得と雖も、盲の體性は終に自

ら無眼なるが如し。五度は波若に通じ八正路に趣き、佛道の域に至ると雖も、而も五度の體性は終に波若に非ず。故に福慧の二嚴を聞くの意は斯に顯れたり。』問ふ、『金剛波若に菩薩は相に住せずして布施すれば、日光明照にして種種の色を見るが如しと云へり。何んが波若五度を導くことを得て眼を成ぜざらんや。』答ふ、『本般若を以て眼と爲す、五度は眼に非ず。但波若は之を導き、無所得を成ぜしめて三界に住せず、二乘に墮せず、佛道に趣くが故に名けて眼と爲す。是れ波若の眼を成ずるには非ざるなり。』問ふ、『若し業行の中に無所得を以て眼と爲せば、亦應に無所得を以て慧と爲すべし。云何が福慧の二嚴を聞くことを得ん。』答ふ、『無所得は即ち通にして、福慧は即ち別なり。若し無所得を以て慧と爲せば、亦此義有らん、但し波若の慧には非ず。然る所以は波若には無所得有り、復驗照有り。五度には但無所得のみ有りて驗照有ること爲し。故に慧と名けざるなり。』四には、五十二種の大賢聖位は波若の觀中に在り、故に名けて大と爲す、然る所以は今は即ち唯一の波若なり。但明昧不同なるが故に、聞いて五十二位を成ず。五には、三大阿僧祇劫に此大慧を修するが故に名けて大と爲す。六には、能く大惑を斷ず、謂ゆる無明なり。是故に經に云はく、『無明住地は其力最も大なり』と。二乘は四住に傾くと雖も未だ之を斷ずること能はず。菩薩は實相を照窮して方に此大惑を除くが故に、名けて大と爲す。七には、三界の内外の一切の大苦を抜くが故に名けて大と爲す。八には、諸の大菩薩の所行の法なるが故に、名けて大と爲す。九には、衆行の中に於て最勝にして過ぎたる無きが故に、名けて

【此十義】上述の十義は波若に約することを明す。

大と爲す。十には、之を信すれば大福を得、之を毀てば大罪を招く、故に名けて大と爲す。此十義は自ら偏に波若に約すること有り。自ら具に二慧に通ずること有り。義に随つて之を配すべし。問ふ、『波若をば小に待して大と名くるや、小に待せずして大と名くるや。』答ふ、『具に二の義有り。一には二乗の小慧に待するが故に、名けて大と爲す。』問ふ、『二乗を小慧と爲し、菩薩をば大慧と爲す。二乗は小波若にして、菩薩は大般若ならん。何が故に波若をば二乗に屬せず、二乗の心の中なるをば道品と名くるや。』答ふ、『講する者其旨を體らずして慧んで此言に滯る。論に波若を二乗に屬せずと云ふは、此は是れ摩訶波若なり。菩薩の大慧なるが故に二乗に屬せず、二乗の人空慧に有ること無きには非ざるなり。小に得ずして大に名くとは、波若の體性はれ大なるが故に待せずと言ふ。二乗の智慧、凡に形すれば即ち大なり、菩薩に望んでは即ち小なるが如きにはあらず。』問ふ、『菩薩を二乗に形すれば即ち大なり。佛に望んでは即ち波若を小と爲す、故に佛心の中に在りては、變じて薩波若と名く、寧ろ體性大なりと言はんや。』答ふ、『波若は是れ因中の極功にして十地に在り、故に名けて大と爲す、佛には望まざるなり。又波若は因果に通ず。果の地の波若は即ち最上無過なり、故に體性を大と爲す。什公の云ふが如く、薩波若をば即ち老波若と爲すなり。又絶待大と言ふは、小に得して大と名くるは復絶すと雖も小猶未だ大を絶せず、名言の及ぶ所たり。故に好大に非ず。大小變びて絶なる、方には是れ好大なり。』問ふ、『何なる文もてか之を證するや。』答ふ、『題に摩訶波若と云ふ、波若は深重にして、智慧稱せず、

亦摩訶は深重なり。大を稱ふること能はざるは、即ち其證なり。又照明品に云はく、「大小を作さざるを名けて摩訶と爲す」と。復是れ良き證なり。問ふ、「雙べて大小を絶して今は大に非ず、小に非ざれども、歎美して大と爲せば還復小に待す。何んが絶待と名けん。」答ふ、「此大は小を絶し、大を絶す。故に絶待と名く。問ふ、「大を絶し小を絶する、之を名けて大と爲せば、即ち大に待し小に待す、皆名けて小と爲す。還是れ大小相待せり。何んが絶待の大有らんや。」答ふ、「前に望んでは即ち絶なり。後に觀しては便ち待なり。義は相違せざるなり。」

【問ふ】以下、波若の大と涅槃の大との差異を述べ。

問ふ、「波若の大と涅槃の大と何んが異なる。」答ふ、「通じて言を爲さば、即ち異なること無し。是故に論に云はく、「若し法の如く佛と波若と及び涅槃とを觀すれば、是三は即ち一相なり」と。涅槃の照は即ち是れ波若なり。波若の滅は則ち是れ涅槃なり。涅槃は果として盡さざる無し、解脱と名く。境として照さざる無し。波若と名く。眞極可軌なるを法身と稱す。故に三徳を具するを名けて涅槃と爲す。波若は即ち是れ涅槃なり、故に亦三徳を具す。波若は但是れ智慧なり、既に名けて別と爲す。涅槃は亦但是れ果なり、果は亦別なり。問ふ、「波若は是れ涅槃の三徳の中の一徳なり。亦應に涅槃は是れ波若の三徳の中の一徳なるべしや。」答ふ、「亦例と爲すを得。波若の別を以て、即ち涅槃を成ずれば亦涅槃の別を取りて波若を成す。波若の別は即ち是れ智慧なり。涅槃の別をば名けて滅度と爲す。故に果徳の涅槃と、佛地の波若とに皆總と別とを具するなり。問ふ、「經には三徳は涅槃を成すと

【四流】 四種の煩悩。善品を漂流せしむるが故に暴流といふ。欲暴流、有暴流、見暴流、無明暴流のこと。

【三】 釋道を明す

説けり。何が故に三徳は波若を成ずと言はざる。答ふ、「隨つて一徳を擧ぐれば皆攝す。何が故に無なるや。但教の起るところ。各自ら由有り。涅槃教の興る所は、正しく小乗の灰斷は三徳を具せざることを斥さんが爲に、大涅槃の三を具するを嘆ずるなり。波若教の起ることは、正しく因行を明して二乘に二慧無きことを斥けて、菩薩の權實を具することを辨するなり。問ふ、「涅槃は何が故に果に據り、波若は何が故に因に約するや。答ふ、「涅槃をば滅度と名く。滅度とは大患永く滅して四流を超越す。此名は必ず是れ究竟なり、故に果門に就く。波若は名けて慧と爲す、慧は猶未だ決了せず、宜しく因に約すべきなり。」

【三】 釋道門第三。問ふ、「釋論に云はく、「菩薩に二道有り、一には波若道。二には方便道なり」と。云何が二道と爲すや。」答ふ、「有人の言はく、波若道といふは即ち實相波若なり。方便道といふは、謂く、方便波若なり。是事然らず。大いに二道を判するに、以て三の例と爲せり。一には全く梵本に依らば、應に波若道漚和道と言ふべし。二には具に此言を開けば、應に慧道方便道と云ふべし。三には彼此合せるを以て論に明す所の如し。波若は彼の稱に依り、方便は此名を存す。今若し實相波若、方便波若と言はば皆波若と稱す、即ち二道分れず。又實相波若は是れ境方便、波若は是れ智なり。豈境智を以て二道と爲すべけんや。若し實相波若と言はば是れ實慧なり。方便波若とは是れ方便慧なり、以て二道と爲すと。是れ亦然らず、論と波若に方便とを以て二道と爲すと云ふ、何んが皆波若と稱することを得ん。若し爾らば二道俱に應に方便と名くべし。又三の波若を立てて皆波

【自行化他】自己
まづ修行し其道を
以て又他人を教化
すること。即ち自
利と利他をいふ

若道の中に就いて之を論ず。一には實相波若、二には觀照波若、三には文字波若なり。實相は能く波若を生ず、故に波若と名く。文字は能く波若を詮す、所詮を以て稱と爲して亦波若と名く。三には觀照當體を名けて波若と爲す。問ふ、「何が故に但此三を立てて不多不少なるや。」答ふ、「凡そ三の義有り。實相をば能生の境と爲し、觀照をば所生の智と爲し、文字をば能詮の文と爲す。要す此三を具して増減するを得ず。又此三を合して以て三雙と爲す。實相を境と爲し、觀照を智と爲す。謂く、境智の一雙なり。境智を所詮と爲し、文字を能顯と爲す。能所の一雙なり。境智は則ち自行なり。衆生の爲に説くが故に、文字有ること自行化他の一雙なり。二には實相は即ち無爲波若、觀照は即ち有爲波若なり。然る所以は論に「諸法の實相とは、心行言語斷せり。生無く亦滅無し、寂滅にして涅槃の如し」と云へり。實相既に生滅無し、故に是れ無爲波若なり。實相は能く觀智を生ず。觀智始めて生ず、故に有爲波若と名く、一切唯此二のみ有り、此有爲無爲を詮するを文字波若と名く。文字は所詮に従つて名と爲せば、爲無爲に通ず。當體に之を明さば、有爲の所攝なり。三には實相は是れ無爲波若なり。文字は是れ有爲波若なり。觀照は亦は有爲亦は無爲なり。菩薩は累にして猶未だ盡きず。即ち未だ生滅を勉れず、故に有爲と名く。佛は即ち惑にして淨ならざること無ければ、復生滅無し、故に是れ無爲波若なり。問ふ、「何が故に煩惱有れば即ち生滅有るや。」答ふ、「煩惱有るを以て本より生滅無しと了悟するを得ず、故に生滅有り。若し煩惱無ければ即ち心を觀るに本より生無し、即ち是れ無爲なりと悟る。有爲波若

【問ふ】以下、實相を實慧、觀照を方便と爲すや否やを明す。

【問ふ】以下、波若道に三を開く。

を轉するが故に、無爲を成ずとは云はざるなり。此三門には總じて境智爲無爲理教因果を攝す、故に但三を立つるなり。』

問ふ、『亦實相を實慧と爲し、觀照を方便と爲すを得るや不や。』答ふ、『若し佛性を以て實相と爲せば本より之れ有り、名けて實慧と爲す。觀照は修習して始めて生ずれば、名けて方便と爲す。此れ有を照する方便と爲し、空を照すを名けて實と爲すには非ず。若し權、若し實、始有の義をば皆方便と名け、本有佛性覺照の義をば名けて實と爲すなり。地論の人は眞修の波若は即ち本より之れ有り。緣修の波若は即ち修習して始めて起る。性淨涅槃、方便涅槃も亦爾るなり。此は猶是れ舊き本始の義なり。』問ふ、『今と何んが異なるや。』答ふ、『本性清淨なれば名けて本有と爲す。緣に約して始めて本淨を悟る、故に始有と名くるのみ。然れども正道は未だ曾て本始ならば、亦垢淨に非ず。又舊宗は爲無爲決定して是れ二なり。今明すらく、未だ菩提を得ざれば即ち無爲は有爲と成る。若し菩提を得れば、即ち有爲は無爲と成る。豈有爲を離れて別に無爲有らんや、前に釋するが如し。爲無爲例して然るなり。諸法本性清淨なるが故に無爲と名け、未だ本無生滅なりと悟らざるを有爲と名く。然も波若は未だ曾て爲無爲ならざるなり。』

問ふ、『波若道に既に三を開く。方便道にも亦三有りや不や。』答ふ、『通ずれば亦有り。謂く、境と智と文字なり。但實慧は境に従つて名を立つ、故に必ず境を辨するを須ふ。方便は巧に従つて稱を受く、故に境を辨するを須ひず。而も文字は即ち二道に通ずるなり。然

【法身】無色無形の理佛のこと。
 【報身】因位の願行に酬報して成就したる萬徳圓滿の佛身をいふ。
 【應身】衆生の機縁に應同して示現せる佛身をいふ。

も方便は境に従つて名を立てずと雖も、實に世諦の境を照せば即ち亦三を具するなり。觀照に既に爲無爲有り、方便も亦爾るなり。如來の二智は即ち是れ無爲なり。菩薩の二道は猶是れ有爲なり。「問ふ、「實相波若は唯是れ境なるや。亦是れ智なるを得るや。」答ふ、「有入言はく、實相波若は但是れ境の名なり。」釋論の四十三卷に問うて曰はく、「前に智慧を説くを波若と名く、今何が故に空を説いて波若と爲すや」答ふ、「果の中に因を説く、布を食すと云ふが如し。此義は應に是れ因中に果を説くべし、而るに果の中に因を説くと言はば逆に討ねて義を明す。智慧は正しく是れ波若、實相は能く智慧を生ずれば、智慧は是れ實相の果なり。而るに智慧に於て實相を説いて波若と爲す。故に果中説因と言ふ。南北此釋に同じなり」と。有人言はく、佛に三種有り、一には法身、二には報身、三には化身佛なり。實相は即ち法身佛なり。實相可軌なれば、之を名けて法と爲す。此法に體有り故に名けて身と爲す。而も實相は佛に非ず、能く佛を生ずるが故に、所以に佛と名く。二には報身は即ち修行して實相の理に會ふ。實相既に常なれば、報佛も亦常なり。法常なるを以ての故に諸佛も亦常なり。三には化身佛は即ち應物の用なり。此は北土の論師の釋なり」と。有人言はく、「空無相を修しては理に會して圓通せり。心意識滅して煩惱清淨なる、此れ無爲波若なり、即ち是れ實相なり。若し境に行すること有れば、未だ生滅を勉れず、即ち菩薩の六度は十地の差別を得れば、有爲波若と名く、此は南方の尙禪師の義なり」と。復た有人言はく、「實相は即ち眞諦の理なり。此理に會して煩惱盡くるが故に生滅を離れて、眞如に

【今釋論】 釋論に就て意を辨ず。

同じく法性に等し、爲無けれども爲ならざること無し。即ち實相は是れ境なり。此れ亦南方の成實師の義なり」と。

今釋論の意を辨ずるに、五句の文有ることを得べし。一には因中說果、實相を名けて、般若と爲さんが如し。二には果中說因、般若を説いて實相と爲さんが如し。三には因に當りて因と説く、實相は般若に非ず。四には果に當りて果と説く、般若は實相に非ず。五には因に非ず、果に非ず。故に論に實相を釋するの文に云はく、「因は是れ一邊、果も是れ一邊なり、此二邊を離るるを名けて中道と爲す。緣は是れ一邊、觀も是れ一邊なり、此二邊を離れたるを名けて中道と爲す。故に知んぬ、實相は未だ曾て因果ならず、亦境智に非ず。而れども緣に隨ひ義を逐うて上の四句の不同有り。衆師應に汎く雙文を引いて以て圓旨を通すべからざるなり。」問ふ、「舊は實慧方便慧と云ひて、並に皆慧と稱す。何が故に二道は俱に般若と名くるを得ざる。」答ふ、「外國には般若と名く。此方には翻じて慧と爲す。梵本には漚和と名く。此土には方便と云ふ。釋經の人、彼此の方言を定めんと欲するが故に、二道に分つ。若し並に般若と云はば、即ち兩名相監するならん。故に叔公は羅什の譯經の體を述べて云はく、「故音を失せる者をば、之を正すに天竺を以てし、秦言を謬る者をば之を定むるには字義を以てし、變すべからざる者をば即ち之を書く」と。故に知んぬ、二道は俱に般若と稱するを得ず。」問ふ、「若し爾らば舊は何んが實慧方便慧と云ふことを得る。」答ふ、「實法方便俱に鑒照の功有るを明さんと欲す。故に悉く慧と稱するのみ。此は是れ

義釋なり。二道の名を立つるに非ず。二道の名を立つれば、但慧と方便と云ふのみ。問ふ、
 『何が故に波若をば慧と名け、方便をば慧と名けざる。』答ふ、『通じて之を言はば、波若既
 に照せば、名けて慧と爲すを得。方便も亦照せば慧と稱するを得。方便は既に巧なり、波
 若も亦巧なり。但此二の名を立つるは、相開避せんと欲して隠顯して互に説く。波若には
 其照の名を顯して、其巧の稱を隱し。方便には其巧の稱を顯して、其照の名を隱す。然る
 所以は波若は實相の境に従つて名を立つ。又其體に當るが故に照を顯して巧を隱す。方便
 には俗境を照すに従つて、名を立てず。但巧用を取るが故に、巧を顯して照を没す。又慧
 は照空に名く。波若は既に是れ空慧なり。所以に慧と名く。方便は有に涉れば慧と名くる
 を得ず。問ふ、『波若空を照せば慧と名け、方便は有に涉れば應に稱へて智と爲すべきや。』
 答ふ、『前に之を釋するが如し。方便は有を照さざるには非ず。正しく巧能を取るを以ての
 故に、智と云はざるなり。』問ふ、『何を以てか、波若を體と爲し、方便を用と爲すと知る。』
 答ふ、『釋論の第百卷に云ふ。』問ふ、『上に已に付囑し竟んぬ。今何が故に復囑累する。』
 答ふ、『上には波若の體を説き竟んぬ。今は方便の用を説く、故に波若を體と爲し、方便を
 用と爲す。論に又云はく、『波若と方便と本體は是れ一なり、而も義に隨つて異り有り、譬
 へば金もて種種の物を爲るが如し。此は權實一體なれども義に約して二に分つことを明す。
 金をば波若に喩ふれば體と爲す。金の上の巧をば方便に譬ふれば方便を用と爲す』と。問
 ふ、『波若をば何が故に體と爲し、方便を何が故に用と爲す。』答ふ、『實相をば本と爲す。』

【三悉檀】佛が遍く衆生に施す三種の利益。世界悉檀爲人悉檀、對治悉檀の三なり。

波若(はにや)は實相(じつさう)を照(てう)すが故(ゆゑ)に、波若(はにや)を亦(また)本(もと)と爲(な)す、所以(ゆゑ)に體(たい)と爲(な)し、諸法(しよほふ)をば末(まつ)と爲(な)す。方便(ほうべん)は諸法(しよほふ)を照(てう)すが故(ゆゑ)に、方便(ほうべん)を用(もち)と爲(な)す。『問(と)ふ、何(なに)を以(もつ)てか實相(じつさう)を本(もと)と爲(な)すと知る。答(こた)ふ、論(ろん)の初卷(しよくわん)に云(い)はく、『三悉檀(さんしつだん)は破(は)すべし。第一義(だいいぎ)悉檀(しつだん)は破(は)すべからず。一切(いつさい)の言語(ごんご)を滅(めつ)し、一切(いつさい)の戲論(ぎろん)を過(す)ぐ。第二義(だいいぎ)悉檀(しつだん)は即(すなは)ち實相(じつさう)なり』と。論(ろん)に又(また)云(い)はく、『實相(じつさう)を除(のぞ)いて以(もつ)て以外の一切(いつさい)をば、皆(みな)名(な)けて魔(ま)と爲(な)す、故(ゆゑ)に實相(じつさう)を本(もと)と爲(な)す。又(また)實相(じつさう)に迷(まよ)ふが故(ゆゑ)に六道(ろくどう)有り。實相(じつさう)を悟(さと)れば即(すなは)ち三乘(さんじやう)有り。故(ゆゑ)に實相(じつさう)を迷(まよ)つたの原(もと)と爲(な)す。所以(ゆゑ)に本(もと)と稱(しやう)するなり』と。此(こゝ)は是(こゝ)れ虚妄(こゝろ)に對(たい)して之(これ)を名(な)けて實(じつ)と爲(な)す。若(も)し虚妄(こゝろ)無(な)ければ即(すなは)ち亦(また)實(じつ)無(な)し。前(まへ)に云(い)ふが如(ごと)く境(きやう)に非(あ)らず、智(ち)に非(あ)らず、果(ぐわ)に非(あ)らず、因(いん)に非(あ)らず、舊宗(くじゆう)の天然(てんぜん)の實相(じつさう)の境(きやう)有(あ)るには同(おな)じからざるなり。』問(と)ふ、『若(も)し波若(はにや)を本(もと)と爲(な)せば即(すなは)ち波若(はにや)は勝(すぐ)れ、方便(ほうべん)は劣(せう)る。何(なに)が故(ゆゑ)に六地(ろくち)を波若(はにや)と名(な)け、七地(しちち)を方便(ほうべん)と稱(しやう)する。答(こた)ふ、『金(こん)は是(こゝ)れ體(たい)なりと雖(いへど)、未(いま)だ巧物(きやうぶつ)を作(つく)らざれば則(すなは)ち金(こん)を劣(せう)と爲(な)すなり。金(こん)を制(せい)して巧(きやう)と爲(な)せば巧(きやう)は金(こん)に勝(すぐ)れたり。六地(ろくち)は波若(はにや)の體(たい)を得(と)つと雖(いへど)、未(いま)だ妙用(めうりやう)を得(と)つ。故(ゆゑ)に波若(はにや)は則(すなは)ち劣(せう)なり。七地(しちち)に至(いた)る時は波若(はにや)は妙用(めうりやう)なり。故(ゆゑ)に稱(しやう)して方便(ほうべん)勝(すぐ)つと爲(な)すなり。是(こゝ)れを以(もつ)て論(ろん)に波若(はにや)清淨(じやうじやう)なるを反(はん)じて方便(ほうべん)と名(な)くと云(い)ふ。此(こゝ)に反(はん)ずと言(い)はば照空(せうくう)の慧(え)は未(いま)だ有(あ)るに涉(わた)ること能(あた)はず、故(ゆゑ)に空慧(くうえ)は未(いま)だ巧(きやう)ならず。但(ただ)波若(はにや)と名(な)く。照空(せうくう)の慧(え)は即(すなは)ち能(よ)く有(あ)るに涉(わた)る、故(ゆゑ)に轉(てん)じて方便(ほうべん)と名(な)く。』問(と)うて曰(い)はく、『既(すで)に反(はん)じて方便(ほうべん)と名(な)けば應(おぼ)に波若(はにや)の名(な)を失(し)つ、便(すなは)ち二慧(にえ)無(な)かるべし。然(しか)る所以(ゆゑ)は波若(はにや)を得(と)る時(とき)未(いま)だ方便(ほうべん)有(あ)らず。方便(ほうべん)を得(と)れば即(すなは)ち復(また)波若(はにや)無(な)かるべし。答(こた)ふ、『二慧(にえ)更(さら)に別體(べつたい)無(な)し、巧(きやう)の空慧(くうえ)なれば、即(すなは)ち方便(ほうべん)の

【問ふ】以下、空慧に二の功用あるを明す。

【空慧】空の理を觀する智慧。

波若と名く。空慧の巧なれば、波若の方便と稱す、譬へば金の巧、巧の金なるが如し。巧のときは金を失せず、金のときは未だ巧に有らざるなり。」

問ふ、「空慧に二の巧有り、一には、空を照して着せず、二には、即ち能く有に涉りて滯ること無し。二の巧の中に何を以てか方便と爲す。」答ふ、「波若に略して四の力有り、一には實相を照し、二には所着無く、三には諸惑を斷じ、四には能く方便を導く。此四の用は即ち是れ次第なり。一切の相を見ざるに由り實相を見る。實相既に所依無ければ、即ち波若も亦所着無し。所着無きを以て衆累寂然たり。累無きを以ての故に、能く方便を導いて有に涉りて梁無からしむ。若し然らば空を照し、及び空に於て著無きは、是れ波若の力なり。故に空慧に囑す、空慧に即して能く有に涉る、此は方便に囑す。故に兩巧不同なり。」

問ふ、「方便の有に涉るに幾の力をか具するや。」答ふ、「一には照境の功有り、二には空を證せざるの力有り、三には起行の用あり。」問ふ、「有に涉りて著無きは是れ方便の功なりや、波若の力なりや。」答ふ、「有に涉れば即ち方便の力に屬す。著無きは波若の力に因り、波若は着無きを以て波若の觀中に於て即ち巧方便の用あり。故に此れ方便は即ち能く着無きなり。」問ふ、「方便は云何が能く空を證せざるや。」答ふ、「波若は諸法の實相を照し、方便は能く實相の諸法を照す。故に空觀に沈まざれば、名けて不證と爲す、釋論に云ふが如し。」波若は將に畢竟空に入りて諸の戲論無し。方便は將に畢竟空を出でて土を嚴り人を化すと。此れ即ち上の諸力の義を證せり。將に畢竟空に入るとは即ち是れ實相を照す。」

の戲論無しとは、謂く、無所着及び斷惑の功なり。方便は將に畢竟空を出づといふは即ち
 是を波若の所導と爲す。又是れ方便の不證と照境と起行との力なり。『問ふ、波若は諸法の
 實相を照す、云何が方便は即ち能く實相の諸法を照すや。』答ふ、『名けて諸法の實相、實相
 の諸法と爲せば、諸法宛然として實相なり。實相宛然として諸法なり。諸法と實相とは不
 二にして二なり。二にして常に不二なり。境既に爾るに由るが故に二慧然ることを得。故
 に波若は諸法の實相を照すとも、而も方便は即ち能く實相の諸法を照すなり。』問ふ、『復實
 相なりと雖も、宛然として諸法なり。溫和此を照すを巧と名けば亦復諸法なりと雖も、宛
 然として實相なり。波若之を照す。何が故に巧にあらざる。』答ふ、『通すれば即ち例して爾
 るなり。上の隱顯もて之を釋するが如し。又波若實相を照すとも、能く著せず。二乘に亦
 其分有り。則ち巧の義彰れず、故に方便と名けず。空に即して能く有を照す、此用既に妙
 なり、故に聲聞には分を絶したり。菩薩に獨り有り、故に方便の名を與ふ。』
 問ふ、『若し空に即して有を照す、既に妙と稱せず。亦有に即して空を照すも亦是れ妙な
 りや。』答ふ、『既に能く有に即して空を照せば、便ち能く空に即して有を照す。此は是れ慧
 に方便の解有り。方便に慧の解有り。此の如きの二慧は優劣有ること無し、但二乘の空を
 照して有に涉ること能はざるに對す。故に空に即して有の用を起すを妙と爲す、稱して方
 便と爲すと明す。又六地には但波若の空觀を得て未だ空に即して有に涉ること能はざるに
 對するが故に、今空に即して有に涉るは是れ方便なりと明すなり。』問ふ、『有に於て著せ

す、空に於て證せざる、俱に是れ善巧なり。何が故に不着の巧をば波若と名くる。波若は即ち劣にして六地に在り。不證の巧をば方便と名く。方便は即ち勝にして七地に在るや。答ふ、『上に之を釋するが如し。又有は是れ俗諦なり。有を離すことは即ち易し。故に波若の巧は劣なり。空は是れ眞諦なり、無を勉るるは即ち難し。故に方便は即ち勝なり。又實相の觀に入りて著せざれば有に於て即ち凡夫地を勉る。實相の觀に即して諸法を照すが故に、空に滯らざれば二乘地を離る。凡を勉るるは即ち易し、故に波若は劣なり。聖を超越るは即ち難し、故に方便は勝なり。所以に六七優劣の義有るなり。』問ふ、『若し爾らば六地には二慧未だ等しからず、何んが上に初地已に並ぶと云ふを得ん。』答ふ、『初地は地前に望すれば即ち並ぶ。七地に形すれば即ち未だ並ばず。然る所以は初地已來は即ち無生を得て、動寂無礙なり。但寂の義は小しく強にして、動の用は微弱なり、故に未だ並ばずと云ふ。七地に於ては動寂無礙にして二慧双遊す、故に並ぶと稱するのみ。』問ふ、『何を以てか然りと知る。』答ふ、『若し六地已來未だ並ばざれば、空に入りて有を見ず。有に出でては空を見ず。二乘亦爾るなり。菩薩と何の異りかあらん、故に知んぬ、初地已來は便ち能く已に並ぶ。但微しく強弱有り、故に未だ均しからずと説くのみ。』

問ふ、『空に於て著無きと、空に於て證せざる能はず、菩薩は空に入りて既に存すべき無し。又即ち能く有に渉る、故に不證と名く。』問ふ、『二乘と菩薩と空に入り同じく所依無し。』

【問ふ】以下、空に於て著無きと、空に於て證せざると異ありや否やを述ぶ。

何が故に聲聞は空に住し、菩薩は證せざる。答ふ、「二乗は空を以て妙極と爲し、此無依に依る、是故に空に住す。菩薩は空を以て妙極と爲さず。空も亦空なりと知れば、不可得空と名く、此無依に依らざるが故に能く證せず。大品に云ふが如し。行も亦受けず、不行も亦受けず、行、不行、非行、非不行乃至不受も亦受けず。是を菩薩の無受三昧の廣大の用と名く。聲聞辟支佛と共せず、是故に能く空を證せず。又二乗には願行の空を資くる無し。故に空に入りて便ち證す。菩薩は大願大行空を資くるが故に空に入りて證せず。」問ふ、「論に云はく、「因を般若と名け、佛に至りて即ち反じて薩波若と名く」と。何んが又六地を波若と名け、七地に至りて波若清淨にして反じて方便と名くと云ふことを得んや。」答ふ、「前に之を釋するが如く、六時の時は波若の體は強にして、方便の用は弱なり。體強なるを以ての故に妙なり。靜觀に於ての故に空を觀て著せず。用弱なるを以ての故に、未だ空に即して有に涉り、有に於て滯り無きこと能はず。七地に至りては即ち體用俱に等しくして既に能く空を觀じ、染せず。即ち能く有に涉りて無に着するが故に等定慧地と名く。等定慧地とは即ち波若の用巧なり、故に反と云ふ。即ち八地已上より二慧俱に巧なり。若し佛地に至れば即ち兩慧同じく反す。實慧をば即ち反じて薩波若と名く、謂く、一切智なり。方便慧をば反じて一切種智と名くるなり。問ふ、「若し果に至りて反じて二智と名けば、即ち因の中にも同じく二慧と名けん。何が故に前に波若をば慧と稱し、方便をば慧と名けずと云ふや。答ふ、「因と果とに名を立つること、各其義有り。果門には一切の空

【四】 境智を明す

境を照すを一切智と名け、一切の有境を照すを一切種智と名く。俱に境に従つて名を立つ、故に宜しく並びに智と稱すべし。因門には實慧は境に従ひ、方便は用に約す。故に並びに慧と名くるを得ざるなり。『問ふ、』若し爾らば何が故に菩薩の道慧道種慧を皆慧と名くるや。』答ふ、『因の中の慧に自ら多の門有り、名を立つるに各異あり。道慧道種慧は亦是れ境に従つて名を立つ、故に宜しく並びに慧と稱すべきなり。』問ふ、』若し爾らば但應に道慧道種慧は果に至りて反つて一切智、一切種智と名くと言ふべし。云何が波若方便は反じて二智と名くと言ふや。』答ふ、』論に云はく、』因の中には波若と名く、既に反じて薩波若と名くと。因の中の方理數は反じて一切種智と名けよ。二慧反じて二智と爲すが故に言を待たず。』問ふ、』論に云はく、』波若を反じて薩波若と爲す』と。何の處にか方便を反じて一切種智と名くと云ふや。』答ふ、』波若を慧と名くるは是れ照境の名なり。果地の一切智も亦照境に従つて稱を爲す。二名相主は、故に因を波若と名け、果をば一切智と名くと云ふ。方便は用に就いて目と爲す。一切種智は境に従つて名を立つ。兩義不同なり、故に經論に方便を反じて一切種智と爲すとは云はず。然るに方便は境に従ひ名を立てずと雖も、體實に有を照す、故に反じて種智と爲す。復文無しと雖も理數は應に關るべし。又因中をば權實二慧と名け、果をば權實兩智と名く。亦即ち是れ其文なるを得。』

【四】 境智を論ずるの門、第四。夫れ智は孤り生ぜず必ず境に由りて發す。故に境を智の本と爲す。境は獨り立するに非ず、智に因りて名を受く、故に智を境の本と爲す。是を

以て境に非ざれば、以て智を發すこと無し。智に非ざれば以て境を照すこと無し。境に非ざれば、以て智を發すこと無し。故に境を能發と爲し、智を所發と爲す。知に非ざれば以て境を照すこと無し、故に智を能照と爲し、境を所照と爲す。境を能發と爲し、智の所照と爲せば、即ち境の能を智の所と爲す。智を能照と爲し、境の所發と爲せば、則ち智の能を境の所と爲す。境の所照は能く智を發す、故に境の所を智の能と爲す。智の所發能く境を照すが故に、智の所を境の能と爲す。境は前に智は後と言ふことを得ず、亦智は前に境は後なるに非ず。亦一時に非ず、唯名けて因縁の境智と爲すことを得るなり。問ふ、「何を以てか境と爲し、能く智を發すや。」答ふ、「如來は常に二諦に依りて、法を説きたまへり。故に二諦を教と名く、能く二智を生ずるが故に二諦を境と名く。『開中の曇影法師』中論を注するに親しく什公の音旨を承けたり。什公云はく、「吾業を傳ふる者、道融曇影僧叔に寄在するか」と。影公二諦を序して云はく、「眞諦の故に有無し、俗諦を以ての故に無無し。眞の故に有無ければ、無なりと雖も有なり。俗の故に無無ければ、有なりと雖も無なり。無なりと雖も有なれば、無に滯らず。有なりと雖も無なれば、有に累せられず、無に滯らざるが故に斷無の見滅す。有に累せられざるが故に、常着の氷消え、此諸邊に寂なり。故に名けて中と爲す」と。此意を詳にせば眞の故に有無ければ無なりと雖も有なりとは、即ち是れ眞際を動ぜずして諸法を建立す。俗の故に無無ければ有なりと雖も無なりとは、即ち是れ假名を壞せずして實相を説く。假名を壞せざるを以て實相を説き、假名と曰ふと

雖も、宛然として實相なり。眞際を動ぜずして諸法を建立すれば、眞際と目ふと雖も宛然として諸法なり。眞際宛然として諸法なるを以ての故に無に滯らず。諸法宛然として實相なれば、即ち有に累せられず。有に累せられざるが故に常ならず。無に滯らざるが故に斷に非ず、即ち中道なり。斯二諦に由りて二智を發生す。諸法の實相を了するを以ての故に、漚和の波若を生ず。實相の諸法を悟るを以ての故に、波若の漚和を生ず。漚和の波若なれば、宛然として漚和なり。波若の漚和なれば、宛然として波若なり。漚和宛然として波若なるを以ての故に有に著せず。波若宛然として漚和なるが故に無に滯らず。有に累せられざるが故に、常著の氷消ゆ。無に滯らざるが故に、斷無の見滅す。此諸邊に寂なり。故に中觀と名く。是を以て二諦の中道は還つて二智の中觀を發生す。二智の中觀還つて二諦の中道を照す。故に境は智に稱ひ、智は境に稱ふ、境を智の境と名け、智を境の智と名くるなり。二境既に正しく明したれば、二智の義明なり。故に須らく境に約して以て智を辨すべし。二乘二智を得ざることは、良に此二諦を見ざるに由りてなり。正觀を得ざることは亦二諦は即ち是れ中道なりと見ざるに由るが故なり。

【問ふ】以下、波若と漚和と實相に對する妙用を明す

問ふ、「波若は諸法の實相を照し、漚和は實相の諸法を照さば、即ち波若は諸法を照さず。漚和は實相を照さず。將に聖心を限局し、無礙の妙用を失するに非ずや。」答ふ、「波若をば漚和の體と爲し、漚和は是れ波若の用なり。體は實相を鑒み、用は諸法を照す。故に此二門を開くに、即ち智として圓ならざる無く、照として盡きざる無し。若し同じく實相を照

し並びに諸法を鑿みば即ち二境は分れず、兩慧相鑿せん。問ふ、『舊説も亦然り。今と何んが異なる。』答ふ、『波若の體は諸法を照す能はざるに非ず、但用は既に照せば波若の照を煩はさざるのみ。若し用は既に諸法を照し、體も復照せば即ち一境二照ならん。亦應に二境一智を生ずべし。是故に二慧は並びて照さざるなり。舊義の波若は諸法を照す能はず。漚和は實相を照す能はず。復並びに觀すと雖も、智の用恒に別なり。即ち是れ埋心を格局し、二見に封執せるなり。問ふ、『前には云はく、波若は有に著せず、方便は空を證せず。後に何が故に復漚和は有に涉りて著せず、波若は空を鑿みて滯ること無しと云はんや。』答ふ、『空に著せずざるに凡そ二義有り。一には、波若は實相を照す、實相既に所依無し。即ち波若も亦所著無し。此は是れ般若の力なり。二には、空を證せざるを名けて不著と爲す、此れ方便の力なり。有に著せずとは亦二義を具す。一には波若空に入るが故に有に著せず。二には方便を波若の所導と爲す、故に能く有に涉りて著せざる、亦是れ波若の力なり。是故に經の中に又言はく、「波若は空に著せず、方便は有に著せず」と。或は言はく、「波若は有に著せず、方便は空を證せず」と。各一門を擧ぐ、義違背無し。問ふ、『若し波若は空を照し、漚和は有を鑿みば即ち二智皆照なり。何んが波若無知と言はんや。』答ふ、『波若は知なりと雖も所知無し。所知無しと雖も知らざる所無し。問ふ、『波若は實相を知るが故に無知と言ふや。亦即ち波若を知るが故に無知と言ふや。』答ふ、『既に二境に約して二智を分つ。即ち波若は實相を知るが故に無知と言ふ。波若を知るが故に無知と云ふことを得ず。

【問ふ】以下、波若は空を照すに知と無知とを具するを明す。

若し波若を知れば即ち是れ方便なり。』問ふ、『波若は實相に契ひて即ち内外並びに冥にして縁觀俱に寂なり。方便は俗を照す、何んが能く此波若を知る。』答ふ、『波若の無知にして知なるを、方便の所知と爲し、知にして無知なるを、即ち方便を知らずとす。問ふ、『波若は無知にして知なり、知にして無知なり。方便も亦爾るを得るや不や。』答ふ、『實を指して權と爲し、權を指して實と爲す。權實不二なれば亦爾るを得。不二にして二なれば、則ち「無の知にして知なる」を名けて方便と爲し、「知にして無知なる」を稱して波若と爲すなり。』

問ふ、『波若は空を照すに知と無知とを具すと。方便、有を鑒みるに何んが然らざるや。』答ふ、『二にして不二なれば皆二を具するなり。不二にして二なれば波若所知の境は是れ空、能知の智を有と爲す、故に知と無知とを具す。而るに方便は能知、所知、境智皆有なり。故に波若には知有り、無知有り。而るに方便には但知有のみ。』問ふ、『云何が波若は知と無知とを具する。』答ふ、『波若は實相を知れば、即ち縁觀俱に寂なり。是故に無知なり、而れども境智宛然たり、故に知を失はず。此れ無知にして知なり。知にして則ち無知なり。』問ふ、『若し爾らば閉善の至忘彌存と何んが異なるや。』答ふ、『彼は彌存の義なり。終に至忘に非ず、至忘の義は終に彌存ならず。今は彌存を以て至忘と爲し、至忘を彌存と爲す、故に異と爲すなり。』問ふ、『舊義も亦然るなり、今と何んが異なる。』答ふ、『彼は至忘の時、智は終に境と作らず。境終に智と成らず。即ち境智の二見なり。若し智は即ち是れ境なら

ば、境既に無知なり、智も亦應に爾るべし。若し境則ち是れ智ならば智に在りて既に照なり、境も亦應に然るべし。

今此一門に對して略して大乘の樞要、觀行の淵府を叙せん。經に云はく、「食欲は則ち是れ道なり。恚癡も亦復然り」と。是の如く三法の中に無量の諸佛道あり。食欲は則ち是れ道といふ、然るに食欲は本來寂滅、自性清淨にして即ち是れ實相なり。斯の如く了悟するを便ち波若と名く、豈實相の境の波若の觀に異なること有らんや。故に境知不二なり。貪欲は本寂滅なりと雖も、衆生に於て宛然として貪有りと照す便ち方便と名く。其無貪を貪と謂ふを傷んで之を抜かんと欲するが故に、此方便を即ち大悲と名く。貪は無貪なりと悟らしめて無貪の樂を與へんと欲す。即ち此大悲を復慈と名くるなり。故に一句の觀行に境智の二門、慈悲の兩觀を具す。初に此法を信するを便ち十信と名け、次に此法を解するを稱して十解と爲し、乃至證悟究竟了達するを名けて佛心と爲す。豈一の貪觀の中に諸の佛道を具するに非ずや。次に二經を論ぜん。問ふ、「大品には「實相を明し、不生不滅にして能く波若を生ず」と。『涅槃』には「十二因縁不生不滅にして觀智を發す」と云ふ。二經同じく境智を釋す、何の異か有る。』答ふ、「略して四句を明さん。一には因果を聞き、境智を聞く。二には因果を合し、境智を合す。三には因果を聞き、境智を合す。四には境智を聞き、因果を合す。因果を開き境智を聞くとは則ち波若に明す所なり。因には道慧道種慧有り、果は則ち一切智一切種智なり、謂く因果を開くなり。實相は能く波若を生ず、

【觀智】觀法をなす智慧。事理を觀ずる智慧。

【次に因果】以下因果を合し境智を合するを明す。

則ち實智の境なり。世諦は能く方便を生ず、權智の境と爲り、謂く、境智を聞くなり。次に因果を合し境智を合すとは、涅槃の五性の義の如し。一には因性、二には因因性、三には果性、四には果果性、五には非因非果性なり。此五性は更に二體無し。十二因縁能生の義をば則ち名けて境と爲し、所發の義をば便ち觀智と名く。觀智明了なるが故に菩提と稱す、菩提の無累なる、即ち是れ果果なり。然も十二因縁は本性清淨にして、未だ曾て因果ならず、亦境智に非ず、故に非因非果と名く。然も此五性既に二體無し、則ち境を轉じて智と爲し、因を反ずるを果と爲す、斯の如きの因果は未だ曾て因果ならず。故に因を合し果を境智に合すと名くるなり。三に因果を合し境智を聞くとは、亦大品に波若を以て因と爲し、薩婆若を果と爲すが如し。因果更に二體無し、波若の因を轉じて薩婆若の果と爲すが故なり。什公云はく、「薩婆若は則ち是れ老波若なり。此を因果を合すと名くるなり」と。境智を聞くとは、實相能く波若を生ずと雖も、而も實相の境を轉じて波若と爲さず。亦世諦の境を轉じて方便の智と爲さず。故に境智を聞くと名く。次に因果を聞き境智を合すとは、亦涅槃に境を轉じて智と爲すが如し、故に境智を合すと名く。而も因と因因と果と果果と有り、故に因果を聞くと云ふなり。問ふ、「既に境を轉じて智と爲すは亦因を轉じて果と爲す。即ち應に境智と同じく俱に合すべし。」答ふ、「經に因と因因と果と果果とを聞くが故に因果を聞くと言ふ。境智を取りて並びに因因の名を作して、境智の稱を沒す。故に境智を合すと言ふ。問ふ、「二經は何が故に開合不同なるや。」答ふ、「涅槃は十二因縁に

【五】同異を明す
【四】誦苦集滅道。

就いて境智の義を辨ず。衆性に皆佛性有りと明さんと欲す、衆生は即ち是れ十二因縁なり。因縁は能生即ち境なり、所生は即ち智なり。更に二體無し。故に境智を合すと明すなり。『大品』には實相は波若を生ずと辨す。能生は即ち是れ無爲波若なり。所生は即ち是れ有爲の觀智なり。故に無爲波若を轉ぜずして有爲波若と成す。故に境智を聞くなり。此れ皆不二にして二なり。故に二經不同なり。若し二にして不二ならば更に異なること無きなり。』

【五】同異門第五。問ふ、『凡そ五時の二智有り、一には、事中の法を照すを權と爲し、四諦の理を鑒るを實と爲す。謂く、三藏教の二智なり。二には、眞空を照すを實と爲し、俗有を鑒るを權と爲す。此は大品教の二智なり。三には、病を知り藥を識るを權と爲し、病に應じて藥を授くるを實と爲す。『淨名經』の二智なり。四には、一乘を照すを實と爲し、二乘を鑒るを權と爲す。法花の二智なり。五には、常住を照すを實と爲し、無常を鑒るを權と爲す。』涅槃の二智なり。上に明す所の如きは乃ち是れ大品教の意を釋するなり。云何が以て『淨名經』の宗と道ふや。答ふ、『五時の説、四宗の論は文に乘き義を傷く。古已に之を詳にせり、今當に略して説くべし。一經の内を尋ぬるに具に五文有り。始終を待たずして方に諸智を備ふ。『大品』に云ふが如し。『廣く三乘の教を説いて、菩薩をして遍く諸道を學せしむ』と。即ち識んぬ。四諦の理を照すを實と爲し、事中の法を鑒るを權と爲す。故に『大品教』の中に三藏の二智有るなり。波若は空を鑒み、涅槃は有に涉る。九十章の經は盛に此法を談す、即ち空有の二智なり。論に畢竟、明を釋するに、『法花經』を

【五濁】世に流るる五つのいまだしき事。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

引いて謂く、「三一の二智なり」と。法尙品に云はく、「諸佛の色身には去來有り、法身には去來無し、則ち常無常の二智なり」と。知病識業は衆經に皆具す。之を言ふことを待たざるが故に、大品の一經に五の二智を備ふ。「淨名經」の中には諸智を具すとは問疾品に、「三空自調を明し、實慧と爲し、嚴土化人を方便と爲す」と。即ち空有の二智なり。弟子品に云はく、「佛身は無爲なれば、諸數に墮せず、亦生死の五濁を出現す」と。則ち常無常の二智なり。不二法門品に「聲聞の心と菩薩の心とは不二なり」と明す。謂く、一乘の實智なり。大小の差別を照すを、三乘の權智と名く。問ふ、「不二法門は云何が即ち一乘なるや。」答ふ「不二の理は則ち是れ乘本なるが故に、名けて乘と爲し、不二の理を辨るに由るが故に、不二の觀を生ず。不二の觀に由りて、能く衆行を導いて薩婆若に到る。故に十二門論に大分深義を明すに謂ゆる空なり。是義に通達するを以て即ち大乘に通達し、六波羅蜜を具し、障礙を取ること無し。問ふ、「不二の理は通じて三乘の本と爲す、豈但一乘の本のみならんや。」答ふ、「理既に無二なり、乘豈三ならんや。但し此言を唱ふるに則ち歸一を知んぬ。又無二の理は即ち是れ一乘の異名なり。又尙常住を明す。豈一乘を顯さざらんや。故に知んぬ、淨名に亦五の二智を具す。「法花經」に諸智を具すとは、方便品に云はく、「我涅槃を説くと雖も是れ亦眞の滅に非ず。諸法は本來より常に自ら寂滅の相なり」と。昔の涅槃は眞の滅に非ず、今の涅槃を眞の滅と爲す。則ち昔の涅槃は眞の常に非ず、今の涅槃は是れ眞の常なり。

【又天親】以下、三身を述ぶ。

【因縁生】因と縁との力によりて生ずること。
【三藏】小乗教のこと。

又天親の論に壽量品を釋するに具に三身を辨す。「化身は則ち有始有終、報身は則ち有始無終、法身は則ち無始無終なり」と。故に知んぬ、常無常の義を具す。又若し一乘の果は則ち是れ一乘の因なり。即ち因は聲聞に異にして、果は同じく灰斷ならん。是事ならず、聲聞の果は則ち是れ一乘の因なり。安樂行品に明すらく、「一切の法空にして如實の相なりと知る、則ち是れ實智なり」と。因縁生なりと知る、謂く、方便智なり、亦空有の二智を具するなり。序品に衆を列るに、猶小乘に依りて聲聞の徳を嘆す。故に知んぬ、亦三藏の二智を具す。涅槃に五を備ふることは復言を待たざるなり。問ふ、「若し一經の内に諸智を具せば衆經、何んが別なる。」答ふ、「諸大乘經は通じて道を顯はさんが爲なり。道は既に無二なり、教豈異ならんや。但入に多門有り、故に諸部差別せり。一經の内に具に五種を含むと雖も、而も義を明すに傍正同じからず。三藏の一教には唯事理の權實を明して未だ餘門。二智を辨ぜず。『大品』には空を以て正と爲し、餘義を傍と爲す。『法華』には三一を端と爲し、餘は皆況て辨す。『涅槃』には常無常を以て正と爲し、餘は悉く兼ねて明すなり。問ふ、「衆經に何が故に此傍正有るや。」答ふ、「二種の菩薩有り、一には直ちに佛道に行き、二には小を廻して大に入る。波若には直往の菩薩の爲に方便と實慧とを説いて、三界に墮せず。二乘に住せしめずして、兩の健人有りて各一腋を扶けて直ちに佛道に至らしむ。故に『法花』に云はく、「佛子有り、心淨柔軟にして亦利根なり。我は是の如きの人來世に作佛を得べしと記す」と。此れ則ち波若の時の事を指すなり。須らく三乘を方便と爲し、一乘を眞實

【大品に】以下、
有爲無爲の波若を
明す。

と爲すと明すべからず。又廻小入大の人は波若の時に於て、道根未だ成ぜず、故に正しく三一の義を明さず。而も畢定品に「法花經」を引いて、退不退を明す。蓋し此れ波若の後分、傍之に及ぶのみ。三修比丘の無常の執、大品に至るときには、其根未だ傾かざるが故に廣く常住を明さず。波若滙和は既に是れ因行なり、復須らく果徳を識るべし。是故に大品の後分に略して、法身は常なり迹には去來有り」と明す。又常啼品は波若を求む、故に二慧を以て正と爲し、中道にして佛の去來を疑ふが故に傍に本迹を明す。

問ふ、「大品に有爲波若、無爲波若を明す。豈正しく常無常を辨するにあらずや。」答ふ、「無爲波若に二種有り。一には、實相境を以て無爲波若と名け、取生の觀慧を有爲波若と名く。二には、佛果の法身を以て無爲波若と名け、菩薩の因慧をば有爲波若と名く。『大品經』には正しく境智の爲無爲の義を明す。傍に因果の爲無爲を明すなり。是を以て論に云はく、『有爲波若を得んと欲せば當に無爲波若を學すべし』と。此は觀智を得んと欲せば當に實相の境を學すべしと明す。若し因を得んと欲せば當に果を學すべしと言ふは義に於て便ならざるなり。又云はく、「實相は能く波若を生ず、正に是れ境を以て智を生ずるなり」と。若し果を以て因を生ずと言はば、義も亦便ならざるなり。若し實相は則ち是れ法身なるを以て、如を以て佛と爲すは則ち此境智は便ち是れ因果ならん。上の五句の中に以て此意を詳にせり。問ふ、『大品』には何が故に境智の爲無爲を以て是を正とし、『涅槃』には因果の爲無爲を以て是を正とするや。」答ふ、『大品』には明かに菩薩の行を説く。實相は能く波若を

生ず。波若の故に漚和有り、故に境智を以て正と爲す。涅槃には盛に果徳を明す、故に因位より以來皆是れ無常なり、如來の法身は始は是れ常住なり、故に因果の爲無爲を以て是を正宗とす。『問ふ、』『大品に境智の爲無爲を明す、云何が傍正あるや。』答ふ、『實相の境は是れ波若の本なりと雖も、而も釋論に波若を聞いて二慧と爲す。二慧は則ち取生是れ有爲波若なり。故に有爲を以て是を正とす。無爲の境は傍なり。故に境を以て宗と爲すことを得ず。』問ふ、『大品に法には住せずして波若に住するを六度等の萬行を具足すと云ふ。是れ有爲なりと爲んや、是れ無爲なりと爲んや。』答ふ、『不住法とは一切の有所得の法に住せず、一切の法に住せざるを以ての故に、則ち波若に住す。此れ則ち是れ實相無爲波若なり。次に下に六波羅蜜を具足す。中の第六の波若は、則ち是れ有爲波若なり。此は凡そ三法の次第を明す。一には能生、謂く、實相の無爲波若なり。二には所生の觀智、有爲波若なり。三には導、因果の行を成す。』

問ふ、『何を以てか法に住せずして波若に住すといふ、是れ實相波若なりと知らんや。』答ふ、『第六の度の中は既に是れ有爲なり、則ち知は初は是れ無爲なり。又論に六家の波若を解することを辨するに、第六は則ち是れ實相なり。仍ち不住法住波若を引くなり。故に知んぬ、第六は則ち是れ實相なり。』法花經は正しく廻小入大の人の爲にするが故に、三乘の方便と爲すと明して、其をして小を捨て、一乘を眞實と爲すと示して、其を勸めて大を取らしむ。故に正は三一の二慧を明すなり。既に小を捨て大を求めて則ち菩提心を發し

【問ふ】以下、波若、法華、涅槃の所爲を明す。

て菩薩行を終し、須らく空有の權實を學すべし。三界に著せず、二乘に墮せずして直ちに佛道に至らん。但し『大品』は既に廣く明すを以ての故に、『法華』には但し略して説く。三根の聲聞は法花の座に於て、無常を執せざるが故に未だ常樂を明さず。但し既に一乘の因を説けり。須らく一乘の果を辨すべし。是故に後分に略して常を明す。又常住を説いて前一乗を成す。若し是れ無常ならば還つて灰斷に同じからん。既に昔の三に異なる。則ち知んぬ、常住なりと。是故に略して常無常を辨するなり。涅槃の教の起ることは、正しく無常の執の爲なり。故に常住を開く。三一空有は前の教に已に明す、但略して之を説く。

問ふ、『波若は直往の菩薩の爲にし、法花は廻小入大の人の爲なり。即ち縁を攝すること已に周し、涅槃の教の興ること復何の所爲ぞや。』答ふ、『教を設るに多の意あり、一途なるべからず。』『大品』は十九の因縁の爲なり、涅槃の所爲は一に非ず、法花に依りて此意を釋すれば諸子に二有り。一には失心、即ち鈍根の人、二には不失心、謂く、利根の人なり。直往の廻小と波若法花を開きて並びに頓悟すること有りと雖も、謂く、不失心の子にして利根の人なり。餘の失心は鈍根にして猶未だ藥を服せず。双林に滅を唱へて爲に涅槃を説くとき、方に即ち信を取る。若し然らば始蓮花藏より、終跋提河まで但利鈍の二縁のみ有り。爾るに前は利根の人の爲、涅槃の教は鈍根の爲なり、又波若法花の座に皆已に道を得て、今涅槃を聞き更に復進悟す。故に云はく、人中の象王、迦葉菩薩の爲に是經を説くなり。又二縁有り、一には教を歴已りて道を悟ることを得、二には但涅槃を開き則便信を取

【問ふ】以下、大品と淨名との二智の異りを明す。

る。故に波若法花は兩人の爲にすと雖も、更に涅槃の二智を説くなり。別して二經を論ず。

問ふ、「大品」と「淨名」との二智何んが異なるや。答ふ、「凡そ三説有り。五時の者の云はく、大品には空を照すをもて二智を分ち。淨名は病を知り藥を識り、緣に應じて教を授く、上之を釋するが如し。四時の義の云はく、大品と淨名と同じ、是れ第二時の攝なり。空を照し實と爲し、有を驗るを權と爲す。但し大品は通じて淺深を説く。淨名は偏に八地の法を明すなり。北土の人の云はく、「淨名は是れ圓頓の教なり、非染、非淨、染淨双遊せり」と。今謂く、並びに然らず、智度は菩薩の母にして、方便を以て父と爲す。一切衆の導師是に由りて生ぜざること無し。此れ則ち空有の二慧なり、斯れ乃ち遍く方等を貫く、豈大品に局らんや。又波若は空を驗み、漚和は有に涉る、此れ總じて諸智を攝し、知病、識藥、應病、授藥其中に纏在せり、豈彼波若の二智に淨名の權實を攝せざることを得んや、故に釋を非と爲す。龍樹は十大經を列したまへり、謂く、法花等なり、而も波若は最勝なり。豈大品は通じて淺深を説き、淨名は獨り妙道を明すと云はんや。若し淨名は是れ八地已上の人なるが故に法妙なりと言はば、如來究竟果徳の爲に波若を説く、即ち最深なるべし。又身子善吉の小人之を説く、便ち大法に非ざらん。若し淨名には不思議を辨じ、巨細容入するが故に深と爲すと云はば、大品は指して風力を障へ、毛大千を擧ぐと明す、豈明かならんや。又波若と漚和とは不思議の本なり。借座請飯は不思議

【今明す所】以下
 大品と淨名の同異
 を明す。

議の迹なり。大品に盛に二慧を明すが如きは則ち不思議の本を辨ず。淨名に通を現すれば乃ち不思議の迹を顯す、何んが本は淺深に通じ、亦是獨り妙と爲すことを得ん。若し三乘通じて波若を學するが故に、淺深に通ずと云はば、淨名に亦二乘の人皆無得を以て得と爲すと辨ず、豈通ぜざらんや。若し此經は是れ圓頓の教なりと言はば是れ亦然らず。大品等に菩薩の權道方便適化不同なることを辨ず。寧ぞ獨り此經を以て圓頓と爲さんや。

今明す所は大品淨名に明す所の二智に同有り、異有り、智度は菩薩の母にして、方便を以て父と爲す。二經同じく斯法を辨ず、但し大品には前に實慧を明し、後に方便を辨ず、故に九十章の經を聞いて二道と爲す。六十六品には波若を明し、後の二十四品には方便道を明す、所以に前に實慧を明し、後に方便を辨ずるは實相を本と爲し、諸法を末と爲す。波若は實相を照すが故に波若を本と爲し、方便は諸法を照すが故に方便を末と爲す。此は二本二末を示し、本より末に至り體より用を起すが故に前に實慧を明し、後に方便を辨ず。二には一切諸見に凡そ二種有り。一には有見、二には無見なり。波若は其有見を斥け、方便は其無見を破す。即ち中道を顯して二邊を遠離するが故に、前に實慧を明し後に方便を辨ず、謂く、破見の次第なり。三には、菩薩の退に二事有り、一には三界を貪し、二には小乘を取る。方便の實慧なるが故に三界に著せず。實慧の方便なるが故に二乘に墮せず。即ち菩薩の位に入りて佛道に至ることを得。要す前に三界を離れ、後に二乘を離る、故に前に實慧を辨じ、後に方便を明す。此は「法花經」の五百山旬輪難惡道の如し。三界を三百

【又成就】以下、成就衆生成佛國土に就いて述ぶ。

と爲し、二乗を二百と爲す。先に三百を離れ、後に二百を離るるが故に先に實慧を明し、後に權慧を辨す。故に大品の中には二乗を以て合して一百と爲して但四百を明す。開合を異と爲すの雖も法花の大に同じ。彼に廣く説くが如し。又寂公の釋論の序に云はく、正覺は邪思の自ら起ることを知るが故に、阿含は之が爲に作り澤有の惑に由ることを鑿るが故に、波若は之が爲に照す。若し然らば波若は即ち小乗の有を破す。故に前に實慧を明し、著有を破すと雖も復證空を恐る。故に方便は空を破す。此は教の前後に約して次第と爲すなり。五には位に就いて次第を明せば、前に波若道を明す、謂く、六地已還なり、次に方便道に約せば、則ち七地已上の無生法忍なり。此れ皆大判して言ふことを爲す。龍樹云はく、「波若の中に方便無きに非ず、方便の中に波若無きに非ず。但前には多く波若を明し、後には多く方便を明す」と次に『淨名經』に二慧を辨せば、前に方便を明し、後に實を辨す。然る所以は此教の興る所は正しく疾より起る。故に云はく、「是れ方便を以て身に疾有ることを現す」と。疾有るを以ての故に便ち方丈の二會菴蘭の兩集有り、故に前に方便を明し、後に實を辨するなり。

又成就衆生淨佛國土は此は是れ菩薩の方便の用なるが故に、佛國の一品は淨佛土を明し、方便已去は成就衆生を辨す。是を以て此經に多く方便を明す。又大品には多く實相を明し、少しく神通を現す。淨名には多く神通を現じ、少しく實相を明す。又大品には多く實慧の方便を明す。『淨名經』には多く權實二慧を辨す。問ふ、『權と方便とは何んが異

【今總じて】 以下三句を明す。

り有る。』答ふ、「通ずれば即ち別無し、皆是れ善巧の義なり。別して言を爲さば、方便は則ち長、權は則ち短なりと語る。」

今總じて三句を明す。一には實相を照すを實慧と爲し、萬法を鑒るを權と爲す。二には靜に萬法を鑒るを實と爲し、外に反動するを權と爲す。三には動用に就いて不疾の身を以て實と爲し、疾を方丈に託するを權と爲す。初の實相を照すを名けて實慧と爲す。自餘の三門は皆方便に屬するが故に、權の義、短なりとは、但外に反動を示すを取りて之を名けて權と爲す。故に權は是れ方便の中の別用なり、所以に短と言ふ。問ふ、「權と方便とは既に短長有り、兩實も亦爾ることを得るや不や。」答ふ、「方便の實は則ち長なり、權の實は則ち短なり。然る所以は方便は既に爲さざる所無く、實慧は爲さざる所無し、而も實には爲す所無しと照すが故に長なり。權智は但是れ有の中の反動なり。實智は是れ有の中の靜鑒なり。故に權の實は則ち短なり。」問ふ、「外に反動を示すを權と爲さば則ち動も動する所無きを照すを實と爲して、但此二を立てて權實を成するや不や。」答ふ、「外に反動を示すを權と爲せば、此は是れ病に應じて藥を授け、必須内に根藥を靜鑒するを實と爲して、方に二慧を成す。空慧は根藥を知らず、故に二慧を成せざるなり。」

【六】 長短を明す

【二八】 長短門第六。總じて衆經を論するに具に四句有り。一には實智は長にして權智は短なり。二には權は長にして實は短なり。三には俱に長なり。四には俱に短なり。實智は長にして權智は短なりとは、此は動靜に約して以て二智を分つ。靜に空有を鑒るを實と爲

す、故に實の義は即ち長なり、外に反動するを權と爲す、權は但是れ有の用なり、所以に短と爲す。問ふ、「内に靜に空有を鑿れば實智既に長ならば外動及びて空有を説く。二諦を説くが如く又及びて空有を現す。文殊の如きは世王の爲に虚空の身を現じ、又丈六千尺の身を示す。若し爾らば動用亦空有に通ず、則ち二智俱に長ならんや。」答ふ、「外に空有を説くと雖も、但有を鑿るの智より起るが故に權を短と爲すなり。言ふ所の權は長にして實は短なりとは、此は空を鑿るを實と爲し、有を照すを權と爲すに約して二智を分つ。空を照すを實と爲し、實智は唯是れ靜鑿なるが故に、名けて短と爲し、有を照すを權と爲す。權は動靜を備ふ。内に根樂を照すを靜と爲し、外に病に應じて藥を授くるを動と爲す。權は動靜に通ずるが故に長と言ふなり。二智俱に長なりとは、空有に就いて以て權實を分つ。實智は空を照し、權智は有を鑿みる。有を鑿みるの中に動靜の二有を明す。實智は空を照し、動靜皆空なり。是故に二智に長短有ること無し。二智俱に短なりとは、但有の中に就いて以て二を分つ。内に有を靜鑿するを實と爲し、外の動用を權と爲す。故に俱に短なり。亦淨名の不病の身を實と爲し、示疾の義を權と爲すが如し。」問ふ、「但有智に就いて權實を開く。照空の智に就いて亦之を開くことを得るや。」答ふ、「實智は二の不二の義を明し、又其體に當る、是故に開かず。權智は是れ不二の二の義なり、又其用たり、所以に兩を開く。若し類を爲さんと欲し、生空の淺を照すを權とし、法空の源を鑿るを實と爲す。又二乗の空を名けて權空と爲し、菩薩の空を稱して實空と爲し、此權實二空を照すを亦權實

【七】 六智を明す

二智と爲すを得。

【七】 六智門第七。興皇の和上、昔此經を講ずるに六種の二智を明し、以て三雙と爲す。謂く、方便の實、權の實、實の方便、權の方便、方便の權、實の權なり、故に兩實、兩權、兩方便有るなり。方便の實とは方便に對して、以て實を辨す。謂く、實相を知る、慧なるが故に名けて實と爲すなり。權の實といふは凡そ二義有り。一には、菩薩に就いて之を辨せば、有を照すを權と爲すが如し。此權の中に就いて更に復實を明す、内に根業を靜鑿するを實と爲し、外に反動するを權と爲すが如し、故に權の實と名く。又不病の身を事中を照すの智を權と爲し、苦空の理を鑿るを實と爲す。今大を以て小に望して二乗の實を明すは、蓋し是れ權に實を明すのみ、究竟の實には非ざるなり。次の雙に云はく、實の方便、權の方便とは、實の方便とは即ち實相を照すの智に對して、名けて實の方便と爲す。權の方便とは即ち上の二乗の實に對して、二乗の方便を明す、此は是れ權の方便なるのみ。三の雙に云はく、實の權、方便の權とは、實の權は即ち實より權を起す、故に實の權と名け、空有を照すを皆名けて實と爲し、但外用を取つて之を口けて權と爲すが如し。又實の權とは、二乗の權は此は是れ虛權なり。菩薩の權を名けて實の權と爲す。方便の權とは、此は空を照すを以て實と爲し、有を照すを方便と爲す。方便の中に就いて更に復權を起す。内に有を照すを實と爲し、外に動用するを權と爲すが如し。此六門に長短の義を成するな

【八】 開合を明す

り。

【大悲】 苦の衆生を救ふ大なる慈悲

【八】 開合を論ずるの門第八。二智に具に開合の四句有り。一には、二慧を開き前に明す所の如し。諸法の實相を照すが故に波若と名け、實相の諸法を照すを稱して漚和と爲す。如來は内に此二を照すが故に二慧有り。佛は此二より生ずるが故に、父有り母有り、外に衆生の爲に還つて此二を説きたまへり。『釋論』に云ふが如し。初に波若道を説き、次に方便道を明す。初に佛母の經を明し、次に佛父の經を明す。所以に波若を十方三世諸佛父母尊經と爲す。之を信すれば大福を得、之を毀すれば大罪を招く。問ふ、『既に二慧を以て父母と爲す、何者をか祖父母と爲んや。』答ふ、『境智に約して之を分たば即ち實相と及び諸法との二境は能く二智を發生す、即ち祖父母なり。是故に爾り、炎を名けて智母と爲す。若し衆行に據りて論を爲さば大悲に由るが故に方に波若有り、即ち大悲を波若の母と爲し。亦大悲に由るが故に方便有り、是れ方便の母なり、即ち是れ父の義なり。但し之を合説するのみ。此れ即ち是れ二慧を聞くなり。』問ふ、『若し波若を以て母と爲し方便を父と爲せば、何が故に論に波若を母と爲し、般舟三昧を父と爲すと云はん、又波若は母、五度を父と爲すと云はん。』答ふ、『般舟をば翻じて現前と爲す。現前とは現前に佛を見るなり。此は是れ有行なり、故に方便に屬して之を名けて父と爲す。五度は有行なれば亦方便に屬するなり。次に第二に二慧を合すとは、波若と漚和と皆是れ波若なりと明す。然る所以は波若を體と爲し、漚和を用と爲す。體は即ち波若の體、用は是れ波若の用なり、故に皆波

若にやと名なく。如にら來らい大だい品ひん九く十じゅう章しょうを説といて二に道だうを閉ひくと雖いへども、皆みな摩ま訶か波は若にや經きやうと稱しょうして、後のちを以もつて
 方ほう便べんと爲なさず。故ゆゑに知しんぬ、二に慧えを皆みな波は若にやと名なく、又また論ろんに云いふが如ごとし。金きんを以もつて種しゆ種しゆの
 物ものを爲つくるに、而しかも是これれ金きんにして更さらに別べつ體たい無なし。又また六む度どの中なかに方ほう便べんと實じつ慧えとを合あして皆みな波は若にや
 と名なくるが如ごとし。問とふ、「何なにを以もつてか然しかり」と知しる。答こたふ、「餘あまの五ご度どには但ただ五ご種しゆの有う行ぎやうを明あ
 して、空くう有ゆうを照しょう和わすることを辨わぜず。今いま空くうの義ぎを照しょうすをば波は若にやに屬ぞくし、有ゆうの義ぎを知しるをば
 亦また波は若にやに屬ぞくす。故ゆゑに知しんぬ。二に慧えを皆みな波は若にやと名なく。即すなはち是これれ權ごん實じつを合あして皆みな實じつと名なくるの
 義ぎなり。第三だいさんに權ごん實じつを合あして皆みな權ごんと名なくとは、有ゆうを照しょうす巧せう用ゆう既きに名なけて方ほう便べんと爲なす。空くうを
 照しょうすの巧せう亦また是これれ方ほう便べんなるが故ゆゑに、二に照しょう同どうじく巧せうなれば即すなはち兩りやうながら皆みな方ほう便べんなり。又また七しち地ちの
 中なかに方ほう便べん波は羅ら蜜みつと名なくるは、釋しやく論ろんに云いはく、「是この七しち地ちは清じやう淨じやうなるを反はんじて方ほう便べんと名なく。六む
 地ちに至いたつて波は若にやの用ゆう猶なほ未いまだ妙めうならざるを以もつての故ゆゑに、方ほう便べんと名なけず。七しち地ちに至いたつて即すなはち波は
 若にやの用ゆう妙めうなるが故ゆゑに、方ほう便べんと名なく。七しち地ちの文もんに方ほう便べんの慧えより十じゅう妙めう行ぎやうを起おこして三さん界がいの空くうを知し
 ると雖いへども、而しかも三さん界がいを莊じやう嚴げんする等とうの如ごとし」と。故ゆゑに知しんぬ、一いち慧えを皆みな方ほう便べんと名なけ、此この義ぎに對たい
 して亦また六む地ちに方ほう便べんと波は若にやと有あるを皆みな波は若にやと名なくるを得う。又また勝しやう鬘まんに一いち乘じやう大だい方ほう便べんと云いふが如ごとく、
 一いち乘じやうの中なかに若にやし空くうを照しょうし、有ゆうを照しょうし、空くうと説とき、有ゆうと説とくは、皆みな方ほう便べんと名なく。悉しやくく是これ
 れ諸しよ佛ぶつの大だい善ぜん巧せうなるを以もつての故ゆゑに、亦また是これれ二に慧えを合あして方ほう便べんと爲なすなり。四しには、開ひらかす
 合あせず、即すなはち上じやうの三さん句くを泯みして諸しよ法ほふを明あす。正せい觀くわんは未いまだ曾じやうて實じつ有ゆうらず、亦また未いまだ曾じやうて是これれ
 權ごんならず、亦また未いまだ曾じやうて聞きならず、亦また未いまだ曾じやうて合あならず、故ゆゑに是この法ほふを不可ふか示し言ごん辭じ相じやう寂じやく滅めつと云い

【九】 斷伏を明す

【大小】 大乘教、小乗教。

【八聖道】 中正にして理に契ひ、涅槃に至る道なるが故に正道といふ。正見（四諦の理を正しく見ること）正思惟（四諦の理を正しく思惟觀察すること）正語（不實の語を離ること）正業（身の三過即ち殺盜婬を離ること）正命（五種邪命を離ること）正精進（戒定慧の道に一心に精進する事）正念（正法を思念すること）正定（身心寂靜にして亂想を離ること）。

ふ。佛も行ずる能はず、佛も到る能はず。而して今開合實權有ることは、皆是れ無名相の中に衆生を出處せんが爲の故に開合の不同を明すのみ。

【九】 斷伏門第九。先に中論の疏に依り異家の義を立て、然る後に辨せん。問ふ、『二智は云何が煩惱を斷ずるや。』答ふ、『此經に云はく、佛増上慢の人の爲に煩惱を斷ずと説く。實には斷ぜざるなり。』問うて曰はく、『大小の經論に皆斷惑を明す。云何が斷ぜざる。』答

ふ、『若し斷ずと言はば、今謂ふ、之を問はん、惑の斷すべき有りとなんや。』如し其れ實に有らば即ち斷すべからず。又經に云はく、『若し法先に有にして後に無ならば、諸佛菩薩に即ち過罪有らんを、云何が斷と言はん。若し其れ惑無くば、竟に何の所斷ぞ。又惑有らば即ち是れ有見ならん。惑無くば名けて無見と爲す。亦有亦無、非有非無並に是れ煩惱なり。云何が煩惱は煩惱を斷ぜんや。又縱に煩惱有るを所斷と爲し、慧を能斷と爲せば、惑を見るが故に斷すと爲んや、見ずして斷ずるや。如し其れ見ば、即ち明闇並べり、云何が斷ぜんや。若し相見せずば復何の所斷ぞ。若し解惑相違すれば懸に斷ずと言はば、即ち天竺の燃燈震旦の闇を破し、一品の解は一切の惑を除かん。又慧獨り能く斷ずるか、件を假りて共して除くなり。若し獨り能く斷せば、菩薩何が故に八聖道を修するや。獨り慧斷せずんば復件を假ると雖も亦斷すること能はざらん。一盲見ざれば衆盲亦然るが如し。又一念斷

なりとせんや、相續すと爲んや。若し一念ならば惑も亦一念なり、即ち與に俱に謝す。何んが能く斷ぜんや。若し相續して斷せば滅の故に續すと爲んや、滅せずして續すとせんや。

滅せば即ち復所續無からん。復能續無し、云何が續せんや。是を以て之を推するに即ち所斷無し、是を以て應に智は惑を斷ずと言ふべからず。問ふ、「若し爾らば應に斷有ること無かるべし。何が故に經に「一念相應の慧煩惱の習を斷ず」と云ふや。」答ふ、「上に之を推するが如し、即ち畢竟して斷無し。是の如く了悟すれば即ち是れ斷なり。然る所以は一切の處に於て解惑を求むるに従無し。即ち心に所依無し、心所依無ければ即ち衆累清淨なり、故に名けて斷と爲すなり。斷は不斷と相違せず。問ふ、「所依無きを以て名けて斷と爲せば、波若斷なりと爲んや、方便斷なりと爲んや。」答ふ、「舊に云はく、波若は是れ空慧なるが故に斷ず。方便は有を照せば即ち斷ぜざるなり。今明すらく、有所得の空有の二慧は俱に斷すること能はず。無所得の空有は俱に能く斷ずるなり。但不二にして二なれば二慧の不同を聞く。方便の實慧なれば即ち不斷にして斷なり。實慧の方便なれば斷にして不斷なり。問ふ、「何が故に爾る。」答ふ、「依着する所有は是れ諸の煩惱の根なり。諸法の實相は是れ無著の本なり。實相は所依無きに依るが故に波若を生ず、波若は即ち所著無きが故に、衆惑清淨なり、故に斷と名くるなり。」

問ふ、「若し境に會して智を生じて、然る後に惑を斷せば他と何んが異なる。」答ふ、「惑の外に別に實相有るが故に實相に會して斷ずと言はず。但煩惱本より不生なり、今亦滅せずと了す、即ち是れ實相なり、故に實相に會して斷ずと名く。問ふ、「但し波若のみ斷すと爲す。薩波若も亦斷するや。」答ふ、「此義に舊く二師有り。或は金剛心斷と言ふ、是れ波若斷

【七方便】修行の階位。三賢位（五停心位、別相念住位、善根位（煖位）、頂位、忍位）、世第一法位）とのこと。未だ凡夫の位にして資糧加行を修し聖道に入る方便となる位なるが故に方便位といふ。

なり。或は佛智所斷と言ふ、即ち薩波若斷なり。今明すらく、大品に云はく、「菩薩は無礙道の中に在り、佛は解脫道の中に在りて行じて、一切の暗無し」と。此文の意を詳にするに無礙解脫俱に斷不斷の義有り。若し一念の正觀もて、惑現前せざれば即ち無礙正斷なり。解脫は累の外に出居せり。故に解脫は斷せず。故に云はく、佛は解脫道の中に在りて行じて一切の暗無しと。若し解脫無礙に續して、前の無惑の處を鎮して未來の惑を遮して續生するを得ざらしむと言はば即ち遮斷有り、故に亦斷と名く。無礙正斷なるが故に、金剛に惑盡くと言ふを得、未だ解脫の未來の惑を遮するに有らず、盡きすと云ふことを得。故に盡と不盡との二は既に違せず。」問ふ、「波若を無礙と爲し、薩婆若を解脫と爲さば、地前を無礙と爲し、初地を解脫と爲すと云ふを得るや不や。」答ふ、「有人云はく、「亦此の如くなるを得」と。小乗は即ち苦忍の前習行未だ久しからず、但伏して斷に非ず。大乘は地前に修行し時を積む、是故に能く斷するなり。今謂く、然らず、大小乗の義は乃ち優劣懸に殊なるも如來の制立は大格相似せり。小乗は即ち七方便に伏して苦忍に之を斷ず。大乘は三十心に伏して初地に斷するなり。初地の中に自ら無礙解脫を開く、無礙は正斷にして解脫は遮斷なり、上に釋するが如きなり。」問ふ、「無礙を轉じて解脫と爲すと爲んや。無礙謝して解脫生ずと爲んや。」答ふ、「毘曇は即ち謝なり、成論は即ち轉なり、此二説を斥すること餘處に已に明せり。今略して之を陳べん。金剛若し謝して別に佛果有らば、云何が波若を反じて薩云若と名くる。金剛を轉じて佛と成らば、云何が無常の法を轉じて而も常

と作さんや。今明さば、具に轉謝及び不轉不謝有り。若し金剛本より不生滅なりと了悟すれば即ち金剛是れ佛なり、故に不轉不謝なり。是故に經に云はく、「一切衆生は本來寂滅にして復更に滅せず」と。妄謂の心に於て生滅の見を息む、故に名けて謝と爲す。了悟の者に約するに、前には生滅と謂ひ、今は無生滅と悟る。是故に轉と名く。二文は一會して義は違する所無し。「問ふ、「若し地前に伏し、初地に斷せば何んが釋論に初地の時には未だ結を捨てず、七地に方に斷すと云ふを得るや。」答ふ、「衆師不同なり、生公は大頓悟の義を用ふ。唯佛のみ惑を斷す。爾るに前には未だ斷せず、故に佛をば名けて覺と爲す、爾るに前には未だ覺せず、瑤師は小頓悟の義を用ひ七地に方に斷す、向の文を引いて之を證す。今明すらく、皆妨ぐる所無し。大經に云はく、「唯佛を眼見佛性と名け、十地已還をば皆聞見と稱す」と。即ち唯佛のみ惑を斷じて爾るに前には斷せざるなり。初地已來は但纏累を斷じて未だ細惑を除せず、故に不斷と云ふ。七地には細を除く、故に斷と言ふのみ。故に各其義有り、應に偏執すべからず。」問ふ、「中伏假斷なりと爲んや、假伏中斷なりと爲んや。」答ふ、「緣に適りて悟を取る、定有ること無きなり。自ら中伏假斷なる有り。性の有無を求むるに不可得なるが故に、非有非無と名くるが如く、之を目けて中と爲す。此は但性の有無を伏して猶未だ斷せざるなり。」

【次に】以下、假有假無を明す。

次に假有假無を明すに、即ち性の有無始めて斷す。然る所以は假有假無を識れば、即ち畢竟して定性の有無有ること無しと知る。故に假斷と名くるなり。次に假伏中斷を明す

【五塵】五境に同じ。色塵、聲塵、香塵、味塵、觸塵のこと。五境は、吾人の眞性を汚し、煩惱を起さしむる者なるが故に塵と名

に、性の有無に對して假の有無を説いて、性の有無を伏するを以ての故に、假伏と云ふ。次に明して、假有なれば有ならず、假無なれば無ならず、非有非無を悟るを中道と名けて、前の性の有無始めて永斷するを得るが故に、假伏中斷と名く。問ふ、「亦假伏假斷中、伏中斷なることを得るや不や。」答ふ、「亦此義有り、假の有無を識りて即ち性の有無永斷するが如く、名けて假斷と爲すなり。自有は假の有無を識りて但性の有無を伏して猶未だ斷ぜざるなり。自有は非有非無を悟りて但性を伏す。自有は非有無を悟りて、性感永斷して假を説くを須ひず。問ふ、「云何が假名の惑、實法の惑と名くるや。」答ふ、「成論師云はく、「假を緣して假に迷ふを假名の惑と稱す。則ち假の人柱等に迷ふなり。實を緣じて實に迷ふを實法の惑と名く、五塵等に迷ふが如し」と。今明すらく、此は是れ三藏一部の義なり。大乘の假實の惑と曰ふは即ち向に之を明す所なり。即ち前の假をば名けて假惑と爲し。即ち前の實を名けて實惑と爲す。然る所以は諸法未だ曾て假實ならず。今此假實有り、良に惑に非ざらんや。」問ふ、「大乘に亦假名實法の義有りや否や。」答ふ、「二は是れ假名なり。不二を中道と爲す。中道は即ち是れ實相なり、故に實法と名く、因緣假名の二諦に迷ふを稱して假惑と爲し、不二實相に迷ふを實惑と目くるなり。問ふ、「云何が迷ふや。」答ふ、「不二の二を名けて二諦と爲し、二の不二を中道と爲す。二は定んで二なるが故に假に迷ふと名け、不二は定んで二なれば稱して實に迷ふと爲す。又二不二を皆名けて假と爲し、非二不二を方に實と爲し、此假實に迷ふを假實の惑と名くるなり。」

【一〇】 攝智を明す

【陰入界】 五蘊、十二處、十八界のこと。

【一切種智】 三智の一。一切種の智を以て、一切諸佛の道法に達し、一切衆生の因種を知り、種種の法門を觀じて諸の無明を破する智慧なり。佛の智慧なり。

【一〇】 攝智門第十。問ふ、『權實二智に智を攝すること盡くるや不や。答ふ、『智を攝すること皆盡きぬ。經に一智、二智、三智、四智、五智乃至七十七智有り、皆二智の攝なり。一智を攝すとは即ち如實智なり。如實智は即ち是れ佛眼なり。佛眼は法として見ざる無く、而も所見無し。法として見ざる無ければ權智と名く、而も所見無ければ名けて實智と爲す。』問ふ、『如實の智は但是れ實相を照す智なり。唯應に是れ實智なるべし。云何が權實有らんや。』答ふ、『此は實の如く知るを如實智と名くと明す。故に二智を具するなり。次に二智を攝すとは則ち一切智一切種智なり。但此二智に凡そ六門有り。一には空有もて二に分ち、一切智をば空智と爲し、一切種をば有智と爲す。此れ則ち權實の攝なり。次に總別を以て二を分ち、總相の知をば一切智と爲し、別相の智をば一切種智と爲す。但總別に三門あり、一に苦無常を以て總相と爲し、陰入界を別相と爲す。二に無生滅を以て總相と爲し、諸法の差別を別相と爲す。三に略を以て總相と爲し、廣を別相と爲す。若し苦諦を總相と爲し、廣く苦に無量の相有りと分別するを別相と爲す。三の別の中に初の義を取る。第二の義は猶是れ空有なり。第三の義は後の廣略に屬するなり。三には略説を一切智と爲し、廣説を一切種智と爲す。上に釋するが如し。四には因を一切智と爲し、果を一切種智と爲すなり。』問ふ、『二智俱に是れ果門なり。云何が因果を分つや。』答ふ、『例せば菩提と涅槃とを果及び因果と爲すが如し。涅槃は既に是れ因果なり。即ち菩提亦因と爲すことを得。此義は因果を論ず、今亦然り。五には小乘をば一切智と名け、大乘をば一切種智と名く。此は

【次に】 三智を明す。

小乗には總相して、十二入の苦空無常を知るを明して一切智と爲す、大乘には「遍く一切の法を知るを、一切種智と爲す」と。六には一切種智をば空智と爲し、一切智をば有智と爲し、種を以て性と爲す。性は即ち實相の理なるを諸法の根本と爲す。故に名けて種と爲す。一切智は一切の法を知れば有智と爲すなり。

次に三智を攝するの門とは、三智に多門あり。「涅槃」に云はく、「一には波若、一切衆生の慧にして謂ゆる下智なり。二には毘婆舍那、謂く、二乗の智にして即ち是れ中智なり。三には闍那、佛菩薩の智にして、謂く、上智なり」と。又云はく、波若は別相智にして別して諸法を知る。毘婆舍那は總相智にして總じて諸法を知る。闍那をば破相と爲す。破相とは波若は有を知り、毘婆舍那は空を照す。闍那は空有を捨つ、即ち中道の智なり。又波若の三慧品に説くが如く、二乗をば一切智と爲す。菩薩は道種智なり。佛は一切種智なり。二乗を名けて一切智と爲すとは、十二入に一切の法を攝す。二乗は十二の苦空無常を知れば、一切智と名く。論に云はく、此は但一切智の名のみ有りて、而も一切智の用無し。猶晝の燈の但燈の名のみ有りて、燈の用無きが如し。「問ふ」云何が用無きや。「答ふ、佛は具に一切の法の別相を知りて、然して後に一切の總相を知る。故に一切智と名く。二乗は但總相して一切を知り、一一の別相を知ること能はず。涅槃に云ふが如く、二乗は但於苦を知りて、是苦に無量の相有りて分別する能はず。我は彼經に於て竟に之を説かず。即ち二乗は別知する能はず、故に但一切智の名のみ有りて、一切智用無きなり。道種慧と

【次に】以下、四
 無礙智を明す。
 【四無礙智】如來
 の四種の解智。如來
 無礙辨（一切の法
 の名字に通達する
 こと）義無礙辨（一
 切の法の義理に通
 達すること）、詞無
 礙辨（一切の言語
 に通達すること）、
 樂說無礙辨（衆生
 の欲する所に隨ひ
 て法を説くに自在
 なること）。

は、菩薩は四種の道を知る。人天は謂く、福樂の道及び二乘の道なり。佛道を知るは自度
 度他なり。餘の三道は但度他なり。佛を一切種智と名くるは、此一切種智は、實に前の一
 切種智に異り、前の一切種智は但有法を知る。今空を知るを合して、一切種智と名く。經
 に云はく、一相を知るが故に、一切種智と名く。又云はく、一切の法の行類相貌を知るを、
 一切種智と名くるなり。此三智の中に一一に皆具に空有を照す、皆權實二智有るなり。次
 に『地持論』に三智有り。一には、清淨智は五住の惑を斷じ盡す、故に清淨と云ひ即ち
 第一義空を照す智なり。二とは、一切智は即ち有を照す智なり。三には、無礙智無功用の
 智なり。一切法を照すに、復功用無きが故に、無礙と云ふ。初は是實智後の二を權と爲し、
 次には『攝大乘論』に三智有り。一には、加行智、即ち上地を進求する心なり。二には、正
 體智、如を證するの智なり、謂く實智なり。三には、後得智、即ち寂にして動なり、謂く
 權智なり。此三智を即ち次第と爲し、前に進求の智會り、次に正しく實觀を得、後に實よ
 り用を起す、地地の中に皆此三智を具するなり。又四智を二智に攝入すとは、攝大乘論に
 云はく、「一切智、一切種智、無礙智、無功用智なり」と。前の二は空有を知り、次の一は
 師に従はず、後の一は功用有ること無し。即ち『法花經』に云はく、「佛智、一切智、自然智
 無師智なり」と。前の二は別して空有を照し、後の二は空有に通ずるなり。
 次に四無礙智とは、此に多門有り。今略して一義を擧げん。世諦を知るを知法と爲し、
 第一義を知るを知義と爲す。此れ即ち二智なり。樂說及び辭は皆世諦の智なり。次に四智

【無學】無學位にして、三界の煩惱を斷じつゝして更に學ぶべき法なきが故に名く。

【次に】五智を二智に攝入するを明す。

の義を明す。我生已盡、梵行已立、所作已辦、不受後有にして之を釋すること不同なり。「婆沙」に云はく、「我生已盡は是れ斷集の智なり。集因能く未來の苦果を生ずれば、之を名けて生と爲し、無學に斷じ竟るを我生已盡と名く。梵行已立は是れ修道の智なり。梵をば名けて淨と爲し、無漏聖道は能く垢染を除き、障を離して清淨なれば名けて梵行と爲す。無學の聖人、道行成就すれば名けて已立と爲す。所作已辦は是れ證滅の智なり。斷惑證滅を名けて所作と爲す。無學證果の功成すれば、名けて已辦と爲す。不受後有は是れ苦を知るの智なり。後世の苦報は名けて後有と爲す。無學の聖人は此有に於て復更に受けざれば、不受後有と名く。「問ふ、「經に四諦を説き苦集を明し、後に滅道を明す。今何が故に斷集修道を前にし、證滅知苦を後にするや。」答ふ、「四諦は欣厭の門を示す。苦集を先にし、滅道を後にす。欣厭の門に於ては、逆觀の次第なるが故に、果を先にし因を後にす。四智は是れ順觀門なるが故に、因を先にし果を後にす。故に集道を前にし、後に滅苦を明す。又要す障を除き然る後に善く成ず、故に斷集を先にし修道を後にす。後の果の中に先に現在の過患を滅して、後に未來の苦報を受けず。故に滅を前にし苦を後にす。「勝鬘」と「涅槃」とに四智を釋するに又異りあり。今は之を述べず。四智は大乗の權智に入る、是れ小乘の實智なり。

次に五智を二智に攝入すとは、一には法住智、二には泥洹智、三には無諍智、四には願智、五には邊際智なり。小乘に依らは法住智とは、苦集の相生、諸法の存立を知るを法住

智と名く。道及び滅を知るを泥洹智と名く。又云はく、苦集道を知るを法住智と名け、滅諦を知るを泥洹智と名く。物をして諍を起さざらしむるを無諍智と爲す。未來の一切の事を知らんと願じて、即便知るを得るを名けて願智と爲す。邊際智とは、報身の最後を名けて邊際と爲し、聖人は自在の智を修得するが故に、報身に於て延促自在なるを邊際智と名く。小乗には前に二智は、利鈍の羅漢に通じて皆有り、後の三は但利根の羅漢に之れ有り、又前の二は一切の定に通じて皆能く起す。後の三は但し第四禪に起す。前の二は漏無漏に通じ、後の三は但有漏なり。前の二は三界の身に起すを得、後の三は但欲界の三天下の身に起す。前の二は三界の法を以て所縁の境と爲し、無諍智は但欲界の瞋心を以て境と爲す。大乘の五智は、一切の處、一切の身、五十二位に皆起すを得、漏無漏に通ずるなり。小乗の五智をば、皆大乘の權智の攝と爲す。大乘に五智を論じ、泥洹は即ち是れ實相正法なれば實智に屬し、餘の四をば權智に屬す。十一智を二智に攝入すとは、十智は四諦を照す、是れ差別の智なれば權智に屬して攝す。如實智は一實諦を照す、即ち是れ實相にして、謂く、無差別の智なり、故に實智に屬するなり。又論に云はく、「十智は四眼に在り、如實智を佛眼と爲す」と。若し爾らば四眼の中に二智を具し、佛眼の中にも亦二智を具するなり。問ふ、「菩提と薩婆若と十智には何れの智の攝ぞや。密ふ、「論に云はく、菩提は是れ十智なり、即ち是れ有智なり、即ち一切種智なり。薩婆若を如實智と爲す、謂く、空智なり、亦是れ一切智なり。四十四智とは十二因縁に約して之を作る、老死の苦、老死の集、老死

【菩提】梵音ボー
 ドヒ(Bodhi)智、
 道、覺等と譯す。
 佛の正覺の智慧な
 り。

の滅道と云ふが如く、一に皆四諦の觀を具するなり。七十七智とは、生は縁たり、老死の生は縁となることを離れず。老死の初は是れ正觀の智、次は是れ審法の智なり。又正觀の智は無因に簡ぶ、審法の智は邪因に簡異す。三世に各二なれば六と爲す、此六は是れ法住智、次の一は是れ泥洹智なり。法住は生死の因果增長に明さんが爲の故に多なり。泥洹は之を滅する智なり。三世は合して一なり、此は皆小乘の義なり。皆大乘の權智に屬して之を攝す。若し大乘には、泥洹智は是れ實智なり、上の如きなり。此の如く皆是れ無分別の中の善巧分別なり。分別すと雖も無分別を動ぜず、數論の有所得の釋には同ぜず、既に是れ名教なれば不得不知なり。一問ふ、「四十四及び七十七は同じく老死より起れり、何の異か有る。」答ふ、「四十四は因に由ると觀す。其れ觀は成じ易し、故に鈍根の人の爲なり。果は因に由ると觀すとは、初に老死は是れ果なりと觀す。次に老死の集を明すとは、果は因に由ると觀するなり。七十七は即ち因の果を生ずることを觀するなり。生緣老死と云ふが如く生は是れ因なり、老死の緣と爲すなり。不離生緣老死も亦爾るなり。因の果を生ずることを觀すれば其事既に難し、故に利根の人の爲にす。四十四は成論の文に云はく、「七方便の中に在り」と。七十七は文に位を判ぜず、衆師云はく、「四現忍の中に在るなり」と。一問ふ、「何が故に無明より起らざるや。」答ふ、「末を尋ねて本に至る、此觀は成じ易し。又四十四は但果より起すことを得、四諦を具するを以ての故に、若し無明より起らば復因無し、云何が四諦を具することを得んや。七十七は無明より起らず、但老死より起る、其

【二】 常無常を明す。

觀成じ易きなり。『問ふ、菩薩は十二因縁を觀ず、何の智にか屬する。』答ふ、菩薩は無方なり、定判すべからず。釋論に云はく、「菩薩は衆生の爲の故に果に從ひて十二因縁を觀するなり」と。

【言語道斷心行處滅】 言語に絶し、思慮に超えたること。

【二】 常無常門第十一。略して四句を明す。一には、境智俱に常なり。唯大乘には之れ有り、小乘には無し。小乘には凡聖の智皆無常なるを以ての故に、俱大乘の境智俱に常なるに、凡そ三義有り。一に常智は實相の境を照し、果徳觀照波若は實相波若を照すが如し。二に常智は虚空の常境を照す。『大經』に云ふが如し、一切の常の中に虚空第一なり。今常智は此常境を照すなり。若し實相即ち是れ虚空なるを以てせば、釋論の中に説くが如し、虚空は非有非無言語道斷心行處滅せり、即ち是れ實相なり。今は且く事に據りて虚空を以て常と爲す、此二句は境智の二義を示すなり。三に常智は還つて自ら智を照す。即ち是れ反つて智を照すの義なり。次に常は無常を照すに凡そ二義有り、一に衆生無常を照し、二に應述無常を照す。次に無常は常を照すに、凡そ三句と爲す、一に虚空の常を照し、二に實相の境の常を照し、三に法身性徳の常を照す。但是れ境を照して智の常を照すに非ず、因の中には未だ常智有らざるを以ての故なり。次に無常は無常を照すに二句有り、一に無常の境を照し、二に無常は自ら無常の智を照す。『問ふ、無常の智は還つて無常の智を照すとは、常智の常智を知ると何んが異なる。』答ふ、常智の常を照すには唯一義のみ有り。無常智の無常を知るには二義有り。一には後念の智は前念の智を知り、二には一念の智は即ち

自ら能く知るなり。並觀を得るとは具に二義有り、未だ能並せざる者は、但前後相知のみ有るなり。常げ常を知れば、但一念有りて自ら知りて前後知無きなり。』問ふ、『北土の論師云はく、初地已上には即ち常住の法身有り、亦即ち常智有り。是事云何。』答ふ、『須らく此説の意を詳にすべし。眞を證するの智を以て法身と爲すと爲んや。所證の眞如佛性を取りて法身と爲んや。若し能證の智を以て法身の常と爲さば、是事然らず、釋論に云はく、「菩薩の心に在るをば名けて波若と爲し、佛心に在るをば反じて薩波若と名く」と。若し是れ常ならば則ち明昧無く、應に改反有るべからざるなり。又『涅槃經』に云はく、「此常法の稱は要す是れ如來なり」と。長壽品に凡そ三法常の義を簡ぶ、一には外道、二には小乘、三には菩薩。並に常住無し、故に佛性の常を以て法身と爲すは、此れ猶是れ江南の舊宗にして、北方の異説には非ざるなり。』問ふ、『攝大乘を講する師有りて云はく、「初地に眞を見ること佛地と異ならず」と、是事云何。』答ふ、『若し爾らば論に何んが菩薩の心に在るを波若と名け、佛心に在るを反じて薩波若と名くと云ふを得ん。既に其れ改反せり、故に知んぬ、明昧の不同有り。又論に云はく、波若は清淨なるを反じて方便と名く、則ち知んぬ、六地の波若は未だ淨ならず。又本眞を見るを以ての故に惑を斷ず。初地に眞を見ること佛と異ならざれば、則ち一切の惑斷ぜん。若し眞を見るを以て惑を斷ぜざれば便ち應に是れ有智は惑を斷すべし。故に此説は然らず。此の如きは皆是れ無分別の中の善巧分別なり。爾らざれば淺學は眉眼を失して巧方便無しと爲さん。今既に二智を釋せんと欲せば、即ち

廣く方便を解す。方便といふは無差別の差別の智なり、故に須らく善巧に法門を分別すべし。然る後に無方無礙の用あり、後に當に廣く失を叙得すべし、未だ舊宗に同ずるを驚くべからざるなり。今此門に據りて四句有るべし。一には語は同にして意は異なり、語は上來辨ずる所に同じ、乃ち常無常有り。

問ふ、「何が故に語同じきや。」答ふ、「語は經論に出でたり、經論は共用なり、何んが不同なるを得ん。而も意異なりとは『中論』に云はく、「言語は同なりと雖も其心則ち異なり」と。今明すらく、此は是れ無分別の中の善巧分別不二の二の義なり。故に常無常境智の二義を開くのみ。既に不二の二と云ふは即ち二なりと雖も、不二なり。『大經』に云ふが如し。我と無我とは二相有ること無し。常と無常とも亦爾り。經に云はく、「愚人は二と謂ひ、智者は了達して其無二を知る。復愚者有りて但不二と謂ひ、智人は不二にして二なりと了知す」と。何んとなれば愚人は常無常を識らず、境智を知らず。故に是れ無明なり、無明なるが故に愚と爲す。智人は常無常を了知すれば名けて智者と爲す。是故に名けて語同意異と爲すなり。二には語は異に、意は異なり。有所得の人は善く分別せず、無所得の大乗は能善く分別するが故に語異りと爲す。一には是れ無所得の心は善く分別す。二には有所得の心は善く分別せず。故に意異と名く、三には語同意同とは、語は諸佛菩薩の方等經論と同じ。意は諸佛菩薩無依正觀と亦同じ。故に語同意同と名く。又語は有所得の入語と同じ。有所得人に復少分の得處有り。今の意も亦彼と同じ。故に語同意同と云ふ。四に語は異に、

意は同なり、語は經論に異りと雖も、而も意は道に符合すれば、亦之を用ふることを得。又語は舊宗に異にして、而も意は佛旨に同會せり。亦之を用ふるを得。宜しく斯四句を以て總じて諸門を貫くべし。應に一向に偏に去取有るべからず。一問ふ、二何が故に此四句を明すや。答ふ、三種の人有り、一には、始學大乘、謂く、必ず一向に舊宗と異なることを爲すを須ひば則ち謗法を成ぜん。然る所以は語は經論に出づ。宜しく之を共用すべし。但得と無得と其心各別なり、應に意異なるを以ての故に、語をして亦異ならしむべからず。二には、小乘を學する人は去に大乘と異なり、強ひて義同じと謂ふ。是れ亦謗法ならん。然る所以は、小乘の語意は大乘の語意と實に同じからず、而も強ひて同じと謂ふ。如し「成實論」を學する者は、無相滅諦と方等の理と均しと謂ふが故に、亦謗法と名くるなり。此大小の學人の爲に宜しく同異の四句を聞くべし。

【三】 得失を明す

【二】 得失門第十二。權實は是れ聖人の觀心。眞俗は衆聖の妙境たり。上に已に略して一慧を明し、次に廣く眞俗を論じ、眞俗の本若し權實の末を成すれば自ら正しうす。故に十二門を開き其得失を詳にす。

大乘玄論卷四 終

大乘 玄論 卷第五

胡吉藏撰

【一】釋教の不同を明す。

【牛より乳云云】

【十二部經】佛、

說法の體裁に十二

樣あるをいふ。長

行説、重頌説、授記

説、孤起説、無問

自説、因縁説、譬

喻説、本事説、本

生説、方廣説、未

曾有説、論議説こ

れなり。

【五時教】佛一代

五十年間の説教を

年時の上より判別

して五種となせし

もの。華嚴時、阿含

教迹義三

一には釋教不同門。二には感應門。三には淨土門。

【一】釋教第一。至理無言なれども言する所以は、言は群心より生ず。然も群基百差し

て聖教をして萬殊ならしむるを致す。萬殊の言教解釋は不同なり。成論師或は四時と言ひ、

或は五時と言ふ。『涅槃經』を引て云はく、「牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生酥を

生じ、生酥より熟酥を出し、熟酥より醍醐を出す。又佛より十二部經を出し、十二部經よ

り修多羅を出し、修多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜よ

り大涅槃を出す。成論師五味相生もて五時教に配す。四諦の教は有相差別なるが故に十二

部を出し、修多羅をば法本と名く。波若は是れ諸法の根本なるが故に、波若を修多羅と名

く。『維摩經』に廣く菩薩不思議の法門を明す。故に『維摩經』を方等經と名く。一乘の中に

般若は最勝なり、故に『法華經』を般若波羅蜜と名く。『涅槃經』の時、常住佛果を明す。故

に大涅槃を出すと言ふ。今謂く、爾らず。十二部經は是れ別相修多羅にして、十二部經よ

り修多羅を出すとは是れ通相の修多羅なり。通別兩教より大乘の萬行を起すが故に、修多

【四諦の教】迷悟
兩界の因果を説明
せるものにて聲聞
はこの理を觀じて
證果を得。苦集滅
道なり。

【大涅槃の果】迷
妄を脱し、眞理を
窮めて、寂滅無爲
の法性を究め、不
生不滅の法身の眞
證に歸するをいふ

【須陀洹果】聲聞
四果の一。三界の
見惑を斷じ盡し、
初めて聖者の流類
に預り入りし位に
して見道十五心の
後、第十六心即ち
修道に入りたる位
なり。

【一生補處】一生
を過ぐれば佛處を
補ふべき等覺の位
をいふ。

【阿毘跋致】不
退轉品とも云ふ。
阿毘跋致とは、佛
になるに定りて苦
薩の地位より、再
び退くことのない
位をいふ。

【成道】佛の成道

羅より方等を出すと云ふ。萬行の中には波若を主と爲す、故に方等より波若波羅蜜を出すと云ふ。此の因に従つて大涅槃の果を得、故に波若波羅蜜より大涅槃を出すと云ふ。此れ乃ち教行、因果、相生なり、是れ五時教を判するに非ざるなり。今此摩訶衍論の無作品の末に云はく、「初轉法輪の時唯八萬の諸天、一人の須陀洹果を得るのみに非ず」と。又無量の入、無上菩提の心を發し、乃至無量の人一生補處を得。又成道五年に十萬億の波若を説いて備に二空を明す。七年に大菩薩の爲に「般若舟三昧經」を説いて色心皆空なりと明す。十年に「如來藏經」を説いて本有佛性を顯す。應に知るべし、十二年の中にた小乘を説くに非ず、若し大小俱に明せども、而も但小乘を説くと言ふは、亦可、十二年の後大小俱に説くと雖も、應に小乘と名くべし。若し俱に大小を説けども而も大乘と名けば、我亦十二年の前に大小俱に談ずと雖も、而も大乘教と名けよ。

又論に云はく、「善吉曾法華の會に於て菩薩畢定なりと説くと聞き、後に大品の阿毘跋致品を聞く」と。是故に今問ふ、一定なりと爲んや、不定なりと爲んや。二故に法華は必ずしも第一時ならざるのみ、又成道より已來常に般若を説く、所以に第二時に局まらざるなり。地論師云はく、「三宗四宗有り。三宗とは一には立相教、二には捨相教、三には顯眞實教なり、二乘の人の爲に有相教を説く、大品等の經に廣く無相を明すが故に捨相と云ふ。華嚴等の經を眞實を顯す教門と名く。四宗とは毘曇は是れ因緣宗なり、成實は、謂く、假名宗なり、三論をば不眞宗と名け、十地論をば眞宗と爲せり」と。今謂く、然らず、此人の罪過甚だ深

【毘曇】 俱舍宗のこと。

【假名宗】 三宗、四宗、五教、六宗の一。諸法は假名にしてその實體無しと説く宗旨なり。成實宗の如き是なり。

【無間】 無間地獄のこと。

【四依】 憑るべき四法。法に依り人に依らず、了義經に依り不了義經に依らず、義に依り語に依らず、智に依り識に依らず。

【無餘涅槃】 煩惱を斷じて得たる涅槃。異熟の苦果たる五蘊和合の身體もすべて滅して、今は全く所依無きが故に名く。

【分段】 身命共に善惡並細長短等の分限ありて、分段段に受くるが故に。

【變易】 前の形を變じて異なる形をとること。

【十力四無畏十八】

し、波若を謗して無間に墮すること勿れ。今此論に依るに具に三佛を明す。又勸勸、天親『波若經』の文を釋するに亦三佛を明す。故に知んぬ、波若等の經に具に常住の佛果、佛性の正因、十地の了因を明す。若し爾らば何んが顯實教と名けざらんや。應に四依の大聖に依るべく、凡の妄執に依ること莫れ。問うて曰はく、『若し常なりと言はば云何が此經に三の諸佛皆無餘涅槃に入ると云ふや。』答へて曰はく、『是れ小乘の無餘涅槃に非ず、若し攝論に依らば大乘の無餘涅槃に二種有り。一には、分段の因果盡くるを有餘と名け、變易の因果盡くるを無餘涅槃と名く。二には、報應二佛をば有餘涅槃と名け、法身をば無餘涅槃と名く。又『金剛波若經』の中に「我皆令人無餘涅槃」とは、是れ勸勸釋して云はく、「大乘の第一の無餘涅槃なり」と。問うて曰はく、『若し爾らば何が故に此經に十力四無畏十八不共等皆是れ有爲なりと明すや。』答へて曰はく、『法身眞如空の邊に對するが故に、報佛の十力十八不共等は是れ有法なるが故に、有爲と言ふ、生滅の有爲には非ざるなり。又攝論に云はく、「無常に二種有り。一には、因中の本無、今有、已有、還無の無常。二には、佛果の本無、今有、已有、不無の無常なり、而も同じからず、因中の生滅の無常但是れ佛果の上の報の梨耶識、五根等始めて起る邊を無常と名くるのみ」と。』

問うて曰はく、『若し此經に直に空を明すに非ず、亦本有不空の法を説くや。』答へて曰はく、『論主初の品の中の法性を釋して云はく、「法をば涅槃と名け、性をば本分と名く、白石の中に銀性有り、黃石の中に金性有るが如し。一切の法の中に涅槃有り、亦是の如し。』

不共 佛所具の化用をいふ。

【法性生身】二種法身の一。佛菩薩が眞如法性を證得して本有の理體を顯したる無色無形の法身をいふ。

【三を會して一に歸す】三乘を開會して一乘に歸入す。

と。今謂く、是れ本有性淨涅槃なり。是を以て此經に皆性淨方便の二種の涅槃を明すなり。問うて曰はく、更に明なる證有りて此經に已に常住を明すと證せば、已に眞實を顯すや。答へて曰はく、明證多しと雖も煩を爲すべからず、今は但法尙品に三譬を以て具に三佛を明すと云はく、諸佛の色身には去來有り、諸佛の法身には去來無し。去來有りとは是れ應佛なり、去來無しとは是れ法佛報佛なり」と。又論に云はく、「佛に二種有り。一には父母生身の佛、二には法性生身の佛」と。父母生身とは是れ應佛なり、法性生身とは是れ報佛なり。若し但し法性身と言ふは是れ法身佛なり。論に又云はく、「華色比丘尼は法身の佛を見ず、善吉は法身を見ることを得」と。又此經に處處に皆十地の行滿じて、無上菩提を得ると云ふ。何んが十地の行滿じて還つて無常の身を得んや。是故に『涅槃』に云はく、「我と無我とは一相有ること無し」と。我は『摩訶般若波羅蜜經』の中に於て廣く説けり。『涅槃經』に明せる佛果の眞我は、即ち此經に明せる無上菩提なり。『涅槃經』に明せる生死の無我は、乃ち此經に明せる因中の菩薩の無我なり。應に知るべし、此經の佛果の眞我生死の無我は、皆空にして其相無二なり。具に八倒を明す、應に信受すべきのみ。問うて曰はく、「或人謂く、『此經は未だ是れ三を會せず、法華を感誦するものを以て盛難と爲す』と、此義云何。答へて曰はく、『法華』には三を會して一に歸す。則ち三遺れども而も一存せり、一存すれば未だ手相を免れず、故に萬善を以て乘體と爲す。般若には即ち三なれども而も不三なり、則ち三遺りて一亡す、法の得べきこと有ること無し、故に無生中

道を以て乘體と爲す。無性は戲論を絶す、竟に何の三か會すべき、謂ゆる百華色異れども共して一陰を成す、萬法相殊なれども同じく波若に入る、分別すべき無し。又一乘眞實を顯すに凡そ二門有り、若し是れ法華は三乘方便に對して、一乘眞實の相を顯す。若し是れ『波若』と『淨名』とは小乘を毀して劣と爲し、大乘を讚じて勝と爲して一乘眞實を顯すなり。是故に其二經の勝劣を談すべからざるのみ。若し涅槃に常を明すを引いて、而も此經を難ぜば前に已に之を明せり、更に煩しくせざるのみ。

問うて曰はく、『若し成地二家の失を唱へば、今何んが佛教を判するや。』答へて曰はく、『菩薩藏、聲聞藏、大乘、小乘、有餘、無餘、作、無作、了、不了、有邊、無邊、顛、滿、半、滿、常、無常、有量、無量との門に往收せり、以て十門を具足して方に收むるにはあらず。但し一一の門を以て無量の法藏を攝す、攝門は一に非ず、故に十門有り。問うて曰はく、『前に應に四依に依るべく、凡ゆる妄說に依ること莫れと言ふは、何等か是れ四依なる。』答へて曰はく、『四依とは二種有り、法の四依とは法に依り人に依らず、義に依り語に依らず、智に依り識に依らず、了義經に依り不了義經に依らず。人の四依とは小乘に依らば五方便を第一依と爲し、須陀洹陀舍を第二依と爲し、阿那舍を第三依と爲し、阿羅漢を第四依と爲す。若し大乘に依らば、地前の四心の煩惱性を具するを第一依と爲し、初地より六地に至るを第二依と爲し、七八九地を第三依と爲し、第十地を第四依と爲す。今は是れ後の四依なり。』問うて曰はく、『前に十二部經と言ふ、云何が但十二と言ひて大にむ

『四十心』十信、
十住、十行、十廻
向なり。

【修多羅】十二部經の一。長行（散文）に依りて直に法相を説き示したるものを云ふ。
 【祇夜】十二部經の一。前出の長行を重ねて韻文としたるもの。
 【伽陀】十二部經の一。唱歌するやうに作られたる韻文をいふ。

らず小にあらざるや。」答へて曰はく、「四句有り。一には、大小俱に十二を明すとすは十二は是れ一數の圓なるを以て、又衆生の十二縁の病を治するが故なり。二には、大小同じく九部を明すとすは亦是れ一數の圓なり、又九道の衆生の爲に説くが故に九部なり、小乗は法淺きに約するが故に方廣經無し。佛記は小乗の宗に非ず、又小乗の人は佛處に補すること無し、故に授記經を除く。小乗の法は淺にして人能く問する有り、故に無問自說經を除く。又大士は能く衆生の爲に請ぜざるの友と作る、故に無問自說有り。小乗は能はず、要す請を待ちて方に説く、故に無問自說無し。大乘の人は根利なるが故に三を除く。大乘の根は利にして直に説くに即解し、因縁及び譬喩を須たず、亦論義を假らず、故に略するに此三部を以てす。第三の句は、小は廣にして而も大は略なり。『地持論』に説くが如し。菩薩藏をば方廣經と名け、聲聞藏は、謂く、十一部なり。此意に明すらく、大乘の十二は方廣の理を明さんが爲なり、所詮の理に従つて名と爲す、故に十二部は悉く方廣と名く。小乗の十二部は方廣の理を明さんが爲ならず、故に其十一部の名を存して、方廣の稱を没す。第四の句は、大は廣、小は略なり。大乘は滿字なりと顯す、故に十二部を具足す。小乗は半字なり、故に唯九部有り。

又三を聞くことを得、修多羅と祇夜と伽陀となり。此三は教に就いて名を別つ。即ち教を以て此三部の體と爲す。餘の九部は別事に従つて名を受く、亦此三を離れざるなり。三は文言に従つて名を立つ。九は功能に従つて稱を受く。修多羅とは二種有り。直說語言を

ば別の修多羅と爲し、如是より奉行に至るまでは通の修多羅なり。三藏の中の修多羅は、
 堅には長、横には狭なり。堅には長なるが故に、十二を攝す。横には狭なるが故に但一藏
 なり。十二部の中の修多羅は横には闊く、堅には短なり、十一を攝せざるが故に、堅には
 短なり。三藏を攝するが故に、横には闊なり。伽陀とは第二部に謂く、「不等頌なり」と。
 第三に祇夜とは、謂く、等頌なり。又九は功能に従つて名を受く、謂く、授記經と、本事
 經と本生經と未曾有經と因緣經と譬喻經と無間自說經と方廣經と論義經となり、合し
 て十二部と爲す。今小乗の九部合して五雙と爲す、初には長行と偈との一雙、諸佛業生
 の爲に或は直説するは修多羅なり。或は命して初に即ち爲に偈を説く、故に伽陀と名く。
 即ち知んぬ、修多羅は必ずしも前に在らず。伽陀は必ずしも後に在らず、本事と本生とは
 第二自他の一雙なり。本事は他の過去世の事を説く、藥王本事品等の如きなり。自らの過
 去世の事を説くを本生經と爲す。未曾有と因緣經とは此は善惡の事を明す一雙なり。未
 曾有經をば善事と爲すは、青牛鉢を行じ、白狗經を聽き、大地振動の如きなり。因緣は謂
 く、起罪の本末なり。本末に隨つて説くを因緣經と名く。譬喻と祇夜とは法喻の一雙なり。
 論義經とは則ち是れ能論なり。上の八部四雙を名けて所論と爲す。謂く、能論所論の一雙
 なり。

佛在世の時に自ら十二部經を説きたまへり。佛滅度の後は迦葉に委付す。十弟子の中に
 最大なる四大聲聞有り。謂ゆる迦葉と目連と須菩提と舍利弗となり、何んが獨り迦葉に付

【毘尼藏】三藏の
中の律のこと。

して餘人に付せざるとは、舍利弗目連は早く已に滅度し、須菩提は性濡たり、迦葉は性剛決爲り、故に迦葉に付す、迦葉滅度は阿難に付す。阿難は末田地に付す。末田地は舍那婆斯に付す。舍那婆斯は優婆掘多に付す。是の如きは隔世の五師なり。一百餘年に至りて分れて二部と爲る。一には、摩訶僧祇部、此は大衆部と云ふ。二には、多羯羅部、此は上座部と云ふ。大衆部より分れて九部と爲り、一には大衆部、二には一説部、三には出世部、四には窟居部、五には多聞部、六には施設論部、七には杖提部、八には阿婆羅部、九には鬱他羅部と名く。三百年の中の上座部は諍論の事に因りて分れて十一部と爲る。一には薩婆多部と名け、二には雪山部と名け、三には犢子部と名け、四には達磨鬱多部と名け、五には跋陀耶尼部と名け、六には三彌底部と名け、七には六城部と名け、八には彌塞部と名け、九には曇無徳部と名け、十には迦葉唯部と名け、十一には修多羅論部と名く。問ふ、『經に本二と及び十八皆大乘の中より出づと言ふ、何者をか本の二及び十八と爲すや。』答ふ、『上座と大衆との兩部を本二と爲し、其後の弟子を分ちて十八部と爲す。又經に五師と言ふは、佛三藏の中の毘尼藏に多く、此名有り。又十八部の中に五部盛に行はる。五部とは、一には薩婆多部、二には曇無徳、三には僧祇部、四には彌沙塞部、五には迦葉唯部なり。五部の中に薩婆多部盛に行はる。故に佛滅後二百年の中の上座部より薩婆多部を出して偏に毘曇を弘む。佛滅後三百餘年に迦旃延子は毘曇八捷度を作る。六百年に五百の阿羅漢は『毘婆沙論』百卷を造る。七百年に婆沙太廣なるが爲に法勝は『毘曇論』を造る。法勝

【閻浮提】須彌四洲の一。吾人の住する世界のこと。

太略なるが爲に千年の間に達磨多羅は『雜心論』十一卷を造る。故に異曇盛に行はる。成實論主は曇無德部より出でたり、七百年に出で訶梨跋摩と名く。龍樹菩薩は五百年に出でて諸の異部を破し、大乘百部の論を造りて閻浮提に於て第二の法輪を轉す。

問ふ、『有人言はく、『般若は是れ三乘通教なり、凡そ多の文を引けり。聲聞地を得んと欲せば當に般若を學すべし。乃至菩薩地を得んと欲せば當に般若を學すべし』と。又云はく、『是般若の中に廣く三乘の教を説きたまへり、故に三乘通教と言ふ』此義は云何。』答へて曰

はく、『佛三藏の中に於て但聲聞の爲に四諦の法を説いて、未だ菩薩の行を説かず。今彌勒等の爲に廣く菩薩の行を説かんと欲するが故に般若を説く。即ち知んぬ、般若は三乘通教に非ず。又論に云はく、『般若は二乘に屬せず、但菩薩に屬す』と。又論に云はく、『菩薩の

心の中に在るを般若と名け、聲聞の心の中に在るを道品と名く。若し是れ三乘通教ならば則ち三乘の心に在るを通じて般若と名けよ。應に別名有るべからず』と。又難じて云はく、

若し三乘通じて般若を學すれば、般若は是れ三乘通教とは、『涅槃經』に云はく、『三乘の人は同じく中道を觀す。下智觀の故に聲聞の菩提を得、乃至上上智觀の故に佛の菩提を得、亦應に是れ三乘通教なるべし』と。大論に云はく、『十種の大經の中に般若波羅蜜は最深最

大なり』と。『小般若經』に云はく、『此經は發大乘の者の爲に説き、最上乘の者のために説く』と。故に知んぬ、般若は三乘通教に非ず。又説くに三乘は同じく般若を學すとは是れ密に一乘に會するなり。若し因同じければ果も亦應に同じかるべし。又聲聞緣覺の、若し

【無生法忍】不生不滅の眞如法性を忍知して、決定安住する位。

【摩訶衍】大乘と譯す。

【敗根】聲聞緣覺の乘は成佛すべき根すでに壞れて、佛果を證すべき因種を有せざるが故に名く。

【緣正】緣因佛性正因佛性。前者は智慧を緣助してますます明ならしむる六度等の修行、後者は一切衆生が具へたもてる眞如の理。

【種子】第八識中に伏在して、自體の果を生ずる能力即ち色心萬法の現象を發現する作用ある力をいふ。

智、若し斷は、皆是れ菩薩の無生法忍なりと説く。又一切處に人を求むるに不可得なり。云何が三乘有りと分別せんやと説く。當に知るべし、即ち是れ蜜に一乘を説くなり。又古舊義には、般若には已に法を會して但未だ人を會せず、法を會すとは、一切の法は皆法性に入り、皆摩訶衍の中に入るなり。次に云はく、「淨名は是れ抑揚の轉法輪に凡夫の有を嘆じ、及び聲聞を覆毀して敗根と爲す」と。是れ亦然らず、魔事品に云はく、「譬へば癡犬の大家に従つて食を求めずして、作務の者に従つて索むるが如し。犬とは聲聞の人なり。大家とは大乘教なり。作務とは小乘經なり。小品經は應に是れ抑揚の教なるべきや。」問ふ、「何が故に餘經に緣に返りて此法を説かざるや。」答ふ、「小品法華は是れ合して義を明す。『涅槃』は是れ開して義を明す。合して義を明す所以は、小品は直に無所得の因、無所得の果を明して、衆生の有所得の心を破するに即便了悟すれば須らく別に緣正の因果を開くべからざるなり。法華は直に異因果を破して、一因一果を明すに衆生即ち了悟することを得れば、亦緣正の因果を開かず。大經は鈍根の衆生は上の合説を聞きて未だ悟らざる爲の故に、廣く緣正の兩因果を聞くに始めて解解することを得、根緣宜しきを以て合を聞き以て悟を取るに、則ち之が爲に合し、應に開を聞きて以て道を受くべきが故に之が爲に開くなり。」

問ふ、「小品、法華、華嚴に就いて正しく緣正の文有りや以不や。」答ふ、「傍に此義有り。釋論に方便品を解するに云はく、「般若を種子と爲すは是れ正因なり。五度等を水と爲すは

是れ緣因なり、能く菩提の菓樹を生ず。又大品に已に佛性の義を明すこと有り、亦緣正因の義有るなり。法華の中に衆生に佛性有りと明すは即ち正因なり、萬行等は是れ緣因なり。華嚴の中に正法性起の文に云はく、「微塵の中に一の經卷有り、一の經卷の中に廣く一切の事を起す。此れ即ち是れ衆生の身の中に佛性有り、微塵を破して經卷を出す。即ち是れ煩惱を除いて佛性を見るなり。佛性は既に是れ正因なり、諸の菩薩四十二地等を修行するは、即ち是れ緣因なり。問ふ、「若し皆緣正の二因有らば、云何が四種の異有る」と答ふ、「但衆經に皆傍正の二義有り、般若には廣く有所得を破して、無依無得を明すを正宗と爲して、佛性一乘を其傍義と爲す。法華には廣く一因一果を明すを其正宗と爲し、無所得と及び佛性とを其傍義と爲す。涅槃には廣く佛性常住を明して、無常の病を斥けんが爲にするを其正宗と爲し、一乘及び無所得を其傍義と爲す。又衆經は緣に還ること同じからず、互に相開避せり。般若に已に廣く無所得の實相を明す。故に法華に之を明さず。未だ廣く一乘の因果を説かざるが故に、廣く之を明す。法華に已に一乘の因果を明す、故に涅槃には廣く之を明さず。未だ廣く佛性常住を明さざるが故に、廣く之を説く。又只是れ一道三義もて之を説いて、境として照さざること無きの義の故に、般若と名く。至極無二の義を稱して妙法と爲し、常恆不變の義を目けて涅槃と爲す。又菩薩心に在るの故に、般若と名け、佛心に在るが故に、薩般若と名け、具に佛菩薩心に在るが故に、一乘と名く。又須らく衆經の顯道無異なれども、而も異名を作りて之を説くことを領すべし。大品の如

【二】 感應を明す

きは般若の名を作りて、一乘及び佛性の目を作らず。法華には一乘の名を作りて、般若佛性の稱を作らず、乃至涅槃も亦然るなり。

【二】 感應第二。三の義有り。感應とは乃ち是れ佛法の大宗、衆經の綱要なり。感と言ふは、索召の義なり。應とは赴接の義なり。衆生に善有りて彼三佛前に到れば形を垂れて赴接す、理、乖越無し、之を感應と謂ふ。凡夫は感にして應ならず、諸佛は應にして感ならず、菩薩は亦應亦感なり。感は不同なり、略して四種有り。一には、形を感じて聲を感ぜず。但佛を見て法を聞かず。二には、聲を感じて形を感ぜず、直に教を聞いて佛を見ず。三には、形、聲、俱に感じ、佛を見、法を聞く。四には、佛を見ず、法も聞かず、直に神力を感ず、密に益す。

【感應の】 以下、感應の體を明す。

感應の體第二。問ふ、三世の善には何れの善か感ずるや。答ふ、有人言はく、未來の善感ず。若し爾らば未來の佛は應じて、現在の佛は應ぜざらん。又言はく、現在の善感ず。亦言はく、過去の善感ず。又言はく、惡感ず。有人は善感ず、有人は善惡共に感ず。若し惡能く感ずと言はば、一切の起惡の衆生は何が故に佛を見ざる。若し善能く佛を感ずと言はば、衆生に既に善根有り、盡く能く道を得ん。何んが佛爲を用ひん。無病の如き何んが藥師の爲を用ひん。善惡共に感ずとは、一切衆生に皆善惡有り、寧ろ佛を感ぜずして六道に在りて苦を受けん。今明すらく、三世の善感ず。過去現在を正感と爲し、未來を傍感と爲す。故に經に曰はく、「過去に久しく善根を修し、及び今佛を念じて如來を見ることを

【六道】 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣をいふ。

得」と。今明すらく、善惡感とは、將に惡を滅せんとし善を生ずべし。問ふ、「他の感應と何んが異なる。」答ふ、「今明すらく、感は是れ應の義なり、應は感を以て義と爲し感應相由す、是れ因縁なり。」問ふ、「佛應法起ること有りて、應を思むるを滅と名くと爲んや、應法起ること無くして滅と云ふと爲んや。」答ふ、「古より妄今に凡そ三の解有り。問善の藏師は彌公の義を用ひ、衆生は法身の上にて於て生滅有りと見る。佛には實に生滅無し、故に經に云はく、「慈善根力もて彼をして之を見せしめん」に指には實に師子無し」と。莊嚴の曼法師の云はく、「別に應法起ること有り、故に本を以て迹を垂るるを生と爲し、迹を息めて本に歸するを滅と稱す。」經に云ふが如し、「金翅鳥王虛空に上昇して、彼水性を觀じ及び已が影を見る」と。卽ち其證なり。招提の琰の云はく、「具に二の義有り。今正しく明すらく異論を爲すこと紛論なり、或は實滅と言ひ、或は實滅にあらざと言ひ、或は應法起ること有りと言ひ、或は起ること無しと言ひ並に是れ諍論なり。是故に龍樹出世して之を破す。諸見若し息めば然る後に乃ち因縁假名無方の大用を識る。非起、非不起、亦起、亦不起、亦非非起、非非不起は緣に適つて用ふれば諸の善巧を得、諸義具すと雖も亦舊說に同じからず。蓋し是れ起なれども所起無ければ、名けて不起と爲す。不起なれども起なれば、之を名けて起と爲す。起を聞きて定んで起の解を作し、不起を聞きて定んで不起の解を作すべからざるなり。問ふ、「佛滅度に由るが故に、衆生迷を起す。若し滅せずば則ち迷を起さす、則ち佛に答あらん。」答ふ、「智度論」に云はく、佛三時に衆生を利益する有り。一に

【雙林の滅】釋尊拘尸那城外、跋提河の邊にある娑羅林に入りて入滅し給ひし時、その四方に各各雙木の娑羅樹の特に高く立ちたるがありし依にかくいふ。

【丈六】一丈六尺の佛身釋迦佛の身量は一丈六尺なりといふ。佛在世の常人の身量に八尺にして、佛は其倍なるが故に一丈六尺なりといふ。

【表應部】以下、表應部を明す。

は菩薩と爲る時、二には得佛の時、三には滅度の時なり。『華嚴經』に云はく、「衆生をして歡喜を生ぜしめん」と欲するが故に、王宮の生を現す。衆生をして戀慕の善を生ぜしめんと欲して、雙林の滅を示す。既に三時に物を益すと云ふ、知んぬ縁は自ら迷を起す、佛に過無きのみ。問ふ、『習因の善感すと爲んや、報因の善感すと爲んや。』答へて曰はく、『習因は正感、報因は傍感なり、佛を見て樂受を生ずるが故に。』問ふ、『善惡、佛を感ずとは、善正しく感ずと爲んや、惡正しく感ずと爲んや。』答ふ、『善は正感、惡は傍感なり。』問ふ、『有人の言はく、別の應起ること無し、但法身の上に丈六を見るは此れ何んぞや。』答ふ、『經文に違す。大經に云はく、「金翅鳥王虛空に飛昇して下に水性を觀、及び己が影を見る。』と。虛空は是れ法身佛、金翅鳥は是れ報身佛なり。及び己が影を見るときは是れ化身佛なり。』

表應部第三。佛滅度の後形像及び經書有り、此を表應と名く。正應と爲すに非ず、然る所以は丈六及び言教は機を觀て而も現するを以て、既に其れ機に應ず、應に之を正應と謂ふべし。衆生見聞の後なるが故に、像を造りて其所見を表し、書寫して其所聞を傳ふ。既に有ること衆生に由り、正しく佛に由るに非ず。故に表應と爲して、正應に非ざるなり。今若し相從して説かば、亦應の中に入る、何を以てか之を知る。形像既に相從して佛實に入りて書寫す、亦應に相從するなり。問ふ、『諸佛菩薩は不二を體として能く應ぜば、未だ不二を詳にせず。是れ何等の法なる。』答ふ、『成論師は眞諦を謂ひて不二法門と爲し。智度

【摩竭】摩伽羅といふ。大身、鯨魚と譯す。身は白山の如く、兩目は日の如く、口を張れば閻谷の如く、能く舟を呑む。海底に穴居すと傳ふ。

論師は實相般若と謂ひ、地論師は阿梨耶識を用てし。攝論師、眞諦三藏は即ち阿摩羅識なりといふ。四衆の内に初の二は境に約し、後の二は心に據る。識と境と義殊なりと雖も而も同じく四句を超えたり。故に釋迦は空を摩竭に掩ひ、淨名は口を毘那に杜ぐ。斯れ皆謂く、神御爲り。故に口之を以て黙す、豈無辨の辨は言ふこと能はざる所と曰はんや。今明すらく、乃ち是れ境心と言ふべからず、不境心と言ふべからず、中道佛性の理なり。問ふ、『何れの位の菩薩が能く眞俗並觀し、物に應じて形を顯じて水中の月の如くして人を濟度するや。』答ふ、『靈味師の云はく、初地に無生を得て、即ち能く眞俗並觀す。』什摩師の云はく、七地に並觀す。成論師の云はく、『八地に並觀す』と。今謂く、初發心より則ち無生を學し、並觀を習ふ。故に『涅槃』に云はく、『發心畢竟二つ別ならず』と。四重の階級有り。一には、地前に對す。凡位には但順忍にして未だ無生有らず、亦眞俗並ぶこと能はずと明す。初地をば聖と稱し始めて無生を得て、二觀方に並ぶ。『仁王』攝論に並びに此文有り。二には、初地已上六地已還には無生尙淺ければ、順忍の名を與ふ。七地に至りて等定慧地と稱す。始て是れ無生なれば名けて並觀と爲す。『智度論』に云はく、『前の三地は慧多定少、後の三地は定多慧少なり』と。故に定慧等しからず。七地に至りて定慧均平なれば、等定慧地と云ふ。此は般若靜鑒するを説いて定と爲し、方便動照するを慧と爲す。六地は靜觀に妙にして涉動に拙し。故に定慧は未だ均しからず。七地に至りて則ち二用俱に巧なれば、等定慧地と名く。三には、七地には無生を得已りて能く並觀すと雖も但

【二】淨土を明す。初に通じて淨土を明す。

【業感】善惡の業因によりて、苦樂の果報を感生すること。【凡聖】凡夫と聖者。【九品往生】觀無量壽經に説く。淨土に往生する者に九品の差別あること。上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生。

猶功用有り。八地には功用の心に於て、永く復生せざれば無生と名く。四には、八地は無功用なりと雖も未だ究竟せず。究竟の無生は佛位に在り。方便品に云はく、「久しく佛道に於て心已に純熟す」と。當に知るべし是れ佛地無生金粟なり。如來は則ち斯文に依りて已に顯る。無生は具に四處に在り、衆師偏に一を執して徒に以て其旨を失す。」

【三】淨土第三。二義有り。一には通。二には別なり。淨土とは蓋し是れ諸佛菩薩の栖む所の域、衆生の歸する所なり。總じて淨土を談するに凡そ五種有り。一には淨、二には不淨、三には不淨淨、四には淨不淨、五には雜土なり。言ふ所の淨とは、菩薩善法を以て衆生を化す、衆生具に善法を受けて同じく善縁を構へて純淨の土を得。不淨と言ふは若し衆生惡縁を造りて穢土を感ずるなり。淨不淨とは、初めは是れ淨土、此衆生の縁盡くれば後に惡の衆生來るに則ち土變じて不淨と成るなり。不淨淨とは、不淨の縁盡きて後に淨の衆生來れば則ち土變じて淨と成る。彌勒と釋迦との如きなり。雜土と言ふは、衆生具に善惡の二業を起す、故に淨穢雜土を感ず。此五は皆是れ衆生の自業の所起なれば、應に衆生の土と名くべし。但佛は王化の功有り、故に佛土と名く。然も報の土既に五なり。應の土も亦然るなり。報は衆生の業感に據り、應は如來所現に就く、故に合して十の土有り。淨土の中に就いて更に四位を開く。一には、凡聖同居土、彌勒の出時に凡聖共に淨土の内在りて住するが如し、亦西方の九品往生は凡の爲なるが如く、復三生の賢聖有るなり。二には、大小同住の土、謂く、羅漢辟支及び大力菩薩三界の分段身を捨てて、界外の淨土

の中に生ずるなり。三には、獨り菩薩所住の土、謂く、菩薩は道二乘に過ぎたり。居士も亦異なり。香積世界の如きは二乘の名無し。亦七寶の世界の如きは純諸菩薩なり。四には、諸佛獨居の土、『仁王』に云ふが如し、三賢十聖は果報に住せり。唯佛一人のみ淨土に居せり。諸の淨土の位は此四を出でず、即ち劣より勝に至るを次第と爲す。

【問ふ】以下、淨土の體に就て述ぶ

【七珍】金、銀、琉璃、頗黎、砗磲、赤珠、瑪瑙。

問ふ、『何を以てか土の體と爲す。答ふ、『土の體に三有り。一には、相もて論ずるに其體に五有り、謂く、化處淨、化主淨、教門淨、徒衆淨、時節淨にして刀兵等無し。二には、若し三世間に就て明さば、土世間なり、則ち七珍を以て體と爲す。三には、堅に義を論じ、道に望んで言はば、土は不土を以て體と爲す。要す不土に由りて方に土有ることを得、即ち空の義有るを以ての故に、一切の法成ずることを得るなり。攝論師云はく、「識の變異する所は是れ淨土なり、心を以て體と爲す」と。今明すらく、三種有り、若し是れ法身の淨土は中道を以て體と爲す。亦是れ報佛の淨土は七珍を體と爲す。亦是れ化身の淨土は應色を以て體と爲す、通じて論を爲せば皆是れ中道を體と爲す。二是れ用なるを以てならば有人言はく、「佛には淨土無し、但衆生の報に應ず、化主を以て言ふことを爲す、故に佛土と言ふのみ」と。此は是れ成論師の意なり、經論に明す所に非ず。經論に、佛に淨土無しと云ふは、分段變易の淨土無きなり。淨土有りとは、乃ち是れ萬行所得眞常の淨土なり。故に經に法身の淨土は是れ眞成の淨土なりと言ふ。報佛の淨土は經論に處處に皆明せる淨土なり。』問ふ、『有人言はく、「淨土は二處二質なり。』西方淨土と此穢土との如きなり。一には、

【身子】 舍利弗のこと。

【三身】 報身、法身、應身。

二賈一處、三には一賈二處なり。淨名に云ふが如し、妙喜淨土を斷取して、此穢土の中に置く、但是れ一土は彼に在り復此に来る、故に一賈一處なり。是の如く四師各淨論を成すと。『今明すらく、各其義有り、一邊を執して其義味を傷ふこと莫れ。身子は穢土を見、梵王は眞成の淨土を見る。上の文の十七句に明す所の淨土は是れ報土なり。足指案地等の淨土は是れ應土なり、餘の文は知るべし。問ふ、經に云はく、「衆生は燒盡すと見れども、吾淨土は燒けず」と。是れ何の淨土ぞや。答ふ、羅什云はく、「是れ異質同處の義なり。淨穢麤細不同なり」と。故に相礙へず。首眞天子の身は地に礙らざるが如し。又無間地獄には百千共處すと雖も、亦違妨せざるが如く、又醍醐の罽器に礙らざるが如し、況んや淨穢二賈而も相妨せんや。故に穢を燒いて淨土を燒かざるなり。佛に三身を聞く、身を以て土に例するに亦三土有らん。又仁王に云はく、「唯佛一人淨土に居す」と。「攝論」に云はく、「眞如は即ち是れ佛の所住なり」と。「法華論」に亦眞如常住を明して土と爲すなり。問ふ、「經に一質異見と云ふは、是れ何物の一質ぞや。答ふ、「一質多種なり、若し一實相を以て一質と爲さば、實相を失するを以ての故に六道の異見有り。大經に云はく、「是一味の藥は其流處に隨つて六種の差別有り。人の如きは水を見るに即ち三摩有り、一鬼は火を見る、倒心の所感なるが故に、水火の二見を成す。人の如きは恆河を見て水と爲し、鬼は見て火と爲し、天は見て地と爲し、魚は窟宅と見る、淨穢も亦爾り。業不同なるが故に淨穢を見る、實に此の如きの淨穢無し、此は是れ中道の土質淨穢の二縁なり。其二土を見る」

【第二に】以下、別して淨土を明す

攝論師の明すらく、「皆唯識を淨土の體と爲す。迹に就いて論を爲せば、一實二見とは、身子は佛土穢なりと見る、但人土を見るなり。梵王は天土を見る、而も佛土は人天の土に非ず。經に寶莊嚴の土と云ふが如きは、而も釋迦の眞土に況す。」と。問ふ、「一實二見然るべし、復淨質を穢と見る。穢は燒せらるるに淨も燒するや不や。」答ふ、「惡業の故に不淨燒すと見る、而も淨實に燒せざるなり。」問ふ、「淨質壞せば穢も亦壞するや不や。」答ふ、「穢は壞するに隨つて淨に於て穢を寄見するのみ。淨壞するを以ての故に即ち穢縁に所見無し。鬼の本水に於て火を見るに、水竭して火を見ざるが如し。穢質に於て淨を見るも亦然るなり。」

第二に別して西方淨土を論するに五の別有り。一に常無常とは、有人言はく、「此經猶是れ無常覆相して常と説くに法華と相似せり」と。今明すらく、「常住なり」と。文に云はく、「究竟一乘は彼岸に至る」と、故に知んぬ、是れ常なり、論に依るに種種に常を説くなり。二に三界非三界を明さば、釋論に明す所の如し。地に在れば色界と名けず、欲染無し、故に欲界と名けず。色形有るが故に無色と名けず。經に須彌山、大海、江河無しと云ふ、故に知んぬ、三界無きなり」と。文に云はく、「佛、彌勒阿難に問はく、汝彼國の地より以上淨居天に至るまで、其中の所有の微妙嚴淨自然の物を見るや不や。阿難對へて曰はく、唯然り。已に見る」と、既に已見と言ふ、三界無きを得ず、自ら物の穢に在りて定判すべからず。斯れ則ち麤の三界無くして、細の三界有るのみ。

第三に有聲聞無聲聞とは、經に阿羅漢果を得ること有り」と云ひ、解釋不同なり。一に云

【下輩生】 下品上生、下品中生、下品下生をいふ。即ち智慧淺く功徳少き凡夫をいふ。彌陀因位の名なり。

【胎生】 四生の一母胎より生れ出づること。

はく、下輩生は花中に於て菩提心を退して、出生の後二乗の果を受く、實に聲聞有り。二に云はく、法藏比丘願を設くるに「國中に聲聞二乗の名有ること無し」と願ぜり。今聲聞と云ふは、木に仍つて名と爲す、實に聲聞無し。今謂く、香積佛國の如きは聲聞の名有ること無し、今此經には有と言ふが故に、應に聲聞有るべし。

第四に有天人無天人とは、經に云はく、「天に非ず、人に非ず」と。若し此文に依らば則ち是れ一相なり、豈分別すべけんや。是人是天は而も文に、「餘方に因順するが故に、人天の名有り」と云ふは、此れ有時に勝なるを天と爲し、劣なるを人と爲す。穢土の人天を引いて淨土に生ぜしめんと欲するは、實に人天の別無きなり。

第五に有胎生、無胎生とは、皆應に化生なるべし、應に胎生無かるべし。而も經に下輩胎生を受くと言ふは、此れ胞胎に非ず、花臺の中に久しく出でざるが故に胎生と言ふ。實の胎生に非ず、禽獸の類も亦是の如し、實に禽獸無く、而も應の禽獸有り、故に經に「池の中に鳧雁等有り」と云ふ。

論述五門。

一には破用の大意を明し。二には四論の宗旨を明し。三には經論の能所を明し。四には中觀論の名を釋することを明し。五には論の緣起を明す。

【二】 大師此論を讀むに遍數不同にして形勢一に非ず。今略して十條を出さん。一には、

【一】 破用の大意

を明す。
【四論】三論宗に論書。中論、中觀論と依用する四種のともいふ(龍樹造)大智度論(龍樹造)十二門論(龍樹造)百論(提婆造)。

【權實】權智、と實智。即ち方便智と眞實智のこと。

【三論】中論、百論、十二門論をいふ。
【數論】數論派のこと。

有時は四論の宗旨を明し、『中觀』の名題を釋し、『經論の相資諦智の傍正破中の近遠を解し、然る後乃ち論の文に入る。然る所以は義を明すに詮次有りて、文參渙然として稟學の門徒をして尋求するときに曉り易からしめんと欲す。二には、論の初に在りて直爾に大意を散説して、仍ち論の文に進む。此は綱を提り領を振つて要旨を揚略し其文を裕にし、彰すこと其後發に至ること莫けんと思ふ。三には、先づ盛んに二諦を解し竟りて即ち論の文を釋す。佛二諦を説いて以て正道を表し、今の論も二諦を以て宗と爲し功を推し在ること有りと明す。四には、前に二智を明して、後に論の文に入る。佛を明すに二智を以て教を説く。菩薩今權實を以て正を顯し邪を破すと。故に須らく二智を斷開すべきなり。五には、古今を彈頌し異部を破斥す。然る所以は古より今に至るまで凡そ諸作並に龍樹の風を稟けず。皆是れ斷常にして至道に優る、故に須らく廣く破して始めて文を讀むことを得べきなり。六には、前に關河に舊序を讀むべく。影教の所作の如きなり。然る所以は爲即ち世人の云ふ『數論』前に興り、『三論』後に出で、關河、相傳、師宗在ること有りて、今始めて構ふるに非ずと示さんと欲するなり。七には、或は直に無行佛藏等の經を唱へて、然る後、論に入る。經論相成共して一道を顯すことを明さんと欲す、經の旨見るべく、論の意明し易きなり。八には、訶梨の所造、旃延の作に對して、大小軀分して得と無得と異ると明さんと欲す。九には、或は面異學を折りて仍即ち論に入る。執固の者をして迷を改め、慕位の者をして深悟せしめんと欲す。十には、直爾に文を披いて更に別説無し。此論は出でて菩薩の

【法師の】以下論を講ずるに多くの形執あるを明す。

中心より精破妙解して文の内に蘊在せりと明さんと欲す。輒ち拙意を抽でて何を以てか此に加へん。故に直に文を讀むなり。

法師の論を講ずる所以には多の形勢有り、略して三義有り。一には、法師善く根縁を識り、物の性を調停して稟性既に其れ多種なれば、演暢亦復窮まらずと明す。二には、他人に異らんと欲す。他人は義を立つるに定んで一説を作す。聽者は唯一解を作り了に轉悟無し。今明すらく、諸法に一定の相無し、豈唯一種ならんや。三には、龍樹、提婆、妙思深遠にして權巧萬端なり。今時の傳述は寧そ一槩すべけんや。今論の初に就いて大いに五章と爲す。一には破申の大意を明し、二には四論の宗旨、義に同異有ることを明し、三には經論の能所、識智の傍正を明し、四には中觀の論の名を釋し、五には論の緣起を明して、問答斷簡す。須らく破申の大意を辨すべきは、内外の學徒を問ふこと無く、凡そ製作有り皆破申を辨す。故に内外並びに云はく、自らはして而も彼を非せず、己を美して而も人を惡む。次に内經に外道の所計を叙述して云はく、是事實にして餘は皆妄語なり。次に成實は數經を破斥して、四諦の命を以て重ねて更に斯れ實なりと顯す。此の如きの流は盡く他を破して己を中べんと欲す。既に出でて虚妄橫構なり、皆破申を成ぜず。今時の論の意は善巧方便にして佛を助け化を揚ぐ、方に是れ破申なり。故に初に在りて其大意を明すなり。破申は只是れ破邪顯正にして、即ち是れ邪見の幢を滅して正法の炬を燃す。問ふ「誰か能く邪を破し、何を用てか正を顯す。」答ふ、「人法に出でず、人は即ち是れ聖人なり。」

【破邪顯正】邪計邪執邪教を破して正教、正道、正見

を顯はすこと。

法をば正法と名く。若し法と人と備れば則ち能く邪を破し正を顯すなり。此に就て則ち三雙有り。一には佛と菩薩、二には經と論、三には破と申となり。佛と菩薩とは佛、中道の二智を以て説く所をば經と名け、菩薩、中道の二慧を以て吐く所をば論と名く。佛が中道の二智を以て説く所を經と名く。經は、即ち是れ教なり。教は何の示す所ぞ。教は則ち縁に教ふ。縁は何の稟くる所ぞ、縁は只教を稟くるなり。故に縁と教とは相應して覺悟せざる無し。悟入と言ふは、教には眞俗を辨ずれば縁は不眞不俗を悟る。教には因果を説けば縁は不因不果を悟る、其餘は例して然るなり。故に教に因つて理を悟る、理を悟るが故に教を了す。教は是れ理の門なり。故に教に因つて理に達す、感應因縁なり。冥若し扶契すれば響然として有り。壑爾として無なり。此れ即ち佛教を説いて縁の爲にする意なり。但し教末代に流ると鈍根薄福なれば、教を尋ぬるも旨を失して佛意を知らず。故に論の初に云はく、五陰十二入十八界等の決定の相を求むるに、但文字に着して佛意を知らず、大乘法の中に畢竟空を説くを聞きて何の因縁の故に空なりと知らず、即ち見疑を生ずるが故に有に於て見を生じ、空に於て疑を生ず。然る所以は有所得の心の有依有得なるが爲には、當に眞俗を聞いて眞俗に住すべく、本不眞不俗に於て知らず。故に還つて眞俗に就て以て眞俗の眞を求む。非眞非俗に就て以て眞俗を求むるを知らず、還つて眞俗に就て以て眞俗を解す。非眞非俗を用て以て眞俗を解するを知らず、還つて末の中に就て、末を求めて、本に就て末を求むと知らず。本は是れ末の本なり。既に非眞俗の本を識らず。故に眞謂

【問ふ】
を述ぶ。

以下邪正

俗の末を識らず。因果等の諸事は義例して皆然り。故に他人の如き、或は眞俗一體なりと
ひ、或は異體なりと言ひ、或は因の中に先より果有りと言ひ、或は因の中に先より果無しと
言ふ等言説する所有り、並びに彼妄情の所構より出でたり、會て經論に明す所に非ず。是故
に斷常交り興り、生滅競ひ起る、邪言隱覆して正教を申べす、所以に龍樹菩薩は茲弱喪に
府して八不の教門を顯し、彼斷常を折いて不二に周還せしむ。破申の義の大略此の如し。』

問ふ、『若簡か是れ邪にして而も邪を破すと云ひ、何者か是れ正にして而も正を申ぶと道
ふや。』答ふ、『邪既に無量なれば正亦多途なり。大略言を爲さば二種に出でず。謂く有得と
無得となり。有得は是れ邪なれば須らく破すべし。無得は是れ正なれば須らく申ぶべし。』
故に『大品經』に善吉問を致すらく、『何等か是れ菩薩の道にして何等か菩薩の道に非ざる。』
答へて云はく、『有所得は菩薩の道に非ず。無所得は是れ菩薩の道なり。』問ふ、『既に有得
を破して無得を申ぶ、亦應に但性執を破して假名を申ぶべきや以不や。』答ふ、『性執は是
れ有得なり。假名は是れ無得なり。今有得を破して無得を申ぶ。即ち是れ性執を破して假
名を申ぶるなり。問ふ、『既に性を破して假を申ぶ、亦應に但有を破して無を申ぶべし。若
し有無ながら洗はば亦應に性假變びて破すべきや。』答ふ、『例せず。有無は皆是れ性な
り、所以に須らく變びて破すべし。既に性と假との異を分つ、故に破と不破と有り。』問ふ
『性有性無は皆是れ性なり。唯性を破して假を破せざるは亦應に性有假有は皆是れ有なり、
唯有を破して無を破せざるべきや。』答ふ、『同じく是れ有なりと雖も、而も有不同なり。故

に但性有を破して假有を破せず。問ふ、『若し同じく是れ有なりと雖も、而も有不同なるが故に、但性有を破して假有を破せざるは、亦應に同じく是れ性なりと雖も、而も性不同にして性無を破せず、但性有を破すべきや。』答ふ、『例と不例と有り。其例と言ふは既に性有性無皆是れ性なり。所以に兩ながら破せば亦性、有假有は皆是れ有なり。亦須らく二つながら除くべし。不例とは性有は有に住して道に乖くと明すが故に須らく破すべし。假有は有に非ず、道を扶くるが故に除かざるなり。次の時に云はく、前に明す破邪顯正は即ち是れ佛と菩薩となり。

【今問ふ】以下何人の破邪顯正に依るかを明す。
 【調御世尊】調伏制御する世尊即ち彌陀如來のこと。

今問ふ、『正化より平像法に迄るに及んで、傳持紹繼、其人少からず。今定んで何んが人の破邪顯正をか取る。』答ふ、『大格論を爲さば四人に出でず。一には是れ調御世尊、是れ能化の主なり。其餘の三聖は佛の宣揚を助く。三とは謂ゆる馬鳴闍士と龍樹、提婆となり。』問ふ、『此四人の破邪顯正は當に是れ同なりと爲んや、當に異有りと爲んや。』答ふ、『一往且く彼疑を折かば則ち不同不異と云ふべく、佛と菩薩となり、所以に不同なり。同じく實相を顯す、所以に不異なり。此は是れ同異の不同不異なり。既に不同異なるを得れば、即ち同異なるを得、佛と菩薩とは具足と不具足と勝と劣との故に異にして、皆邪を破し正を顯すが故に同なり。佛と菩薩と異なると言ふは、佛は即ち教を説いて二諦を樹てて縁に赴く。菩薩は直に佛の揚化を助けて別に制作無きなり。菩薩の中に就て自ら復異なる有り。若し是れ龍樹は論を作りて前に法を破し、後に兼ねて人我を淨む。提婆の所造は先づ正し

神我しんがを破はして、後のちに兼かねて法はふを洗あらふ。然しかる所以ゆゑんは「中論ちゆうろん」は内ないの弟子でしを破やぶり、無我むがを知しると雖いへども猶なほ法はふ有ありと計けす。是故このゆゑに正ただしく法はふを除のぞいて、後のちに兼かねて人我じんがを淨きむ。故ゆゑに「十二門じふにもん」に云いはく、「有ある爲ため無な爲ため尙なほ空くうなり」と。何いかに況いはんや我わをや。「百論ひやくろん」は外道げだうを破はす、僧伽等そうがとうの如ごときは計けして神我しんが有ありと云いふ。無我むがを知らざるが故ゆゑに、須すべらく前まへに正ただしく我わを破はして、後のちに兼かねて法はふを破はすべし。故ゆゑに破神はしんには生空しやうくうを辨べんじ、破は一異等いついとうとは法空はつくうを明あかし此これを異いと爲なすなり。問とふ「既すでに同おなじく邪じやを破はするは皆正みなしやうを顯あらはさん爲ためなり。何なにが故ゆゑに一いつの論ろんには大小だいせうを申のべ、一いつの論ろんには大小だいせうを申のべざる。「答こたふ、「若もし俱ともに大小だいせうを申のべば、何なんが兩論りやうろんの殊ことわり有あらん。必かならず齊ひとしく小大せうだいを顯あらはさば、焉いづくぞ兩人りやうにんの異作いさなりと判はんぜん。彼問かたがとを折くくに已すでに是これ疑うたがひを消せうす。但ただし意趣いしゆは然しからず、更さらに須すべらく掌てを指さすべし。「中論ちゆうろん」には大小だいせうを執しゆする縁えんを破はす、所以ゆゑに大小だいせうを申のぶ。「百論ひやくろん」には大小だいせうを執しゆする縁えんを破はせざるが故ゆゑに、大小だいせうを申のぶるを明あさす。即すなはち並ならびに「中論ちゆうろん」には眞俗しんぞくを執しゆする縁えんを破はすれば、眞俗しんぞくを顯あらはすべく。「百論ひやくろん」には眞俗しんぞくを執しゆする縁えんを破はせざれば、論ろんの末すえに應おうに眞俗しんぞくを明あさざるべし、論ろんの歸旨きしを結けつせんや。「釋しやくして云いはく、眞俗しんぞく二諦にたは是これ諸佛しよぶつの教門けうもんなり。譬たとへば衆流しゆりゆう皆みな大海たいかいに歸かへするが若ごとし。凡おほそ悟入ごにふせんと欲ほつするに此教門このけうもんに因よらざるは莫なし。論ろんに既すでに空くうを破はし有あるを破はし斷たんを除のぞき常じやうを除のぞけり。外人げにん彼所かたがと執しゆを失うしはば情じやうに所寄しよき無なし。即すなはち問とふ、「佛法ぶつぽふは何なんの所説しよせつなりと爲なんや。論ろん主聲しゆしやうに應おうじて即すなはち答こたふ、「二諦にたは有あり。世諦せたい有あるを以もつての故ゆゑに斷たんならず、眞諦しんた無なるが故ゆゑに常じやうならず。彼斷かたがと常じやうの見けんをして息そくせしむ。是故このゆゑに須すべらく二諦にたを説とくべきなり。問とふ、「或あるは邪じやを破はして正しやうを顯あらは

【又問ふ】以下破邪顯正に就て一異を明す。

すと云ひ、或は豈邪を離れて正有らんと云ひ、即ち邪者を撥いて正ならしめ、邪に因るが故に正を得、此兩言は乖反するに似たり。若し邪を破して正を顯すと云はば、即ち應に邪に因りて正有りと云ふべからず。只邪者をして正ならしむべく、若し只邪に因るが故に正なりと言はば、又應に邪を破除して正を顯すと云ふべからざるなり。」

又問ふ、「邪正一なるが故に破邪顯正と言はんや。邪正異なるが故に破邪顯正と爲んや。」他人解すらく、「邪正兩端にして邪を破除するが故に、正を顯すことを得るなり。難すらく、「若し爾らば瓶衣體異なり、瓶を破して衣を顯さんや。彼云はく、「瓶衣は乃ち異なれども相違害せずして相章の法に非ず、故に瓶を破して衣を顯さずして、邪正は是れ相章の法にして、邪は正を障ふるが故に、邪を破して正を顯すなり。」難すらく、「若し邪正相違するが故に、邪を破して正を顯さば水火相害なり。何んが水を破して火を顯さざるや。而も爾らず。故に知んぬ、邪正は寧ぞ頤に異なるべけんや。今若し邪言隱覆して正教開かず、邪言を破して正教を顯すに、爾らずと爲すに非ずと善はば、但此邪正は疎遠にして一家の意に非ず。今明すらく、道邪正に非ざれば能く道を體とするの縁も亦邪正に非ずと悟る。但し向に迷ひ、今は悟るを以て向の迷群を名けて邪と爲し、今の悟を呼んで正と爲す。此れ悟を得る時は邪正無しと了す。問ふ、「若し爾らば定んで是れ邪を破して正を顯すや。定んで是れ邪に因つて正を顯すや。」答ふ、「此兩義を具す。邪を破して正を顯すと云はば、向には迷ひて斷常を成す、所以に須らく此邪を破すべし。今不斷不常を悟ることを得るを名

けて顯正の義と爲す。是を以て邪を破して正を顯すと云ふ。亦可、邪に因りて正有りと言はば、只斷常は不斷なりと悟らしむ。豈迷を離れて悟有り、斷常を離れて別に不斷常有を得んや。『問ふ、佛の出世は既に感縁の所感有り。龍樹の出世も亦感縁の所感なりと爲んや不や。』答ふ、『例するに爾り。』問ふ、『佛と龍樹との出世に俱に感縁の所感有らば、佛なく縁を照す、龍樹も亦縁を照すや不や。』答ふ、『亦例す。』又問ふ、『若し爾らば佛は教を説きたまふ。龍樹も亦應に教を説くべきや不や。』答ふ、『應例、不例なり。應例と言はば佛は經教を説きたまひ、龍樹は論教を説きたまふなり。不例と言はば同じく感なりと雖も、而も感不同なり。佛は感縁の所感なりと爲すとは、佛の二諦の教を説きたまふを感ず。龍樹は感縁の所感と爲すと雖も、但龍樹の邪を破するを感ず。邪を破して佛教の識らしむ。』問ふ、『同じく感ずと雖も、感不同なり。佛と論主と同じく照すと雖も照も亦不同なりや。』答へて云はく、『實に爾り。佛の照は大明なり。論主の照は小晦なり。』問ふ、『他の論に破有り、申有り。今の論にも亦破有り申有り。今と他との二論は竟に何んが異り有らんや。又難ずらく、若し苟くも異を爲さんと欲せば、他の論に破申有るを得べし。今の論は應に唯破にし申にあらざるべし。』答ふ、『既に一の問、一の難有り。今亦一の答、一の解あらん。先づ第一の問に答へん。上に問はく、俱に破申有らば今他の二論は何んが異なるかと。今明すらく、他の論は破有りて復更に立あり。今の論は唯破にして、立せず。他の論に破有り立有りと言はば、外道の神我を破して更に假名の行人を立て、外道の二十五諦を破して四諦十六諦

等を立つるが如きなり。外道の神我眞實は無にあらす。汝が論の世諦假名行も亦失すべからず。若し外道の二十五諦を非と爲すと云はば、汝が四諦十六諦も此れ亦過有り。彼が人有り法有りと計するに既に外道を成す。汝も亦人法有りと計す、是れ外道ならん。今の論は爾らず、唯破して立てず。然る所以は論主の出世は唯顛倒の斷常を破せんが爲にして、更に所立無し、故に論の序に云はく、言して當る無く、破して執らざるなり。第二の難に答へて云はく、『他の論と異りとは、他の論は破申有るべく、今の論は應に唯破にして申にあらざるべく、今一往答へば、且く汝が所問の如き、他の論には破有り立有り、則ち破有りて別に所申有るなり。今の論は唯破して立てず、則ち唯破して申べざるなり。然る所以は、若し經若し論は唯顛倒虚妄を破して更に所申無し。本病に由るが故に教有り、病既に除くに在れば、教藥も亦盡く。故に『百論』の下の文に云はく、『破は可破の如し』と。此論の下に復云はく、『人も無く亦法も無く、佛にも亦所説無し』と。佛既に所説無し。寧ぞ當に教の申ぶべき有らんや。』今次に更に答ふ、『他の論に破有り立有り、此れ乃ち是れ有所得を増し、唯申ぶること能はざるのみに非ず、亦破することも能はず、自らはれ有得なり。何んが能く他を破せば、今の論は但破にして曾て自ら立てず、只能く破するのみに非ず。即ち復能く申ぶ、故に大師は猛將を擧げて譬と爲し、前に所立無く、後に所領無し、故に能く彼兇醜を剪りて我皇威を顯す。菩薩も亦爾り。無生正觀もて内外の諸法を了して、畢竟清淨なるが故に能く虚妄の斷常を破洗して、如來眞實の正法を顯出す。此の如

きの善巧を名けて破申と爲す、故に論の序に云はく、儼然として據ること靡くして事は眞
 を失せず、蕭焉として累無く而も理自ら玄會なり。問ふ、「他の論は唯申ぶる能はざるのみ
 に非ず、亦破することを成ぜず。今の論は具に能く破申す。若し爾らば他論は負と爲し、
 今の論は勝に居す。此れ則ち勝負の心生じて、是非の見起るなり、乃ち是れ斷常屈滯な
 り。豈能く正道を申べんや。」答ふ、「若し勝有り負有らば、破有ることを得べし。既に勝無
 無しと爲す、所以に能く申ぶ。」問ふ、「若し勝有り負有らば、破有ることを得べし。既に勝無
 く負無しと云ふ。汝何の所破なる。」答ふ、「實には爾り、勝有り負有り執すれば、則ち破
 有りと見れども、今に勝無く負無し、我實に所破無きなり。」問ふ、「若し勝有り負有らば、
 申と言ふを得べきも、既に勝負無し、更に何の申ぶる所ぞ。」答ふ、「若し勝有り、負有らば
 應に申は更に屈すべし。只勝無く負無しと爲す。屈とは申を得て、而も實には所得無きな
 り。」問ふ、「何物の邪を破し、若爲正をか申ぶる。」答へて云はく、「佛縁に赴いて眞俗の兩
 教を説きたまふ。意は中實の道を顯さんが爲なり。但し縁は二教に迷ひて中實を悟らずし
 て、斷常の病を成ず。今は縁の邪執を破し佛の正教を申ぶるなり。師云はく、其義無きに
 非ざれども、若し只此解を作さば未だ一家の意に近づかず。何が故に爾る。論の初の不
 邪に異れば、何んが斷常を淨して生滅を除くと謂はんや。」
 問ふ、「前には第一章に破邪顯正を明すと云ひ、今は但斷常來出を淨して二論の申ぶべ

【二】四論の宗旨の義を明す。
 【受】心所の名、感覺のこと。
 【想】心所の名、客觀の萬象の維多の相を見分ける精神作用。
 【行】愛想の二心所を除きたる、四の心所と、不相應行法の十四との五十八法の總稱。
 【識】認識了別する作用あるもの。

き無しと善ふ。若し前の言に依らば即ち今の説に垂き、若し今の解を用ひば復前判に反く。二言は鉅楯す、若爲が中と取る。』答ふ、二條有り。一には、反質。汝は眞俗二諦はれ何物ぞと言ひ、亦病を破するを聞けば便ち教を申せずと言ひ、亦故を申ぶるを聞けば是を邪を破して此折疑を作すに非ずと謂ふ。已に略して可見を成す。但復須らく巧聖解釋すべし。何が故に二諦を説く。只生滅斷常を世諦假生滅、眞諦不生滅なりと破せんが爲なり。假の生滅なれば、實録せば不生不滅なりと明して、生滅の不生滅なり、來出の無來出なりと悟らしめんと欲す。只此は生滅斷常を破するを即ち名けて教と爲す。是破は復是れ教なり。今論主は還つて此斷常生滅を破するの教を説いて、以て物を化して、縁をして此の如く悟らしむ。即ち破病の教を申ぶるなり。破病の教は中、只此れ破を申ぶるを名けて破申と爲す。今此破は中の稱を得れば申破と爲すなり。破中の大意且く竟んぬ、前の如し。

【二】今次に第二に四論の宗旨の義の同異を明す。問ふ、『四論既に興れり。當に是れ一なりと爲んや、當に是れ異なりと爲んや。』答ふ、『一往折疑せんに、不一不異なり。然る所以は八不は是れ衆經の妙旨、方等の宏宗なり。此論、初を啓くに、即ち不生不滅、不一不異を明す、故に知んぬ、四論は非一不異なり。』と。問ふ、『既に不一不異ならば便ち不四不論なるべし。若し四と言ひ、論と言はば即ち是れ一なりや、是れ異なりや。』答ふ、『只四論は不一不異なりと善ふ。若し四論と言はざれば、何物の不一不異なりと語はんや。只色不生不滅の受想行識、不生不滅なりと善ひ、五陰不生不滅、色心不空不有なりと善ふが如き、

【四依】法に依り
 人に依らず、了義
 經に依りて、了義
 經に依らず、義に
 依り語に依らず、
 智に依り議に依ら
 ず。

若し五陰と言はざれば誰か不生不滅なりと善はん。若し色心と語はざれば何物の不空不有
 なりとか言はん。今も亦爾り。若し四論と言はざれば誰か不一不異なりと善はん。問ふ、
 『何の義を以ての故に、其れ不一なりと言ひ、何の義を以ての故に、其れ不異なりと語ふや。』
 釋して云はく、『論四なるを以ての故に、所以に不一なり。四の論なるを以ての故に、所以
 に不異なり。故に不一不異なりと言ふ。』問ふ、『若し爾らば論に四有るが故に、彌其れ是
 れ異なりと見、同じく是れ論なるが故に、轉是れ一なりと見る。何んが不異不一なりと言ふ
 を得ん。』答へて曰はく、『四若し是れ異ならば、四は四論にあらざるべく、論若し是れ一
 らば、論は論四にあらざらん。只四は是異に非ずと爲んや、所以に四論なり。論は是れ一
 に非ず。所以に論四なり。』問ふ、『若し是れ一異に非ずや。』答ふ、『既に一異に非ず。亦復
 是れ非一異に非ざるに、既に一異に非ずと識る、則ち一異明すべきなり。今亦同なりと言
 ふべく、亦其異を辨すべきなり。同と言ふは二義有り。一には、能く論を造る人は同じく
 是れ四依、同じく佛教を禀け、同じく二智有るなり。二には、所造の論は同じく是れ無依
 無得、同じく正教を申ぶ。若し是れ有得ならば、即ち論と名けず、亦所論有ること能はず。
 若し是れ無得ならば、方に論と名くべく、能く所論有り。是故に若し空に依らざれば問答
 を成せず。故に下の文に云はく、『問ふ、空に依らずして問はば、答者の疑に同じく、答ふる
 に空に依らずして答へば、問者の所疑に同じ』と。問ふ、『此論若し有に依らざれば、當に有
 に當らざるべし。既に空に依れば、應に是れ空に當るべく。若し空に當ると許さば、則ち當

【次に】 異を辨ず

有るに成ず。何んが無依無當なりと謂はん。』答ふ、『今空に依ると言はば、一往外人の多は有に住するに對するが故に、空に依ると言ふのみ。空は何に依りてか所依ならん、故に是れ無依無當なり。又云はく、空に依るとは乃ち空を了するなり。此依は空の依るべき有り」と謂ふに非ず。』

次に異を辨ぜば、一には釋論を捉へて三論に望んで異を辨ず。二には三論の中に就いて自ら復異有るなり。釋論を捉へて、三論に望んで異りとは、亦多の義有り。一には文義の通別に殊有り。二には破收の異なり。文義通別の殊とは、若し三論は即ち別の通論なり。通じて一切の諸教を申べ、罄して申べざる無く、通じて一切の諸迷を破して、迷として洗はざる無し。故に是れ別の通論なり。若し是れ釋論は、即ち是れ通の別論なり、意致は乃ち復通漫なれども的しく一部の文言を釋す。是故に通の別論と名くるなり。二に收破の異とは、若し是三論に釋論を望むに則ち唯破にして收にあらず。若し釋論を三論に望むに亦收亦破なり。然る所以は三論は横に諸法を破し、豎に五句を除く。故に下の文に云はく、人無く亦法も無く、佛にも亦所說無し。何れの處、何れの時に於て誰か諸見を起さん、即ち是れ横に諸見を破するなり。又云はく、因縁より來、本末に推求するに、有も亦破し無も亦破し、亦有亦無も亦破し、非有非無も亦破し、非非有非非無も亦破す。即ち是れ豎論もて五句を破除するなり。故に三論は唯破にして收にあらず。釋論の亦破亦收とは、稟教の縁の迷を破除して、所迷の教を申ぶるなり。問ふ、『三論の破は即ち是れ捨なり。釋論

の收は即ち是れ取なり。乃ち是れ取捨の心生ず、豈能く諸見を息せしめんや。『答ふ』三論の破は即ち不破にして而も破なり、釋論の收は即ち是れ不收にして而も收なり。不破にして而も破なれば、破すれども所捨無し。不收にして而も收なれば、收すれども所取無し。乃ち不破不收にして無捨無取なりと顯す、故に能善く諸見を息する傍に四句を明さん。一には、但破にして而も收にあらず、迦旃延子の所造の如し。自ら此説を爲す、佛の三藏の義に非ず。二には、收にして破にあらず。即ち佛の方便教門を顯すなり。三には、破亦收は能迷の縁を破して、所迷の教を收むるなり。四には、不收不破は破の收なれば收到非ず、收の破なれば破に非ず、收に非ず、破に非ず、乃ち實と名くるなり。此は是れ三論を釋論に望して竟んぬ。

【次に】以下、三論の中に於て異を論ず。

次に三論の中に就いて自ら異を論ぜば、凡そ八條有り。一には三論の名を受くるに不同なるを辨ず。二には宗旨に異有り。三には智に長短有り。四には破に内外有り。五には假を用ふる不同なり。六には申に遠近有り。七には破に傍正有り。八には對と不對とを論ず。今前に三論の受名の不同を辨ぜば、論の立名に就いて自ら多種有り、或は譬に従ひ、或は人に従ふ、此の如く不定なり。甘露味の如く、毘曇は譬に従つて名を爲す。是れ舍利弗、毘曇は則ち人に因つて稱を受くるが若し。若し成實と三論との如きは、並に法に従つて名を作すなり。若し是れ十二門と百論とは、此は是れ理の教を名と爲し、中論は教の理に従つて稱と爲し、通じて三論を論ずれば皆中を顯すを得。然れば三論は同じく斷常を離し、

俱に正觀を顯す、豈俱に中と名くるを得ざらんや。亦皆偈に從ふを得ん、三に皆偈數有ればなり。亦俱に門と名くるを得べし。門は是れ能通なり、三論は盡く能く通じて觀解を生ずればなり。今別義に就いて其強弱有るが故に、立名不同なり。若し是れ「中論」は二諦所顯の中實を以て名に當る。「百論」は面り外道を折ること茲百偈に由れり。故に偈數を以て目と爲す。十二は能く通じて觀解を生ず。故に門より稱を受くるなり。

第二に三論の宗旨に異なることを辨す。若し是れ「中論」は智の諦を以て宗と爲す。「百論」は諦の智を以て旨と爲す。十一門は大に望するに、「中論」に同じきなり。「中論」は二諦を以て宗と爲すとは、發初に即ち不生不滅不常不斷と唱ふること、即ち是れ二諦なり。「瓔珞經」に云はく、「二諦は不生不滅なり」と。又下の文に云はく、「佛滅度後、後五百歳の像法の中の人根轉鈍にして、大乘法の中に畢竟空を説くを聞きて、何れの因縁の故に空なりと知らずして即ち見疑を生ず。若し都て畢竟空ならば、云何が罪福報應等有らん。此の如くならば則ち世諦第一義諦を失し、是空相を取つて而も貪着を起す。龍樹菩薩は此等を惑むが故に、所以に論を造る。既に二諦を失ふを惑みて、所以に論を作ると云ふ。故に論に二諦を申ぶ、故に二諦を以て宗と爲す。「百論」は二智を以て宗と爲すとは、提婆は面り外道を折くに、巧に權實を用ふ、故に宜しく二智を以て宗と爲すべし。此は是れ師の一時の語は通の別、圓の偏の意なるのみ。若し語を守つて此解を作さば不可なり。須らく具に通の別、別の通の意を得べし。即ち明すべきなり。通の義は「中論」に既に二諦を以て宗

【世諦】 萬有の眞性に依りて顯れたる相狀にして、世俗智の對境となる境界。
 【第一義諦】 眞如のこと。

と爲す。『百論』も亦爾り。『百論』既に二智を用ひて旨と爲す。則ち中論も亦然り。若し唯
『中論』は二諦を宗と爲し、『百論』は爾らずと言はば此を不可と爲す。不可と言はば凡そ二
の意有り。一には、菩薩の造論は只佛敎を申べんと欲するが爲なり。『中論』は敎を申べて
二諦を以て宗と爲す。『百論』も亦敎を申べんが爲なり。何んが二諦を以て宗と爲すを得ざ
らんや。二には、親り關中の論の序に違す。擧師の論の序に云はく、「聖心を通ずるの津
塗と眞諦を開くの要論なり。豈二諦を用て宗と爲ざらんや」と。又云はく、「仰いで聖敎の
陵遲を慨く。寧ぞ敎を申ぶるに非ずや」と。百論の末の文に云はく、「佛二諦を説きたま
ふ。我今佛に隨つて學び、亦二諦を説く。豈二諦を用て宗旨と爲ざらんや」と。故に兩論皆
二諦を宗と爲すを得。次に中百俱に二智を得るを旨と爲すと明さば、提婆は商り刑峯を
折くに巧に權實に出れり。故に二智を用て旨と爲すとは、中論主は内執を除き、亦巧に實
と方便慧に出れり。寧ぞ二智を以て旨と爲ざらんや。故に二論俱に二智を以て旨と爲すべ
きなり。而るに今師云はく、「中論』は二諦を宗に當て、『百論』は二智を以て旨と爲すとは
此は中百の兩つを取つて相望するに強弱あれば、此説を作すなり」と。

第三に智を用ふる短長を明さば、若し是れ『百論』は則ち權實の二智を用ひ、『中論』に用
ふる所は實方便智なり。然れば百論主は外道と一時の類舌を闢して僧伽衛世を拆挫す。
此は是れ權智の能なり。若し中論主は綱を提り、領を振ひ、佛法を匡正し、敎の大宗を
辨ぜんと欲す、一時の唇舌を諍ふに非ず。故に實方便を用ひ、佛法を匡持して一時の邪の

みなるべからず。其用を示すこと即ち長なり。若し百論主は善巧に一時に外道を拆挫せしむ、未だ是れ要すしも佛法の正を論するにあらず。是れ權智の能なり、此用は即ち短なり。

第四に、破に内外有るを明すに凡そ兩義有り。一には、若し是れ『中論』は内迷を破し、『百論』は外執を除く。故に序に云はく、『百論』は外を治めて以て邪を閑む。斯文は内を祛るに流滯を以てす。二には、『中論』は同學を破し、『百論』は異學を破す。然れば龍樹と失の縁と同じく佛敎を稟く。但龍樹は佛敎を稟けて、悟解して中觀を發主す。中觀の吐く所を名けて『中論』と爲す。外人亦佛敎を稟くれども、顛倒して解せず、宣暢せんと欲すと雖も、並に是れ斷常なり。同じく佛敎を學すと雖も、悟と迷と有り。論主は彼斷常を破して佛敎を識らしむ、故に是れ同學を破するなり。提婆の所破は爾らず、論主は自ら佛の經敎を學し、外道は自ら僧佉の典を稟く、所習不同なり。故に異學を破すと云ふなり。問ふ、『中論』の破に復收の義有り。『百論』の所破も爾るを得べきや不や。答ふ、『亦此義有り、何を以てか知ることを得る。故に經に云はく、圖書、讖記、文章、咒術は皆是れ佛説にして外道の説に非ず。外道は迷を解かざるを以ての故に破し、方便の故に須らく收むべきなり。』問ふ、『百論』の對縁に既に收の義有り。『中論』の所破も亦應に不收なるべきや。答ふ、『亦此義有り。佛敎を學ぶと雖も、自ら己が解を作すが故に、迦旃延子の所作の三藏の中の義を得ざるが如し。是故に『中論』の所破も亦不收の義有るなり。』然も『百論』の所破の縁の根性に三種有り。一には、上根は提婆の破を聞きて即解す。二には、中根は提婆の破を聞きて

解らずして止信心を生じて佛經を讀んで乃ち悟る。三には、下根は破を聞き、佛經を讀んで解らず、亦悟らざれば龍樹の論を看て始めて悟解を得。若し上根の人は則ち「中論」の所破の縁にして悟を得る者と齊し。中下の徒は即ち一階を按ずるなり。

第五に假を用ふるの不同を明す。假は即ち衆多なれども、略して四種を明さん。一には因縁、二には隨縁、三には就縁、四には對縁なり。若し甚深の因縁の義を辨すれば、即ち是れ因縁假なり。縁の所宜に隨つて説けば、即ち是れ隨縁假なり。縁に就いて檢責するに即ち是れ就縁假なり。若し一一に對破するを須ひて、常に對して無常を説く等の如きは、是れ對縁假なり。四縁の中に就いて則ち偏の圓、圓の偏の義有り。若し因縁の如きは、隨つて就と對と及び隨縁との故に因縁を説く、對縁も此の如し。四假も未だ曾て相離せず、即ち是れ圓の義なり。若し時に逐つて各用ふること不同なれば、即ち是れ偏の義なり。問ふ、「四假は佛と菩薩と當に盡く具すと爲んや、當に爾らずと爲んや。」答ふ、「差別の無差別の義、二の不二の義ならば、佛菩薩皆四假を具す。若し無差別の差別、不二の二の義ならば、具と不具と有り。佛は當に化主なり、所以に四假を具足せり。菩薩は教の旨を助申すれば、唯兩假のみ有り。謂ゆる就縁と對縁となり。菩薩は二假を具すと雖も、用に復強弱有り。「百論」は則ち就縁を弱と爲し、對縁は是れ強なり。「中論」は對縁を弱と爲し、就縁の義は強なり。何が故に爾る。「中論」の初に云はく、諸論師種種に生の相を説き、其に就いて生の相を責覺するに得ず、故に不生と言ふ。種種に滅の相を説き、滅者を責む

るに得ず、故に不滅と言ふ。即ち是れ就緣假の義なり。『百論』に一を借りて異を對破する等は即ち是れ對緣假の義なり。』

第六に、破申の遠近を明す。若し兩論を相對するに、『中論』は近申なり。『百論』は遠申なり。然れば『中論』の縁は親り佛經を稟け、佛經を稟け、親り佛教に迷ふ。亦破して即ち收むるが故に申の義は近を成す。『百論』の縁は親り佛經を稟けず、親り佛教に迷はず、直に是れ自ら己が解を樹てて遠く正教を妨げ、彼邪執を破して方に佛法に入る。故に申の義は遠を成するなり。

第七に、兩論の破に正傍有ることを明す。『中論』には正しく内の迷を破するも傍に外の執を除く。『百論』には正しく外の執を弾じ、傍に内の迷を淨む。何が故に爾る。若し外道の所執の『中論』の所破の縁と同じければ、是れ即ち從つて座に破せらる。故に『中論』は正しく内の迷を破し、傍に外の執を洗ふ。若し内學の執の『百論』の破縁と同じき有れば、亦從つて座に破せらる。故に『百論』は正しく外の執を弾じ、傍に内の迷を洗ふ。次に明すらく、『中論』の破に傍有り、正有り。若し『百論』に比すれば並に是れ傍破なり。『百論』の破の義に正有り、傍有り、『中論』に比すれば並に是れ正破なり。何が故に爾る。明すらく、佛の説教は本衆生の爲に、明と作り導と作り、衆生をして教に因つて、道を悟らしめんと欲す。衆生既に教を識らざれば、則ち導を悟ること能はず。菩薩は此道を失へる衆生を慍むが故に、佛教をして本の如く行ぜしめんとす。世に若し彼邪執を破せざれば、則ち正教

は申べざらん。是故に申の義を正と爲し、破の義は傍に居せり。『百論』は自樹の外道の未だ曾て佛教を稟學せずして破す。彼邪執を破して、然る後に方に佛法に入る。是故に破は正、申は傍なり。

第八に所破の縁に對不對有るを明す。提婆は面り外道を折く、所以に縁に對す。龍樹は潛懷著筆す。是故に外人に對せず。問ふ、『何が故に、一は對し一は對せざる。』有釋して云はく、『龍樹は妙思深遠にして、峯辨じ當り難し、外人は敢て與に敵すること無し、故に外人に對せず。提婆の明す所は一時面り外人を折く、所以に相對するなり。然も此釋は極めて解すべからず、若し龍樹妙思深遠にして敢て與に對する無しとは、提婆も亦爾り、便ち應に對せざるべし。又且若し龍樹妙思深遠にして、外人與に對する能はずと言はば、佛と外人と相對す。便ち應に智淺なるべきや。如來の智は深にして、而も外道と相對す。故に知んぬ、龍樹の智深なるを以ての故に、對せざるにはあらざるなり。今は此釋を用ひず。問ふ、『若し爾らずば、何んが二人對不對有るを得ん。』答ふ、『此れ亦何んが定めん。自ら須らく面り折いて方に外道を破すべき有り。自ら須らく潛懷著筆して此を用て邪を破すべき有りや。』問ふ、『只當に此の如くなるべしや、復餘の義有りや。』答ふ、『復深致有り。何んとなれば、明すらく、龍樹出世の時は是れ正化の末、像法の初なり。衆生復教を尋ねて旨を失すと雖も佛法尙興りて、邪徒由翳なり。大道を明成する、衆生甚だ多く、小心を偏學する、其事蓋し少し。龍樹既に興りて風に望して懸拊す、止着筆を須ふ

るに邪徒自ら喪びぬ。敢て對面して奥に擊揚すること無し。是故に龍樹は對せざるなり。提婆の出世は是れ八百餘年にして聖を去ること既に遠く、邪僮盛んに興りて正化訛替せり。故に序に云はく、「邪辨眞に逼りて殆んど正道を亂す。金石一貫にして、得失分つ莫し。菩薩興ると雖も猶拒抗を生ず」と。對面して拆挫し、辭屈して言下するに非ざるよりは、邪心轉熾にして迷を改むるを肯ずる無し。故に提婆は面り群邪に對す、所以に二人の對不對有り、其意兩り。」

【三】 經論の破立及び諦智の傍正を明す。

【三二】 次に第三章に經論の破立、諦智の傍正を明す。若し他人の所釋の如くならば、毘曇は立てて而も破せず。三論は破にして而も立てず。成實は亦立亦破なり。今問ふ、「若し成實は毘曇を破するが故に、亦立亦破と名くと言はば、毘曇も亦成實を破す。何が故に亦立亦破に非ざらんや。」成實は數人の根見を破して識を用いて見ることを立てて云はく、「若し根を用いて能く見ば死人に根有り、亦應に能く見るべし。眼識は耳の中に在るとき、眼根は何んが意もて見ざるや。而も今根有りて識無くば根は見ざるものなり。故に云はく、根は見ること能はず、故に根を破して識を立てるを名けて亦破亦立と爲す。數人は根見を立てて識見を破す、若し識を用いて識を見ば障礙無く、應に障外の色を見るべし。但障内を見て障外を見ざる者なり。」故に知んぬ、但是れ根見にして識見に關するに非ず、豈亦破亦立に非ずや。若し止毘曇は立にして破にあらざらず、「成實論」は亦立亦破なりと言ふは不可なり。又云はく、三論は但破にして立にあらざるも亦然らず。誰か君に向つて三論は立にあらざ

して破を存すと善はんや。彼は即ち駁師の『百論』の序を引いて云はく、『言にして當ること無く、破にして立にあらす、豈三論は立にあらすして、而も破有るに非ずや。今明すらく、然らず。論序に云はく、『破にして立にあらすとは、只此破を執せず、故に破にして立にあらすと言ふ。』何んが立にあらすして、而も此破有りと言ふ。何を以てか然りと知る。下の文に云はく、破は可破の如く、破は本可破を破す。可破は既に在ること無く、破も亦盡きぬ、只此破有りと言ふ。故に破にして而も立にあらすと言ふなり。今明すらく、論には『中觀』を顯し、經には『正法』を明し、既に『中觀』正法と稱す。豈更に破立の論すべき有らんや。但若し破立に因らざれば、以て不立を顯すこと無けん。故に『師子吼經』に言はく、『若し一二に因らずば云何が無一無二を辨ずるとを得ん』是故に今時に無破不立を顯さんと欲す、故に方便もて破立を論す。佛菩薩に就いて相望するに、若し是佛は不具足にして而も具足なるが故に破有り立有り。佛菩薩は當に具足にして而も不具足なるが故に、唯破にして立にあらす。佛は虚妄の邪見を破して、後に爲に眞實の正法を説く。是故に亦破亦立なり。菩薩は佛を助け化を揚げて、直に邪迷を破して佛の方便を顯して樹立する所無く、是を以て唯破にして立にあらざるなり。人今此を聞いて便ち定んで、佛に破有り立有り。論主は唯破にして立にあらざるを謂ひて即ち復見を成す。今は須らく通釋すべし。但し論主は唯破にして立にあらざるのみに非ず。佛も亦唯破にして而も立にあらす、但佛は亦破亦立なるのみに非ず。論主も亦破亦立なるを得、今人此を聞いて復疑を生

するを以て、佛は立有るを得べし。論主は那んぞ立有るを得ん。今須らく汝に返問すべし。
 佛立と言ふは何の所立ぞ。佛は只二諦の教門を立てたまふ。教門は只是れ前縁に教示す。
 諦は只是れ前縁に諦當す。何んが只佛のみ能く前縁に諦當して、論主は前縁に諦當するこ
 と能はざるべけん。佛は既に能く前縁に當る、既に立有ることを得、論主も亦能く前縁を
 教示し、亦立有ることを得るなり。次に明すらく、但論主に立無く佛も亦立無からん。人
 は以て復通を疑ふ。論主の示には立無かるべきに非ず。佛は何んが意もて立無からんや。
 今汝に問はん、『佛に立有りと云ふは相是れ若爲。』彼家即ち善説すらく、『佛の二諦は即ち
 是れ教門なり。』今汝に問はん、『二諦の教門と言ふは何の所爲をか欲する。』二諦の教門は
 只是れ衆生の病の藥なり。既に病有ること無く、則ち藥有ること無からん。且く又汝が二
 諦の教門を信ぜば、諸法は是れ有なりと表すと欲す、諸法非有なりと表すと欲す。汝既に二
 諦の教門を信ず、有は不有を表し、無は不無を表す。諸法に所有無しと顯すなり。即ち是
 れ諸法に所立無しと顯すなり。那ぞ二諦の教門を聞いて即ち立有らしむべきや。故に知ん
 ぬ、但論主は立無きのみに非ず、佛も亦立無し。次に更に明すらく、但立無きのみに非ず、
 亦復破も無し。人は以て復疑ふ、佛と論主とは衆生の病を破す、那ぞ破無きを得ん。今汝
 に問ふ、『破と言はば何の所破ぞ。』『破は只是れ執を破するのみ。執有るが故に破と名け、
 執無なるが故に破も無し。論主は既に執無し、故に論主も破無きなり。』問ふ、『若し爾らば
 論主は既に破無し、論主も應に申ならざるべきや。』答ふ、『破は本執を破す、申は本屈を申

ぶ。論主に所執無し、故に論主に所破無きなり。外人に屈有らば即ち外人に申有り、論主既に屈無し、則ち論主は申有ること無けん。」問ふ、「破の名は本外人に在り。申の名は本論主に屬す。而るに今申の名は既に外人に屬す、破の名は應に論主に屬すべきや。」答ふ、「破は本執を破し、申は本屈を申ぶ。論主曾て執せざれば則ち論主は破有ること無し。論主曾て屈せざれば則ち論主申ぶる所無し。論主尙申を受けず、寧ろ當に屈を受くべけんや。是故に但執無きのみに非ず、亦復破無く、但屈無きのみに非ず、亦復申無し。肅然として累無きを解脱を得と名く。寂に外人問うて云はく、「此の如きの破は何んが利を得る。」答へて云はく、「解脱を得る義に名く。何を以てか之に加へん。」

【次に】諦智の傍正を明す。

次に諦智の傍正を明さん。若し具足して言を爲さば、應に諦智の能所の傍正と云ふべし。今簡略して語を爲す。故に諦智の傍正と云ふ。若爲か是れ其相なる。明すらく、佛は二智を以て能説と爲し、二諦を所説と爲す。論主は二諦を以て能論と爲し、二智を以て所論と爲す。佛は既に二智を能説と爲す、即ち二智を以て正と爲し、二諦を所説と爲す。則ち二諦を以て傍と爲す。論主既に二諦を以て能論と爲す、則ち二諦を以て正と爲す。二智を所論と爲す、即ち二智を以て傍と爲す。今辨する意は正しく此諦智の能所を明さんと欲す。傍正の章門をば且く置く。但須らく汎く四種の能所を明すべし。一には、即ち是れ佛に就いて能所を明す。二には、即ち是れ境智もて能所を明す。三には、論主に就いて能所を明す。四には、論に就いて能所を明すなり。若し佛は二智を能説と爲し、二諦を所説と爲すは、

簡れ即ち是れ佛に就いて能所を明すなり。若し菩薩は二諦の教を稟けて、二智を發生すれば、教を轉じて境と名く。境は是れ能生、智は是れ所生なり。簡れ即ち是れ境智に就いて能所を明すなり。若し論主は二智を能説と爲し、言教を所説と爲す。簡れ即ち是れ論主に就いて能所を明すなり。若し論は是れ能論、經は是れ所論なり。簡れ即ち是れ論に就いて能所を明す。而るを今何が故ぞ。此論の初に在りて、須らく諸智の能所を辨すべし。凡そ兩義有り。一には、造論の所由を明さんと欲す。二には、能所不二を明さんと欲す。若爲か是れ造論の所由を明さんと欲するや。論主は二諦の教を稟けて二智を發生す。此二智を用ての故に、能く論を造りて邪を破す。簡れ即ち是れ造論の所由なり。若爲か是れ能所の不二を明さんと欲するや。然も四の能所有りと雖も、只一の能所を成す。一の能所有りと雖も、只無能所を成す。故に諦にあらす、智にあらす、能にあらす、所にあらす、傍にあらす、正にあらす、簡れ即ち是れ能所の不二を明さんと欲するなり。

今次に徇章門を釋し好く體れば、佛は二智を以て能説と爲し、二諦を所説と爲す。論主も亦二智を以て能説と爲し、言教を所説と爲す。論主に就いて別の智無く、佛教を悟りて智を生ず。論主に別の説無く、還りて佛の所説を説く。論主に別の論無く、還りて佛の所説を論す。故に佛の若は能、若は所は並に是れ所論なり。論主の若は所、若は能は並に是れ能論なり。佛の若は能、若は所は並に是れ所申なり。論主の若は所、若は能は並に是れ能申なり。何が故に爾る。論主は二諦の教を稟けて、二智を發生す。諸智不二なるを以て

諦は智を成ず。故に通じて諦の名を受く。佛は二智を以て二諦を説く。諦智不二なるを以て智は諦を成ず。故に通じて智の名を受く。佛の諦智は通じて智の名を受く。故に、若は能、若は所は並に是れ所論なり。論主の諦智通じて諦と名く。故に若は所、若は能は並に是れ能論なり。故に論主は二諦を以て能論と爲し、二智を以て所論と爲す。二智を以て能説と爲し、二諦を以て所説と爲す。故に佛は二智を以て正と爲し、二諦を傍と爲す。論主は二諦を以て正と爲し、二智を傍と爲す。故に經は智を以て能と爲し、諦を以て所と爲す。故に論は諦を以て能と爲し、智を以て所と爲す。是れ則ち經の能を論の所と爲し、論の能を經の所と爲す。經の所を論の能と爲し、論の所を經の能と爲す。亦是れ經の傍を論の正と爲し、論の傍を經の正と爲し、經の正を論の傍と爲し、論の傍を經の正と爲せば、此所は則ち所に非ず。經の所を論の能と爲せば、此能は則ち能に非ず。論の傍を經の正と爲せば、此正は則ち正に非ず。論の正を經の傍と爲せば、此傍は則ち傍に非ず。故に能に非ず、所に非ず、傍に非ず、正に非ず、經に非ず、論に非ず、師に非ず、弟に非ず、能に非ず、所に非ず、而も能所なり。傍正に非ずして傍正なり。經論に非ずして而も經論なり。師に非ず、弟に非ずして而も師弟なり。是れ佛菩薩經論、師弟因緣相成せり。並に中と名くることを得るなり。

【四】 中觀論の名を解するを明す。

【四】 第四章に中觀論の名を解することを明す。然も中觀論の三字は定無し。亦是中觀論と言ひ、亦是觀中論と言ひ、亦是論中觀と言ふ。若は中觀論は論者に約して名と爲し、

若は觀中論は觀解に、就いて目と爲し、若は論中觀は論の功に約して稱と爲す。然る所以は若爲が是れ論者に約して名と爲す。中は則ち理と教とに通ず。即ち是れ教中理中なり。二諦の教を稟けて二智を發生すれば、教を轉じて境と名く。中境は觀智を發生す、是故に初に中境を表し、次に觀智を表す。中觀既に興りて、論の名興ることを得。中境は觀智を發生して、此觀を用て能く研詳往復す。是故に論と名く、故に中觀論と言ふ。若爲が是れ觀解に就いて日と爲す。明すらく、此觀智を用て能く中正の境を觀じ、此觀智を用て、是非を研覈す、故に觀中論と言ふ。若爲が是れ論の功に釋して稱と爲す。明すらく、論は何の所論ぞ、論は只中觀を論す。若し是れ他の論は則ち偏解を論す。若し是れ今の論は則ち中觀を論す。故に論中觀と言ふなり。此釋は意有ること無きにあらず、但一家の正意に非ず。今問ふ、『何が故に啓初に即ち中觀と題するや。』答ふ、『此は深く所以有り。明すらく、失道の緣は未だ佛性を見ず、未だ般若に應せず、意鎖に生滅に遊び、意恆に斷常に涉り、生滅斷常を行するが故に、所以に中道に垂く。邪錯を行するが故に、所以に正法を失す。虚妄顛倒の故に、所以に實相無し。今此に對する爲に、斷を離れ常を離ると明す。所以に是れ中道なり。邪錯無きが故に、所以に是れ正法なり。虚妄を離するが故に、所以に是れ中實なり。故に今此偏虚に對するが故に、論に中實を顯す。問ふ、『若簡か是れ失道の緣』答ふ、『緣は乃ち無量なり。大に略して言を爲さば三種に出でず。一には、即ち是れ稟教失旨の緣、二には、即ち是れ邪見推獲の緣、三には、流俗汎爾の緣なり。亦教を稟け

て旨を失するにも非ず、亦邪見推獲にも非ず、直に是れ流俗汎爾の縁なり。今の論に除く所に正しく初の一を破し、兼ねて後の二を洗ふなり。」

問ふ、「何れの時よりか教に迷ひて旨を失すること起るや。」答ふ、「論の初の如く、佛滅度後後五百歳の像法の中の人根は轉鈍にして、中道二諦の教を稟くるも了せず。則ち是れ生滅斷常、一異來出なり。故に八非不を成ず。今の論主は中道二諦の教を稟けて、則ち不生不滅、不斷不常、不一不異、不來不出を了る、故に是れ八不なり、八非不を以ての故に虚妄を成ず、八不を以ての故に是れ中實なり。」問ふ、「何を以てか八非不を名けて虚妄と爲し、八不を以ての故に中實と名くるや。」答ふ、「外人の謂へらく、生有り滅有り、今其に就いて生を責むるに不可得なり。故に生とは不生なり。今其に就いて滅を責むるに不可得なり。故に滅とは不滅なり。彼に生滅有りと云ふ、今其生滅を責むるに不可得なり、故に即ち是れ無をも有と謂ふ、故に是れ虚妄なり。論主は不生不滅と言ふ。經の中には諸法は實録すれば、不生不滅なりと辨す、果して自ら不生不滅なり。故に是れ中實なり、例を擧ぐれば毘曇の義の如し。彼義に言はく、諸法を分別する時、名を捨つるを、則ち等と説く。分別するに所捨無く、是を第一義と名く。等をば是れ世諦と名く。故に虚妄なり。第一義の故に則ち中實なり。世諦の中に我と言ふが如く、我を責むるに我の名を得ず、空しく施して體の名に應ずる無し。即ち是れ無をも有と謂ふ、故に捨名と道ひ、則ち等と説く。十一種の色は共に色蘊を成ずと善ふが如く、實録するに此の如く名有りて體を召き、體有

【色蘊】色は質礙あるもの義、四大及び五根、五境等の一切の色法のこと。

りて名に應ず、故に所捨無し、即ち是れ第一義なり。今の時も亦爾り。外人の所説は無をも有と謂ふ、故に是れ虚妄なり。論主は言を出すに果して經に辨ずるが如し、故に是れ中實なり。

問ふ二經の中に亦二諦の中道を辨じ、論の中にも亦二諦の中道を辨ず。若爲が異有らん。答ふ、異なり。經の中には即ち二諦の中道を明し、論の中には即ち中道の二諦を明す。然る所以は經の中には教に因りて理を表することを辨ず、二に因りて不二を顯すなり。即ち是れ二諦の中道を明す。論の中には縁は空有の二教を稟けて、即ち空有の二に住す、故に迷失を成ず。論主は今破して空有とは不空有なりとす。畢竟して洗つて假に名けて中と爲す、即ち是れ前に中道を明すなり。前に不二を明すをもて外人便ち論主を過む。若し爾らば經の中に那ぞ有無の二諦を辨ずるを得ん。論主即ち釋すらく、經の中に有無を辨ずれば、簡は是れ方便の有無なり。經の中に二諦を辨ずれば、簡は是れ假名の二諦なり。是故に論の中には中道の二諦を明す。次に更に此一句を反じて語るらく、經の中には即ち中道の二諦を辨じ、論の中には即ち二諦の中道を辨ず。然る所以は仰は則ち中道正觀を以て縁に起き、眞俗の兩教を説く。簡れ即ち是れ體より用を起し、不二より二を出す。是故に經の中には則ち中道の二諦を辨ず。但し縁は眞俗二諦の教を稟けて悉く錯てり、是故に偏を成ず。今論主は眞は不眞なりと彈じ、俗は不俗なりと破して、彼偏執を折いて皆中解に歸す。是故に二諦の中道を明すなり。然も此中觀論の三の名を有時には合して解し、有時には離

して釋す。復合して解すと雖も、合して而も不一なり。復離して釋すと雖も、離にして而も不異なり。合して而も不一なり。同じからざる所以は、離にして而も不異なり。所以に別にあらず。復合して釋すと雖も、三義を失せず。復離して解すと雖も、一意圓通せり。今は前に合して釋し、次に離解を明さん。今前に合して釋せば、其相は若爲。中觀論は是れ中境を用て觀智を表し、境智異なりと明さんと欲するに非ず。今明すらく、中を以て觀を釋す、此は是れ何物の觀ぞ。此は是れ中の觀なり。此觀は是れ中なれば名けて中觀と爲す、中實を體りて正觀を發生す。只此正觀を以て能く斷常を淨む。是故に論と名け、所以に中觀論と名く。此論は那ぞ中觀に異るを得ん。何が故に爾る。若し生滅斷常を行ずれば、則ち中觀に非ず。今は生滅斷常を行ぜず、故に是れ中觀なり。中觀は之を口に宣ぶ、是故に之を名けて論と爲す、故に是れ中觀、亦是れ論の中觀なり。次に離解を明さば、分たざるに自ら別なり。但し中を釋するに多の師有り。何が故に爾る。中は言はく忠なり。故に中は只忠の理なり。家家盡く忠理と言ひ、解解並に忠文と謂ふ。是故に中を釋するに其計は一に非ず、略して論を爲さば四家を出です。一には、是れ外道にして中を解す。二には、是れ毘曇にして中を解す。三には、是れ成論にして中を解す。四には、是れ地論にして中を解するなり。此中道の義は後に自ら當に廣く出すべし。今は須らく略して、外道の中を解するを釋すべし。若し迦毘羅の中を解するに、即ち言はく、泥團は瓶に非ず、非瓶に非ずと。然る所以は泥團に即して是れ瓶なるにあらず、故に瓶に非ずと言

ぬ。泥團に離して瓶有るにあらす、故に非瓶に非すと云ふ。亦是れ不即不離なり。若し是れ優樓迦は中を解するに、聲は非大非小なり。然る所以は大鐘の大聲、小鐘の小聲なるが如く、此聲を至論すれば、實に非大非小なり。若し勒沙婆の中を解するに、光は非明非暗なり。然る所以は初めて生ずるが故に、所以に明にあらす。暗を破するが故に、所以に暗にあらざるなり。今先づ初の家を破せば、汝泥團に即して是れ瓶なるにあらす、故に離と爲すべく、泥團に離して瓶有るにあらす、故に即と爲すべし。只是離は即を見るに、何れの處にか非離非即有らんや。餘の兩家は此破に同じ。成論家の如きに至りては世語を解するに三の中有り、四塵に即して柱有らざるが如し、故に非即なり。四塵に離して柱有らざるが故に非離なり。此計は既に外道に同じ、亦前に破するが如し。今問ふ、『山門の釋する所の中の義は若爲。』有人の解に、『道は有に非ず、無に非ざれば中と爲す。而有而無なれば假と爲す。』今問ふ、『汝に當に別に非有非無有るを以て、中と爲すと爲んや、當に用て有無は非有非無なりと破するを以て、中と爲すと爲んや。』若し別に非有非無有りと言はば、此義は不可なり。何が故に然る。本有無を破するが故に、非有非無を得、而るに今何れの處にか別に此非有非無を得て以て中と爲んや。是故に不可なり。若し只用て有無は非有非無なりと破するを、即ち此非有非無を用て以て中の義と爲すと言はば、復不可なり。何が故に然る。汝本有は非有なりと破し、無は非無なりと破す。有無既に去れば、非有非無も亦除く。何んが只此非有非無を用て、以て中と爲すを得ん。假も亦此の如し、當に只所非の

有無を用て假と爲すと爲せば、當に別に有無を起して假と爲すと爲んや。若し只所非の有無を用て、假と爲すと言はば、是れ亦然らず。何が故に爾る、所非の有無は既に破せらる。那ぞ此而有而無有りて假と爲すを得ん。若し別に有無を起して假と爲すと言はば、然らず。本非有非無に因るが故に、有無を得、何れの處にか而有而無を起して假と爲んや。今汝に問ふ、「當に定んで非有非無を用て中と爲し、而有而無を假と爲すと爲んや、當に爾らずと爲んや。」彼が言はく、「定んで用ふ」と。今問ふ、「若し爾らば非内非外を中と爲し、亦内亦外を假と爲すや不や。」答ふ、「亦然り。今難すらく、「大經」に言はく、「非内非外、亦内亦外の故に中道と名く」と。若し爾らば非有非無、亦有亦無の故に中道と名く。那ぞ偏に非有非無を用て中と爲し、而有而無を假と爲すを得ん。若し爾らば應に非内非外を用て中と爲し、亦内亦外を假と爲すべきなり。且く又汝既に有無を破すること罷れり。那ぞ此非有非無を中と爲すを得ん。故に論に言はく、「初後既に無なり。中は當に云何が有なるべき」と。亦是れ有無既に無し、中は當に云何が有なるべき。縁を破して非縁と説くが如く、更に非縁の法無し。亦是れ有無を破して、非有非無と説く、更に非有非無の法無し。那ぞ此非有非無の法を中と爲すを得んや。且く又汝非有非無を中と爲すと言はば、有無も亦是れ中ならん。汝若し而有而無は是れ假なりと言はば、非有非無も亦是れ假ならん。何が故に爾る。假は是れ不自の義、本非有非無に因るが故に、有無と説く。有無は既に是れ假なり、非有非無は何が故に假に非ならん。中は本斷常を離る、汝有無に因るが故に、

非有非無と説く。非有非無は斷常を離れて、既に是れ中なり。而有而無も亦斷常を離る、何の意をもてか中に非ざらんや。若し非有非無は是れ假なるを得ずと言はば、有無も亦是れ假なるを得ず。若し有無は是れ中なるを得ずと言はば、非有非無も亦是れ中なるを得ず。彼善はく、「若し爾らば有無非有非無は、併ら是れ中なる好なりや不や。今明すらく、「有は是れ常見、無は是れ斷見、非有非無は是れ愚癡の論。那ぞ忽に是れ中ならん。彼善はく、「若し爾らば併ら是れ假なる好なりや不や。今明すらく、「汝無は有に異ると執するも有は無に異り、非有非無は有無に異ると執す。那ぞ併ら是れ假なるを得ん。」今問ふ、「汝既に他を破して非と爲す。今の中の相は若爲。答ふ、「師善はく、「只此の如く中假を破す、即ち是れ中なり。何の處にか別に中有らん」と。但此意を難じ更に須らく解釋すべし。簡れ須らく法身の義を識るべし。法身は在無く、在にあらざる所無し。法身に在無ければ、有に在らず、無に在らず、亦有亦無に在らず、非有非無に在らず、乃至諸法の中の義も亦爾るなり。所として在らざること無ければ、法身も亦在に有り、亦無に在り、亦亦有亦無に在り、亦非有非無に在り、乃至色心諸法の中の義も亦爾るなり。故に是れ中に非ざる無し。故に「二夜經」に明すらく、得道の夜より、泥洹の夜に至るまで常に中道を説く。既に是れ中道を説く。二夜の中間は何んが只非有非無を説いて、有無等を説かざるべきや。故に知んぬ、一切の諸法は是れ中に非ざる無し。私に云はく、其れ在にあらざると言はば、只有得に在るにあらす、有得の故に中に非ず、言はく、其れ在とは無得に在り、

無得の故に是れ中なり。難ずらく、『若し有得に在るにあらざれば、何んが無所不在と謂は
 んや。』答ふ、『今無所不在と言はば、只無得に在り。有得は是れ横謂、畢竟無所有なるが故
 に、那ぞ中と爲して一切皆在ることを得ん。其在を論ずれば一切皆在り。其不在を語はば、
 一切皆在らざるなり。』問ふ、『汝既に『二夜經』に依りて、一切の諸法は中に非ざる無しと明
 さば、論の初に何が故に但不生不滅を用て中と爲し、生滅を取りて中と爲さざるや。』答ふ、
 『病に對するが爲の故なり。緣は多く生滅に著す。只生滅を見て不生不滅を見ず。是故に偏を
 成す。今此生滅の偏に對するが故に、不生不滅を名けて中と爲すと説くなり。然も中を釋
 するに三種有り。一には對偏、二には對邪、三には實義もて中を釋す。只此中の字に、就
 いて則ち復三義有り。復三義なりと雖も一意を妨せず。復一意なりと雖も三義を失せず。
 然る所以は只偏に由るが故に、所以に邪なり。邪なるが故に、所以に正ならず。正ならず
 るが故に、所以に中ならず。中ならずが故に、所以に實ならず。實ならずが故に、所以
 に是れ虚なり。今は偏ならざるが故に、所以に邪ならず。邪ならざるが故に、所以に正な
 り、正なるが故に、所以に中なり。中なるが故に、所以に實なり。實なるが故に、所以に
 虚ならず。復三義なりと雖も、一意を妨せず。復一意なりと雖も、三義を失せざるなり。』
 問ふ、『偏と邪とは若爲が異なる。無差別の論ならば偏の故に、所以に邪なり。邪の故に、
 所以に偏なり。有差別の論ならば、中論は則ち偏に對して中と説き、百論は邪に對するが
 故に中と説く。何が故に爾る。偏は是れ偏錯、佛教を稟けて錯解を生ず、所以に偏と名く。』

是故に中論は偏に對して説く。中と邪とは是れ自樹外道、横に獲を生じて佛教を稟けず。
 是故に邪と名く。所以に百論は邪に對して中と説く、此二階を過ぎたり、所以に實と名く。
 何が故に爾る。偏に對して中と説く、偏去れば中も亦盡く。邪に對して中と説く、邪破す
 れば中も亦除く。偏にあらず、中にあらず、邪にあらず、正にあらず、此二階を過ぎたり。
 所以に實と名くるなり。即ち是れ實義もて中を釋すること了りぬ。次の時は云はく、前に
 辨釋するに三種有り。一には對偏、二には對邪、三には實義なり。今問ふ、「中とは實なり
 と言はば、那ぞ三有るを得ん。」答ふ、「中は尙一なるべからず。中は復那ぞ三なるべけん
 や、縁の爲の故に亦一なるべし、縁の爲の故に亦三なるべし。然も三有りと雖も只是れ一
 の義なり。例を擧げば、十方の諸の如來の同じく共一法身、一心、一智慧なり、力無畏
 も亦然るが如し。復十方の諸佛なりと雖も、只同共一法身なり。」今明すらく、中は是れ實
 の義なれば、然も經の中に釋義不同なり。略して三種有り。
 一には横論顯發、二には堅論表理、三には依名釋義なり。若爲が是れ横論顯發なり。俗
 の如きは何を以てか義と爲す。俗は眞を以て義と爲す。眞は何を以てか義と爲す。眞は俗
 を以て義と爲す。故に經に云はく、「深く世諦を識らしめんと欲するが故に、第一を説き、
 深く第一を識らしめんと欲するが故に、世諦を説く」と。今問ふ、「簡れ自ら是れ深く世
 諦を識らしめんと欲するが故に、第一と説く。何んが眞は俗を以て義と爲すと謂ふ。簡れ
 自ら是れ深く第一を識らしめんと欲するが故に、世諦を説く。何んが俗は眞を以て義と

爲すと謂はんや。今明すらく、「何が故に世諦を説く、只第一を識らしめんと欲するが爲なり。豈是れ眞は俗を以て義と爲すにあらずや。俗は是れ眞の家の所以なるが故に、眞は俗を以て、義と爲す。何が故に第一を説く。只世諦を識らしめんと欲するが爲なり。豈是れ俗は眞を以て、義と爲すにあらずや。眞は是れ俗の家の所以なるが故に、俗は眞を以て義と爲すなり。

二には、堅論表理。俗の如きは不俗を表す。不俗は是れ俗の家の所以なるが故に、俗は不俗を以て義を爲す。眞の如きは不眞を表す。不眞は是れ眞の家の所以なるが故に、眞は不眞を以て義と爲す。故に「金鼓經」に云はく、「有は非有にして、本性は清淨と知るが故に。」、「華嚴經」に云はく、「若し有は非有なりと知れば、則ち能く如來を見る」と。故に教に因りて理を識り、佛の法身を悟るなり。若爲が是れ依名なる。釋義は俗の如きは、是れ浮虚を義と爲す。眞は是れ眞實を義と爲す。故に「涅槃經」に云はく、「苦とは迫進の相、集とは生の相、滅とは盡の相、道とは通の相なり」と。今明すらく、中を釋するに亦三種を具す。中の如きは何を以てか義と爲す。中は不中を以て義と爲す。中は何を以てか義と爲す。中は實を以て義と爲すなり。

次に觀の義を釋せん。然も中を解するに既に顯にして、則ち觀の義は明なるべし。何が故に爾る。既に中觀と稱す。中は斷を離れ常を離る。觀も亦常を離るるの觀なり。亦常を離れ斷を離るるなり、是故に既に解すれば中は即ち是れ觀を釋するなり。然りと雖も、

【五停心觀】 五停
心位に於て修する
五種の觀法。不淨
觀、慈悲觀、因緣
觀、界差別觀、持
息念觀。

今時に復須らく解釋すべし。中は既に多種有り、觀も亦復多途なり。外道の如く上を攀ちて下を厭ふ。下は則ち苦難障なり。上は則ち勝妙出なり、亦是れ觀の義なり。毘曇の如きは總別して念處五停心觀も亦是れ觀の義なり。成論人も亦觀の義を解すれども、具に出すこと能はず。今迄陌に論を爲すに凡そ二種有り。一には、有得小乘の觀。二には、無得大乘の觀なり。若し是れ有得小乘の觀は則ち生滅無く、智には生滅有り。煩惱を斷するが故に、即ち是れ滅なり。智慧を修するが故に、即ち是れ生なり。煩惱は則ち本有今無なり。智慧は則ち本無今有なり。是れ則ち境智殊に、生滅異なり。若し是れ無得大乘の觀は爾らず。境智は二無し、境に生滅無ければ、智も亦生滅無し。煩惱本より生せず、今も亦滅せず。智慧本より滅せず、今も亦生せず。是れ境智不二にして、有無平等なり。故に言はく、我如來を觀するに、前際よりも來らず、後際へも去らず、中にも亦住せず。此の如く觀するを名けて正觀と爲し、斯觀に異なる者をば名けて邪觀と爲すなり。然も觀は是れ何をか義と爲す。觀は是れ了達の義、亦是れ履照の義なり。然も此論の要意を尋ぬるに、即ち是れ檢校を義と爲し、觀察を義と爲す、斷常を檢校し、虛妄を觀察するなり。今何の處の文か是れ品品に皆斷常を檢校し、章章に並に虛妄を觀察するや。只八不は即ち是れ其相なり。彼は是れ生滅と謂ひ、彼は是れ斷常と謂ふ。今共に就いて生滅を責むるに、不生不滅なり。斷常を求むるに、不斷不常なり。簡は即ち是れ斷常を觀察すれば、斷常にあらず。虛妄を檢校すれば、虛妄にあらざるなり。故に觀法品に云はく、「若し法は緣より生ずれ

ば、因に不即不異なり」と。是れ則ち實觀と名け、斷にあらず、亦常にあらざるなり。然も一家の釋すらく、中は觀を發し、觀は中を發す。今明すらく、是れ中境を用て觀智を發し、觀智を用て中境を照すに非ず。但此正觀は能く中實を體悟す。中實は即ち是れ正觀なり。中實の正觀に異なること無ければ、中實を用て正觀を發す。正觀の中實に異なること無ければ、正觀を用て中實を照す。故に中を以て名と爲すとは、其實を照すなりといふが如し。別に此實有りて、用て此實を照すに非ず。但中は即ち是れ實なりと顯す、故に實を照すと言ふ。今も亦爾り。只此中實を體悟して、我正觀を顯す。我正觀は即ち是れ中實なり、故に中實は我正觀を發す。中實は即ち是れ正觀なり。然も觀は是れ了達の義にして、亦履照の義と稱す。明すらく、照は即ち俱に邪正を照す。觀は則ち俱に得失を觀す。俱に邪正を照すとは、邪を識れば即ち正を識るなり。正を識りて能く邪を破す。俱に得失を觀すとは、失を了れば即ち得を了るなり、得を了りて能く失を破すが故に、『涅槃』に云はく、「正善具に成就して四顛倒を演說し、正善を成就せざれば豈能く顛倒を演說せんや」と。今も亦爾り、若し正を解せずしては豈能く邪を破せんや。故に人の字を喚んで入の字と爲すが如く、但に人を識らざるのみに能す、亦復入を識らざるなり。今若し人を識れば、但に人を識るのみに非ず、亦復入を識るなり。今も亦爾り。若し正を識らざれば、亦邪を識らざるなり。

今良に正を識るに由るが故に邪を破し、邪を識るが故に、能く正を解するなり。今明す

らく、得失の相若爲。論の初に五陰十二入十八界等を求むるが如きの故に、是れ有、是れ生滅なり。此を即ち失と爲す。今共に就いて責むるに、有とは不有なり。生滅とは是れ不生滅なり。此れ即ち得と爲す。邪正も亦爾なるなり。本失に因るが故に得なり。既に失を破す、得も亦去りぬ。失無ければ亦得も無し。邪正も亦爾り。此は即ち是れ縁、觀に盡きたり。此得失の縁は觀に由りて盡すを得るが故に、是縁、觀に盡くれば、即ち是れ縁、縁に盡くるなり。何が故に爾る。觀は本縁を觀ず、縁既に盡くれば、觀も亦盡くるが故に、縁盡くれば則ち觀淨なり。觀盡くれば則ち縁淨なり。縁盡くれば則ち觀淨なるをもて、此觀は則ち觀に非ず。觀盡くれば、則ち縁淨なるをもて、此縁は則ち縁に非ず、故に縁に非ず、觀に非ずして、縁觀俱に盡くるを始めて好の中觀と名くるなり。離して中觀を釋すること已に竟る。

今次に論を解せん。然も論は是れ何をか義と爲す。論は是れ論辨を義と爲し、只法相を論辨するなり。若し叡師の序に依らば、論は是れ盡言を義と爲す。則ち云はく、其言を盡し、其慮を窮むるなり。若し一言もて盡きざれば、則ち衆異扶疎なり。若し一慮も窮らざれば、則ち顛倒亂起す。今は其言を盡すが故に、即ち衆異息み、今其慮を窮むるが故に則ち顛倒淨なり。是故に論は則ち言を盡し、慮を窮めて論の功方に顯るるが故に、所以に言盡き慮窮まるなり。故に論は但に言を盡すのみに非ず、亦復觀を盡す。觀は但に縁を盡すのみに非ず、亦復論を盡す。中は但に觀を盡すのみに非ず、亦復論を盡す。是故に今中

觀論の名を表すれば、只諸法を盡淨せんと欲するなり。人解の論を以て、中觀の義を釋せんと欲するが如きにあらず。但し諸法を盡淨せんと欲すること爾るべし。今一の中を表すれば、但中のみ是れ中なるに非ず。諸法皆中なりと辨ず。既に諸法は中なりと善ふ、復何の法か有るべき有らん。故に中を表すれば則ち諸法を盡淨するなり。中既に爾り、觀論も亦爾り。是故に中は觀を發して、辨、神口に流るるが所以に論と名く。中は觀を發せば、即ち是れ方便の實慧なり。辨、神口に流るれば、即ち是れ實の方便慧なり。方便の實慧は即ち是れ說の如く行ず。實の方便慧は、即ち是れ行の如く説く。說の如く行すれば、即ち是れ二智なり。行の如く説くは、即ち是れ二諦なり。故に說の如く行すれば、行は則ち我所説を行す。行の如く説けば則ち己が所行を説く。故に所行は所説の如く、所説は所行の如し。是故に行説不二にして、諦智平等なり。今明すらく、言を盡し論と爲す。此義は難なり。今須らく問ふべし。若し是れ影公は則ち問答折微すと善ふ、所以に論と爲すと。若し是れ寂師は則ち論を以て稱と爲すとは、其言を盡さんと善ふなり。簡れ則ち兩語は石のごとく乖き、二言は鐵のごとく反せり。答ふ、乃ち是れ各其美に據り、相違せりと謂ふに非ず。影師は始に就いて言を爲し、寂公は終に約して語を爲す。何が故に爾る。良に問答に由るが故に、言を盡すことを得。言は何に因りてか盡すことを得る。良に問答に由る、是故に二語相成し、兩言相順せり。影公は始に就いて言を爲し。寂師は終に約して語を爲すなり。今言を盡し、論と爲すと善ふは、若し外人をして是と言はしめば、即ち龍樹を

非と爲すと善ふ。

若し龍樹をして是と言はしめ、即ち若し外人を非と爲すと善はば、是れ即ち許證窮ること莫く云云して已むこと無し。若何、猶見るべし。若使其本末の得失に據らば、終に自ら龍樹に歸して得と爲し、外人を失と爲す。外人を失と爲すが故に、言は則ち盡きぬ。良に外人に言有るに由るが故に、龍樹に語有り、外人の言既に盡き、龍樹の語も亦窮る。譬を擧げば、張と王との二人共に一珠を争ふが如し。張は是れ張の寶なりと謂ひ、王は是れ王の物なりと謂ふ。是れ則ち兩人各争うて紛然として未だ決せず。今其本末の得失に據るに終に自ら歸する有り。實に是れ張の物なれば、王侶に今果して是れ張の物なりと誌す。王は即ち言無し、王既に言無ければ、張も亦語せず。今龍樹と外人も亦然り。龍樹は實に是なるに、外人は非と善ふ。今龍樹は果して是なれば、外人言無し。外人に言無くして既に盡くれば、龍樹も語亦窮る。問ふ、「龍樹と外人との言は俱に盡く。那ぞ獨り龍樹の論と稱するを得ん。」答ふ、「復二人の語は俱に盡くと雖も、盡くるに所由有り。良に龍樹の是非を檢するに由るが故に、外人も失と爲せば、外人の言は則ち盡く。外人の言既に盡くれば、龍樹の言も亦盡く。二人の言盡くれば、功は龍樹に由る、所以に稱して龍樹の論と爲すなり。譬を擧ぐれば、兩人相費して須俱に倒ると雖も、而も勝負有り。下の者を負と爲し、上の者を勝と爲すが如し。龍樹外人亦復の如し。復俱に言を息むと雖も、龍樹を勝と爲し、外人を負と爲す。是故に稱して龍樹の論と爲すなり。」

【五】 論の縁起を
明す。

【五】 第五論の縁起。龍樹菩薩は南天竺の梵志種より出でたり。天聰奇悟にして、事再

び告げず。乳舖の中に在りて、諸の梵志の四章陀典を誦するを聞きて、而も其義を識る。

弱冠にして名を馳せ、諸國に獨歩せり。天文地理及び諸の道術悉く綜ねざる無し。

契るに三人を友とし、一生の樂は唯隱身の術のみに有りといふ。俱に術師に至るに、術師

念じて曰はく、「此四梵志は名を一世に擅にし、群生を草芥し、才明世に絶せり。我に術

法を與へずして、青葉一丸を與へて、藥盡くれば必ず來る。」龍樹は此藥を嚼する時、其

香氣を聞きて皆之を識る。分數の多少は其方藥の如くにす。藥師怪みて嘆じて曰はく、「此

の若きの人は、之を聞くこと猶難し。況んや相遇はんをや、我賤術は之を惜むに足らんや。」

具に術方を授く。四人術を得て、常に王宮に入る。王宮の美女懷妊する者多し。王は太だ

悦ばず、有舊老の智臣の言はく、「細土を以て諸門の中に置いて、諸の往行の者を斷すべ

し。若し是れ術人ならば即ち其迹を見んに自ら現じ、兵を以て除くべし。若し是れ鬼神

ならば其迹無し。咒を以て滅すべし。」見るに四人の迹あり、諸の力士をして刀を揮つて宮

中に三人を斬りて死せしむ。唯龍樹のみ死せずして、出家受戒し、九十日の中に三藏を誦

通す。後に大乘經を得て甚だ大いに愛樂す。大龍菩薩は其れ是の如くなりと見て、接し

て海宮に入り、方等經藏を授く。龍樹は深く無生に入り、二忍具足せり。其中に波羅門有

り、善く咒術を知り、龍樹と勝を争はんと欲す。王言はく、汝は大いに愚癡なり。此菩薩

は明なることは日月と光を争ひ、智は佛と照を並ぶ、何んが宗敬せざらんや。」婆羅門は咒

【婆羅門】 印度四
姓の最高位に位す
る種族、僧侶の階
級なり。

を以て大地干葉の蓮華を作りて、自ら其上に坐せり。龍樹は咒もて六牙を白鳥に作り、鼻を以て絞抜いて高く擲げて地に擲ぐ。婆羅門は十頭の羅刹を化作し、龍樹は毘沙門天王を化作す。諸の羅刹恐怖して退けり。婆羅門は毒龍を化作し、諸の瓦石を雨らし。龍樹は曼陀羅華を化作し、外道は折伏して出家して弟子と作る。龍樹菩薩は百部の論を作りて、大いに閻浮提に行じ、涅槃の後は國國塔を作りて供養す。

○當書一卷唐の宗密禪師の撰なり。人性に基き暗に韓退之の所論を駁して當時の儒道大教を會通し佛教の大意を述べたるものなり。

【三才】 天地人の三才。

【學に常師なし】 但一人のみを師とせざるること。

【内外】 内は佛教外は儒道二教を指す。

【然るに今儒道云云】 支那哲學(周易)の原人説。

【佛法を習ふ云云】 業感緣起論、小乘佛教の原人説。

【展轉して云云】 賴耶緣起論、樞大乘の原人説。

原 人 論 序

唐終南山草堂寺沙門宗密述

萬靈蠢蠢たる皆其本有り、萬物芸芸たる各其根に歸す。未だ根本無くして枝末有る者は有らざるなり。況んや三才の中の最も靈なるものにして本源無からんや。且人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり、今我人身を稟け得て自ら從來する所を知らず、曷ぞ能く他世の越く所を知らんや。曷ぞ能く天下古今の人事を知らんや、故に數十年の中、學に常師無く、博く内外を考へ、以て自身を原ね、之を尋ねて已まざりしに、果して其本を得たり。

然るに今儒道を習ふ者は祇知る、近きは則ち乃祖乃父、傳體相續して此身を受け得たり。遠きは即ち混沌の一气、割れて陰陽の二となり、二より天地人の三を生じ、三より萬物を生じ、萬物と人とは皆氣を本となす。佛法を習ふ者は但云ふ、近きは即ち前生に業を造り、業に隨ひ報を受けて此人身を得たり、遠きは則ち業又惑に従ひ、展轉して乃至阿賴耶識を身の根本となすと、皆已に其理を窺めたりと謂へり。而も實は未し。然れども孔老釋迦は皆是れ至聖なり、時に隨ひ物に應じて教を設くるに途を殊にするも、内外相資けて共に群庶を利し、萬行を策勵して因果の始終を明し、萬法を推究して生起の本末を彰すことは皆

【權】 假なり。

聖意なりと雖も、而も實有り權有り、二教は唯權にして、佛は權實を兼ね、萬行を策し、惡を懲し善を勸めて同じく治に歸せしむるは則ち三教皆遵行すべし、萬法を推し理を究め性を盡して本源に至るは則ち佛教を方に決了と爲す。

然るに當今の學士、各一宗を執し、佛を師とする者に就いても仍實義に迷ふ。故に天地人物に於て之を原ねて源に至ること能はず。余、今還内外の教理に依つて、萬法を推究し、初に淺より深に至り、權教を習ふ者に於て滯を斥けて通ぜしめ、而して其本を極め、後には了教に依つて展轉生起の義を顯示し、徧を會して圓ならしめ、而して末に至る。末人物。文に四篇有り、原人と名く。

【展轉生起の義】
本源より如何にして展轉して此人身を生起せるかの道理。

原 人 論

唐終南山草堂寺沙門宗密述

【二】 儒道二教の迷執を破して自己の所信を明す。【謂く道は】 道教の原人説。

【二】 斥迷執第一 儒道を習ふ者

儒道二教の説は、人畜等の類は皆是れ虚無の大道より生成養育すとす。謂く、道は自然に法りて元氣を生じ、元氣より天地を生じ、天地より萬物を生ず、故に愚智貴賤、貧富苦樂は、皆天に禀け、時と命とに由る、故に死後却りて天地に歸し、其虚無に復す。然れども外教の宗旨は但身に依りて行を立つるに在りて、身の元由を究竟するに在らず、説く所の萬物は象外を論ぜず、大道を指して本と爲すと雖も、儘に順逆起滅染淨の因縁を明さす、故に習ふ者は是れ權なることを知らず、是を執して之を了と爲す、今略擧げて之を詰せん。

【順逆起滅染淨の因縁】 眞如法性よる有様及び吾人の修行の方法に依りて此身心即眞如法の原理と契合する事の出来る有様。

【桀紂】 暴君、夏の桀王、殷の紂王【顔冉】 仁者、顔回、冉伯牛。

言ふ所の萬物は皆虚無の大道より生ずとせば、大道は即ち是れ生死賢愚の本、吉凶禍福の基たらん、基本既に其れ常に存せば則ち禍亂凶愚は除くべからず、福慶賢善は益すべからず。何ぞ老莊の教を用ひんや。又道は虎狼を育し、桀紂を胎し、顔冉を天し、夷齊を禍せり。何ぞ尊と名けんや。又言ふ、萬物は皆是れ自然に生化して、因縁に非ずとせば、則

【夷齊】 賢者、伯夷叔齊。

【丹藥】 練丹靈藥

【歎生の神】 出生直後の心。

【五德】 仁、義、禮、智、信。

【六藝】 禮、樂、射、御、書、數。

【六道】 又は六趣即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

ち一切因縁無き處にも悉く應に生化すべし、謂く、石も應に草を生ずべく、草も或は人を生じ、人も畜等を生ずべし。又應に生ずるに前後無く、起るに早晚無かるべし、神仙も丹藥に藉らず、太平も賢良に藉らず、仁義も教習を藉らずんば、老莊周孔何ぞ教を立て軌則と爲すを用ひんや。又皆元氣よりして生成すと云はば、則ち歎生の神は、未だ曾て習慮せず、豈に嬰孩にして、便ち能く愛惡驕恣することを得んや。若し歎有自然にして、便ち能く念に隨ひて愛惡等をなすと云はば、五徳六藝も悉く能く念に隨つて解せん。何ぞ因縁學習を待つて成ぜんや。又若し生は是れ氣を稟けて歎ち有り、死は是れ氣散じて歎ち無きものならば、則ち誰か鬼神と爲らんや。且世に前生を鑑達し、往事を追憶するものあり。則ち生前より相續したるものにして、氣を稟けて歎ち有るに非ざることを知るなり。又鬼神の靈知斷ぜざることを験せば、則ち死後に氣散じて歎ち無なるものに非ざることを知る。故に祭祀して求め禱ること典籍に文有り。況んや死して蘇る者幽途の事を説き、或は死後に妻子を感動せしめ、怨恨に讐報すること、今古皆有るをや。

外難じて曰はく、『若し人死して鬼と爲らば、即ち古來の鬼、巷路に填塞して合に見る者有るべし、如何が爾らざるや。』答へて曰はく、『人死して六道あり。必ずしも皆鬼と爲るに非ず、鬼死して復人等と爲る。豈古來の積鬼常に存せんや。且天地の氣は、本無地なり、人無知の氣を稟けば、安ぞ歎ち起りて知ること有らんや。草木も亦氣を稟く、何ぞ知ることあらざるや。又貧富貴賤、賢愚善惡、吉凶禍福、皆天命に由ると言はば、則ち天は命

【禮に安上云云】
孝經に上を安んじ民を治るは、禮より善きはなし。風を移し俗を易るは樂より善きはなし

【二】以下佛教中の人天教と小乗と權大乘とを辯斥す

【十惡】殺生、偷盜、邪淫、惡口、兩舌、妄語、綺語、貪欲、瞋恚、邪見
【五常】前註五德に同じ。
【此國】支那。

原 人 論

を賦するに奚ぞ貧は多く富は少く、賤は多く貴は少く、乃至禍は多く福は少きこと有るや。苟も多少の分は天に在らば天は何ぞ平にせざるや。況んや行無くして貴く、行を守りて賤しく、徳無くして富み、徳有りて貧く、逆は吉、義は凶、仁は天、暴は壽、乃至有道の者は喪び、無道の者は興ることあるをや。既に皆天に由らば、天は乃ち不道を興して道を喪す。何ぞ善に福し謙に益するの賞、淫に禍し盈を害するの罰有らんや。又既に禍亂反逆も皆天命に由らば、則ち聖人教を設くるに人を責めて天を責めず、物を罪して命を罪せず、是れ不當なり。然らば則ち詩に亂政を刺り、書に王道を讀し、禮に安上を稱し、樂に移風と號するも、豈是れ上天の意を奉じ、造化の心に順するものならんや。是に知んぬ。此教を専らにする者は未だ人を原ぬる能はざることを。

【二】 斥偏淺第二 佛の不了義 教を習ふ者

佛は淺より深に之くに、略して五等あり。一には人天教、二には小乗教、三には大乘法相教、四には大乘破相教、篇中にあり、五には一乘顯性教主にあり。一には佛、初心の人の爲に且く三世の業報、善惡の因果を説きたまふものなり。謂く、上品は十惡を造れば、死して地獄に墮し、中品は餓鬼に、下品は畜生に墮すと。故に佛、且く世の五常の教に類して、
天竺の世教の儀式は殊なりと、雖も、惡を懲し善を勸むることは別無し。亦仁義等の五常を離れ

【吐番】 西藏地方

【三途】 三惡道。地獄餓鬼畜生のこ

【施戒等】 布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅密等を指す。

【六欲天】 欲界の六天即ち四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天。

【四禪】 四の禪定を合して八定と云ふ。四定とは四禪の修行を經たるものを行ふべき修行。

【色界】 三界の一、穢惡の色を離ると雖も尙清淨の色質あるが故に色界と

ずして、而も德行の修むべき有り。例せば此國は手を齎めて擧げ、吐番は手を散して垂るも皆禮と爲すが如し。

五戒を持せしめ、

不殺は是れ仁なり、不盜は是れ義なり、不邪淫は是れ禮なり、不妄語は是れ信なり、酒肉を飲噉せざれば神氣清潔にして智を益すなり。

三途を免るることを得て、人道の中に生ず。上品の十善及び施戒等を修すれば、六欲天に生じ、四禪八定を修すれば、色界、無色界に生ず。

題中に天と鬼と地獄とを標せざるは、界地同じからずして、見聞及ばざれば、凡俗尙末を知らず。況んや背て本を窮めんや。故に俗教に對して且く原人と標せり。今佛經を叙すれば理宜しく具に列すべし。

故に人天教と名く。

然るに業に三種有り。一に惡、二に善、三に不動なり。報に三時有り。謂く、現報と生報と後報となり。

此教中に據れば業を身の本と爲す。今之を詰りて曰はく、『既に造業に由りて五道の身を受くとならば、未審、誰人か業を造り、誰人か報を受くる。若し此眼耳手足能く業を造らば、初て死するの人は、眼耳手足宛然たり。何ぞ見聞造作せざるや。若し心が作ると言はば、何者が是れ心なるや。若し肉心と言はば、肉心には質有り。身内に繋がる。如何が速かに

云ふ。この界の衆生は諸欲を離れ男女別なし。

【無色界】三界の一、此界に於ては凡て形色なく、識のみありて住す。

【五道】人間、地獄、畜生、餓鬼、修羅。

【初めて死するの人】命終直後此の人。

【肉心】肉圍心、形ありて體中に有るとす、心臓のこと。

【形骸の色】地、水、火、風。

【思慮の心】受想行識。

【成住壞空】我等の住する世界は成じて萬物住する様になれば亦壞して空となりかくして一定不動にあらず。

【空劫より以下】佛教の世界創造説

眼耳に入りて、外の是非を辨ぜんや。是非知らずんば、何に因りてか取捨せん。且心と眼耳手足とは俱に質圍を爲す。豈内外相通じ、運動應接して、同じく業縁を造ることを得んや。若し但是れ喜怒哀惡、身口を發動して、業を造らしむと言はば、喜怒哀等の情は乍ち起り乍ち滅して、自ら其體無し、何を將て主と爲して、業を作らんや。設し應に此の如く別別には推尋すべからず、都て是れ我身心、能く業を作る者なりと言はば、此身已に死せば誰か苦樂の報を受くるや。若し死後に更に身有りと言はば、豈今日の身心、罪を造り福を修して、他の後世の身心をして、苦を受け樂を受けしむること有らんや。此に據らば則ち福を修する者は屈甚だしく、罪を造る者は幸甚だし。如何が神理此の如く無道なるや。故に知んぬ、但此教のみを習ふ者は、業縁を信すと雖も身の本に達せざるを。

二に小乘教とは、説くらく、形骸の色、思慮の心、無始より來因縁力の故に、念念に生滅し、相續して窮り無し。水の涓涓たるが如く、燈の焰焰たるが如し、身心假に合して一に似、常に似たれども凡愚は覺らず、之を執して我と爲す。此我を實とするが故に、即ち貪て我を榮す。瞋害せんことを恐る。癡校す。等の三毒を起す。三毒は意を撃ち、身口を發動して一切の業を作り業成りては逃れ難し。故に五道苦樂等の身別業の、三界勝劣等の處を受く共業の、受くる所の身に於て還つて執して我と爲し、還つて貪等を起し、業を作り報を受け、身は則ち生老病死、死して復生じ、界は則ち成住壞空、空にして復成る。

空劫より初めて世界を成ずとは、頌に曰はく、空界に大風起りて、傍に廣がること數無量な

【十六洛又】洛は梵(一十六)一億に當る。即ち十六億萬由旬。

【須彌七金山】須彌山と七金山。

【泥埵】梵語。奈落に同じ譯して不可樂又は無喜樂といふ。地獄のこと。

【器界立】萬物所住の世界の出來。

【一増減】増劫、減劫を合して一増減と云ふ。非常に長き時間なり。

【二禪】色界四禪の第二。これに小光天、無量光天、極光天の三天あり。

【地餅】餅の如き地皮。

【林蔭】葡萄の如きものにして美味なり。

【糗米】穀食。

り、厚さ十六洛又、金剛も壞ること能はず。此を持界風と名く。光音金藏の雲、布いて三千界に及び、雨は車軸の如くに下るも、風に過られて流るることを馳さず、深さ十一洛又、始めて金剛界を作す。次第に金藏の雲、雨を注いで其内に滿ち、先づ梵王界、乃至夜摩天を成す。風、清水を鼓して、須彌七金等を成す。津濁は山地、四洲及び泥犁と、鹹海の外輪圍と爲る。方に器界立と名く、時に一増減を経たり。乃至二禪の福盡きて、人間に下生す、初め地餅林蔭、後に粳米を食うて銷せず、大小便利す。男女の形別れ、田を分ちて主を立て、臣佐を求め、種種差別あり、十九増減を経たり、前を兼ねて總じて二十増減して名けて成劫と爲す。

議して曰はく、空界劫の中是れ道教には之を指して虚無の大道を云ふ。然れども道體は寂照靈通にして、是れ虚無にあらず。老氏或は之に迷ふか、或は權に設けて務めて人欲を絶たしむるならん。故に空界を指して道と爲す。空界の主、大風とは即ち彼混沌の一氣なり。故に彼云ふ、道は一を生ずと。金藏の雲とは氣形の始め即ち大極なり、雨下りて流れずとは陰氣凝るなり。陰陽相合して方に能く生成す。梵王界乃至須彌とは彼天なり。津濁とは地なり、即ち一、二を生ずるなり。二禪、福盡きて下生すとは、即ち人なり、即ち二、三を生じて三才備れり、地餅より已下乃至種種とは、即ち三、萬物を生ずるなり。此れ三皇已前穴居野食し、未だ火化有らざる等に當る。但其時文字記載無きを以ての故に、後人傳聞明かならず、展轉錯謬して諸家の著作、種種異説あるのみ。佛教、又通じて三千世界を明して大唐に局らざるに縁るが故に、内外の教文、まこと同じからざるなり。住とは住劫、亦二十増減を經、壞とは壞劫、亦二十増減あり。前の十九増減に有情を壞し、後の一増減に器界を壞す。能壞は是れ火、水、風等の三災なり。空とは空劫、

【汲井輪】 車井戸
の釣瓶。

亦二十増減の中、空にして世界及び諸の有情無きなり。

劫劫生生、輪廻して絶えず、無終無始にして、汲井輪の如し。

道教は只今の此世界の未だ成らざる時の一度の空劫を知りて、虚無混沌の一氣等と云ひ、名けて

元始と爲して、空界已前に早く千千萬萬徧を經て、成、住、壞、空終に復始まることを知らず。

故に知んぬ。佛教法の中の小乗、淺淺の教へだも、已に外典深深の説に超ることを。

都て此身の本は是れ我ならざることを了らざるに由るなり。是れ我ならずとは、謂く、此

身は本色心の和合に因りて相を爲す。今推尋分析するに、色に地、水、火、風の四大有り。

心に、受を領納す。想能く好惡の事、能く像を取、能く造作する者なし、能く了別すの四あり。若し皆是

れ我ならば、即ち八我を成ぜん。泥んや地大の中に復衆多有り。謂ゆる三百六十段の骨、

一一各別なり。皮毛筋肉、肝心脾腎、各相是ならず、諸の心數等も亦各同じから

ず、見は是れ聞ならず。喜は是れ怒ならず。展轉して乃至八萬四千の塵勞あり。既に此衆

多の物あり、知らず定んで何者を取りて我と爲さん。若し皆是れ我ならば我は即ち百千に

して、一身の中多主紛亂せん。此を離れて外に復別法無し、覆覆して我を推すに、皆不可

得なり。然ち此身は但是れ衆緣假和合の相にして、元我人無きことを悟らば、誰が爲にか

食嗔し、誰が爲にか殺盜施戒せん。苦諦を、遂に心を三界有漏の善惡に滯せず、集諦を、但無

我觀智を修し、道以て食等を斷じ、諸業を止息し、我空眞如を證得し、諦乃至阿羅漢果を得

て、灰身滅智し、方に諸苦を斷すと。此宗の中に據れば、色心の二法及び貪嗔癡を以て、

【苦諦】 四諦の一。
【集諦】 四諦の一。

惑業の因によりて
得たる現在の苦
果。

貪瞋等の煩惱及善惡の諸業なり、この二は現在の苦報を集起する原因。
【遺諦】四諦の一。悟りの因たる修行。

【滅諦】四諦の一。無漏の道因によりて得る證果。以上四諦は聲聞所觀の理なり。

【八種の識】眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿頼耶識。

【阿頼耶識】漢譯に藏識又は種子識一切諸法の種子となるべきものを悉く藏す。

根身器界の本と爲す。過去未來、更に別法の本と爲す無し。

今之を語りて曰はく、『夫れ生を經、世を累ねて、身の本となる者は、自體須らく開斷無かるべし。今五識は縁を闕けば起らず、根境等を縁となす。意識は時ありて行せず、闕絶と無想定と無想天と。無色界天には此四大無し。如何が此身を持ち得て、世世絶えざらん。』是に知んぬ。

此教を專にする者も、亦未だ身を原ぬるあたはざるを。

三に大乘法相教とは、説くらく、一切の有情無始より以來、法爾として八種の識有り、中に於て第八阿頼耶識は是れ其根本なり。頓に根身、器界の種子と變じ、轉じて七識を生ず。皆能く自分の所縁を變現して、都て實法無し。如何が變するや、謂ゆる我法を分別し

つつ重習せし力の故に、諸識の生ずる時に、變じて我法に似たり、第六七識の無明覆ふが故に、此を縁として執して實我實法と爲す。患との人物を見るなり。夢知るべきのみにと

の者の如き、患と夢との力の故に、心、種種外境の相に似て現す、夢の時には執して實に外物有りと爲す。寤め來れば方に知る。唯夢の所變なるを、我身も亦爾り、唯識の所變なり。迷ふが故に、我及び諸境有りと執し、此に由つて惑を起し、業を造り、生死窮り無し

廣く前説此理を悟解せば、方に知る、我身は唯識の所變にして識を身の本と爲すことを。不了の義、後に破するが如し。

四に大乘破相教とは、前の大小乘法相の執を破して、密に後の眞性空寂の理を顯す。

破相の談は、唯諸部の般若のみにあらず。徧く大乘經にあり。前の三教は次に依つて先後す。

【所變の境云云】
作り出されたる境
界が安境ならば、
此を變出せし阿頼
耶識も亦安ならん

此教は執に隨つて即ち破す。定れる時節無し、故に龍樹は二種の般若を立つ。一には共、二には不共、共とは二乘同じく聞を信解す。二乗の法執を破するが故に。不共とは唯菩薩のみ解す。密に佛性を顯すが故に天竺の戒賢、智光の二論師、各三時教を立て、此空教を指す、或は云ふ、唯識法相の前に在りと、或は云ふ、後に在りと、今の意、後を取る。

將に之を破せんと欲して、先づ詰りて曰はく、所變の境、既に妄ならば、能變の識、豈眞ならんや。若し一は有にして一は無なりと云はば、此下却つて彼論をすなはち破す。則ち夢想と所見の物と應に異なるべし。異らば則ち夢は是れ物ならず、物は是れ夢ならず、寤め來りて夢滅して其物應に在るべし。又物は若し夢に非ざれば、應に是れ眞物なるべし。夢は若し物に非ざれば、何を以てか相と爲さん。故に夢みる時も則ち夢想と夢物と、能見と所見の殊なるに似たるも、理に據るときは、則ち同一虚妄にして、都て所有無きことを知る。諸識も亦爾り。皆假に衆縁に託して自性無きを以ての故に。故に「中觀論」に云はく、「未だ曾て一法として因縁より生ぜざること有らず。是故に一切の法は是れ空に有らざる無し。」又云はく、「因縁所生の法は我は説く、即ち是れ空なりと。」起信論に云はく、「一切の諸法は唯妄念に依つて而も差別有り、若し心念を離るれば、即ち一切の境界の相無し。」經に云はく、「凡そ所有の相は皆是れ虚妄なり。」又云はく、「一切相を離るるを即ち諸佛と名く」と。是に知んぬ。心境皆空は方には是れ大乘の實理なるを。若し此に約して身を原ぬれば、身は元是れ空なり、空は即ち是れ本なり。此の如き等の文は、大乘藏に徧し。今復此經を詰りて曰はく、「若し心境皆

無ならば、無と知るものは誰ぞ。又若し都て實法無くんば、何に依つてか諸の虚妄を現ぜん。且つ世間の虚妄の物を見るに、未だ實法に依らずして能く起る者有らず。若し濕性不變の水無くんば何ぞ虚妄假相の波有らん。若し淨明不變の鏡無くんば何ぞ種種虚假の影あらん。又前に説ける夢想と夢境と、同じく虚妄なることは誠に言ふ所の如し。然れども此虚妄の夢は必ず睡眠の人に因る。今既に心境皆空ならば、未審何に依つてか妄想せん。故に知んぬ。此教は但執情を破して、亦未だ明に眞靈の性を顯さず。故に『法鼓經』に云はく、「一切の空經は是れ有餘の説なり。」有餘とは餘りの義。『大品經』に云はく、「空は是れ大乘の初門なり」と。

上の四教展轉して相望めば、前は淺く、後は深し、若し且く之を習うて、自ら未了と知らば、之を名けて淺と爲し、若し執して了と爲さば即ち名けて偏と爲す。故に習ふ人に就いて偏淺と云ふなり。

【三】 直顯眞源第三 佛の了義實教

五に一乘顯性教とは、謂く、一切の有情皆本覺の眞心有り。無始已來常住にして清淨昭昭として不昧なり、了了として常に知る、亦佛性と名け亦如來藏と名く。無始際より妄想之を翳して、自ら覺知せず。但凡質を認むるの故に、耽著して業を結んで生死の苦を受く、大覺之を慧みて、一切皆空と説き、又靈覺の眞心清淨なること、全く諸佛に同じと

【三】 大乘佛教の本意を明す。【謂く、一切の有情云云】以下數行佛教の妙理を説破して餘りなし。【本覺】本來自然に存在する平等の法身の覺體。【眞心】諸の僞妄を離れて靈鑑不昧なるが故に眞心と云ふ。

【眞宗】 眞實なる宗旨。
【至教】 至極に達したる教。

【機】 根機。
【初教】 人天教。
【二、三】 二乗教。三、六乘法相教。

【四、五】 四、破相教。五、顯性教。
【若し上上根智云】 以上漸教、以下は頓教を明す。

開示したまふ。故に『華嚴經』に云はく、「佛子、一衆生として如來の智慧を具有せることなし、但妄想執着を以て、而も證得せず。若し妄想を離るれば、一切智、自然智、無礙智、即ち現前するを得ん。便ち一塵大千の經卷を合むの喻を擧げ、塵は衆生に況へ、經は佛智に況ふ。」次の後に又云はく、「爾時、如來、普く法界の一切衆生を觀じて、而も是言を作さく、奇なる哉、奇なる哉。此諸の衆生、云何が如來の智慧を具有し、迷惑して見ざるや。我當に教ふるに聖道を以てして、其をして永く妄想を離れて、自ら身中に於て、如來の廣大の智慧を見ること、佛と異なること無きを得しむ。」

評に曰はく、「我等多劫より未だ眞宗に遇はず、反つて身を原ぬることを解せず、但虚妄の相を執して、凡下を甘認す。或は人、或は畜、今、至教に約して、之を原ねて、方に本來是れ佛なることを覺る。故に須らく行は佛行に依り、心は佛心に契ふべし。本に返り、源に還りて、凡習を斷除し、之を損じ、又之を損じ、以て無爲に至らば、自然に應用恆沙なり、之を名けて佛と曰ふ。當に知るべし、迷悟同一眞心なるを、人なる哉。妙門原人此に至る。」

然るに佛、前の五教を説きたまひて、或は漸、或は頓、若し中下の機有れば則ち淺より深に至り、漸漸に誘接す。先づ初教と説きて惡を離れ善に住せしめ、次に二三を説きて染を離れ淨に住せしめ、後に四五を説じて相を破して性を顯し、權を會して實に歸す。實教に依つて修すれば、乃ち成佛に至る。若し上上根智なれば、則ち本より末に至る。謂ゆる初めより便ち第五に依つ

て、頓に一真心體を指す。心體既に顯るれば、自ら一切皆是れ虚妄にして本来空寂なるを覺る。但迷を以てするが故に、眞に託して起る。須らく眞を悟るの智を以て、惡を斷じ、善を修し、妄を息め眞に歸すべし、妄盡き眞圓なる、是を法身佛と名く。

【四】會通本末第四 前の斥くる所を會し同じく 一源に歸す。皆義たり。

【四】結論。前に斥くる所の儒、道、人天、小乘、法相を會通し眞顯の一源に歸す。眞性眞如法性

【覺不覺の二義】不生不滅の真心より見れば覺。生滅の妄想より見れば不覺。轉じて云云業相轉じて主觀及び客觀の境界現ず。【法執】六塵の智相と相續相とを指す。【我執】六塵の執取相と計名字相とを指す。

眞性は身の本たりと雖も、生起蓋し因由有り。端無く忽ち身相を成すべからず。但前宗の未了に緣る、所以に節節に之を斥く。今將に本末會通せんとす。乃至儒道も亦是なり。初め唯第五性教の所説、後段より已去、今將に本末會通せんとす。乃至儒道も亦是なり。節級は方に諸教に同じ、各註説の如し。謂く、初は唯一眞の靈性にして不生不滅、不増不減、不變不易なり。衆生無始より迷睡して自ら覺知せず、隱覆に由るが故に、如來藏と名く。如來藏に依るが故に、生滅の心相有り。此より方にはれ第四教、亦同じ。此よ。謂ゆる不生不滅の眞心と生滅の妄想と和合して、一に非ず異に非ざるを名けて阿頼耶識と爲す。此識に覺不覺の二義あり。此より下方に是れ第三法。不覺に依るが故に、最初に念を動するを名けて業相と爲す。又此念本無なる者とも覺せざるが故に、轉じて能見の識及び所見の境界の相現することを成す。又此境自心より妄に現することを覺らず、執して定有と爲すを名けて法執と爲す。此より下方に是れ第二小。此等を執するが故に、遂に自他の殊なるを見て、便ち我執を成す。我相を執するが故に順情の諸境を貪愛して、以て我を潤さんと欲し、違情の諸境を瞋嫌して相損惱せんことを恐る。愚癡の情、展轉增長す。此より下方に是れ第一人天乘教中、亦所説に同じ。

【心神】 ところ。

【中陰】 また中有死して後次生に至るまでの間此間に次生を受くる緣定まる。

【引業】 二業の一。總報の果體を感得する業のこと。

【滿業】 二業の一。別報を招感する業前世の業によりてこの差別の果報を圓滿すること。

故に殺盜等の心神、此惡業に乗じて地獄鬼畜等の中に生じ、復此苦を怖るる者有り、或は

性善なる者は施戒等を行するの心神、此善業に乗じて、中陰を運んで母胎の中に入る。此

り下方に是れ儒道二氣を稟け、質を受く、彼所説は、氣を以て氣は則ち頓に四大を具し、漸に

教、亦所説に同じ。氣を稟け、質を受く、本と爲すを會す。十月満足して生れ來るを人と名

諸根を成じ、心は則ち頓に四蘊を具し、漸に諸識を成す。身心各其本有り、二類和合して方に一人

く。即ち我等が今の身心是なり。故に知んぬ。身心各其本有り、二類和合して方に一人

と成ることを。天、修羅等大いに此に同じ。然れども引業に因りて、此身を受け得ると雖

も、復滿業に由るが故に、貴賤貧富、壽夭、病健、盛衰、苦樂あり。謂ゆる前生の傲慢を

因と爲して、今貴賤の果を感ず。乃至仁は壽、殺は夭、施は富、慳は貧、種種の別報具に

述ぶべからず。是を以て、此身は或は惡無くして自ら福し、善くして自ら福し、不

仁にして而も壽、不殺にして而も天等の者あり。皆是れ前生の滿業已に定まるが故に、

今世の所作に因らずして、自然にして然るが如し。外學の者、前世を知らず、但目に觀る

ところに據りて、唯自然を執す。彼所説は、自然もて復前生に少者は善を修し、老いて惡を

造り、或は少うして惡に、老いて善なるものあり。故に今世少小にして富貴にして樂み、老

大にして貧賤にして苦しみ、或は少うして貧苦にして老いて富貴なる等あり。故に外學の

者、唯否泰、時運に由ることを執す。彼所説、皆天命。然れども稟くる所の氣、展轉して本

【細】三細なり。即ち阿頼耶識が根本無明の力に依りて初めて發動する業、轉、現の三相

【業】三細より生じたる六種の麤なる相。迷の結果なる相。迷の即ち智分てるもの即ち智相、相續相、執取相、計名字相、起業相、業繫苦相なり。

【道流】學道の流輩。

所現の境に屬す。是れ阿頼耶の相分の所攝なり。初一念の業相より分れて心境の二と爲る。心既に細より麤に至り、展轉妄計して、乃至業を造る。前の叙列境も亦微より著に至り、展轉變起して、乃至天地あり。

即ち彼の始め、大易より五重運轉して乃ち太極に至り、太極、兩儀を生ず、彼の自然大道を説くは此眞性を説くが如くなれども、其實は但是れ一念能變の見分なり。彼に元氣と云ふは、此一念初めて動ずと説くが如くなれども、其實は但是れ境界の相なり。

業既に成熟して即ち父母に従つて二氣を稟受し、業識と和合して人身を成就す。此に據れば則ち心識所變の境、乃ち二分と成る。一分は即ち心識と和合して人と成るも、一分は心識と和合せず、即ち是れ天地山河國邑を成す。三才の中、唯人靈なる者、心神と合するに由るなり。佛、内の四大と外の四大と同じからざるを説く、正に是れ此なり。衰れなる哉、寡學、異執紛紛たること。語を道流に寄す。成佛せんと欲せば、必ず須らく洞かに靈細本末を明にして、方に能く末を棄てて本に歸し、心源を遍照すべし。盡盡き細除こり、靈性顯現して、法として達せざる無きを法報身と名け、應現して無窮なるを化身佛と名く。

原 人 論 終

宗門無盡燈論 品目

卷首

自序

卷之上

宗山第一
信修第二

現境第三
實證第四

透關第五
向上第六

卷之下

力用第七
師承第八

長養第九
流通第十

附

行持論

錄

品

目終

【宗門】 正宗記の略に、古の人、禪門を謂うて宗門と爲すことは、亦龍樹の意ならくのみと、亦わが宗門は乃ち釋迦文佛教の大宗正趣なり又承して、その無上の宗趣を究む、之を宗門と謂う、教述の外に尊ぶ。

【無盡燈】 維摩經第四に曰く、譬へば一燈をして、百千燈を然すが如く、冥きものは皆明に於て、明終に盡きず。

【集腋】 諱は天眞京師相國寺の塔頭玉龍院に住し、相國寺に出世す。この論の述者東嶺に嗣ぐ。文化八年寂す。

【序】 これは自序

宗門無盡燈論 序

禪道の要とする所、頓に在るのみ。乃ち石鞏の馬祖に見ゆる、高亭の徳山に見ゆる、是れ頓の頓なる者なり。若し夫れ雲嶺、百丈に在ること二十年、脇席に著けず、單單荷負す。後に樂山に到りて始めて擔を卸すことを得たり。雪峯三たび投子に到り、九たび洞山に登り、遂に機を徳山に投ず。後に岩頭、點檢一せられて、方に始めて道を得、道を徹し、成す。知んぬべし頓に遲速あり、大小あることを。參學の者、大いに須らく仔細にすべし。世澆季に當つて、人人個個、陰入障重、般若の緣薄し。纔に一知半見を得て、便ち以て足れりと爲して、傍に許多の言句を學得して、未だ嘗て足實地を踏著せず、妄に自ら師位に據りて、自ら瞞じ人を瞞す。悲しい哉、是れ不老人の斯論ある所以なり、宗綱を提挈し、蘊奥を指示す。誠に謂ゆる霧海の南針なる者か。老人戢化、門下の諸彦、相與に校考し、因つて梓に上して、燈燈盡くること無けんを欲す。余曾て左右に親炙するを以て、一言其端に辨ぜよと請ふ、謹辭すべからず。故に其大綱を叙ぶること也斯の如し。寛政庚申初夏穀旦、前相國集腋天眞撰す。

宗門無盡燈論 序

【初】 第一宗由。

【次】 第二信修、次下目錄の如し。

若し此論を見んと欲せば、初より終に至るまで、一一審細に熟徹すべし。己が所好に任せて、只一語一編を以て是と爲ること莫れ。初に我宗の來由を辨ず、別に仔細あり。次に信心修行の様子を知る。第三小知小見の錯を辨ず。第四須らく眞實見性は、只大疑大信の中に在つて、知解分別を加ふべからず。時節到來すれば、自然に現前することを知るべし。這般の田地是れ一論の體根なり。見性の一事之を明むる者は易く、動靜逆順の上に於て、徹底受用する者は難し。請ふ這裏に到つて切に精彩を加へよ。然らずんば佛祖の言教、皆文字に落ちて眞の活法に非ず、眞實脚跟を鍊り得て、念念相續して事事現前する時、方に好し言句に參透するに。第五、常に平生の受用を試む、専ら正念相續を貴ぶ。其行李受用の處、種種淺深疊細あり。最も分辨し難し、此旨を知らんが爲に、審細に佛祖の言句を觀察して、切切に須らく其妙處を得んことを思ふべし。是を透關の眼と謂ふ。第六、佛祖の關鎖一一透得して後、深く佛祖向上の一著子あることを信じて、益修し、益行じて退位を生ずること莫れ。此事最も容易ならず、但己に就いて實を省み、反反覆覆、古人難透の話頭に參得すべし。祖祖傳來の宗旨、斯中に秘在す。然りと雖も若し明師の鍛鍊に非ずんば、争か少分の相應を得ん。第七、其見解の淺深に隨ひ、其受用の親疎に隨つて、發する所の力用大いに殊異あり。今之も古も、同見同行の人、道德別あるは是を以てなり。第八、師承の一事、法恩を感荷して、設ひ身命を失するも之に孤負すること莫れ。歷代祖祖の功恩を并せて、一一齊等にして、粉骨碎身を酬ゆるに足らず、但一個兩個眞正の種艸を打出

【京洛】大佛方廣
寺前の大和屋とい
ふ歸依者の家。

して、始めて報恩の分あらん。第九、或は山隱或は市隱、一切事一切處に於て、但長養を以て最も第一と爲す。世塵の妄縁に牽かるること莫んば、尙古人親切の様子を見ん。第十、流通は全體修行の始終なり。其初是に因つて發心し、是に因つて差別の妙處を求め、是に因つて越格の生涯を成じ、法窟の瓜牙を握り、奪命の神符を懸け、無礙圓融自在神通、羅に入り細に入り、眞に入り俗に入り、一個兩個眞正の種草を打出して、兒孫を相續して、永く照世の大燈明と作す。其餘光發して一切に及び、利益窮無し。生生世世、常に六道四生を以て我住處と爲し、自在解脱自在利益、皆此悟後の修行越格の妙處あることを信じて、百鍊千鍛するが致す所なり。

是の如く信解し、是の如く成熟して、始めて謂つべし一個の胡種族と。予見道成熟の後、古人差別の妙處に於て、未だ自在を得ざるが故に、京洛河東の邊に遁居して、日夜苦修すること百餘日、慚愧勇猛の心、深く骨髓に透る、従前の所願已に手に入ると雖も、只身命を顧みず用心度に過ぐるが爲に、五臟齊しく勞して、大いに病患を感ず。向後又任運に之を養ふと雖も、容易に治し難し、却つて外邪に侵され、或は世縁に惱まれて、病床に苦むこと三回、已に愈えて復發す、遂に三年に及ぶ。醫師手を拱いて曰はく、此病一旦設使平復するも、命三五年の間を過ぐべからず。是に於て思惟すらく我命惜むに足らず、只恨むらくは未だ自利利他の素願を果さざることを。却つて従前の艱苦を虚うせん。終に聚法師の刑に臨んで論を著すに擬して、急に此論を述ぶ、日夜蒲團に打坐して、傍に筆

【郵林】 江戸藏前の伊勢屋長治郎無文齋無染居士、師に參する人。
【半田】 醫師泰菴

観を置き、随つて得れば随つて筆す、僅に三十日にして草稿を成す、之を名けて宗門無盡燈論とけふ。蓋し一燈分れて百千燈、燈燈無盡の義を取れり。是従り恬然として坐臥之が命數に任す、時に病日に輕微なることを覺ゆ。又半載を経て自ら生くべきことを知る。是を以て重ねて思へらく、我病起たすんば、此論を老師に呈して、當に若し取るべき處あらば永く後人の鞭策と爲さん。若し取るに堪へずんば、速に丙丁童に付せんと請ふべし。今已に病起つべきときは、則ち活人現在す。何ぞ死葛藤を用ひん。是に於て將に之を焚かんとす。未だ果さざるの間、老師親しく書を賜ひ、再び往いて之に見ゆ。室中語話する次で、言此論に及ぶ。遂に師に對して讀むこと一返、老師謂へらく、以て後學の一助と爲すべしと、堅く制して焚くこと莫からしむ。是を以て又囊中に藏むること久し。

茲に信士郵林氏、半田氏等の懇請に依つて、已むことを得ず傳寫することを許す、但文字言句は、解脫の根本、繫縛の根本なり。其人に非ず、其時に非ずんば、醍醐變じて毒藥と作らん。乞ふ深く之を察して他見を許すこと莫れ。若し此嚴制に違せば、長く我同志に非ず。況んや我多病未だ校正を加ふること能はず、是書豈定本と爲るに堪へんや。他時考勘を待ちて、以て定本と爲すべきのみ。

時に寛延四年辛未秋九月不菴主圓慈、武陵淺草無文齋に書す。

宗門無盡燈論 卷之上

不菴主圓慈撰す

【一】 宗由第一

○本書は東嶺禪師
 圓慈の撰にして人
 多く文字に拘泥し
 て足實地を踏著せ
 ざるを慨し、十門
 を分ちて宗門の由
 來より説起し、實
 地見證は師承によ
 り信修せざるべか
 らざる所以を説示
 す。著者圓慈は東
 嶺と號す、江州小
 幡驛中村氏の子な
 り、法を自隱慧鶴
 禪師に嗣ぎ、寛政
 四年二月九日寂す
 伊豆國龍澤寺を創
 建し、後に尾州大
 山瑞泉寺の支院輝
 東菴を中興して居
 す。不菴は初の
 名なり、後に自ら
 三光窟と稱す、こ
 の論は師年三十一
 歳の寬延四年に述
 ぶる所なり

大覺世尊初め生下し來りて、周行七步、一手は天を指し、一手は地を指して、大獅子吼して曰はく、『天上天下唯我獨尊。』と。咄、却つて箇の消息を露す。雲間道く、『我當時若し見ば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫却せしめん。貴ぶらくは天下太平を圖ることを。』應菴拈じて云はく、『此れ便ち是れ初生下より帯び來る。一星の蠱毒子、雲門之に申つて、便ち落處を知る。拈じ來り用ひ得て恰好なり。』と。若し懸懸にして休し去らば、佛法斷滅せん。終に其榜様を示して、出家苦行、再び雪山に入つて、端坐六年、忽ち一夜豁然として大悟、歎じて曰はく、『奇なる哉、一切衆生、如來の智慧德相を具有することを。』又曰はく、『一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛。』と。是は則ち是、可惜許。其所得の法門、所證の境界、言語の及ぶ所に非ずと雖も、且方便結集する、是を大方廣佛華嚴經と名く。是れ根本法輪、一代藏經の、共に歸止する所なり。只上根の者のみ有つて通達す。中下の類、其匹偶に非ず。是を以て、佛鹿野園に於て、四諦の法輪を轉じ、次に十二因緣、六波

のみ、この一篇は吾宗的の相承して特に佛心宗と稱す大いに自餘の宗に異ることを明す【周行七步】世尊降生、一手は天を指し、周行七步、四方を顧して、われ一切天人の中に於て、最尊最勝と。

【雲門】名は玉眞法を雪峯存に嗣ぐこの語は五燈會元師の傳に出づ。

【應菴】名は曇華法を虎丘隆に嗣ぐ【一星】ひとひねり。

【恁麼】天上天下唯我獨尊とばかり云うて、その儘すて置かば。

【奇なる哉】華嚴經如來出現品。

【一佛】この頃は古の明師が、諸經論了義の旨を採擷して、結して作る【法門】法は軌範門は能通。

門は能通。

羅蜜の法を説く。是を三乗と道ふ、只法門偏枯、志行不劣なるが爲に、又方等彈明の教を説く。此窠窟を破つて、二乗の類を以て、疥癩野干に比す。意三藏の學者、回心向大して、根本乘に歸せんことを要す。是故に別教大乘あり、二乗は聞いて其志を失し、菩薩は進んで其旨を究む。是故に維摩經に曰はく、『一切の聲聞、是不可思議解脫の法門を聞いて、皆應に號泣して、聲三千大千世界に震ふべし。一切の菩薩、應に大いに欣慶して、此法を頂受すべし。』後來重ねて般若の法門を説く。二乘三藏、上下混雜して、空法を淘汰す。謂ゆる小空を引いて大空に歸し、偏空を呵して圓空に入り、假空を破して眞空に達す。是の如くすること多年、時到り功熟して、忽ち圓頓實相の法門を示す。直に是れ惡水驀頭に洒ぐ、三乘五性齊しく一佛乘に打入了り。然りと雖も、信を以て得入す、己が智分に非ず。是故に遠記を受く。直下即佛と説かず、只華嚴と同一に信修して、涅槃と同一に證入せんことを要す。大いなる哉、佛法、甚深にして極め難し。師は十力、調御、弟子は是れ賢聖僧、所説の法門、豈是れ淺近ならんや。提携教示、又且微妙なり、人人無漏の眞性を悟り、箇箇不退の法忍に住す。既に是れ恁麼にし去ると雖も、奈何せん別に向ふの些子あることを。末後一日、靈山會上に在して華を拈じて衆に示す。百萬の大衆措くこと罔く。只迦葉尊者のみあつて、破顔微笑す。佛言はく、『吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相の法門あり。摩訶迦葉に附屬す。』と。是れ我宗別に生涯ある所以なり。教外別傳、復苟も來らず。梵王、靈山に至りて金華を以て佛に獻じ、身を捨てて牀座と作す。衆の爲に説法せんこ

【方便】 方法便宜
 【大方廣】 方法身般
 若解脫を表す。
 【平等】 大乘は廣
 く平等の理を談す
 故にいふ、十六年
 門。
 【彈河】 二乗を斥
 け彈河貴して、大
 乘菩薩道に歸せし
 む。
 【維摩經】 第六不
 思議品に出づ。
 【般若】 十四年間
 の説。
 【五性】 無種、聲
 聞、緣覺、不成、聲
 佛。
 【遠記】 法華授記
 品等。
 【華嚴】 初發心便
 成正覺。
 【淨業】 眼見佛性
 【十力】 是處、非
 處、知業、三昧、
 如根、知欲、至道
 宿命、天眼、無漏
 賢聖、三賢七聖、
 不退。梵には阿鞞
 跋致。
 【拈華】 五燈會元
 一に出づ。
 【嵩少】 嵩山熊耳

とを請ふ。佛座に登り華を拈す。人天皆拈くこと同し。金色の頭陀のみあつて、獨破瀕微
 笑す。世尊云はく、「吾に此正法眼藏あり、大迦葉に附屬す。汝當に善く護持すべし。」と。
 後來阿難、迦葉尊者に問うて曰はく、「佛、金襴を傳ふるの外、別に箇の何の法をか傳ふる。」
 迦葉、阿難を召す。阿難時に應諾す。迦葉曰はく、「門前の刹竿を倒却者せよ。」難、言下
 に大悟す。是從り次第に傳ふ。三に商那和修、四に優婆塞多、第五提多迦、第六彌遮迦、
 七祖婆須蜜、八佛駄難提、九に伏駄蜜多、第十脅尊者、次に富那夜奢、次に馬鳴尊者、次
 に迦毘摩羅、次に龍樹大士、次に迦那提婆、次に羅睺羅多、次に僧伽難提、次に迦耶舍多、
 次に鳩摩羅多、二十闍夜多、次に婆修盤頭、次に摩拏羅尊、次に鶴勒那尊、二十四獅子、
 轉じて正法眼を以て、婆舍斯多に附す。信衣法偈を并せて、薪盡きて色轉た鮮なり。次
 に不如蜜多、次に般若多羅、二十有八傳して、菩提達磨に至る。得得として茲土に來つて、
 佛心印を單傳す。嵩少九年の室、此衲僧の様を示す。二祖の可大師、三禪して位に依つて
 立つ。初め臂を斷つて悟入す。後髓を得て衣を受く。三祖を僧璨と名け、四祖を道信と曰
 ふ。五祖弘忍に至つて、南北頓漸を分つ。第六代衣を傳ふ。慧を以て佛事を能くす、本文
 字を知らず、今佛法を會せず。南嶽に懷讓あり、青原に行思あり。江西と湖南と、兒孫大
 下に滿つ。金雞一粒の粟、震日別路なし。足下馬駒を出して、天下の人を踏殺す。百丈
 師表の閣、三日耳曾て聾す。黃臂聞いて舌を吐く。江西宗風を立す。臨濟の金剛王、照用
 一時に行ず。誰か知らん正法眼、臆驢迹に滅却することを。興化一瓣の香、辛苦して兒孫

岸少林寺等をいふ
 【南北】南は慧能
 北は神秀
 【以慧】慧は法慮
 を以て衆生を濟す
 能は佛事を能くす
 【江西】馬祖、湖
 南は石頭
 【金雞】般若多羅
 の譏記に、此頌あ
 り
 【一瓣香】嗣法の
 香
 【忍】無生法忍
 【一拳】臨濟三頓
 棒の頌、以下諸祖
 の故事
 【紫野】大燈國師
 の故事。五條橋下
 の長養
 【衡梅】雪江深禪
 師
 【黑豆】黑豆勘定
 といふ貌、經卷の
 文字を數ふるを罵
 る
 【四子】妙心の四
 派、景川悟溪特芳
 東陽
 【無難】至道と號
 す恩堂寔に嗣ぐ
 【正受】諱は慧端
 無難に嗣ぐ

を蔭ふ。南院棒下の忍、機に臨んで師に譲らず。風穴貓兒孳し、養ひ來つて蟲行を絶す。
 樹に上る安身の法、切に忌む外甥に許すことを。正當甚摩とか説く、首山拂袖して去る。
 汾陽西河の獅、杖を擧げて慈明を逐ふ。所得常情を出づ、股に錐して宗風を繼ぐ。楊岐
 の栗棘蓬、白雲獨り提持す。一拳黃鶴樓、一踢鸚鵡洲。意氣意氣を添へ、風流也風流。演
 祖一び咬破して、百味頰に具足す。通身白汗を出して、大いに東山の風を立す。關悟脚下
 を看よ、他獨り我宗を滅す。虎丘の省數錢、別に爪牙の在るあり。應菴腦後の鑊、且喜す
 らくは正脈の通することを。蜜菴の破沙盆、却つて妙喜の枕を高うす。傳衣松源に歸す、
 正路上の黑豆。運菴衣を却くるの機、端的虚堂に付す。稽首す大應師、東海第一の祖。路
 頭再び經過す、明明たる日多の記。紫野吹毛の劍、二十年琢磨して、佛祖を截斷する手、
 却つて關山の爲に奪はる。柏樹賊機を唱へ、一味に向上を弄す。精鍊三十霜、一個の授翁
 を得たり。無因久住の相、天下の大眼目、蒼龍の珠を奪ひ得たりし日峰古今に耀く。宗風
 義天に逼る、唱へ高うして機、彌峻なり。衡梅毒果を結ぶ、刻苦二妙を盡す。正眼黑豆に
 和して、四子の腸を惱害す。東陽天然の器、氷蘗無盡藏。大雅の春を吹き起して、雲臨百
 花香し、門庭孤り屹立、顛骨兒孫を蔭ふ。功甫の新條章、切に忌む落草の談。先照通身の
 鐵、辣手幾く歳をか經。以安猛烈の機、七座破の精神、東漸履踐殊に、日輪曉天に昇る、
 終日庸山に隠る、虚空半身を現す。諸方の輕可を憎み、怨恨一子を責む。禪門二十四、大
 半其傳を失す。關山の老愚堂、兒孫今尙在り。無難の三尺劍、斬り盡して身を留めず。正

【鶴林】 白隠の別號なり、正受端に嗣ぐ。

【忿赫】 口にて人をこばむ。

【問うて曰】 自問自答。

【去華】 方便品。
【佛乘】 一佛乘。
【破法】 一佛乘の法門。
【不信】 佛心見性を。

【維摩】 文殊問疾口出。

【表德】 内心を表し他に示すが故に。

【大遮】 大乘法門情識妄見。

【禪門】 教外別傳。

【三摩地】 一切禪定心を攝するをいふ。

受之を奪却して、磨礱すること四十年。密室風を通ぜず、佛祖の妙を扶絶して、我鶴林を捉敗す。全身毒瘡を病む、祖門頼に汝あり。宗風好し流通するに。長く兒孫を帯累して、忿赫幾く時か休せん。汝が斯疑を斷ぜんが爲に、且く正續の師を續ぐ。諸方承嗣の旨は、我得て知らず。問うて曰はく、『佛在世、百萬の賢聖すら、尙會すること能はず、唯迦葉のみあつて、破顔微笑す。滅後甚に因つてか會する者多き。』答ふ、『教乘より入る者は、智障多きが故に、皮に粘じ骨に著いて、脱體現成すること能はず、禪門より入る者は、初より智境を立せざるが故に、纔に撥轉するときは、則ち智境脱し易し。』曰はく、『然らば何ぞ先づ禪門を示さずして、却つて許多の教乘を説くや。』答ふ、『佛始めて出世、衆生信未だ熟せず。況んや西天無量の外道あつて、各異論を立して、邪解多途なり、若し教乘を説かずんば、恐らくは人の信するなけん。是故に、法華經に曰はく、『我即ち自ら思惟すらく、若し但佛乘を讚げば、衆生苦に没在して、是法を信すること能はず、法を破して信せざるが故に、三惡道に墮すと。今の禪學者、教乘を立せずと雖も、先づ教を以て信縁と爲し、及び修因と爲す。維摩經に曰はく、『只其病を除いて其法を除かず』と。正眼に看來れば、五時八教、三乘一乘、齊しく是れ祖師向上の一著子、汝が弊を下す處なけん。』問うて曰はく、『茲に法門あり、毘盧舍那神變加持と云ふ。祕密表徳を以て旨と爲す。師の先に示す所の者は、顯大遮情の理、未審、此法如何が禪門と比對せん。』答ふ、『如來自受用、三摩地の法門、既に譬喩言説を以て顯示すと雖も、尙衆生の會せざらんことを恐れて、再び大悲

【表相】 神變加持

【秘密】 見性眞如

【示事】 教乘事相

【法身】 毘盧遮那

【龍樹】 佛涅槃後

【終に】 この下將

大日如來密法の七

字恐らくは脱する

かと、原本の冠注

【七覺支】 擇法精

進輕安念行捨定喜

【無量】 八萬四千

方便を以て、此表相を示す。是故に、理を説くときは則ち遙に諸法に超ゆ。事を示すときは則ち冥に實相に合ふ。法身を以て教主と爲す。謂ゆる自性所具の法門、是れ説法の相なり。輪圓具足の境界、是を曼陀羅と謂ふ。此は是れ如來、神變加持の力を以て、密に法身の徳を表す。

昔龍樹大士南天の鐵塔の前に至つて、七粒の白芥子を加持して之を打つ。塔門豁然として聞く。龍樹入らんと欲す、四天王之を拒む。禮拜懺謝して、終に門を入ることを得たり。時に金剛手菩薩之が爲に傳授す、龍樹一憶持して忘れず。出で來つて結集して傳へて今に至る。謂ゆる南天とは、虛明清淨の義。鐵塔とは、根本無明なり。七粒とは、七覺支。白とは、清淨の義。芥子とは、一念の義。加持とは、觀照の義。塔門開くとは、三昧發得の義。四天王之を拒むとは、四邊歡喜所得の心あつて之を護するが故に、尙自性を隔つるの義。禮拜懺謝とは、放身捨命の義。入得とは、證入の義。大日とは、自性の義。密法とは、自性の義。密法とは、自性所具の法門なるが故に、自性の説と曰ふ。金剛手とは、後得智の義。傳授とは、解了の義。憶持不忘とは、一び得て永く失はざるの義。出で來るとは、菩薩所得の境界に住せざるが故に、衆生を利益するが故に。若し能く虛明清淨心の上に於て、根本無明に向つて、七覺支の淨念を以て觀照するときは、則ち無明忽ち破裂して、自性現前す。是時に當つて、大いに歡喜を起し、所得の心を執持するが故に、自性を見徹すること能はず。得失是非、一時に放捨して、始めて自性を見徹す。無量の法門、

【造次】急遽荷口
 【顛沛】傾覆離離
 【莊嚴心】弘法大師
 【師の十住心】等なり
 【此法】別人の境
 界に非ざる處の法

【超過】一超直入

【意相似】富家の財を論ずると己財を與ふると。

煥然として目前に満てり。然りと雖も、後得智を以て解了せざれば、佛境差別の法を知ること能はざるが故に、能く法門を解了する者は、皆後得智の致す所なり。一回此法を見徹すれば、造次顛沛、行住坐臥、皆是れ大道、皆是れ法門、是を祕密莊嚴心と謂ふ。別人の境界に非ざるが故に、後人會せず、錯つて表相に著す。汝若し此法を得んと欲せば、先づ須らく見性すべし。見性せずして此法を得んと欲せば、是處あることなし。顯密の諸家、今我全く不足とは道はず。只途路に在つて、佛の妙境を論じ、自の分上に於て、證入すること能はず。法身すら尙得ず、何に況んや法身向上の事をや。

是故に、教乘は偏に途路の親疎を論じ、禪門は頓に途路の超過を示す。教乘は遙に成佛の妙境を説き、禪門は直に成佛の端的を試む。譬へば貧人の富家の財寶を論ずるが如し。論じ得て妙を盡すと雖も、自ら用ふるに能はず、何の所益かあらん。譬へば庶人の國王の尊貴を論ずるが如し。論じ得て妙を盡すと雖も、依然として是れ庶人なるのみ。若し國王の尊貴を望み、富家の財寶を羨んよりは、如かじ自ら獲得して好らんには。其求むる時に當つて、國王の尊貴を頼みず、富家の財寶を管せず、只自家に向つて、己が財寶を論じ、己が尊貴を試みて、之を求め之を辨じて、分に隨つて増進す。是故に、意相似たりと雖も、進修遙に別なり。若し經教を以て之を修すれば、多く教跡に滯る。何れの時か脱體現成することを得ん。譬へば商人の他の利を得る時の狀を守つて、自ら時を失すれば却つて利を得ざるが如く、利を得るに狀なし、得を以て貴しと爲す。譬へば將帥の他の功を

【守】 死守。

得る時の状を守つて、自ら時を失すれば却つて功を得ざるが如し。功を得るに状なく、得を以て貴しと爲す。全く状なしと道はず、只是れ死守せず。先づ他の底意を究めて、其方便を知り、時に應じ變を見て、取捨宜に隨ふ。

【會者】 夾山良遂等。
【談ず】 今時の者その口に談ずる所
【權乘】 方便乘。
【偏】 眞、偏は頓

我祖宗門下、教跡に依らず、別に意趣あり。應機接物、無礙自在なることも、亦復是の如し。若し全く富家の財寶を得んと欲せば、先づ須らく自心の富家に還す。無盡の法藏、自然に手に入らん。若し全く國王の尊貴を得んと欲せば、先づ須らく自心の國王に謁すべし。無上の尊貴畢竟して身に歸す、古來の教者、問是の如く會する者あり。是故に、教より入る者も亦少しと爲す。今時は一向然らず。其談ずる所の者は、盡く極妙窮玄、二乗を呵斥し、權乘を誘倒し、偏圓顯密、各箭鋒を争ふと雖も、點檢し持ち來れば、二乗の果證すら、尙未だ得ること能はず。何に況んや菩薩をや。一佛乘に於ては、夢にだも何ぞ曾て見ん。偏圓顯密、什麼の處にか在る、我祖宗門下の如きんば、又且然らず。直に方便を超えて、辛參苦修、纔に旨を得るときは、則ち顯密の佛法、一時に現前す。重ねて許幾の牢關を衝開して、却り來つて經論を見見るに、已自ら説くが如し。而して後教若の稠林を摧殘し、菩薩の道場を踢倒し、向上の些子を滅し、佛祖の正脈を斷ず。顯密都來、是れ閑妄想ぞ。法身智身、亦須らく倒退三千にして始めて得べし。

【法身】 十身中の終の二、佛身。
【智身】 妙智圓明諸法を決し通達無礙なり。

【一】信修とは信、心修行、此一篇は、吾宗特に大信心大修行を以て、一切の法門自の心性を具有すと信ずることを述ぶ。
【華嚴】出現品、十無量心を明す中の第九の相。

【地天の宮殿】四種天の中の世間天なり、今は初利天

【二】信修 第二

華嚴如來出現品に曰はく、「復次に佛子、如來の智慧、處として至らざることなし。何を以ての故に。一衆生として、如來の智慧を具有せざることなし。但妄想顛倒執着を以て、而も證得せず。若し妄想を離るれば、一切智、自然智、無礙智、則ち現前することを得ん。譬へば大經卷あり、量三千大千世界に等し。三千大千世界の中の事を書寫して、一切指

盡す、謂ゆる大鐵圍山の中の事を書寫すれば、量大地に等し。大地の中の事を書寫すれば、量大地に等し、中千世界の中の事を書寫すれば、量中千世界に等し、小千世界の中の事を書寫すれば、量小千世界に等し。是の如く、若し四天下、若し大海、若し須彌山、若

は地天の宮殿、若し欲界空居天の宮殿、若し色界の宮殿、若し無色界の宮殿、一一書寫するに、其量悉く等し。此大經卷、復量大千世界に等しと雖も、而も全く住して一微塵の中に在り。一微塵の如く、一切の微塵も、皆亦是の如し。時に一人あり、智慧明達にし

て、清淨の天眼を具足し成就す。此經卷の微塵の内になつて、諸の衆生に於て少利益なきを見て、即ち是念を作さく、「我當に精進力を以て、彼微塵を破り、此經卷を出して、一切衆生を饒益することを得しむべし」と。是念を作し已つて、即ち方便を起して、彼微塵を破り、此經卷を出して、諸の衆生をして、普く饒益を得しむ。一塵の如く、一切

の如く、一切の微塵も、應に知るべし悉く然ることを。佛子、如來の智慧も亦復是の如

【學道】 五根五力
八正道三十七助道

【圓覺】 卷三編勒
章。

【圓覺】 大圓覺明
妙眞性。

【善知識】 外縁、
【頓漸云云】 修行

の上に於ては頓漸
あり、然れども畢

竟優劣なし。
【正修行】 一乘圓

頓。
【根に】 凡夫聖人

の隔なし。
【此道】 見性道。

【修道】 見性道。
見性道。

し。無量無礙、普く能く一切衆生を利益して、具足して衆生の身中に在り、但諸の凡愚妄想執著して、不知不覺にして、利益するを得ず。爾時、如來、無障礙清淨の智眼を以て、普く法界の一切衆生を觀じて、而も是言を作さく、「奇なる哉奇なる哉。此諸の衆生、云何が如來の智慧を具有して、愚癡迷惑して、不知不見なる。我當に教ふるに聖道を以て、其をして永く妄想執著を離れ、自ら身中に於て、如來廣大の智慧と、佛と異なることなきを得しむべし」と。即ち彼衆生をして聖道を修習せしめて妄想を離れしむ。妄想を離れ已つて、如來無量の智慧を證得して、一切衆生を利益し安樂ならしむ。

又圓覺了義經に曰はく、「善男子、一切衆生、皆圓覺を證す。善智識に逢ひ、彼所作の因地の法行に依つて、爾時に修習するに、便ち頓漸あり、若し如來無上菩提正修行の路に遇へば、根に大小なく、皆佛果を成ず」と。若し此道を成ぜんと欲せば、先づ須らく大信根を具すべし。何をか信根と謂ふ。謂ゆる、諸佛の心性、及び無量の智慧、本來具足すること信じ。根に大小なく、機に智鈍なく、修する者は即ち得ることを信じ。定力の熟するに隨つて、諸の現境あり、錯つて證悟と爲れば、二乘外道の部類に墮することを信じ。時に到り功充つれば、佛性頓に現前して、知解分別を假らざることを信じ。佛性頓に現前すと雖も、宗師に見えず、重關を透らざれば、一生を錯り了ることを信じ。重關を透破し宗旨に通達すと雖も、我宗末後向上の些子、別に生涯あることを信じ。些子向上の一著子を得ると雖も、各履踐に隨つて、力用等しからず、大いに子細あることを信じ。師承の一事、

最も道理あり、務めて正宗を繼いで、孤負すべからざることを信じ、脚下より去つて、生唯此れ養道の一法なることを信じ、向上の一著子を提持して、將來に流布して斷絶せしむることなきことを信ず。是の如く決定心を生じ了つて、大誓願を發すべし。謂ゆる見性大徹せずんば畢竟じて休せずと誓ひ。寧ろ永劫に沈淪すべくとも一念の退意を生ぜずと誓ひ。寧ろ地獄に入るとも諸方の教惑を受けず、乃至諸の現境を認めて、二乘外道の見に墮せずと誓ひ。見性若し徹せば、永く菩薩の行を起すべしと誓ひ。佛祖の言教、一一明了ならずんば措かずと誓ひ。向上の些子に徹せずんば措かずと誓ひ。佛祖の力用に等しかんざれば措かずと誓ひ。錯つて卑劣の心を生じて、宗風を辱しめずと誓ひ。不實の心を拂んで而も人情に貪著せずと誓ひ。一個兩個眞正の種草を打出して、宗風を繼がしめ、以て佛祖の恩を報じ、及び生生世世、菩薩の行を行じて、畢竟じて一切衆生を度し盡さんと誓ふ。

【通願】 四弘誓願
 【別願】 各自發願
 【任意】 各各の我意
 【懇禱】 誓佛願祖

【合論】 唐の李長者の造る所。

是の如く大誓願を發し了つて、而も諸佛の誓願を以て、己が誓願と作し、祖師の志行を以て、我志行と作し、通願別願、意に任せて發起して、日々に懇禱し、時時に思惟せよ。譬へば風輪の能く大地を持するが如く、大願の風輪、依く佛地を持す、譬へば順風に舟を行るが如く、法性の大海に、般若の舟航あり、若し大願の智風に非ずんば、終に動ずること能はず。汝が中路にして三乗の心に滞在し、外道の見に墮して、佛祖の淵源を窺むること能はざる者は、願力微劣なるが爲なり、華嚴合論に曰はく、『初心の上、一切諸佛共に乘

【善く物を】一切衆生。

【煩惱】根本無明

【行】悲智願行。

【諸業】三毒五欲
【趣】六道四生。

する所の門を圓滿するを、一切智乘に乗すと名く。若し悲智願行、毫釐も佛に似かざれば、信心も亦成ぜず。何に況んや佛の所住に住せんとや。又曰はく、『若く志業毫釐も、如來所修の法身悲智の願行に似かざる者は、初發心の菩薩と名けざるが故に。』この

請ふ、學道の人、先づ此心を發せよ。大信を發する者は、發して修せずと雖も、尙福田を成じて、終に當來の勝縁を起す。何に況んや進修増長して、分に隨つて道を得るをや、是故に、修行の正路には、願を以て本と爲す。願力深重なる者は、天魔外道も動ずること能

はざる所なり。願力微弱なる者は、多く障礙に遇ふ。夫れ願力とは、大悲を本と爲す。凡そ自利を求むる者は、皆小見に止まる。譬へば商人の己が榮を圖る者は、先づ小財に誇り、普く物を惠まんと欲する者は、終に小を以て足れりと爲さるが如し。是故に、四弘の願行、先づ度生を以て、第一の誓と爲し、而して自性を明めて、煩惱の本を斷じ、普く法門を學

んで、菩薩の行を起し、悲智圓滿する、是を佛道と謂ふ。當に知るべし、大悲は、實に成佛の基本なり、熟一切衆生を見るに、本を捨て末を逐うて諸業を貪著し、此に死し彼に生じて、諸趣に輪廻す。天上の五衰、人間の八難、餓鬼畜

生、地獄の極苦、試に彼心を以て、我心に比況して看よ。況んや又一切衆生は、皆是れ生生の父母、世世の兄弟なり。其恩愛に於けること、恰も今日の如し。之を察し之を慮るに、切に須らく大悲心を生ずべし。

華嚴普賢行願品に曰はく、『若し衆生をして歡喜を生ぜしむる者は、則ち一切如來をし

【生死】 娑婆を指す。
【菩提】 智慧願行

て歡喜せしむるなり。何を以ての故に。諸佛如來は大悲心を以て而も體と爲したまふが故に、衆生に因つて而も大悲を起し、大悲に因つて菩提心を生じ、菩提心に因つて等正覺を成じたまふ。譬へば曠野沙磧の中に、大樹王あらん。若し根水を得れば、枝葉花果、悉く皆繁茂するが如し。生死曠野の、菩提樹王も、亦復是の如し。一切衆生を、而も樹の根と爲し、諸佛菩薩を、而も華果と爲し、大悲の水を以て、衆生を饒益するときは、則ち能く諸佛菩薩の、智慧の華果を成就す。」と。

是故に、大悲は天の如し。普く一切衆生を覆ふが故に。大悲は地の如し。悉く一切の法門を生ずるが故に。大悲は能く佛性を見る、他の爲に眞智を明むるが故に。大悲は能く牢關を透る、他の爲に益深法を究むるが故に。大悲は能く向上に徹す、他の爲に別に生涯を求むるが故に。大悲は能く力用を成ず、他の爲に務めて此道を行するが故に。大悲は能く勇猛を起す、他の爲に常に憤志を生ずるが故に。大悲は能く不退に至る、他の爲に此心決定するが故に。大悲は能く廣學を成ず、他の爲に普く一切を究むるが故に。大悲は能く多聞を成ず、他の爲に深く物理を推すが故に。大悲は能く威儀を成ず、他の爲に念念失せざるが故に。大悲は能く福德を成ず、他の爲に常に方便を起すが故に。大悲は能く煩惱を滅す、他の爲に身命財を捨つるが故に。大悲は能く憍慢を除く、他の爲に饒益心を行するが故に。大悲は能く名利を離る、他の爲に皆實義に本づくが故に。大悲は能く法界に入る、他の爲に至らざる所なきが故に。凡そ大悲の徳は、廣大無盡にして、多劫に演説するも

終に極りあることなし。

要を以て之を言はば、大悲願力ある者は、普く能く一切の業障を消滅し、普く能く一切の功德を圓滿す。理として明めざるはなく、道として行ぜざるはなく、智として到らざるはなく、徳として成らざるはなし。譬へば人の心を得んと欲する者は、先づ其子を愛するが如し、諸佛菩薩は普く衆生を以て子と爲したまふが故に。是故に平等に衆生を愛するときは、則ち一切諸佛、感應せざることなし。若し但諸佛を供養する者は、利一身に止る。佛福智を圓滿するが故に、終に他の供養を求めず。今大悲を以て之を供養するときは、則ち諸佛深く歡喜を生じて、利法界に遍し。譬へば法を説くに但一人に對して説くと、稠衆の中に於て普く説くと、其法畢竟増せず、減ぜざるが如く、功德も亦然り。先づ一切衆生に與へて、普く菩提の功を得しめ、却つて其徳を聚めて、以て己が願を成じ、彼此相資けて、重重無盡なり。然して財施と雖も、亦此理あり。猶人を擇んで物を施さば、但一人を悦ばしめ、衆に對して普く施さば、己が分なしと雖も、各誠恩に感じて、中心徳に飽くが如し。是故に、常に此身口意業、一切の功德果報を以て、悉く一切衆生に與へて、共に無上菩提に廻向して、當に是念を作すべし、『願くば一切衆生、佛知見に入らんことを。願くば一切衆生、業障清淨ならんことを。願くば一切衆生、道念猛利ならんことを。願くば一切衆生、三昧現前せんことを。願くば一切衆生、智慧明了ならんことを。願くば一切衆生、方便自在ならんことを。願くば一切衆生、

【淨名經】維摩經
文殊師利問疾品。

【口く】外現是れ
聲聞を顯さんが爲
【意劣】二乘纏弊
垢膩衣。
【諸見】空有等。
【正法】自利利他
見性の。

悲願廣大ならんことを。願くば一切衆生、神力無礙ならんことを。願くば一切衆生、究竟
圓滿せんことを。又常に其聞見の事に隨つて、當に是心を生ずべし、一悲しい哉一切衆生、
無底生死の大坑に墮す、我當に云何にしてか速に勉濟して、其をして一切智地に住するこ
とを得しむべき。』淨名經に曰はく、『若し自ら縛あつて能く彼が縛を解すといはば、是
處あることなし。』と。是故に、一切衆生を度せんが爲に、切に一切智を求む。一切智を求め
んが爲に、先づ須らく見性すべし。是れ自身成佛して、而して衆生を度するにあらず、衆
生を度せんが爲に、自ら成佛を求む、亦復是れ自の成佛の爲に、而も衆生を度するにあ
らず。衆生の爲の故に、普く佛道を行す。是故に、學者先づ須らく己を捨つべし、自利に著
すること莫れ。涅槃經に曰はく、『發心畢竟二別ならず。是の如きの二心、先心難し。自ら
未だ得度せず、先づ他を度す。是故に、我初發心を禮す。』と。是故に、學者先づ須らく己
を捨つべし、自利に著すること莫れ。夫れ己が爲にする者は、利一身に止る。能度の心な
きが故に、無盡の法門を明めず。所度の人なきが故に、無盡の法財を聚めず。是を以て、
聲聞緣覺は、志行偏枯の義を示さんが爲に、且く羸劣を現じ、諸佛菩薩は、福智圓滿の理
を顯さんが爲に、假に相好を示す。後人錯つて二乘外道は、別に種性あつて、今時に在ら
ずと謂へり。殊に知らず、此は是れ學者智行の異名なることを。心外に佛を求むるを名け
て外道と爲す。自心の道を捨てて、他の道を求むるが故に。錯つて諸見に著するを、名け
て波旬と爲す。彼正法を聞いて、却つて謗を起すが故に。始めて佛法を聞いて、先づ空理

【緣に】十二因緣
飛花落葉等。

【力無畏】佛の十力、知是處非處、知過去、知未來、知諸禪解脫、知三昧、知勝劣、知種種、知一切、知至處、知宿命、知永斷、知智、知氣。

を悟る、是を聲聞と謂ふ。一切空に歸して、法を求めざるが故に。緣に依つて自覺して、悲智を起さざる、是を緣覺と謂ふ。逍遙として性に任せて、獨り道を樂むが故に。漸く悲智を起して、自他共に利する、是を菩薩乘と謂ふ。又權大乘と名く。證悟ありと雖も未だ自在ならざるが故に。生死海に於て怖畏あるが故に。或は涅槃を愛し、或は淨土を求めて、力無畏の法に了達すること能はず。

是に於て大勇猛の心を奮發し、明了に佛性を見徹して、普く性中差別の法門を究めて、掌上を見るが如く、而して後に向上の些子を提持し、法窟の爪牙を獲得して、無礙自在に一切を度脱し、生生世世、菩薩の行を行じて、衆生を盡さずんば、終に退心なき、是を一佛乘と謂ひ、又は實大乘と謂ひ、又は根本乘、最上乘、一切智乘と謂ふ。是を究竟眞實解脫と名け、是を菩薩摩訶薩と名く。豈はれ大丈夫兒の能事にあらずや、若し眞正の道を成ぜんと欲せば、切に須らく子細にすべし。

今時の學者、纔に叢林に入り來つて、自ら衲子と稱し、他の作處に隨つて、漸く道心を發して、未だ出家の本志を知らず。菩薩の行願を究めず、古人の行履を窺はず、佛祖の重關を信ぜず、拍盲に參じ將ち來つて、禪と説き道と説く。意、他日大口を開いて、諸方を平吞し、名稱高遠にして、一生を慶快せんと欲するのみ。是に由つて道行辨ぜず、願行遂げず、漸く名利を起して、千態萬狀す。若し是れ眞正の道人ならば、切に此弊風を效ふこと莫れ。分明に途路の嶮難通塞の相を識得して、而して後に歩を發して、單力直

【想念】

妄想妄念

入し、從前の著處を放捨して、總に緣事を省き、其行李を輕んじて、其道情を重くせよ。名利を求めず、世念を離へず、心歡喜を生じて、故國の路に登るが如く、金玉の山に登るが如く、帝王の位を得るが如く、是の如く念増進して、疑團を凝結すべし。即今是れ什麼ぞ。見る者何物ぞ。聞く者何物ぞ。行く者何物ぞ。坐する者何物ぞ。一切時、一切處、心を著けて如何と看よ。有無の心を生ぜず、是非の心を生ぜず、分別を起さず、道理を加へず、只是の如く看よ。時節到來すれば、彼自ら現前す。汝が智慧分別を假らず。纔に分別を生ずるときは、則ち還つて本性を昧して、永劫勤苦すとも、終に得ること能はず。若し想念紛飛せば、這頭を看よ。「狗子に還つて佛性ありや也否や。」州云はく、「無。」と。當陽に拈起して、理の會を作すこと莫れ。沒滋味の會を作すこと莫れ。無事の會を作すこと莫れ。纔に理の會を生ずるときは、則ち終に功を成せず。亦復無理の會を生ずること莫れ。有理無理、畢竟して妄想、但只拈起して之を看よ。是れ見解に干らず、眞正諸佛の行道なり。語默動靜、行住坐臥、念念相續して、切に忘了ること莫れ。或は忘了することあるも、亦力を失すること莫れ。人の射を學ぶに、久久にして方に中るが如し。只長連の志を起して、愼んで退惰すること莫れ。若し是法を捨てば、未審何の法を以てか得度せん。若し又度せずんば輪廻を免れず。且く道へ彼輪廻の苦患の如き、參禪の艱苦に何似ぞ。彼妄想の戲樂の如き、見性の歡樂に何似ぞ。人王百歳の榮すら尙貴しと爲す、何に況んや無上の法王に於けるをや。一たび大心を起して、念念選かざるときは、則ち其功見つべし。

【是法】

見性得悟

【大慧】大慧書上
答曾侍郎第五篇
【抵在】抵は當なり
り歸なり。

【或は】一般は下
劣の漢なり、已下
願力の辨。

生死を出離して、而も道を明めざる者は、猶鳥の翼なうして飛ばんと欲し、木の根なうして茂せんと欲するがごとし。請ふ之を思へ。

大慧禪師曰はく、苟も念念初心を退かず。自家の心識、世間の塵勞を縁する底を把つて回し來つて、般若の上に抵在せば、今生に打未徹なりと雖も、臨命終の時、定んで惡業の爲に牽かれて、惡道に流落せず、來生出頭して、我今生の願力に隨つて、定んで般若の中に在つて、現成受用せん。此は是れ決定底の事、疑ふべき者なし」と。何に況んや參究怠らずんば、大法現前すること掌を指すが如きのみ。但只得失是非、一時に放却して、脚眼下より直下に參じ去れ、坐の時は坐時に參じ、行の時は行時に參じ、臥の時は臥時に參じ、食の時は食時に參じ、語の時は語時に參じ、一切作務の時は、一切作務の時に參じ、只家中藏する所の珍寶、一旦遺失して、所在を知らず、豎に尋ね横に覓めて、之を得ざるときは、則ち胸中常に平穩ならざるが如し。十二時中、四威儀の中、密密に眼を著けて看よ。遠近是れ誰が面上の事、佛性又何の似たる所ぞ。似たる所の者は、汝は是れ誰ぞ。或は一般あり、是の如きの願力の論を見て、錯つて吾輩分なく、争か遵行するに堪へんと謂ふ。殊に知らず、此は是れ初心心を習はしむるの方便、初發行を起すの古實なることを。譬へば童子の初め書を學ぶが如し。字すら尙成ぜず、何に況んや巧妙をや。熟と不熟とは、但久しく習ふに在り。宜く師法に依つて、分に隨つて進學すべし。學道の人の誓願も亦然り。初め堪へずと雖も、後必ず成就す。設ひ業障の爲に一旦退惰すとも、若し能く之を胸

【此願】永劫不退の願力、已下八願あり。

【識量】見識機量

【三】現境。この一箇は、學道の人に定力漸く熟するに隨つて、種種の境界あり、定力漸く薄きときは、漸く多く障難に逢ふ、願力堅固なるときは、則ち能く魔事を辨じて、終に無上の大菩提を成ずることを述ぶ。

【楞嚴】第九卷。

【奢摩他】此には

止といふ、毘婆舍那、此に觀といふ

間に置かば、久しからずして遂に本心に歸せん。是を以て、根性怠慢せば、彌以て此願に依るべし。信心淺劣ならば、彌以て此願に依るべし。障蔽繁多ならば、彌以て此願に依るべし。業習深重ならば、彌以て此願に依るべし。聰明伶俐ならば、彌以て此願に依るべし。愚鈍蒙昧ならば、彌以て此願に依るべし。見性明了ならば、彌以て此願に依るべし。智用自在ならば、彌以て此願に依るべし。始發心より終究竟に至るまで皆此願行の力に依らざることなし。外之を讀誦して内之を持念して、日日に懇禱し、時に思惟せば、不思議薰、不思議習、霧の衣を濕すが如く、香の物に著くが如く、自然に佛祖の識量を成ずることを得て、自利利他、皆悉く圓滿せんのみ。

【三】現境 第三

學道の人、定力漸く熟せば、則ち煩惱稍稍に微薄にして、勝相時に現前す。是を善境界と謂ふ。是時に當つて、或は法空の見を生じ、或は一味平等の見を生じ、或は現成底の見を生じ、或は當體即是の見を生じ、其定力に隨つて、種種の見を起す。楞嚴經に曰はく、『汝等有學の緣覺聲聞、今日廻心して大菩提、無上妙覺に趣く。吾今已に眞修行の法を説く。汝猶未だ奢摩他、毘婆舍那を修する、微細の魔事を識らず。魔境現前するとき、汝識ること能はずんば、心を洗ふこと正に非ずして邪見に落ちん。或は汝が陰魔、或は復天魔、或は鬼神に著かん。或は魘魅に遭はんに、心中明ならずんば、賊を認めて子と爲

【陰魔】五十の境
【四禪】楞嚴經卷九。

【聖心】功用全く然り、是れ聖の證に非ず、苟も此は是れ禪者の功用ありと知らば則ち失あることなし、故に善境といふ。

【一分魔】則ち一分の魔の常憂愁の魔あり、又次に一分の魔の好喜樂の魔あり、又次に一分の魔の大我慢の魔あり。

【彼此】學者と師家。

【精憶】解と記と【眞覺】科註卷の四。

【善友】内心勝つと雖も宿に邪師に遇うて、既に其の心に熏ず、積習して種を成ず、正道に於て信心を起し、離し。

【善友】内心勝つと雖も宿に邪師に遇うて、既に其の心に熏ず、積習して種を成ず、正道に於て信心を起し、離し。

ん。又復中に於て、少を得て足れりと爲ば、第四禪の無門比丘の妄に聖を證すと云うて、天の報已に畢つて、表相現前するとき、阿羅漢の身にして、後有に遭ふこと阿鼻獄に墮するが如くならん。」又曰はく、「聖心を作さざれば、善境界と名く、若し聖解を作せば、諸の群邪を受く。」と。又曰はく、「一分の魔あり、其心腑に入る。」と。彼經分明に五十種の現境を説く。悲しい哉、今時の學者、多く現境を認めて、錯つて證悟と爲す。故を以て、魔黨少ならず。後來道場に坐して、許多の好人を引入して、悉く邪見に墮せしむ。彼此知らず、却つて大好無上道と謂へり。或は心源湛病を以て宗と爲し、或は平常無事を以て宗と爲し、或は棒喝を以て宗と爲し、或は不生不滅を以て宗と爲し、或は平一法を以て宗と爲し、或は佛祖の言教を以て枝葉と爲して、一齊に放擲し、或は佛祖の言教に於て、強ひて情臆を恣にして、種種の道理を説く。或は沒滋味の會を作し、陀羅尼の會を作し、棒の會を作し、一喝の會を作し、賊意の會を作す。是の如きの類、麻の如く粟の如く、皆是れ錯つて現境を認めて、解と爲る者なり。終に聲聞緣覺外道波旬の道を成じて、而も自ら覺知せず。

圓覺經に曰はく、「若し諸の衆生、善友を求むと雖も、邪見の者に遇うて、未だ正寤を得ず。是を即ち名けて外道種性と爲す。邪師の過謬なり、衆生の咎に非ず。」と。惜い哉、大丈夫兒。圓頂方袍の身を受け、知識高德の名を立て、却つて此邪偽の部類に打入し去ることを。眞正參玄の上士は、應に是の如く知るべし。他の教惑を受くること莫し。如上の

孤涎を舐らず、群邪をして其便を得しむること莫れ。彼九十六種の外道、及び魔波旬の如き、各各無上道を得ると謂へり。是故に、道人は先づ須らく魔事を辨ずべし。只其所見毫厘許も、佛と異ることあるは、皆是れ外道の見解なり。只審細に諦観して、容易の見を生ずること莫れ。五逆の罪は、畢竟じて免脱の期あり。邪見の報は、永劫出期あることなし。恐れて恐るべきは邪師の説法なり。一念薰習すれば、長く佛種性を滅す。大慧禪師の如き、書中分明に、是魔境を辨じ了れり。

後人何の意ぞ、置いて論ぜざる。是れ眞正の導師なきが致す所なり。悲しい哉、請ふ決裂の心を奮發して、更に一步を進めよ。寶處近に在り、化城に滯ること莫れ。古人許多の辛苦を喫して、方に此道を得たり。我獨り然らざらんや。無始劫來、生死に輪廻して、種種の苦を受く。其中間若し些の因縁あらば、已に合に先佛法中に出で來つて、道を聞くべきに只業障深重なるが爲に、迷うて今に至る、今始めて法を聞く、久しく習ひ得るに非ず。王位を以て頼に庶人に授くるが如し、豈其れ容易ならんや。只大心を發して、佛祖所證の田地に到らんと要せば、少を得て足れりと爲ること莫れ。昔佛在世すら尚三乘の得果あり。聲聞は空を悟つて以て涅槃と爲して、一向に一切の佛法を求めず。緣覺は自ら法性に達して、任性無事を以て究竟と爲す。菩薩は所得の道に於て、兼ねて六波羅蜜を行す。是の如く各果證を得て、能く神通道力を發すれども、是れ眞實見性の道にあらざるが故に、却つて方等彈呵の責に逢ふ。三乘亦二種の果あり、一には學得、二には中止、謂ゆる、初め

【目足】華嚴經入法界品の末に曰はく、人の射を學んで先づ其足を定めて後に其法を習ふが如しと。

三乘の法を信じて、分に隨つて各各其果證を得たり。是を學得と謂ふ。或は信一乘に在りとも、中間果を貪つて止めて増進せざる、是を中止と謂ふ。譬へば初め郡縣を望んで、到り得て棲止し、或は志王都に在りと雖も、中間錯つて群縣を認めて、以て王都と爲るが如し。今諸佛頂上の禪を以て因と爲して、之に參ずれども信力足らざるが故に、却つて小見に止る。三乘五性、皆是れ修道の路程なり。人射を學んで意、正的に在れども、勢力弱き者は、目足定まらず。箭未だ的に至らずして、遠く別處に落つるが如し、設ひ那箇微妙の道あつて、之を成就すとも、畢竟三乘の得果を出でず。是故に、大見小見一切の證道を總攝して、束ねて現境門中に收む。但請ふ、首を廻らして、切に須らく子細にすべし。設使汝眞實の見性を得るも、尙差別の關鎖あり。向上の一路あり、何に泥んや然らざる者をや。古人嘗て次第を経ずして一鎗に打成すと言ふ者は、只成佛本來一念子に在りといふを以て、方に是理を通ず。猶的を射ることは只一箭に在り。隨つて後箭を以て、之を明けざるが如し。其的に中るに至つては、一箭を出でざるのみ。今的を辨すること能はずして、錯つて的と認むるが爲に、却つて許多の議論を生ず。是故に、其的を射んと欲せば、先づ邪正を辨せよ。的若し正しからざれば、中ると雖も眞に非ず。大凡其心質直なるときは、則ち本直僞の名なし。錯つて虚を以て實を爲るに至つて、始めて是非の論あり。是れ彼公案の由つて起る所以なり。請ふ這裏に到つて、切に精彩を著けよ。錯つて未得已得未證已證の心を生ずること莫れ。設ひ多少甚深の證入あるも、皆是れ所現の境界にして、眞の佛

【大慧曰】大慧禪師年譜に出づ【九夏】四月十五日より七月十五日に至る九十日を一夏と爲す。

【麤言】涅槃經北本二十に出づ。【蕪得】ましじや【古人】管子いふ

法に非ず。

大慧曰はく、『大悟十八度、小悟其數を知らず。』と。他已に大心あるが故に、魔境に推倒せられず。其圓悟に見ゆる時、且自ら計つて云はく、『當に九夏を終ふべく、若し諸方を同じく、我を以て是と爲ば、我無禪論を著さん。』と。汝看よ、古人、大器を成する底は是の如し。今時機に一知半解を得るときは、則ち悉く大事了畢と爲す。其師法の者も亦印證して、以て眞の佛法と爲す。又甚しき者は他の心性の説を聞いて、認得して禪と爲し、自の道理に誇つて、古人實證の説話を信ぜず。是故に圓悟禪師曰はく、『者中忽ち個の出で來つて、本來向上向下なし。參を用て什麼を作さんと道ふあらば、只伊に向つて道はん、我也知る、備鬼窟裏に向つて活計を作す。』と。悲しい哉、後人多く道理の會を作して云はく、『麤言細語、皆第一義に歸す。』と。若し怎麼に會せば、且く去つて座主と作つて、一生多智多解を贏ち得んには。而今往往に道ふ、本悟處なく、個の悟門を作して、此事を建立すと。若し怎麼の見解ならば、獅子身中の蟲の自ら獅子の肉を喰ふが如し。見ずや古人道はく、『源深からざれば流長からず、智大ならざれば見遠からず。』と。若し用て建立の會を作さば、佛法豈今日に到らんや。嗚呼、古尙是の如し、今時將何の面目ぞや。請ふ有志の者の聲に效ふこと莫れ。

馮山警策に曰はく、『伏して望むらくは決烈の志を興し、特達の懷を聞いて、舉措他の上流を看よ。檀に庸鄙に隨ふこと莫れ、今生便ち須らく決斷すべし、想ひ料るに別人

【佛性】涅槃經二十八の文、溷山侍立の時の語。

【潼關】華陰縣にあり、長安に入るの道なり、秦漢時代。

【四】實證。此一篇は、見性得悟の後、明師に參尋して、我が所得と、明鏡の相照して、中如く、眞實に做證することを述ぶ。
【密參】綿密實參
【純工】純一工夫

に由らず。」と。又百丈大智禪師曰はく、「佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、時節既に至らば、迷の忽ち悟るが如く。忘るるが忽ち憶するが如く。方に己が物を省りみるに、他より得ず。學者但本參の話を把つて、切に精彩を著けよ。他時異日、自然に現前せん。譬へば邊鄙の人の、始めて王都に到らんと欲して、纔に中國に出づるときは、則ち驛路の坦平を見、或は館舍の宏麗を見、或は城郭の雄偉を見て、本未だ曾て見ざる所、妄に眼目を動じて、錯つて王都の想を生ずるが如し。只先達の明師を尋ねて、半路に停らず。直に潼關を過ぎて、王都に入得して、臣殿に著せず、帝室を認めず、親しく龍顔を見て、始めて諦當と爲んのみ。」

【四】實證 第四

眞正辨道の上士、密參功積り、純工力充るときは、則ち平生の心意識情總に行はれず。癡癡凱凱として、理盡き詞窮つて、參究底の心に和して、一時に打失して、氣息も亦將に絶せんとす。是れ則ち大道現前の時なり、學者宜しく精彩を著くべし。是時に當つて、一念の異解を生ずること莫れ。一念の退意を生ずること莫れ。身心を放捨して、一も求むる所なく、猛に本參の話を捉持して、他の現境に一任す。二乗の見現せば、二乗の見に一任し、外道の見現せば、外道の見に一任す。是れ眞ならずと知つて、亦敢て怖れず、全身陷墜して、飽くまで其源を盡す。切に忌む心を起して取捨することを。只要する中に於

て一回放身捨命せんことを。時節到來すれば、忽然として落節して、此消息を知る。是を驗崖に手を撒して絶後に再び蘇ると謂ふ。忽ち一念子の間に於て、根源を識得して、自性、他性、衆生性、煩惱性、菩提性、佛性、神性、菩薩性、有爲性、無爲性、畢竟性、有情性、非常性、餓鬼性、修羅性、畜生性、地獄、天堂、穢土、淨土、一見に見徹して、毫芒を留めず。大事を了畢し、生死を透脱せば、豈快ならざらんや。然も與麼なりと雖も其所證を試みんが爲に、決定底の大宗師に參尋せよ。

古人曰はく、『涅槃の心は明め易く、差別の智は明め難し。』と、無差別の智を以て、差別の智を昧すこと莫れ。譬へば鑑を磨するに明體忽ち現前して、能く一切の物を分つ。塵なる者は塵に顯れ、細なる者は細に顯れ、青黃赤白、好醜大小、方圓長短、應に隨つて現前して、乃至一微塵一毫頭をも遺餘せざるが如し。若し現前する時に當つて、些の不分明の處あらば、是れ他なし、明體現すと雖も、餘垢未だ盡きざれば、磨跡尙存して、眞體を隔つるが故に、是故に已得の心を生ぜず、罷休の心を生ぜず。所得を驗んが爲に、明師に參決せよ。

【疎山】名は匡仁
洞山价に嗣ぐ。
【大安】第二代の
溈山、長慶懶安と
號す、三權の一なり。

古へ疎山和尚、初め香嚴の「言發聲に非ず、色前物に非ず。」と道ふを聞いて、釋然として領悟して、將に謂へり徹底了當すと。約して曰はく、『師兄住處あらば、來つて薪水を見ん。』と。後來、又溈山の大安禪師有句無句は藤の樹に倚るが如しと道ふを聞いて、三千里外に一領の布單を賣却して、特に此事の爲に溈山に到る者は、皆是が爲なり。溈山泥壁する次で

【有句】有と云ふも無と云ふも、句は助字なり、吾宗換骨の靈方あり、この示衆などを云ふ。

【藤倚樹】教相を以て言ふときは、則ち斷常の二見に隨す、懶安に於ては墮、即ち向上の宗乘。

【獨眼龍】明招德謙禪師、羅山閑の嗣。

【知音】殘念ながら高山流水、聞きてがないと。

【前約】師兄住處あり來つて水荈を見んと。

【諸聖】上は諸佛菩薩の仰せにもならず。

【己靈】下は自己の靈徳を、ありがたいとおもはぬ。

【看】是ほど見處が違ふやうになつた。

【白雲】諱は守端楊岐會に嗣ぐ。

問うて曰はく、『有句無句は、藤の樹に倚るが如し。是れ和尚の語と是なりや否や。』安曰はく、『是。』山曰はく、『忽然として樹倒れ藤枯るれば、句何れの處に歸す。』と。安泥盤を放下して、呵呵大笑して方丈に歸る。山曰はく、『某甲三千里外に、布單を賣却して、特に此事の爲にして來る、和尚什麼としてか某甲が爲に説かざる。』安曰はく、『侍者錢を持ち來つて、者矮闍黎に與へ去れ。他日獨眼龍といふものあつて、汝が爲に點破し去ること任らん。』と。後に明招に到つて前話を擧す。招曰はく、『瀉山頭正しく尾正しく只是れ知音に遇はず。』山曰はく、『忽然として樹倒れ藤枯るれば、句何れの處にか歸す。』招曰はく、『更に瀉山をして笑ひ轉た新たならしむ。』山言下に於て大悟、乃ち曰はく、『瀉山元來笑裏に刀あり。』遂に望んで禮拜して過を悔ゆ。香嚴出世するに及んで、前約に爽はず。遂に往いて之を訪ふ。嚴上堂、僧問ふ、『諸聖を求めず、己靈を重んぜざる時如何。』嚴曰はく、『萬機休罷して、千聖攜へず。』山聞いて嘔吐の聲を作す。看よ他初め香嚴を以て、此中人ありと爲す。纔に祖宗門下の事を知るに及んで、却つて香嚴の語を聞いて、貴介公子の、田夫の説話を聞くが如し。

是故に、學者纔に見性を得ば、先づ須らく明師に參じて、悟中の迷を除くべし。昔時、黃龍死心曰はく、『箇の迷あらば須らく箇の悟を得べし。既に悟を得了らば、須らく悟中の迷、迷中の悟を識るべく。須らく知るべし是は即ち明師を尋ぬる底の好時節、正好修行の消息なることを。』白雲和尚曰はく、『此事は直に須らく悟つて始めて得べし。悟つて後須

【我初】 東嶺自ら云ふ。

【數員】 古月翠岩 大道の數宗師。

【自待】 近江の杉 柚の蓮華谷に隠るること殆んど四年
【後來】 東嶺二十 三歳の時、自隱に 參ず。

らく人に遇うて始めて得べし、備道ふ已に悟り了れば便ち休す。又何ぞ必ずしも人に遇ふことを須ひん。若し悟り了つて人に遇ふ底は、垂手方便の時に臨んで、著著自ら出身の路あり。學人の眼を瞎せず、若し是れ個の乾蘿布底を悟り得ば、唯學人の眼を瞎却するのみにあらず。自己を兼ねて、動もすれば便ち鋒を犯して手を傷る。今時諸方の善知識、錯つて學人の眼を瞎す、亦宜なる哉。然りと雖も、若し眞正決定底の大宗師に非ずんば、必ず之に見ゆること莫れ。却つて教惑を受けて、汝が悟門を妨ぐ、我初め行脚の時、數員の宗匠に見ゆ。他の開示する所、全く不是とは道はず。只是れ古人巖頭、雪峯、大慧、虛堂の輩と比對するに、自ら異なる所あり。是を以て、胸中常に疑惑を懷いて、未だ全く他を信ぜず。將に謂へり而今佛法已に滅して、正知正見の者、並に一人もなし、如かじ獨り山中に向つて、且古人の様に依つて、辛參苦修せんにはと、自ら時節を待つ。後來先師の道を聞いて、信疑相半なり、自ら謂へり人の口頭を以て信すべきに足らず。且く他の開示を聞いて、而して後之を決せん。其教を受くるに及んで、果して従上の祖師、示す所の許多の言論に符合せり。歡喜懷に滿つ、是より身命を捨てて、參決して今に至る。今時諸方の善知識、錯つて開示を垂れて、學者の眼を瞎却す。他の所得未だ古人親證の田地に到らざるが爲に、向上些子は、何ぞ曾て夢にだも見ん。是れ佛法本來二あり三あり、淺深麤細あるにあらずと雖も、自らは是れ學者の信力到らず、境智除かず、餘習滅せず。是を以て、佛法に許多の差別あらしむることを致す。古人尙是の如し、今人豈然らざらんや。

【洞山】 諱は良价
雲岩處に嗣ぐ。
【觀論】 三觀一心
法の法門。

【正中偏】 大圓鏡
智、十住初位。

昔洞山和尚、且く五位を設けて、宗要を開示す。正位は空なり、偏位は假なり。是れ天臺の觀諦を道ふにあらず。彼觀諦は、先づ空諦を觀じて、執有の見を破し、次に假諦を觀じて、滯空の心を滅す。有無障盡き、空假見忘じて、眞性現前す。是を中道實相諦と謂ふ。此は是れ能觀所觀、對治の法門なり。本眞性の體用に依つて、借つて以て其名を立つと雖も、漸く觀力を假つて、性中一分の理を知る。故に中道諦に至つて、始めて一心三觀の性を見るが故に、今此五位の法は、見性の者をして隨つて深意を究めて、而も大眼目大法王の賈を成ぜしめんが爲に之を設く。豈其れ平常の法ならんや。茲に謂ゆる空假は、眞性の異名なり、自性の本體、廓然清淨、物として名くべきなし。強ひて名けて空と謂ふ。自性體中、差別の法に隨つて、物として現ぜざることなし。強ひて名けて假と謂ふ。正中偏は、見性の端的、已に見徹すと雖も、勢分微なるが故に、差別の法に於て、尙未だ了了分明ならず。彼鏡體に餘垢あつて、物未だ審細ならざるが如し。又月下に書を讀むに、字性尙分明ならざるに似たり。

是故に頌に曰はく、

正中偏、三更初夜月明前、莫怪相逢不二相、知、隱隱尙懷三舊口、嫌。

是れ眞性を見ると雖も、理未だ明了ならず。畢竟舊時無明の域を出でざるが爲なり。是故に、又偏中正の一位を設けて、切に此旨を明す。若し此偏中正の三昧に入らんと欲せば、須らく難透の話頭に參ずべし。偏中正は、見性明了にして、一切の垢なく、差別の妙理、

【偏中正】 偏中正
三昧の人は善知識。

【頓智鏡】 一切智
無礙智の深坑に墮
在す。

【正中來】 化他の
一位なり。

【無中】 理究る處
より願を發して、
塵に入る。

【有路】 路頭窮る
處再び經過す。

物として現ぜずといふことなし。差別の明なるに隨つて、根本増す明なり。根本明なるに隨つて、差別極めて明なり。彼此極めて明了なるときは、則ち中に於て亦影像なし。是を偏中正と謂ふ。

頌に曰はく、

偏中正、失曉老婆逢古鏡、分明觀面更無眞、体更迷頭還認影。

學者久しく妄見在つて、始めて眞性を見るが故に、差別未だ分明ならず。失曉の老婆の、今古鏡に對して、明に諸法を見るが如し。彼此明に極めて亦影像なし。理事圓融、性相無礙、是を眞なしと言ふ。譬へば鏡に對して面を見るに、色相明に現じて、一を失せざるが故に、鏡中の影を認めて、迷うて我頭と爲るが如し。凡そ智鏡を認むる者は、却つて本體に迷ふ、是れ又諸餘の智鏡を道ふに、見性明了にして、一切智、無礙智現前する、此は是れ智鏡なり。是故に智用明ならざれば、根本未だ徹せず、智用明了なれば、必ず智鏡に墮す。須らく這裏に到つて、別に出身の一路を求むべし。又錯つて一切認めざる即ち是と道ふこと莫れ。設使汝一切認めざる端的に到るも、奈何せん祖庭尙天涯に隔つることを。須らく見性理中、平生受用の處に於て、切に精彩を著けて、密密に體取して、些の道理を求むべし。錯つて容易の心を生ずること莫れ。

夫れ正中來の一位は、此は是れ我宗、最後向上出身の一路なり。是故に道ふ、無中に路あり塵埃を出づ。無中とは一切圓滿、一切成辦、其進修を求むるに畢竟得ること無し。

【悟本】 洞山和尚に賜ふ大師號なり

【此辨】 種種に五位を辨ず。洞山。【這老】

【兩雙】 自己と萬法とを、能く用ひ得ると。

是を路頭盡くる處と謂ふ。只要す再び經過し來つて、別に生涯あることを。從前の所得、尙未だ塵埃を出でざることあり。此一路に到つて、始めて塵埃を出づるが故に。是より已後、總に言を以て議すべからず、只出身の一路を得て、別に生涯ある者は、自ら當に究決すべし。洞山老師、只汝をして重重の深旨あることを知らしめんが爲に、假に名字を設けて、許多の説を作す。這箇尙洞山の本意に非ず、何ぞ道理を加へて、再び他の憂を増さん。大凡正中來を透得する者は、實に以て一箇半箇を得難し。然るに今復兼中至、兼中到の二位を設けたる者は、誠に以て悟本大師、光前絶後の境界を見るに堪へたり。雪竇劍して、「垂手卻同ニ萬仞崖」と言ふ。謂つべし知言なりと。總じて古今の宗師、此辨を作す者、未だ這老受用の處を盡さざるが故に、皆重重の意旨を失す。惜い哉、今許幾の名位を立て、宗要を指示するが如き、未だ臨濟徳山に及ばざるに似たりと雖も、其引入する旨趣に至つては、豈優劣あらんや。他實は後代主法の質なくして正脈を失はんことを恐るるが爲に、密に此要を布いて、以て有力の兒孫を待つ。學者先づ正中來に於て力を盡して、他日別に生涯あらば、却り來つて又兼中至の一位、何の爲に之を設くといふことを看ん。

頌に云はく、

兩雙交鋒 不須避 好手還同二火裏蓮
是れ自ら妙處を得る底の好手を除いて、餘人の境界に非ずと道ふ。是故に先づ須らく其

【棗柏】李通玄は唐の宗子なり、唐の開元十八年順世華嚴合論を著す。世に李長者と稱す。每且ただ棗十顆、栢葉餅の七ノ大さ如き一枚を服するの故事に因りいふ。

【五十種】十信十住十行十回向十地行。

【證入】發心菩薩を修す。

【五十三】差別智を修す。

【復依】文殊の指南を受く今また。

境界に到るべし。兼中到の一位、又是れ什麼の道理ぞと。看よ、古人、愆塵に垂手方便、汝をして見性の一理に滯らざらしむ。經中文殊を以て、見性の大智を表し、普賢を以て、悟後の修行を表す。棗栢大士曰はく、「文殊見性の大智ありと雖も、若し普賢悟後の妙行なくんば、畢竟二乘の見に墮せん。」と。夫れ華嚴法中の如き、初發心の時、便ち正覺を成ず。而して後五十種の法門を修す。善財童子、文殊師利童子の處に在つて、信を以て證入し、再び妙峯山頂德雲比丘別峯相見の處に於て、脱體現成して、憶念一切、諸佛境界、智慧光明、普見法門を獲得す、是より、漸次に南に行いて一百一十城を過ぎ、五十三の善知識に參じて、末後彌勒の一彈指頃に於て、頓に前來の諸善知識所得の法門を亡す。復彌勒の教に依つて、文殊に奉觀せんことを希欲す。是時文殊遙に右の手を伸べて、一百一十由句を過ぎて、善財の頂を按じて曰はく、「善哉善哉、善男子、若し信根を離るれば、心劣に憂悔して、功行具せず、精勤を退失し、一つの善根に於て、心住著を生じ、少功德に於て、便ち已に足れりと爲ば、善巧に行願を發起すること能はず。善知識の爲に攝護せられず。乃至是の如きの法性、是の如きの理趣、是の如きの法門、是の如きの所行、是の如きの境界を了知すること能はず。若し周偏知、若し種種知、若し源底を盡し、若し解了し、若し趣入し、若し解説し、若し分別し、若し證知し、若し獲得すること、皆悉く能はず。」文殊是の如く、善財に宣示す。善財言下に於て、阿僧祇の法門を成就し、無量の大智光明を具足し、普賢門に入つて、一念の中に於て、悉く三千大千世界、微塵數の諸善知識に

【四料簡】 奪人不奪境、奪境不奪人、境兩俱奪、人境俱不奪。

【四賓主】 客看客、客看主、主看客、主看主。

【五】 透關。關鎖を透過するなり、此一篇は、古人難透の語頭に參得して、轉た悟らば轉た學し、轉た了せば轉た參じ、果して祖師向上の一著子あることを知らんことを述ぶ。

【雲門】 諱は文偃、雪峯存に嗣ぐ。

見えて、悉く皆親近し、恭敬し承事して、其教を受行して、不忘念智、莊嚴藏解脫を得たり。以至、普賢毛孔の刹に入つて、一毛孔に於て、一步を行じ、不可説不可説の佛刹微塵數の世界を過ぎて、普賢と等しく、諸佛と等しく、刹と等しく、行と等しく、及び解脫自在、悉く皆同等にして、無二無別なり。合論に曰はく、「五十箇の波羅密、五位の中、五重に鍊磨して、其智慧の廣狹、生熟の出世、入纏の逆順を簡び、福慧の多少、勝劣不同を和會して、發心の者をして、一法及び三四五六十百千に住して、即ち以て足れりと爲ざらしむる故に、意進昇して無限廣大の如法界に至らしむる故に、之に就て五位を設く。看よ佛恁麼に親切著明に、汝が道位を論ずることを。是の如きは皆是れ悟後の眞修、増進の様子なり。無方便の中の方便、無階級の中の階級なり。洞山の五位も亦然り。臨濟の四料簡、四賓主も、皆是れ悟後の様子なり。今時の學者、此等の方便を以て、所得を驗みず。却つて言ふ是れ何の繫鱗櫛ぞと。似たることは則ち似たり、奈何せん所見許多の塵沙あることを。是故に、學者其れ見性の一理に滯つて、休歇し去ること莫れ。

【五】 透關 第五

雲門大師曰はく、「平地上に死人無數、荆棘林を出得する者はれ好手。」と。何をか荆棘林と謂ふ、古人難透の語頭なり。今時一向地に墜つ、是を平地上の死人と謂ふ。是故に眞正の宗師を得難し。出曜經に曰はく、「智者は慧を以て心を鍊ること、猶鑛鐵の如し。數入

【看】古教を以て
照心して。
【彼】佛經祖錄の
中の古人。
【三論】無相の機
には三論宗、般若
所依經なり。
【法相】有相の機
には法相宗、方等
十二部經所依經な
り。

【法華】釋迦顯教
の中は法華宗天
台所依の經なり。
【華嚴】無盡法界
には、華嚴宗。
【秘密】大日法身
の說。
【圓覺】略疏四。

百鍊するときは、即ち精金を成ずること、猶大海の晝夜沸動すれば、則ち大寶を成ずるが如し。一と。是故に正受老人曰はく、『近世の衲子、狗子無佛性の話を把つて、實參純工なる者、一箇半箇、透過を得ざることなく。纔に少しく透過するときは、則ち自ら得たりと爲し、自ら悟れりと爲して、高談大口、是れ只生死の大兆にして、己見を栽培し、我見を増長す、奈何せん祖庭猶天涯を隔つることを。眞正安樂の田地に到らんと欲せば、轉悟らば轉學せよ。轉了せば轉參せよ。果して祖師最後の因縁を見ることが、掌上を見るが如くならん。請ふ學者切に眼を著けて看よ。今は是れ什塵の時節ぞ、寸陰寸璧の如し。汝が所得の法門を驗んが爲に、數ば佛の經論を持し來つて、審細に諦觀して看よ。未審我所得と、經論の所説と、符合するや也否や。若し經論を違背せば、汝が見偏枯にして、亦淺略なり。彼自ら見性の眼より説き出し將ち來る、豈符合せざる底の理あらんや。能く明了に圓滿智を發せば、一一分明に、諸佛無量の法門を見、一一分明に、諸佛無量の方便を識得せば、一一の智見、一一の神通、一一の解脱、一一の境界、乃至無量、差別の道理、一一明了ならざることなし。

三論、法相、法華、涅槃、華嚴、阿含、方等、般若、秘密莊嚴、圓融無礙、悉く皆見徹して、文に依つて義を解せず、義に依つて文を破らず、一法を以て諸法を混ぜず、諸法を以て一法に違せず、只性智を以て解すべし。識神を以て測定すること莫れ。若し這裏に到つて、了了分明ならば、汝に許す看經の眼あることを。且圓覺經中の四相の如き、此は

【乃至】二乗地より等覺位に至る。
【證】二乗俱生法執相分。

【乃至】凡夫地より二乗に至る。

【了證】我相、凡夫の見分を證取す。

【了見】人相、二乘の見分を悟る。

【壽命相】類耶微細の識。

【諸衆生】等覺位大心衆生をいふ。

【所了】自證分則ち前の三相なり。

【不自見】微細の染識の故に。

【命根】取相續不斷。

【一切覺】自證分

是れ見上の塵沙を指出す、曰はく、『善男子、其心乃至如來の畢竟して、清淨涅槃を了知すと證す、皆是れ我相なり。』又曰はく、『善男子、其心乃至圓に涅槃は、俱に是れ我者なりと悟るとも、心に少悟を存すれば、備に證理を弾くせども、皆人相と名く。』又曰はく、『善男子、但諸の衆生の、了證了悟、皆我人と爲す。而も我人の相の及ばざる所の者、所了ありと存するを、衆生相と名く。善男子、云何が壽命相。謂く、諸の衆生、心照清淨にして所了を覺る者なり。一切の業智、自ら見ざる所なり、猶命根の如し。善男子、若し心一切の覺を照見する者は、皆塵垢爲り、覺と所覺とは、塵を離れざるが故に。』と。經中分明に指出す、汝什麼生か手脚を著けん。汝が知見明了なるは、我相の本體なり。能く見地是れ我なりと知つて之を捨つる、是を人相と名く、我人の及ばざるを、衆生相と名く。諸相消滅して、一切を越過すれども、壽命を免れず、是を最後の「結」と謂ふ。

知らず衲僧家、何れの處に向つてか安身立命せん。今時往往、沒意智を以て禪と爲して、經論を用ひず、却つて道ふ教外別傳、何ぞ經論を用ひんと。殊に知らず、教外分明ならば、教内何ぞ妨げん。教外若し教を容れずんば、教外も亦眞に非ず。何を以ての故に、鏡若し明了なれば、物像を擇ばず。像若し現ぜざれば、鏡未だ明了ならず。汝鏡の塵垢を藏さんが爲に、却つて物像を斥く。若し是れ大道ならば、此見を作さじ。況んや又經中甚深の意趣あるをや。能く汝許幾の見障を指出す。只所見分明ならざるが爲に、却つて如來の金言を謗倒して、經中難解の玄旨を究むること能はず。是れ經論を以て宗と爲るにあらす。

【彼此】 教内教外

【經曰】 略疏卷四

【有爲】 生滅。

【一切】 種智。

【聖果】 大乘菩提

【妙果】 大乗菩提

【一切我】 有所得

【證】 我相、悟は

人想。

【多聞】 理を失し

て只だ名敷を宗と

す。

【我見】 華嚴には

一切の惡と云ふ。

【後來】 普覺菩薩

の章に。

【圭峯】 諱は宗密

荷澤會に嗣ぐ。

【一行】 四病の中

の。

目く經論を以て明鏡と爲るのみ。教を以て自性を照し、自性を以て教を照して、彼此明

了ならんことを要す。又經に曰はく、『末世の衆生、四相を了せざれば、多劫を経て勤苦し

て道を修すと雖も、但有爲と名く、終に一切の聖果を成ずること能はず。是故に名けて正

法の末世と爲す。何を以ての故に。一切の我を認めて、涅槃と爲るが故に、證あり悟ある

を、成就と名くるが故に。』と。此は是れ多少の關鎖なり。錯つて此文を會して、無證無悟

を以て是と爲ること莫れ。此經は淨圓覺を悟るを以て宗と爲す。

是故に曰はく、『末世の衆生、成道を希望すれども、悟を求めしむることなし、唯多聞を

益して、我見を増長す。』と。後來又四病を以て見上の病を顯示す。謂ゆる作止任滅なり。

所悟の心を以て、知見受用する、是を作病と名け。其法性に隨つて、任運自然、是を任病

と名け、諸見を止息し、一念不生なる、是を止病と名け。一切總に滅して、寂靜無爲な

る、是を滅病と名く。且く道へ什麼生か履踐せん。圭峯錯つて解を作つて曰はく、『今病と

爲る者、四が中皆觀慧なし。』と。觀慧を錯る、豈作病體に非ずや。又曰はく、『但心に率つ

て偏に一行に住して、善友の圓意を窺めず、乃至但單省を貪つて、一を執して圓と爲るを

以て、是を以て、經文に總に呵して病と爲す。若し能く四つ皆通達して、一門に滯らす

んば、即ち此四が中、並に皆道に入る。』と。錯錯、若し怎麼に會せば、何の長處かあらん。

縱使汝能く四門通達し圓意分明なるも、這裏に到つて、尙眼中に棘を添ふるに似たり、是の如きの經典、知解の宗徒の爲に注破せられて、悉く如來甚深の意趣を失す。眞淨は皆證

【禾山】諱は德普
黃龍南に嗣ぐ。

【或曰】杜順和尚
法身偈、下の句は
天下竟一匠人、炙
猪左膊上、
【或曰】傳大士法
身偈。

【五祖】諱は法演
自雲端に嗣ぐ。
【疎山】諱は匡仁
曹山證に嗣ぐ。
【趙州】諱は從諗
南泉願に嗣ぐ。
【乾峰】洞山价に
嗣ぐ。
【黃蘗】諱は希運
百丈智に嗣ぐ。
【他力】難透の話
頭。

宗門無盡燈論卷之上

を論じて、臊臭の漢を罾り。禾山は臆説を譏つて、參學の者を誡む。是故に古教を見んと欲せば、註説を假ること莫れ。註説多く本文の意趣を減す。此は是れ經中難解の玄旨、前頭の四相と、手を把つて共に行く。塗毒鼓の如く、大火聚の如く、金剛王の如く、獅子の乳の如し。學者若し如上の深意を會して、如上の見病を除かんと欲せば、第一に胡亂の會を作すこと莫れ。只古人難透の話頭に向つて參取せよ。

或は曰はく、『懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。』或は曰はく、『空手にして鋤頭を把り、步行にして水牛に騎る、人橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず。』と。是れ什麼の道理ぞ。僧趙州に問ふ、『萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。』州云はく、『我青州に在つて、一領の布衫を造る、重きこと七斤。雲門曰はく、『藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇が是れ自己。』五祖曰はく、『譬へば牛の窓櫺を過ぐるが如く、頭角四蹄都て過ぎたる、甚に因つてか尾巴過ぐることで得ざる。』疎山壽塔の因縁、趙州婆子搗破の則、乾峯三種の病黃蘗噴酒糟の漢、是の如くの公案、又少しと爲す。只汝が機縁に隨つて、把得して如何と看よ、此等は皆是れ難信難解、難透難入、容易に見徹すべき者に非ず、大火聚の如く、之に近づくときは則ち面門を燎却す。大阿の劍に似たり、之を擬するときは則ち喪身失命す。只當陽に提持して、錯つて會し去ること莫れ。是れ理會の境界にあらず、是れ分別の境界にあらず。廻に常情を出で別に氣息を通ず。學者他の力を借つて、漸く路頭に進むときは、則ち許多の氣息を得ざることなく。忽ち錯用心を起して、源底を盡せじと爲して、或

【古人】 洞山下の
雲居膺禪師。

【生盲】 涅槃經聖
行品の意。

は歡喜し、或は休歇し、或は大口を開いて、他の爲に説破す。殊に知らず、此は是れ且く話頭の恩力を假つて、却つて己見を裝重するのみ、眞の意趣に非ず。但只増進して、半路に住すること莫れ。

古人曰はく、『體得底の人は、口邊に白麩を生ず。』請ふ且く口を杜ちて、密密に體取せよ。佛法は是れ恁麼の道理にあらず。今時又一般あり、往往古人の公案を以て、容易の見を生じて、一齊に之を見て曰はく、『鐵橛子、沒滋味。』と。阿呵呵、恰も生盲の者の乳を問ふに、色貝に似たりと言へば聲の會を作し、雪に似たりと言へば冷の會を作すが如く。夫れ鐵橛子といふは、滋味なき所以に非ず。汝が猪を下す處なき、是を鐵橛子と謂ふ。只猪を下し難き處に向つて、大勇猛の心を奮發し、豎に咬み横に咬み、咬咬して止まざるときは、則ち忽然として一咬に咬破す。咬破し持ち來つて、始めて知る、此中無盡の法味あることを。是を鐵橛子と謂ふ。後人會せず、錯つて沒滋味の會を作す。譬へば華嚴の一微塵の中の大經卷の如き、微塵を破らずして、之を求めんと欲せば、是處あることなし。鐵橛子も亦然り。咬破せずして佛法を求めんと欲せば、永劫にも得ることなけん。五祖禪師曰はく、『我白雲門下に到つて、一箇の鐵酸餡を咬破して、直に得たり百味具足すること。』若し鐵橛子にして、未だ咬破せずんば、則ち一切の滋味あることなきが故に、或は沒滋味と道ふ。若し沒滋味にして休し去らば、何れの時か生死を免ることを得ん。恰も塵中の經卷を抱いて、之を出さずして、妄に尊貴と稱し、一生休し去るが如し、永劫勤苦すと

も、何の利益かあらん。

【馬祖】 諱は道一
南嶽讓に嗣ぐ。
【石頭】 諱は希遷
青原思に嗣ぐ。

【彼若】 傳法偈等

或は謂ふ、「理致、機關、本是れ一致、理致は顯に道理を説き、機關は密に道理を示す、只是れ賊意なり。」と。是れ亦前頭の波滋味と、一狀に領過す。何を以ての故に。見性所見の境界、是を理致と謂ふ。只見性の一理に滯つて、皮に著き骨に粘して、佛祖差別の妙處を徵證すること能はず。且く之を救はんが爲に、許多差別の言句を沾起して之を衝かしむ。是を機關と謂ふ、是故に、五祖曰はく、「若し心と説き性と説く、便ち是れ悪口。」と。或は謂ふ、馬祖、石頭、以前は、皆是れ分明に、理を以て開示す、馬祖、石頭、以後、臨濟、徳山より下來、始めて機關を説く。是れ従上佛祖の玄願にあらず。殊に知らず、従上の佛祖、理致多き者は、畢竟皆是れ途路の開示なり。實に佛祖の奥義に非ず。汝道ふ一代藏經、豈是れ理致にあらずや。禪門何ぞ拈華微笑を以て、教外の宗を立する。佛何ぞ理致を以て迦葉に付屬せざる。只上古の人物質直淳厚なるが爲に、途路を開示して、直に玄關に進む。譬へば有智の者は、纔に路を知るときは、則ち直に故郷に還る。無智の者は、途中に滯在して、妄に郷想を生ずるが如し。其途を捨てて直に根源を示すに至つては、従上の佛祖と雖も、皆是れ機關なり。謂ゆる拈華微笑、利竿倒却、且く道へ這裏に到つて箇の什麼の理智をか説かん。汝喚んで理致と作し得てんや。是より轉轉相承して、只些一著子を傳ふ。傳法の偈の如き、直に是れ機關、一代藏經、這般の説話あり麼。大火聚の如く、金剛劍の如し。擬議するときは則ち喪身失命。彼若し文に依つて義を解せば、自らは是れ平常の

説話。受法の尊者、豈之を識らざらんや。何を以て一人一人に傳ふる底の、正脈の意旨を爲ん。何に況んや他已に心を悟り道を得て、末後正傳の祖師に撞著し、多年隨從して、始めて此法を受くるをや。

【圓悟】諱は克勤五祖演に嗣ぐ。【路布】文字。【最上】摩訶迦葉

【投針】迦那提婆同尊者。【赤幡】一有相、【六宗】三定慧、

【我天】提婆尊者の問道と碧巖第十三則に出づ。

【大鑑】六祖慧能大鑑禪師。【以言】靈濟宗。【以毒】曹洞宗。【以用】溈仰宗。

【勘覈】勘辨考覈

圓悟禪師曰はく、「祖あつてより以來、唯單傳直指を務む。滯水挖泥、路布を打し窠窟を列ねて、人を鈍置することを喜ばず。蓋し釋迦老師三百餘會、機に對して教を設け、世に立つて範を垂る。大段周遮なり、是故に、最後の省要は、最上の機を接す。迦葉より二十八世、少しく機關を示し。多く理致を顯すと雖も、付授の際に至つては、直面提持せざることを廢し。刹竿を倒し。盞水に針を投じ圓相を示し。赤旛を執り明鑑を把り、鐵櫃子の如くなる傳法の偈を説き、達磨六宗を破り、外道と義を立つ、天下太平なり。翻轉して我は天爾は狗といふが如きは、皆神機迅捷にして、擬議思量の測る所に非ず。梁に到り魏に遊ぶに泊んで、尤も復顯に教外別行、單傳心印と言ふ。六代の傳衣、指す所顯著なり。曹溪の大鑑に逮んで、詳に說通宗通を示す。歴涉すること既に久し。正眼を具する大解脱の宗匠、格を變じ塗を通じて、久しく名相に滯るものをして、理性言説に墮せざらしむ。活卓卓地脱灑自由の妙機を放出して、遂に棒を行じ喝を行じ、言を以て言を遣り、機を以て機を奪ひ、毒を以て毒を攻め、用を以て用を破ることを見はず」と。看よ古人分明に説破す。是れ中古より以來、人物刑曲にして、途程に滯り、果證を貪るが故に、權に關門を立てて、所得を決斷す。是を公案と謂ふ。猶關吏の眞偽を勘覈して、而して後に入るこ

【雪峯】諱は義存
徳山鑑に嗣ぐ。

【玄沙】諱は師備
雪峯存に嗣ぐ。
【長慶】諱は慧稜
雪峯存に嗣ぐ。
【保福】諱は從展

【祥菴主】奉先深
に嗣ぐ。
【君子】洞山聰の
語。

とを許すが如し。關門に由らずして、都城に入らんと欲せば、終に是理なり。若し汝一、機關を透得して分明ならば、從上の佛祖、説く所の理致も、亦是れ諦當ならん。然らずんば理致を會すと雖も、亦是れ關外の消息なり。實に佛祖家裏の消息に非ず。是故に、當に知るべし言句大いに子細あることを。

昔僧雪峯に問ふ、「古澗寒泉の時如何。」峯曰はく、「澄日して底を見ず。」曰はく、「飲む者如何。」峯曰はく、「口より入らず。」僧、趙州に擧示す。州云はく、「鼻孔裏より入るべからず。」僧却つて問ふ、「古澗寒泉の時如何。」州云はく、「苦飲む者如何。」州曰はく、「死。」雪峯聞きえて乃ち曰はく、「趙州は古佛なり。」と。遙に望んで作禮す。此自り答話せず。汝看よ、雪峯真覺大師、絶世の宗眼、雲門、玄沙、長慶、保福の、諸公各其門に出づ。然るに趙州の答話を聞いて、遙に望んで禮拜して、自ら答話を止むる者は何ぞや。將汝滋味と爲んか。將賊意と爲んか。汝將雪峯の田地に到ると爲んか。將又雪峯に超過するか。汝若し實に這箇の深旨を知らば、自ら雪峯と手を把つて共に行かん。疎山、大嶺一則の說話を聞いて、遙に望んで拜して曰はく、「大嶺の古佛、光を放つて射て此間に到る。」と。蓮華峯の祥菴主、纔に君子財を愛す。之を取るに道ありと道ふを聞いて、大いに驚いて曰はく、「雲門の兒孫尚在り。」と。中夜に香を燒いて、雲居を望んで之を拜す。汝道へ若し是れ汝滋味賊意底ならば、誰か道ひ得ざらん。今諸方を見るに、汝滋味を會し、白拈賊を會し、無心を會する底、麻の如く粟に似たり。纔に問著すれば、便ち喝し便ち棒す。或は言句を吐き、

或は模様を作す。若し雪峯、疎山をして今時に在らしめば、朝には東方に向つて之を禮し、暮には南方に向つて之を拜して、終に休む時なからんや。若し其れ恁麼に人あらば、何を以てか奇と爲ん。又上古人なく、今時人ありと道ふべからず。錯つて空しく過して、所得なからしむること莫れ。明に言句大いに意味ありと信じて、切に參決し去れ。許多の差別、若し一明了ならずんば、縱假汝眼宇宙を空じ、氣乾坤を呑むとも、皆是れ依然として、依草附木、野狐の精魅なり。是故に、大燈國師の和歌に曰はく、『三十餘利、吾茂狐乃穴爾住無、今馬加左留留、人茂理利。』

【六】 向上 第六

【六】 向上。この上、出身の一路、大いに餘の宗趣に超過することを述べ、
 【盤山】 諱は寶積馬祖一に嗣ぐ。
 【浮山】 諱は圓鑑葉縣省に嗣ぐ。
 【聖一】 諱は辨圓字は圓爾、東福寺の開山、聖一は諡號。
 【理教】 眞旨の義。
 【機關】 學人を接待するの手段作略。
 【向上】 向上の對最上の意。

茲に向上、出身の一路あり。是を祖師不傳の一著と謂ふ。是故に、盤山曰はく、『向上の一路、千聖不傳、學者形を弄ずること、猿の影を捉ふるが如し。或は又、是を末後の句と謂ふ。浮山曰はく、『末後の一句、始めて牢關に到る、指南の旨、言詮に在らず、從上の佛祖、的的相承する者、皆此一著子なり。納僧家、縱使實に玄微を究盡し、重關を透破して、向上難透の因縁を見徹すとも、亦却つて此些子の事を蹉過す。是れ他なく、悲願深重ならず、志氣高邁ならず、慚愧親切ならず、疑心審細ならざるが爲に、依然として尙舊窠窟裏に在り。是故に、古へ聖一國師の如き、且く理致、機關、向上の三宗を立して、切に此弊を救ふ。中年以來、言句を分析し、各之を配當して、以て情解の資と爲す。殊に知らず、

【張無盡】字は商
 英宋の名士なり、
 黃龍派の兜率鞍に
 參じ、護法論を著
 す。
 【雪竇】諱は重顯
 香林遠に嗣ぐ、百
 則頌古を著す。
 【大華峰】百丈山

汝が見性の端的、皆理致なり。佛祖多少の難解の言句、皆機關なり。夫の向上の一著に於て、別に生涯あることを示す。夫れ我禪宗、諸宗に冠たる所以、正に此些子を傳ふるを以てなり。若し只見性明了にして、而も以て足れりと爲ば、何ぞ別に我宗を立つることを須ひん。彼靈山の大家の如き、容易ならんや。皆是れ重重鍊磨して、理事性相、一切圓成す。悟解了知、豈汝に劣るべけんや。明に知る、其及ぶべからざることを、彼已に是の如し。甚に因つてか唯迦葉尊者のみあつて、破顏微笑す。阿難亦佛に侍すること三十年、況んや楞嚴會上に於て、契悟極めて深し、然るに却つて會せずして、何ぞ迦葉に參じて、此法を傳ふるや。今時の學者、容易の見を生じて、是等の古實を觀ず。許多の禪に參じて、悠悠として空しく一生を過す。悲い哉、達磨の正宗、地を掃うて盡きん。或は道ふ、「達磨門下、直指人心見性成佛」と、豈見性の外、別に道理あらんや。」と。是は則ち是、可惜許。汝道ふ「達磨門下、等しく是れ見性の一法なり。」と。甚に因つてか却つて皮肉骨髓の異なる。他豈人を賺さんや。百丈初め馬祖に鼻頭を捏住せられて、分明に徹頭なり。甚に因つてか後再參の因縁ある。他衆に示して曰はく、「佛法は是れ小事にあらず、老僧昔馬大師に一喝せられて、直に得たり三日耳聾することを。」張無盡、江寧府の戒壇院に在つて、雪竇の拈古を闡て、百丈、馬祖に參する因縁に、「大冶の精金應に變色なかるべし。」と云ふに至つて、忽ち卷を投じて曰はく、「審にするに此言の如くんば、臨濟豈今日あることを得んや。」と。也頌あり曰はく、「馬師一喝大雄峯、聲入三髑髏。三日聾、黃檗聞之驚吐舌、

【江西】馬祖。

【講】明なり。

【管夷吾】管仲。

江西從是立宗風」と。後來圓悟に謂うて曰はく、「余固より嘗て恨む、雪竇百丈三日耳聾を拈提して、則ち曰はく、「大冶の精金應に變色なかるべし」と、軒に知んぬ江西の正宗を蹶らざることを。」悟曰はく、「頃之を頌す、正に公の意と同じ。」無盡曰はく、「得て聞きうべしや。」悟舉して曰はく、「拂を豎て拂を掛く、全機出沒、此に即し此を離す。講として一を畫するが若し、頂門直下に霹靂を轟かす、膏肓必死の疾を針出す。一喝を承當して聾すること三日、師子の神威反擲を恣にす。百鍊の精金須らく色を失すべし。」無盡喜んで曰はく、「毎に懼る祖道寢く微なることを、今謂ゆる方袍の管夷吾を見る。」と。幸に是れ別に些些の道理あり。且臨濟の如き、初め黄檗の六十棒下に於て、豁然大悟、又却つて他と。眉毛鬪結んで、活爐輪上に、身命を放擲す。百鍊千鍛すること二十年、末後半夏に山に登り、住すること數日にして乃ち辭し去る。黄檗曰はく、「汝夏を破り來り、夏を終へずして去る。」濟云はく、「某甲暫く來つて、和尚を禮拜す。」檗遂に打つて趁うて去らしむ。濟行くこと數里此事を疑ふ。却回して夏を終ふ、一日黄檗を辭す。檗問ふ、「什麼の處にか去る。」濟云はく、「是れ河南にあらずんば、便ち河北に歸せん。」黄檗便ち打つ。濟約住して一掌を與ふ。黄檗大笑して、乃ち侍者を喚ぶ、「百丈先師の禪板几案を將ち來れ。」濟云はく、「侍者火を將ち來れ。」黄檗云はく、「然も是の如くなりと雖も、汝但將ち去れ。」已後天下の人の舌頭を坐却し去ることたらん、且く道へ這箇是れ何の消息ぞ。」今時往々註解して曰はく、「偷心未だ死せず。」と。呵呵呵、若し恁麼に空しく光陰を過さば、他日悔い去ること

【咸通】唐懿宗の
年號 臨濟の滅す
る前後。

【碧巖】第二十三
則保福遊山の則垂
示。

とあらん。雲門曰はく、『山河大地、絲毫の過患なきも、猶是れ轉句、直に一色を見ざることを得て、始めて是れ半提、更に須らく向上全提の時節あることを知るべし。』疎山曰はく、『病僧感通年以前、法身邊の事を識得し、咸通年以後、法身向上の事を識得す。』と。幸に古人恁麼の榜樣あり、何ぞ子細にし去らざる。只雪竇百則の頌の如き、一一是些子を以て、兒孫に傳へんことを要す。及び一千七百則の公案、皆是れ些子の消息なり。中に就いて親疎あり。纏細あり、到あり未到あり、以て是些子を識得するか、未だ識得せざるかを試む。是故に、碧巖集に曰はく、『玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試み、衲僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出一入、一揆一拶、淺深を見んと要し、向背を見んと要す。』

今時或は眞正の衲子あり、古人の様に依つて、大いに言句を疑ふこと多年、時到り功熟すれば、一旦忽然として契悟す、我所得古人最後の因縁に出るを以て、早く些子を識得すと謂へり、殊に知らず、此は是れ途路の消息なることを。彼趙州の狗子の話の如き、元來分明に、向上の事を提ぐ。是れ小事にあらず、然りと雖も學人先づ此話に參じて、忽ち入得する時、始めて門頭に到る、是れ只且く話頭の恩力を假つて、性地に入得す。未だ全く甚深の意旨を識得せず。只衆生無始劫來、覺に背き塵に合して、迷習熟徹するが爲に、出で來つて此向上の禪を參決して、得る所皆是れ路頭邊の事なり、是を以て我已むことを得ずして、之を分ち之を列ぬ。再三懇懇に、切に宗要を示す。請ふ、有智の者、密に體取して

【巖頭】諱は全靈
徳山鑿に嗣ぐ、こ
の語は碧巖第五十
一則にあり。

【圓照】諱は宗本
天衣懷に嗣ぐ。

【摩尼珠】この語
は傳燈錄の十一に
出づ。

看よ。

巖頭曰はく、『大小の徳山最後の句を會せず。』又曰はく、『噫、我當初に悔ゆるは、他に向つて最後の句を道はざることを。若し他に向つて道はば、天下の人耄老を奈何ともせず。』と。且く道へ、是れ什麼の道理ぞ。若し些些の子細なくんば、他豈此言を出さんや。且公案を理會して、以て是と爲ること莫れ、公案上に向つて之を求めば、遠うして遠し。須らく是れ公案上に向つて、透脱して始めて得べし。五祖法演禪師、初め圓照の本に參して、古今の因縁を會し盡す。次に浮山の遠に見ゆ。遠示して曰はく、『世尊密語あり、迦葉覆藏せず。』祖乃ち釋然として疑を解す。後に白雲に參ず。一日法堂に上る。僧南泉に問ふ。摩尼珠の話を舉して請問す。雲之を叱す。祖領悟して汗流れて體に被る、未だ幾くならざるに磨頭に充てしむ。白雲一日磨院に到つて、祖に語けて曰はく、『爾一件の事を知る麼。』祖曰はく、『知らず。』曰はく、『近日數人の禪客あり、廬山より來る。皆悟入の處あり。伊をして禪を説かしむるに、亦説き得たり。下語も亦し得たり、古今を批判することも亦判じ得たり。』祖曰はく、『和尚如何。』雲曰はく、『我彼に向つて道ふ、『直に是れ未せい。』祖、此に於て大いに疑ふ、私に自ら計つて曰はく、『既に悟り了る、説くことも亦説き得たり。明むることも亦明め得たり、却つて未在なり、遂に參究すること累日、飲食味なし。後七日、方に厥旨を論す。從前の實惜、一時に放下す、走つて白雲に見ゆ。雲、手の舞ひ足の踏むことを爲す。祖亦一笑するのみ。祖常に此話を以て、學者に謂つて曰はく、『吾鼓

【大應】南浦諱は
紹明、虚堂愚に嗣
ぐ、入宋して得法
するは、日本の正
元中なり、文永四
年歸朝す、大應は
望。

【揣摩】揣は定、
摩は合なり、己の
心をは以て人の心
をおしはかる、磨は
摩也。

に因つて一身の白汗を出し得たり、是より下載の清風を明め得たり。」と。又衆に示して曰はく、「某十五年行脚、初め遷和尚に参じて、其毛を得、次に四海に於て、尊宿に参見して、其皮を得、又浮山圓鑑老の處に到つて、其骨を得、後に白雲端和尚の處に在つて、其髓を得たり、方に敢て承受して、人の與に師と爲る。看よ他許多の艱險を喫し盡して、始めて以て大善知識と稱するに堪へたり。貴ぶべし臨済の中興、若し是の如くならずんば、兒孫豈今日あらんや。我今明明に汝に向つて道ふ。自性を悟ることも亦悟り得たり。公案を明むることも亦明め得たり。説禪下語、皆祖宗に合ひ、古今の邪正を批判することも、亦判じ得て妙なるも、這裏に到つて、亦未だ夢にだも見ざること在于、且く道へ何の道理ぞ。参じて這裏に到つて、須らく個の明白の處あつて始めて得べし。

大應國師、虚堂に参じて歸る時、堂送るに偈を以てして曰はく、「敲磆門庭細揣摩、路頭盡處再經過、明明説與虚堂叟、東海兒孫日轉多。」「且く道へ是れ甚麼邊の事を説く、他甚麼に因つて日多の記を受く。諸人一向に來處を知らず、妄に不可思議と稱す。他既に佛、又半百日を過ぐ。其間八九度の省處あり、末後一日、先師平生の受用を徹見す。阿呵呵、從前錯つて死工夫を作し得たり。白雲に和して好し三十棒を興ふるに。寔に知る先師の恩力廣大なり。若し許多の提攜教示を蒙らずんば、豈今日あることを得んや。一生錯つて悟解了知の間に死在せん。今前事を思へば、言言句句血淋漓、怖るべし悲むべし。我是より以來、念念心間斷なく、日夜參詳して、未だ曾て休歇せず。豈容易の心を以て、

【關山】諱は慧玄宗峰超に嗣ぐ、妙心寺開山。

【楊岐】諱は方會慈明圓に嗣ぐ。

【大燈】宗峯諱は妙超、南浦明に嗣ぐ、大燈は諡號。

【佛國】高峰諱は顯目、佛光是諡號。

【佛眼】諱は清遠五祖演に嗣ぐ。

【約卜】思量卜度翠巖、雪峯存に嗣

悠悠として空しく光陰を過さんや。我務めて此道を行じて、分に隨つて已墜の眞風を扶起せんと欲す。諸兄亦豈此に心なけんや。請ふ這裏に到つて、一隻眼を具せよ、祖の門庭を敲磻して、審細に揣摩すること、千轉萬過。參すべき底の禪、悉く參じ盡し、明むべき底の法、悉く明め得、透過すべき底の言句、悉く透過し盡す。知らず、今は、個の什麼にか參ぜん、一箇の參ずる底を求むるに、終に不可得なり。是を路頭盡る處と謂ふ、這裏に到つて、若し休し去らば、何の好大應か見ん。

是故に、關山國師遺誡に曰はく、『宿昔吾大應老祖、正元の間、風波大難の地を越えて、蚤に宋域に入つて、虛堂老禪に淨慈に遇著して、眞參實證、末後經山に、其蘊奧を盡す。是故に、路頭再過の稱を得、兒孫日多の記を受け、楊岐の正脈を吾朝に單傳する者は、老祖の功なり。』と。須らく知るべし、這箇大いに子細あることを。大燈國師、初め佛國に參す眞參純工、一夕豁然として大悟、夜半に門を叩いて見解を呈す。國曰はく、『這は是れ眞正の見解なり。宜しく法幢を建て宗旨を立すべし。』と。厥後大應の手段辛辣なるを聞いて、京に趨いて徑に其室に詣して、往復問答す。大應總に許さず。便ち問ふ、『五祖の演、佛眼に示して云はく、牛窓櫺を過ぐ、頭角四蹄全く出づ、尾巴甚に囚つて出づること得ざる、爾試に一轉語を下せ看ん。』燈曰はく、『曲心已に露る。』應曰はく、『如何が此曲心。』燈云はく、『天を柱へ地を柱ふ。』應大いに笑うて云はく、『與麼にして空しく過さば、他日悔ゆることあらん。』三日の後、燈下語して云はく、『約卜虚聲を聴く。』應云はく、『一方に相似を得

ぐ、この話は碧巖第八則に在り。

【夢窓】諱は疎石高峰日に嗣ぐ、天龍寺開山。

【牛跡】維摩經弟子出づ。

【蟻蟻】この話は碧巖第五十七則の評に出づ。

【關提】白隱の別號。

たり。爾しより晝參暮請、敢て退轉せず。應又示すに「翠巖眉毛在麼、雲門云關」の語を以てす。燈下語して云はく、「錯を將て錯に就く。」應云はく、「是は則ち是、爾能く關の字に於て精彩を著けよ、他時須らく別に生涯あるべし。後來忽然として關の字を打透して、汗流れて背を浹す。急に方丈に越つて、下語して曰はく、「幾乎路を同うせん。」應大いに愕いて云はく、「夜來夢に雲門吾室に入る。爾今日關の字を透る、爾は是れ雲門の再來なり。」と。燈耳を掩うて出づ。翌日一偈を呈して云はく、「一回過雲關、丁、南北東西活路通。夕處朝遊沒、寶主。脚頭脚底起、清風。透過雲關、無三舊路。青天白日是家山。機輪通變難、人到。金色頭陀、拱手還。」と。大應筆を擲つて其後に書して云はく、「爾既に明暗投合、吾爾に如かじ。吾宗爾に到つて大いに立し去らん。只是れ二十年長養して、人をして此證明を知らしめよ。」夫れ佛國禪師は、佛光の鐘愛、夢窓の恃怙、豈容易に言を出して許可すべけんや。是れ大燈已に悟り得て分明なり。只此子の事を缺く。大應面前に到つては、尙是れ影像邊の事、牛跡を以て大海に比するが如く、一毛を以て大虚に措くに似たり。蟻螻鐵柱を撼し、蚊蟲空裏の猛風を弄す、亦快ならずや。誰か之を求めざらん。我初め江州蓮華山頭に於て、一回分明なり。後來關提窟裏に到つて、直に是れ開口不得、是より雲頭を按下して、朝參暮請す。

一日先師問うて曰はく、「忽ち大力の鬼王あつて、背後より隻手を出して、汝を捉へて焔焔たる大火坑に投ぜん、汝が輩這裏に到つて、却つて出身の路ありや。我時に起ち去る

【蓋覆却】きづをおほいかくすこと

【般若】諸法實相
【華嚴】四法界。
【法華】久遠實成
如來。

【陳操】刺史にして黃髮運に參する居士なり。

こと能はず、慚汗體に滿てり。爾しより纜に入室すれば、師問うて曰はく、『却つて出身の路ありや。』我總に答ふるに能はず。我若し汝が輩の如く、容易の心を挾まば、一機一境、豈答ふること能はざらんや。我深く從前の子細を尊信するが故に、終に一書を以て、自ら蓋覆却せず。是に於て、行住安らず、乾坤穿く、日月猶暗し。明年延享甲子の春、請うて閉關堂に退いて、日夜參詳す。師一日來つて曰はく、『大丈夫、窠窟現前せば、窠窟を恐るる莫れ。直に須らく窠窟の源底を窺むべし。』是故に道ふ、古人は死して活せざることとを愁へ、今人は活して死せざることとを愁ふと。譬へば水に墮ちて直に水底に到つて、脚跟に徹すれば、即ち能く浮び出づ。若し沈淪を恐れて、妄に手脚を弄すれば、全身疲勞して、水中に溺死するが如し。是を嶮崖に手を撒して、絶後に再び蘇ると謂ふ。汝須らく子細にすべし。我是語を聞いて、醍醐を呑むが如し。是より工夫大いに力を得て、彌鞭策を加ふ。後金剛經を閲すること數日、忽ち般若三昧を得て、身心を忘るるに至る。又之を試んが爲に、普賢行願品を見て、略華嚴法界を知る。次に法華經を見て、壽量品に到つて、豁然として法華三昧を悟る。一代時教を見ること、掌上を見るが如し、走つて師に謂うて曰はく、『學人久しく藏經を閲せんと欲して未だ成らず。今日一見に見徹し了れり。』師曰はく、『善し、汝慙慙の慶快を得たり、只陳操尙書登樓の話の如き、汝作麼生か會す。』我實を以て告ぐ。師曰はく、『且叮嚀にし去れ。』又曰はく、『官人に代つて道ひ得て、如何が尙書をして喜ばしめん。我下語すること數度、皆意に契はず、次の日入室、一轉語

【二下して曰】我門下に菴居の僧四五十員ありと雖も未だ汝が如き道ひ得る者あらずと、白隠は賞せり。

【臺山】この婆子燒菴の話は、傳燈十聯燈六に出づ。

【洛水】京師の下鴨西村柳菴の寓。

を下し得たり。師覺えず起つて我背を打つこと二下して曰はく、汝道ひ得て始めて五百意に契へり。然りと雖も汝容易にし去ること莫れ。向後自ら知る事あらん。次の日又入室、師問うて曰はく、『疎山壽塔の因縁、汝作麼生。』我曰はく、『毒手を將て人の命根を斷ぜんことを要す。』師曰はく、『命根を斷じて後、端的如何。』我曰はく、『疎山を匠人と共に隻手を出さん。』師曰はく、『未徹在。』我時に又趙州婆子勘破の話を擧して曰はく、『某當時若し在らば、州に向つて道はん、句前に勘破するか、句後に勘破するか。』師、州に代つて曰はく、『驚直に去れ。』と。又曰はく、『恁麼ならば臺山の婆子、和尚に勘破せらる。』師遽に問うて曰はく、『汝何れの處に向つて相見せん。』我擬議す、師面目を振轉して、聲を勵して曰はく、『不是不是。』と。次の日入室、師我來るを見て、急に手を展べて曰はく、『我手何ぞ佛手に似たる。』と。我語下に向つて、一轉語を下す、師又大いに之を賞歎す。我乃ち曰はく、『師適來婆子燒菴の話を問ふ。時に某婆子妙手の處を蹉過す。婆子恁麼に道ふが如き、妨げず此僧の心魂を驚落して、天下の人を疑殺せん。某菴主に代つて、一轉語あり。女子を趨住して道はん。我婆子の供養を受くること二十年。』と。聲未だ絶えざるに、師威を振つて一喝す。其聲隨に徹して、胸痛むこと累日、身心恍惚として、雲霧の中に在るが如し。自ら謂へらく、『我悟り得て分明なり。甚に因つてか是の如くなる。定んで知る見性の眼ありと雖も、禪定の力未だ熟せず。』と。是に於て、誓つて禪定を成ぜんと欲す。日往き月來つて、依然として自在ならず、後來洛水の東に遁居して、門戸杜絶して、音信通ぜず。

【洛浦】諱は元安
夾山會に嗣ぐ。

朝辛暮苦、恰も刑割の人の、指を屈して日待つが如し。大いに明珠を弄して、刹那も放たず。或は得或は失、正念相續し難し。悲懼胸に塞り、坐起安からず。是の如くすること半百日にして、忽然として落節して、明珠を擊碎し了れり。露躑躅赤酒酒、實に下載の清風を會得す。然りと雖も、用處未だ徹頭ならず、再び死牛に鞭つて、一氣に相進んで、齒を切り拳を握つて、身あることを見ず。凍日寒夜、汗常に衣を濕す。或は睡魔盛んなる時、加ふるに針鋒を以てす。骨に入り髓に徹して、飲食味なし。我病多きを以て、能く他の病を知る。我病を治するに隨つて、亦藥性を諳んず。我病漸く治して、却つて他の病を憂ふ。他の病あるに依つて、我病再び發す。洛浦禪師曰はく、『末後の一句、始めて牢關に到る。』と。誠なる哉是言、生死を透脱し、正印を提持するは、全く是れ此個の時節なり、唯上頭の關振子を踏著する底は、便ち諳悉せん。我も亦是の如し。只三千里外、斯裏の人あつて、我是病を救はんことを要す。若し又然らずんば、天下の人の貶剝するに一任す。

宗門無盡燈論卷之上

終

宗門無盡燈論 卷之下

不菴主圓慈撰す

【一】力用。行力受用、この一篇は些子向上の一著子を識得して、顧明念相續を試むることを述ぶ、これこの篇の力用の宗趣なり。

【明道】傳燈一の達磨の傳記に出づ
【洞山】諱は良价雲岩晟に嗣ぐ
【金剛】菩薩自在王經の文なり
【一生】傳燈十五碧巖九十七則の評等に出づ

【一】力用 第七

人に今古あり、道に古今なし。人能く道を修す。道を得て人を忘る、然るときは則ち道即ち是れ人、別に人あるにあらず。是故に、道若し古と等しきときは、則ち人も亦古と等し。其古と等しからざる所以の者は、只見道超詣ならず。履踐明白ならざるが爲なり。今向上の一著を識得す。亦須らく履踐分明なるべし。正念相續を求むと言ふ者は、只是れ此箇の時節なり。達磨大師曰はく、『明道の者は多く、行道の者は少し。』洞山和尚曰はく、『相續又大いに難し。』正受老人曰はく、『正念相續の者は、萬人の中得難し。』と。

昔金剛齊菩薩、行道の時、一りの魔王あり、千年の前後に隨つて、其蹤跡を求むるに、終に見ること能はず。又洞山和尚一生住院、土地神一たび瞻禮せんと欲するに、終に得ること能はず。此は是れ古人正念相續の様子なり。然りと雖も、若し向上の些子を傳へずんば、大好鬼窟裏の活計、已に能く向上の旨趣を知ると雖も、履踐明白ならずんば、只是れ抱道底の人、尙未だ大用を發すること能はず。是を以て、古來多少正知見の人ありと雖も、

大機大用を得る底は、中に就いて又稀なり。

黃巢禪師曰はく、『馬祖下八十四人あり。道場に坐して、馬師の正眼を得る者は、止三四人なり。靈源清禪師、常に學者に謂つて曰はく、『宗門の正人得難し。晦堂を離れてより後見ゆる所の真正の宗師は、惟東山法兄一人のみ。』大慧禪師曰はく、『老南下の尊宿、五祖只晦堂眞淨の二老を肯ふのみ。自餘は皆他を肯はず。』又應菴曰はく、『豈見すや。』大隋和尚道はく、『我七十餘員の善知識に參ず。大眼目を具する底、祇二一あり。其他は盡く正知見を具す。在天下大眼目を具する、眞の善知識は、唯法叔老師一人のみ。黒漆の竹篋、海嶽を掀翻して、從頭に打過す、是れ死馬醫なりと雖も、中に就いて要妙なり。』又癡絶和尚云はく、『予三十年、叢林の中に在つて遊ぶ。當時大眼目を具する者は、惟老松源一人のみ。若し又然らずんば、佛法豈今日に到らんや。』

須らく知るべし、此中又是れ一重の關鎖なることを。然るに彼上古の諸師、各各皆格外の知用あり。今是の如く、中に就いて一二を擇ぶ者は、大いに見處あるのみ。今時の師、擇法眼なき故に、妄りに古人を嘲り、己が過を省みず。錯つて吾道古人に勝ることに在りと謂へり。笑ふべし、彼黃巢等の指示する所の者は、且く置く。其餘の宗匠と稱する所と雖も、豈今時の明師と、目を同うして語るべけんや。若し他をして今時に在らしめば、道德世を動して、天下の龍象、悉く下風に立たん。是故に、當に知るべし、祖師人を擇ぶこと難中の難、細中の細なることを。

【馬祖下】傳燈の

【黃巢】傳記に出づ

【靈源】諱は惟清

【晦堂】心に嗣ぐ、この語は大慧武庫拾遺に出づ

【晦堂】諱は祖心

【東山】五祖演の

【大慧】諱は宗杲

【眞淨】諱は克文

【應菴】諱は曇華

【大隋】南堂諱は元靜、五祖演に嗣ぐ

【癡絶】諱は道沖

【松源】諱は崇嶽

【密菴傑】に嗣ぐ

【擇法眼】大隋靜上堂の語に十門ありその五

【馬山】諱は雲祐

百丈海に嗣ぐ。

【仰山】諱は惠寂

溪山禪に嗣ぐ。

【細賦】微細密

【大小本】大は圓

照宗本、小は大通

善本の兩禪師をい

ふ。善本は宗本に

嗣ぐ。

【興化】諱は存獎

臨濟玄に嗣ぐ。

【風穴】諱は延沼

南院顯に嗣ぐ。

【五祖忍】弘忍大

師は四祖道信に嗣

宗門無盡燈論卷之下

昔溪山仰山に問ふ、「馬祖下の八十四人、幾く人か大機を得る。幾く人か大用を得る。」仰

曰はく、「百丈は大機を得。黄檗は大用を得たり、餘は只唱導の師のみ。」と。看よ我臨濟

の兒孫、各超師の作あり。終に宗師の句下に死在せず。千辛萬苦、骨に入り髓に徹して、

一一自己の胸襟より、流出し將ち來つて、互に隻手を出して、眞風を扶起す。是を以て、

宗風綿綿として絶えず。古に曰はく、「雲門は言句を以て救ひ、臨濟は機鋒を以て救ふ。」

其實は然らず。今雲門の妙唱あつて、若し臨濟の大機なくんば、恰も天子の位あつて、將

軍の威なきが如し。其弊畢竟して玄微に墮せん。玄微變じて細賦と作らん。大小の本より

以下、皆是の如し。然して又臨濟の大機あつて、若し雲門の妙唱なくんば、却つて將軍の

威あつて、天子の位なきに似たり。其弊畢竟して嶮奇に墮せん。嶮奇轉じて羸強と作らん。

今時の諸禪蓋ね之を出でず。彼雲門臨濟の如き、皆是の如くならず。已に能く大機妙唱の

外に超出して、亦大機妙唱の内に遊戯す。其弊なる者に及んでは、遊戯の跡を認めて、窠

窟を成するが故に、只我臨濟、興化風穴の諸祖より、傍に雲門の提唱を挾んで、宗風一轉

して、佛法日に新なり。是に依つて、五祖忍大師、顯輪に乗じ來つて、再び東山の法門か

開いて、雲門の曲を唱へ、臨濟の劍を提ぐ。猶車の兩輪の如し。門風大いに立つて、佛祖

の正脈を中興す。是故に、兒孫をして斷絶せざらしむることを致す。

眞淨頌あり、曰はく、「雲門臨濟百花春。一一靈機總有神。」と。總に神あらば、祖庭

復春ならずや。是より圓悟、虎丘、應菴、密菴、相紹いで世に出づ。務めて此道を行じて、

【鶴峯】 松源をいふ。

【一】 師承。此一箇は、吾宗若し師承は、皆是れ外道にして、眞の種草に非ず未だ眞正の明師に逢著して、正宗に荷負せんことを述べ。

【玄策】 六祖慧能に嗣ぐ。
【永嘉】 諱は玄覺六祖慧能に嗣ぐ。

宗風を扶起す。是故に、松源示寂に臨んで、衆に告げて云はく、『久參の兄弟、正路上に行者あり、只黑豆の法を用ふること能はず、臨濟の道、將に泯絶して聞くことなげんとす。傷い哉。』虚堂拈じて云はく、『鶴峯老師大いに杖に倚つて馬に騎るに似たり。儼仕の患なしと雖も、未だ免れず傍觀の者の醜きことを。』と。咄、大小の虚堂、松源の毒に中つて、亦人を害せんと欲す。果して我東海第一の祖を煩はすことを致して、殊、兒孫に及ぶ。若し正受老人四十年勤苦して、幸に此毒味を辨別するなくんば、後代の兒孫、膺を囉むとも及ぶことなげん。諸見はれ何の時ぞや。誰か是れ其任に當る。請ふ高く頂門の一隻眼を堅亞して、務めて此道を行じ、已墜の眞風を扶起して、兒孫をして斷絶せしむること莫れ。只此力用の一品、最も大要爲り。正宗を扶起して、正眼を流通する者は、都て斯中に在り、然と雖も、末後の指南、尙言詮に在らず、這裏豈言を以て議論すべけんや。錯錯、只大力量の人、一肩に擔荷して、正宗を扶起して、祖師の眞風をして斷絶せしむることなげんことを待つ。

【二】 師承 第八

向上の一著地に墮ちて自從り以來、師承を貴ばず、自悟自見、互に邪正を論ず。己が智分を恣にして、古人にもづかす。昔東陽の玄策禪師、永嘉の玄覺大師を訪ふ。其と劇談して、言を出すこと暗に諸祖に合ふ。策云はく、『仁者得法誰をか師とす。』曰はく、『我方

【威音王】太古の佛名なり、則ち天地未開以前と同じ

【陸州】陳尊宿諱は道明、黄檗運の嗣。
【龍牙】諱は居遁
【曹山】諱は無學
【翠微】諱は無學
丹震然に嗣ぐ。

等の經論を聽くこと、各師承あり、後維摩經に於て、佛心宗を悟る、未だ證明する者あらず。【威音王】已前は即ち得たり。威音王已後、無師自悟は、盡く是れ天然の外道。又應菴和尚曰はく、『祖師西來、特に此事を唱ふ、祇言外に領略し、直下に頂に透り底に透ることを貴ぶ。何ぞ禪床角頭、朝呪暮呪するを待つて、然して後佛法禪道と爲ん。正に是れ人の眼を瞎す。又師承を捨てて自ら求むべからず。自ら求めて得ば、眞の九十六種の眷屬なり。』と。今時總に師承あらざるが爲に、所見未だ妙を盡さず。各己見を出して人を接す。覺えず學者の眼を瞎却す。是より轉轉相接して、一盲衆盲を引く。夫れ師承の一事、最も省要たり。古人見性の源に達し、許多の關を透る。明明了了として、一點の疑なく、天下に横行して、大いに口を開いて商量する者、末後此大眼目を具する底の宗師に撞著して、始めて此子向上の宗旨を知る。是に於て誠を參じて參決して、終に師承の義あり。法恩を荷負して、造次にも忘れず、是を法嗣と謂ふ。從上の祖師、的的相承して、皆是の如し。然して雲門、睦州に脚を拶折せられて、豁然として大悟す。却つて雪峯に到つて法を嗣ぐ者は、大いに故あるのみ。龍牙行脚の時、分明に眼を具す。他の曲象木床上の老和尚、具眼か不具眼かを驗んが爲に、到る處に先づ一錫を下す。翠微臨濟も收拾し得ず。後來洞山逆流の處に於て、始めて頭を回らし、從前錯つて工夫を用ふることを識得して、終に洞山に承嗣す。後人は事大いに子細あることを知らず。却つて虛堂の普説に依つて、錯つて道ふ、龍牙に受用、是れ眞の向上の意旨と。若し恁麼に會せば、洞山逆流、

又何れなほの處ところにか著つけん。他た既に洞山とうざんに嗣つぐ者は何ぞや、殊ことに知らず虛堂きょどう是こゝの如ごとく説とく者は、汝なんぢが錯ちやくつて龍牙りゆうが眼まなこなしと會あせんことを恐おそれて、汝なんぢをして雪竇せつたう實じつに頌うすることを知らしめんと欲ほつす。縱たとひ使た活祖くわくそ意いを明あらむるも、又また這裏こゝに到いたつて、別べつに生涯じやうがいあり。是こゝ故ゆゑに、又また龍牙りゆうがの塔たかを禮らいする頃ころに曰いはく、『翠微すいゑ濟さい北腕頭ほくわんとう短みじ、洞水どうすい逆さか流りゅう方かた到いた家いえ。』と。是こゝれ洞水どうすい逆さか流りゅうの處ところに於おいて、始はじめて家山かざんに到いたる。從したが前の見解けんげ、未いまだ是こゝれ眞まことの家山かざんにあらざるが故ゆゑに、古德ことくの承しょう嗣し皆みな是こゝの如ごとし、今こん時とき承嗣しょうしの旨趣しゆすいを知らず。往わう往わう錯ちやくつて種しゆ種しゆの議論ぎろんを作なす。是こゝ故ゆゑに、師承ししやうなき者は、先まづ須よらく佛祖ぶつそ的てき的てき相承さうじやう底ていの大宗師たいしやうしを尋覓じんみすべし。師承ししやうある者は、師しの密旨みつしゆを究きうめて、已すでに能よく究きうめ了まらば、又また孤負こふすること莫なれ。

【長蘆】 鐵脚諱は應夫、圓通秀に嗣ぐ。
【佛照】 諱は德光大慧杲に嗣ぐ。

昔むかし開ひらく聖せいの覺老かくらう、始はじめ五祖ごその錯鐘さくしゆんを受うけて、後ご來らい所得しよとくに本もとづかず。錯ちやくつて長蘆ちやうろの夫鐵脚ふてつやくに嗣つぐ、一いち辨べん他たに酬しゆゆ。時ときに胸むね中ちゆう忽とつち癡ちを發はつして愈いえず竟つひに卒しゆつす。秀巖しゆがん初はつめ石門せきもん學がくの下もとに於おいて大悟たいご、後ごに佛照ぶつしやうの光くわうに嗣つぐ。是こゝ故ゆゑに胸むね中ちゆう常じやうに平穩へいゑんならず。或あるは笑わらひ或あるは哭なす。提唱ていじやう多おほくは謠歌じやうかの如ごとく。或あるは他たの頂相ちやうさうを點開てんかいして曰いはく、『我われ此老こゝ和尚じやうに點却てんせつせらる。』と。是こゝれ皆みな恩義おんぎを失しつが故ゆゑに、此こゝ苦報くほうを招まねく。往わう往わう師承ししやうの本もとづく所ところを知らず。或あるは勢位せゐを逐おひ、或あるは人情にんじやうに墮だして、東行とうぎやう西行せいぎやう、恰たも矮子わいしの戲たがひを見るが如ごとし。他たに隨したがつて上下じやうげす。或あるは實證じつじやうある者ものも、亦また師承ししやうなし。或あるは師承ししやうありと雖いども、又また眞傳まことんに非あらず。

古人こじん曰いはく、『佛手ぶつてを授さうけ、祖祖そそ相傳さうだんふ。』と。今こん時ときは然しからず。却かへつて師承ししやうを以もつて、住山ぢゆうざんの表示へひじと爲なす。爭いか佛祖ぶつそ相承さうじやうの深旨しんしゆを知ることを得えん。大おほいなる哉や我宗わがしゆ、深ふかい哉や我道わがだう。之これ

を得て究め難く、之を究むとも盡し難し。之を究め之を盡すとも、其妙徹し難し。

昔泉大道、慈明に參す。明曰はく、「片雲谷口に横ふ、遊人何れの處より來る。」泉顧視して

曰はく、「夜來何れの處の火ぞ、古人の墳を燒き出す。」明曰はく、「未在更に道へ。」泉虎聲

を作す。明打つこと一坐具、泉、明を推倒して坐に就かしむ。明も亦虎聲を作す。泉退身

して笑つて云はく、「我八十餘員の善知識に參す。唯師のみ以て臨濟の正宗を繼ぎ得べし。」

貴ぶべし、古人唯所得常情を出づるのみに非ず。又却つて股に錐して以て正宗を繼ぐ。

學者苟も他の風を聞いて、敢て愧報を發せざらんや。

白雲一日、「室中雲門衆に示す。如許の大栗子、幾く箇を喫し得る。」といふを擧す。衆下

語、皆契はず。五祖に問ふ。祖曰はく、「羊頭を懸けて狗肉を賣る。」雲之に駭く。五祖嘗て

曰はく、「我參すること二十年、今方に羞を識る。」と。後に靈源聞いて嘆じて曰はく、「好

し識羞の兩字。」と。因つて正續の銘を作る。遂に銘中に載す。初め黃龍、楊岐、二宗相爭

ふ。是に於て清、五祖正續の銘を作る。之を推して正續と爲るなり。大慧禪師、應菴金輪

の提唱を聞いて甚だ喜ぶ。乃ち曰はく、「楊岐の正脈、此老に在り。」と。遂に正傳の衣並に

頌を將て之に寄す、頌に曰はく、「坐三斷、金輪第一案。千妖百怪盡潛蹤。近來又得二

眞消息。」報道楊岐正脈通。是より應菴を以て正脈と爲す。看よ古人往往に正脈

を論ずることを。大慧、宗杲禪師は、眞の絶世の宗眼なり。虛堂讀じて曰はく、「前に釋迦な

く、後に彌勒なし、天上人間兩箇なし。」と。然も其れ應菴を推して正脈と爲す所以の者

は、將何の謂ぞや。齊しく是れ佛祖の眞傳を續ぐと雖も、中に就いて正脈、又甚だ奇怪なり。只知る佛法甚深にして、而も此要あることを。先づ須らく勤めて此道を行すべし。已に恁麼にし去るすら、尙正宗を得難し。若し又然らずんば、何ぞ能く我宗を扶起せん。今時師承の深旨、尙未だ夢にだも見ず。豈此正脈の論を知らんや。但眞正參玄の上士、這裏に向つて屈を雪めよ。

【三】長養第九

【三】長養。この一篇は、傳法師承の後、歩を退いて實に就き、世間を杜絶し、名聞を除く去すること、三十年、聖胎長養、天龍推轂の時節あらんことを述ぶ。【忠國師】六祖慧能に嗣ぐ。【南泉】諱は普願馬祖一に嗣ぐ。【法常】大梅山に住す、馬祖一に嗣ぐ。

【汾陽】諱は善昭首山念に嗣ぐ。【四祖】道信大醫は三祖僧璨に嗣ぐ。

開悟禪師曰はく、「梶子は當に痛く死生を以て事と爲して、務めて知見解礙を消して、佛祖傳付する所の大因縁を徹證すべし、名聞を好むこと勿れ、歩を退け、實に就いて、愈潛み遁れて愈匿るべし、諸聖天龍、將に人を推し出さんとするのみ。六祖大師傳衣得法已に了つて、南に遁ること十六載、南陽の忠國師、心印を受けしより、南陽白崖山黨子谷に居ること、四十餘祀、山を下らず。道行帝里に聞ゆ。南泉錫を池陽に憩ふ。自ら禪齋を建て、影山を出でざること、三十餘載。大梅法常禪師、梅子眞が舊隱に入つて、松花を食ひ、荷葉を衣て、勤苦すること三十年。風穴和尚、日は村落に乞ひ、夜は松脂を燃して、單丁なる者七年、汾陽和尚、手を以て擲擻して曰はく、「我は長行粥飯の僧、佛心印を傳ふることに、細職に非ざるなり。」と。前後八たび請すれども、堅く臥して應ぜず、楊岐破屋二十年、滿床雪の眞珠を撒す。四祖大師、心を攝して寐ることなきこと、凡そ六十年。瀉

【大安】長慶大安は百丈海に嗣ぐ。

【二十年】五條橋下に乞者隊裏に混し。
【濃陽】美濃の伊深の正眼寺。

【南陽】前の忠國師。
【備瑣】明瓊南岳山に住す、四祖の嗣。
【見】親子、寒山、拈得、善化。
【善化】鎮州に住す、盤山積に嗣ぐ。

山和尚、數十年橡栗を煮て喫す。晚年大安來る、遂に千五百の衲を著く。慈明和尚の如き、定に祖底の精進懂なり、汾陽に在つて、河東の苦寒を顧みず。辨道錘を股に刺して眠らず、其得力、果して西河の獅子王と爲る。大燈國師、卒に老祖淵粹の命を受く。長養する者二十年、果して大應遠大の高徳を彰す。關山國師、大燈の道髓を得てより、深く濃陽の山谷に入りて、精修すること多年、晝は細民の奴僕と作り、夜は巖房に入りて宴坐す。其餘の明師、此に匿れ彼に潛んで、精進勇猛なる者、枚擧に暇あらず。正受老人の如き、世縁を放捨し、萬事を休息して、勤苦すること四十年、賢侯請すれども出でず、衲子責むれども起たず。曾て群狼の郷民を害するに當つて、數日竊に處處の茶毘葬埋の間に至りて、終夜宴坐す。彼怒氣を以て、耳鼻を嗅ぎ著く。或は咽喉を吹く時、切に正念相續、間斷ありや否やを試む。皆是れ法の爲に身を忘るること是の如し。

從上の古人、一箇簡として然らざるごとなし。中に就いて顯なる者あり、密なる者あり。深く山林に入つて、塵世を杜絶し、養道の跡、動もすれば人心を感ず、謂ゆる隱中の顯、南陽、懶瓊の如き是なり、時處を擇ばず、正念相續して、見に滲漏なき者、人其蹤跡を知らざることなし。謂ゆる隱中の密、趙州、善化の如き是なり。只其習氣等しからず、業緣各別なるに隨つて、或は山林に隠れ、或は市廛に隠れ、或は叢林に住し、或は獨室に居す。是れ顯是れ密、初より定法なし。時に隨ひ變に應じて、藥の病を治するが如し。病治し藥除けば、己を推して人に及ぼす、是れ古人出世、方便の消息なり。是故に、古人所證の境

界に到らんと欲せば、切に須らく子細にすべし。従前多少の道理を明らかに得て、佛祖不傳の一著に通達し、宗旨失はず、師承錯らさず、始めて是れ長養底の端的なり。請ふ此意を以て、道を養ふこと多年せよ。名利懐に掛けず、財寶念と爲す。須らく佛祖已墜の眞風を扶起せんことを要すべし。

圓悟曰はく、『古人既に得道の後、茅茨石室の中、折脚跏趺内に、野菜根を煮て喫して日を過し、且名利を求めずして、放曠として縁に隨つて一轉語を垂れて、且佛祖の恩を報じ、佛心印を傳へんことを要す。納僧家大事了畢の後、長年只是れ養道の一法のみ。浪に修造を好み、強ひて學者を招くこと莫れ。古人の寺を建て人を聚むるは、自ら求めて之を致すに非ず。道業已に熟すれば、之を拒めども衲子益至り、求めざれども精舍日に興る。圓悟心要に曰はく、『慈明昔汾陽を辭するるとき、陽視して云はく、『修造は自ら人あり、且佛法の興に主と爲れ』と。爾しより五たび大刹に據れども、一椽を動ぜず、唯臨濟の正宗を提振して、遂に楊岐、黃龍、翠巖の三大士を得て、子孫寰海に徧く、果して付授する所に辜かず。蓋し古人以て荷擔すべきの士を擇んで、輕んぜざること此の如し。信に梵苑を嚴飾し壯麗にすることは、未だ以て佛法を奇とするに足らず。

【圓悟心要】 圓悟克勤禪師の法語を集めし書上下二卷あり。

【荷擔】 大法を荷ふ。

又大燈國師遺誡に曰はく、『老僧行脚の後、或は寺門繁興し、佛閣經卷金銀を鏤め、多衆鬧熱、或は誦經諷呪、長坐不臥、一食卯齋、六時行道。縱使恁麼にし去ると雖も、佛祖不傳の妙道を以て、胸間に掛在せずんば、忽ち因果を撥無し、眞風地に墮つ、並に是れ邪

【四】流通の一篇は、吾宗別に重んずる所あり、宗通説通を會して、向上の爪牙を具し、人の爲に粘を解し縛を去り、専ら傳法度生を事とするを述ぶ

魔の種族なり。老僧世を去ること久し。兒孫と稱することを許さず。儻し一人あり、野外に綿絶し、一把茅底、折脚鑊内に、野菜根を煮て喫して日を過して、專一に已事を究明する者は、老僧と日日相見、報恩底の人なり。誰か敢て輕忽せんや。勉旃勉旃。」

【四】 流通 第十

傳法度生は、衲僧の本志なり。龍樹大士云はく、『假使頂戴して塵劫を経て、身をもつて床座を爲して、三千に徧しとも、若し法を傳へて衆生を度せずんば、畢竟じて能く恩を報ずる者なし。』又古人云はく、『且吾宗重んずる所の者は、惟宗通説通に在り。向上の爪牙あつて、人の爲に粘を解し縛を去るを、傳法度生と謂ふ、餘は皆末事なり。』と。今已に向上の些子を傳へ、已墜の宗風を繼ぐ者、第一に須らく佛祖の恩を報ぜんことを思ふべし。何をか報恩と謂ふ。謂ゆる向上の些子を提持して、以て一箇兩箇、宿に靈骨を扶む底を接得して、他をして此正宗を繼がしめ、將來に流布して、佛祖の慧日をして斷絶せしむることなけんことを要す。若し或は拈泥滯水、路布を打し、策笈を列ねて、人を鈍置せば、終に當らす。

趙州和尚曰はく、『若し老僧をして、伊が根機に隨つて人を接せしめば、自ら三乘十二分教あつて、他を接し了れり、老僧が這裏、只自分の事を以て人を接す、若し接不得ならば、自ら是れ學者の根性遲鈍にして、老僧が事に干らす。』虚堂和尚曰はく、『豈今時濫に師

席に據り、實法を以て來客を籠罩し、寮舎の穩便を以て、人才を養育し、推衣讓食を以て苟も纏綿を圖り、以て遞に相援引して、本宗を盛んにせんと欲するに比せんや、苦なる哉苦なる哉、正音絶えぬ。」

古來の尊宿、動もすれば劍刃上に於て、人を求むるすら尙一半を得ず、何て況んや繩墨の法をや。是故に従上の祖師、大眼目を具する底、容易に人を許可せず、汝看よ法眼下の如き、當時人を得ること麻の如し。其家を世にする者、我未だ之を聞かず、臨濟門下、興化、南院より以來、其法を嗣ぐ者、各一二あるのみ。是れ他腕頭短うして、人を度し得ざるにあらず。己が得力人に過ぐるが故に、容易に人を許可せず。今時彼多衆の關熱寺門の繁興を以て、佛法の大幸と爲るが如き、實に笑ふべし、只其垂手の方便、機輪の通變に到つては、須らく自の力用の中に向つて求むべし、切に別人の口頭に向つて求むること莫れ。

巖頭曰はく、「他日若し大教を播揚せんと欲せば、一一自己の胸襟より流出し將ち來つて他の與に蓋天蓋地し去れ。」と。請ふ是の如く流通して、箇の種草を求めば、將來に傳布して、斷絶せしむること莫からん。佛法危きこと累卵の如し、恐らくは滅却し去るに至らん。譬へば諸人夜曠野に在つて行くに、狂風暴雨、提燈を吹滅す。時に一人あり、只燈の滅せんことを恐れて、身を以て左右に擁護し、餘は總に顧みざるが如し。佛祖正燈も、亦復是の如し、若し一箇兩箇、眞正の種草をして、此正燈を繼がしめずんば、後代の兒孫、何を

以て依止と爲ん。彼闇夜曠野の燈の如き、一旦に吹滅して、之を續ぐべきなくんば、衆人處を失して、遂に方所を見ること能はず、悲まざるべけんや、夫れ諸宗の方法、及び禪定解脱、智慧辯才、見性悟道、一切の要路、皆經論史書あつて、分明に説著すれば、眞傳なしと雖も、以て自ら解し自ら到るべく、只我祖宗門下、向上の些子の如き、若し師承なくんば、畢竟其妙處を盡すこと能はず。悲い哉、一旦宗風を滅絶して繼がずんば、天下の佛法、悉く皆地に墜ちん。何を以ての故に。天地廣しと雖も、日月二なし。國家の興廢、上一人に歸す。今若し佛法衰滅すれば、王者の道も亦隨つて危うからん。我今時の佛法を見るに、其道を得ることなし。但國家の衛護と作る。あらゆる善根、皆福德を成ずるが故に、佛法混亂して、正法を聞き難し。各己見を出して、是非鋒のごとくに起る。彼持戒苦行の如き、錯つて功德を求むるが故に、多く人天の勝樂を受く。稱名念佛は、戲樂を貪求するが故に、大福德の家に生ず。諸天の淨土あり、鬼神王の淨土あり、八部衆の淨土あり。正路に依らず、錯つて往生を求むる者、多く之を出でず。眞言、天台、諸餘の聖道、各先達の明師なきが故に、只文字に著して、經意を究めず。勝負の修羅、人我の無明、却つて地獄の業を長ず。眞修ある者も、亦異見を出でず。我禪宗の如き、一箇眞正の者を求むるに、終に得べからず。悉く二乘外道の見に墮して、自ら覺知せず、是故に、博達の君子、各其宗意を究めて、衆生を引導す。其胡亂に人を教へんよりは、如かじ、教ふることなけんには。何を以ての故に。自ら錯ることは則ち得たり。恐らくは多少の好人を引いて、

【節目】 始め宗由より、終り流通に至るまで。

悉く邪道を成ぜん。實に悲むべし。我今是の如く論ずる者は、已むことを得ざるなり、只佛法地に墜ちて、慧日永く滅せんことを恐るるが爲に、強ひて節目を生じて、此消息を知らしむ。一切衆生、我是正法は、僧俗男女を論ぜず、貴賤老少を擇ばず、根に大小なく、機に智鈍なく、只大心ある者、畢竟じて成辨せずといふことなし。是故に、深く此法を信じ、切に解脱を求めて、分に随つて歩を發して、途路の長短を説くこと莫れ。

華嚴合論に曰はく、『此經の法門、何人に付囑すとならば、此經法は大心の凡夫に付囑す。經に曰はく、『此經法、餘の衆生の手に入らず。』解して云はく、餘の衆生とは、三乘及び外道、人天に樂著し、及び出世の樂を求むる者なり。何を以ての故に。此經は、三乘の菩薩に許さず。六神通を具するなら、尙自ら未だ經を聞いて信を生ずること能はず。何に況んや二乘人天外道をや。經に曰はく、『唯如來の家に生ずる法王の眞子を除く。』即ち大心の凡夫、能く信を生じて證入するが故に、佛家に生じて、已に佛家に生る。諸大菩薩を言はず。常に衆生の爲に説法すとも、大心なき凡夫の信證するをば、付囑と名けず、流通と名けず。人の信するなく、人の悟入するなきを以ての故に。經に曰はく、『若し此子なくんば、此經當に滅すべし。若し是の如くならざれば、諸大菩薩の、已に佛家に生る者、已に是の如く無量の佛世界の微塵數あるが故に、如來何ぞ此經の當に滅すべきことを念ずることを須ひん。既に佛家に生ずる大菩薩衆を念せず。明に知る當に大心の凡夫を念すべき。已に入聖の者と爲るに非ず、當に知るべし、此經は大心の凡夫に付囑するが故に。』

【經を】 大乘經典
見性法門。

以上わがこ此この正しやう法ぽうも、亦また復くわん是のの如ごとし。一切いつた大だい心しんの凡ぼん夫ぶ衆しゆ生じやうに付つ嘱しやくす。夫それれ大だい心しんとは、能よく此この法ぽうを信しんずる、是これを大だい心しんと謂いふ。此この法ぽうを信しんぜざる者もの、縱たと使え六ろく神しん通つうを具ぐし、大たい光くわう明めいを發はつし、無む量りやうの聖じやう道だうを成じやう就じゆすとも、畢ひつ竟じやう皆みな是これれ小せう心しんの衆しゆ生じやう、佛ぶつ家けに生しやうずること能あたはざるが故ゆゑに、菩薩ぼさつの行ぎやうを起おこすこと能あたはざるが故ゆゑに、經きやうに曰いはく、「佛ぶつ子し設しやくし菩薩ぼさつありて、無む量りやう百ひやく千せん億いふ那な由ゆ他た劫けつに於おて、六ろく波は羅ら密みつを行ぎやうじ、種しゆ種しゆの善ぜん薩さつ分ぶん法ぽうを修しゆ習じゆすとも、若もし未いまだ此この如ごとく來き不ふ思し議ぎ大だい威い德とくの法ぽう門もんを聞きかず。或ある時とき聞き已いつて、信しんぜず解げせず、順じゆんはず入いらずんば、名なけて眞しん實じやくの菩薩ぼさつと爲なることを得えず。如ごとく來きの家けに生しやうずること能あたはざるを以もつての故ゆゑに。若もし此この如ごとく來き無む量りやう不ふ可か思し議ぎ無む障じやう無む礙い智ち慧ゑの法ぽう門もんを聞きくことを得え、聞き已いつて信しん解げし、隨ずい順じゆんし悟ご入にせば、當あたに知しるべし此人このひとは、如ごとく來きの家けに生しやうじ、一いつ切せつ如ごとく來きの境きやう界がいに隨ずい順じゆんし、一いつ切せつ諸しよの善ぜん薩さつの法ぽうを具ぐ足そくす。何なにをか如ごとく來きの家けに生しやうずと謂いふ。差さ別べつ悟ご後ごの妙めう行ぎやうを父ふと爲なし、根こん本ほん見けん性じやうの大だい智ちを母ぼと爲なし、中ちゆうに於おて一いつ念ねん信しんを生しやうずる時とき、早はやく如ごとく來きの胎たう中ちゆうに託たくす。是これより途と路ろの長ちやう短たんを論ろんぜず、步ふを發はつして進しん修しゆし、分ぶんに隨ずいつて參さん詳じやうする者ものは、皆みな十じゆ月げつの消しやう息そくなり。時とき到いたり功こう滿まんつる、是これを滿まん月げつと謂いふ。此時このときに當あたつて、種しゆ種しゆの境きやうを現げんする者ものは、子こ胎たうを出いでんと欲ほつするの前ぜん表へうなり。學がく人にん現げん境きやうに著ちやくせず、單たん單たんに參さん取しゆせば、一いつ朝ちやう驚きやう然ぜんとして現げん前ぜんす。是これを如ごとく來きの家けに生しやうずと謂いふ。譬たとへば誕たんと生じやう王子わう子しの、才さい智ち力りき用じゆう、未いまだ父ふ王わうに似にずと雖いへど、種しゆ族しゆく體たい相じやう、一いつ切せつの尊そん貴き、父ふ王わうに少すくしも異いなることなし。百ひやく官くわん卿けい相じやうの才さい智ち力りき用じゆうある者ものも、亦また却かへつて之これを尊そん崇じゆうせずんばあるべからざるが如ごとし。如ごとく來き法ぽう王わうの眞しん子しも、亦また復くわん是のの如ごとし。智ち慧ゑ辯べん才さい、解げ脫だつ神しん通つう、未いまだ佛ぶつに似にずと雖いへども、明めい了りやう

に諸佛の體相を具足し、明了に諸佛の種性を圓滿し、智慧性、辯才性、解脫性、神通、大慈大悲、大方便、大光明、佛と少しも異なることなく、菩薩羅漢の解脫神通ある者も、亦却つて之を尊崇せずんばあるべからず。豈快ならずや。彼中間に於て、其現境に迷うて、種種の見を起す者は、猶墮胎の如し、終に諸佛の妙身を成ずること能はず。只再び正法に歸して、信入修證の者を除く。何をか菩薩の行を起すと謂ふ。謂ゆる見性の一理に滯らず、佛祖の言教を以て、百鍊千鍛、多少の牢關を透破し、祖師向上の些子を傳へ、已墜の眞風を扶起し、もつ此一著子をして提持して、普く將來を利益して、慧日をして斷せざらしむ。是を菩薩行と謂ふ。譬へば王子の漸く才智力用を學び、父王の位を紹ぎ、普く教宣を垂れ、天下を按撫し、亦己が眞子をして能く其位を紹がしめ、轉轉相承して、永く國家を利す。若し是の如くならずんば、種性ありと雖も、却つて凡庸に同じく、畢竟益なきが如し。衲僧若し見性の一理に滯り、菩薩の行を起さずんば、證悟ありと雖も、何の用を作すに堪へん。汝等諸人、應に是の如く知るべし。此は是れ決定底の道理、終に疑ふべき者なし。然らば則ち汝能く恁麼に修入して、如來の家に生じ、恁麼に修行して、菩薩の行を起さば、其の信力未だ足らず、道力未だ滿たざる者と雖も、一たび這裏に到つて、深く淨信を生ずる者は、皆是れ已に如來胎中に在り。已に胎中に入つて、豈生ぜざるの理あらんや。只中間邪見に墮つる者を除く。餘は皆佛祖眞の種性を成就す。

是故に、經に曰はく、「聞いて信ぜざる、尙信種を成ず、何に況んや深く淨信を生ずる者

をや。夫れ人身を得る者は、爪甲の土の如く、人身を失ふ者は、大地の土の如し。今幸に得難き人身を得。何ぞ此正法を聞かざるや。汝等往々、生死を恐れず、因果を明らめざるが爲に、悠悠として只目前の境界を逐うて、身後の消息を念はず、汝が謂ゆる種種の財寶を求めて自分を資益するが如きは、是れ飢寒の患を恐るるにあらすや。胡爲れぞ輪廻の患を恐れざる。汝が謂ゆる種種の方便を設け、利養を貪求するが如きは、是れ尊貴の樂を戀ふにあらすや。胡爲れぞ解脱の樂を求めざる。嗚呼咄哉、一切衆生、上僧道より、下卑俗に至るまで、木を捨て末を逐うて、總に面目なし。或は煩惱に役せらるることを被り、互に好醜を論じて横放縱逸、惡として造らざるといふことなく、煩惱は身心を誑すに過ぎずといふことを顧みず。或は衣食に役せらるることを被り、互に精麤を論じて、殺生偷盜、惡として造らずといふことなく、衣食は飢寒を免るるに過ぎずといふことを顧みず。或は金穀に役せらるることを被り、互に得失を論じて、妄言綺語、惡として造らずといふことなく、金穀は自他を養ふに過ぎずといふことを顧みず。或は勢位に役せらるることを被り、互に尊卑を論じて、貪慾瞋恚、惡として造らずといふことなく、勢位は上下を治むるに過ぎずといふことを顧みず。或は文字に役せらるることを被り、互に是非を論じて、憍慢嫉妬、惡として造らずといふことなく、文字は古今を察するに過ぎずといふことを顧みず。或は經法を役せらるることを被り、互に淺深を論じて、勝負の人我、惡として造らずといふことなく、經法は道徳を明らむるに過ぎずといふことを顧みず。或は禪門に役せ

【始終の中間】初
地より終り十地に
至るその中間。

らるることを被り、互に邪正を論じて、見網教惑、惡として造らずといふことなく、禪門は言句を疑ふに過ぎずといふことを顧みず。皆是れ根本に歸せず、錯つて前境を逐ふが故に、展轉して是の如く、終に地獄餓鬼畜生に墮することを致す。因果歴然として、影の形に隨ふが如し。汝但其心質直にして、邪曲の心なくんば、佛法什麼の難きことかあらん。

是故に、楞嚴經に曰はく、「汝今無上菩提、眞發明の性を研かんと欲せば、應に當に直心をもつて我所問に酬ゆべく、十方の如來、同一道なるが故に、生死を出離すること、皆直心を以てす。心と言と直なるが故に、是の如く乃至始終地位の中間、永く諸の委曲の相なし。」と。只學人直心に依らず、妄に分別を起して、其深意を究めざるが爲に、是故に簡の多少の嶮處あり。若し直心を以て發心し、直心を以て師に事へ、直心を以て佛祖の言教を見、直心を以て參禪辨道せば、愚者は愚にして修し、頑者は頑にして修し、小根は小根にして修し、多病は多病にして修し、少者は少にして修し、老者は老にして修し、貧富貴賤は、貧富貴賤にして修し、事務繁多の者は、事務繁多にして修し、是を以て是と爲し、非を以て非と爲し、得を以て得と爲し、失を以て失と爲し、到を以て到と爲し、未到を以て未到と爲し、一切覆はる所なき者は、是非の名を聞かず、得失の名を聞かず、到者は到にして實なり。未到者は未到にして實なり、然るときは則ち智慧愚癡、煩惱菩提、一切眞實にして、皆正法に順ず。是れ慙慙にして休し去るにあらず。其時を失はざるが爲なり、是を以て増進し、是を以て究明せば、心力を勞せず、自然に徹頭ならん。

【是を】直心を。

【度量】 見識機量

今且十法を以て、學者の用心を示さん。請ふ之を審察せよ。一には悲願深重、二には志氣高邁、三には識量寛大、四には智鑑高明、五には見道超詣、六には履踐明白、七には人情杜絶、八には世念放捨、九には慚愧親切、十には疑心審細。此十法を以て、常に己が心を試み、能く此法を信じ、能く此法を修せば、一切成辨せんこと、掌を指すが如きのみ。三世の諸佛、只見性を以て、等正覺を成じ、菩薩の行を起す。是故に、汝等先づ須らく見性すべし。一切の衆生、菩薩聲聞、天龍八部、人天外道、貴賤老少、僧俗男女、無根二根、姪男姪女、六根不具、一切の闍提、乃至異類雜形、阿修羅大力鬼、餓鬼畜生、地獄の衆生、能く此法を信じ、能く此法を修し、分に隨つて増進し、分に隨つて證入する者、我今分明に、當に授記を與ふべし。今世後世、決定成佛と縱使信じて修せざるも、尙佛種を成じて、當來世に於て、亦各作佛せん。聞いて未だ信ぜざる者も、亦増上縁を成ず。當來必ず正法の中に於て、深く淨信を發せん。過去の菩薩、是に依つて成佛し、現在の菩薩、是に依つて成佛し、未來の菩薩、是に依つて成佛す。此は是れ諸佛如來、眞正修行の大路なり。

【爾時に】 以下或問を設けて説く。

爾時に初心の菩薩あり、此無盡正燈所説の法門を聞いて、大いに疑惑を懷き、來つて問を發して曰はく、『見性悟道、是れ眞の成佛なりや否や。』答ふ、『眞の成佛なり。』曰はく、『諸佛皆神通光明あり。師已に成佛す。何ぞ之を得ざる。』答ふ、『我的然として神通光明を得たり。』曰はく、『何ぞ顯現せざる。』答ふ、『我常に顯現す、汝自ら見ず、譬へば盲者の

宗門無盡燈論卷之下

見ざる、日月の咎にあらざるが如し。曰はく、『然りと雖も、諸佛已に神通光明を以て、衆生の信を聞き、諸の異跡を顯す。師何ぞ然らざる。』答ふ、『大神通あり、小神通あり、大光明あり、小光明あり。我得る所の者は大なり、汝が問ふ所の者は小なり、大とは、根本見性、所現の大用なり、小とは、枝末養道、成熟の餘力のみ。我宗只根本を指して、枝末を論ぜず。根本成熟すれば、枝末自ら現す。根莖を得ずして、枝葉華果を求めんと欲せば、是處あることなし。何に況んや若し異跡を顯し、衆生の心を惑はし、却つて本性を昧して、各彼已に聖人、我輩分なしと道うて、終に自己本來具足の神通光明を信すること能はず。是故に、有智の者は、餘力ありと雖も、亦之を用ひず。夫れ三十二相、八十種好、神通光明等は、皆諸佛の本體に非ず、是れ世間有爲最極尊勝の相を借つて、且く小根の衆生をして戀愛せしむ。

是故に、轉輪聖王に、三十二相あり。諸天外道に、神通光明あり。乃至阿修羅、神仙人大力鬼、老狐老猫の定力ある者、皆此の變化を行うて、種種の態を成す。譬へば一掬の水も、澄むときは則ち物を現じ、千里の海も、動するときは則ち影なきが如し、大凡變化は、皆定力より起る。羅漢に神通あり、菩薩に神通ある者は、小乘偏に定力を修するが故に、神通發し易し、大乘は普く智慧方便を修するが故に、定力熟し難し、大器は晚く成る、其器を成するに至つては、故より餘乘の境界に非ず。日下の孤燈、果然として照を失す。譬へば草木の先づ最極成熟の果を把り來つて、地に下して始めて萌芽を生ずるが如し。

【大器】 大乘を指す。
【餘乘】 菩薩小乘等。

是故に、因は果に異らず、果は因に異らず、因若し果に異らば、其因眞に非ず。果若し因に異らば、其果却つて妄ならん、汝等只果上の果を論じて、却つて因中の因に住す。因すら尙成ぜず、何に況んや果をや。我宗直に因中の果を辨じて、果上の因を修す。因已に是の如し。果何ぞ然らざらん。請ふ草木種植の事を以て、試に之を察して看よ。彼二乘外道、小乗の菩薩の如き、間神力を顯し、異跡を示す者は、彼小法を樂ひ、小果を成ずるが故に、小定の力に依つて、小神力を發するが故に、小威徳を以て、小教化を起すが故に、大果を成ずること能はず、佛智を測ること能はず、大根の衆生を接すること能はず、最上乘の法を流通すること能はず。皆是れ小根小智、小志行、錯つて本を捨て末を逐ふ、縱使神通光明無量の道法を成就することを得るとも、見性に非ざるが故に、眞の佛法に非らざるが故に、自性所現の法門に非ざるが故に。

是故に、神通光明を得んと欲せば、先づ須らく見性すべし。譬へば良醫の先づ内分を治して、而して後に外を治む。若し外を治むることを先にして、内を治めざる者は、未だ病根を抜かざるが故に、奇驗ありと雖も、終に亦發起するが如し。須らく知るべし、外病を治むる者は、必ず速効あり。内病を治むる者は、慢速効なきのみにあらず。又却つて覆疾を發散するが故に、外病轉熾んたり。是を以て、愚者は先づ速効を貪り、外病を治むるを以て貴しと爲す。

是故に、長年多病、終に眞實堅固無病の道に徹すること能はず。去れ病根深きときは、

則ち必ず良薬を用ふ。病若し輕きときは、則ち一包の薬も、亦之を治すべし。是を以て上古の人、天性充實なるが故に、總て病なく。其病あるに至つて、亦多薬を假らず。中古以來、人根虚弱にして、總に病あるときは、則ち先づ良薬を假る、或は種種の方法を採つて、始めて以て病根を抜くに堪へたり。佛法も亦然り。古は人物淳厚なるが故に、中下の法を以て、亦之を治すべし。今時は然らず。箇箇病根深重なるが故に、若し一乘見性差別圓融機關向上の薬に非ずんば、外愈ゆるに似たりと雖も、内竟に治せず。世人却つて聖道は正法の時に在り、像末の世は、總に行證なしと道ふ者は、又甚だ愚なる哉。今病甚だ深しと雖も、良薬を假らずと言はば、豈其理あらんや。若し行證の難易を論ぜば、獨り上乘の法のみにあらず、中下の法と雖も、亦行證すること難し。大凡難易は、人に在つて法に在らず。猶薬の服すると服せざるとは、其咎人に在つて、又薬に在らざるが如し。彼中下の法を以て、行證し易きが故に、効驗ありと爲る者は、且外病を治するの速効なり。是れ眞の効驗を得るにあらず、世に薬舗を設けて、合薬を賣る者、其價賤うして、言ふ所の驗、又甚だ奇特なり。然りと雖も、其沈痾を治するに至つては、豈其功あらんや。必ず良醫方術の妙を假つて、然して後に之を治す。獨り佛法に於て然らずと爲る者は、將何の意ぞや。只説いて像末の世、總に行證なりと言ふが如きは、是れ佛末世の衆生、正法を信ぜざる者を哀んで、且く之を言ふのみ。猶末代の狂病、深きが故に薬を服し、反つて治し得る者少しと言ふがごとし。是なることは則ち是なり。若し是言に隨つて、甘う

て病身を守つて、良薬を服せずんば、狂病増す熾んにして、終に起つべからず。狂者の狂を知らざる者は且く置く、若し自己病あることを知らば、薬を服せずんばあるべからず。汝且病ありと知らば、先づ良薬を求めよ。今時の狂者、只狂者の言を信じて、却つて不狂者の教を信ぜず、亦憐愍すべきのみ。肉身の病は、設使深重なるも、畢竟此生を出でず。法身の病は、無始より來た、常に毒海に在つて、六賊の爲に傷害せられ、五欲の爲に勞役せられ、瞋恚の熱、貪染の濕、骨に入り髓に徹して、率に醫治し難し。豈平常の薬を以て之を治すべけんや。須らく眞正の薬を求めて始めて得べし。或は病根深きが故に、自力を以て治すべからず。且く西方良醫の處に往いて、當に治すべしと道ふ者も、亦是れ一期の方便なり。譬へば稚子の無知なる、薬を服し肯んぜざるが故に、彼が好む所に隨つて、且く之を服せしむるが如し。

經に曰はく、『十方佛土の中に、唯一乗の法のみあり。一もなく亦三もなし。佛の方便説と、但假名字を以て、衆生を引導するを除く。』と。然らば則ち西方良醫の與ふる所も、亦是れ一乘の妙薬、此土の良醫の賜ふ所も、亦是れ一乘の妙薬、彼此齊しく是れ一乘の方法、何ぞ他方に往くことを勞せんや。是れ佛狂子の總に薬を服せざるを見て、大慈方便を以て、始めて薬を四諦十二因縁の中に收めて、而して之を服せしめ、次に六波羅蜜等の中に收めて之を勸む。或は韋提希夫人の爲には、十六觀の中に收め、或は小機の衆生の爲には、陰に六字往生の中に收む。是に於て、狂者漸く其味を得て、分に隨つて之を服して、各

【病根】佛病祖病
種種の病根。

其功を見る。時に狂者の漸く正念に本くを見て、却つて方等教中に於て、呵して其藥劣なるが故に、全く眞實の功に非ずと。又菩薩別に眞藥を服するの功を讚す。諸子之を聞いて、各之を羨むと雖も、只從前の味に著するが故に、率に放捨し難し。是を以て、重ねて般若の法藥を設けて、齊しく其中に在り。諸子覺えず、正念増現じて、各眞藥の功を見る。然りと雖も、未だ方便の法を出でず。只假藥に著して、眞藥を求めざるを以て、且く空理に約して、方法を設くるのみ。後來法華會上に至つて、悉く方便を捨てて、齊しく圓頓微妙見性實相の藥を與ふ。諸人大いに歡喜を生じて、始て知る從前錯つて假藥を服することを。是より涅槃醍醐の法藥を以て、普く一切の病根を抜き、身心堅康にして、終に無病大安樂の境界に到る。圓滿無礙、遊戲自在の徳、是を華嚴法界と名け、成辦歸休、安住自得の相、是を眞言祕密と名く。此二經は、齊しく是れ神變乘の所攝なるが故に、是れ如來口説の法にあらず。是を醫王善逝、能事已に畢ると謂ふ。且く道へ、我最後向上教外の些子の如き、是れ什麼邊の事を明す。請ふ這裏に到つて、別に一隻眼を具せよ。

是故に、我宗參學の者、自ら一代藏經の時節あり、始め佛祖の言教を聞くこと、譬の如く嘔の如くなるは、華嚴會上の如く、參禪工夫、先づ空理を悟つて、種種の見を生じて、錯つて究竟と爲るは、阿含三乘の得果の如し。是に於て、喚んで現境と作す、之を呵し之を奪うて、別に實證を求むる者は、正に是れ方等の經典なり。再び奮志を發して、諸見を擇ばず。所得の中に於て、深く源底を究むるは、是れ即ち大般若波羅蜜なり。時到り功熟

して、求めずして現前するは、猶法華一乘の説の如し。尚性理を究むること、掌上を見
るが如くなるは、全く涅槃に似たり。明了に佛祖差別の言句を透得するは、華嚴法界に歸
するが如し。大事了畢して、田地穩密なるは、祕蜜莊嚴に入るが如し。最後向上、別に生
涯あり。此は是れ我宗、教外別傳の一著子なり。亦大ならずや。近來淨家、未だ宗趣を究
めざる者、拍育に聖道を以て、難行にして功なしと爲し、只念佛を以て、易行にして徳勝
れりと言ふ。嗟呼、念佛か、此は是れ諸佛祕密の方便なり。佛一分下劣の衆生の爲に、權
に此法を設く。若し直に實乗を示すときは、則ち信力弱きが故に、心專精ならず。故を以
て三昧を成就し、及び彼深縁を成ずること能はず。今且く佛力を推すときは、則ち信に依
處あるが故に、三昧成じ易く。是を以て、只佛を念ずる者は、決定して往生すと信じて、
是非を管せず。諸念を交へず。念念相續するときは、則ち忽然として三昧現前す。是を往
生と謂ふ。彌陀如來の相好光明、一切の法門、目前に顯現す。極樂國土の功德莊嚴、一
切の勝相、天地に充塞す。一念を生ずるや、箇箇總に觀世音。一身を動するや、步步眞の
大勢至。二十五種の音樂耳に塞り、八萬四千の衣食座に滿てり。水鳥樹林、齊しく佛法僧
の功德を念じ、山河大地、全く理事智の妙用を露す。是を現生證得、上品往生と謂ふ。
其信及ばざる者は、念佛の力を以ての故に、必ず方便の佛國に生ず。是を未來往生と謂ふ。
只中品下品の階を出でず。務めて上品往生を期す。分に隨つて進修する者は、其功了因
に在るが故に、亦最上の果を成ず。佛國に生ずと雖も、文殊普賢觀音勢至等と、俱に法王

子と作る。甘うて下劣の衆生と作つて、偏に往生を食る者は、其功因縁に在るが故に、必ず小乗の果を成す。設使佛國に在りとも、亦聲聞、緣覺、小乗の菩薩と爲る、譬へば國あり、東に在るを常と曰ひ、西に在るを憲と曰ふが如し。

時に常國大いに亂れて、刀兵常に非ず。是を以て、常王深く衆生を愍んで、普く之に告げて曰はく、『汝等諸人、我國大いに亂るる是れ凡庸の者居るべき所以にあらず。今憲國の王、大慈悲あつて、能く窮民を育す。汝等速に彼土に往け。憲王必ず哀納を垂れて、衣食豐饒ならん。』と。是に於て、窮民の志操なき者、各眷屬を偕うて、彼國に至らんことを求む。彼國遙に山海十萬億を隔つるが故に、多く横難に遇うて、死する者少らず。中に於て幾く箇の深信勢力ある者、大願の堅舟を得る者と、終に諸難を免れて、僅に彼岸に達す。時に憲王大いに哀愍を生じ、普く財寶を施し、各田宅を與へて、永く安穩豐樂ならしむ。夫の志に效うて、煩はしく他君の恵を受けんや。寧ろ戸を城門に暴すとも、終に己が榮耀を以て、仁義道に換へず、須らく是れ力を戮せて、早く國家を興すべし。』と是に於て大軍を催し義兵を擧げて敵城を破り、叛臣を殺し不平を平げ、黎民を育す。爾時に常王、大いに喜びて各恩賞あり。然して諸士の義あり道あるが爲に、待するに三公の禮を以てし、與ふるに王侯の祿を以てす。其尊貴榮耀、豈憲民の及ぶ所ならんや。憲王亦其名を聞いて、却つて常王忠臣に富めり。我及ばざる所なりと道うて、遂に之を羨む。或は來調すること

【法然】日本淨土
宗の祖、圓光大師
の諡を賜ふ。

あれば、大いに禮容を設け、種種の珍味を以て、恭敬供養す。
又世人の頗る志操あつて、自ら産業を營み、分に隨つて家を興す。其無頼の者は、却つて自業を捨てて、身を豪家に寄せて、僅に己命を保つが如き、人人本是れ佛性を具足して、法王の種と爲り、長者の子と爲る。何ぞ其家に生じて、自ら其徳を棄つる、悲しい哉、彼頭陋無智にして、全く善縁なき者は、猶可なり。頗る志氣あつて、是非を知る者、何ぞ此に心なけんや。

法然上人の大原問答に曰はく、「極樂遠からず、十萬億刹の西に構ふ。彌陀は己心に在つて、一座華臺の形を現す。」又曰はく、「應に知るべし自力他力と言ふは、此即ち強弱の義なり。」又曰はく、「強弱ありと雖も、共に是れ眞如の力なり。」又曰はく、「有相の終因あり、直に無相の樂果に入る。往生の見を抑して、無生の理に體達せしむ。」又曰はく、「往生は即ち無生なり。」此義重ねて之を思ひ擇ぶべし。同じく金剛寶戒章に曰はく、「金剛寶戒は夫れ本有の心性、以て大乘戒體と爲す、凡そ戒體は、衆生の心是なり。」又曰はく、「何ぞ自心を除くの外、佛界を求めんや、又曰はく、「抑念佛の兩字知るべきなり。念とは、無念を以て念と云ひ、佛とは、心佛を以て佛と云ふ。又曰はく、「凡そ極樂とは、色の異名なり。尚色として見るべきなし。彌陀とは、心の異名なり。何ぞ心として尋ねべからん。然るに極樂と彌陀と、實に外境に非ず、即ち己心に在り。」經に曰はく、「此を去ること遠からず、乃至是心是佛。」と。已上。誠に知る、圓光大師、實に權乘の菩薩に非ず。是れ必ず圓頓不

思議の大菩薩、深く末劫沈迷の衆生を愍れんで、權に且く形を現じ來つて、剛強の衆生を度したまふ。今一乘見性の法門の如き、若し己達の大宗師なくんば、則ち必ず外道二乗の見到墮し、多くは誹謗正法の罪を成ぜん。能く正法を聞いて、其道を得るときは、則ち一切を超越して、頓に佛地に登る。若し邪師に逢うて、邪解を信する者は、即ち惡見到墮して、終に出期あることなし。益あり損あり、尊ふべく畏るべし。是を以て明師あるの世には、利益餘あり。其無師の時に當つて、若し此等の方便なくんば、沈迷の衆生、何を以て能く勝縁を結ばん。像季の衆生、中下の心に隨つて、謙恭に本づくが故に、設ひ異見を生ずれども、大逆に至らず。只誹謗大乘の罪を除く、餘は皆隨つて見佛の縁と成る。是れ中下の衆生の爲に利益ある所以なり。譬へば方藥の良醫ある時、用ふるに足らずと雖も、良醫なきに至つては、則ち所益あるが如し。

然りと雖も、凡て方藥は劑定まるが故に。其功徹し難し、良醫の深く病根を知つて、彼を滅じ此を加へて、藥病相當には如かじ。是を以て我宗名相を取らず。先づ佛心を悟つて佛説に及ぶ。其設くる所の法、相違ふに似たりと雖も、順逆の用處、悉く佛意に契ふ。唯願はくば念佛の行者、分に隨つて各上品の階に登つて、往生の見を忘れ、無生に體達して、須らく念佛の密意を究めて普く將來を度脱すべし。大凡難行易行、諸宗通じて二義あり。方便門中には、念佛を以て易行と爲す。諸餘の行業、心專精ならざるが故に。實乘門中には、見性を以て易行と爲す。一切の佛法、皆是より出づるが故に。夫の三論には、

眞空を以て宗と爲す。眞空は、根本の性智なり。是故に、當に自心に向つて根本智を明むべし。根本分明なれば、差別自ら現す。彼鏡體明了にして、物像皆現するが如し。是を以て法相天台華嚴眞言一切の法藏、八萬の聖教を照すときは、則ち學ばずして知り、修せずして達す。豈是れ易行の道にあらずや。若し文句を尋ね枝葉を逐うて、而も宗意を明らめんと欲せば、身根は限りあり、法藏は窮りなし。曠劫に勤苦すとも、三論微密の道に達すること能はず。法相は、妙有を以て宗と爲す。妙有は、差別の妙智なり。先づ自性に向つて、差別智を明らめんと欲せば、根本智、自然に現前せずんばあるべからず。是妙鏡を以て、諸餘の法門を照すときは、則ち向上の宗要、向下の修相、一時に體達して、明了ならずといふことなし。亦快ならずや。天台は、眞空妙有二法あつて、各一偏に墮するを以ての故に、中道一實相を以て宗と爲す。實相は、自性本具の總體なり。是故に、極めて自性を明らむるときは、則ち眞空妙有の名域を超越して、實相無漏の妙智、自然に現前す。圓に一切を總ぶるが故に圓と云ひ、頓に一切を成ずるが故に頓と云ふ。是妙智を以て、一切を照見せば、豈通ぜざるの理あらんや。華嚴は、法界を宗と爲す。法界は、彼百川大海に歸するときは、則ち一切の名を失して、齊しく海水と成るが如し。華嚴法中、總に餘法なきが故に、生死涅槃、煩惱菩提、一塵一草、皆法體に滿つるが故に、理事無礙、事事無礙、性相圓融、是を法界と名く。心華開發の處を指して、名けて法華と爲す。心華敷榮の處を指して、名けて華嚴と爲す。法華華嚴同一理體にして、只前後の異あるのみ。是故に、

天台教中、本二經を兼ね、先づ見性實相の意を究めて、其堂奥に入るときは、則ち華嚴法界、自然に明了なり。是の如く知見して、豈到らざるの法あらんや。亦餘りあるのみ。眞言は、本不生を以て宗と爲す、法華、華嚴は、齊しく是れ一念緣起の法門なるが故に、緣記無生の處、是を本不生と謂ふ。本不生の端的、却つて無盡の法門を具するが故に、有ゆる法門、皆祕密に屬す。纔に言談に涉るときは、則ち皆顯理に墮す。重ねて離言説の法性の知らしめんが爲に、或は祕密の相を示す。又金剛界は、本不生の智、胎藏界は、本不生の理なり。眞智堅密なるが故に、金剛と名く。眞理内に含むが故に、胎藏と名く。凡そ言ふ時は、皆顯經に同じ。且く不生體中本具の理を言ふが故に、總に祕密と名く。凡そ言説ある者は、皆法身に非ず。然るに法身を以て教主と爲る者は、彼不生體中本具の法を示すが故に、名けて法身說法と爲す。第二五百年龍樹の時に於て、始めて此法あることは、正法、淳厚の世には、密説を假らず。自然に能く密理に通ず。正法日に衰へ、人根漸く下れば、多く顯理に滯るが故に、是法の由つて起る所以なり。此は是れ如來神變加持、不思議藏の所攝なるが故に、獨り四十九年の外に出づ。彼達磨の時に至つて、悉く教跡に墮するが故に、單に教外別行を立てて、經論に依らざるが如き、皆是れ時に隨ひ機に應ずること、初より定法なし。譬へば良醫胸中に初より一方を貯へずと雖も、病に隨つて種種の方劑を設くるが如し。

是故に、佛法本二法なし。能く宗意を究むる者は、到らざることなく、自在ならざるこ

となし。若し名位を以て、強ひて之を論ずるときは、則ち持戒苦行、一切有爲の善根は、猶始めて邊鄙の郷を出づるが如し。定慧の資なくんば、又山野に迷はん。衣食あるときは、則ち遊觀して以て樂み、福力盡くるときは、則ち却つて飢寒に迫る。人天の勝報、是れ此を出でず。禪定智慧は、道路に進むが如し。若し悲願なくんば、又旅館に止る。一日の價を辨ぜば、永劫貧賤なりし聲聞緣覺、諸天外道の、威神力ある者、是れ其果なり。小乗の菩薩は、悲願ありと雖も、志氣劣なるが故に、路程を究めず、分國の吏官の家に入るが如し。尊貴ありと雖も、未だ是れ眞實にあらず、憤然として如上の分位を超出して、路程を究むる者は、王都を望むが如し。大乘の宗意、皆是れ眞の王都の消息なるが故に、三論は城門の如く、法相は城都の如く、法華は宮門の如く、華嚴は殿堂の如く、眞言は藏室の如し。

是故に、一切の法理、依正報得、且華嚴を以て明了なりと爲す、彼は殿堂に在つて、顯露莊嚴するが故に、一切の寶財、諸佛の住處、且く眞言を以て諦當なりと爲す。能事已に畢つて、齊しく藏室に歸するが故に、又能く入る者は、法華を以て第一と爲す。宮門錯らざれば、自然に徹入するが故に、門頭を錯るときは、則ち他家に入るが故に、其所入の法は、祕密を以て第一と爲す。帝皇及び寶器、常に藏室に在るが故に、物は顯に成り、密に隠るるが故に、然りと雖も其宗意に至つては、總に殊別なし。譬へば人の帝王の所居を求むるに、先づ城門を指して之を示すに、有智の者は深く城門に到つて、帝王に謁せずんば已

ます。無智の者は、差別を知らざるが故に、纔に城門に到つて、卒然として休し去るが如し。大凡因位には名別ありと雖も、其果證に至つては二なし。譬へば百川異あれども、大海二なきが如し。一切の法流、各根本性海に向ふときは、則ち齊しく一味平等の智水と作る。世界の衆生、皆大海を以て依と爲るが故に、是故に、三論法相も、天台眞言に徹せずんばあるべからず。天台眞言も、三論法相を経ずんばあるべからず。諸餘の法門、皆亦是の如し。只恨むらくは一切の法流、外に向つて流るるが故に、永く諸佛根本の薩婆若海に入ること能はず。

夫れ孔老の教、神明の道の如き、皆是れ等覺位中の菩薩、徳を藏し光を韜みて、人間に如同す。縁に任せて教化して、自然に内には見性一乗の法門を助け、外には世間萬古の規範を垂る。世人教異に名別なるを以て、錯つて吳越の隔を作す。是を以て各彼此の見を生ず。唯佛法を刺害するのみにあらず。亦却つて其要旨を味して、彼無智の者に如かさらしむ。悲い哉、聖人の教を設くる、時に随つて一ならず。只人をして随つて根本に歸することを得しむ。上生の人、本直心なるが故に、纔に指示を聞いて、直に根源に達す。教示墨なりと雖も、其功餘あり。末代の衆生、天性實を失して、虚中に虚を求む。實に和して法を滅す。是を以て佛法の細密すら、尙教化し難し。何に況んや孔老神明の道をや。是故に、神宮極秘寶基本紀に曰はく、『伊勢神藏、調御倉に納め奉る、御正體、假櫃、其内に納め奉る秘記十二卷、是れ其一なり。』活目入彦五十狹茅天皇天皇即位二十六年

丁巳、冬十一月新嘗會祭の夜、神主。部物忌八十氏等に詔あり。『吾今夜大神の威命を承りて託宣する所なり、矮姫命大神の託を承けて宣示す、神主。部物忌等、愼んで憚ることなかれ、正に明に聞け、人は乃ち天が下の神物奈利、須らく静め謔るを掌すべし、心は乃ち神明の主他利、心神を傷むること莫禮、神乘は祈禱を以て先と爲す。冥は加ふるに正直を以て本と爲須。其本誓に任せて、皆大道を得しむ。者れば天下和ぎ順ひ、日月精く明に、風雨時を以てし、國豊に民安し。故に神人、混沌の始を守り、佛法の息を屏せ、總べて神代仁者、人の心聖うして常なり、直うして正なり。地神の末、天下四方の人夫等、其心神黒うして、有無の異名を分ち、心走り使はれて、安き時あることなし。心の藏傷んで、神散け去る。神散けるときは則ち身喪ふ。人は天地の靈氣を受けて、靈氣の化する所を貴ばず。神明の光胤を種ぎながら、神明の禁令を信ぜず。故に生死長夜の闇に沈み、根の國底の國に吟ひ、茲に因つて皇天に代り奉りて、西方の眞人と、苦の心を以て誨へ諭し教へて、善を修せしめ、器に隨つて法を授けてより以來、大神本居に歸り、託宣を止め給ふ』と云云。

嗟呼、其れ誠に是の如く、上古淳厚の世には、人心正直にして、其根器に任せて、大道を得易く、神人已に混沌の始を守る。何ぞ佛法の息を須ひん。漸く末代に至つて、其本心を失す。外に向つて馳求して、迷うて境を逐ふが故に、生死に流轉し、惡道に沈吟す。是時に當つては、如來微妙の教法に非ざるよりは、何ぞ能く生死を脱することを得ん。又曰

はく、『神道は則ち混沌の堦を出でて、混沌の始に歸す。三寶は則ち有無の見を破り、實相の地を佛る。此は是れ神明最上の極旨なり。』今天地未生一念不生を指して、以て混沌と爲す。然るに混沌の堦を出でて、混沌の始に歸ると言ふは、將何の道理ぞ、今時往往、一念不生の處に至る者は、實に以て得難し。豈混沌の始に歸する底あらんや。神人説いて此法を守ると道ふ者は、只名目のみ。其理を得るに非ず。我宗大心ある者、世縁を放捨し、萬事を休息すること、十年二十年すら、此道に到り難し。何に況んや身塵勞に纏はれ、心禪定に乏しうして、強ひて此法を守る者ならんや。誠に神乗の如き、既に是の如きの幽致あり。然るに佛法に於て、容易の心を生ずること、悲まざるべけんや。大凡神とは心なり。心垢滅盡して、鏡の明了なるが如き、是を神と謂ふ。是故に、神乗は鏡を以て表體と爲す。心鏡本來清淨、常住寂然、是を國常立尊と謂ふ。心鏡本來圓明、物として現ぜざることなき、是を天照大神と謂ふ。

豐受皇大神、後鎮座本紀に曰はく、『廣大の慈悲を發し、自在神力に於て、種種の形を現じ、種種の心行に隨つて、方便利益の爲に、表する所を名けて大日靈貴と曰ひ、亦天照神と曰ふ。萬物の本體と爲つて、萬品を度したまふ。當に知るべし神乘佛法、同一理體、但是れ見性の一法を出でず。若し能く自性を明らむるときは、則ち先づ混沌の理に契ふ。重ねて性中に於て、深旨を研究すれば、漸く其堦を出でて、混沌の始に歸す、嗟呼、一箇の始の字、辛辣にして近傍し難く。神乘の學者、等間の看を作すこと莫れ。又孔孟の教、名

實兼ね用ひて、廣く天下を利す。仁義忠恕は、一性の化する所、老莊の教、名を破して實に就き、單に道徳を究む。虛無自然は、一性の化する所、是を以て、孔孟未だ曾て仁義忠恕を以て道と爲す。老莊は、未だ曾て虛無自然を以て道と爲す。強ひて名けて要路を開くのみ。是れ其究竟と爲る所以にあらず。

是故に、孔子の曰はく、『博學多識と爲んか、吾道一以て之を貫せり。』老子の曰はく、『常に無にして以て其妙を觀んと欲す、常に有にして以て其微を觀んと欲す。』孔孟は、能く教へて治む。老莊は、能く治めて教ふ。佛は能く教へ能く治む。孔孟は老莊を以て厚し。老莊は孔孟を以て至うす。二教は佛を以て徹し、佛は二教を以て助く。孔孟の化は廣く、老莊の化は深し、佛の化は圓明なり。孔老の教化は、智一世に通じ、但人民を利して、未だ異生に及ばず。諸佛の智慧は、廣大無邊にして、六道四生、物として利せずといふことなし。三世十方、事として通ぜずといふことなし。且廣狹偏圓の異ありと雖も、其旨趣は一のみ。或は孔老を指して、二乘に比する者は、未だ其論を盡さざること有り。今教示を以て且く之を論ずるに、自ら偏枯の失あり。之を小乘に比するも亦可なり。然と雖も、此は是れ言教の蠱細なり。是れ他の道に其病あるにあらず。彼孔孟の苦集を説いて規則を立て。小乘の威儀に近き者は、且く世に即して道を教へんが爲なり。方便を知らざれば、却つて半途に止る。彼老莊の滅道に本いて、一切を斥け、有餘涅槃に似たる者は、且く機に對して跡を治むるが爲なり。圓理を究めざれば、必ず化城に住す。譬へば佛の三乘を設く

【大珠】諱は慧海
馬祖一に嗣ぐ。

るが如き、深旨ありと雖も、小機の衆生、皆教跡に止る。」

是故に、道の過あるに非ず。根機の到らざるなり。大珠慧海禪師の曰はく、「大量の者之用ふれば即ち同じく、小機の者之を執すれば即ち異なり、總に一性の上より用を起す、機見差別して三と成る、迷悟は人に由る、教の異同に在らず。」と。大凡神明孔老の道、菩薩世に應じて化を興す。初より定法なし。古來至善の者は、世に即して道を明らむるが故に戒相を假らずして、能く其性を得。是れ彼古に益ある所以なり。後代の劣機の者は、緊縛脱し難く。故に先づ世累を捨てて、全身道に入る、譬へば人の峻道を行くに、負擔多き者は、力足らざるが故に、困倦して路程を透過すること能はず。若し重擔なく、獨脱眞率にして直に艱險を過ぎ、能く極處に達するが如し。

是故に、俗に在つて道を修するは、重きを負うて遠く行くが如し。久しく勤苦に勞して、自在を得難し。世を捨てて法に入るは、擔なうして山を過ぐるが如し。行李輕きが故に、峻路を踏み易く。今見性門中僧俗を論ぜずと道ふときは、只分に隨つて歩を發するが爲なり。纔に其時を得ば、便ち負擔を脱すべく若し俗に在つて妨なしと道はば、是れ負擔を好んで、轉た繫縛を増し、永劫困苦す。又今重擔あることを恐れて、歩を發せずんば、郷路彌よ遠くして、一生空しく過ぎん。水の下に就くが如し、防がざれば隨つて滅す。若し人修せずんば、道心隨つて滅す。今日是の如く、生生も亦然り。分に隨つて歩を發して、正路に入得せんには如かじ。他日時を得て、負擔を脱却せば、逆行、順行、無礙自在な

らん。是れ佛法に、戒あり定あり慧あり捨あつて、適に塵累を出づる所以なり。又在俗の失あること、設ひ險路を過ぎ、性智に入ると雖も、差別の法理、必ず明了し難し。夫の商人本錢ありと雖も、謀慮精からざれば、財相を得難きが如し。貪愛の情欲、内道徳を費し、名相の妄想、外行業を破る。是等の爲に、身心を使役せられて、唯性上の謀慮精しからざるのみにあらず。受用分に過ぎて、竊賊内に在り。却つて本分の財寶を減ず。遂に福德の運を發くこと能はず。

是義を以ての故に、參學の士、在家出家、其時を失ふこと莫れ。今日の在俗は已むことを得ざるなり。故に纔に時節を得れば、便ち當に脱すべし。故に或は悉く僧と爲らば天下人なしと曰ふ者あらん。是れ蚯蚓土地を懼むの論なり。今其れ天下第一人として富貴を求めざるあることなし。天下若し悉く富貴の人と爲らば、誰をして奴婢たらしめ誰をして黎民たらしめん。然るに天下の富人は口に少く、貧者は益多きことは何ぞや。凡そ天下の醫師、常に良藥を設けて、他の病を治せんと欲すれども、病者未だ盡きず。田獵の者、日に禽獸を驅れども、彼少きことを加へず。何ぞ佛法に於て、獨り之を怪むや。諸佛菩薩、弘誓の願を發して、普く衆生を度して、永く不退に住すれども、衆生界未だ盡きず。彼邊量なきが爲なり。是を以て、神明孔老の教、先づ見性を得て、始めて大成を爲し、悉く佛法を究めて、全く備はれりと謂つべし。乃至世間、一切の伎術藝能の其妙に至る者、皆根本性海に依らずといふことなし、迷うて知らず、影を逐ひ形を勞す。

是故に、一切の學者、但自性に向つて、之を明らめ之を究むるときは、則ち有ゆる宗要は自然に現前す。若し外に向つて之を求めば、猶獅子の父を捨てて逃れ逝いて、妄に衣食を求むるが如し。悲まざるべげんや。譬へば多年の病、心氣疲極して、脾胃虚損する者は鍼灸薬と雖も、亦奈何ともし難きが如し。人本病なし、内容處あれば、則ち外邪之を侵して、則ち始めて病根と成る、薬は邪氣を治めて、心氣を治せず。邪氣除くときは則ち心氣自ら盛んなり。然と雖も、心氣疲極すれば、則ち邪氣彌加はつて、薬力敵し難し。故に病愈ゆべからず。若し身内に向つて、自ら精神を養ふときは、則ち心氣漸く充ちて、外邪を受けざるが故に亦薬功を見る。猶國家の興廢、上一人に歸するが如し。君王正しければ、則ち外人敢て犯さず。佛法も亦然り。先づ自心に向つて、深く本性を究むるときは、則ち業識頓に滅して、佛智現前し、一切の法門、悉く達せずといふことなし。是故に、自我宗見性に本くのみにあらず。諸餘の宗要、皆須らく見性を以て本と爲すべし。若し見性に依らずして、其宗意を究めんと欲せば、設使一切の佛法を究盡すとも、業識依然として深きが故に、佛智現前すること能はず。精神養はざるが故に、病惱彌加はり、佛性現ぜざるが故に、業識彌加はる。薬力病力に勝へず、道力業力に勝へず。諸病治病の法を以て、審細に諳觀せよ。難行易行の道、此に極れり。只不思議解脱の菩薩、大悲願力に乗じ來つて、權に小法を教へ、或は神力を示し、衆生の心を聞き、最下の機を攝し、信不具の輩を警覺して、且く緣因得度の種を成ずるを除く。亦是れ佛法の一端にして、貴ぶべき

の大悲なり。

我宗只凡夫の實證を論じて、權者の境界を論ぜず、只佛法の主君を揀んで、諸餘の事物を問はず。凡夫若し證入せずんば、正法斷滅せん。主君賢明なれば、一切皆我より出づ。是故に、直に向上の旨を提持して、最上の機を接す。中下の類、聞いて之を信する者も、各最上の種を成するが故に、今世後世、決定して道を得。聞いて信せざる者も、亦信種を成じて、他日必ず深信に至らん。普く三根を捨てず。等しく正眞の佛道を成せしむること、何の法か之に加へん。其普く天下に教へて、其功を期せんよりは、一の帝王を教へて、賢明なるときは、則ち天下の衆生、皆正法に歸す。其永く帝王に事へて、其道を論ぜんよりは、如かじ、自ら其位を紹いで、天下を統御せんには、其所往に隨つて、皆都城と爲り、所居に隨つて、皆宮殿と爲る。藏室も亦意に任す。是を大丈夫兒の能事と謂ふ。彼諸方の如き、偏に經論に著して、妄に淨土を求め、根本を究めざる者、各中下の種を成するが故に、生生世世、中下の法を信じて、中下道を成す。設使佛國に生在すとも、最上の法を信すること能はず。根本の道を成すること能はず。猶果を以て種と爲すときは、則ち種の如く芽を生ずるが如し。是故に道ふ、戒急乘緩なる者は、聲聞緣覺の身を受けて、同じく佛會に在りと雖も、佛境界に於ては、驛の如く啞の如し。乘急戒緩なる者は、異類雜形の身を受くと雖も、見聞信受して、皆其道を證す。又三乘の菩薩は、成佛遙に三大阿僧祇劫の後に在り。本を捨て末を逐うて、自性を明らめざるが故に、一乘の菩薩は、初

發心の時、便ち正覺を成ず。見性明了にして、能く一切に達するが故に、又一切の宗要は、悉く宿福の勝縁を假る。見性門中は、只一念信を生ずるに在るのみ。譬へば他國に往かんと欲せんには、先づ多財を用ひ、他家に入らんと欲するには、先づ良縁を求むべし。自國に向ふ者は、多財を假らず、自家に歸る者は、良縁を假らざるが如し。一切衆生、一箇として根本佛性大智慧大福徳を具有せずといふことなし。豈是れ最上の良縁にあらずや。

附錄 行持論

正念工夫は、無上の行持なり、苟も正念工夫あるときは、則ち行相に泥まず、威儀に拘はらず、理に即し事に即し、坐に即し行に即し、是に即し非に即し、動に即し靜に即し、法に即し非法に即し、世間に即し出世間に即して、只正念工夫を失はざらんことを要す。且く道へ、正念工夫の端的、是れ什麼の道理ぞ。參禪修定、是れ工夫の端的、見性悟道、是れ工夫の端的、差別の關鎖、是れ工夫の端的、向上の一路、是れ工夫の端的、三世の諸佛、但正念工夫の端的を證し、歷代の祖師、但正念工夫の端的を傳ふ。五時八教、但正念工夫の端的を演説す。古則公案、但正念工夫の端的を商略す。蠡あり細あり、淺あり深あり、疎あり親あり、生あり熟あり。後學の初機は、切に須らく參決すべし。舊參の上士は、切に須らく子細にすべし。

是を以て、我宗只正念工夫を費んで、威儀行相を費ばず。何を以ての故に。正念相續するときは、則ち心心他なきが故に。正念相續するときは、則ち處處異らざるが故に。正念相續すれば、儀相自ら具る。臨濟の謂ゆる、殊勝を求めざれども、殊勝自ら至る者はなり。正念相續すれば、總に前境を忘す。永嘉の謂ゆる、山を見て道を忘れ、道を見て山を忘るといふは是なり。澆季虚頭の禪者、多く己見に誇つて、正念工夫の相續不相續に依らず、只儀相を以て細行と爲し、錯つて放蕩を以て活脱と爲し、灑落と爲す。悉く道ふ儀相は、是れ小乘の行持、衲僧門下、何ぞ行状を拘執せん。是に於て、分に隨つて玩好の具を辨じ得て、黨を結び伴を求めて、放蕩不羈の身僧儀を捨て、俗相に混じ、口法話を斥けて雑談を好む。意工夫を失して、遊觀を事とす。居るときは則ち偃臥し、行くときは則ち伴狂す。甚しき者は歌舞の門に入り、姪酒の肆に至つて、撃風擊顛して、以て向上の宗風と爲す。苦なる哉苦なる哉。設使犯すことなきも、見聞の業、豈夫れ空しからんや。貪愛内に催す、邪見外に顯る。法身を壞滅し、道情を打失す。却つて初心の學者を教壞して、齊しく此弊風を繼がしむ。故に佛法の威徳、底に至つて絶し、僧道の光儀、地を拂つて盡く。信心の檀越、是に依つて退墮し、邪見の衆生、是に依つて増長して、正法を誹謗し、高德を輕賤す。玉石俱に焼け、金鐵皆爛る。

我聞く、昔魔王あり、佛に向つて誓を發して曰はく、『他日汝が家に入り、汝が衣を著け、汝が食を喰ひ、汝が道を學び、汝が教を説いて、以て汝が法を滅せん。』と。其言驗あるの

み。大凡活脱は、是れ恁麼の道理にあらず、古人曰はく、『活人を死盡して、始めて活人を
見る。』活處を得んと欲せば、須らく死處に向つて求むべし。謂ゆる正念相續、法性現前す
とも、亦以て足れりと爲す。正念相續、理事圓融すとも、亦以て足れりと爲す。正念相續、
養道成熟すとも、亦以て足れりと爲す。正念相續、超佛越祖、這裏に到つて、逆順縱
横、與奪自在。放行するや、瓦礫光を生じ。把定するや、乾坤色を失す。這裏に到つて、
什麼の蠱細深淺をか説き、這裏に到つて、什麼の生熟親疎をか論ぜん。佛法すら尙なし。
何ぞ世間あらんや。身心尙忘る、何ぞ儀相を見ん。是の如きの時節に參得す。是を活脱の
境界蕩蕩自在、灑灑落落地と謂ふ。是故に、學者儀相に拘らざる者は、正念工夫を失はず
と爲すなり、汝若し正念現前し、念念相續せば、動に即して動を忘れ、靜に即して靜を忘
れ、境に即して境を忘れ、心に即して心を忘る。動と靜と不二、善と惡と不二、苦と樂と不
二、煩惱と菩提と不二、地獄と天堂と不二。是の如く不二の境に到る者は、亦厭ふ所なく、
亦求むる所なし。已に求むる所なし、何の樂か之あらん。然るに今儀相を捨つることは
即ち得たり。獨り放蕩を樂む者は何ぞや。

經に曰はく、『法すら尙應に捨つべし。何に泥んや非法をや。』と。汝已に不二、應に樂ふ
所なかるべし。苟も樂ふ所あれば、未だ是れ不二にあらず。若し未だ不二ならざれば、須
らく慚愧を生ずべし。又何の暇あつて、情に任せ心を放放にして、悠悠として娛樂せん。
夫れ能く不二なる者は、已に自身に於て求むる所なし。只度生を以て求と爲す。已に自身

【校訂】この三人の僧は、東嶺禪師の參徒なり、中に就いて、文珠は字を大觀號を擔雪、別阿鼻窟と號す、東嶺に嗣法して、丹の法常寺に住す、この冠注は、珠師の書せし本に據る

に於て樂む所なし。只度生を以て樂と爲す。已に自身に於て行する所なし。只度生を以て行と爲す。已に自身に於て念ずる所なし。只度生を以て念と爲す。何を以ての故に。自身已に不二の境界に到れども、一切衆生、未だ此境界に到らざるが故に。普く大悲を以て、方便を幻出す。有ゆる行業、有ゆる言説、皆衆生に屬して、自身に屬せず。況んや自身の爲に、見聞を貪著して、不二を得んと欲せば、是處あることなし。是故に、智者は只正念工夫の行持に依つて、總に一切の著處に依ること莫し。隨處に正念を失はざれば、自然に脱體現成せん。若し又現成して、見に遺缺なければ、其著處を求むるに、終に得べからず。這裏に到つて、又何の好境かあらん。心を動じ身を勞し、手を出し歩を運んで、以て道情を安んずるに堪へたり。錯錯、人人脚跟下に此無上の行持あり、眞正參玄の上士は、請ふ、試に甄別して看よ。

參學 文延、文珠、玄如 校訂す。

宗門無盡燈論卷之下終

【叙】序文にして總て全卷の大意を説く。五段に分つ。

【僧問ふ】一、僧務は道の一言に在ることを叙す。

【道を事とす】二、道の本は徳行の二言に在ることを叙す。

【僧云はく】三、妄見の弊を防ぐに豫め十門を立つることを叙す。初めに問、後に會す。中に四あり。

【予曰はく】後會の中、一に器を擇ぶことを示す。

【今沙門】後會の中、二に器に非ざることを出す。

緇門崇行錄 敘

僧問ふ、『沙門奚をか事とす。』曰はく、『道を事とす。』二、道を事とするには執をか本と爲す。曰はく、『徳行を本と爲す。』僧云はく、『甚しいかな、子の固なるや。利は慧を以て入り、鈍は福を以て修む。沙門は慧を取れば足る、徳行は奚にか爲ん。』予曰はく、『先民言へること有り。徳行は本なりと。』又曰はく、『士の遠を致すには器識を先とす。況んや無上菩提の妙道にして、以て受くるに其器に非ざるべけんや。師子の乳を琉璃瓶に匪ずして之を貯ふれば則ち裂け、萬鈞の鼎を擧げて荷ふに一葉の舟を以てすれば顛趾して溺れざる者幾ど希なり。今沙門稍才敏なれば則ち訓詁を攻め、鉛槧を業とすること、儒生の如し。又之より上なれば則ち古徳の機縁を殘撫して聲響を逐ひ、影跡を捕へて明眼の者の爲に笑はる。其言を聽くや佛祖の先に超え、其行を稽ふるや凡庸の後に落つ。蓋し末法の弊極りぬ。予此が爲に懼れて古の善行を集め、其要なる者を録し、十門を以て之を羅ぬ。何んとなれば、俗染を離るる、之を僧と謂ふ。故に清素其首に居す。清にして嚴ならざるは狂士の清なり。身口意を攝するは是れ諸佛の教なり。故に之を受くるに嚴正を以てす。嚴正は師訓に由りて成る。師は人の模範なり。故に之を受くるに尊師を以てす。親生じて後に師教ふ。其親を遺るるは是れ本を忘るるなり。戒は萬行なりと雖も、孝を以て宗と爲す。

僧問ふ、『沙門奚をか事とす。』曰はく、『道を事とす。』二、道を事とするには執をか本と爲す。曰はく、『徳行を本と爲す。』僧云はく、『甚しいかな、子の固なるや。利は慧を以て入り、鈍は福を以て修む。沙門は慧を取れば足る、徳行は奚にか爲ん。』予曰はく、『先民言へること有り。徳行は本なりと。』又曰はく、『士の遠を致すには器識を先とす。況んや無上菩提の妙道にして、以て受くるに其器に非ざるべけんや。師子の乳を琉璃瓶に匪ずして之を貯ふれば則ち裂け、萬鈞の鼎を擧げて荷ふに一葉の舟を以てすれば顛趾して溺れざる者幾ど希なり。今沙門稍才敏なれば則ち訓詁を攻め、鉛槧を業とすること、儒生の如し。又之より上なれば則ち古徳の機縁を殘撫して聲響を逐ひ、影跡を捕へて明眼の者の爲に笑はる。其言を聽くや佛祖の先に超え、其行を稽ふるや凡庸の後に落つ。蓋し末法の弊極りぬ。予此が爲に懼れて古の善行を集め、其要なる者を録し、十門を以て之を羅ぬ。何んとなれば、俗染を離るる、之を僧と謂ふ。故に清素其首に居す。清にして嚴ならざるは狂士の清なり。身口意を攝するは是れ諸佛の教なり。故に之を受くるに嚴正を以てす。嚴正は師訓に由りて成る。師は人の模範なり。故に之を受くるに尊師を以てす。親生じて後に師教ふ。其親を遺るるは是れ本を忘るるなり。戒は萬行なりと雖も、孝を以て宗と爲す。

【十行を修して】後會の中、四に説結を示す。

【僧云はく】四、未だ蕪空を證せざる者、不立の理を漫説すべからざることを叙す。

【僧云はく】五、妄業は實に乖くことを叙して、兼くて行に階梯有ることを結す。初めは問、後に會す。【予一掌】後會の中、初めに過を指して説を示す。

故に之を受くるに孝親を以てす。忠孝に二理無し、親有ることを知りて君有ることを知らざるは私なり。一人慶有りて我林泉に優游することを得れば、君恩焉より大なるは莫し。故に之を受くるに忠君を以てす。忠は上に交はるに盡して、惠は下に及ぶに乏しければ、則ち兼濟の道虧く。故に之を受くるに慈物を以てす。慈は愛に近し。愛、著を生ずるは出世の礙なり。故に之を受くるに高尚を以てす。高尚は身を潔うし長く往いて衆生を捨つるに非ざるなり。其積むこと厚うして光を流さんことを欲す。故に之を受くるに運重を以てす。運重にして端居無爲なるは不可なり。故に之を受くるに艱苦を以てす。勞して功無ければ、則ち難を苦んで退く。因果虚しからず。故に之を受くるに感應を以てして終る。十行を修して徳備れば則ち法に任ずるの器なり。地良にして而る後に佳種投じ、心醇にして而る後に至言入る。無上菩提、庶はくは希冀すべし、然らずんば一鄙夫なるのみ。人道未だ全からず。焉んぞ佛道を知らん。卽し利根多慧ならしむとも、慧彌多くして障彌重くば、將安んぞ之を用ひん。僧云はく、「吾法一塵立せず、十行何にか施けん。予曰はく、「五蘊紛紜として四大叢沓す。何んが塵無しと謂はん。僧云はく、「四大は本空、五蘊は有に非ず。予一掌に與へて曰はく、「學語の流は麻の如く粟に似たり、未在更に道へ。僧對ふること無し。斃然として起つ。予笑うて曰はく、「面を蔽ふ塵埃、子何んが拭はざる。之を愼めよや。高きに升るには卑きよりせざることを母し。妄に般若を談じて自ら殃咎を取ること無かれ。虚名に酔ふこと無くして、其徳を修め、其精誠を殫して以て力を

【予未だ】後會の中、後に謙遜して懷を述ぶ。

道に致せ。力極りて心通じ、然る後に萬行を撥はず一塵を受けず、終日空ならず、終日有ならざることを知る。夫れ是れ之を眞慧と謂ふ。願くば吾子心を究めよ。予未だ道を開かず、兼ねて徳に薄し。今此書を爲ること、惟務めて時の弊を救つて佛恩に酬いんとするのみ。明達之士、苟も人に因つて言を棄てずんば幸に展轉して以て夫禪者に告げよ、
萬曆十三年仲冬日
杭沙門、株宏 識

緇門崇行錄 目次

清素の行第一

不作齋會

左溪遁跡

贈施不憶

荷衣松食

誨衆清行

嚴正の行第一

禁拒女尼

破壞酒器

受施隨散

遺錢不顧

門不掩閉

鹿鳥爲侶

衲衣一食

幼絶戲掉

不面女人

蟲鳴塵積

不畜衣糧

人疑僕從

少欲知足

獨守死關

嚴訓侍者

力衛殿堂

擯黜豪尼

抗章不屈

不談世事

尊師の行第三

力役田舍

立雪過膝

歷年執侍

兵難不離

孝親の行第四

蘭盆勝會

泣血哀毀

禮塔救母

織蒲供母

忠君の行第五

聞陳報應

巧論齋戒

感悟東宮

防心離過

不受仙書

受杖自責

離師悔責

謹守遺命

母必親供

荷擔聽學

悟道報父

誠感父骨

勸善弭災

較論供養

勸斷屠殺

終闔門拒手

為師禮懺

迎居正寢

遵訓終隱

居喪不食

鑿井報父

封股出家

念佛度母

規諫殺戮

說法悟主

勸修懺法

慈物の行第六
受罰不欺

忍苦護鵝

悲敬行施

濟貧詣官

惠養羣鼠

看疾遇聖

施戒放生

高尚の行第七

避寵入山

駕不迎送

屢徵不就

詔至不起

不受衣號

袖納薦書

遲重の行第八

傳法久隱

咏花諷諫

護鴨絕飲

買放生池

躬處羈坊

毘被畜狗

行先執帚

看病如己

衆服清散

不結貴遊

寧死不取

胃死納僧

力辭賜紫

棄書不拆

十年祕重

贖養生命

割耳救雉

口吮腹癰

穢疾不嫌

瞻濟乞人

不享王供

不引賊路

三詔不赴

不赴俗筵

不樂王宮

對使焚鉢

不宣靈異

艱苦の行第九

混迹樵牧 久處深山 廢寺隱居 年老頭陀 刺股制心 蚤虱不除 萬里決疑 刻苦事衆 感應の行第十

事皆緣起 八請不赴 備經險難 西竺取經 六載春粟 躬自役作 行不辭勞 懺獲妙音 廢戒懺悔 禮懺延壽 天神護禮 懺感授記

歷年閉戶 重法隱山 法滅續經 身先苦役 不作不食 卑己苦躬 常行乞食 誓師子座 癘疾護瘳 誦經延壽 感示淨土 口出青蓮

【本書は株宏の撰にして、縑素の崇行を集録し、以後後世の誡めとせるものなり。】

【縑門】 僧門のこと。

【清素】 清とは清浄なり、俗塵の氣なきをいふ。素とは質素修飾を省くの義なり。

【一】 不作齋會

【僧旻】 以下、列傳十五名を擧ぐ。

【經義】 成實論、般若經、勝鬘經、十地經等を講ず。

【放生】 魚鳥等を放生にがすこと。

【布施】 他人に物を施すこと。

【大齋會】 千百の衆を請じて施食する儀式。

【贊に曰はく】 本文の幽遠なる意義を佐助して、以て其旨を著明せしむるなり。

【正念無し】 禪誦

縑門崇行錄

清素の行第一

【一】 齋會を作さず

劉宋の僧旻は七歳にして出家し、經義を以て海内に宗たり、旻法師と號す。寺宇を修繕し、經像を造設し、放生、布施未だ嘗て倦廢せず。或問ふ、「和尚修する所の功德多し。大齋會を建つるを聞かず、恐らくは福事未だ圓ならざらん。」旻曰はく、「大齋、理を盡すことを得難し、且米菜鹽醋、樵水湯炭、踐踏洗炙、微蟲を傷害す。故に爲さざるなり。如し復寄を王宮、官府、有勢の家に求めば、彌意を盡し難し、之を已むるに如かさるなり。」と。

贊に曰はく、今一人一の福事を作せば、必ず齋會を起して名けて圓滿と曰ふ。乃至關を掩ふ、僧半期以後、即ち關中に於て營營として晝夜經畫す、預め齋會を辨じて復正念無し。嗟乎旻師の言眞に萬世の龜鑑なり。

【二】 施を受けて隨つて散す

古杭雲棲寺沙門株宏輯

の正業を失念するなり。

【二】 受施隨散。施波羅蜜のこと。他人の善法を吝嗇すべき法を施す。

【散散】 散施して一を遺さざるなり

【寒餒】 凍冷、飢餓なり。

【塵滓】 塵埃、泥滓なり。

【三】 蟲鳴塵積。

【簫管】 樂器なり

【四】 左溪遁跡。

【頭陀】 梵音ドフ一タ (Dhuta) 陶汰と譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて、佛道を求むること【鬱多羅】 佛制の法服なり。三種あり、一に僧伽梨、二に鬱多羅僧、三に安陀衣なり。

梁の慧開は吳郡海鹽の人なり。戴旻二師の經論を歴聽して講演世に名あり。豫章の守、謝護迎請して經を説かしめ、厚く贖遺を加ふ、還つて未だ都に達せざるに分散已に盡く。晋安の守、劉業錢を餉ること一萬、即ち寒餒に贍して會て日を終へず。情性疎率、形儀を事とせず。衣服の塵滓未だ嘗て意を擧して洗濯せず。贊に曰はく、法を講じて贖遺を受けず、是れ之を法施と謂ふ。噫安んぞ人人の法施開公の如くなることを得んや。

【二】 蟲鳴き塵積る

梁の道超、靈基寺旻法師に従つて學ぶ。獨り一房に處して賓侶を屏絶し、塵埃屋に滿ち、蟋蟀壁に鳴く。中書郎張率謂つて曰はく、『蟲聲は耳に聴しく、塵は多く膝を埋む。安んぞ能く此に對して忤ふこと無きや。』答へて曰はく、『時に此聲を聞いて、簫管に代ふるに足る。塵、風に隨ひて來る。我未だ拂ふに暇あらず、名賓に忤ふことを致す。愧と爲すこと多しと。』率大いに嘆服す。

【四】 左溪に跡を遁る

唐の玄朗は傅大士六世の孫なり。常に頭陀を行じて岩に依り澗に傍ふ。左溪尊者と號す。一室に宴居して自ら以爲らく、『法界之れ寬し。』と。一鬱多羅四十餘年、一尼師壇、身を終るまで易へず、經典を尋ぬるに非ざれば、輕しく一燭を燃さず。聖容を觀るに非ざれば、妄りに一步を行かず。鉢を洗へば則ち群猿爭ひ捧げ、經を誦すれば則ち衆鳥交り翔る。刺

【五】 遺錢不顧。

史王正容屢請じて城に入らしむ、師往くことを欲せず、竟に辭するに疾を以てす。
贊に曰はく、今人永嘉の答書を読み、朗師を藐視して之を僻見に等しうす、永嘉は特一時、著を遺るの語にして左溪の遺範は正に學者、今日の事なるを知らざるなり。明眼の者之を審にせよ。

【五】 遺錢を顧みず

【酷吏】 苛酷の政令民をして慘慙たらしむ。

【貧道】 三乗の道に乏しきものと云ふ謙稱なり。

【六】 不畜衣糧。

隋の富上は益州の淨德寺に依りて止宿す。大笠を道傍に繋いで其下に坐して經を讀む。人往來すれども喚んで施さしめず。施者有るも亦咒願せず。路靜かなるを以ての故に、多載獲る所無し。人謂つて曰はく、「城の西北人稠く、施多し。奚爲れぞ此に在る。」答へて曰はく、「二錢兩錢身命を支ふるに足る。復多を用ひることを爲さんや。」
【六】 衣糧を畜へず
唐の通慧は三十にして出家し、太白山に入りて糧を齎さず、給を草果に取る。渴すれば則ち水を飲み、息すれば則ち樹に依る。坐起禪思五年を経たり。木を以て塊を打つに因

【六】 衣糧を畜へず

【六】 衣糧を畜へず
唐の通慧は三十にして出家し、太白山に入りて糧を齎さず、給を草果に取る。渴すれば則ち水を飲み、息すれば則ち樹に依る。坐起禪思五年を経たり。木を以て塊を打つに因

【七】 願施不憶。

りて塊破れ形銷して、廓然として大悟す。晩年一裙一被、著る所の麻鞋、二十載に至る。布納重縫して冬夏易へず。

【七】 願施を憶せず

唐の靜琳は京兆華原の人なり。道風既に播くして驪錫日に至る。並に諸を侍人に委して口に重ねて問はず。後に福を作らんと欲して、方に財無きを恨む。侍人を出す。琳曰はく、「都て此に有ることを憶せず。」と。平生の衣破るれば紙を以て之を補ふ。

【八】 門不掩閉。

【八】 門を掩閉せず

【落魄不羈】 世事に算いて疎遠なること。
【破衲】 袈裟のこと。
【門を掩閉せず】 一室を視ること猶し樹下石上を見るが如し。

唐の智則は雍州長安の人なり。性落魄不羈、恆に破衲を被て裙、膝上に垂る、房は僅に單床、瓦鉢木匙の外、餘物無し。一室に居して門を掩閉せず。衆、號して狂と爲す。則ち嘆じて曰はく、「他を狂と道ふは自ら狂せることを知らざるのみ。家を出で俗を離れて、而も衣食の爲の故に、行住遮障し、門を鎖し符を滅し、時を費し業を亂す、種種の聚斂役役として安からず。此にして狂に非ずんば更に狂者無からん。」

【九】 人疑僕從。

【九】 人僕從かと疑ふ

【蓮社の三祖】 統紀目錄には、三祖南岳般舟法師と標す。

唐の承遠は始め成都に學し、後に衡山の西南の岩に住す。人々に食を遣れば則ち食す。遺らざれば則ち草木を茹ふのみ。慕つて造る者有り、崖谷に値ふ。羸形垢面、躬ら薪樵を負ふ。以て僕從と爲して之を忽にして其遠たることを知らず。代宗其名を聞いて所居の號を般舟道場と賜ふ。世、蓮社の三祖と稱すと云ふ。

【茆茨】 茅をもて屋を覆ふなり。

【藏獲】 奴婢の異稱なり。

【一〇】 荷衣松食。

【鹽官】 杭州鹽官鎮或海昌院齊安禪師を云ふ。

【二】 鹿鳥爲侶。

【剗切なり】 生を愛し、死を憎む。

【三】 少欲知足。

贊に曰はく、茆茨構へて堯堂、村舎かと疑ひ、衣服悪くして禹迹、野人かと疑ふ。況んや釋子鉢衲を以て身を支ふる者をや。今時服飾を侈り藏獲を置く。惟人の知らざらんことを恐れて、揚揚として閭里を過ぐる者有り、亦以て少しく愧づべし。

【一〇】 荷衣して松を食す

唐の大梅常禪師は、馬大師の即心即佛の旨を得て深山の中に隠る。人知る者無し。鹽官書を以て之を招くに、辭して赴かず。附するに偈を以てして云はく、「一池の荷葉、衣盡く無し、數樹の松花食するに餘有り、剛ひて世人に住處を知らる、又茅舎を移して深に入りて居す。」

【二】 鹿鳥を侶と爲す

後周の行因は廬山の佛手岩に隱居す。夜闌なる毎に一鹿一雉、石屋の側に棲遲して馴れ狎るること伴侶の如く、殊に疑ひ怖るること無し。因に平生弟子を畜へず。隣菴の僧有り、之が爲に給侍す。一日謂ひて曰はく、「一簾を捲き上げよ。吾去らんと欲す。」簾方に鉤に就く、因つて床を下りて行くこと數歩、屹然として立化す。

贊に曰はく、多欲の人は死する時、目彌切なり。甚しうして香を分ち履を賣り、脊脊として放下すること能はず。獨り世諦中の人のみならず。釋子も亦之有り。因つて一生の清氣人に逼る、脱化遊戯の如し。亦宜ならずや。

【三】 少欲知足

宋の宏覺禪師は徒衆に誡めて云はく、『汝既に出家す。囚の獄を免るるが如し。少欲知足して世榮を食ること莫れ。餓を忍び渴を忍んで志無爲を存せよ。佛法の中に在りて十生九死することを得とも、亦抛棄すること莫れ。』

【二三】 誨衆清約。

【二三】 衆に清約を誨ふ

宋慈受深禪師の小參示衆云はく、『名利を忘れ、淡薄に甘んじ、世間の心は輕微に、道念は自然に濃厚なり。區擔山和尚は一生橡栗を拾つて食と爲し、永嘉大師は鋤頭下菜を喫せず。高僧惠休は三十年一編の鞋を著け、輒地に遇へば則ち赤脚す。汝今種種の受用、未だ饑えずして食し、未だ寒からずして衣る。未だ垢かすして浴し、未だ睡からずして眠る。道眼未だ明ならず、心漏未だ盡きざるに、如何が消得せん。』

【汝今】 以下衆に示すの語なり。

【二四】 衲衣一食。

【二四】 衲衣一食

宋の慧照、居は唯一身にして時人を畜へず。日に惟一食にして、人の施を受けず。房地惟一蹤、餘は並に菴苔所坐の榻、惟中心に於てす。兩頭摩合して久しく曠しき者の如し。衣服敝惡にして僅に風寒を免る。冬は破衲を服し、夏は則ち梁上に懸け置く。其名を聞く者は、房に就いて參謁する有り。迎逆接候、目を累ねて方に見ることを得。

【二五】 獨り死關を守る

元の高峯妙禪師は龍鬚に在ること九年、柴を縛して龕と爲し、冬夏一衲なり。後に天目西岩の石洞を造りて、小室を營みて船の如くす。榜して死關と曰ふ。上溜り下淖ひ、風

- 【一蹤】 來往の跡あるなり。
- 【榻】 床の小さきもの。
- 【二五】 獨守死關。柴草にて作れる小庵なり。
- 【上溜り】 屋の疎なるもの。
- 【下淖】 床の低きもの。

【天懸】 高く聳ゆるなり。
【九霄】 九天と同じ。

【總論】 清素一篇を總括す。

【嚴正の行】 人をして一道に處して邪路に曲らしめざるの行。

【一】 禁拒女尼。禁拒 制止し、絶離するなり。

【已未具云云】 比丘と沙彌とを分處するなり。

【弘法の時】 道俗通授の三誓戒を受くる時の意。

雨懸揺す。給時を絶し、服用を屏け、身を操せず、髪を薙らず。鬘を截りて鑄と爲し、日を併せて一食宴如たり。洞は梯に非ざれば登ること莫し。梯を去れば縁を斷つ。弟子と雖も瞻視を得ること罕なり。

贊に曰はく、天懸九霄、壁立萬仞、前に熙公有り。後に此老有り。眞に迥に嗔氣を絶せり。曩余、天目に登りて、張公の洞に入り、俯して千丈の岩に臨んで、死關の遺を訪ふ。師の威容を觀るに、恍として日に在り、自ら生るること晚くして親炙を獲ざることを悲しむ。因つて涕淚すること之を久しうす。

總論

比丘、華には乞士と言ふ。清淨自活するを名けて乞士と曰ふなり。而も求め多く、而も畜へ多く、而も事多きは、亦實に其名に叛かざらんや。旻師より而下諸公千載、今に至るも流風未だ泯びず、其風を聞いて興起せずんば、尙比丘と爲ることを得んや。

嚴正の行第二

【一】 女尼を禁拒す

隨の靈裕は定州の人なり。衆を兩堂に安じて、已未具を簡ぶ。言行灑るる者は之を斥け。女尼には誓つて戒を授けず。弘法の時方に寺に入ることを聽す。仍後に進んで先に出づれば、己れの房に登踐せしめず。沙彌の受具は必ず餘師證して、時に至りて乃し壇に臨むの

【衣服の度に云云】法服は律の定むる所あり、過越のものには必ず割いて其本を知らしむ。

【一】幼絶戲掉。

【素】長捷と號す

【卓】高なり、超なり。

【梗】正直なり。

【三】嚴訓侍者。

【侍者】教を承る人をいふ。

【世諦に涉らず】衣食の煩勞、住處の進退、王臣の酬對、俗士の交際等一切これを廢す。

【程門三尺】宋の時游定夫と、揚中立と、程伊川先生に見ゆ。

み、身を終るまで布衲の裙は踝の上四指に垂る。衫袖は僅に肘と齊し。衣服の度に過ぐる者を見れば、衆に當りて之を割く。

【二】幼にして戲掉を絶つ

唐の女獎法師、姓は陳氏、漢の太丘公の後なり、兄の素に隨ひて出家す。年十一にして維摩、法華を誦す。卓然梗正時流に偶はず。諸の沙彌の劇談掉戲するを觀て、謂つて曰はく、「經に云はずや、夫れ出家は無爲の法を爲すと、豈復更に兒戲を爲さんや、徒に百年を喪すと謂ふべし。」と。識者、師の徳器の凡ならざるを知る。

贊に曰はく、童年にして盛徳なるは天賦の獨り隆なるに非ず、蓋し宿習の忘ぜざるなり、此を知れば、則ち以て來生を今日に辨すべし。

【三】侍者を嚴訓す

唐の智正は定州安喜の人なり、開皇十年勅を奉じて勝光に住す。仁壽の後、終南の至相寺に入り。淵法師と侶たり。二十八年世諦に涉らず。弟子の智現といふ者、伏して法教を承く。正は凡そ著作有れば端坐思惟す。現に紙筆を執りて立つて侍す。隨出隨書す。累載初より坐を賜らず。一日足疼き心悶ふ。覺えず地に作る。正、呵責して曰はく、「昔人、足を翹ぐるること七日。汝今纔に立つて顛墜す。心輕きが故なり。其嚴なること此の如し。贊に曰はく、地に伏れて猶呵責を加ふ。已だ甚しからずや。噫古人軀を忘れて法の爲にす。少室腰に齊し。程門三尺、過ぎたりと爲すに足らず。今坐して道を論するに尙厭倦

【四】 破壊酒器。

【繕造有り】 陪の末賊徒交亂して佛寺僧坊灰燼す。鑿師之を營復す。

する者有り。師嚴道尊の敵るるや久し、悲夫。

【四】 酒器を破壊す

唐の玄鑿は澤州高平の人なり。性は敦直にして非法を見ては必ず面りに呵毀を陳べて強禦を避けず。數繕造有り。工匠繁多酒を送る者或れば輒之を止めて曰はく、「吾造る所必ず如法ならしめん。寧ろ工を罷めしむとも、飲酒を容すこと無けん。時に清化寺、佛殿を修營す。州の豪族孫義、酒兩輿を致す。鑿即ち酒器を破りて地上に流溢す。義大いに怒りて、明に將に惱を加へんとす。夜夢に、人刀を以て之に擬す。既に悟りて躬ら詣りて懺悔す。

贊に曰はく、今時、工役に餉るには惟に酒を用ふるのみに非ず。兼ねて復醒を飪ふ。棟を堅て、梁を安じ、神に賽し、客に宴するに至りては、且復丁担の刃を赤す。天堂未だ就らざるに、地獄先づ成ると。豈虚言ならんや。營繕を司る者、當に痛く以て戒と爲すべし。

【五】 不面女人。

【五】 女人に面せず

唐の道淋は同州合陽の人なり。三十五にして出家し、太白山の深岩に入りて隱居す、勸して大興國寺に住せしむ。頃之深山の陽に逃る。生より終に至るまで儉約を務と爲す。女人は生染の本なるを以て、一生親しく面せず。爲に説法せず、従つて食を受けず、房に入らしめず。臨終の際、來りて疾を問ふ者あり。障を隔てて潜に知り、遙に之を止めて面

對せしめず。

【齒を見す】口を開いて笑ふなり。

贊に曰はく、律の中にも亦女人の爲に說法することを許す。但齒を見ず事を得ざれ。語多きことを得ざれと。而るに此老絶えて說法せず。扠を矯めて正に過ぐるに似たり。然れども本法澆漓、其女人の爲に說法せざることを憂へず。惟其れ說法して染を成さんことを憂ふるのみ。此老の如きは良に後進の程式と爲るに足れり。

【六】 力衛殿堂。

【六】 力めて殿堂を衛る

【錫杖三衣を取り】寺を辭するなり。

唐の惠主は始州永歸縣の人なり。律學に專精して青林寺に居す。時に陵陽公、益州に臨む。素より信心少し。百餘駄を將て寺に入りて、佛殿、講堂、僧房に就いて安置す。敢て違する者無し。主、莊より還りて斯穢雜を見て、即ち房に入りて錫杖三衣を取りて出でて嘆じて曰はく、『死活は今日なり。』杖を擧げて鱧驛に向へば、一時に倒れ仆して死せるが如し。主手から攀げて之を坑中に擲つ。縣官大いに驚いて主を執へ、狀を申ぶ。陵陽喜んで曰はく、『律師我慳貪を破りて、深く大利を爲すことを蒙る。』沈香十斤、綾紬十段を遣る。後に京に還りて、從つて菩薩戒を受く。

【七】 擯黷豪尼。

【七】 豪尼を擯黷す

唐の慧滿は雍州の人なり。七才にして出家し、後に敕を奉じて弘濟寺に住す。時に證果寺の尼、官禁に出入して、僧寺を取りて菴と爲す。滿、衆を集めて擯黷す、尼、東宮に訴ふ。詹事杜正倫寺を遣して其擯事を解かしむ。滿、法に執して從はず。衆禍の及ばん

【八】 不受仙書。

【仙書】 長生不死の道を説くものなり。

【衲衣】 僧の著るべき三種の衣。大衲、七條、五條の袈裟。

【僧稠】 幼にして落髮し沙彌となる

【九】 闔門拒子。

【一〇】 抗章不屈。

事を懼れ、遂に強ひて解く。滿、嘆息して悦ざることを累日なり。尼、後に滿に詣りて過を謝す。滿終に顧みず。

【八】 仙書を受けず

唐の法常は襄陽の人なり。性剛敏にして衲衣囊鉢、志を卵齊に畢ふ。貞元中に天台より梅山に之く。梅山とは梅福の舊隱なり。常に之に寄居す。夢に神人告げて曰はく、「君は凡流に非ず。此石庫の中に聖書有り。之を受くる者は、下界の主と爲り。然らずんば帝王の師爲らん。常曰はく、「此れ吾好に非ず。昔僧稠、仙經を顧みず、其卷自ら亡ぶ。吾は惟涅槃を以て樂と爲すのみ。」と。神人嘆服す。

【九】 門を闔して子を拒む

唐の從諫は南陽の人なり。壯歳にして出家し、頓に玄理を了す。會昌の沙汰に皇甫氏の別業に潜居す。大中の初に教を復す。因つて洛邑の舊居に還る。其子廣陵より來り觀す。諫と院の門に遇へども、復能く識らず。乃ち問うて曰はく、「從諫大徳何くにか在る。」諫指して東南に之かしむ。子既に去るや、門を闔して出でず。其愛を割くこと此の如し。

【一〇】 章を抗げて屈せず

唐の智實洛下に居せる時、太宗洛に幸す。道士に詔して位を僧の前に列せしむ。京邑の沙門、諫を陳ぶれども有司納れず。實、駕に隨ひて表奏して極めて其失を論ず。帝は宰相岑文本をして旨を論して之を遣らしむ。實固く執して詔を奉ぜず。帝震怒して實を朝

堂に杖たしめ、其衣を民にし之を嶺表に流す。其進退を量らざることを譏る者有り。實曰はく、『吾固より勢の爲すべからざるを知る。争ふ所以の者は後世、大唐に僧有ることを知らしめんと欲するのみ。』聞く者嘆息す。

【二】 防心難過。

【蔬果云云】 蔬果にても、魚肉の名あれば食はず。

【二】 心を防ぎ過を離る

宋の汴京、善本禪師、姓は董氏、漢の仲舒の裔なり。博く群書を極む。圓照本禪師に依りて剃落し、哲宗の朝に法雲に住す。號を大通と賜ふ。平居作止直視して瞬がず。衆に臨むこと三十年、未だ嘗て輕しく一笑を發せず。凡そ住する所佛菩薩の立像を見ては終に敢て坐せず。蔬果魚肉を以て名と爲すは則ち食せず。其心を防ぎ過を離る。類此の如し。徽宗の大觀三年十二月甲子、忽ち左右に謂つて曰はく、『止三日有り。』と。已にして示寂す。世に大本小本と稱すと云ふ。

贊に曰はく、心を防ぐことは是の如し。古の謂ゆる聖賢今の謂ゆる迂僻なり。哀しいかな。

【三】 終夜拱手を拱す

【拱手】 兩手を合持するなり。

宋の圓通訥禪師は常に定に入る。初め又手して自如たり。中夜漸く昇りて膺に至る。侍者毎に視て以て雞鳴を俟つと云ふ。

【中夜漸く云云】 精神倍盛して分毫も懈怠せず。

【三】 世事を談せず

宋の光孝安禪師は清泰寺に住す。定中二僧の檻に倚りて相語るを見る。初め天神の擁衛

【間闕を叙す】久しく相見ざるなり
【資養】保養なり
即ち財貨の多寡、衣食住の損益、名聞利養の潤澤等を低語するなり。

【六和】六和敬に於て、身、口、意、戒、施、見の六種を以て和合し親重するなり。
【嚴正】正直にして曲らざるもの。

【尊師の行師】道に對して尊崇敬重するの行。
【一】力役田舎。

して衆を傾くる有り。久之して散じ去る。俄にして惡鬼唾罵す。仍脚跡を掃ふ。其故を詢ふに、乃ち二僧初め佛法を論じ、次は間闕を叙し、末は資養を談す。安是より身を終るまで未だ嘗て言世事に及ばず。

贊に曰はく、古人生死の爲に行脚し、纔に師友に逢ふや惟汲汲として是事を商略す。何ぞ他論に暇あらん。今人終日雜話す。二僧の如きを求むるに亦復得べからず、鬼神側在るも、又當に何如がすべき。噫懼るべきのみ。

總論

或謂く、六和を併と名く。又僧は忍辱を行す。宜しく嚴に取ること無かるべし。知らず吾謂ゆる嚴とは嚴厲の嚴に非ず。蓋し嚴正の嚴なり。嚴正を以て心を攝すれば則ち心地端し。嚴正を以て法を持すれば則ち法門立つ。若し夫れ奇特を現じて以て譽を要して兇暴を逞うし、以て威を示す。今の嚴正と實に霄壤なり。衲子辨ぜずんばあるべからず。

尊師の行第三

【一】田舎に力役す

晉の道安法師は十二にして出家し、神性聰敏にして形貌甚だ陋なり。師に重ぜられず。田舎に驅役して三年に至る。勤を執り勞に就いて曾て怨色無し。數歳の後、方に師に啓して經を求む。師辨意經一卷を與ふ。五千言可りなり、安、經を賚して田に入り、息ふに

因りて就いて覽る。暮に歸つて更に餘經を求む。師曰はく、「昨の經未だ讀まず、乃し復求むるや。」答へて曰はく、「即ち已に誦を成す。師之を異むと雖も而も未だ信ぜざるなり。更に『成具光明經』一卷を與ふるに將一萬言なり。之を賚して初の如くす。暮に復經を還す。師之を誦せしむるに一字を差へず。方に大いに驚嘆す。

贊に曰はく、安は清廟の圭璋なり。之を耒耜に置くも而も服勤して怨みず。今の弟子纒に寸長を負うて禮す。貌衰ふれば則ち去る、況んや田役をや。況んや田役に久しきをや。吾是に於て三嘆す。

【二】 受杖自責。

【二】 杖を受けて自ら責む

晉の法遇は道安に事へて師と爲す。後に江陵の長沙寺に止まりて衆經を講説す。業を受くる者四百餘人なり。時に一僧あり酒を飲む。遇、罰して而も遣らず。安遙に之を聞き竹筒を以て一の荆杖を貯へて封緘して遇に寄す。遇、緘を開き杖を見て即ち曰はく、「此れ飲酒の僧に由るのみ、我訓領勤めずして、遠く褒賜を貽す。遂に推を鳴して衆を集め、筒を以て前に置き、香を焼いて敬を致し、地に伏して維那に命じて、杖を行はしむること三下、涙を垂れて自ら責む。境内の道俗嘆息せざる無し、之に因りて業を勵す者甚だ衆し。

【三下】 自ら杖を受けること、三下以て怠慢の罪を謝す

贊に曰はく、噫今人をして安老の緘を發せしめば、其れ筒を碎き、杖を折りて醉語せざる者寡し。聖師、賢弟子千載なり。而下吾猶二公の爲に之を多とす。

【三】 爲師禮懺。

【三】 師の爲に禮懺す

【四】立雪過膝。

【魏の神光】以下は斷臂求法の一縁を明す。

晉の法曠は下邳の人なり。早く二親を失す。繼母に事へて孝を以て聞ゆ。後、出家して沙門曇印を師とす。師、嘗て疾病し危篤なり、曠、乃ち七日七夜祈誠禮懺し、第七日に至るや忽ち五色の光明、印の房戸を照すを見ゆ。印、人有りて手を以て之を振ふことを覺ゆるが如し。苦む所遂に愈ゆ。

【四】雪に立つて膝を過ぐ

魏の神光は學解世に冠たり。達磨大師西域より至る。往いて之を師とす。磨未だ嘗て與に語らず一夕大いに雪ふる。光、庭砌に立つ。曉に及んで雪其膝を過ぐ。磨顧みて曰はく、「久しく雪中に立つ、何事を求めんと欲するや。」光泣いて曰はく、「惟願くば和尚、甘露の門を開いて廣く群品を度したまへ。」磨曰はく、「諸佛無上の妙道、曠劫精勤行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ。尙至ること能はず。汝今輕心淺心を以て眞乘を冀はんと欲す。徒らに勤苦に勞す。」と。光、謗鬪を聞いて双を以て臂を斷ち、磨の前に置く。磨曰はく、「諸佛は道を求めて法の爲に形を忘す。汝今臂を斷じて求むるも亦可なること有り。」光曰はく、「我心未だ安からず。乞ふ、師安心せしめよ。」磨曰はく、「心を持ち來れ。汝が與に安んぜん。」光曰はく、「心を覺むるに了に不可得なり。」磨曰はく、「汝が爲に安心し竟れり。遂に法を傳へて二祖と爲す。」
贊に曰はく、二祖の得法、良に精誠已に極り、機縁已に熟するに由りて、乃し爾く針芥相投す。必ず斷臂を取るに非ざるなり。癡人嗔に效うて將に力を刀砧に致さんとす。噫法

【五】 離師悔責。

を傳へて必ず臂を斷たば則ち諸祖完膚無く、成佛して必ず身を燃かば、則ち列聖、唯類無けん。煩惱の臂を斷じ、無明の身を燃かん。願くば禪者、之を勉めよ。

【五】 師を離れて悔責す

唐の清江は幼にして幻泡を悟る。曇一律師を禮して親教師と爲す。經法を諷誦して目に觸るれば通ず。識者曰はく、『此緇門、千里駒なり。嘗て師と稍忤ふ。捨てて遊方す。』遍く法筵を歴て自ら責めて曰はく、『天下行くこと半なり。我本師の如くなる者鮮し、乃ち師の所に還る。僧の集る時に當りて、刑を負うて唱へて言ふ、『某甲再び和尚に投ぜん。惟願くば攝受したまへ。』時に一公詬罵す。江涙を雨して懺謝して曰はく、『前念知ること無し、後心悟ること有り、望むらくは和尚、大慈もて歡喜を施與したまへ。求哀すること再四す。』一公之を憫んで遂に師資と爲すこと初の如し。一公没して忠國師に謁し、密に心要を傳ふ。贊に曰はく、聖賢を捨てて非を知り、詬罵に當りて退かず。謂ふべし、明にして且つ誠なりと。終に心印を傳ふ。由有らざらんや、彼淺信の流れ、嫌へば則ち長く往いて返らず。微しく呵すれば則ち恨を銜んで忘れず。空しく明師に遇ふ、竟に何の益か有らん。帝王に逢うて一官を獲ざるが如し。惜いかな。

【六】 迎居正寢。

【六】 迎へて正寢に居らしむ

唐の石霜の慶諸禪師は法を道吾に得たり。後に瀏陽の洞山に隱る。瀏陽古佛の語有り。學者多く之に依る。道吾將に化せんとし、其衆を棄てて諸に従ふ。諸迎へて正寢に居らし

【行けば云云】老病歩に堪えざるより之を抱持するなり。

【坐すれば云云】保護敬養の禮を盡せり。

【七】 歴年執侍。

【招賢】 寺名なり

【六官】 唐の後宮の官名。

【鳥窠】 誰は道林姓は潘なり。

【織絁の力】 木綿紵麻等を織り成したる横縦の糸の力

【八】 謹守遺命。

め、行けば必ず掖け、坐すれば必ず侍す。備に敬養の禮を極む。

【七】 歴年執侍す

唐の招賢通禪師は少にして六官の大使爲り、因に鳥窠に詣りて出家を求む。窠納れず。堅く求む。乃ち爲に刺落す。左右に執侍して勤劬替らず。一十六年を経て開示を蒙らず。辭し去らんと欲す。窠問ふ、「何にか之く。」曰はく、「諸方に佛法を學し去らん。」と、窠云はく、「佛法此間にも亦少し許り有り。遂に布毛を拈起す。忽ち太悟す。布毛侍者と號すと云ふ。

贊に曰はく、人、侍者の布毛の下に於て、悟り去るを見て、一十六年織絁の力を知らず。多載辛勤するに匪ずんば、焉んぞ今日の事有らん。明師に遇ふ者、幸に躁心を以て之に乗すること毋れ。

【八】 謹んで遺命を守る

宋の懷志は金華の人なり。幼にして講を業とす。因に一禪者激發す。講を棄てて參方す。晩に洞山に至りて法を眞淨文禪師に得。久しうして辭し去る。眞淨囑して曰はく、「予が禪は逸格なりと雖も、惜むらくは縁勝れざるのみ。志拜して命を受け、袁州に至る。州人講じて揚岐に住持せしむ。肘を掣ちて去る。湘上に遊ぶに彈の牧請じて上封の北禪に住せしむ。皆受けず、衡嶽に庵すること二十餘年なり。偶有り曰はく、「萬機休罷して痴憨に付す。蹤跡時に容す野鹿の參するを。麻衣を脱せず拳を枕と作す、幾生夢は在り絲蘿庵。晩

【贊に曰はく云云】
夫れ徳に顯晦あり
縁に熟不あり。古
人の龍天の推出を
待つゆゑなり。
志公の身に及んで
師これを誡め、資
これを守る隠居し
て生涯を全す。

【九】 訓に遵じて隠に終る

宋の清素は法を慈明に得て在處衆中に隱る。兜率の悦公、時に衆に在り。因に夜話に詢うて慈明の侍者爲ることを知り、大いに驚く。明日威儀を具して參扣往復、開發して遂に大悟を得。仍悦を戒めて曰はく、「吾福薄を以て、先師授記して人の爲にすることを許さず。子の誠を憐みて、先師の戒を忘る。子以後切に吾に嗣くこと勿れ。身を終るまで陸沈し、人の知る者無し。」

【一〇】 兵難に離れず

元の印簡は山西寧遠の人なり。八歳にして中觀の沼公を禮して師と爲す。十八にして元の兵、寧遠に下りて四衆難を逃る。簡は中觀に侍すること故の如し。觀曰はく、「吾桑榆に迫る、汝方に春秋を富有す。何ぞ當に玉石俱に焚くべけんや。宜しく自ら逃げ遁るべし。」簡泣いて曰はく、「因果差ふこと無く、死生、命有り。安んぞ師を離れて苟くも免るべけんや。明日城降る。元の帥史公、天澤問うて曰はく、「汝何人ぞ。」對へて曰はく、「沙門。」肉を食ふや否や。」對へて曰はく、「何の肉ぞ。」史曰はく、「人の肉なり。」對へて曰はく、「虎

【陸沈】 陸地は元より水に非ざれば沈没せず。身を地上に安じて未だ曾て人に知られざること猶物の水中に没入するが如し。

【四衆難を逃る】 遁俗男女遁逃して跡を亡す。

【桑榆に迫る】 桑榆皆短少の木なり。老耄して命の長からざるを喻ふ。

【春秋】 盛年の春秋百歳を保つをいふ。

【何の肉ぞ】 虎

豹尙相食ます、況んや人をや。史喜んで之を釋す。

總論

古の弟子爲る者は師没して信愈堅し。今の弟子爲る者は師存して守ること己に易る。所以は何ん。良に最初の出家、實に眞師に依止して生死を決擇せんと欲するに非ざるに由る。蓋し一時の偶合のみ。是を以て其心、利を見れば則ち易り、悪友の之を惑ふに逢へば則ち易り、其師の訓ふるに正を以てするを嘖れば、則ち易る。甚だしきは、喬を下り幽に入る事、陳相の如く、釋を罷め道を事ふること靈素の如き者之れ有り。又甚だしきは太陽の平侍者の流、未だ必ずしも其れ人無きにあらず。嗟悲しいかな。

孝親の行第四

【孝親の行】善く父母に事ふる者の行。

【一】蘭盆勝會

【蘭盆勝會】孟蘭盆會を指す。目連母を救ふの縁に依りて施餓鬼會を修するを云ふ。
【大目連連】佛の十大弟子の一、神通第一と稱せらる。
【六神通】天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六神通のこと。

佛世の大目連、母に事へて至孝なり、母死して出家し精進に行道して六神通を得たり。亡母の餓鬼の中に生ずるを見て飯を持して往いて餉するに飯は猛火と化す。目連痛哭して佛に白す。佛言はく、「汝が母罪重し、汝一人の力の奈何ともする所に非ず。必ず十方衆僧威神の力を假り、當に七月十五日佛歡喜の日、僧自恣の日に、母の爲に孟蘭盆齋を設けて佛及び僧に供すべし。始めて克く濟拔せん。目連、教の如く齋を設けしに、其母即ち是口を以て餓鬼の苦を脱しぬ。轉じて更に資薦して、遂に天上に生ず。此に由り蘭盆の勝會

萬世に流通せり。

贊に曰はく、生ける時に養ひ死せる時に葬るは小孝なり。生けるには豫に底らしめ、死せるには芳を流さしむるは大孝なり。生は其正信に導き、死せば其靈神に薦むるは大孝の大孝なり。目變連は之を以てす。

【二】 母必親供。

【二】 母は必ず親ら供す

齊の道紀は成實を習ひ『金藏論』七卷を造りて鞞城の東郊に於て講演す。往いては即ち其母及び經像等を荷擔す。人に語つて曰はく、『母必ず親ら供すること、福は登地の菩薩と等しきを以てなり。』衣著食飲、大小の便利、躬自ら經理し、他人を煩さず。之を助くる者有れば輒ち之を拒んで曰はく、『吾母なり、爾が母に非ず。形骸の累並に我身なり。身有れば必ず苦あり。何を以てか人を勞さん。』と。道俗聞く者多く感化す。

【三】 居喪不食。

【三】 喪に居て食はず

【色養】 恭敬奉事の容易ならざるをいふ。
【母の憂】 母の亡するをいふ。

梁の法雲は陽羨の人なり、七歳にして出家し莊嚴寺寶亮の弟子と爲る、雋朗英秀なり。妙音寺に於て『法華』淨名「の二經を聞く。學者海のごとく轉る。性誠に孝にして、色養に勞せり。母の憂に居して毀瘠、禮に過ぐ。日を累ねて食せず。曼法師謂つて曰はく、『聖人は禮を制す、賢者は俯して就き、不肖者は跛して及ぶ。且毀すれども性を滅せず、尙儒宗に出でたり。況んや佛は至言有り。生恩に報ぜんと欲せば、近くは則ち時時顔儀に奉じ、遠くは則ち菩提を啓發して以て神識を導く。宜しく速かに遠理を思ひて津を成ずること有

【四】泣血哀毀。

【善説休まず】大品や樂等を講説して暇日なし。

【五】荷擔聽學。

【六】鑿井報父。期願 百年をいふ。老の極まれるなり。

【九達】今の十字街道なり。

【義井一區】衆人の爲に井を造りて潤澤を四方に施すをいふ。

【七】禮塔救母。

らしむべし。何んが情を恣にして細近に同じかるべき。雲乃ち哀を割き微しく餽粥を進む。

贊に曰はく、曾子の母死す、水漿口に入らざること七日、即ち雲公の喪に居る。曾子と雖も何んが焉に加へん。語に曰はく、『釋氏其親を棄つ、豈理ならんや。』と。

【四】血に泣いて哀毀す

隋の智聚は蘇州の虎丘東山寺に住す、至徳三年、母の憂に丁りて血に泣いて悲哀し毀滅に幾し。東山の精舎に止まりて善説休まず、法輪常に轉ず。

【五】荷擔して聽學す

隋の敬脫は汲郡の人なり。少にして出家し孝行清直を以て聞ゆ。其聽學するや常に荷擔を施す。母を一頭に置き、經籍楮筆を一頭に置く。若し食時に當りては母を樹下に坐せしめて、村に入りて乞食す。

【六】井を鑿ちて父に報す

唐の慧斌は兗州の人なり。父朗、朝に在りて年期願に迫る。愛敬するに由無し。乃ち汝水の陰九達の會に於て義井一區を建てて以て父の恩に報い、碑を立てて之に銘す。殷に暮景を憂ふ、子を見るに期無し。百年幾く日なる。此に對して長く悲むの句有り。

【七】塔に禮して母を救ふ

唐の子類は范氏の子なり。母は王氏。三寶を信ぜず。邾、東都に逃れて、廣愛寺の慶修

【歸寧】家に歸りて父母の安を訪ふなり。
 【明を失ひ】辨者なり。

【八】 悟道報父。

【芒鞋】履を飾らざるなり。
 【布衲】衣を美にせざるなり。
 【氣を撻す】食噉を減ずるなり。
 【頭陀】三毒の塵穢を除く義
 【再來の人】備公の行履よく一生にして修し得る者に非ざることを稱す
 【九】 剗股出家。

律師に依りて出家し忽ち親を思ひて歸寧す。父明を失し母已に故して三載。因つて岳廟に詣でて坐具を敷いて法華を誦す。岳帝に見えて母の生處を求めんと誓ふ。其夜岳帝召して謂ひて曰はく、「汝が母禁獄せられ、見に諸苦を受く。」と。鄰悲泣して免されんことを請ふ。帝曰はく、「鄧山に往き育王塔を禮すべし。庶くは救ふべし。」鄰即ち塔に詣でて哀泣禮拜すること四萬に至りて、俄に鄰を呼ぶ聲有るを聞く。空中を望むに母の謝するを見る。曰はく、「汝が力を承けて忉利天に生ずることを得たり。」と。倏然として見えす。贊に曰はく、目連佛の教を感じ、以て僧に供し、子鄰神の教を感じ、以て塔を禮す、至孝神明に通ず、誑ぞ信ぜんや。

【八】 道を悟りて父に報ゆ

唐の師備、姓は謝氏。父は漁を以て業と爲す、水に墮して死せり。備因りて出家し其父に報ぜんと欲す。芒鞋布衲、食は纒に氣を接す。雪峯の存禪師と友たり。其苦行を以て呼んで頭陀と爲す。嘗て囊を携へ嶺を出でて遍參せんと擬欲す。忽ち足を傷けて血を流す。當然として悟り、遂に嶺を出でず。峯に依りて必要を咨決す。峯嘗て稱して曰はく、「備頭陀は再來の人なり。後忽ち夢む、父來り謝して云はく、『子が出家して心地を了明せるを荷つて、已に天に生ずることを得たり。故に來り報ずるのみ。』」

【九】 股を剗いて出家す

唐の鑿宗は湖州長城の人に於て、姓は錢氏、父は晟、疾有り。宗は股の肉を剗いて之

【他畜の肉】 鷄豚等を指す。

【一〇】 織蒲供母。

【黄葉】 名は希運、勅して紫籙禪師と諡す。

【一】 誠感父母。

【長安焚蕩す】 遷都の後、長安荒廢す。

を饋る。給いて曰はく、「他畜の肉なり。」と。父の病因りて愈ゆ。乃ち出家を求む。後に鹽官悟空禪師に謁して、家に隨ひて參請し、頓に心源に徹す。咸通中に天目の東峯徑山に止る。徑山第二祖と號す。

【一〇】 蒲を織りて母に供す

唐の睦州の陳尊宿、諱は道明。初遊方し黄檗に契旨す。觀音院に住するに、常に百衆に餘る。後に衆を捨てて開元寺の房に入りて蒲履を作り、道路に施し履を貸りて母を養ふ。人陳蒲鞋と號すと云ふ。

【一】 誠に父の骨を感す

後周の道不は長安貴胄里の人なり。唐の宗室なり。七歳にして出家し、十九にして鶴の洛京に幸するに値ひて長安焚蕩す。乃ち母を負うて華山に入り岩穴に安止す。時に穀湧貴す。不自ら穀を辟けて惟食を乞ひて母に供す。「食するや未じや。」と問へば、母の意を傷はん事を恐れて必ず曰はく、「已に齋す。」と。母曰はく、「汝が父は霍山に戰役して、骨を霜露に暴す。能く收取して歸り葬らんか。」遂に霍山に往いて白骨を拾ひ聚め、晝夜誦經して之に咒して曰はく、「昔人精誠の感する所、血を滴らして骨を認む。願くは群骨の中に動轉する者有らば、即ち吾父の遺骸なり。」一心に想を注ぎ日輕しく捨てず。數日の間に獨體骨聚より躍り出でて搖曳良久せる有り。丕躡踊抱持して齎歸りて母に見す。是夜母、夫歸ると夢む。明晨骨至る。人以て孝感の致す所と爲す。後に制に應じて道を論ふ。多

【二三】念佛度母。

【方丈】寺院の正寝なり。

【世人】以下、佛世尊の孝行を教授したまへるもの大藏經中千百を數ふべからず、僧中の至孝反つて世人に過ぎたるもの有る所以なり。

く元席に居す。朝野歸重せり。

贊に曰はく、粒を絶ちて母の饑に餉し、經を誦して父の骨を獲たり。謂ふべし大孝は存歿を兼ねて至行古今に超ゆる者と。嗚呼異なるかな。

【二三】念佛して母を度す

宋の宗蹟は襄陽の人なり。父早く喪す。母は陳氏、携へて舅氏に養ふ、少にして儒業を習ふ。年二十九にして長蘆の秀禪師を禮して出家し、玄理に參通す。母を方丈の東室に迎へて母に勸めて髪を剪らしむ。甘旨の外務めて念佛を進む。後疾無くして終る。勸孝の文を製して世に行ふ。慈覺禪師と號す。

贊に曰はく、蹟公篤く淨土を信じて、惟れ自ら利するのみにあらず。而も兼ねて其母を利して果して往生を得しむ。母を度して天に生ぜしむるよりも賢れる者多し。沙門其親に報ぜんと欲せば此を知らざるべからず。

總論

世人釋氏の父を無することを病ふ。而も釋氏、其親に孝あることは返つて世人に過ぎたり。傳記に載する所蓋し歴として明徴有り。今猶僧を嫉みて蛇蝎の如くする者あるは即ち僧の罪なり。則ち痛恨すべし。其罪三有り、安んじて十方の供を享けて其親を念はざる者一なり。高く舟車に坐して其親をして牽輓せしめて工僕の如くする者二なり。愛を割き家を出でて別に他の男女を禮して以て父母と爲す者三なり。願くば諸の世人、此三の不

才の僧を以て一切を病ふること毋れ。

忠君の行第五

【一】 開陳報應。

【善惡報應】善惡の二言は因果なり。報應の二言は果なり。因果の法門といふは是れを佛説正因果の法門といふ此理に明かなるものを正見と名け、邪見と名く。

【二】 勸善弭災。

【妖星】常に出てざる星。
【次を移す】妖星其止宿する所を易ふるなり。

【一】 報應を開陳す

吳の僧會を吳主皓召して問うて曰はく、「佛の善惡報應を言へること聞くを得べしや。」對へて曰はく、「明主孝慈を以て天下を治むれば則ち赤烏翔り壽星見る。仁慈を以て萬民を育すれば則ち醴泉湧く嘉禾苗づ。善既に應有り、惡も亦之の如し。故に惡を隱に爲せば鬼得て之を誅し、惡を顯に爲せば人得て之を誅す。易に積善の餘慶を稱し、詩に福を求めて回ならざるを美む。周孔の格言なりと雖も即ち佛敎の明訓なり。皓曰はく、「周孔既に明さば何んが佛敎を用ひん。」對へて曰はく、「周孔は深く言ふことを欲せず、故に略して其槩を示す。佛敎は淺く言ふに止まらず、故に備に其詳を陳ぶ。聖人は惟善の多からざらんことを恐る、陛下以て嫌ふことを爲すは何ぞや。」語深く之を然りとす。

【二】 善を勸めて 災を弭む

晉の法贖、簡文皇帝詔して起居を問ふ。并に諮ふに妖星を以てし、曠に請ひて力を爲さしむ。曠、詔に答へて曰はく、「景公德を修して妖星次を移す。願くば陛下、勤めて徳政を修して以て天譴を塞げ。貧道も必ず當に誠を盡くすべし。乃ち弟子と齋懺す。俄にして星滅す。」

【三】 規諫殺戮。

【深理】 斷惑證理なり。

【道術】 菩薩修得の神通なり。一報通、二藥通、三咒通、四修通。

【西靈】 麟、鳳、龜、龍をいふ。

【休咎】 好惡の義

【四】 巧論齋戒。

【齋戒】 八戒齋なり。一不殺生、二不偷盜、三不婬、四不妄語、五不飲酒、六不坐高廣大床、七不著華鬘香衣、並に歌舞作樂、八不非時食なり。

【三】 殺戮を規諫す

晉の佛圖澄、石勒殺すを好むを以て乃ち勸に諍る。勸問ふ、「佛道何の靈驗か有る。」澄、勒の深理に達せざるを知りて、宜しく先づ勸すに道術を以てすべしとし、乃ち鉢を取り水を盛り香を燒きて之を呪するに、須臾にして青蓮華を生ず。勸信服す。澄因りて諫めて曰はく、「夫れ王者の徳化、宇内に洽ければ則ち四靈、端を表し、政敵れ道消すれば則ち葦字上に見る。恒象著見休咎隨つて行はる。斯れ古今の常徴、天人の明誠なり。勸甚た悦ぶ。誅戮せらるるに應じて救済を蒙る者甚だ衆し。

贊に曰はく、嘗て怪しむ、南北朝に高僧多く、賢聖の出興、平世に於てせず、而も亂世に於てするは何ぞや。良に運厄に時艱に民窮し物苦むを以て、大悲救済、正に斯時に在るのみ。謂ゆる藥は病を救ふに由りて金瓶を出づるのみにあらずや。

【四】 巧みに齋戒を論ず

宋の求那跋摩は罽賓國王の族なり。元嘉八年建業に達す。帝問うて曰はく、「寡人は持齋不殺ならんと欲して、身國政を主る。志に従ふことを獲ずんば奈何せん。」對へて曰はく、「帝王の修する所は匹夫と異り、匹夫は身賤く名劣なり、應に須らく己を勉めて躬を苦むべし、帝王は四海を以て家と爲し萬民を子と爲す。一の嘉言を出せば則ち士庶咸く悦び、一の善政を布けば則ち人神以て和す。刑して命を天せず、役して力を勞せざれば則ち風雨時あり。寒暑調ひ、百穀茂す。此の如きの持齋は齋亦大なり。此の如きの不殺は戒も亦至

れり。寧ぞ半日の養を撤し、一禽の命を全うして、然る後に弘濟を爲すに在らんや。帝、凡を撫して歎じて曰はく、「俗人は遠離に迷ひ、沙門は近教に泥む。法師の言ふ所の如きは眞に開悟明達にして、天人の際に通ずと謂ふべし。」有司に勅して供給し、國を擧げて宗奉す。

贊に曰はく、帝王の佛法を信ぜざるは、獨り信ぜざる者の過に非ず。亦佛法を論ずる者未だ其妙を盡さざるなり。求那の如きは義正しうして語圓に、辭善巧にして道に叛かず、眞に佛法世法融通不礙なる者なり。古の良諫議と雖も、何を以てか此に加へん。彼世僧は偏見に局して自ら正を持すと謂へり。知らず、人主をして緇流に親近することを欲せざらしむる者は正に此等の輩の爲なることを。神龍の變化は蚯蚓の知る所にあらずと、其れ是れ之を謂ふか。

【五】 較論供養。

【高帝】 齊の大祖なり。

【五】 供養を較論す

齊の法顯は潁川の人なり。高帝事ふるに師禮を以てす。武帝剛いで興りて禮敬を盡す。文惠太子、嘗て寺に往いて問訊し、顯に謂つて曰はく、「葆吹清鐘、以て供養と爲さば、其福何如ん。」顯對へて曰はく、「昔、菩薩八萬の妓樂もて佛に供するに、尙至心に如かざりき。今竹管子を吹き死牛皮を打つ。何んが道ふに足らんや。」

【佛事】 衣服飲食等の四事。
【佛理】 發心修行菩提涅槃等の法門なり。

贊に曰はく、佛事を好んで佛理に昧し。糜費多しと雖も人夫有漏の因を越えざるのみ。顯公の此言豈獨り世俗の迷を覺するのみならんや。抑萬代の沙門、釋子の良藥なり。

【六】 說法悟主。

【三界】 欲界、色界、無色界。

【四念處】 三賢位のうち念處位に於て修する觀法。身念住、受念住、心念住、法念住。

【七】 感悟東宮。

【經中の要務】 經說の一句一字要務ならざるものなし

【行慈】 勸門に就いて説く。

【滅殺】 誡門に就いて説く。

【順氣】 漢書の五行。

【不殺を仁と曰ふ】 五戒を五常に配すれば不殺戒は仁に當る。五常を五臟五形に配すれば、肝木にあたる。五行を五季に配すれば木は春季にあたる。

【六】 說法して主を悟らしむ

齊の僧稠昌は黎の人なり、年二十八にして鉅鹿の實公に投じて出家す。齊の文宣、之を徵すれども就かず。射ら造り、扶接して内に入る。稠爲に論ずらく、「三界は本空、國土も亦爾り。世相常ならず」と。及び廣く四念處の法を説く。帝聞いて驚悟して汗を流す。因りて菩薩戒を受け、酒肉を斷ち鷹鷄を放ち漁畵を去り、天下の屠殺を禁す。月に六たび年に三たび民に勅して齋戒せしむ。

【七】 東宮を感悟す

唐の玄琬は弘農華陰の人なり、貞觀の初め、帝、琬の戒德、朝野共に瞻るを以て、勅して皇太子諸王の爲に菩薩戒を授けしむ。琬、書を皇太子に致して曰はく、「今經中の要務四條を略す。惟願くば意を留めよ。一に曰はく、行慈。謂く、涅槃梵行の文に依りて含養兼濟す。二に曰はく、滅殺。謂く、東宮常膳して、烹宰する所多し。殿下一身の料を以て遍く群寮に擬す。斷命の由る所に至るに及んで、皆殿下を推さざる無し、請ふ、殺生を少くして以て壽命を永くせよ。三に曰はく、順氣。謂く、不殺を仁と曰ふ、仁は肝木を主とす。木は春、生に屬す。殿下位少陽に處す。請ふ、春季には殺を禁じ肉を斷じて、以て陽和に順ぜよ。四に曰はく、奉齋。謂く、年に三齋、月に六齋なり。何となれば、今大福を享くること、咸く往因に資る。復能く徳に進まば、彌美を増さん。」と。皇太子答へて曰はく、「師の妙法四科を辱うす、謹んで當に之を心府に緘し、奉じて以て周旋し、永く勝

【少陽】 東宮と稱す。

【年に三齋】 正月五月、九月をいふ。

【月に齋】 八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日三十日をいふ。

【八】 勸斷暗殺。

【經濟】 國家善政を布て萬民を安撫す。

【九】 勸修懺法。

【五懺法】 一懺悔二勸誨、三隨喜、四回向、五發願。

【一】 受罰不欺。

【洞上】 曹洞宗。

【上怒つて】 朝命に準ぜざるを以て大不敬とす。

【枯瘁】 身捨て枯木の如し。

因を籍りて用て冥祐を資くすべし。

【八】 勸めて屠殺を斷す

唐の沙門明瞻は素博學にして經濟を懷抱す。太宗其名を聞きて、詔して内殿に入れ、之に問ふ。瞻廣く政要を陳べ、因つて釋門慈救を以て宗と爲すことを敍す。太宗大いに悦ぶ。敕を下して年の三善月、月の六齋日、普く屠殺を斷じ、行陳の所に皆寺を置く。

【九】 勸めて懺法を修せしむ

宋の曇宗は秣陵の人なり。靈味寺に出家す。嘗て武帝の爲に菩薩懺法を行ふ。帝笑つて宗に謂つて曰はく、『朕何の罪有りてか爲に懺悔するや。』と。宗對へて曰はく、『昔虞舜の至聖なる、猶云はく、『予違はば汝弼けよ。』と、湯武帝亦云はく、『萬姓過有れば予一人に在り』と。聖王咎を引き、蓋し以て世に軌らしむ。陛下聖を往古に齊くして道を履んで冲を思ふ。寧ぞ獨り異なることを得んや。武帝之を善す。

【十】 罰を受けて欺かず

宋の道楷は沂水の人なり。得法の後大いに洞上の風を揚ぐ。崇寧中に詔して東京の淨因に住せしむ。大觀中に天寧に徙る。上使を遣はして紫衣を賜ひ、定照禪師と號す。表もて辭して受けず。上復開封府の尹李孝壽をして躬ら朝廷褒善の意を諭さしむ、而して楷確然として回らず。上怒つて、收へて有司に付す。有司、楷の忠誠を知つて、問うて曰はく、『長老の枯瘁せるは、疾有るか。』對へて曰はく、『疾無し。』と、有司曰はく、『疾有り」と

【編管】 編管管領するなり。

言はば即ち法、罰を免れん。」と。楮曰はく、「豈敢て詐り疾みて罪讎を免ることを求めんや。」更太息す。遂に罰を受け、涪州に編管せらる。見る者涕を流せり。楮、顔色自若たり、州に至り屋を僦うて居す。學者益親しむ、明年救して自便を放す。乃ち芙蓉湖中に菴す。贊に曰はく、榮及んで辭するは、人を難する所なり。辭して罰を致し、罰を受けて欺かざるは、難中の難と曰はんや、忠良傳中何んが此を少とするを得ん。之を録して以て世僂を風す。

【二】 咏花諷諫。

【二】 花を咏じて諷諫す

後晉の江南の李後主、法眼禪師を召して内庭に入らしむ。時に牡丹盛に開く、主、詩を索む、師乃ち頌して云はく、「毳を擁して芳叢に對す。山來遙に同ぜず。髮は今日より白く、花は是れ去年の紅なり。艶異朝露に隨ひ、馨香晚風を逐ふ。何ぞ須らく零落を待ち、然る後始めて空を知るべけんや。」と。主嘆じて諷意を悟る。

贊に曰はく、詩意を味ふに忠愛油然として言表に溢る。惜むらくは後主知りて用ひず、終に夢裡貪觀の悔を免れざるのみ、彼號して詩僧と爲す者は、風月を品題し、精を推蔽に倣ひて世に裨無し。此を以て、之に較ぶるに、亦黄金と土との相去るにあらずや。

總論

士君子、江湖の遠きに處れば則ち其君を愛ふと。僧に官の守る無く、僧に言の責め無し。而も忠を盡すこと是の如し、孰か山林の下明良喜起の義無しと謂はんや、人倫は君父より

【惡物の行】佛祖の大慈悲心、一切蠢動の物に及ぶをいふ。
重きは莫し。吾故に前に僧の孝を列し、後に僧の忠を列して、以て釋氏の父を無し君を無するの謗りを杜す。

慈物の行第六

【一】忍苦護鵝。珠師 珠玉を琢磨するを業とするものなり。

【珠師】手を止めて行乞の比に食を施さんとす。

【珠師云云】比丘は六度の大菩薩なるが故に、珠師の暴忿を解いて機禮せしむるに至る。

【節を守る】戒法を具足して誦經するを守節といふ。

【石盂】石盂を湛へたるなり、水の深さ六七尺、古老傳へて群仙の所宅と云ふ。群公恒に粒穀を避けて唯此水を飲んで飢えずといふ。

【一】苦を忍んで鵝を護る

佛世に比丘有り、食を珠師の門に乞ふ、時に珠師方に王の爲に球を穿つ。珠を置いて食を取るに、珠偶地に墮ち、鵝之を呑む。珠師、比丘に食を與へて珠を見るに見えず、比丘之を竊むかと疑ふ。比丘は鵝を護らんと欲するが故に其捶撃に任せ、血を流すに至る。鵝來りて血を舐る。珠師怒を移して併せて鵝を撃ちて之を殺す。比丘覺えず悲涙す。珠師惟む。乃ち之に故を語るに、珠師感悟して懺悔作禮す。

【二】鵝を守りて飲を絶つ

晋の僧群、清食にして節を守る、羅江縣の霍山に菴す。山は海中に在り、石盂運し數丈なる有り、清泉冽然たり。菴、石と小澗を隔つ。獨木を橋と爲す。之に由りて水を汲む。後に一鴨、翅を折りて橋に在り。群、錫を擧げて之を撥はんと欲し、鴨を傷げんことを恐れて還りて水を汲まず。飲を絶ちて終る。

贊に曰はく、物の命の爲に己が身を忘る。大慈弘濟是に於てか至れりと爲す。或曰はく、「鵝を全うして苦を忍ぶは可なり、群の共生を滅するは過ぎたること無きを得んや。噫至人

【至人】大乘の住上の菩薩を指す。

【四大を執者する】

色身もと、風、火、水、地、の四大の假和合を以てなる物なり、假合は實なしと知れば何をか執し、何をか吝せん。

【三】 贖養生命。

【四】 悲敬行施。

【悲敬】 困苦のものに施すは悲田と名け、三寶に施すを敬田と名く。悲敬の言、此に由るなり。

【畜類を禦す云云】 禽獸と雖も呵罵打捶を加へず。

【五】 買放生池。

【放生】 魚鳥等を放ちがすこと。

【鬻】 魚網なり。

の華鬘を視ること夢幻泡影のみ。苟くも衆生に利有らば、則ち棄つること涕唾の如し。虎に餌ひ鷹に飼ふ、皆是心を以てなり、豈凡夫の、四大を執者する者の、測り知る所ならんや。

【三】 生命を贖養生

陳の法朗は徐州沛縣の人なり。大明寺寶誌禪師に就いて禪を學び、律論に精し。警京畿を動かす。聽侶雲のごとく集る。得る所の檀施は用て經像塔寺を造り、窮厄を濟給す諸の生命を見ては即ち買うて歸りて之を畜ふ。鶩鴨鷄犬房内に充ち飼つ。朗の寢息を見ては皆寂として聲無し。遊觀の時、群起鳴吠して鼓吹よりも喧し、亦懷感の致せるか。

【四】 悲敬して施を行ふ

隋の靈裕は定州鉅鹿の人なり。十五にして趙郡應覺寺に投じて出家す。博く經論に通じ名海内に藉く。其行施は悲敬之を兼ぬ。袈裟を惠むこと數千領に過ぎたり。疾苦瘵を求むる者醫藥算すること無し。但厚味を得れば必ず先づ僧に奉ず。畜類を禦ぐと雖も、未だ嘗て呵捶せず。乃ち幼稚に責問し、門人に誠約するに至るまで、自ら己名を稱して彼を仁者と號す。苦言懇切にして聞く者涙を流す。

【五】 放生池を買ふ

隋の智者大師、臨海に居せる日、民漁を以て業と爲し、罾網相連ること四百餘里、江窟溪梁六十餘所なるを見て、心に之を憫みて乃ち得る所の罾施を以て海曲を買うて放生池と

【六】 割耳救雉。

爲す。表もて陳主に聞す。陳主敕を下して採捕を禁す。因りて爲に碑を立つ。國子祭酒徐孝克に詔して文を爲らしむ。辭甚だ悽楚にして覽る者悲悟し、多く感化す。

【六】 耳を割きて雉を救ふ

隋の智舜は趙州の人なり。北のかた亭山に遊び其中に菴す。獵者有り、雉を逐ふ。雉舜の房に入る、舜苦に免さんことを勸れども聽かず、因りて耳を割きて之に與ふ。獵人驚悟し弓を投じ鷹を放つ。數村其獵業を捨つ。貧餒を見る毎に涙を流して面に盈つ。衣を解き食を減じ、至らざる所無し。

贊に曰はく、軻氏云はく、『至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり。』舜老に於て之を驗む。

【七】 濟貧詣官。

【七】 貧を濟うて官に詣る

隋の普安は京兆涇陽の人なり。周氏、法を滅する時に終南山の樾梓谷に隠れ、苦行して身を忘る。或は形を草莽に露して以て蚊蛇に施し、或は亂屍に委臥して以て虎豹に施す。時に重募有り。『一僧を擒へ送れば賞帛十段なり。』と。或來りて、安を執ふるに、安、欣

【重募】 廣求なり

然として慰諭して曰はく、『卿が貧煎を觀て、正に相給せんと欲す。』と。爲に食を設け已りて、共に與に京に入る。帝曰はく、『我國は法急にして道人を民間に許さず。汝更に急を助けて道人を山中に許さず、則ち渠を何にか往かしめん。遂に放して山に入らしむ。』

【八】 躬處糞坊。

【八】 躬ら糞坊に處す

【癘】 惡瘡疾なり

【膿】 腫血なり。

【襪を洗ひ】 大小便利等の衣物を自ら洗濯す。

【瘡所に終る】 大悲心もて看護ひまなく老いてなほ厭ふことなし。

【九】 口吮腹癰。

【天神房を遶る】 傳に曰はく、所住の房、毎夜必ず介冑を振動するの響有り、觀れば非常の神人なりと。【經理】 經濟、料理なり。

【二〇】 惠養群鼠。

唐の智岩は丹陽曲阿の人なり。智勇人に過ぎ虎賁中郎將と爲る。漚囊を弓首に掛けて率ねもつ常と爲す。後に浣公山に入りて寶月禪師に依りて出家す。昔同軍戎の刺史嚴撰張綽等、其出家を聞きて之を尋ね訪ふ。深山孤寂なるを見て謂つて曰はく、「一將將癩せるや、何爲れぞ此に在る。」岩曰はく、「我癩は醒めんと欲し、君が癩正に發す。」石頭城癩人の坊に往いて其れが爲に說法し、膿を吮ひ穢を洗ひ曲に盡さざること無し。永徽中癩所に終る。顔色變ぜず、異香匂を經。

【九】 口に腹癰を吮ふ

唐の智寛は蒲州河東の人なり。常に維摩經及び戒本を誦して天神、房を遶ることを感ず。性慈惠好んで病人を瞻す、道俗及び路の遠近を計らず、人の治する者無ければ、即ち輿にて房中に入りて躬自ら經理す。腹癰を患うて膿出づること能はざる有れば口から之を吮うて遂に痊可を獲しむ。後に臬感、逆を作し、事寛に逮んで西蜀に配流せらる。財帛を祖饑するに悉く受けず。惟一驢を以て經を負はしむ。路に僞寶還といふ者に逢ふ、足破れて道傍に臥す。驢を捨てて輿に乗じて自ら、經籍を擔ふ。時に歲儉なるに逢うて、糜粥を煮て以て饑ゑたるに飼ひ、又衣を解いて之に衣す。或は割き或は減じ衰を銜み勸化して彼を導いて念佛せしむ。

【二〇】 群鼠を惠養す

唐の慧意は、鉢中の餘もて房中の鼠を飼ふ。鼠百餘有り、皆馴狎して、爭ひ來り食に就

【一】 氈被畜狗。

く。其病めるは手を以て之を摩埒す。

【二】 氈被狗を畜ふ

唐の智凱は丹陽の人なり。常に三論を講じて貞觀元年餘姚縣力龍泉寺に住す。越の俗、狗子を生ずれば多く道の上に捐棄す。凱之を憐んで收めて聚めて養育す。乃ち三十五に至る、氈被と與に臥して汗穢を嫌はず。

【三】 穢疾不嫌。

【二】 穢疾を嫌はず

唐の道積は蜀の人なり。益州の福感寺に住す。性慈仁なり。癘疾の者の洞欄せる有りて穢氣鬱勃聞ぐ者鼻を掩ふ。積之が爲に供供するに身心不二なり。或は器を同じうして食し時時與に補洗す。人之を問へば、答へて曰はく、『清淨臭穢は心の僧愛なり。吾豈其神慮を二にせんや、此に寄せて陶鑄するのみ。』と。

【三】 看疾遇聖。

【三】 病を見て聖に遇ふ

唐の智暉は重雲に住みて涅槃を初めて僧を浴せしむ。水を施し藥を給す。比丘に白癩なる有り、衆之を惡む。暉與に摩洗すること常の如し。俄神光異香有り。方に之を訝るに忽ち所在を失す。

贊に曰はく、佛言はく、『五滅度の後に好んで病人を供養せよ、中に賢聖多きを以ての

故なり。今重雲の遇へる所は悟達の因縁と正に相似たり、古今此に類せること甚だ多し、姑く一二を出して以て病人を嫌棄する者の爲に焉を勸む。

【一四】 行先執筭。

【二四】 行くに先づ筭を執る

唐の慧斌は兗州の人なり。博く經論を究め、後に靜慮を專にす。慈救を以て務と爲し、夏毎に行歩して微蟲を傷けんことを恐れ、筭を執つて先づ掃ふ。利養を得るに隨つて密に檀惠を行す。種種の善事、仍戒めて泄すこと勿らしむ。

【一五】 贍濟乞人。

【二五】 乞人を贍濟す

【乞人……併せて】 己れがを食せるものと、餘の乞食のものとの。

唐の曇選は高陽の人なり。興國寺に居す。性慈濟を好みて財物積まず。巨鏝を置いて乞人の得る所の食を併せて、總て饑粥と爲し、群乞を列坐せしめて、手ら自ら斟酌す。其藍縷形容消瘦せるを見ては、憐憫涙を墮して、悲み自ら勝へず。己も亦群と同じく粥を受けて食す。遂に多載に及ぶ。

【一六】 施戒放生。

【二六】 施戒放生す

五代の永明壽禪師は、永明に居すること十五年、弟子を度すること千七百人、天台に入りて度戒すること萬餘人。常に七衆の與に菩薩戒を授く、夜は鬼神食を施し、諸の生類を放つ。六時行道し、餘力あれば、『法華經』を誦すること一萬三千部なり。開寶八年十二月二十六日、香を焚き衆に告げて跏趺して逝す。

【一七】 看病如己。

【二七】 病を看ること己の如くす

【延壽堂】 支那禪門若し病僧あれば此れを延壽堂に送る。

宋の高菴は雲居に住す。衲子の病んで延壽堂に移るを聞いて、咨嗟歎息して己に病在るが如し。旦夕問候し躬自ら煎煮し、嘗めざれば食を與へず。或は天稍寒ければ其背を撫で

【四心】慈無量心、悲無量心、喜無量心、捨無量心なり
 【之を生じ云云】王者の國を保ち、民を安ずる、道を討し、順を惠む皆仁術なり。
 【之を攝し之を折す】佛教に攝受、折伏の二門あり。順逆強柔機に對して法を説く、均しく是れ慈悲門に非ざるはなし。
 【响响】柔輓の言語を云ふ。思惠の密大ならざるを云ふ

て曰はく、『衣單ならざるか。』と。或は暑ければ其色を察して曰はく、『太だ熱きこと莫きや。』と。乃至命終する者は彼の有無を問はず、常住に禮を以て津送す。
 贊に曰はく、經に稱すらく、『八種の福田、看病第一なり。』と。豈以て衲子家無く、瀕海に孤單に、伶仃疾苦、眞に悲憐すべきにあらずや。僧坊の主と作りて、病むとも我に於て調せず、死すとも我に於て殯せず。豈慈悲の道ならんや。凡そ住持の者は宜しく高菴を以て法と爲すべし。

總論

仁義禮智は人の四端なり。而も仁は首たり。慈悲喜捨は佛の四心なり。而も慈は先たり。苟も慈心無くんば博學多聞にして神通、三昧有りと雖も、悉く魔業のみ、或謂く、『威並に運すは佛道なり。何んが専ら慈を尙ばん、知らずや之を生じ之を殺す、皆仁なり。之を攝し之を折くは皆慈なることを。』其迹則ち威なれども其實は則ち慈なり。威にして慈爲るを失せざるを是れ之を大慈と謂ふ。响响の恩沾沾の惠を以て慈と言ふこと毋れ。

高尙の行第七

【一】寵を避けて山に入る
 晋の道愜、秦主姚興逼るに服を易へて輔贊せんことを以てす。屢辭すれども允さず、殆うじて免るることを獲たり。乃ち嘆じて曰はく、『昔人言へること有り、『我貨を益す者は、

【一】 避寵入山。金玉布帛等なり。

【神】 精神、即ち心識を云ふ。

【二】 衆服清散。

【散】 閑散にして自ら檢束せざるなり。

【端肅】 儀容湯湯として物をして敬伏の心を生ぜしむ

【趨跽】 恐動して趨歩するなり。

【三】 不享王供。

【四事供養】 衣服飲食、臥具、湯藥これなり。

【四】 駕不迎送。

【宴坐】 坐して起たざるなり。

我神を損ず。我名を生ずる者は、我身を殺す」と。是に於て影を岩壑に竄して草食し禪を味うて身を終る。

【二】 衆清散に服す

晉の慧永、遠公と廬山に居す。鎮南將軍何無忌は潯陽に守たり、囚りて虎溪に集うて永及び遠を請す。遠の従者百餘、端肅にして序有り。永は衲衣草履、錫を執り鉢を持し、松下飄然として至り、神氣自若たり。無忌、衆に謂つて曰はく、「永公清散の風乃し遠師に多れり。」

贊に曰はく、遠師の従者百餘、皆蓮社の英賢のみ。而も何公尙抑揚することは是の如し。今の僧は奴僕を畜へ蓋を張り篋を荷ひ、豪貴の門に趨跽して、與に伍と爲さんことを求む何公之を見ては又當に何如にすべき。

【三】 王の供を享けず

姚秦の佛陀耶舎、姑藏に在りし時、秦主興、使ひを遣して之を聘す。厚贈受けず、既に至るに興自ら出でて迎へ、別に新省を立てて逍遙園中に館す。四事の供養も亦受けず、時至れば分衛一食するのみ。衣鉢臥具は屋三間に盈つるも、以て意に介す、興は爲に之を貸して寺を城南に造ると云ふ。

【四】 駕を迎送せず

齊の僧稠、文宣帝、常に羽衛を率ゐて寺に至る。稠は小房に宴座して了に迎送せず。弟

【賓頭盧】釋尊の弟子、十六羅漢の一、佛勅をうけて涅槃に入らず、天竺摩利支山に住して、末世の供養に應じ、大福田となる。

【五】不結貴遊。高帝の孫にして諱は昭業、文惠太子の長子なり。

【東田に幸す】田獵の序を以て寺に入れり。欣公其煩擾を厭ひて病を謝して鐘山に退隠す。

【七】屢徴不就。

子之を諫む。稠曰はく、『昔賓頭盧、王を迎ふること七歩にして、七年國を失へることを致す。吾誠に徳逮ばず、未だ敢て自ら形相を欺かず。冀はくば福を帝に獲しめんのみ。』と天下號して稠禪師と爲す。

【五】貴遊を結ばず。梁の智欣は丹陽の人なり。經義を以て海内に名あり。永明の末、太子時に東田に幸して數寺に進む。欣因つて病を鍾山に謝して晏然として自得す。富貴と遊住せず、孤廻人を絶す。凡そ賤施を畜へず、爲に住寺を構改すと云ふ。

【六】賤路を引かず。隋の道悅は荊州の人なり。常に般若を持す、玉泉に住して朱餐の反せるに値ふ。寺に入りて糧を求め、又害を加へんと欲す。悅殊に懼るる所無し、放ちて引路せしむ。悅行くこと數歩にして地に座して曰はく、『吾は沙門なり。引路の人に非ず。浮幻の形骸白刃に任從す。餐其高尚を奇として、因りて送りて寺に還す。』

【七】屢徴するも就かず。唐の慈藏は新羅國の人なり。冥行顯被にして、物望の歸する所なり。屢徴するも就かず。王大いに怒り、勅して山所に往いて將に手刃を加へんとす。藏曰はく、『吾寧ろ持戒一日にして死すとも一生破戒して生くることを願はず。』と。使殺すに忍びず、具に以て上聞す。王歎服す。

【八】寧死不超。

【四祖】菩提達摩を初祖、第二慧可第三僧璨、第四道信、第五弘忍、第六慧能なり。

【八】寧ろ死すとも起たす

唐の四祖道信大師、黃梅に任すること三十餘載なり。貞觀中に太宗三たび詔して京師に赴かしむ。並に疾を以て辭す。帝使者に勅すらく、「若し更に起たすんば當に其首を取るべし。」と。師、頸を引いて刃を受く。使以て聞す。太宗嗟嘆し、珍帛を賜ひて以て其志を遂げしむ。

贊に曰はく、子陵の光、皇を拒み、仲老の仁祖を辭せる、亦逸士の常のみ。未だ聞かず、之を脅かすに白刃を以てするも回へざる者なり。丹鳳霄に翔ぶ、望むべくして、而も追ふべからず。四祖其人か。慈藏其人か。

【九】三詔不起。

【左街僧錄】當時僧官に左右街の名あり。

【九】三たび詔すれども起かず

唐の汾州の無業禪師は陝西雍州の人なり。穆宗は左街僧錄靈卓を遣して、詔を齎して之を起しむ。師笑つて曰はく、「貧道何の徳ありてか累に人主を煩さん。爾先に行け、吾即ち往かん。」遂に沐浴し坐を敷いて門人に告げて曰はく、「汝等の見聞覺知の性は、大虚空と壽を同じうす。一切の境界本自ら空寂、迷ふ者は了せずして即ち境の爲に惑はされ、流轉窮らず。常に一切空を了して、一法の情に當る無きは是れ諸佛用心の處なり。」と。言訖てり端坐し、申夜にして逝す。卓回つて奏す。帝大いに欽歎し、謚を大達國師と賜ふ。憲穆の兩朝に處して凡そ三たび詔すれども起かず。

【一〇】詔至不起。

【一〇】詔至れども起たす

【二】 冒死納僧。

【私度の者】 勅を奉ぜずして朝染する者をいふ。【逃僧】 都て私度の人をいふ。

【三】 不赴俗筵。

唐の懶融は金陵の牛首山に隠る、上其名を聞きて中使を遣し召して見えしむ。使至る、融方に地に坐して牛糞の火を燃し煨芋を拾つて食す。寒涕願に交はる。使云はく、『天子詔有り。尊者巨く起て。』と。融熟視して顧みず。使笑つて云はく、『涕願に及べり。』融曰はく、『我豈工夫して、俗人の爲に涕を拭ふこと有らんや。』上聞いて嘆異す。仍厚く賜りて之を旌す。

【二】 死を冒して僧を納る

唐の法冲は隴西成紀の人なり、貞觀の初め勅して私度の者は、處するに極刑を以てす。時に崑陽山に逃僧の難を避くるもの多し。資給置しきを告ぐ。冲、州宰に詣りて告げて曰はく、『如し死事有らば冲が身之に當らん。但道糧を施せば終に福祐を獲ん。』宰其志を嘉して網を冒して周濟す。

【三】 俗筵に赴かず

唐の韜光禪師は赤を靈隱の西峯に結ぶ。刺史白居易飯を具して詩を以て之を邀ふ。光、偈を答へて往かず、『城市飛錫の到るに堪へず、恐らくは鶯の畫樓の前に囀ずるを驚かさん。』の句有り。其高致此の如し。

贊に曰はく、古徳の朝貴、宴に招くを辭する偈に云へること有り。『昨日曾て今日を將て期す、門を出でて杖に倚りて又思惟す、僧と爲りて只山谷に居すべし、國士筵中甚だ宜しからず。』と。韜光の高致と先後し、一轍より出づるが如し。噫斯二偈は衲子當に朝暮吟咏

【三】 不受衣號。

一過して始めて得べし。

【三】 衣號を受けず

唐の全付は吳群崑山の人なり、南塔の湧禪師を見て頓に心地を明し後に清化禪院に住す。錢忠憲王、使を遣して紫袈裟を賜ふ。付、章を上りて力めて辭す。使再び往く、又辭して曰はく、「吾讓を飾るに非ず。恐らくは後人吾に倣つて欲を逞くせんことを。」尋いで號を純一禪師と賜ふ。復固辭して受けず。

【四】 力辭賜紫。

【四】 力めて賜紫を辭す

【詩】 虚りに褐衣を著て老す、浮杯道成らず、誓つて經論を傳へて死せん、名利に染して生きず、樹の山色を遮するを厭ひ、窓の月明に向ふを憐む、他時范蠡に違つて、一棹五湖清し。

五代の恆超は范陽の人なり、開元寺に止まりて經論を講ずること二十餘年。前後州牧使臣、刺を投じて見えんことを求む。童子をして刺を收めしめて接對する所罕なり。時に郡守李公奏して紫衣を賜はんと欲す。超辭するに詩を以てす。「誓つて經論を傳へて死せん。利名に染みて生ぜず。」の句有り。李公復人をして勸勉せしむ。超確然として不披、且曰はく、「而復來らば吾は盧龍塞の外に在らん。」相國瀛王馮公其名を聞いて書を修めて好を通ず。超曰はく、「貧道早く父母を捨てて志を克して修行し、本彌勒に名を知られんことを期す。謂はざりき、浪に宰輔に傳はらんとは。豈虚名浮利を以て心に留めんや。」と。馮公益之を重んず。表もて朝に聞す。強ひて紫を賜ふ、卒するの日天樂空に盈つ、蓋し兜率に生ずるの明驗なり。

贊に曰はく、金紫の服を紆ひ、宰輔の門に交ることは、人の深く願つて惟得ざらんこ

【炎衷】世人の利と名とを中心に畜積するの謂なり。
【五】不樂王宮。

【六】袖納薦書。

【曾公】魯公の誤寫ならんか。後、之に准ず。

【書を附して云云】顯公の美德を記して薦擧するなり。

【拱壁】大壁なり

とを恐るる所なり。二公堅く辭すること再四なり。將に濯れんとするが若し、清風漂然として千古を披拂す。眞に以て奔競の炎衷を涼して利名の醉眼を醒すべし。

【五】王宮を樂はず

後唐の貞辨は中山の人なり、刻苦修學、血を刺して經を書す。時に并州外僧を容れず。辨、野外に出でて身を古塚の中に隠す。武帝敗遊す、辨方に塚を出で、旌旗騎乗を見て還りて塚穴に入る。帝之を擒へて故を問ふ。塚中を檢するに、則ち草座案硯疏鈔羅布せり、遂に命じて府に入りて供養す。管太后深く仰重を加ふ。辨、后に訴へて曰はく、『本學法を以て重しと爲す。久しく王宮に在りて楛械の如きのみ。』と。帝乃ち其自由を縱す。

【六】袖に薦書を納む

宋の雪竇顯禪師は法を智門の祚公に得たり、將に兩浙に遊ばんとす、學士曾公謂うて曰はく、『靈隱は天下の勝處、珊禪師は吾故人なり。』と。書を附して顯を薦む。顯、靈隱に至りて衆中に陸沈す。三年、俄に曾公使を浙西に奉じて顯を靈隱に訪ふ。知る者有ることなし。時に僧千餘、吏をして床籍を檢せしむるに、乃ち顯を得たり。向に附する所の書を問ふに、諸を袖中より出す。封緘故の如し。曰はく、『公の意勤めたり。然れども行脚の人、世に於て求むること無し、敢て薦達を希はんや。』と。曾公大ひに笑ふ、珊是を以て之を奇とす。

贊に曰はく、今人貴宦の書を得ては拱壁を獲るが如くして曉夜に售らんことを求む。其

【七一】 棄書不拆。

【天衣】 天衣義懐禪師なり。

【荒村】 窮民の散居する所。

【單丁】 獨處影に伴ふの語。

【塚間樹下】 十二頭陀中の一、沙門の居すべき處。

【那事】 佛祖の一大事を指す。

【眼を開いて牀に尿す】 眼ありて其行爲を誤る。

【忙漢】 不善を爲す者を謂ふ。

【一八】 對使焚鉢。

れ亦雪竇の風を聞かざるか。吾雪竇の、宗乘を拈唱して電掣雷轟して、徳山臨濟の諸老に譲らざることを怪しむ。其平生を考れば則ち器度山來凡ならず。釋子たるもの自愛せずんばあるべからず。

【七一】 書を棄てて拆かず

宋の武寧の慧安禪師は圓通の秀鐵壁と同じく天衣に參ず。武寧に安居して荒村、破院、單丁、三十年、圓通語に應じて法雲に居す。威光烜然たり、後書を以て安に致す。安拆かずして之を棄つ。侍者故を問ふ、安曰はく、『吾始め秀を以て精彩有りとなす。今其癡なるを知る。出家兒、塚間樹下に那事を辨じてか頭然を救ふが如くなる。故無くして八達衢頭に於て大屋を架し、數百の閑漢を養なふ。此れ眞に眼を開いて床に尿するなり。吾何んが復對へんや。』

贊に曰はく、秀は多衆、安は單丁、蓋し地を易ふれば皆然るのみ。安は秀を詆るに非ず世の頑羣癡聚を警むるのみ。然りと雖も閑漢を養ふことは猶可なり。今の養ふ所の者は忙漢なり、尙何をか言はんや。

【一八】 使に對して鉢を焚く

宋の慧遠は漳州の人なり、皇祐中に、召されて化城殿に對し、旨に稱ひて大覺禪師と號を賜ふ。璉の持律甚だ嚴なり。上嘗て使を遣はして龍腦の鉢盂を賜ふ。璉、使に對して之を焚いて曰はく、『吾法は壞色を以て衣、瓦鉢を以て食す。此鉢は法に非ず、宜しく用ゆる

所無かるべし。使回りて奏す。上嘉歎すること久し。
費に曰はく、璉公は鉢を煖いて怖るる心無く。英祖は奏を聞いて怒れる色無し。謂ゆる
先生微せば光武の大を成すこと能はず、先生の高を遂ぐることも能はざる者なり。宗門の
盛事に非ざるを得んや。

總論

【忠君を録し云云】
忠君行は國家の爲に心を致し、民庶の爲に志を盡すを云ふ。高尙行は爵祿を草芥し貴戚を等視す。其事頗る相反す。

【道は岩穴に充て高尙の行。】
【名は廊廟に聞ふ】
忠君の行。

【南陽】南陽國師
【避重の行】暉爾として人間に遊ばず、山居、鶩飲、年序を重疊するをいふ。一宿の糧を聚めて千里に適くこと能はざるが如し。

【一】傳去久隱。
【六祖】慧能なり
【五祖】弘忍大滿
禪師を指す。

上に忠君を録し此に高尙を紀す、高尙是ならば則ち君に忠なる者非ざるか。是れ然らず、守る所の何如を顧みるのみ。道は岩穴に充ちて名は廊廟に聞ゆ。上は吾君を度し、下は吾民を度す。弘法利生の正務に非ざらんや。獨り惜むらくは大道立せずして、己を枉げて以て榮を求むる者は釋子の羞を貽せり。噫、僭爲る者、誠に道を以て自ら重んじ、國王大臣をして天下に道を樂み、勢を忘るるの僭有るを聞いて之を數じ、之を羨ましめば其忠亦多し。豈必ず、面り獻替を陳べて而る後に忠と爲んや。吾是を以て知んぬ。南陽は寵七廟に逮び、無業は力めて三詔を辭す、遇同じからされども、其道同じく其忠同じ。

遲重の行第八

【一】法を傳へて久しく隱る

唐の六祖大師は初め五祖に參じて即ち自心を悟る。祖曰はく、『汝の根性大利なり、槽廠に著きて去れ。』と。遂に春碓を事とす。石を腰にして勤劬し、苦作して衆に供す。後に衣

【真心を悟る】五祖初見の時に當つて、佛性豈然らんやの一語、早く佛心の宗旨を吐露するをいふ。

【蓬首】髪を結ばざるなり。

【南宗】神秀の弘通は洛下に在るをもて北宗といひ、能禪師は嶺南韶陽を化するをもて南宗といふ。

【二十年秘重】

【毘尼】律。

【懇志扣求】徒に宗すことなきをいふ。

【敗簀】牀板なり

【三】 不宣靈異。

【禪寂の次】入禪或は說法をいふ。

【殊徴】殊特の靈驗なり。

法を傳へて夜半に潛に去らしむ。跡を獵人の中に隠して蓬首垢面なること一十六年、後に龍天に推さるるをもて、乃ち印宗師の講席に於て、偶風幡を論ず、四衆驚仰し扶榻して聞法せしむ。大いに南宗を聞いて萬代の師表と爲る。

贊に曰はく、大師惟法を十六年の後に開くのみにあらず。薙髪も亦之の如し。養深積厚、古今一人のみ。萬代に師表たること亦宜ならずや。

【二】 十年秘重す

唐の桂琛は常山の人なり、初め毘尼を學び後に南宗を訪ひ、遍く知識に參ず。旨を玄沙大師に得て密行陸沈す。漳州の牧王公、閩城の西石山の蓮宮に請す。錫を駐ること十數年、妙道を秘重す。懇志扣求する者有れば、乃ち爲に開演す。既にして羅漢院に遷る。破垣敗簀恬如たり。勤州の太保固く請じて法を宣べしむ、退、讓することを獲ず、方に其請を受けて大いに法門を開く。參徒計ること莫し、法眼の一宗を出す。

【三】 靈異を宣せず

唐の善靜は長安金城の人なり、南のかた樂普に遊びて安公の法裔を見、乃ち心要を融ず。後に故里に還る。留守王公、永安院を營みて之に居らしむ。嘗て洗沐せるるとき、舍利隕落す、即ち收秘して弟子の人に示すを許さず。又禪寂の次忽ち白鶴有り、庭に馴れ狎れて法を聽く者の如し。靜、人をして驅逐せしむ。凡そ此殊徴有れども宣べず。贊に曰はく、古人靈異を獲て秘重して宣べず。今人靈異無くして僞稱して衆を惑はす。

【霄壤】 天地なり

【四】 混迹樵牧。

【大慧禪師】 南岳の觀音懷讓禪師則ち六祖の嗣法なり【言ふこと能はざるに似たり】秘重の輕からざるをいふ。

【王老師】 普願の姓なり。

【大事】 佛法の一大事なり。

【五】 事皆緣起。

【六】 歷年閉戸。

心事蓋し霄壤なり。聖は益聖にして、愚は益愚なり。又何ぞ怪まんや。

【四】 迹を樵牧に混す

唐の普願は鄭州新鄭の人なり、大隈山大慧禪師に依りて受業し、法を江西の馬大師に得たり。景を含み耀を匿し言ふこと能はざるに似たり。貞元十年、錫を池陽の南泉山に掛く。袈笠牛に飲うて樵牧に混す。山を斫り田を畝し、足南泉を下らざること三十年、太和中に池陽の太守、宣使陸公、護軍劉公と固く請じて閉法せしむ。道化大ひに行はず、南泉の古佛と號すと云ふ。

贊に曰はく、遠祖師影、廬山を出でざること四十載、王老師、足南泉を下らざること三十年。此れ古人の盛節なり。然れども皆得意の後の事なり。初學の宜ぶべき所に非ず、出家兒大事未だ明ならず、千里を遠しとせず、知識に參尋すれば、此れ何の時ぞ。乃ち愚を守りて空座して自ら善利を失せんや。趙州は八十にして行脚し、雪峰は三たび授子に登り、九たび洞山に上る。敢て癡隱の者の爲に告ぐ。

【五】 事皆緣より起る

宋の神鼎禪師は豫州の人なり、汾陽と名を齊しうす。年尙未だ壯ならずして南嶽に隱ること二十年、乃ち住持を領す。又二十年にして方に堂を開き說法す。然れども皆緣は他より起る、實に己が意に非ず。

【六】 年を歴て戸を閉す

【七】 久處深山。

宋の雲蓋の智禪師は元祐六年に西堂に退居す。戸を閉して閑居すること三十年なり。

【七】 久しく深山に處す

明の無閑聰禪師は大悟の後に獨り光州の山中に入ること六年。陸安州の深山に六年、復りて光州に至りて又三年を経。是の如く山中に獨行獨坐すること共に十七年。後に乃ち出世す。

【跡を南泉に遁る】
次上の唐の普願の傳文を指す。

【八】 八請不赴。

【八】 八たび請すれども赴かず。

宋の汾陽の無德禪師、七十員の善知識を見る。前後八たび請すれども皆出世せず。襄陽の白馬寺に燕居す。并に汾の道俗千餘人、堅請して已ます。乃ち人望に順ふ、既に至風大いに振ふ、迹闔を越えず、自ら不出院の歌を爲して以て志を見すと云ふ。

贊に曰はく、諸大老を歴観するに、得法の後率ね多くは光を頼み彩を鏡る。時至りて乃ち彰る、而るに此老八たび請すれども赴かず、其祕重尤も甚し。厥後宗風大ひい振ふ、源深くして流長きに非ずや。今の少年一能を負うて皇皇乎として出世の後れんことを恐る。亦錯れり。

【九】 重法隱山。

【九】 法を重じて山に隠る

元の法聞は七才にして出家し後温公に従つて『法華』『般若』『唯識』『因明』及び『四分律』

【三番】 讀誦すること三回なるをいふ。

【一〇】 廢寺隱居。

【總論】 夫れ大器は晩成す、豈一朝一夕の所爲ならんや、唯佛果のみ然るに非ず、蓋し我曹、受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ひ、發し難き道心を發し、當然大悟を得る如きも亦多生の宿習といはざることを得ざるなり。

【華嚴】 成道三七日の説なり。

を學ぶ。温公間に謂へらく、「任重くして道遠し、託するに弘傳の寄を以てす。間、佛像に對して肌を灼き、指を燃し、血を刺して經を書き、以て法を重することを彰す。遂に五台山に隠れて闔を踏えざること六載、藏經五千卷を讀むこと三番。帝師嘆じて曰はく、「漢地乃ち此僧有るか。」と。尋いで安西王の命を以て講筵を義善寺に開く。天子聞いて之を徵して闕に至らしむ。詔して大原教寺に居らしむ。銀章一品を賜ふ、戒を求むる者皆從つて受く。延祐四年三月二十四日坐逝す。

【一】 廢寺に隱居す

元の世愚は衢州西安縣の人なり。布納及び斷崖中峰の諸大老に歴參し、後に法を止岩に得たり。西安烏石山の廢寺に歸りて荂を結んで以て居し、影山を出でざること六載、名朝に聞ゆ。重臣を遣はして名香、金襴法衣を賜ひ、號を弘辨と加ふ。至正の間、龍眠古望等の五刹新に翹る有り。皆虔懇に師を延いて開山第一祖と爲す。乃ち已むことを得ずして之に應ず。

總論

或問ふ、世尊始めて正覺を成じ即ち「華嚴」を演ぶ、乃ち沙彌講經年甫めて七才なる有り。如し必ず年を歴て久しく隠るれば當に衆生如何がすべき。知らず、古人の遲重獨り善くして世を忘るるに非ざるを。道高くして志愈勤め、心明にして事彌愼む。水邊林下聖胎を長養し、夫果熟し、香飄龍天推し出すを待ちて、擧げて之を措くこと裕如たり。

【沙彌も云云】三羅漢を得るといへる説を指す。

【佛法是れ鮮魚にあらす】大愚芝公の語といふ。

【艱苦の行】盤根錯節に遇はずんば以て利器を現はすを得ず。干将なり正宗なり。之を高開層臺に束ね置か

んか、世間ありふれの鹽鯖刀と相去るいくばくぞ、誰か利器たるを知るを得ん、されば上

天下地、唯一無二の尙重といへども高尙、遅重、端居

無爲にして、而も一切衆生を濟度する法鑑を拈据經營

し給はずんば世尊の世尊たる何の休徴に依りて別つべ

き。

【腕を扼す】今僧

破戒、無頼、豊饌

香酒、以て其腹を肥すをいふ。

子、如來一代の利生を見て三祇の熏鍊を知らず、又安んぞ七才の沙彌も多生の熟習に非ざるを知らんや。佛法はれ鮮魚にあらす、那ぞ爛却を怕れん。斯言小なりと雖も以て大に喩ふべし。

艱苦の行第九

【一】年老ゆるも頭陀す

佛世の大迦葉尊者専ら頭陀を行じ、年老いて捨てず。佛其衰邁を憫みて、謂つて言はく、『汝久しく勤苦を事とす。宜しく稍自逸すべし。』迦葉苦行すること故の如し。佛大いに嘉嘆じて曰はく、『汝能く一切衆生の爲に依止と作る。我在世の如く以て異すること無きなり。頭陀の行、汝の如くなる者有れば我法則ち存す。然らずんば我法則ち滅せん。汝は眞の大法を荷擔する者なり。』後に法を傳へて西天の初祖と爲る。

贊に曰はく、頭陀の行の存滅、法の存亡、焉に係る。金口の宜言を敷くこと猶耳に在り。

今の僧其食を腴にし其衣を文り、其居を華にし其四肢を隋しむ、其玩好を飾ること王公の如くにして愧を知らず。末法將に沈まんとす。良に腕を扼すべし。迦葉、東西二方に鼻祖として、爲す所是の如し豈懸に後患を知りて厥孫の謀を貽すに非ざらんや。乃祖の行ふ伎に率ひ、願くば禪者末法を以て自棄すること母れ。

【二】備に險難を經

【東西】 天竺、震旦なり。

【二】 備經險難。

【備に險難を經る】 虎穴に入らざれば虎子を得ず、即ち死を纏つて後大業成就す。

【佛國を踐む云云】

古人は他の佛國を踐むを聞くや、直ちに慨然として身を忘れ、夢想猶恐るべきの險難を、危疑躊躇せずして實履しけり。是れ自ら信ずる所の深且つ厚なるに因る

晋の曇無竭、法顯等射ら佛國を踐むを聞いて、慨然として身を忘るるの誓有り。永初元年を以て同志曇朗僧猛等二十五人を集めて、長安を發して西のかた流沙を渡る。上に飛鳥無く下に走獸を絶す。四に窺みるに茫茫として之く所を知ることを莫し。惟日光を望みて以て東西に准へ、人骨を視て以て行路を標するのみ。葱嶺に至るに、嶺、冬夏積雪し、惡龍毒を吐き、風砂礫を雨らす。前んで雪山を度る、下に大江有り流急にして箭の如し。東西兩山の脇は索を繋いで橋と爲す。十人一過して、彼岸に到り已りて烟を擧げて識と爲す。後人烟を見て前に已に渡ると知りて、方に更に進むことを得、久しくして烟を見ざれば、即ち暴風索を吹いて人江中に墮つと知る。復大雪山を過ぐるに懸崖壁立し、足を安ずる處無し、壁に故き杖有り、孔孔相對す、人四杖を執りて先づ下の杖を抜いて仍ち上の杖を攀づ。展轉相攀ちて、三日を經て方に平地に及ぶ、同侶を檢料するに十二人を失す。進みて中天竺に向ふ、路既に空曠、惟石室を齎して糧と爲す。十三人の中又死すること八人なり。無竭屢危棘を經と雖も、觀音を繫念して未だ曾て暫くも廢せず、舍衛國に至りて衆くの惡象に遇ふ。乃ち觀音に歸命するに、忽ち師子を現す。象遂に奔逸しぬ。恆河に至りて復群咒に値ふ、歸命すること初の如し、尋いで大鷲有り、飛び來りて牛亦驚いて散す。後に南天竺に於て船に隨ひて廣州に達す。經を齎して還る。

贊に曰はく、西行傳を讀むに十才より而下、猶涕を流すべし。即ち今の一字一句は皆先徳の汗血なり。而るに或は輕心を以て之に對し汗手を以て之を執る。不潔の處に之を置き

【衣食に博へ】 經典を以て衣食と貿易す。

【三】 法滅續絹。 喪服なり

【四】 刺股制心。

【髀上】 股肉なり

【五】 西竺取經。

【六】 身先苦役。

又或は存して讀まず、讀みても行はず。乃至用以て衣食に博へ、名利を貨ふのみ。悲しいかな。

【三】 法滅に續絹す

隋の靈裕は、周氏の教の滅するを見て、悲感して勝へず。衣は斬續を以てし、頭經麻帶考妣を喪するが如し。同侶を引いて夜正理を談じ書俗書を讀む。形を潜して灰稿して以て法の復するを俟つ。

【四】 股を刺して心を制す

隋の智舜は趙州大陸の人なり、専ら道觀を修す。安心卒に起りて禁制すべからざれば、股を刺して血を流し、或は石を抱いて塔を巡る、須臾も逸せず、髀上に刺す處、斑剝鏽の如し。

【五】 西竺に經を取る

唐の玄奘法師、誓を立てて經を取る。貞觀三年、單己西行し、流沙を過ぎ、高昌を歴、罽賓に及ぶ。虎豹多くして前進すること能はず。奘は計を爲すことを知らず。門を閉ぢて坐す。晩に至りて門を啓くに一老僧至る。奘即ち禮敬す。僧は教へて「般若心經」を持たしむ。逸に虎豹形を藏し魔鬼迹を避るるを得たり。直ちに佛國に造りて經を取りて歸る。凡そ二百五十餘國を経たり。貞觀十九年の冬、方に京師に達す。

【六】 身先づ苦役す

【七】 蚤虱不除。

【單形影を弔ふ】 嘗獨にして依頼なきをいふ。

【願くは以て相酬いん】 前生の宿債を償ふをいふ。

【苦行外道】 六苦行あり。一自斃、二投擲、三赴火、四自坐、五寂默、六牛狗戒。

【八】 六載春栗。

【聽徒八百】 講益の日際なるをいふ。

唐の志超は同州馮翊の人なり。年二十七にして并州の開化寺の贊禪師に依りて出家し、身心を潔正にし衆務を勤履す。僭安すること數百、兩令恆に備る。六時缺くること無し。苦役有る毎に必ず身先んずるを事とす。汾州に於て光岩寺を起て、晝夜克勤、後學を擧引す。時に嚴敕に逢ひ、僭を度する者は、加ふるに極刑を以てせんとす。超曾て意に介むこと無し。常の如く剝落す。世を避くる逸僭憑ること泰山の若し。

【七】 蚤虱を除かず

唐の曇韻は高陽の人なり、五台山木瓜寺に止りて單形影を弔ふ。處するに瓦窻を以てす。衣服久くして破敝し、蚤虱積聚し其味噉に任す、寄せて以て調伏す、曾て坐夏に於て山に土蚤饒し。既に屏除せず、氈は血に凝するが如し。但咎を引いて自責す。『願くば以て相酬いん』と。情、惻結無し。此の如く施を行すること四十餘年なり。

贊に曰はく、蚤虱を除かざるは苦行外道に幾からずや。是れ然らず、若し苦行を以て成道の由と爲すは、則ち誠に邪見なり。今咎を引いて自責す、願くば以て相酬いんと。則ち謂ゆる馬麥金鎗、宿債に償ふのみ。安んぞ之を外道に等しうすることを得んや。

【八】 六載粟を吞く

唐の道亮は趙州樂城の人なり。封龍山に入りて誦經を業と爲す。山侶三十。亮の一身既に衆務を同じうす。日別に粟を吞くこと五斗を以て度と爲す。六載の中曾て廢惰無し。徒跣すること三年。六時、衆に隨ふ。後に講律を以て聲東夏に被らしむ。聽徒八百、講學

の士と成る者四十餘人。

【九】 不作不食。

【作具】 未嘗鋤帚のことなり。

【清規】 禪家の清規この人より大いに備る。

【一〇】 萬里決疑。

【九】 作さざれば食せず

唐の百丈の海禪師は百丈絶頂に住して毎日力作し以て其供に償ふ。或勸めて之を止むれば則ち曰はく、『我は徳無くして以て人を勞す。』と。衆忍びず、其作具を藏す。因りて食せず。遂に一日作さざれば一日食せざるの語有り。

贊に曰はく、徳百丈の如くにして猶曰はく、『無徳を以て人を勞することを欲せず。』と。況んや我輩をや。或謂く、『住持の者は宜しく弘法利生すべし。日に千金を享けて百天を役すと雖も何ぞ病へん。而るに瓊事力作すれば謂ゆる大體を知るに非ず。』と。噫百丈叢林を建てて清規を立て、萬世の師法と爲る。豈慮此に及ばんや。今是の如きは凡そ以て天下の徳を涼し、祿に豐なる者を愧かしむるなり。

【一〇】 萬里疑を決す

唐の大隨禪師、僧有りて問ふ、『劫火洞然たり、這箇壞するや、也壞せざるや。』答へて云はく、『壞す。』僧云はく、『恁麼ならば即ち他に隨ひ去るや。』答へて云はく、『他に隨ひ去る。其僧之を疑ひ歸るに尋ねて參扣し、山川を遍歴して萬里に至る。

贊に曰はく、古人は毫釐の礙膺の爲に背て自瞞せず。必ず決擇を求めて痛快して而る後に已む。何んが復途路を以て勞と爲さん。謂ゆる一句、他に隨ふの語、千山衲僧を走すとは正に此を指すなり。今師を尋ね道を訪はしむれば、則ち跬歩にして肩を擡む。利を逐ひ

名に趨れば、則ち萬里にして輕擧す。行くこと八旬、過ぐることに百邑、遑かなる高風觀るべからざるのみ。

【一】躬自役作。

【殿廡の燈火】佛殿房内廊下の火灯。【帳を以つて首を蒙り】衣履を以て頭に披り夜具を以て安眠せざるなり。

【三聖堂】阿彌陀尊なり。【二】卑己苦躬。射を曲ぐる貌。

【臧獲】奴婢なり。【己利の徳云云】自利の行徳を云ふなり、夫れ安坐して人の汗血を甘しとし、無徳にして他の禮敬を受く、南山の謂ゆる無刀の大賊劫掠より甚しと。虚受信施の罪輕からず。

【三】刻苦事衆。【井白】水を汲み白を搗く。

【二】躬自ら役作す

宋の慕詰は臨州の人なり、詰侍者と號す。大瀉に住す。衆二千指、齋罷みて必ず大衆に會す。茶、放參する毎に躬自ら役作す。使令の者は側に在りて路人の如し。夜禮拜し、殿廡の燈火を視て、倦れば則ち帳を以て首に蒙りて、三聖堂に假寐するのみ。

【三】己を卑めて躬を苦しむ

唐の僧藏は仁祠に遇へば則ち禮し、碩徳に逢へば則ち禮す。僧侶拜を施せば俯僂して走る。衆務に當りて己を屈すること猶臧獲の如し。人の故衣を見ては潜に洗濯を加へ、或は縫紉を與ふ。炎暑の夜に至りて、衣を脱して草莽の中に入り、蚊蚋蟻蛭啣し血を流す。而も恆に彌陀の佛號を念す。巧曆の者と雖も算數すること能はず。

贊に曰はく、溫陵言へること有り。身を苦しめて作し安坐して食す、躬を曲げて禮し逆立して受く。苟も己利の徳有るに非ざれば、害を爲すこと細に非ずと。此老其れ免がれんかな。

【三】刻苦して衆に事ふ

宋の雲居簡禪師は、初め膺禪師に謁し、與に語ることに三日、大いに之を奇とし、誠めて刻苦して衆に事へしむ。是に於て躬ら井白を操り、樵爨を司り徧く寺務を掌る。古今を

【寺務を掌とる】眞俗を双修して公案を防げざるをいふ。

商略しやうりやくすることを妨げず、衆しゆ、知しる者もの有あること莫なし。

【二四】行して勞を懈せず。宋の圓照本禪師は永安の昇公を師とす。昇の道價は叢林に重んぜられ、歸する者雲の如し。本、敵衣垢面、井臼を操り、炊爨を典して以て之を給す。夜は則ち室に入りて參道す。昇曰はく、『頭陀、衆に荷すること、良に苦なり。亦疲勞せるか。』本曰はく、『若し一法を捨つれば、菩提を満足すと名けず。必ず此生に親證せんと欲す。其れ敢て勞を言はんや。』と。

【二五】常行乞食。

贊さんに曰はく、衆務を掌つかさどるも、古今を商略しやうりやくすることを礙またげず。炊爨すいせんを典てんするも、入室にふちう參道さんだうを妨まげず。今の沙門は手を袖そでにして供を受けて曰はく、『吾は辨道べんたうの者なり。彼は行務ぎやうむの者なり。』と。是れ何んが其れ古いにしへと異ことるや。

【二五】常に乞食を行す。

【分衛】托鉢なり。【總論】釋迦、分衛し迦葉六祖又頭陀確たつす。古聖賢の逸樂いつらくせざる固まより此の如し。後世放逸ほういつ淫樂いんらく以て空しく名を没するにあらず。八不淨財はつじやうさいに汚きたされつ徒ただに身を終おる。

宋の道法は熾熒しちやうの人なり。禪業を專精せんしやうす。後成都ごせいちゆうに遊あそぶ。王休の費ひ蓋かき之し、請しやうじて興樂きやうらく香積かうせきの二刹にを主つかさどらしむ。衆に訓しんふるに法ほふ有り、常に分衛ぶんゑいを行なじ、別請べつしやうを受けず、僧食そうじきに預あらず、乞食きじきして得る所を減へんじて虫鳥ちゆうちゆうに施たす。夜は則ち衣えを脱だつして露生ろせいして以て蚊蠅ぶんじやうに飼かふ。後定ごていに入りて彌勒佛みらくつの臍中光せちちゆうかうを放はなちて、三途さんずの果報くわくぱうを照燭しやうじやくするを見る。是に於て深く篤とく勵れいを加くふ。常に坐ざして臥ふせず、元徽二年げんけいにねん、定中ていぢゆうに於て滅度めつどす。

總論

【二】 懺獲妙音。

【感應の行】 佛菩薩の靈驗等、凡智の得て端倪すべからざる休徵最も多く、仔細分明に解註しがたし、獨り自ら法を信ずること篤き者にして初めて之を了す。
【一】 精誠感形。

聖王の相傳ふるや、「逸する無かれ。」と曰ふ。佛氏の相戒むるや、「愼んで放逸すること勿れ。」と曰ふ。法を求むる者は法の爲にして軀を忘れ、衆を利する者は衆の爲にして己を忘る。今の少年は十指水に點ぜず、百事懐に干からず、鉢を擎ぐれば、則ち曰はく、「髣酸す。」と。帚を持すれば則ち曰はく、「腰痛む。」と。蚤夜勤修すれば則ち曰はく、「吾體弱うして多病なり。」と。或は之を詰れば則ち又曰はく、「愚者は力を用ひ智者は心を用ふ、愚者は福を修し、智者は慧を修す。」と。噫果して而の言の若くんば、但迦葉頭陀を以てして愚に、六祖確磨を以てして愚なるに非ず。穿針の福を捨てず、將佛も亦愚なること無からんや。噫。

感應の行第十

【一】 精誠形を感ず

晋の道進は張掖の人なり。曇無讖律師に詣りて菩薩戒を受けんことを求む。讖は許さず。七日懺悔せしむ。懺畢りて再び往く。又大いに怒りて許さず。進、退いて誠を竭して禮懺すること三載を経。一夕夢むらく、釋迦文佛親しく爲に授戒すと。明往いて讖を見て夢むる所を言はんと欲す。讖遙に賀して曰はく、「子已に得戒せり。是より道俗進に従ひて受戒する者千餘人なり。」

【二】 懺して妙音を獲

晋の法橋、少くして轉讀を樂ふも、音聲に乏し。是に於て粒を絶ちて懺悔すること七日

【聲里許に徹す】
諷聲六七町に通徹するなり。

【三】誓縛子座。

【闍提】斷善根の者をいふ。

【達人は理を會し云云】後世の今日に及びては、守文の弊最も甚し、一字一句に拘泥し、圓義の何たるかを見る者鮮なし。是を以て活動應用するの方便を辨ぜず、徒に舊格慣式に因循苟息し、つづ永眠せるのみ。

【四】夢中易首。

を期と爲す。觀音に稽首して、以て現報を求む、同學苦に諫むれども聽かず。第七日に至りて喉内豁然たるを覺ゆ。水を索めて之を飲む。此より經聲里許に徹す。

【三】師子座を誓ふ

劉宋の竺道生、涅槃經を論ずらく、『闍提皆成佛すべし。』と。舊學の法師以て邪説と爲して之を擯す。生誓つて曰はく、『若し我所説、經義に合はずんば、願くば現身に惡報あらん。實に佛心に契はば、願くば捨命の時師子座に據らん。』遂に吳郡の虎丘山に往いて石を擧て徒と爲して、涅槃經を講ず。『闍提佛性有り。』といふ處に至りて曰はく、『我所説の如くんば、佛心に契ふや否や。』石皆點頭す。已にして涅槃の後品至る。果して『闍提佛性有り。』と稱す。後に廬山に於て『涅槃經』を講ず。畢るに甫んで衆忽ちに塵尾、地に墮つるを見る。端座して逝す。

贊に曰はく、聖人の言に辭缺けて意圓なる者有り。涅槃の闍提を論ずる是なり。亦何んが後品の至るを俟たん。蓋し達人は理を會し、拘士は文を執す。又獨り闍提の一端のみにあらず。而も生、公正、見搖がず、堅きこと金石の如し。死する時誓に逢はず、古今に輝灼す。嗚呼壯なるかな。

【四】夢中に首を易ふ

劉宋の求那跋陀羅は中天竺の人なり。緣に任せて遊化して京都に至る。謙王に華嚴等の經を講せんと欲す。而も跋陀自ら付るに未だ宋言を善くせず、旦夕に禮懺す。觀音の加被

【華音】 宋音なり

を求むるに、忽ち夢むらく、白衣の人劍を持して人の頭を撃げ來る、問うて曰はく、『何をか憂ふる。』と。具に事を以て對ふ。其人、劍を以て新首に易ふ。豁然として驚覺し備に華音を曉る、是に於て講を聞いて大いに佛法を弘む。

【五】 廢戒懺悔。

【五】 戒を廢して懺悔す

【布薩】 說戒なり
半月毎に自ら身の
前の半月より、今
半月に至る中間に
戒を犯さざるや否
やを観る、若し犯
あれば僧衆の所に
於て懺悔す。

齊の僧雲は寶明寺に住して講演を以て名を著す。四月十五日誦戒に臨む時、衆に白して言はく、『戒は乃ち人人誦し得たり。何んが數聞くを勞はん。一僧をして義を堅てしめて後進をして開悟せしむべし。』と。衆敢て抗すること無し。遂に誦戒を廢す。七月十五日衆集る。忽ちに雲の所在を失す。四に出でて追ひ覓むるに乃ち古塚の中に之を得たり。流血體に被る。其故を問へば、則ち云はく、『猛士有り、大刀を執りて聲を厲して呵して云はく、『僧雲、爾何人なれば、斯く敢て布薩を廢して妄りに堅義に充つ』と。即ち刀を以て我身を創る、痛毒忍び難し。』と。因りて扶掖して寺に還り、誠を竭して懺悔すること十年を經。至心に敬を盡し、式に依りて布薩す。臨終の日異香來迎し、欣然として逝す。時に咸其即世に懲革するを嘉すと云ふ。

【六】 癘疾獲瘳。

【六】 癘疾瘳ゆることを獲

贊に曰はく、今時經論を尙んで戒律を輕んず。二千年來半月の誦戒復舉行する者有ること無し。予揣らず廢墜を山中に興す。人猶未だ之を信ぜず。果報炳然たること雲公に於て微有り、願くば覽ん者之を思へ。

【細行を修せず】言行疎落なるをいふ。

齊の僧遠は梁州の蔚寺に住す、細行を修せずして流に隨ひて飲噉す。忽ち夢むらく、神人齒を切りて責めて曰はく、「汝出家の人なるに是の如く惡を造る。何んが鏡を取りて自ら照さざる。」曉に水に臨みて眼邊に烏黠なるを見る。是れ汗垢なりと謂ひて手を擧げて之を拭ふ、眉、手に隨ひて落つ。因りて自ら咎責して痛く常習を改む。敝衣破履、一食長齋、昏曉行悔、悲淚交注ぐ。一月餘を経て夢むらく、前の神人笑を含んで謂つて曰はく、「過を知りて能く改む、智人と謂ふべし。今當に汝を赦すべし。」と。驚喜して覺む。流汗身に遍く、面目津潤、雙眉復出づ、遠身二報を経て、三世虚しからざることを信知す。自後誠を竭して法を奉じ、曾て退墮無く、遂に名僧と爲る。

【七】 勤苦發解。

【七】 勤苦して解を發す

梁の道超は吳郡の人なり。旻法師の學解、海内に冠たるを見て、心に之を企てんと欲す。寢を輟め味を忘れ夜を以て日に繼ぐ。夢に人有り、言はく、「旻法師は毘婆尸佛の時、已に能く講説す。君は始めて修習す。云何が等しかるべき。但自ら功を加へよ、分に隨ひて解くを得ざるを患へざれ。」遂に勤劬苦至し、頃之洞徹す。

【八】 禮懺して壽を延す

【八】 禮懺延壽。而に黑氣あり。吉時には額に白氣あり、凶時には黑氣あり、聞く今死微あり故に面に黑氣あり。

梁の寵法師は、年三十八にして道人法願に遇ふ。謂ひて曰はく、「君が年四十に滿ちて當に死すべし。避くべき處無し。惟諸佛に祈誠し前の愆を懺悔すること有らば、或は冀ふべきのみ。」寵、鏡を引いて之を驗むるに面に黑氣有り。是に於て衣鉢を齧ぎ、香供を市

【四鼓】 夜の八時なり。

【百過俯仰】 坐禮百度計り。

【九】 誦經延壽。

【相者】 人相見なり。或は云ふ野姥なり。

【期に至り】 所厄の暮年なり。

【修短は分なり】 定業の命數なり。

【卷筒】 治鑄の用ふる所、風を致すの器なり。

ひ、東のかた海鹽の光興寺に抵りて門を閉して禮懺し、人事を杜絶す。晝は食息を忘れ、夜は衣を解かず、年四十に迄りて歲暮の夕、忽ち兩耳の腫痛するを覺え、其夜懺して四鼓に達す。戶外の人の言を聞くに、曰はく、「君が死業已に盡く。」と。遽に戸を開くに、寂として見る所無し。明晨黒氣已に除き兩耳骨を生ず。居常、佛を禮すること百拜を限と爲す。後疾有り起つこと能はず、猶床上に於て時に依りて百過、俯仰虔敬なり。年七十有四にして卒す。

【九】 經を誦して壽を延ぶ。

梁の智藏は吳郡の人なり、鍾山の開善寺に住す。相者に遇ふに、謂ひて曰はく、「法師の聰明世を盡ふ、惜むらくは命長からざることを。」三十一に止まるのみ。」と。時に年二十有九。是に於て講を罷め經藏を探りて金剛經を得。誦讀し佛を禮して懺悔すること晝夜輟まず。期に至りて忽ち空中の聲を聞くに、曰はく、汝が壽本盡く。般若の功德力を以て壽を倍すことを得。」と。後に前の相者に見ゆるに、驚異測ること莫し。藏其故を陳べ、始めて經力の不可思議なるを知りぬ。

贊に曰はく、修短は分なり、禮懺誦經して壽延ぶる時は則ち宿因の説廢す。噫、帶を還して天相除き、蟻を渡して貴形現す。人力尙天を回すべし、況んや三寶不思議力をや。獨り恨む精誠二公の如くなる能はざるのみ。築籥を鼓して經と爲す、杵碓を交へて禮を成す、亦何んが感應の由無きを怪しまん。

【一〇】 扣鐘拔苦。

【十】 扣鐘して苦を抜く

隋の智興は大莊嚴寺に居りしとき、職、鐘を扣くことを掌る。大業五年同住的僧三果といふ者に兄有り、駕に従つて道に亡す。其妻夢むらく、夫に謂ひて曰はく、『吾彭城に至りて病死して地獄の中に墮す。莊嚴寺の鐘を鳴らす時、響地獄に振ふに頼りて乃ち解脱を得たり。其恩に報いんと欲す、絹十疋を奉すべし。』妻絹を奉じ、興は以て衆に散す。衆問ふ、『鐘を扣く、何を以てか感を致す。』興曰はく、『吾鐘を扣く時、始め祝して曰はく、願くは諸聖賢同じく道場に入れ。』と。乃ち口發すること三下、長扣に及んで又祝して曰はく、『願くば、諸の悪趣、我鐘聲を聞いて俱に苦惱を離れんことを。』嚴冬極めて凍る。皮裂けて肉斂み、掌内凝血するも、勞を辭する所無し。

【一一】 天神護體。

【一一】 天神體を護る

唐の道宣律師、姓は錢氏。初め師に従つて律を聽くこと、一徧、即ち遊方せんと欲す、師、呵して曰はく、『還きに適くには適きよりす。修捨時有り。』と。仰いで聽くこと十徧せしむ、後に持律精嚴にして世の希有とする所なり。中夜山上行道し、砌に臨みて顛仆す。天神介冑にして之を掖くる有り。因つて問ふ、『何の神にや。』と。答へて曰はく、『博又天王の子張瓊なり、師の戒徳高妙なるを以ての故に給衛するのみ。』と。宣遂に廣く佛世を問ふに、一一條對す。及び宣に佛牙寶掌を授けて以て信を表す。南山教主證照律師と號す。贊に曰はく、律は玄義に非ず、宣公は鈍根に非ず。何んが十聽に淹滯せんや。良に戒は

【道宣】唐續高僧傳の作者なり。

【二三】 感示淨土。

【捷徑の法要】 諸行を歴ずして直ちに菩提に達するの近路なり。

【淨土法門云云】 往生の業には念佛を以て先と爲すの垂教に依る。

【二三】 甘露灌口。

道の本たるに山りて、其肌（み）に淪（し）み髓（ずい）に決（けつ）し。而（しか）して堅固（けんこ）にして易（か）らざらんことを欲（ほつ）するのみ。今の受戒（じゆかい）者は一受（いちじゆ）の後（のち）、之（これ）を高閣（かうかく）に束（つ）ね、尙（なほ）能（よ）く粗（そ）にして其義（そのぎ）を究（きよ）むること莫（な）し。而（しか）るを況（いは）んや師（し）十講（じゆじゆかう）、弟子（でし）十聽（じゆじゆちゆう）をや。吾故（われがゆゑ）に知る、宣公（せんこう）の師（し）は常人（じやうじん）に非（あら）ずして、大賢（たいけん）の其門（そのもん）に出（い）で、自ら來（みづか）ること有（あ）ることを。

【二三】 淨土を示すことを感す

唐（たう）の慧日（ゑにち）、舶（ふね）を泛（うか）べ海（うみ）を渡（わた）りて天竺（てんぢく）に達（たつ）し、智識（ちしき）に參訪（さんぼう）し、捷徑（せつぎやう）の法要（ほふしやう）を咨稟（しりりん）す。天竺（てんぢく）の學者（がくしゃ）は皆淨土（みよとち）を讀（よ）す。健駄羅國（けんたらかく）に至（いた）りて東北（とうほく）の大山觀音（たいせんくわんおん）像（ざう）有り、日乃（ひの）ち七日（ななにち）頭（あたま）を叩（たた）き又（また）食（を）を斷（た）つ。命（いのち）を畢（は）るを期（ぞ）と爲（な）す。七日（ななにち）の夜（よ）に至（いた）りて忽（たち）ち觀音（くわんおん）を見る。紫金身（しこんしん）を現（あら）じ、寶蓮華（ほうれんげ）に坐（ま）し、手（て）を垂（た）れ頂（いただ）を摩（な）でて曰（い）はく、『汝法（な）を傳（つた）へて自利（じり）利他（りた）せんことを欲（ほつ）せば、惟（ただ）西方（さいほう）極樂世界（ごくらくせかい）阿彌陀佛（あみたがつ）を念（ねん）ぜよ。當（ま）に知るべし、淨土（みよとち）の法門（ほふもん）は諸行（しよぎやう）に勝過（しやうくわ）す。』と説（と）き已（を）りて忽（たち）ち滅（めつ）す。日長安（にちちやうあん）に回（かへ）りて、普（あま）く念佛（ねんぶつ）を勸（すす）む。

贊（さん）に曰（い）はく、健駄（けんた）の觀音（くわんおん）を感じ（かん）じたるは竹林（ちんりん）の文珠（ぶんしゆ）を感じ（かん）せしと大略（たいりやく）相類（さうるい）す。皆誠（みなまこと）極（ごく）まりて應（おう）ず。疑（うたが）ふべき者（もの）無し。淨土（みよとち）の感應（かんごう）、事一人（こといちにん）に非（あら）ず。詳（つ）に往生集（おうじやうしゆ）の中に具（た）す、茲（こゝ）に復（また）贅（ぜい）せず。

【二三】 甘露口に灌ぐ

五代（ごだい）の永明壽禪師（やうみやうじゆぜんし）、初（はつ）めは庫吏（くわし）たり。官錢（くわんせん）を用（もち）つ放生（はうじやう）して死（し）に當（あた）る。吳越（ごえつ）王之（わ）を釋（しやく）す。出家（しゆけ）して僧（そう）と爲（な）る。嘗（かつ）て法華懺（ほふげさん）を行（おこな）ふこと二十一日（じふにいちにち）、備（つ）に精懇（しやうこん）を極（ごく）む。觀音（くわんおん）、甘露（かんろ）を以（もち）て

【一四】 懺感授記。

【春夏は教を講じ】
【秋冬は禪に坐す】
【方等、般若を立つ】
【坐禪、念誦を興す】

【一五】 口出青蓮。

【漆紵】 漆布等を
以て肉身を繕飾す

口に灌ぐと夢む。遂に無礙辯才を得たり。

【一四】 懺して授記を感す

唐の曇榮、春夏は講教し、秋冬は坐禪す、刺史、舍利三粒を送るに因りて乃ち誓つて總て護んことを求む。遂に舍利四百粒を得たり。方等懺法を行ふ。寺僧に僧定といふ者あり、くわらみやうの中なかにに七佛しちぶつ皆現みなするを見る。一佛いちぶつ、榮を顧みて云はく、『我は是れ釋迦しやくたなり。汝が身器清淨きしやうじやうなるが爲の故に、來つて授記す。後當に作佛つくりぶつして普寧佛ふねいぶつと號すべし。』と。是冬榮卒しゆつし、異香空いかうくうを繞る。

【一五】 口より青蓮を出す

唐の遂端すいたんは德潤寺とくじゆんじに止る。法華ほつげを專精せんけいして十二時中恆じふにじちゆうつねに誦して輟とまず。老いて且彌篤かついふくあつし。咸通二年かんつうにねん、忽ちたつち臥坐ふしざして化す。須臾しよゐんにして口中より青色しやうせいの蓮華れんげ七莖しちきやうを出す。東山とうざんの下に葬る。二十餘年にじふよねんにして墓はか屢しばしば光ひかりを發はつす。閉ひいて之これを視みるに形質ぎやうしつ生なけるが如ごとし。衆迎しゆゐへて寺じに還かへす。漆紵しつしゆもて之これを飾かざる。今眞身院いましんじんゐんと號なづして存ぞんす。

總論

予古行われこぎやうを録ろくして感應かんおんを以もつて篇へんを終おふ。傍たがはらに笑わらふ者もの有り。曰いははく、『道みちは修しゆ無く證じやう無し。修無しゆなければ則すなはち感かんずる者ものは空くうなり。證無じやうなければ則すなはち應おずる者ものは寂じやくなり。感應かんおんに憧おそ憧おそたるは、亦また功こうを計はかり利りを謀まるの心こころなること無なからんや。予曰われいははく、『桴ふ、鼓こに感かんずれば則すなはち應おずるに聲こゑを以もつてし、水月みづつきに感かんずれば則すなはち應おずるに影かげを以もつてす。謀はかりと計はかいと安やすにか在ある。是故ゆゑに忠臣ちゆうしん

誓ちかつて枯竹芽こさくめばえ、孝子かうし泣ないて堅冰けんひやう解とくるは理ことわりなり。奚いづくんぞ異あやしむに足たらんや。感かん應おうをして由よし無なからしめば、則すなはち因果いんぐわ蕩然たうぜんたらん。齡達くわつたつの空くうは殃禍あうくわを招まねく。戒いましむる勿なるべけんや。一

緇し門もん崇そう行ぎやう録ろく
終

緇門 崇行錄跋

崇行錄は眞を履み、朴を尙び原を窮め木に達するの談なり。矧んや末法の群機皆孟浪と成る。心を端し理に契ふこと茲に越ゆる無し、故に我大師、三藏總べ持ち、一心普く運す。大悲の極り爰に斯文を啓く。誠に苦海を濟るの慈航、幽途を燭すの寶炬たり。條のごとく分れ縷のごとく折つて、義を樹つること森嚴なり。恍として八音を清廟に奏するが若し。冲然逸響、衆心を悅可し、披覽する者をして分に隨ひて各足らして之を掲げて曰はく、『某や忠、某や孝、某や清淨に由りて道に入り某や端謹を以て衆を率ゐ、某や行じ難き所を行じ、某や忍び難き所を忍び、而して末に彰すに感應を以てす。夫れ磁石の針を引き澄潭の月に映ずるに譬ふ。必然の理亦復何んが疑はん。謂ゆる頭を激し懦を起す。其福利を爲すこと小補に非ず。後の學者苟も之に乗ずる或れば、慢を以てし、稍之を勉むれば則ち曰はく、『彼は聖なり、我は凡なり、爾何ぞ曾ち予を是に比する。噫吾知んぬ。其自ら卑近に安んじて無上佛乘を冀はんと欲し、猶夢みること未だ著ざる在り。弟子紛蠢然の餘、恭しく至教に逢ひ、関して未だ卷を終らざるに悲涙嗟嘆す。惴惴焉として自る所を知る罔し。心死し神喪して頓に故歩を失す。徒らに以て清氛を下塵に託するのみ。紛に屬して其録を筆受せしむ。悚仄して謹書す。時に萬曆十三年、歲乙酉に在る仲冬の日、弟子廣飜和南跋す。

教誡新學比丘行護律儀

終南山沙門道宣述

○當書一卷道宣の撰なり。闡惡修善以て佛道に悟入せんと欲する新學の比丘の爲に堅持すべき法軌を説くの書なり。

【一】以下、序文なり。新學のもの必ず師承に頼ずべきことを遠ぶ。

【道門】佛道門なり。

【律義】律とは法儀とは軌範なり。

【化教】化教は道俗に通じ、制教は内衆に局る。

【漸頓】華嚴は頓に示し、鹿闍は漸に誘ふ。

【教章】律の三大部を指す。

【四儀】四威儀にして行、住、坐、臥なり。

【法の潤ひ】法華經に、法は喻へば大雲の如し、一味雨を以て人華を潤すが如しとある。

【禪那】靜慮のこと。

○當書一卷道宣の撰なり。闡惡修善以て佛道に悟入せんと欲する新學の比丘の爲に堅持すべき法軌を説くの書なり。

【一】觀とは、夫れ創めて道門に入つて、未だ即ち其妙行に閑はざれば、要す遵承するに法調を以てし、方に乃し其律儀を曉めよ。事若し師承を闕きぬれば、持護冥然として

準無し。故に知んぬ、教誡有らざるば行相誰か宣べん。學人有らざるば軌模奚ぞ説けん。然るに釋迦の行化は法として西天を本とす、金口光を收めてより言は東域に流ぶ。化教は其漸頓を含んで、定水を三千に洒ぎ、制教は輕重斯に分れて、戒香を百億に熏ず。律に五年の依止を制すること、意六根を調伏するに在り。有智は師を離るることを聽許し、無智は猶須らく盡壽すべし。屢初心の道に在る有り、事に觸れて未だ諳んぜず、曾て其教章を尋ねず、法に於て毎に疑網に纏る。或は制すべきに非ずして而も制し、是れ制すべきに便ち違す。或は、我は是れ大乘の人なり、小乗の法を行ぜず。と云ふ。斯の如き者衆し、一二三に非ず。此れ則ち内には菩薩の心に乖き、外には聲聞の行を闕く、四儀既に法の潤ひ無し、乃し枯槁の衆生と名く。此の若き等の流、古今絶えず、持法の達士に非ざるより

は、孰か能く之を鑿みん者ならんや。時に學人有れども運情疎躁にして、行を求むる者は少く、解を求むる者は多し。制儀の門に於て極めて浮漫を爲す。夫れ以るに、禪那三昧

【勝行】上の禪那三昧を指す。

【古今の大徳】西天の五祖、漢土の九祖。

【良田】これに三程あり。敬田（三種）恩田（父母）。

【淨業】三業清淨の義。

【道儀】佛道の軌範。

【二】以下、正宗分なり。中に二十三分あり。今は第一章あり。今は第一寺に入るの法を明す。凡そ入寺の法則は但新學のみならず、總じて比丘入寺の時、皆是の如く律の中にも見えたり。【歎佛】釋迦如來のこと。

を修せざれば、長く眞智の心に垂き、諸善律儀を得はざれば、以て其勝行を成じ難し。是を以て古今の大徳實に世者の良田爲り。淨業にして道儀を成じ、清白にして戒品を圓にす。氣は星漢よりも高く、威は風雲よりも肅し、徳は丘山よりも重く、名は江海よりも流る。昂昂たる聲傑、秀學千尋たり。浩浩たる深慈、恩波萬頃たり。師子の徳を懷き、象王の威を現す。人天贊承し、龍神欽伏す。實に謂れば、蒼生感有れば、世空然ならず、所以に徳焰輝を聯ね、傳光絶ゆること靡し、雅行堅操なる眞の僧寶なり。予乃し愧を下流に省み、實に慙を上徳に懷く。教に準じて斯清訓を慕し、以て將に呈して未聞に誨ふ。夫れ戒律の宗理、任持の志有り、遂使、内には其心善を増し、外には儀軌をして觀ぜしむ。凡そ諸行の條件、之を後に録して用て新學を光す。題に序を并べて云ふ。行相の法、都て四百六十五條、下に在り、具に明す。

【二】寺に入るの法第一 十一條

一に寺門の外に到つて威儀を具へよ。二に寺門に入るには禮拜して便ち跪いて常の如く歎佛を説くべし。三に座具を收め合掌曲躬して、然る後、容を斂め廊の一邊に旁うて緩く行き直く視よ。四に手を垂るることを得ざれば、當に所畏有るべし。五に殿塔の影を踏むことを得ざれば。六に尊宿に逢ふとも殿の前にして禮拜することを得ざれば。七に若し殿塔に入らば當に合掌して右に繞るべし。左に轉ずることを得ざれば。八に殿門を出でんには頬に

【手を垂るる】 恭敬の意に垂る。恭所多く學行高尚にして世の師範となるべき人。

【右に】 吉祥を表す。

【三】 正宗分の前に在つて立つの法を明す。

【四】 正宗分の前に在つて立つの法を明す。

隨つて足を擧げよ。九に漢睡せんには須らく屏處を知るべし。十に須らく尊宿を參禮すべし。十一に須らく大小便の處を知るべし。

【三】 師の前に在つて立つの法第二 六條

一に直前に立つことを得され。二に直後に立つことを得され。三に太だ近くことを得され。四に太だ遠きことを得され。五に高處に在りて立つことを得され。六に上風に立つことを得され。當に須らく師の額の角に對して七尺計に立つべし。

【四】 師に事ふるの法第三 五十一條

一に常に師の顔色を瞻て失意せしむること勿れ。二に凡そ師の所に至らんには當に威儀を具ふべし。三に師の前に在つて同類の人と相禮することを得され。四に師の前に在りて人の禮拜を受くることを得され。五に師の前に向つて問訊せば當に預め合掌曲躬すべし。六に師と共に語らんに争ひ勝つことを得され。七に常に須らく軟語すべし。八に師の語未だ了らざるに語ることを得され。九に凡そ事を作さんと欲せば要す須らく咨白すべし。十に師教誨する所あらば常に須らく隨順すべし、違逆することを得され。十一に凡そ教誨を得ては當に禮謝を設くべし。十二に若し呵罵を被らんに、當に須らく自ら責め軟語もて懺謝すべし。十三に師の呵責を被りて瞋嫌の心を起すことを得され。十四に師の衣裳巾櫛に

【搗糞】 觸るるの
意。

【懸に放つ】 編絲
の損ぜんことを恐
るるの意。
【三十七に云云】
水を置きて夜を越
すこと勿れ、暑き
時は蟲の生ずる恐
れあればなりの意

垢賦あらんを見れば、師に白して洗濯して淨ならしめよ。十五に師の衣の破るるを見れば、當に之を縫補すべし。十六に師の鞋履を整へ衣被を襲疊すべし。十七に先づ師の鉢を洗ひ、次に己が鉢を洗へ、十八に常に須らく作意すべく、噴笑することを得ざれ。十九に師より前に在つて臥することを得ざれ。二十に師より後に在つて起くることを得ざれ。二十一に凡そ師の房に入らんと欲せば、門に至つて先づ彈指して然る後方に入れ。二十二に平明三下の鐘了らば、即ち問訊して事を白せ。二十三に一切處に於て師を避けて坐せ、搗糞することを得ざれ。二十四に若し師に隨つて行かんに噴笑することを得ざれ、師の影を踏むことを得ざれ。相去ること七尺なるべし。二十五に教令を奉ぜば當に慙慙を生じて戒定を修し、以て師の恩を報ぜんと念すべし。二十六に師の外より歸るを聞かば、當に出でて迎接すべし。二十七に師外より歸らば當に須らく衣裳を襲疊すべし。二十八に師の洗足せんと欲せば當に湯水拭巾を具ふべし。二十九に常に師の房院を掃ふべし。三十に師の床に塵土有らば當に之を掃去すべし。三十一に師の常に坐臥せる床に輒く坐臥することを得ざれ。三十二に凡そ師の房門に入らば當に門の頬に旁うて行き、門の頬に隨つて足を擧ぐべし。三十三に門の簾を揚げて出入せば、當に手もて承け門の頬に著くべし、聲有らしむること勿れ。門戸を閉すに、聲を作すことを得ざれ。三十四に凡そ簾を下さば懸に放つことを得ざれ、當に手を以て承けて下すべし。三十五に凡そ簾を上るの法、當に裏より卷きて兩頭をして齊しからしむべし。三十六に楊枝を嚼み演唾せんには當に屏處すべし。三十七に師

【所須】ここに
は師の身のまはり
の道具を言ふ。
【上堂】食堂を指
す。

【五】正宗分の中
第四に寺に在つて
住するの法を明す

の餅をして宿水有らしむることを得ざれ、此は熱時を忌む。三十八に常に師の餅水をして満せしめよ、欠少することを得ざれ。三十九に當に燈燭を具するに常に時を知るべし。四十に冬月に師の房に火を闕かしむること勿れ。四十一に夏月には常に師の爲に薦席衣裳を晒暴すべし。四十二に師前に向つて他人を讒佞し其過惡を説くことを得ざれ。死して地獄に入る、極めて過惡と爲す、深く須らく之を誡むべし。廣く「智論」の中に説くが如し。四十三に師の前に在つて無益の事を説くことを得ざれ。四十四に師の前に對して糞を掴くことを得ざれ。四十五に若し欠呿せんと欲せば、當に手を以て口を遮るべし。四十六に師に對して穢を著ることを得ざれ。四十七に師に對して足を洗ふことを得ざれ。四十八に師の前に向ふとき、未だ坐を遣さざれば輒く坐することを得ざれ。四十九に師の前に向ふとき、未だ去らしめざれば、輒く去ることを得ざれ。五十に師、寺を出でんと欲せば、當に所須を具ふべし。五十一に師上堂せんと欲せば、師の爲に鉢を滌ぎ、門戸を閉づる等の事を看よ。

【五】寺に在つて住するの法第四 三十一條

一に強ひて他の事を知り、他の過非を論ずることを得ざれ。二に他の諍の事に入ることを得ざれ。三に他の惡の事を傳ふることを得ざれ。四に牆壁に釘破することを得ざれ。五に門戸及び牆壁に書くことを得ざれ。六に殿塔不淨ならんを見ては、當に掃うて淨から

しむべし。七に行かんに手を垂るることを得され。八に行かんに左右に顧視することを得
 され。九に行かんに長く直しく視よ、地を看ること七尺ばかりにして、蟲蟻を踏ましむる
 こと勿れ。十に若し手に物を把りて、路にして尊宿に逢はば、當に一處に放つて如法に問
 訊すべし。十一に籬牆を逾越することを得され。會衣會夏等の縁を除く。十二に木杖を著
 けて尊宿の前に向つて行立することを得され。十三に通肩に袈裟を披ることを得され。十
 四に常に須らく袈裟の紐を帶すべし。十五に凡そ履襪を著けて先づ脚根をして地に著けし
 め、聲を作さしむること勿れ。十六に漢睡せんには常に屏處に向へ。十七に門闌の上に乗
 することを得され。十八に脚をもて門限を踏むことを得され。十九に惡笑の處に入ること
 を得され。二十に春夏秋冬に於て切なる惡事無くんば、遊行することを得され。二十一に
 惡口をもて人を罵るることを得され。經に説く所の如く、口業極めて重し、切に須らく之を
 慎むべし。二十二に風雨を瞋罵することを得され。二十三に急に行くことを得され。當に
 牛王象王の歩を學ぶべし。二十四に廊下を行くに其中道に當ることを得され。二十五に行
 くに須らく一邊に旁ふべし、是れ禮なり。二十六に廊下を行くに高聲に語笑することを得
 され。二十七に大小便須らく處所を知るべし。二十八に緣事無くんば他の房院に入ること
 を得され。二十九に常に須らく慈悲柔和善願なるべし、論に曰はく、「夫れ慈と言ふは意柔
 和なるに在り、他の所惱を被りて瞋恨を生ぜず。夫れ悲と言ふは意饒益に在り、善く物の
 情に順ぜよ。」三十に凡そ出房院のとき尊宿と衝突することを得され。三十一に廊下を行く

【物の情】物とは
 ここにては衆生を
 指すなり。

に吟詠することを得ざれ。

【六】院に在つて住する法第五 五十五條

【六】 正宗分の中
第五に院に在つて
住するの法を明す
【水罐桶】 水を汲
むつるべ。

【漚羅】 水を濾す
布なり。

一に常に正業を勤修し、空しく世事を譚ずることを得ざれ。二に水を濾むの法、初に水罐桶を下して先づ且く水を動かして、蟲をして散らしめよ。三に三重の密絹を用ひて水を濾すべし。四に水罐桶を上下せんに、井の四邊に掃著することを得ず。五に水桶を井の口至上せば、須らく如法に水桶の横梁を澆洗して、然る後に之を把へて拭ひ暴して乾さしむべし。六に水を濾す時、桶を井の口より出し、水をして漚羅の外に滴しむることを得ざれ。七に水を瀉ぐには、盆水の中に潑入することを得ざれ。若し滴り落ること有らば、更に須らく再び濾すべし。八に夏熱の時、宿を經る水には則ち蟲生すること有り、早朝に取れる水には午時に蟲生ず、彌須らく再び濾すべし。九には嚴冬に氷有らば、早く起きて水を濾すことを得ざれ。水漚羅に著けば蟲則ち凍り死す。十に日出の暖ならん時を候ちて方に水を濾すべし。其桶及び羅唯須らく表裏意の如くし、細かに淋ぎ、蟲をして盡さしめて方に休むべし。濾水の法、行相極めて難し。今且らく略して説く。十一に乾枯せる柴竹を然さんに、蟲有るに似たりと疑はば、細に破りて之を看るべし。十二に毎に須らく火觸を檢校すべし、失火せしむること勿れ。十三に若し內衣を洗はんには、須らく、蟻虱を拾ひ去るべし。十四に足及び襪を洗はんに、須らく一盆を用ふべし。十五に淨衣を洗ふ盆

【四恩】父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩。
 【四念處】一には身不淨と觀ず、二には受は苦なりと觀ず、三には心は生滅すと觀ず、四には法は無我なりと觀ず。

【好発】好き発。発は床橙。ゆかなり。

にて、足及び襪を洗ふことを得ざれ。十六に凡そ淨衣を暴さんに觸笥の上に安きことを得ざれ。十七に凡そ衣を濯がんにには要す水餅を用て手を淨めて其桶杓を把れ。十八に凡そ洗濯し了らば、當に淨水を用て盆器を盪ぎて淨からしむべし。十九に凡そ足を洗ひ了らば、須らく水を用て再び手足を淋ぎて淨からしむべし。二十に夏月の熱時に水盆を用ひ了らば、當に蕩滌して之を覆うて乾かしむべし。仰くることを得ざれ、仰くれば即ち蟲生ず。二十一に上中下座に於て、常に禮節を存ぜよ。二十二に上中下座に於て無義の語を出すことを得ざれ。二十三に穢言を譚話することを得ざれ。二十四に所作の事業、慙に師に義を問うて慧師を生ぜんことを求めよ。二十五に常に老病死を念じ、三業を策勤して出世の行を行すべし。二十六に常に慙愧を懷いて四恩を報じ、旁に三有を資せんと念すべし。二十七に三寶の境に於て、難逢難値の想を生ぜよ。二十八に當に四念處を觀ずること、大小乘の經論の明す所に約す。念念の中に於て常に慈悲を加へ、菩提の心を發せ。二十九に當に三寶物を護惜すべし。損失することを得ざれ。三十に濕鉢を繩床、板床、及び席上に安んずることを得ざれ。三十一に若し常住の三寶物等を損費すること有らば、當に倍して之を備ふべし。三十二に凡そ床に坐せんには先づ脚を見るべし、若し未だ平に地に著かざれば、輒く坐することを得ざれ。三十三に繩床、板床の露地に在らんを見ては、當に須らく之を收むべし。三十四に好発を將て日中に安じて、藥物等を曬すことを得ざれ。三十五に凡そ坐床を移さんと欲せば拖曳くことを得ざれ。當に須らく攀げ移すべし。三十六に屋柱の邪め

【皂莢】 草の名。

【五條】 五條とは
下衣と名く、用
從へば院内道行雜
作衣といふ。

る處に水餅を安ずることを得され。三十七に袈裟を著んには、當に須らく紐を帶すべし。
三十八に觸手もて袈裟を扱ふことを得され。三十九に袈裟を洗んには手をもて按むことを
得され。亦脚もて踏むことを得され。四十に口に水を含んで袈裟に噴くことを得され。四
十一に袈裟を摺りて口に衝むことを得され。亦脚に踏むことを得され。四十二に袈裟を坐
著することを得され。四十三に凡そ經を把らんと欲せば、須らく皂莢をもて手を洗ふべし。
四十四に淨巾をもて手を拭はば當に暴して乾さしむべし。四十五に須らく院内の床席の觸
淨を知るべし。觸る者は當に須らく之を淨むべし。四十六に凡そ作務する所、及び洗滌せ
んには須らく五條を著すべし。若し七條を反披すること無くんば、之を許す。四十七に凡
そ床席を淨めんには、先づ唾垢を去つて須らく濡れたる巾をもて之を拭ふべし。四十八に
凡そ藥茶及び鹽、一切の堪食の物を受けんと欲せば、當に喫すべきを料量して取れ。盡し
て時に逐うて之を受けよ。多く受けて殘宿有らしむことを得され。深く須らく之を慎むべ
し。人多く喜んで犯す。四十九に凡そ水杓を用ひんに、入水の處に齊つて是れ淨なり。常
に把る處に當てば、是れ觸なり。若し淨をば之を把ることを得され。五十に若し病者有ら
ば、當に慈心もて始終之を看るべし。房院に人と睡ること有らん時には、物を打つて聲を
作し、及び高聲に語笑することを得され。五十一に若し外より歸らんに、院の門或は關さ
ば當に復緩く打つべし。人を驚かすことを得され。五十二に凡そ院を出でんと欲せば、當
に院中の僧に白して去處を知らしむべし。五十三に大小便を欲すと覺へば、當に須らく早

く去るべし。時に臨んで則を失ふことを得され。五十四に須らく手を挿して餅を把るべし。手を垂れて衣を餅の底に觸るることを得され。五十五に凡そ門戸を關さば、當に須らく子細にすべし。疎慢にして去失有ることを致すを得され。

【七】房中に在りて住するの法第六 三十二條

【七】正宗分の中第六に房中に在りて住するの法を明す。

一に大已五夏の人と共に同床することを得され。二に同類の人と房を共にせんに、毎に須らく相護りて喧競せしむること勿るべし。三に房中に常に作意して更に相問訊し、須らく大小を知るべし。四に若し言語を失することを得ることあらば、即ち須らく歡喜を乞ふべし。宿を経て其罪業を結することを得され。五に互に相讚美し、背いて相毀説することを得され。六に凡そ餘の房院に向はんと欲せば、同房の人に白して去處を知らしむべし。七に七條を摺げんには須らく預め、前づ五條を著すべし。八に若し五條を脱がば則ち須らく七條を著すべし。處を離るることを得され。九に凡そ火を持して房に入らんと欲せば、門の外に至り預め房内の人に告げ、知らしめて火入らんと欲すと云へ。十に凡そ燈火を滅せんと欲せば、口をもて吹くことを得され。十一に燈火を滅せんと欲せば、須らく同房の人に問ふべし、「更に燈を用ひんや否や」と。十二に房中及び竝べて房の人已に臥せんに書を読まんに聲を出すことを得され。十三に凡そ念誦せんと欲して、高聲にすることを得され。十四已是れ下座ならば苦事をば先づ作せ。十五に凡そ是れ好事あらば先づ上座を推

【處を】袈裟の處なり。

し、盆ますく護りゆうること海かい比ほん丘びくの法ほふの如ごとくせよ。十六じふろくに不善ふぜんの事ことを譚だん語ごすることを得えざれ、十七じふしちに戲け論ろんの法ほふを互たがひに相あひ譏ぎ諷ふうし習しゆ誦じゆすることを得えざれ。十八じふはちに蟻あひ虱しつを拾ひろつて房ぼう中ちゆうの地ち上じやうに放はなつことを得えざれ。當まさに綿めん絮じよを用もちて之これを裏つんで穩をん便びんの處ところに安あんずべし。十九じふくに行ぎやう住ぢゆう坐ざ臥ふに出しゆつ入にふせんに、袈け裟さ亦また須すらく身みに近ちかづくべし。二十にじふに設じやう令れい大だい小せうに出しゆつ入にふすとも袈け裟さ亦また須すらく身みに近ちかづくべし。二十一にじふいちに臥ふせんには、須すらく枕まくらを安あんずべし。席せきを汚けがすことを得えざれ。二十二にじふにに臥ふせんには、須すらく右みぎ脇わきを床しやう席せきに著せきくべし。面おも當まに外そとを看みるべし。壁かたを看みることを得えざれ。二十三にじふさんに身みを仰あつけ足あしを累かさね、左ひだり脇わきにて臥ふすことを得えざれ。二十四にじふしに臥ふせんに赤しやく體たいなることを得えざれ。二十五にじふごに臥ふせんに三さん衣えを脚あしの後のちに致いたすことを得えざれ。二十六にじふろくに行ぎやう住ぢゆう坐ざ臥ふに惡あく事じを思し惟ひすることを得えざれ。二十七にじふしちに夜よる臥ふして當まさに明みやう相しやうを念ねんずべし。二十八にじふはちに夏か中ちゆうには薦せん席せき衣い裳やう須すらく曬しやう暴ぼうすべし。二十九にじふくに凡おほそ鞋あひり履りを掛かけんには、人ひとの頭ちたまを過すぎ、人にん面めんの上うへに致いたすことを得えざれ。三十さんじふに身みに縁えんじ衣い裳やう須すらく淨じやう潔けつにして、垢く膩に及および汚を氣けあらしむること勿なれ。三十一さんじふいちに露あらしに燈とう燭しやくを然もやすことを得えざれ。三十二さんじふにに房ぼう中ちゆう常じやうに須すらく淨じやう潔けつなるべし。狼ろう籍せきなることを得えざれ。

【八】 大己五夏の闇梨に對するの法第七 二十二條

一いちに大だい己ぎ五ご夏か闇あや梨りに對たいするの法ほふ第七だいしち 二十二にじふに條じョう
一いちに大だい己ぎ五ご夏か闇あや梨りに對たいするに、須すらく袈け裟さの紐ひもを帶たいすべし。二にに通つう肩けんに袈け裟さを披ひらくこと
を得えざれ。經きやうに曰いはく、比ひ丘きやう、佛ぶつ僧そう及およ上じやう座ざに對たいしては、袈け裟さ三さんに脚あしを舂かめて倚より立たつことを得えざれ。經きやうに曰いはく、比ひ丘きやう、佛ぶつ僧そう及およ上じやう座ざに對たいしては、袈け裟さ三さんに脚あしを舂かめて倚より立たつことを得えざれ。死しして鐵てつ鉀か地ち獄ごくに入いらん。三さんに脚あしを舂かめて倚より立たつことを得えざれ。

【八】 正宗分の中
第七に大己五夏の
闇梨に對するの法
を明す。
【五夏】 己に多る
こと五歳なり。

され。四に手を垂れて立つことを得され。五に非時に噴笑することを得され。六に立つことと前の師に事ふる法の如くせよ。七に若し教誡有らば、當に須らく禮を設くべし。八に須らく謙卑の心を作すべし。九に人に對して抓瘡を得され。十に人の前に對して洩唾することを得され。十一に人に對して楊枝を嚼むことを得され。十二に未だ喚んで坐せしめざるに、輒く坐することを得され。十三に共に床坐を同じうすることを得され。十四に大已五夏の人常に坐臥せん處の床に坐することを得され。十五に夫れ五夏已上は即ち闍梨の位、十夏已上は是れ和尚の位なり。切に須らく之を知るべし。十六に尊人喚んで坐せしめば、須らく合掌曲躬して、然る後に乃ち坐すべし。十七に坐せんに無禮にして自恣に東西に倚ることを得され。十八に若し言語する所有らば、須らく謙下すべく、上分を取ることを得され。十九に口を張つて吹去することを得され。當に手を以て之を遮るべし。二十に手を以て面を掩ぶることを得され。二十一に大に氣を嘘いて聲を作すことを得され。二十二に坐せんには、當に須らく、身を端しくして定住すべし。

【九】二時食の法第八

六十條

一に三下の鐘を聞かば、即ち須らく務を息めて先づ且く出入す。二に先づ早菴を用て手を洗ひ淨からしめよ。三に凡そ所著の裾、太だ高きことを得され、太だ低きことを得され。常に須らく齊整なるべく、脚の踝に齊くすべし。四に七條を著げんに、當に横披をして衣の

【九】正宗分の中
第八に二時食の法
を明す。

【三下鐘】鐘を打つこと三下するなり。後の謂ゆる三つ鐘なり。

【庫序にして云云】
靜かに威儀をして
規則に順はしめよ
の意。

領と齊しからしむべし。直に臂の上に下して半は肩膊を覆ふべし。五に鉢を把へて上堂せんと欲せば、又須らく手を淨め、巾の上に於て手を拭ひ、乾かさしめて中指に巾を夾むべし。六に堂に至つて食し、未だ了らざる已前には、常に須らく手指の面及び掌を護るべし。觸することを得ざれ。設使堂の頭にして經を把らんに、勞しく更に洗はざれ。但香を以て淨めて即ち得てん。七に其鉢盂の外、三分が中、二分向上を淨と爲し、下の一分を觸と爲す。八に凡そ鉢を把つて滌蕩して水を瀉がんに、高きことを得ざれ。當に須らく腰を曲げて頭を低れて水を瀉いで、鉢をして地を去ること、一側手ならしむべし。九に若し童行をして鉢を過さしめば亦比丘の巾を夾むの法に同ぜよ。巾を把つて童行をして鉢を捧げしむることを得ざれ。過生すること極めて多し、繁しく述ぶること能はず。多く此を犯す。若し單に鉢を過さしめば、自ら巾を夾むは彌善し。十に鉢の聲發するを待つて、即ち如法に巾を夾み鉢を把つて匙柄を身に向はしめよ。十一に鉢を把つて太だ高きことを得ざれ。太だ低きことを得ざれ。則ち胸に當てよ。十二に須らく尊宿の門前を離れて、當に廊の柱に旁ふべし。廊の中心に在りて行ずることを得ざれ。又噴笑することを得ざれ。十三に上座と共に竝び行くことを得ざれ。須らく上座に譲りて前に向つて行かしむべし。十四に行かんには、須らく直しく地七尺を視るべし。十五に急に行くことを得ざれ。當に庫序にして威儀をして觀すべからしむべし。十六に初め食堂に入らんには、門の頬に隨つて足を擧げよ。出でん時も亦爾り。十七に所坐の處に至らば、先づ巾を放て、次に鉢を放つ

【作梵】微妙の音聲を以て佛徳を歌詠するの意なり。

【食巾】後世の單なり。
【褥】寝頭の横木器具を横に貫きて動かぬ様に用材にして俗に横木と云ふ。

て、後に手指をもて鞋履を夾み取りて床の下に安ずべし。十八に當に坐具を抽いて開張せんに、亦指を用て夾むべし。十九に禮拜して坐具を收めて、即ち床に上つて坐すべし。地に在つて跪き及び地に在つて立つことを得ざれ。必ず若し鐘の聲を斷たんと欲せば、乃ち且く立つべし。地に跪くことを得ざれ。二十に凡そ床に上つて坐せんには、鐘の聲を待つべし。坐具を留めて床の前の席上に致すことを得ざれ。二十一に凡そ床に上らんと欲せば脚の蹠を霧すことを得ざれ。二十二に坐す時內衣を出さしむることを得ざれ。二十三に堂に入らんに未だ鐘の聲を歛め禮拜して且らく坐具を收め床に上つて坐せ。衣服を床の縁に坐して著けしむることを得ざれ。二十四に香を行かん時手に籠むることを得ざれ。須らく手を出して合掌し語笑することを得ざるべし。二十五に輒く飲食を刺し束むることを得ざれ。二十六に若し次に當つて唱禮せんには、須らく一佛に一禮すべし。太だ急にただ緩なることを得ざれ。須らく所を得べからしめよ、二十七に次に當つて作梵せば、須らく偈を盡して讚すべし。半梵することを得ざれ。人衆少からん時にも、亦須らく其偈を盡して讚すべし。略することを得ざれ。二十八に若し僧制の間に違ふものは、白椎の聲あれば即ち下りよ。違拒することを得ざれ。二十九に當に須らく横帳を收攝すべし。袈裟を坐し著んことを得ざれ。三十に食巾を聞かんに、邊指の甲もて指の面に觸し著んことを得ざれ。三十一に食巾を敷かん時は、床の褥と縁と齊しからしむべし。三十二に椀鉢は常に須らく膝巾を離るべく、手を安じて膝の上を致すことを得ざれ。三十三に鉢中の水を傾けて、

【鉢碗を以て云云】
口を碗に近づくべ
からず。碗を口に
近づけよとなり。

床の前に灑滴することを得ざれ。三十四に凡そ食を食ける所の椀鉢、床を離れしむべし。
三十五に凡そ喫する所の、食は太だ急に猶餓人の如くなることを得ざれ。又須らく鉢碗を
把つて口に就くべし。又食を嚙の邊に満てて獼猴藏の如くなるを得ざれ。三十六に凡そ食
を受くる所、須らく手を仰くべし。三十七に凡そ食を受くる所、匙筋を把つて淨人の手の
中に於て自ら抄撥して取ることを得ざれ。三十八に匙筋を過して淨人に與へて儻の食器の
中に食を取らしむることを得ざれ。三十九に凡そ食を受けんと思ふに疑有らば、當に
漫心を作すべし。漫心と言ふは早朝に粥を受くるが如き、恐くは淨人錯りて唱ふ。當に
一切の粥皆受けんと思念すべし。餘の一切の食も皆受くること類して然るなり。四十に凡
そ食を受けんと思ふに、若し克心を作して、食を受得し了りて、心鏡相違せば、食、受
を成ぜず、更に須らく重ねて受け、方に乃ち成ずることを得べし。克心と言ふは鼓の粥を
受くるが如き、受け了りて乃ち是れ豆の粥なることを心鏡と相違すと名く。四十一に凡そ
食を受けんと思ふに、淨人餅の屑及び茶汁等を抖擻せんに、進りて椀器の中に落さば
必ず須らく更に受くべし。四十二に凡そ粥を出生せんと欲せば淨匙をして淨人出生器
の中に挂著せしむることを得ざれ。若し著る處あらば即ち須らく更に匙に受くべし。四十
三に凡そ受くる所の食には喫の多少を量つて餘有ることを得ざれ。四十四に凡そ食を喫せ
んと欲せば大いに攪き及び齧り飲みて聲を作すことを得ざれ。四十五に凡そ出生する所
の餅は、當に一半錢の大きさの如くなるべし。飯は其七粒に過ぎず、自餘の飯食も亦多きこ

【遺落】半は手中に在り、半は口中に在るの意。

とを得ざれ。四十六に凡そ出生する所の食、須らく事事如法なるべし。四十七に出生の食、棄つる所の悪き食物を將て生の中に致すことを得ざれ。四十八に凡そ出生の法は、須らく床の邊の淺處に安いて淨人をして掠み取らしむべし。自ら手を用て拵ることを得ざれ。意、手を護るに在り。四十九に匙筋を用て鉢椀を刮けて聲を作すことを得ざれ。當に湯水を用て滌蕩して取るべし。即ち鉢の光を損せず、若し鉢の光を損せば、鉢即ち膩を受けて洗ひ難し。五十に大いに口を張つて匙に滿て飯を抄うて鉢の中に遺落し及び匙の上になつて狼藉ならしむることを得ざれ。又上座あらんに應に先づ食すべからず。五十一に凡そ一口の飯須らく匙の頭を三び抄ひて食すべし。匙頭直に口に入らしめよ。五十二に醬汁飯粒等を遺落して巾の上に落在せるを得ざれ。五十三に食巾の上に安致して食することを得ざれ。五十四に若し食、食巾の上に遺落すること有らば、取つて食することを得ざれ。當に押し聚めて一處に安いて淨人に付與すべし。五十五に飯の中に穀有らば皮を去つて之を食せよ。五十六に鉢椀の中に若し餘殘有らば將て房院に歸することを得ざれ。五十七に常住の一食已外は將して院に歸り、須らく倍して之を備ふべし。五十八に食する所、須らく慙愧を生じて常に觀法を作すべし。五十九に須らく粥を喫するに十利有ることを知れ。具には偈の中に之を明すが如し。六十に須らく施食の五常を識るべし。一には色、二には力、三には壽命、四には安樂、五には無礙辨なり。

【觀法】一、工の多少を計り彼來處を量る。二、己が德行の全缺應供を忖る三、心を防ぎ過を離る。四、正しく良藥を事として形苦を療ふ。五、道業を成ぜんが爲に應に此食を受くべし。

【一〇】 正宗分の中第九に食し了りて堂を出づるの法を明す。

【四に食し云云】 再食の念慮を決斷するの謂のみ。

【二】 正宗分の中第十に洗鉢の法を明す。
【鉢】 梵語に鉢多羅といふ。ここには應器と翻す。應量の器なり。

【二〇】 食し了りて堂を出づるの法第九 十條

一に衆中にして食し了つて口を漱ぎ聲を作すことを得され。二に衆中にして食し了つて水を吐いて鉢椀の中及び餘處に致すことを得され。三に處世界の梵を聞かば合掌して偈を念ぜよ。四に食し了つて已に斷心を作さば津を咽むことを得され。五に床を下らんに脚の踝をして露ならしむることを得され。六に食し了つて堂を出でんには、先づ門の輦の邊の脚を擧ぐべし。當に匙の柄をして身に向はしむべし。鉢を執りて胸に當て顧視することを得され。七に食し了りて堂を出でんに、未だ院中及び屏處に至らざるに、唾を吐くことを得され。八に堂門の外に出でんに、須らく廊の一邊に旁うて行いて威儀をして庠序ならしめ、鴈行のごとくに行くべし。九に頭を竝べ語笑して次を失せしむることを得され。十に堂に出でんと欲せば、先づ横杖を收攝して袈裟を整理し僚亂ならしむること勿れ。次に依つて行くべし。

【二二】 洗鉢の法第十 十七條

一に堂を下つて房内に歸らんに、須らく先づ水を以て鉢を浸すべし。二に當に一大合水を用て椀の中に於て皂莢を浸す、長二寸可なるべし、三に洗漱せんに灰及び楊枝を用ひんには、當に屏處に向ふべし。上座に對することを得され。當に與に手もて遮るべし。四に鉢床若し短くば當に上座に讓るべし。亂に安著し他の洗鉢を妨ぐることを得され。五に凡

そ鉢を洗はんと欲せば先づ須らく衣裳を收攬るべし。地に著けしむること勿れ。六に凡そ鉢を洗はんと欲せば先づ清水を用て一編して、次に碗の中の皂莢の汁を用て鉢の中に瀉向すべし。仍て須らく碗に皂莢の水を盛り、食器を楷摩して堅膩方に盡すことを得べし。必ず須らく淨く洗ふべし。七に凡そ鉢を洗はんと欲せば先づ四邊を洗ひ、次に餘處を洗ふべし。八に鉢に於て手を洗ふことを得ざれ。九に鉢を洗はんに語笑することを得ざれ。當に須らく用心すべし。十に鉢を洗はんに須らく鉢床の高低一側手ばかり地を離れしむべし。十一に鉢床の四邊に洩唾することを得ざれ。十二に盥及び杓子の柄を淨めんには、初に鉢を洗ふ時、先づ觸處を把り、洗ひ了つて即ち水を以て杓の柄を洗ひ、方に手に把ることを得よ。十三に鉢を洗ひ了らば口に鉢邊を銜み、水を吸うて口を漱ぐことを得ざれ。十四に夏月に鉢を洗ひ了らば當に須らく淨處に覆して乾さしむべし。十五に夏月熱時に早朝に鉢を洗はば須らく新水を用ふべし。十六に若し宿夜の水有らば、更に須らく再び漉し了りて鉢を洗ふべし。水宿を経て蟲生すること有らんを恐るればなり。十七に粥を喫し了つて、若し外請を受けんには、鉢身に隨ふこと能はずんば、當に皂莢を用て洗ふべし。春夏秋冬を問はず皆しかなり。

【一三】 正宗分の中の法を明す。

【一三】 鉢を護るの法第十一 十三條

一に鉢を笏竿の下欄干の上に安くことを得ざれ。二に鉢を放ち物を懸けたる下に安くこ

【二三】 正宗分の中
第十二に衆に入る
の法を明す。 四人
【衆に入る】 四人
以上の和合衆を指
す。 【大小】 大席、小
席なり。

とを得ざれ。三に鉢を竹木樹枝を在倚する邊に安くことを得ざれ。四に鉢を石の上に安く
ことを得ざれ。五に鉢を菓子ある樹の下に安くことを得ざれ。六に果有る樹下に於て鉢を
洗ふことを得ざれ。七に鉢を床の角及び四邊の危きに臨めるの處に安くことを得ざれ。八
に手巾を將て鉢に盛り及び餘物を盛ることを得ざれ。九に童行に鉢器の食を與ふることを
得ざれ。若し童行に鉢の食を與へば深く佛敎に遠く。又打破することを恐る。切に須らく
之を忌むべし。十に一手もて兩鉢を把ることを得ざれ。中間に隔有るをば除く。十一に
若し鉢を携へて身に隨つて行かんには須らく鉢の口を外に向ふべし。十二に鉢を杖頭に挂
くることを得ざれ。十三に一切の危険の處に鉢を安くことを得ざれ。

【二三】 衆に入るの法第十二 十二條

一に衣を著んには須らく齊整なるべし。二に當に坐具を持つて臂の上に安くべし。三に
坐せんに須らく大小を知るべし。四に未だ鐘を打たざるに前んで堂に入ることを得ざれ。
五に上座未だ坐せざるに先んじて坐することを得ざれ。六に當に當に容を歛めて寂黙なるべし、
語笑することを得ざれ。七に床に上り床に下らんには、當に須らく如法なるべし。脚の腫
の蹠を露ならしむることを得ざれ。八に坐せんに須らく身を端して安住すべし。數動
くことを得ざれ。九に左右に顧視することを得ざれ。十に若し缺去せんと欲せば、當に手
を以て口を遮るべし。聲を作すことを得ざれ。十一に癢を抓くことを得ざれ。十二に當

に本業を念すべし。餘縁することを得され。

【二四】 正宗分の中第十三に入堂布薩の法を明す。

【布薩の法】 布薩とは淨住といひ、

長養といひ、和合といふ。これは衆

法の本なり。

【二五】 正宗分の中第十四に上廁の法

を明す。

【二四】 入堂布薩の法第十三 十二條
具に鈔の文及び布薩儀の如し。此に備に述べず。

【二五】 上廁の法第十四 二十條

一に出入せんと欲せんと覺えば、須らく早く去るべし。時に臨んで儀則を失ふことを得され。二に須らく手を損して餅を把るべし。手を垂るることを得され。三に廁の前に至つて尊宿有り知らば、當に須らく之を避くべし。四に廁の前に至つて彈指することを三下し、或は警效の聲をして人無しと知らば方に入れ。五に高下に隨つて衣を褰げ、漸く瀧り漸く擯くべし。預め高く衣を拵て身を赤露ならしむることを得され、六に夜暗黒ならんに當に廁籌を用て廁孔の中に於て、前後に向つて劃して闊狹長短正及び不正を知らしむべし。七に廁の四邊板の上及び尿闔の中に唾唾することを得され。八に廁籌を用ひ了らば、當に廁孔の中に刺すべし。須らく堀内及び板の上に安くべからず。文字ある故紙を用ふることを得され、九に手の方便に隨つて餅を把つて、當に七度水を用ひて洗ひ淨むべし。若し不淨ならば僧の床席に坐臥すべからず。十に水を用ふることに切にして、廁の口の四邊の板の上を澱温することを得され。十一に多人の處にして若し廁の外に人有りて待つこと

急ならば、縦ひ未だ了らざれども且く須らく廁を出づべし。十二に若し觸履を脱がんに、淨き鞋履の常に踏む所の處に安くことを得ざれ。十三に手を淨く摩り洗はんに先づ黄土を用ふることに三度して、次に細なる灰皂莢を用ふべし。十四に常に廁籌を具へよ、失闕することを得ざれ。十五に常に灰を用ひ、次に土を用ふべし、少しも缺くことを得ざれ。十六に廁の狼藉ならんことを見れば、常に掃つて淨からしむべし。十七に内外の狼藉ならんことを見れば當に掃除して去り淨からしむべし。十八に拭巾不淨ならば當に洗つて淨からしむべし。十九に觸履の不淨を見れば當に洗つて淨からしむべし。二十に灰土を用ふる處狼藉なることを得ざれ。

【二六】六時に於て語笑することを得ざるの法第十五 六條
 一に禮佛、二に聽法、三に衆集、四に大食、五に小食、六に大小便。

【二七】溫室に入るの法第十六 十六條

一に威儀を具へ、坐具を持せよ。二に尊宿未だ浴せざるに、先に浴することを得ざれ。三に要す須らく餅を持つべし。四に手を垂れて餅を把ることを得ざれ。五に當に手を拵て餅を把るべし。六に大已五夏の人と共に同じく浴することを得ざれ。七に初に衣を脱ぎ、袈裟を將て餘衣の下に在くことを得ざれ。八に浴室の内に入らば淨衣を脱ぎては、淨竿の

【二六】正宗分の中
 第十五に六時に於て語笑することを得ざる法を明す。
 【一八時】一日を六時に分つ。晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜なり。
 【二七】正宗分の中
 第十六に溫室に入るの法を明す。
 【溫室】浴室のことなり。

上うへに安やすけ。九くに觸しょく衣いを脱だつぎては、觸しょく竿さんの上うへに安やすけ。十じふに浴室よくしつの内うちに大小便だいせうべんをするすることを得えざれ。當まさに須すべらく預あらかじめ出しゆつ入にふして、然しかして後のちに左ひだりに入いるべし。十一じふいちに洗浴せんよくせんには、先まづ下しもより上うへへ洗あらふべし。十二じふにに當まさに濕しめりたる手しゆけんを用もちて兩手りやうてもて各おのく一いつ頭とうを把とつて、横よこに背せの上うへに安やすじて抽ちゆう牽けんすべし。垢膩くにく即すなはち落おちん。十三じふさんに當まさに須すべらく寂じやく黙もくなるべし、噱けん笑せうすることとを得えざれ。十四じふしに觸そくもて湯水たうすゐを汚けがすことを得えざれ。手て若もし不ふ淨じやうならば、當まさに餅水びやうすゐを用もちて之これを淨きよむべし。十五じふごに浴室よくしつの内うちに在ありて咳てい唾たすることを得えざれ。十六じふろくに浴よくし了らば、當まさに湯水たうすゐを用もちひて、坐ざ處ちよを洗せん滌たうして淨きよからしむべし。皂莢さうけつ狼藉らうじやくすることを得えざれ。

【一八】 正宗分の中
第十七に見て起きざるを得るの法を明す。

【一九】 正宗分の中
第十八に見て禮するを得ざるの法を明す。

【一八】 和尚闍梨くわしやうにせりを見ても起たたざるを得るの法ほふだい第十七じふしち 五條ごぎやう

一いちに病重びやうじゆうき時とき、二にに剃髮たははつの時とき、三さんに大食だいじきの時とき、四しに小食せうじきの時とき、五ごに已高座おのれかゝりに在あるの時とき、

【一九】 和尚闍梨くわしやうにせりを見ても禮らいするを得ざるの法ほふだい第十八じふはち 十一條じふいちぎやう

一いちに佛前ぶつぜんに在あり。二にに殿塔でんたふの前まへに在あり。三さんに衆集しゆじふの時とき、四しに病やまひの時とき、五ごに高座かうざにある時とき、六ろくに師しの臥ふする時とき、七しちに師しの鉢はつを洗あらひ、及および剃髮たははつの時とき、八はちに師しの正まさに洗足せんそくの時とき、九くに師しの正まさに楊枝やうじを嚼かみ、灌漱くわんじゆうする時とき、十じふに師しの聚落しゆらくに在あつて道行だうぎやうする時とき、十一じふいちに師し洗浴せんよくし、及および大小便だいせうべんするの時とき。

【三二】 正宗分の中
第十九に和尚闍梨
の病を看るの法を
明す。

【三三】 正宗分の中
第二十に上座を敬
重するの法を明す

【二〇】 和尚闍梨の病を看るの法第十九 十二條

一に孝養の心を懷き父母の想を作せ。二に臭穢有るを嫌ふことを得ざれ。三に常に湯藥を經營せよ。四に忌む所の食與へて食せしめざれ。五に飯食常に所を得しめよ。六に衣裳を洗濯せよ。七に數糞穢を除け。八に勤めて香を燒け、九に常に衣被の厚薄所を得しむべし。十に常に火燭を具へよ。十一に常に須らく作意細心にすべし。蠱燥なることを得ざれ。十二に觀音菩薩を念じて師の苦しむ所早く痊平することを願へ。

【三一】 上座を敬重するの法第二十 十六條

一に上座を見ては、須らく起つて迎接すべし。二に上座未だ坐せざるに、先に坐することを得ざれ。三に上座未だ食を受けざるに、應に先に食を受くべからず。四に上座未だ食せざるに、先づ食することを得ざれ。五に上座に於て争ひ勝つことを得ざれ。六に凡そ勝事有らんには、先づ上座に推れ。七に上座の行事是ならざれば、當に軟語をもて諫を設くべし。呵罵することを得ざれ。八に上座の呵罵を被らば、當に軟語をもて懺謝すべし。九に上座の邊に於て輒く譏諷すること有るを得ざれ。十に上座に於ては常に下心し謙敬せよ。十一に上座の嫌罵を被りて常に瞋ることを得ざれ。當に上座に順ふべし。違ふこと有るを得ざれ。十二に如請の事あらば、當に上座に順ふべし。命に違ふことを得ざれ。十三に行かんに須らく路を讓るべく、坐せんに須らく位を讓るべし。十四に凡そ苦事有らん

には、下座の前に行きて先づ作せ。十五に上座の前に在つて行くことを得され。十六に上座を見ては、當に問訊すべし、喧鬧して謾りに是非の事を説くことを得され。

【二三】 正宗分の中第二十一に掃地の法を明す。

【二三】 掃地の法第二十一 八條

一に灰土を飛び起さしむることを得され。二に地若し乾燥ならば、當に水を以て洒ぎ停めて少時して然して後乃ち掃へ。三に須らく風に順ふべし、逆き掃ふことを得され。四に須らく淨く掃ふべし。遺跡有らしむることを得され。五に人に背くことを得され。六に輕きを掃つて重きに就け。七に糞土を聚めて戸扉の後、及び餘處に安くことを得され。八に地を掃ひ了らば、帚帚を屏處に送れ。

【二三】 正宗分の中第二十二に水餅を用ゆるの法を明す

【二三】 水餅を用ふるの法第二十二 十條

一に常に餅を淨め水を滿しめよ。二に餅を人の行路に當ることを得され。三に水餅を用ひんに、當に須らく地に躪り衣裳を濕著することを得され。四に洗漱せん。口に餅の屑を含むことを得され。五に灰を用て餅を磨くことを得され。六に危険の處に安致することを得され。七に夏熱の時には頻りに須らく水を換ふべし。八に餅を安じて鉢を洗つて、床の上に致すことを得され。九に凡そ餅を把らんに、當に須らく手を拭ぐべし。手を垂るることを得され。十に餅に添へんに盆水の上に在くことを得され。觸水の淨水の中に滴らん

【二四】 正宗分の中
第二十二に聚落に
入るの法を明す。

ことを恐る。

【二四】 聚落に入るの法第二十三 三十條

一に事、如法なりとも、伴不如法ならば、應に往くべからず。二に事、不如法ならば、伴、如法なりとも、亦應に往くべからず。三に事件俱に不如法なるに、亦應に往くべからず。四に事件俱に如法にして、應に往くべし。五に切なる縁無くして、俗家に入ることを得ざれ。六に設ひ切なる縁有れども、亦自ら入ることを得ざれ。七に縁事無くして數應市に入ることを得ざれ。八に凡そ聚落に入らんには、要す水餅を將つて身に隨へ。九に若し聚落に入つて宿せんに當に三衣坐具水袋盃等を持すべし。十に行かんには須らく直にして視るべし。地を看ること七尺ばかりして蟲蟻を踏むこと勿れ。若し伴と共に往ることを得んには、當に須らく相去ること七尺なるべし。十一に當に威儀を具へて行くに急なることを得ざるべし。十二に遙に官人及び醉人を見ては、當に須らく之を避くべし。十三に行くに手を垂れて臂を掉ぐることを得ざれ。十四に道に在つて女人と共に行くことを得ざれ。十五に道に在つて尼師及び女人と共に共語することを得ざれ。十六に五辛を喫ひ、酒を飲む人と與に同じく行くことを得ざれ。十七に屠家及び酤酒家に入ることを得ざれ。請召をば除く。十八に男子無き家に入ることを得ざれ。請召をば除く。伴有らば則ち往け。十九に女色を銜賣する家に入ることを得ざれ。二十に俗家に入つて坐起せんには、四威儀を具

へ、當に俗人をして善を生ぜしむべし。二十一に常に須らく淨を護るべし。二十二に設ひ是れ慣舊の俗人の家なりとも、若し入らんと欲せば須らく門を打つて然して後方に入るべし。二十三に女人と共に語話することを得され。二十四に邪命に教化して、俗人を擊發し、其をして慧施せしむることを得され。二十五に自ら己が徳を讚めて、餘の比丘を毀ることを得され。二十六に喧笑することを得され。二十七に世間の閑事を説くことを得され。當に須らく法語を説いて、其善心を増すべし。二十八に當に俗人の意を護るべし。敬心の心を失はしむること勿れ。二十九に發言慈善にして羸獷なることを得され。三十に常に六根を攝めて放逸なることを得され。

【三五】 流通文を明す。
 【醍醐】 世間第一の美味と爲す。

【三五】 上來の教誡略して述すること斯の如し。餘の有ゆる行相具に戒本に在り。當に須らく慇懃に請問す。戒に隨つて相を辨ず。則ち甘露頂に灌ぎ醍醐心に入り、利潤涯無く師承本有りと。

上來斯の如きの微妙の教誡なるが故に傳傳師師相承して古今弘通せしむるの謂のみ。

教誡律儀終

聖德太子十七憲法

○推古天皇十二年の制定に係り、政教の主義を闡明し、國民道徳を扶持して、國民の歸趣を指示したるものなり。十七條中、第二條を根本と見るべし。

【一】和を貴ぶべきことを説く。

【二】三寶に歸敬すべきを説く。

【三】天子の詔を受けたる時は、必ず謹しむべきを説く。

【四】君臣上下悉く禮を重んずべきを説く。

【五】訴訟を公明に處辨すべきを説く。

(一)に曰はく、和を以て貴と爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨有り。亦達する者少し。是を以て或は君父に順ぜず、乍ちに隣里に違ふ。然るに、上和げば下も睦じ。事を論ずるに諧ふときは、則ち事の理自ら通ず。何の事か成ぜざらん。

(二)に曰はく、篤く三寶を敬へ。三寶は佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何なる人か是法を貴ばざらん。人尤も惡なるは鮮し、能く教ふれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん。

(三)に曰はく、詔を承けては必ず謹め。君は天に則り、臣は地に則る。天は覆ひ、地は載す。四時順行し、萬氣通ずることを得。地、天を覆はんと欲するときは、則ち壞るることを致すのみ。是を以て、君言へば臣承れ。上行へば下も效ふ。故に詔を承けては必ず慎め。謹まざれば自ら敗る。

(四)に曰はく、群卿百僚は、禮を以て本と爲す。其れ民を治むるの本は必ず禮に在り。上禮ぜざれば下齊はず。下禮無ければ以て必ず罪有り、是を以て君臣禮有るときは、位次亂れず。百姓禮有るときは、國家自ら治る。

(五)に曰はく、餐を絶ち欲を棄てて、明かに訴訟を辨へよ。其れ百姓の訟は一日千事

【六】善を隠さず
悪を正すべきを説
き、併せて善詐候
媚が亂の根源たる
を難す。

【七】賢人を選び
て官に任ずべきを
説く。

【八】官人は早出
晩退すべきを説く

【九】信の重んず
べきを説く。

あり。一日すら尙爾り。況んや累歳をや。訟を須ひ治する者は、利を得るを常と爲す。賄を見ては讒を聽す。便ち財有るもの。訟は、石を水に投げうつが如し。乏しき者の訴は水を石に投げうつに似たり。是を以て貧しき民は、則ち由る所を知らず。臣の道も亦焉に於て闕く。

六に曰はく、悪を懲しめ善を勸むとは、古の良典なりし是を以て、人の善を匿すこと無く、悪を見ては必ず匡せ。其れ詔詐の者は、則ち國家を覆へすの利器たり。人民を絶つる鋒劍たり。亦佞媚の者は、上に對しては則ち好んで下の過を説き、下に逢うては則ち上の失を誹謗す。其れ此の如きの人は、君に忠なること無く、民に仁なること無し。是れ大なる亂の本なり。

七に曰はく、人各任し掌ること有り。宜しく濫りがはしくせざるべし。其れ賢哲、官に任ずるときは頌音則ち起る。姦者官に在るときは、禍亂則ち繁し。世に生れながらにして知るもの少なり。克く念ひて聖と作る。事に大小と無く、人を得て必ず治る。時に急緩と無く、賢に遇うて自ら寛かなり。此に因りて國家永久にして社稷危きこと勿し。故に古の聖王は官の爲に以て人を求め、人の爲に官を求めざりき。

八に曰はく、群卿百僚は、早く朝して晏く退け。王事は監きこと無し。終日に盡き難し。是を以て遅く朝するときは急に速ばず、早く退くときは必ず事盡きず。

九に曰はく、信は是れ義の本なり。事ある毎に信有れ。其れ善惡の成敗は、要す信に在

【一〇】 忿順を戒む

り。群臣共に信ならば、何事か成ぜざらん。群臣信無きときは、萬事悉く敗る。

【一〇】に曰はく、忿を絶ち順を棄てて、人の違へることを怒らざれ。人皆心有り、心各執

ること有り。彼是なるときは則ち我非なり。我是なるときは則ち彼非なり。我必ずしも聖

に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、詎か能く定むべけん。相共

に賢愚なること環の端無きが如し。是を以て彼人は瞋ると雖も、還りて我失を恐れよ。

我獨り得たりと雖も、衆に従つて同じく擧へ。

【一一】に曰はく、明かに功過を察して賞罰必ず當てよ。日ごろは賞も功に在てせず、罰

も罪に在てせず。事を執る群卿、宜しく賞罰を明かにすべし。

【一二】に曰はく、國司、國造は百姓を斂すること勿れ。國に二の君靡く、民に兩の主無

し。率土の兆民は、君を以て主と爲す。任す所の管司は、皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公

と與に百姓を賦斂せん。

【一三】に曰はく、諸の官に任す者は、同じく職掌を知るべし。或は病し、或は使して、

事に闕くること有らん。然れども之を知ることを得ん。日ごろは和すること曾し識れるが

如くせよ。其れ與り聞くこと非ざるを以て、公務を妨ぐること勿れ。

【一四】に曰はく、群臣百僚は、嫉妬有ること無かれ。我既に人を嫉めば、人も亦我を嫉む。

嫉妬の患へ、其極を知らず。所以に智の己よりも勝れたるときは、則ち悦ばず。才の己

より優れたるときは、則ち嫉妬す。是を以て五百歳の後にして、乃今賢に遇ひ、千載にし

【二三】 官人の職掌を知るべきを説く

【二四】 嫉妬すべからざるを説く。

【五】私情を捨てて公事に瘁すべきを説く。

【六】民を役するには農閑の時を以てすべきを説く。

【七】大事は衆議すべく、小事は獨斷も可なりと説く

ても以て一の聖を待ち難し。其れ賢聖を得ずんば、何を以てか國を治めん。

十五に曰はく、私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨有

り。恨有れば必ず固ならず。固ならずれば、則ち私を以て公を妨ぐ。恨起るときは、

則ち制に違し法を害す。故に初の章に云はく、上下和き睦ると。其れ亦是情か。

十六に曰はく、民を使ふに時を以てすとは、古の良典なり。故に冬の月の間有るには、

以て民を使ふべし。春より秋に至るまでは、農桑の節なり。民を使ふべからず。其れ農せ

ずんば、何をか食はん。桑とらずんば何をか服せん。

十七に曰はく、大事をば獨り斷るべからず。必ず衆と與に宜しく論ふべし。小事は是

れ輕し。必ずしも衆とすべからず。大事を論ふに速んで、若し失有らんと疑ふ。故に

衆と與に相辨ふるときは、辭則ち利を得ん。

聖德太子十七憲法

終

三教指歸 卷上并序

弘法大師

【本書】一部三卷は其序分の示すが如く、弘法大師在俗の頃、出家を志し、李三教の深淺を比較對論して佛敎の最深なることを述べ、兼ねて己が出家の本懐を述べしものなり。著作年代等序分に詳し【三教】釋李孔の三教、儒敎のことなり。

【文の起り云云】以下序文なり。

【鑿卦】道德經のこと。李老聃の著なるが故に斯く云ふ。

【周詩】周人の詩後に孔子之を刪正す。

【楚賦】楚國の人屈原が宋玉、唐勒の倚を賦を以て稱せらるる故に楚賦と云ふ。

【志學】十五歳のこと。

【外氏】外戚なり。

文の起は必ず由あり。天朗なる時は則ち象を垂れ、人感する時は則ち筆を含む。是故に、鑿卦、聘篇、周詩、楚賦、中に動いて紙に書す。凡聖貫殊に、古今時異なりと云ふと雖も、人の憤を寫す、何ぞ志を言はざらん。

余、年志學にして、外氏、阿二千石文學の男に就いて伏膺し、鑽仰す。二九にして槐市に遊聽す。雪堂を猶怠るに、拉ぎ、繩錐の勤めざるに怒る。

爰に一の沙門あり、余に虚空藏聞持の法を呈す。其經に説かく、「若し人、法に依つて、此眞言一百萬遍を誦すれば、即ち一切の教法の文義を暗記することを得。」と。焉に於て、大聖の誠言を信じて飛儀を鑽燧に望み、阿國大瀧の嶽に攀躋り、土州室戸の崎に勤念す。

谷は響を惜まず、明星來影す。遂に乃ち、朝市の榮華、念念に之を厭ひ、巖藪の煙霞、日夕に之を飢ふ。輕肥流水を看ては則ち電幻の歎忽に起り、支離懸鶻を見ては則ち因果の哀み休せず。目に觸れて我を勸む。誰か能く風を係がん。爰に一多の親識あり、我を縛ふに五常の索を以てし、我を斷るに忠孝に乖くと云ふを以てす。

余思はく、物の精一ならず、飛沈性異なり。是故に、聖者は人を驅るに教網三種あり。

【阿】阿刀大足。弘法大師の伯父。

【二千石】朝散大夫。本朝從五位下の俸祿なり。

【文學房】大足は嘗て伊豫親王の學士となりし故に文學と稱し、大師母堂の兄の故に舅と云ふ。

【二九】十八才。大師此年に大學に入る。

【槐市】貨物經書を買賣する所、今は講學の所即ち大學を指す。

【雪螢】孫康の家貧にして資なく雪に映して書を読み車胤は又油を得ず

數十の螢を盛り書を照して讀みし故事。

【繩錘】孫散書を讀むに繩を懸け、此れに頸を繋げて睡を防ぎ蘇

奏も亦睡魔を錘を以つて股を刺して防ぐ故事を云ふ。

謂ゆる釋、李、孔なり。淺深隔ありと雖も並に皆聖說なり。若し一つの羅に入りなば、何ぞ忠孝に乖かん。復、一の表鋤あり、性則ち很戾にして、鷹犬酒色、晝夜に樂となし、博戲遊俠、以て常の事となす。其習性を顧るに陶染の致す所なり。彼此兩事、日ごとに予を起す。所以に、龜毛を請うて以て儒客となし、兎角を要めて主人と作し、虚亡士を邀つて道に入る旨を張り、假名兒を屈して出世の趣を示す。俱に楯戟を陳ねて並に姪公を箴しむ。勸して三卷となして、名けて三教指歸と曰ふ。唯、憤懣の逸氣を寫せり。誰か他家の披覽を望まん。

于ノ時延曆十六年臘月之一日也。

龜毛先生論 一首

龜毛先生と云ふものあり。天姿辨捷にして面容魁悟なり。九經三史、心藏に括囊し、三墳八索、意府に誦憶せり。三寸繩に發すれば、枯れたる樹榮え華さき。一言儘に陳ぶれば、曝せる骸反つて穴づく。蘇秦晏平も此に對へば舌を卷き、張儀郭象も遙に瞻て聲を飲む。偶、休暇の日に就いて、兎角公が館に投る。爰に則ち筵を肆べ席を設け、饌を薦め盞を飛す。三獻已に訖つて、膝を促つて談話す。

是に於て、兎角公が外甥に、姪牙公子と云ふ者有り。其人となり、狼心很戾にして、教誘に纏はれず。虎性暴惡にして、禮儀に羈がれず。博戲を業となし、鷹犬を事とす。遊俠

【虚空藏開持法】金一卷、萬無畏三藏の譯なり。

【肥流馬】富榮肥は肥馬、流水は乘車なり。

【支離懸鷄】貧賤のこと。支離は身軀の收拾なき貌、懸鷄は破衣の羽鳥の如きを云ふ。

【空を係ぐ】風は出家の志を指す。

【五常素】仁義五常に違背するとして出家を許さざるを素に譬ふ。

【表甥】外甥なり。

【陶染】陶は化、即ち惡習に依つて善性を化したること。

【龜毛】假設の人物。

【龜角】同上。

【虛亡上】同上。

【臘月】臘月即ち十二月なり。

【龜毛先生論】以下本文。本章に於ては先づ名を龜毛先生に借りて世間

にして、嘔げなく、奢慢餘あり。因果を信ぜず、罪福を諾はず。醉ふまで飲み、飽くまで喰つて、色を嗜み、寢に沈めり。親戚病あれども、曾て愁ふる心なく、疏人相對へども、敬接の志なし。父兄を狎侮り、耆宿を侈り凌ぐ。

時に、兎角公、龜毛先生に語つて曰はく、「蓋し聞く、王豹詭を好んじかば已に高唐を變じ、縦之書を翫んじかば亦巴蜀を化す。橘柚陽に徙んぬれば自然に枳となり、曲蓬麻に揉れば扶めざるに自ら直し。庶幾くば、先生、秘鍵を披き陳べて頑心を覺し示せ。隠鈴を扣き撞べて春意を教へ悟せ。」

先生の曰はく、「吾聞く、上智は教へられず、下愚は移らずと。古聖猶痛めり、今愚何ぞ易からん。」

兎角公が曰はく、「夫れ物に體し、情に緣るは、先賢の論ずる所、時に乗じて藻を搗ぶるは、古より貴ぶ所なり。故に韋昭が博を譏るの篇、元淑が刑を疾むの賦、並に縑素に載せて葉を経て鑿識たり。」

又有り。鈍き刀の骨を切る、必ず砥の助に由る。重き輅の軽く走るは、抑亦油の緣なり。智なき鐵木すら猶既に是の如し。情ある人類何ぞ仰止せざらん。

今、先生、霧意を蕩滌して、彼迷へる康を指し、障障を鍼灸して、此直き莊に歸せしめよ。豈盛ならざらんや。復快からざらんや。」

爰に龜毛先生、心累ひ、神煩んで忙然として長息す。圓覆を仰いで慨を含み、方戟に

の道德即ち儒教の教旨を述ぶ。

【九經】易、書、詩、周禮、儀禮、禮記、左傳、公羊傳、穀梁傳の九書を指す。

【三史】史記、漢書、東觀漢記の三書を指す。

【三墳】伏羲、神農、黃帝の書を云ふ。

【八索】八卦の説

【蘇秦】人名、六國の君に仕へて文武の道を説く。

【晏平】人名、齊の景公に仕へて言を勵して諫を説く。

【張儀】人名、秦の惠王に仕へて軍事を論説す。

【邦象】人名。老莊の道を説く。以上四人共に雄辯家なるが故に今は龜毛先生に比較す。

【蜂牙公子】假説の人物。

【玉豹云云】文選の一句。玉豹は人名、高唐とは齊の

俯して思を深す。嚼焉として良久しく、驕然として 哈つて曰はく、『三たび勸むること懇勸なり。來命を拒ぎなくす。今當に微管を傾け竭して愚流の行迹を標し、拙蟲を盡し濁して、擯心の梗概を陳ぶべし。』

但し、懸河の妙辯は舌端に短く乏しく、北海の湛智は心府に匱窳あり。筆は病を除くことを謝し、詞は將を殺すに非ず。彼趣を披かんと欲すれば、口の裏に悻悻たり。黙して罷めんと欲すれば、胸の中に憤憤たり。抑へ忍ぶことを得ず。聊擗揚を事とす。宜く一隅を示すべし。孰か三端を扣かん。

竊に惟れば、清濁割判して、最靈權輿す。並に二儀に稟けて同く五體を具へたり。是に於て、賢智は優華の如く、春癡は鄧幹の若し。是故に、善を仰ぐの類は、猶、鱗角よりも稀なり。惡に耽るの流は、既に、龍鱗よりも

操作は星の如く、意趣は面に疑たり。玉石、途殊んじて遙に九等に分ち、狂狷、區を別にして遠く卅里を隔てたり。各、好む所に趣けば、石を水に投ぐるが如く、並に、惡む所に趣けば、脂を水に沃るるに似たり。

寔に、鮑の塵の嗅き氣、猶、未だ變改せず、麻の敵の直き性も亦朋兆せざるに由れり。遂に、頭論と興にして以て性を陶き、晋の齒と將んじて、心を染む。表は虎皮の文の如く

内は錦袋の糞に同じ。視肉の譏具に一涯に招き、戴盆の誦永く。萬葉に傳へたり。豈辱

邑の名。

【縱之】 蜀の人名。

【文翁】 蜀の太守となり、蜀人の材力ある者十人を選んで京師に往かしめて學ばしむ。十人業成つて歸り、蜀の聲風を善化する。

【秘鍵】 秘藏の戸鑰、即ち教訓。

【隱鈴】 幽隱の音響、即ち教誡。

【先賢】 陸機（人名）を指す。文選に出づ。

【韋昭】 人名。字は弘嗣、太子の中庶士となる。時に蔡邕も亦東宮にあり、性博奕を好む。太子昭に命じて博奕論を著らしむ。

【元淑】 人名。趙氏。身長九尺、美顏、眉あり。才を恃んで倨傲なり。鄉黨の爲に擯せられ世を刺りて邪を緩むの賦を作る。

【雜素】 竹帛即ち書籍。

しからずや、亦哀しからずや。

余思はく、楚璞光を致す、必ず錯礪を須ち、蜀錦彩を搆ぶる事、尤も江に濯ぐに資れり。戴淵志を變じて、將軍の位に登り、周處心を改めて、忠孝の名を得たり。

然れば則ち、玉は琢磨に緣つて照車の器となり、人は切磋を待つて、穿犀の才を致す。教に従ふこと圓なるが如くなる時は、庸夫の子も三公に登つべし。諫に逆ふこと方なるに似る時は、則ち帝皇の裔も反つて匹庸となる。木は繩に従つて直しと云ふこと、已に昔の聽に聞けり。人諫を容れて聖なりと云ふこと、豈今、彼空しからんや。上天子に達し、下凡童に及ぶまで、未だ有らず。學ばずして能く覺り、教に乖いて、以て自ら通るものは。夏殷傾滅し、周漢興隆すること、並に是れ前覆の龜鏡、後誡の美風なり。戒めざるべけんや。慎まざるべけんや。宜しく、汝、蛭牙公子、耳を伶倫に借り、目を離朱に貸つて、恭んで吾誨を聞き、汝が迷へる衢を覽るべし。

夫れ汝が性たらく、上、二親を侮つて告めんの孝なく、下、萬民を陵いで隱恤の慈み莫し。或時は、戈獵を宗となして、山垌を跋涉し。或は釣器を業となして、溟海に權擢す。終日、譁浪して、已に州吁に過り、達夜、博奕して亦嗣宗に踰えたり。語言遠く離れて、寢食盡く忘れたり。

水鏡氷霜の行、盡く減え、鉛蜜貪婪の情、競ひ熾なり。毛類を咀嚼すること、既に師虎の如く、鱗族を喫厥すること、亦鯨鯢に過ぎたり。曾て愛子の想なし、豈已宥の顧みあ

【圓鏡】天なり。

【方鏡】地なり。

【微管、拙蠶】共に淺見小智に比す東方朔に所謂管を以て天を窺ひ、蠶を以て海を測ると云ふが如し。

【攝心】放心を收攝する事なり。

【湛智】深智なり。

【推揚】擧げて之を引きその趣を陳るの意なり。

【普潤】天地。

【具義】人倫。

【二儀】天地。

【優華】優曇鉢華。

【鄧幹】鄧林即ち其過多なるを示す。

【操履行業は各別異なること】

【九等】九品。

【狂哲】狂は癡狂哲は賢哲即ち利鈍

【世里を隔つ】世説新語の中の故事

【頭蠶、普商】頭の蠶は黒き故に頭

【普商は晋州より出づる棗(佳)にして

らんや。

酒を嗜んで銘酎すること、渴狸も恥を懐き、起り逐うて、食を望むこと、飢姪も儲に非ず。蜩の若く、蟬の若し。草葉の誠を顧みず。明も靡く、晦も靡し。誰か麻子の責を致さん。

恆に蓬頭の婢妾を見ては、已に登徒子が好色に過ぎたり。況、冶容の好婦に於て、寧ろ術婆伽が胸を焼くこと莫らんや。春馬夏犬の迷、已に胸臆に爛なり。老猿毒蛇の觀、何ぞ心意に起らん。

偈棲に向つて喧樂すること、恰も彌猴の抄に戯るるに似たり。學堂に臨んで欠伸すること、還つて寔兔の蔭に睡るが若し。首を懸け、股を刺すの勤、全く心の裏に闕け、觜を捉げ、蟹を捕ふるの行、専ら胸の中に蕪めり。數十の燭燿囊の中に聚めず、一百の青兎、常に杖の頭に懸けたり。

若し儻、寺に入つて佛を見ては罪咎を懺せずして、還つて邪心を作す。未だ知らず、一稱の因、遂に菩提となり、四鉢の果、終に聖位に登ると云ふことを。

庭を過ぎて誨を蒙れども己が悪を誅めずして、翻つて捉搦を恨む。豈諄諄たる意、猶子よりも切に、勤勤たる思、比兒よりも重きことを思はんや。

好んで人の短を談じて、十韻の銘を、顧ることなし。屢多言を事として、三絨の誠を鑒みず。明かに譚言の骨金を鑲すことを知れども、樞機の榮辱を發することを慎みず。

之を喰へば黃黄色となる。共に悪事に染習するを指す。【視肉、戴盆】共に無知に比す。【楚瑛】和氏の璧。【戴淵】人名。若き時は遊俠にして劫盜を事とす。後陸機に歸して志を變じ、終に征西將軍に至る。【周處】人名。少時俠氣にして郷黨之を患ふ。又水中に虎あり、山中に虎あり、百姓を狂す。世三横と云ふ。周處、山に入つて虎を殺し水に入つて蛟を斬り、自ら行迹を改めて終に忠臣孝子となる。【木は田に云六】尙書に用ぶ。【夏殷傾滅】夏の桀王、殷の紂王は共に謙争を拒み、暴悪を行つて滅ぶ。【周漢興衰】周の武王、漢の高祖共に善を行つて天下の主となる。

此の如きの品類、定に繁く徒あり。禹の筆も何ぞ書さん。隸が算も豈計らんや。如し復、飽くまで滋き味ひを食つて、徒らに百年を勞せんこと既に禽獸に同じ、燠に錦繡を衣て空しく四運を過さんこと、亦、犬豚の如し。

記に云へらく、「父母疾ある時は冠者構らず。行起に翔はず、琴瑟御せず、酒變するに至らず、笑むこと矧に至らず」と。此乃ち親を思ふこと切骨にして、取て容裝せざるなり。又云はく、「隣に喪ある時は、春づくに拍せず。里に殯ある時は、街に歌はず」と。是れ復、人と憂を共にして、親疎を別たざるなり。其れ疎遠に於てすらは是の如し。眠近に於ても彼が如し。

故に、親族不豫なる時は、醫を迎へ、藥を嘗むるの誠なければ則ち賢士哲夫、目を側めて汗を流し、閭巷に憂あれども、相愁へ問ひ慰むるの情なければ、則ち傍親有職、寒心して地に入る。形禽獸に殊なり、何ぞ木石に同じからん。體人類の如くにして、何ぞ鸚猩に似ん。

嚮使、姪牙公子、若し能く惡を翫ぶの心を移して、専ら孝德を行はば、則ち血を流し、瓮を出し、筭を抽んで、魚を躍しむるの感、孟丁が輩に軼んで、蒸蒸日上美を馳せん。忠義に移さは、則ち盤を折り、醜を壊り、肝を出し、心を割くの操、比弘が類に踰えて、謬謬たる譽を流さん。

經典を講論せば、東海、西河も舌を結いて辭謝せん。史籍を涉獵せば、南楚、西蜀も口

【伶倫】 人名。支那古代の能く音律を辯ずる人なり。

【前漢書】 人名。その明、箴末を百歩の外に察す。

【告面の孝】 曲禮には「夫一人ノ子タルモノハ出ルニハ必ズ告テ歸ルバ必ズ面ス。」と。

【謙讓】 戲言放蕩州時 衛の莊公寵妾の子なり。

【嗣宗】 阮籍の字

【話言】 善言なり

【水鏡水滸】 共に行迹の潔きに比す

【齋寢】 貪心の深きに譬ふ。

【衛婆迦】 胸を焼く

【此文智度論にあり】 此文智度論にあり。恍惚と云ふ捕魚師玉女を見て戀著し、終に自ら身を焼いて死す

【燿燿】 螢火のこと

【車胤】 螢火の事

【青臍】 錢のこと

【四鉢】 錢なり。

【三緘の誠】 周の太

【三緘の誠】 周の太

を閉ちて揖讓せん。書を好まば、則ち鸚鵡、虎臥の字、鐘張、王獸も毫を擲つて恥を懐かん。

射を翫ばば、則ち落鳥、哭猿の術、羿養、更蒲も絃を絶つて、數を含まん。戰陳に

就かば、張良、孫子も三略の術なきを慨まん。

稼穡に赴かば、陶朱、猗頓も九穀の貯なきを愁へん。

政に莅まば、則ち四知に跨えて、譽を馳せん。獄を斷らば、則ち三黜を超えて美

を飛さん。清慎ならば則ち孟母、孝威が流ならん。廉潔ならば、則ち伯夷、許由が侶な

らん。

若し乃し、神を醫道に赴け、心を工巧に馳せば、心を換へ、胃を洗ふの術、扁華に越え

て、以て奇を馳せん。蠅を斲り、鳶を飛すの妙、匠輪を凌いで異を翔さん。

若し是の如くなる時は、汪汪たる萬頃、彼叔度に同じく、森森たる千仞、此庾嵩に比せ

ん。觀る者は深淺を測らず、仰ぐものは高下を度らざらん。

猶、須らく、郷を擇んで家となし、土を簡んで屋となし、道を握つて床となし、徳を擧

げて褥となし、仁を席にして坐り、義を枕にして臥し、禮を被にして以て寝ね、信を衣に

して以て行くべし。

日に一口を慎み、時に一時を競ひ、孜孜として鑽仰し、切切として斟酌し、縹囊、黄卷

をは吐握にも棄てず、青簡、素鉛をは顛沛にも離たざるべし。

階の前に金人あり
參度其口を縫め其
背に多言を戒む
るの銘あり。(孔子
家語)

【禹の筆】禹は山
川の脈理、金玉の
類、殊に異域の土
地の里數を益をし
て記さしむ。之を
山海經と云ふ。

【血を流し】高柴
は魯人、父死して
涕泣し、血を流す
こと三年。未だ曾
て齒を見せず。(孝
子傳)

【瓮を出し】郭巨
家貧にして老母を
養ふ。妻一子を生
んで三歳なり。母
常に食を減じて之
を養ふ。臣終に貧
に窮して妻子を埋
めんとして穴を掘
るに黄金の一釜を
得たり。(同上)

【筭を抽んず】孟
仁の母、好んで筭
を食ふ。冬月にし
て之を求む、仁、
筭を執つて泣くに

是の如くなる時は、會宴の講義には、五鹿の角を撰き、諸生の論難には、五十の筵を重ねん。森森たる辯泉は蒼海とともにして以て沸涌し、彬彬たる筆峰は碧樹と共にして、以て榮を繼にせん。玲玲として玉の如くに振うて、孫馬を凌いで以て瑤を連ね、嘩嘩として金の如くに響いて、揚班に踏えて、葉を買かん。離騷を奏して時を過さず、鸚鵡を賦して點を加へず、詩賦の苑に翱翔し、藻製の野に休息せん。

然れば則ち、翹翹たる車乘、門外に軫を接へ、斐斐たる玉帛、囿の中に塵を連ねん。魏侯の輅、蓬門に軾せば、何ぞ更に角を扣かん。周王の輦、草廬に敗せば、何の暇ありてか。欒を弾ぜん。僂僂せずして以て台鼎に登り、自ら銜はずして以て槐棘に齒る。青紫を地芥に拾はんこと、瞬目にして致しつべし。印綬を股維に總べんこと、踵を旋らすに期しつべし。

爰に則ち、孝を移して主に竭さん。涕を流して僚に接らん。干將を佩びて以て鏘鏘たり。圭笏を挿んで濟濟たらん。紫震に進退し、丹墀に俯仰せん。入つて萬機を議らば、響四海に溢れ、出でて百姓を撫せば、毀衆舌に斷ぜん。名簡牘に策され、榮後裔に流はらん。高爵の緩する所、美諡の贈る所なり。豈不朽の盛事に非ずや。何ぞ亦更に加へん。

若し復、遊俗の前には、行樂に日あれども、反眞の後には、相娛むに入なし。天上の牽牛も、猶獨り住むことを歡き、水中の鴛鳥も必ず比宿することを歡ぶ。所以に、詩に七梅の歎あり、書に二女の嬪を貽せり。

【筭終に出づ(同)】

【魚を羅らす】王

祥は孝子なり、母天寒氷凍の頃生魚を求む、祥終に衣を解いて氷を割つて之を求む(晋書)

【肝を出す】狄人衛の懿公を殺し、盡く其肉を食つて獨り其肝を捨つと弘演使ひて還り哭し畢つて自ら其肝を出し懿公の肝を入ると

【心を割く】紂王淫亂なり。微子諫むるに聖人の心に七竅あり、今見るべしとて之を微す

【鐘張王歎】鍾繇張芝、王羲之、歐陽詢、四人皆能書落すなり。日輪を射

【哭猿】楚王の所に白猿あり、王自ら之を射れば、矢を搏つて戯れ、養由之を射んとせば、未だ發せざるに柱を擁して號泣す。四人

【碧養更蒲】四人

然れば則ち、人、展季にあらず、誰か伉儷なからん。世、子登に異なり、何ぞ隻枕すべ

き。必ず行雨の蛾眉は、彼姬氏を筮ひ、飄雪の蟬鬢は、此羌族を占ふべし。轟轟たる詩の

轂、隱隱として衢に溢ち、轟轟たる送の騎、霈艾として墀に側たん。従者、踵を踏んで袂

幕天を蔭し、徒御肩に駕して、汗霖地に灑がん。紫蓋空に飛んで雲の如くに翔り、綉服地

を拂つて、風の如くに歩まん。訝迎の禮を盡し、腰送の義を極めん。牢を同うし、尊を同

うし、香を合せ、體を合せん。珠簾を褰けて、鳳儀に對ひ、金床を拂つて、龍體に比ばん。

琴瑟を陵いて、以て韻を調べ、膠漆を超えて契を同うせん。借老を東籛に笑ひ、同穴を南

鶴に懼らん。一期の愁を消し、百年の樂を快くせん。

又時に九族を聚め、數三友を速かば則ち八珍の嘉肴を陳ねて、九醞の旨酒を酌み、羽觴

を畫して、以て數なく、滿白を擧げて環の如くならん。客は八音を調べて言歸りなんと云

ふの詩を詠じ、主は二轄を投じて、途露の滋きことを稱せん。日を重ねて歸らんことを忘

れ、夜を疊ねて舞蹈し、寰中の逸樂を縱にし、世上の賞賚を盡さん。寧ろ樂しからずや。

宜しく姪牙公子、早く愚執を改めて専ら余が誨を習ふべし。苟に此の如くなる時は、則

ち親に事つるの孝窳り、君に事つるの忠備り、友に接はるの美善く、後を榮かすの慶

滿ちなん。身を立つるの本、名を揚ぐるの要、蓋し斯の如きか。孔子曰はく、「耕す時は饒

其中に在り、學ぶ時は祿其中に在り」と。誠なるかな斯言、當に紳骨に鏤書すべきのみ。」

粵に姪牙公子、跪いて稱して曰はく、「唯唯敬んで命を承はんぬ。今より以後、心を專

共に射の名人。

【五鹿】 人名。

【孫馬】 孫綽と司馬相如。

【湯斑】 楊華と斑。

【青紫】 印を佩ぶる組。

【七梅の嘆】 梅實十の中の三落つる意。衰へ初むる事。

【東鱗】 東方の比目魚。

【南鯢】 南方の比翼の鳥。

【滿白】 酒の盃中に滿つる意。

【神骨に鏤書】 神骨は大帶。紳に書し骨に鏤めよの意。

【葛公】 葛仙公、客と對食して口中の飯を吐くに悉く化して飛蜂となる。

【左慈】 廬江の人。曹操之を召す。慈曰はく道を學ばんには常に清淨無爲なるべしと。操怒つて之を殺さんとす。慈、群羊の中に逃れて羊と化すといふ。

らにして奉習せん。」

是に於て、兎角公、席を下りて再拜して曰はく、「猗いかな、善いかな。雀變じて蛤となることを聞いて、猶疑怪を懷きき。今は蛭牙が鳩の心忽に化して鷹と作ることを見つ。葛公が白飯忽に黄蜂となり、左慈が形を改めて倏ち羊類となるも、豈先生の勝辯、狂を變じて聖となせるに如かんや。謂ゆる麩を乞うて酒を得、兎を打つて鷹を獲と云ふは斯謂か。詩を聞き、禮を聞くの客、何ぞ今日の勝誘、勝誨に過ぎん。只、蛭牙が誠たるのみに非ず。余も亦、身を終るまでの口實に充てん。」

三教指歸卷上 終

三教指歸卷上

三教指歸 卷中

虛亡隱士論

【虛亡隱士論】此一文は虚亡隱士が龜毛先生の世間教を説くを排して老莊の道教を説くなり。

【董威】董威輩人名なり。

【睚眦】目を張る貌なり。

【騶駒】一名は突鼠、鼠中の微なるものなり。

【有靦】慙る貌。

【弘陽】太陽のこと。

【太上】上古の名號なき君を指す。

虚亡隱士と云ふものあり。先より座の側に在り。愚を詐り、智を淪し、光を和げ、狂をしめす。蓬亂の髪は登徒が妻に踰え、濫縷の袍は董威の鞞に超えたり。傲然として箕踞し、莞爾として微笑す。唇を陳べ、頬を緩め、睚眦として告げて曰はく、「吁吁異なるかな。卿が藥を投ずること、前には千金の裘を視て、猶し龍虎に對へるが如し。今は寸歩の蛇を觀て、騶駒を瞻るが若し。如何が己身の膏肓を療せずして、輟爾他人の脚脚を發露する。卿が病を療するが如きは、治せざらんにかかず。」
粵に、龜毛公、愕然として顧眄し、有靦として進んで曰はく、「先生もし異聞あらば、請ふ、爲に之を啓沃せよ。僕、兎が命に忍びずして帥爾に軌く、之を談す。伏して乞ふ。先生、春雷を秘することなかれ。」
隱士曰はく、「夫れ赫赫たる弘陽輝光、燭に朗かなれども盲瞽の流は其曜を見ず、礧礧たる霹靂震響猛く厲しけれども、然も聾耳の族は彼響を信ぜず。
矧んや太上の秘録、言凡耳に逐なり。天尊の隱術、如何が妄に説かん。血を鬩つて盟を遺すとも、太だ聞くことを得難し。骨に鏤めて信を示すとも、何ぞ傳へ易からん。」

【櫃】書笈なり。

【泉の底に秘す】

三泉の下に沈むるなり。即ち世に傳ふべからざるを云ふ。

【漢帝】漢武帝。

【王母】西王母。

【仙人】仙人。費

長房と云ふ。仙を壺公に得。

【壺公】姓字を知

居するが故に壺公と云ふ。仙人。

【閩原】字は根矩

北海の人なり。遊學して孫崧が所に到る。故に千里の尋と云ふ。

【彭祖】姓は籛名

は經此人壽八百後昇仙して壽三光なり

【三曜】蓬萊、方

丈、瀛洲

【五岳】渤海の東

に五山あり、其上の臺觀皆金玉、故に金闕と言ふ。

所以は何となれば、短き縋の水を汲む、疑を井の涸たるに懐き、小さき指の潮を測る猶底の極まれるかと謂へり。苟くも其人にあらざれば、譚を喉のうちに閉づ、實に其器ものにあらざれば櫃を泉の底に秘す。然る後に、機を見て始めて開き、人を擇んで乃ち傳ふ。

是に於て、龜毛公等、並に相語つて曰はく、『昔、漢帝の仙を冀し、惘に王母に請ひ、長房が術を得たる亦壺公に學びき。吾等邂逅する、曾て邴原が千里の尋ねなうして、長く彭祖が萬祀の壽あらんこと、豈幸に非ずや。』三人並に進んで再拜稽顙して隠士に請うて曰はく、『重ねて望むらくは誨を垂れよ。』

隠士が曰はく、『壇を築いて誓を約せば、且く、一二を示さんのみ。』爰に則ち命を承はつて言の如くす。壇に昇つて誓を結び、坎に臨んで盟を請ふ。契事既に畢つて、増指誨を仰ぐ。

隠が曰はく、『然り。汝等、恭んで聽け。今當に、子に授くるに不死の神術を以てし、汝に説くに長生の奇密を以てすべし。汝をして蜉蝣の短齡をもつて、龜鶴と相競ひ、跛驢の篤足を以て應龍と齊しく、駭くして三曜に並んで以て終始し、八仙と共にして相對し、朝には三嶼の銀臺に遊んで、終日に優遊し、暮には五岳の金闕を経て達夜逍遙することを得しめん。』

龜毛等、對へて曰はく、『唯唯聞かんと欲す。』と。

【大鈞、洪鐘】 共に天地。

【松喬】 赤松子と王子喬、共に古の仙人。

【項彙、顔淵】 共に短壽の人なり。

【桑太】 前漢孝武帝の臣なり。

【兩帝】 秦皇、漢武の兩帝なり。

【道中】 道術を修する者の中意。

隠が曰はく、「夫れ大鈞陶甄して彼此の異なく、洪鐘鍛鑄して憎愛の執を離る。獨り彼松喬に厚うして此項顔を薄うするにあらず。但、善く彼性を保つと持つこと能はざるとのみなり。養性の方久存の術、厥途極めて多し。具に述ぶること能はず。聊が大綱を擡つて其少分を示さん。

又昔、秦の始皇、漢の武帝、内心には仙を願へども外事は俗に同じ。鐘鼓の鑿鑿として已に耳聰を奪ひ、錦繡燦爛として忽に目明を損す。紅臉朱唇、暫くも離るること能はず。鮮鱗生毛、片食も退けず。屍を臥せて觀となし血を流して川となす。是の如きの事類、以て陳説し難し。流すに涓滴を以てし、溲すに尾閭を以てす。心行相違して徒に費勞を深うす。

是れ猶方なる底に圓なる蓋を覆うて其能く合はんことを願ひ、功力を寒氷に極めて、其飛焰を求めんがごとし。何ぞ其れ愚なるや。

然れども猥俗の謂へらく、帝皇の至つて貴き猶亦得ず。而るを況んや凡人をやと。此を以て虚誕となし、此を以て妖狂と號す。何ぞ其迷へるや。

樂太兩帝の徒、此乃ち道中の糟糠、仙を好むの瓦礫なり、深く惡むべきこと甚だし。

夫是の如くなるが故に、傳ふるに必ず人を擇ぶ。尊卑を以てするに非ず。宜しく汝等心を専らにし、受け學んで後の毀を致すことなかるべきのみ、能く學ぶの人は蓋し此に異なるか。

【豕蜮】 豕は蟲の足なきもの、蜮は蟻子の未だ翅なきもの。

【醴醪】 酒なり。
【紀】 壽命なり。

【天門】 鼻孔。
【醴泉】 唾。
【草芝】 獨搖芝と

手足の及ぶ所は、豕蜮をも傷らす、身肉の物は、精唾をも寫さず。身に臭塵を離れ、心に貪慾を絶つ。日に遠く視ることを止め、耳に久しく聽くことなし。口に靈語を息め、舌に滋き味を斷つ。克く孝あり、克く信あつて、且は仁あり且は慈あり。千金を獻んで以て薑芥の如く、萬乘に臨んで脱躡の如くし、纖腰を視ては鬼魅の如く、爵祿を見ること腐鼠の如し。怕乎として無爲なり。澹然として事を減す。然して後に始めて學びなば掌を指すに異ならず。

但し、俗人の尤も翫好するところは、則ち道侶の甚だ禁忌するところならくのみ。若し能く此を離るる時は、仙を得ること難きにあらず。五穀は腑を腐すの毒、五辛は目を損するの燒、醴醪は腸を斷つ劍、豚魚は壽を縮むるの戟、蟬鬢蛾眉は命を伐るの斧、歌舞踊躍は紀を奪ふの鉞、大きに笑ひ、大きに喜び、極めて忿り、極めて哀しむ、此の如きの類、各の損する所多し。一身の中に既に此の如きの敵多し。若し此驪を絶たざれば、長生久存、未だ聞くとところあらず。此を離るること、俗に於て尤も難し、此を絶つ時は仙を得ること尤も易し。

必ず須らく、先づ其要を察して乃ち服餌すべきのみ。白朮、黃精、松脂、穀實の類は、以て丙の癘を除き、蓬の矢、葦の戟、神符、哭禁の族は以て外の難を防ぐ。呼吸時を俟ち、緩急節に隨ふ。天門を扣いて以て醴泉を飲み、地府を掘つて以て玉石を服す。草芝、尖芝は以て朝の饑を慰め、伏苓、威僖は以て夕の慙に充つ。

云ふ。其莖手指の如く、其根に大槐あり、之を服せば千歳を得といふ。【六芒】萬歳の蟾蜍、頭上に角あり、額下に丹書の八字あり。千歳の蝙蝠色白くして雪の如し。此二物を陰乾にして服せば人壽四萬歳なりと。

【伏苓威儀】此二物同體異名なり。松脂地に淪んで伏苓となり、又變じて威儀となる。此伏苓を服すること三年すれば鬼神を役使し、四年の後玉女來り待すと。

【龍駿】龍と駿馬蒼蒼、天なり。【倒景】下地の高き所。

【八極】四方四角の極。

【九空】八方及中火。

【赤鳥城】赤鳥は日の精、今は日天子の住所。

【姮娥】羿の妻。

則ち日中に影を淪し、夜半に能く書す。地下を徹し瞻、水上に能く歩む。鬼神を隸となし、龍驤を騎となす。刀を呑み、火を呑み、風を起し、雲を起す、此の如きの神術、何すれぞ成らざらん。何の願か満たざらん。

又有り、白金、黄金は乾坤の至精、神丹、練丹は藥中の靈物なり。服餌するに方あり、合造するに術あり。

一家成すことを得つれば、門を合つて空を凌ぐ。一銖纒に服すれば、白日に漢に昇る。其餘の符を呑み、氣を餌ふの術、地を縮め體を變ずるの奇、推すに而も廣し、勝げて計ふべからず。

若し彼道に叶ひ、若し其術を得つれば、即ち形を改め、髮を改め、命を延べ、壽を延ぶ、死籍數削り、生葉久しく長し。

上は則ち、蒼蒼に跨つて翱翔し、下は則ち倒景を躡んで復佯す。心馬に鞭つて八極に馳せ、意車に油さして以て九空に戯る。赤鳥の城に放曠し、紫微の殿に優遊す。織女を機上に視、姮娥を月中に要む。帝軒を訪つて伴となし、王喬を覓めて徒となす。莊騶の牀を察、准犬の迹を見る。列馬の厩を窮め、牽牛の泊を盡す。心に任せて偃臥し、思に逐つて昇降す。淡泊として慾なく、寂寞として聲なし。天地とともに以て長く存し、日月と

將んじて、久しく樂む。何ぞ其優なるや。如何ぞ其れ曠なるや。東父西母何ぞ怪しむに足らんや。

【帝軒】 黄帝、字軒轅仙人となる

【王喬】 王子喬、仙人となる

【莊鷄の狀】 莊子に説く鷄の息ふ所なり

【列馬】

晋書に、東壁の北の十星を天厩と云ふとあり

【東父西母】 夫婦の仙人

【攀藥】 古の醜き人
【子都】 古の美人

是蓋し吾聞き學ぶ所の靈寶の密術か。

世俗を顧み惟みれば、貪慾に纏縛せられて心意を煎迫し、愛鬼に羈縻せられて、精神を焦灼す。朝夕の食を營んで夏冬の衣に勞す。浮雲の富を願つて如泡の財を聚め不分の福を遺めて若電の身を養ひ、微榮朝に臻れば天上の樂を笑ひ、小憂、夕に迫れば、塗炭に没するが如し。娛曲未だ終らざるに、悲引忽に逼る。今は卿相となれども、明は臣僕となる。始は鼠上の猫のごとく、終は鷹下の雀となる。草上の露を恃んで朝日の至るを忘れ、枝端の葉を憑んで風霜の至るを忘る。吝、痛むべきかな。何ぞ鶴馱に異ならん。曷ぞ言ふに足らんや。

其吾師の教と汝が説くところの言と、汝等が楽しむ所と吾類の好むところと、誰か其優劣、孰れかそれ勝負なる。

是に於て、龜毛公、蛭牙公子、兎角公等、並に啓いて稱して曰はく、「我等幸に好會に遇つて適讜言を承はる。方に知んぬ。鮑の壘の至つて臭き、方壺の極めて香しき、攀藥の醜き、子都の好き、金石隔あり、薰蕕比ぶことなし。今より後、心を専にして神を練りて永く斯文を味ははん。

三教指歸卷中 終

三教指歸 卷下

【假名乞兒論】此一文、上に説ける世間教（道徳論）道

教（仙道）より進んで佛教の深奥幽妙の教なるを説き、大師自ら出家に志すの本旨を説き、故に大師本書の製作、本旨は此所に存すと云ふべし。

【五綴の本鉢】四分戒本に曰はく、「若し比丘鉢五綴に減じて漏らざるを求む。更に新鉢の故にせば、尼薩者波逸提」と。

【百八の櫃子】念珠。

【道神】黄帝の子遠遊を好んで道路に死す故に祀つて道神とす。

【茅座】薦席。

【穢負】擔負の意。

【軍持】瓶なり。即ち水瓶のこと。

假名乞兒論

假名乞兒と云ふものあり。何れの人と云ふことを詳にせず。蓬茨の衡に生れて、繩櫃の月に長ぜり。高く器塵を屏けて、道を仰いで勸苦す。

黍髮剃頂して頭は銅の盒に似たり。粉艶都て失せ、面は瓦の埒かと疑ふ。容色の蠟頼と體形の蕞爾と長き脚骨豎つて池邊の驚の如く、縮まれる頸は筋連つて泥中の龜に似たり。

五綴の木鉢は牛囊に比べ、もつて常に左の脇に繫けたり。百八の櫃子は馬絆に方んで、亦右の手に係けたり。道神の屨を著いて牛皮の履を棄つ。馱馬の索を帯にして犀角の帶を擲

つ。茅座常に提げたれば、市の邊の乞人も頬を押し俯して羞づ。繩牀、穢負しつれば、獄の傍の盜士も膝を抱いて、仰いで歎く。口の破れたる軍持は油を沽るの肩に異ならず。

環の落ちたる錫杖は還つて薪を賣るの手に同じ。折頸と高匡と領頤と隅目と、囁める口、鬚無くして孔雀の貝に似たり。缺けたる唇、齒疏にして狡兔の唇の若し。偶市に入る時は、瓦礫雨の如くに集り、若し津を過る時は馬屎霧の如くに來る。阿毗私度は常に膠漆の執友たり。光明の婆塞は時に篤信の檀主たり。

或時は金巖に登つて雪に遇つて坎墮たり。或時は石峯に跨つて以て糧を絶つて斃刺たり。

【折嶺】鼻の蕞隴なきなり。
【高匡】深き瞳子なり。

【劍頤】口の前に向つて引くなり。
【金巖】伊豫の國にあり。

【石峯】伊豫の石鏡の嶽なり。
【雲童の娘】古の住吉の浦に住む漁婦のこと。

【潘倍の尼】潘倍は地名、尼は女、孔子の孫、子思。

【縞幌】縞は白、幌は幔即ち白雲。
【僊帝】僊人氏。何曾。陳國陽夏の人なり。

【子房】説苑に子房人をして狐の白裘を子思に遣らしむ子思之を受けず云云と。

【三樂の叟】榮辱期のことなり。

【四皓の老】前漢の閻公、綺里季、夏黃公、角里先生の四人あり。

或時は雲童の娘を丐て心を懈つて思ひを服け、或時は潘倍の尼を觀て意を策して厭ひ離る。

霜を拂つて蔬を食して遙に佞が行に同じ、雪を拂つて眩を枕とす。還つて孔の誠に等しうし、青幕天に張つて房屋を勞せず、縞幌嶽に懸けて幃帳を營まず。夏は則ち意を緩うし、襟を披いて太王の雄風に對ひ、冬は則ち頸を縮め、袂を覆うて燧帝の猛火を守る、

橡飯茶菜一句給がす。袍葛縹二つの肩を蔽はず、一枝に逍遙し、半粒に自得す。何曾が滋き味を願はず。誰が子房の温裘を愛せん。三樂の叟も此に比すれば愧づることあり。四皓の老も此に對へば儔にあらず。

形は笑ふべきに似たれども、志は已に奪はれず。或人告げて曰はく、「我師に聞けり。天地の七靈、寔に人其れ首たり。惟れ人の勝れたる行は、惟れ孝、惟れ忠なり。餘の行萬差なれども、此二つは其要なり。この故に以て遺體を毀はず、危きを見て命を授く、名を擧げ先を顯す。一をも廢すれば不可なり。」

又一生の娛樂惟れ富、惟れ貴なり。百年の蘭友誰か妻孥に比せん。季が萬鐘を悲む、唯逝観を感じ、參が九似に登る當に主に仕ふるに由れり。

今子、親あり君あり、何すれぞ養はざる仕へざる、徒に乞丐の中に淪んで、空しく逃

役の輩に雜はる。辱行は先人を忝しめ、陋名を後葉に遺す。惟れ寔に大辟の加るところ、

君子の耻づる所なり。然れども汝之を行ふ。親戚汝に代つて地に入り、疏人汝を見て目を

【季】子路(人名)。

【萬鍾】量(名)。

【參】曾子(名)。

【周文】周の文王

父の王季に事へて

孝なり。

【董永】父死する

に及び身を賣つて

錢を得て、葬送す

【伯嚭】陳の人、

母の病に際して三

十年懺悔を解かず、

十旬寝ねず。

【伊周箕比】伊は

伊尹、周は周公旦

箕は箕子、比は比

干。共に君に仕へ

て忠。

【五内】五臟なり

【五岳】泰(東)霍

(南)華(西)恆(北)

嵩(中)の五高山。

【西瀆】(南)東)河

の四大河。

【南垓】詩經小雅

篇名。

掩ふ。宜しく早く心を改めて速かに忠孝に就くべし。」

乞兒、慚然として問うて曰はく、「何をか忠孝と云ふや。」

答へて曰はく、「閨に在るの口は面を怙はしめ、顔を倣ひ、心に先だち、力を竭して、出

入に告面し、夏冬に温清して定省色養す。之を謂つて孝となす。虞舜、周文、之を行つて

帝位に登り、董永、伯嚭、之を守つて美名を流ふ。

占筮の年、孝を移して命を盡し、顔を犯して諫争す。上、天文に達し、下地理を察す。

古を稽へて今に擬し、遠きを柔じ、近きを能くす。四海に紀綱して、一人を匡弼す。榮

え後裔に及び、譽、來葉に流る。是の如きを忠となす。伊周箕比蓋し其人か。

假名答へて曰はく、「親を安んじ主を匡す。是の如きの類を忠となし、孝となすと云ふこ

と、伏して命の旨を承はんぬ。是れ實に余不肖なりと雖も、然れども猶頗る禽獸に異り、

一念離れず、五内爛裂す。

夫、父母覆育して、提挈殷勤なり。其功を顧みれば、高きこと五岳に並び、其恩を思ふ

に深きこと四瀆に過ぎたり。骨に鏤め、肌に銘す。誰か敢て遺忘せん。報せんと欲するに

極りなし、反さんと欲するに尤も厚し。南垓を詠じて耻を懷き、蓼莪を誦つて以て愁を含

む。彼林鳥を見ては終日に雉灼し、此泉瀨を思つては達夜爛肝す。

常に歎くらくは楚河未だ決せざるに周鮒肆に就き、吳劍未だ許さざるに徐子墓に臨ま

んことを。老親幡幡として冥壤に臨み近づけり。此れ余が頭頭たる喟を反すに由なし。居

【蓼莪】詩經に載する詩なり。
【楚河】莊子の故事。
【吳劍】季札の故事。
【居諸】日月のこと。
【器】笙の如き樂器。齊の宣王之を好むと云ふ。

諸矢の如くにして彼短壽に迫る。家産澆漓して墻屋傾くに向はんとす。二兄重ねて逝いて數行沈瀾たり。九族俱に置しく一心潺湲たり。慷慨の思ひを起して日を以て月に續ぎ、悽愴の痛みを興して且より夕に達る。嗟呼、悲しいかな。

進んで仕へんと欲すれば已に竿を好むの主なし。退いて默せんも亦祿を持つの親あり。進退の惟れ谷れることを歎き、起居の狼狽たるに纏る。則ち頌を作つて懷を寫して曰はく、

力を肆べて畝に就かんとすれば
角を叩いて將に仕へんとすれば

智無うして官に在れば
貪ること有つて素餐すれば

濫竿の姦行は
雅頌美風は

彼孔の縱聖なりし
此れ余が太だ頑なる

進まんと欲するに才無く
進退兩つの間

是に於て頌の詞を取り、畢つて沈吟すること良久うして乃ち書を作つて曰はく、

曾て筋力なし

既に箝が識無し

譏を空職に致す

誠を戸食に遣す

已に尤も直きに非ず

但周の國にのみ聞く

栖遑として默さず

當に何れの則にか従ふべき

將に退かんとするに逼有り

何ぞ歎息すること夥き

【泰伯】太伯。周の太王の子。
【薩埵云云】最勝王經の説。

【羅卜】目連尊者の前身の名。母の墮獄を救ひしこと孟蘭盆經に出づ。

【于門高し】于公縣の獄吏となり、之を裁くに公平なり。後、于公、此陰徳に因りて後裔榮ゆるを想ひ其門閭を高大にす。
【六府】小腸、大腸、膽、胃、膀胱、三焦を云ふ。
【八萬の衆】人界中の蟲なり。

侯開く、小孝は力を用ひ、大孝は匱からず。是故に泰伯は髮を剃つて永く夷俗に入り、薩埵は衣を脱いで長く虎の食となる。父母地に倒れるの痛を致し、親戚天に呼ぶの數あり。此に因つて視れば二親の遺體を毀ひ九族の念傷を致す。復此二子に過ぎんや。當に卿が苦ぐるが如きは並に不孝を犯せり。然りと雖も、泰伯は至徳の號を得、薩埵は大覺の尊と稱せらる。

然れば則ち、苟くも其道に合はば何くんか近局に拘はらん。羅卜が母の苦を抜き、那舍が父の憂を濟ふ。寧ろ大孝に非ずや。亦善友に非ずや。

余、愚陋なりと雖も、雅訓を斟酌し、遺風を鑽仰す。毎に國家の爲に先づ冥福を廻らす。二親一切に悉く陰功を讓る。此惠福を總べて忠と爲し孝と爲す。

然れども卿、但筋力の盡すべく身體の屈すべきことを識つて未だ于門の高かるべく嚴慕の掃ふべきことを視ず。何ぞ其劣なるや。然れども此書未だ心に委くせず、後に當に之を顯し陳ぶべし。

固く是の如くなるを執ること父兄にも拘らず。親戚にも近づかず、萍の如くに諸州に遊び、蓬の如くに異境に轉ず。爰に雲漢星闌けて六府の藏閨焉として已に空し。石窟に儲盡きて八萬の衆怒然として忽に窮す。甕の内に塵瀾り甕の中に苦充てり。是に於て思量すらく、内には食に依つて住することを顯し、外には學をすることの未なることを言ふ。如かず、饑人を襁褓し早く豐郷に託かんに。

【四生】 胎卵濕化の四生。

【十八の亭】 六根六境、六識の十界を指す。

【五陰】 色受想行識。

【四梵】 四大。

即ち松林より發して聚落の京に趣き、知足の意に乗じて鉢を捧げて直に征く。從童都て無うして子として佛經を持す。兎角が舎に到り、門の楹に倚りて立てり。

是に於て龜毛と隱士とが論諍の戰の庭に逢ひぬ。各思はく、電の如くなる體を扶

けて四生の囿に宿り、夢に似たるの意を擧げて十八の亭に入る。幻城を五陰の空しき國に

築き、泡軍を四蛇の假の郷に興す。蛛蝥の網を甲にし雌螟の騎に鐵ひ虱皮を鼓として陳を

驚かし、蚊の羽を旗として以て旅を標す。我見の戟を杖いて寡聞の劍を帯び、霜の如く

なる臂を擡げて魍魎の原に戰ふ。利欲の談を競うて寰中の辯を争ふ。身に耳を傾けて漸く

聆き目を撃いて佇立す。各我は是なりと謂ひ並に彼は非なりと云へり。

時に自ら思へらく、溜水の微掃燭火の小光だも、猶既に是の如し。況んや吾は法王の手

なり。盃んぞ虎豹の鏡を擢き、蠅蜋の斧を拉がさらん。遂に適ち智慧の刀を砥いで辯

才の泉を涌し、忍辱の介を被、慈悲の驥に駕して、疾にも非ず徐きにも非ず、龜毛が陳に

入り、驚かず憚らず隱士が旅に對ふ。焉に壘を出でて盤桓し、壁に入つて跋扈す。茲に

因つて先んずるに孔璋が檄を以てし、示すに魯陽が書を以てす。

將帥悚懼れて軍士氣を失ひ、面縛降服して双に血るに勞することなし。但し野心改め難

く、情に猶豫を懷けり。

即ち涙を流し、首を摩でて悲を含んで噓して曰はく、「夫歸を濫觴に擧ぐるに曾て千里の

鯁を見るに由なし。翮を籬籬に翹ものは何ぞ能く九萬の鵬有ることを知らん。是故に海上

【陽谷】日本の事
 【玉藻島】讚岐國
 【椽樟】恐らくは
 豫章の誤りならん
 御ち楠樹なり。讚
 岐國多度郡屏風浦
 に大楠樹あり、故
 に豫章蔽日浦と云
 ふ。
 【三八の春秋】二
 十四歳。

【八十の權】釋尊
 入涅槃の相
 【三十の化】釋尊
 出家成道の歳數を
 示す。
 【補處】佛處を補
 助すること。
 【儲君】太子なり
 今は彌勒尊に比す
 【曼殊】文殊師利
 菩薩なり。
 【慈尊】彌勒菩薩
 なり。

三教指歸卷下

如くなれども亦弟に非ず。是れ汝と吾と無始より來、更生れ、代死して轉變無常なり。何ぞ決定の州縣親等あらん。然れども頃日の間、刹那幻の如くに南閻浮提の陽谷、輪王所化の下、玉藻歸るところの島、椽樟日を蔽すの浦に住す。未だ思ふ所に就かずして忽に三八の春秋を經たり。

隱士、大いに驚いて曰はく、「何をか地獄天堂と謂ふや。何すれぞ煩しく、衆物を持てるや。」

假名が曰はく、「作業不善なれば牛頭馬頭自然に涌出して報ずるに辛苦を以てす。用心苟に善なれば金闍銀闍倏忽として翔り聚り、授くるに甘露を以てす。心を改むること已に難きのみ。何ぞ決定の天獄有らんや。余も前には汝が如く迷ひ疑ひき。但し頃日の間、適良師の教に遇つて、既に前生の醉を醒せり。

夫我師釋尊本願尤も深うして八十の權を現し、慈悲極り難うして三十の化を示す。時に有縁の衆は龍神を簡ばす。甘露の雨に沐して枯萎める枝を榮し、結果の期を授く。無福の徒は貴賤を論ぜず。辛臭を知らず。常に蓼溷に沈んで已に醍醐を忘れたり。

所以に慈悲の聖帝終を示せしの日、丁寧に補處の儲君舊德曼殊等に顧命す。印璽を慈尊に授け、撫民を攝臣に教ふ。是を以て大臣の文殊、迦葉等芳檄を諸州に斑ち卽位を衆度に告ぐ。

是故に、余忽に榜旨を承つて馬に秣かひ車に脂さして裝束して道を取る。陰陽を論ぜ

【都史の京】 彌勒菩薩所居の淨土。

【子身】 獨身なり

【妙高】 須彌山。

【漢】 銀河。

【數目】 俱舍論には劫末には七日並び出づと云ふ。

【方輿】 地の意。

【圓蓋】 天の意。

【非想云云】 悲想天の壽命八萬劫なれども如來の常壽に比せば電光の如しとの意。

【水兔】 水中の月

【野馬】 陽炎。

【二六の縁】 十二因縁。

【兩四の苦】 八苦

【機散】 機關離散

【緣離】 因縁離散

【尺波】 微波。

【雲閣】 雲上なり

【具齒】 白齒なり

す、都史の京に向ふ。經途多艱にして人烟尙に絶えたり。康衢甚だ繁しく徑路未だ詳ならず。一二の從者或は泥中に沈溺して拔出の期末だあらず。或は馬を騁せ車を奔せて先つて已に發進せり。茲に因つて微物を棄てず、子身負擔す。糧絶え路迷つて辱しく門の側に進んで行路の資を乞ふ。

爰に則ち懷を述べ心を策して無常の賦を賦し、受報の詞を題す。鈴鈴たる金錫を振ひ咄咄たる玉の聲を馳せて龜毛等に唱へて曰はく、『熟岷岷たる妙高艱物として漢を下せども劫火に燒かれて以て灰滅し、浩浩たる溟瀚、混養として天に洳れども、數日に曝れて消滅す。盤礴たる方輿も漂蕩として摧け裂けぬ。穹隆たる圓蓋も杓燻として碎け折れぬ。然れば則ち寂寥たる非想も已に電の激するよりも短く、放曠たる神仙も忽に雷の擊つに同じ。況んや吾等體を募くること金剛に非ず、形を招けること瓦礫に等し。五蘊虚妄にして水兔の僞借に均し。四大廻り難うして野馬の倏迹に過ぎたり。二六の縁、意猿を誘策し、兩四の苦常に心源を惱す。氤氳たる三毒の爛は晝夜に恆に燻え、鬱蒼たる百八の藪夏冬に尤も繁し。飄埃の脆き體は機散の朝には春の花と興にして以て繽紛たり。翔風の假の命は緣離の夕には秋の葉と共にして紛紜たり。

千金の瑤の質だも尺波に先つて黄扉に沈み。萬乘の寶の姿も寸煙に伴つて玄微に厲る。婕娟たる蛾眉は霞を逐つて雲閣に飛び、的礫たる貝齒も露に添うて咸く零落す。傾城の華の眼は忽爾として綠苔の浮べる澤となり。珠を垂れたる麗耳は倏然として松風の通へる

華の眼は忽爾として綠苔の浮べる澤となり。珠を垂れたる麗耳は倏然として松風の通へる

壑と作る。

朱を施せる紅の臉も卒に青蠅の躑躅となり丹に染みたる赤き唇も化して烏鳥の喙突となる。百の媚の巧なる笑も枯れ曝せる骨の中に更に値ふべきこと難し。千の嬌の妙なる態も腐ち爛れたる體の裡に誰か亦敢て進まん。我我たる漆き髪は縦横として藪の上の流芥と爲り、織織たる素き手は沈淪して草中の腐敗となる。

靨たる蘭氣は八風に随つて以て飛び去んぬ。涓涓たる臭液は九竅より沸き舉れり。綯纏たる妻孥も、楚宋が夢に神女に遇へるに異ることなし。磊砢たる寶藏も宛も鄭交が空しく仙語を承けしに同じ。颯颯たる松風颯颯として襟を吹けども聆いて忻ぶの耳更に何れの所にかある。聆聰たる桂月、可憐として面を映すれども視て娛むの心亦何れの所にかのかかん。

乃ち知んぬ。飄飄たる羅縠何ぞ愛し喜ぶ應き。森萃たる薜蘿此れ常の飭のみ。緒堂聖室は曾て久しく止ることなし。松塚檜墳は是れ長く宿するの里なり。

琴瑟の孔懐も闕墓の下には之を相見るに由なし。婉孌たる蘭友も荒穢の側には復談笑するの理なし。孤落落たる松の蔭に伏して空しく樹の邊に滅え、獨り喞々たる禽の轉に伴つて徒に草の前に淪みぬ。

蠢蠢たる萬蟲宛轉として相連り、齟齬たる千狗咀嚼して糞き聯れり。妻子は鼻を塞いで以て厭ひ退き、親味は面を覆うて以て逃げ旋る。嗟呼、痛い哉。

【八風】 八方の風
【九竅】 兩眼、兩耳、兩鼻、口及び大小便道。

【楚宋が夢云云】 宋玉、高唐の賦を作る。其中に夢に神女に遇ふの狀を書く。

【鄭交】 鄭交甫、二人の神女に遇ひて、其佩を得。數十歩にして之を見るに二女も無しと。

【列仙傳】 紗なり。

【羅縠】 紗なり。
【緒堂聖室】 緒は赤土、聖は白土。

【松塚檜墳】 松檜は共に塚の上に植うる樹。
【琴瑟の孔懐】 妻子の集り住すること。

百味ひやくみを食くらつて婀娜あでやかなる風ふうの體ていも徒いたづらに犬鳥けんとうの屎尿しにょうとなり、千彩せんさいを裝まうて嬋娟せんけんたる龍りゅうの形かたちも空からしく燎火せうわの燃もゆる所ところとなる。誰たれか春はるの苑えんに遊あそんで愁緒しうじゆを消けし、秋あきの池いけに戲たがれて以もつて宴筵えんえんを舒ゆるぶべき、嗚呼あひ、哀あはいかな。

【潘安の詩】 潘岳
(字は安仁) の悼
亡の詩。

伯姬 宋の恭公
の夫人。伯姬引は
歌曲の名。
【三泉】 三重の泉
即ちその深きを云
ふ。

【時時】 あわてて
見る貌。

潘安が詩を詠じて、彌い哀哭あひくを増まし、伯姬はくきが引いんを歌うたつて還かへつて裂酷れつこくを深ふかくす。無常むぢやうの暴風ほうふうは神仙せんせんを論ろんぜず、精せいを奪うばふの猛鬼まうきは貴賤きせんを嫌きらはず。財さいを以もつて贖あがふこと能あたはず、勢いきほを以もつて留とどむることを得えざるなり。壽じゆを延のびぶる神丹しんでん、千兩せんりやうを服ふくすと雖いへども、魂たまを返かへす奇香きかう百斛ひやくこく盡じんく燃たくとも、何ぞ片時ぺんじを留とどめんや。誰たれか三泉さんせんを脱だれん。

尸骸しかい草中そうちゆうに爛たれて以もつて全まきことなし、神識しんしき沸わける釜かまに煎にられて專まることにすことなし。或時あるときは嶄巖ぜんがんたる刀獄たうごくに投なげられて血ちを流ながして潺湲せんくわんたり。或時あるときは峩嶩えいけいたる鋒山ほうざんに穿うがれて胸むねを貫つらぬいて愁焉しうえんたり。乍あるひは萬石まんせきの熱輪ねつりんに轢われ、乍あるひは千仞せんじんの寒川かんせんに没まつ。有あるは錢湯せんたう腹はらに入いつて常に炮煎ぱうせんを事こととす。有あるは鐵火てつわ喉のどに流ながれて暫しばも脱だれる縁ゆかりなし。水漿すいじやうの食しょくは億劫いっけつにも何ぞ稱なを聞きかん。咳唾がいだの渣ざは萬歳ばんざいにも壇だんにすることを得えず。獅子しし虎狼ころうは駭駭がいがいと歡よろこび跳はり、馬頭まづ羅利らりは眇眇めうめうとして相あむむ。

號叫ごうけうの響ひびき、朝あさな朝あさな香かうに慇うつれども赦寬しやくわんの意暮いこ暮ふな已すでに消けえぬ。閻王えんわうに囑託しよくたくすれども恣あむ意い咸かん銷けえ、妻子しを招まき呼よべども既に亦また繇ゆなし。珍ちんを以もつて贖あがはんと欲ほつすれども、曾かつて一つの瓊瑤けいぎやうなし。逃にげ遁のがれて免まれんと欲ほつすれども、城高じやうたかうして超こゆること能あたはず。嗟呼あ、苦くるしい哉や、嗚呼あひ、痛いたいかな。

【鷄鳴の客】孟嘗君の函谷關の故事

誰か鷄鳴の客を覚めて早く閉關の勞を消し、何ぞ狗盜の子を求めて克く極刑の刃を拯は
ん。謀 窮り、途極つて干たび悔い、干たび切なり。石礮き、芥盡きて已に叫び眺くこ
とを増す。嗚呼、痛いかな、嗚呼、痛いかな。

吾若し生日に勉めずして蓋し一苦一辛に罹りなば萬たび歎き、萬たび痛むとも更に誰人
にか凭らん。勉めよや、勉めよや。

是に於て龜毛先生等、百斛の酢梅臈に入つて酸をなし、數斗の茶蓼喉に入つて肝を爛
らす。火を呑むことを假らずして腹已に燒くるが如し。刀の穿ことを待ずして胸また割
くるに似たり。頃咽悽愴して泣漣漣たり。踟躕して地に倒れ、屠裂して天に懇ふ。慈親を

喪するが如く、愛偶を失へるに似たり。一たびは則ち懼れを懐いて魂を失ひ、一たびは
則ち哀を含んで悶絶す。

假名則ち瓶を採り、水を咒して善く面の上に灑ぐ。食頃あつて蘇息して醒ひに似て
言はず。劉石が塚より出でしが如く、高宗の喪に遭へるに似たり。良久うして二目涙を流

し五體を地に投げて稽顙再拜して曰はく、「我等久く瓦礫を甃んで常に微樂に耽る。譬へ
ば辛きことを蓼葉に習ひ、臭きことを厠屎に忘れ、盲目を覆うて以て險道に進み、寔驚を

驚せて冥途に向ふが如し。投らん所を知らず、陥らん所を知らず。今偶高論の慈誨に頼
つて乃ち吾道の淺膚なることを知んぬ。齊を噬んで以て昨の非を悔い、臍を碎いて以て明の

是を行はん。

【劉石】劉玄石。
【高宗】殷の中興
王武丁。

【姫孔】 姫は文武周公。共に姫氏なるが故に。孔は孔子なり。

假名が曰はく、『爺なり。吝善いかな。汝等速からずして還れり。吾今、重ねて生死の苦源を述べて涅槃の樂果を示さん。其旨は則ち姫孔の未だ談せざる所、老莊の未だ演べざる所なり。其果は則ち四果、獨一も及ぶこと能はざる所なり。唯一生十地漸く優遊する所ならくのみ。諦かに聴き、能く持て。要を挙げ、綱を撮つて略汝等に示さん。』

【獨一】 獨覺なり

龜毛等並に席を避けて稱して曰はく、『唯唯、心を靜にし、耳を傾けて恭んで専ら説を仰がん。』

【三有】 三界。
【四天】 四天下即ち四洲なり。

粵に則ち心藏の鏡を開き、舌泉の流を振うて正に生死海の賦を述べ、兼ねて大菩提の果を示して曰はく、『夫生死たらく三有の際を纏めて彌望するに極罔し。四天の表を帯びて渺瀾として測ることなし。萬類を吹嘘し、巨億を括總す。大腹を虚うして以て衆流を容れ、鴻口を闕いて諸瀉を吸ふ。陵に襄るの汰洶洶として息まず。崎を滾ぐの浪瀾瀾として相逼る。磳磳として震の如く響いて日に已に衆し。鱗鱗として雷の如くに震うて夜夜に既に充てり。衆物累り積んで群品夥く聚まる。何の怪が育せざらん。何の詭か開けざらん。

其鱗類には則ち慳貪瞋恚、極癡大欲あり。長き頭端なく遠き尾極なし。鰭を挙げ尾を撃つて口を張り食を求む。波を吸ふ時は離欲の船、槓推け帆匿れぬ。霧を吐く時は慈悲の舸、機折れ人殞びぬ。且は泳ぎ且は漚んで志意式あらず。或は鑿し、或は養して心性直きにあらず。窟の如く溪の如し。後害測られず、鼠の如く、蠶の如し。隠るるに匪ず、憫むに

【喙暗】 多言のこと。

【唯嗽】 號呼なり。

【四倒】 常樂我常の四顛倒なり。

【研旬】 水などの激する音。

【鴈門】 山の名。北陵にあり。

【昆明】 池の名。長安の西南にあり。

【黏微】 藕(モチ)を以て索に塗り水鳥を捕るもの。

【玄虚】 人名。木華海の賦を著す。
【郭象】 人名。文以て自ら樂しむ人。
【推輪】 古の棧車なり。
【張邪】 破戒なり。

あらず。共に千劫の蹉跎を忘れて並に一涯の貴福を望む。

其羽族は則ち詭誑、讒説、誹謗、羸惡、噂言、唯嗽、籛條、惡作あり。翮を整へて道に

背き高く翳つて樂に趣く。四倒の浦に研旬して十惡の澤に沸弁す。正直の菱を彫啄して廉

潔の藿を暗嘿す。鳳を見鸞を見て、仰いで豫め嚇嚇たり。鼠を犖り犬を犖つて俯して則

ち咋咋たり。且は飛び且は鳴いて現前の潤屋を營み。或は痛み或は死して未來の苦酷を忘

る。豈知らんや鴈門の坂には織羅張り列ね、昆明の池には黏微普く設け、更羸が箭は前に

來て首を碎き養山が弧は後に放つて血を流すと云ふことを。

若し其れ雜類は、則ち懦弱、忿怒、罵詈、嫉妬、自讚、毀他、遊蕩、放逸、無慚、無愧、不信、

不恤、邪嬌、邪見、憎愛、寵辱、殺害の黨、鬪鬪の族あり。形同じく心異に、類別に目

殊なり。鋸の爪鬚の齒あつて慈み少く、穀を喰つて耽耽として虎の如くに視て朝露の

麓に遊び、睢睢として獅の如くに吼えて夜夢の谷に戯る。遇ふ者は氣を奪はれ、精を抜か

れ、腦を塗れ、腸を碎く。見る者は身慄き、心悚ぢて臆臆として潛伏す。

是の如くの衆類、上有頂天を絡ひ、下無間獄を籠めて處に觸れて櫛の如くに比び、浦毎

に屋を連ねたり。玄虚が神筆千たび聚めても陳べ難し。郭象が靈翰萬たび集めても何ぞ

論ぜん。茲に因つて五戒の小舟猛浪に漂はされて以て羅刹の津に曳曳掣掣たり。十善の椎

輪彊邪に引かれて魔鬼の隣に隱隱軫軫たり。

是故に勝心を因の夕に發し、最報を果の晨に仰ぐに非ざるよりんば、誰か能く森森たる

【六度】檀戒忍進
禪智なり

【八正】正見、正
思惟、正語、正業、正
命、正精進、正念、
正定の八正道。

【七覺】捨擇法進
喜、禪定、捨を云ふ

【四念】四念處觀
なり。

【頂珠】轉輪聖王
頂上の寶珠なり。

【驚子】舍利非な
り。

【授記】成佛の記
號を授與するなり

【三祇】三阿僧祇
劫なり。譯して三
無數劫と云ふ。

【十重の荷】十重
障なり。

【二轉】煩惱、所
知の二障を轉ずる
こと。

【四鏡智】如實空
鏡、因重習鏡、法
出離鏡、緣重習鏡
の四智なり。

【三際】三世なり

【釋梵】帝釋天、
梵天のこと。

海底を抜んで蕩蕩たる法身に昇らん。

誠に六度の筏、纜を漂河に解き、八正の刺棹を愛波に、精進の幢を樹て、靜慮

の驢を擧げ、群賊を拒々に忍鏡を以てし、衆敵を威すに智劍を以てし、七覺の馬に策つて

塵に沈淪を超え、四念の輪に駕して高く驚塵を越ゆべし。

則ち頂珠を許して以て疆を封ずること彼驚子授記の春に同じく、頸瓔を奉じて以て境を

盡さんこと此龍女得果の秋に比せん。十地の長き路須臾に經殫し、三祇の遙なる劫究め圓

にせんこと難きに非ず。

然して後に十重の荷を捨てて尊位を眞如に證し、二轉の臺に登つて帝號を常居に稱せ

ん。一如理に合つて心親疎なく、四鏡智を含んで遙に毀譽を離れん。生滅を超えて改めず、

増減を越えて衰へず。萬劫を踏えて圓寂なり。三際に涉つて無爲ならん。豈皇ならずや。

亦唐からずや。

軒帝、堯義も履を探るに足らず、輪王釋梵も轡を扶くるに堪へず。天魔外道、百非を

馳するも毀る所に非ず、聲聞、辟支、萬是を飛ばすも是する所に非ず。

然りと雖も四弘未だ極めざるに一子溝に沈めり。此を願るに浪浪たり。此を思ふこと

丁寧なり。

爰に更に百億の應化を百億の城に斑ち、假に非相に託して非形を示現す。會成の道八相

に始り、金山の體四康に坐す。神光神使八荒に驛し、慈悲慈撫十方に頒つ。

【辟支】縁覺なり
【四弘】四弘誓願
【八相】住天、託胎、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃なり

【金山の精】佛身は金色の故に斯く云ふ。

【四康】四諦なり

【電輪】説法なり
【大千】大千世界

【法喜食を班つ】聞法歡喜して身心適悦すること食の飢を止むるが如きを云ふ。

【康哉】阜陶、舜の歌を奏いて「庶事康哉」と云ひし故事。

【來蘇を頌す】これは殷の湯王、紂を伐つ時、その速に征せん事を望むの語なり。

然して後に萬類萬品、雲に乗じて雲の如くに行き、千種千彙、雲に騎つて風の如くに投ることを待つ。天より地より、雨の如く泉の如し。淨より染より、雲の如く煙の如し。地に下り天に上り、天に上り地に下る。八部四象區區にして各交り連れり。讚唱闍闍たり、鼓騁淵淵たり。鐘の如くに振うて磳磳たり。花の如くに飄つて聯聯たり。熒熒爛爛、震震、填填たり。目に溢ち、耳に溢ち、黃に滿ち、玄に滿てり。踵を履み、跟を履んで眩を側め肩を側む。禮を盡し敬を盡して心謹み心專なり。

爾れば廻ち、一音の鸞輪を轉じて群心の狼狽を摧き、大千を抜き倚いて他界に投擲ち、大山を削らずして小芥に入る。甘露の雨を雨して以て誘ひ、以て誡む。法喜食を斑ち、智を纏み、戒を鞅めり。悉く康哉を詠じて腹壊を撃つ。威く來蘇を頌して帝功を忘る。無量國の歸湊する所、有情界の仰ぎ崇る所なり。惟れ尊、惟れ長、以て都とし、以て宗とす。咨咨、蕩蕩たらすや。大覺の雄、巍巍たるかな。誰か敢て比び窮めん。此定に吾師の遺旨、如如の少衆なり。彼神仙の小術、俗塵の微風、何ぞ言ふに足らんや。亦何ぞ隆なりとするに足らんや。

是に於て龜毛公等、一たびは懼れ、一たびは辱ぢ、且は哀み且は笑ふ。舌に委せて俯仰し、音を逐うて方圓なり。喜歡踊躍して稱して曰はく、「吾等、幸に優曇の大阿闍梨に遇ひて、厚く出世の最訓に沐す。誰昔にも未だ聞かず、後葉にも豈有らんや。吾若し不幸にして和上に遇はざらましかば永く現欲に沈んで定んで三途に没しなん。今僅に提撕を蒙つ

て身心安敵なり。譬へば、震霆響を發して螿鼓封を閉き、朝烏輪を轉じて幽闇水を渙くが如し。彼周孔老莊の教何ぞ其偏庸なるや。今より以後、皮を削いで紙となし、骨を折つて毫を造り、血を刺して鈎に代へ、羈を曝して斫に用ゐ、徹で大和上の慈誨を銘して以て生生の航輅に充てん。」

假名が曰はく「座に復れ、今當に三教を敵かんじて十韻の詩を以て汝等が諂諛に代へん。」

居諸、冥夜を破り

性欲、多種あれば

綱常、孔に因つて述べ

變轉は、聃公の授

金仙、一乗の法は

自他兼ねて利濟す

春の花は枝の下に落ち

逝水、住ること能はず

六塵は能く溺るるの海

已に三界の縛なるを知らぬ

三教、癡心を衰ぐ

醫王、藥鍼を異んす

受けて習うて槐林に入る

依り傳へて、道觀に臨む

義益、最も幽深なり

誰か獸と禽とを忘れん

秋の露は葉の前に沈む

廻風、幾くか音を吐く

四徳は歸する所の岑なり

何ぞ纒管を去てざらん

【四徳】 常樂我淨なり。

三教指歸卷下 畢

【一】當書二卷凝然の撰なり。八宗の綱要を述ぶ。八宗とは、奈良の六宗即ち俱舍、成實、律法相、三論、華嚴。平安の二宗即ち眞言、天台これなり。

附録として、淨土の二宗を略述す。

【二】釋尊の一代の教を明す。

【薄伽】梵音バガブツト (Bhagavat) 世尊と譯す。佛のこと。

【一】八萬四千法門に限りし理由を明す。

【塵勞】煩惱のこと。

【三】八萬四千法門と大小二乗を明す。

【蘊數】法門を類に依つて集めた數のこと。

【四】八萬四千法門と二藏三藏を明す。

【三藏】經、律、論。
【十二分教】佛の

八宗綱要上

凝然大德述

【一】問ふ、『佛教に幾くの門有りや。』答ふ、『薄伽の教法に、總じて無量の門有り、且く大途を擧ぐるに、則ち八萬四千なり。釋尊一代五十箇年、所説の法、攝盡せずといふこと莫し。』

【二】問ふ、『何故に法門の數量必ず爾るや。』答ふ、『一切衆生の八萬四千の諸の塵勞を對治せんと欲ふが爲の故に、所以に法門必ず八萬四千の數有り。』

【三】問ふ、『此等の法門、唯大乘に約すと爲せんや、小乗にも通すと爲んや。』答ふ、『大小の二乗に、各八萬四千の法門を立つるなり。『俱舍』にいふが如し、『牟尼の説法に、蘊數八十千有り』と上。加之、諸の小乘經に、多く法に八萬四千有りと説く。此等は竝に是れ小乗の所立なり。大乘教の中の如き、盛に此義を談ず、文據甚だ多し、言論を待たず。故に大小の兩乘、皆各八萬四千有り立つるなり。』

【四】問ふ、『此等の法門、如何が攝束するや。』答ふ、『法門多しと雖も、二藏及び三藏に過ぎず、諸教を取り攝むるに、皆盡く究盡す。藏五藏、十藏、十二分教等の門も亦三藏を出でず。』

説法を形式上から分つ。契經、應頌、記別、誦頌、自説、緣起、譬喻、本事、本生、方廣、希法論議。

【五】二藏を明す

【聲聞藏】佛の説法の聲を聞いて羅漢の悟を開く人

【菩薩藏】利他の慈悲心を先して修行し、佛の悟を開く人

【六】三藏と三學を明す三藏と三學とに依つて佛教の法義を攝盡す。

【能詮】三藏

【素埵】覽

【藏】經藏

【毘奈耶】

【藏】律藏

【阿毘達磨】

【藏】論藏

【定學】

【戒學】三學

【慧學】(所詮)

【七】三藏結集の理由を明す。

【五】問ふ、「且く二藏とは何ぞ。」答ふ、「一に聲聞藏、是れ小乘なり。二に菩薩藏、是れ大乘なり、大小兩乘に、各八萬四千有り」と立つとは、即ち此義なり。此二藏の義は、『智度論』及び『莊嚴論』に出づ。諸家咸く引いて以て大小を判す。

【六】問ふ、「次に其三藏とは何ぞ。」答ふ、「一に素埵覽藏、古には修多羅といふ。二に毘奈耶藏、古には毘尼といふ。三に阿毘達磨藏、古には契經と翻す。此に對法といふ。古には無比。是れ論議なり。此を三藏といふ。次での如く定戒慧學を詮す。三藏は是れ能詮の教、三學は即ち所詮の義、以て法義を攝するに遺餘有ること無し。」

【七】問ふ、「云何が攝するや。」答ふ、「如來一代、機に對して法を授く、機有れば即ち授け、處處に散説す。然も説教の分齊は三藏に過ぎず。故に結集の時、諸の聖者等、結して三藏と爲し、悉く結集し已りて以て世間に傳ふ。」

【八】問ふ、「此三藏は、大小乘に通ずるや。」答ふ、「兩通するなり。『莊嚴論』等に具之を明すが如し。故に聲聞、菩薩の二藏に於て、各三藏有り、經律論是なり。」

【九】問ふ、「此等の教文、古今の傳通、其相如何。」答ふ、「如來の在世には典籍を用ひず、聞くに隨ひて依行し、即ち證益を得たり。如來の滅後に始めて典籍有り、傳通して以て衆生の眼目を開く。之に依りて迦葉波等小乘の三藏を畢鉢の窟場に結し、阿逸多等、大乘の教法を鐵圍の中間に集む。」

【一〇】是に摩訶迦葉、聖法を乘りて玄綱を續ぎ、阿難尊者、契範を持ちて群生を利す。

【機】根機といふ、教を受ける衆生の器量のこと。

【結集】釋尊の説法を、滅後編集せしこと。

【八】三藏は大小二乘に通ずるを明す。

【九】三藏の結集を明す。

【畢鉢の窟場】中印度摩訶陀國、王舍城の近傍にある窟洞。

【阿逸多】彌勒菩薩の一名なり。

【鐵圍】須彌山説に依つて世界の最も外側を圍んでをる山をいふ。

【一〇】五師及び其後の傳承を明す。

【瀉瓶】一器の水を他器に移すこと。

【胎衣】商那和修の漢譯。

【正法千年】佛滅後千年間。

【五印】東西南北中の五印度。

【二】小乘二十部

末田、商那、各義綱を提げ、優婆塞多、獨り美號を彰す。佛滅百年、瀉瓶遺すこと無し、法匠の五師、傳持功有り。百歲已後、諸聖亦出でて互に聖典を傳へ、各大法を乘る。然も諸聖の隱没するに隨ひて法義滅すること無きに非ず、阿難、入定して胎衣、測られず、商那、入滅して衆經隨ひて隠るるが如し。然りと雖も、遺餘少からず、殘教定に多し。故に正法千年、乃し末法に至るまで、時に隨ひて乘持し、處に隨ひて流傳す。諸處に流轉するに至りては、五印の諸國、乃し日域に至る。其餘の諸國、稱げて計ふべからず。各聖典を弘め、竝に佛事を興す。

【二】今且く天竺、震旦、日域、三國弘傳の相を述べれば、傳へ聞く、如來滅後四百年間は小乘繁昌し、異計相興り、大乘隱没して龍宮に納在せり。就中一百年間は、純一瀉瓶し、百餘年の後、異計競ひ起る。是を以て摩訶提婆、徒らに五事の妄言を吐き、婆羅富羅、未だ實我の堅情を捨てず、正量、經量、大義を争うて紛紜たり、西山、北山、異見を起して猥論たり。遂に四百年間に、二十部をして五印度の中に競ひ起らしめ、乃至五百、交諍ふ。五百年の時、外道競ひ起り、小乘稍く隠る、況んや大乘をや。

【三】爰に馬鳴論師、時に六百に將として、始めて大乘を弘め、「起信論」等、此時に則ち造す。外道の邪見舌を巻きて皆亡じ、小乘の異部、口を閉ぢて咸く伏し、大乘の深法、再び闍浮に興り、衆生の機感、已に正路に趣く。次には龍樹菩薩有り、六百の季曆、七百の初運、馬鳴に紹いで五印に獨歩し、有ゆる外道皆摧かざる無く、有ゆる佛法皆悉

し、

の分派を明す。

【龍宮云云】佛滅後大乘經云の世に表れざりしを云ふ

【五事の妄言】五ヶ條の異説猶も餘所ノ誘、無智、猜豫、他令ノ人、道因ノ聲

故起是名ニ佛教ニを云ふ。此により初

【二】馬鳴と龍樹を明す。

【外道】佛教以外の教。

【關浮提】この世界の事。

【三本】上本、中本、下本の三種の華嚴經。

【四辯】法無礙辯、義無礙辯、詞無礙辯、樂說無礙辯。

【第八地】第十地の中の第八地位。

【初歡喜】十地の中の第一地位。

【大聖】馬鳴、龍樹の二大聖。【化緣】教化のこ

く傳持す。三本の『華嚴』獨り胸藏に含み、四辯の文河、妙に江海を控く、廣く論藏を造りて藍よりも青く、深く佛法を窮めて水よりも寒し。凡そ此二大論師は、并に是れ高位の大士なり。馬鳴は即ち古の大光明佛、今は則ち迹を第八地に示し、龍樹は則ち昔の妙雲相佛、今は則ち位を初歡喜に寄す、俱に本佛なり。竝に垂迹なり、智辯は倫を超えたり。共事、宜なるかな。

【二】爰に大聖の應現、化緣已に盡き、化を息め本に歸し、衆生の業緣、亦復雜起し、邪見還深し。之に依りて九百年の時、無著菩薩、世間に出て衆生を利益し、夜は都率に昇り、現に慈氏に稟け、晝は關浮に降り、廣く衆生に教ふ、然るに衆生執深く尙化に従はず、故に即ち慈尊の自ら降りて法を説きたまはんことを請ふ。慈尊請に應じ、中天竺阿瑜遮那の講堂に降り、五部の大論を説きたまふ。『瑜伽論』の如きは、卷軸一百、八萬の法門深く奥義を談じ、一代の教文皆判せずといふこと莫し。故に『廣釋諸經論』と名く。是時、衆生の邪見悉く伏し、正路に同じく趣き、進入妙に麗し。慈尊天に昇るの後、無著繼いで關浮を化す。

此の時代の中に、世親化を施せり。始め小乘を弘め、廣く五百部の論を製し、後に大乘を學び、亦五百部の論を造る。故に世舉つて千部の論師と號す。加之、訶梨跋摩の『成實論』、衆賢論師の『順正理』、此時に製す。

【四】如來滅後一千年の間は、大乘の宗義未だ異計を分たず、千一百年の後、大乘始め

と。

【都率天】彌勒菩薩のをる天の名。

【慈氏】彌勒菩薩を指す。釋尊滅後五十六億七千萬年にしてこの世界へ下生すといふ。

【五部の大論】瑜伽師地論分別瑜伽論大莊嚴論辨中邊論金剛般若論。

【四】大乘教の分派を明す。

【空有】護法は萬有は四縁に依りて生ずるが故に有と説き清辨は同じ理由にて空と説く。

【依地】因縁に依つて生ずる萬有をいふ。

【四依の六士】五十二位中の菩薩のこと。

【五】佛敎の傳來と經論の繼譯を明す。

【三寶】佛法僧。

【五乘】人、天、聲聞、緣覺、菩薩。

【三藏の諸師】經律論の三藏に精し

て異見を起す。故に千一百年に、護法、清辨、空有を依他の上に諍ひ、千七百歲に、戒賢、智光、相性を唇舌の間に論ず。金剛と金剛との如く、巨石と巨石とに似たり。厥餘の諸大論師、龍智、提婆、青目、羅喉羅、陳那、親勝、火辨、智月等、竝に是れ四依の六士にして、衆生の所歸なり、古今に挺出し、蘭菊美を諍ふ、諸宗各取りて以て祖匠と爲し、衆生互に憑りて以て上首と爲す。此の如きの論師、古來繼ぎ出でて五印を照燭し、衆生を救濟す、是を天竺弘通の相と爲すなり。

【二五】震旦國の如きに至りては、如來滅後一千年の末、迦騰始めて來り、竺蘭次で至り、始めて三寶を傳へ、漸く五乘を弘む。爾りしより已來、漢、魏、晉、宋、齊、梁、陳、隋、唐、宋、此等の朝の中、三藏の諸師各佛敎を傳へ、互に聖法を弘む。翻經の三藏の如きに至りては、或は西より此に至り、或は此より往還す。大小の三藏皆悉く翻傳し、顯密の二宗互に各弘通す。是を以て羅什、玄奘の翻經の妙を窮むるや、果して韋陀の天告を感じ、覺賢、曇無の傳譯の美を稱するや、遂に海龍の神護を得たり。

【二六】其餘の高僧、佛法を崇むる者、或は金陵淨影の月、八不顯實の水に澄み、或は南岳天台の花、一心三觀の蘭に鮮なり。慈恩滿洲の風は、三草二木の梢に涼しく、香象清涼の玉は、十玄六相の臺に明なり。加之、光寶の二師は對法を窮めて明明たり、禪宣の兩家は、戒律を瑩いて歷歷たり。況んや成實の大義に於ては、慧影獨り麗はしく、眞言の密敎は、行果俱に朗かなるをや。自外の諸德、稱げて計ふべからず、竝に大道を弘

くして、繙譯の事業をした人々。

【顯密二宗】 顯教と密教。

【二六】 支那八宗の頤學を明す。

【金陵淨影】 金陵は三論宗の闡祖嘉祥大師の誕生地ゆゑ大師を指す。淨影は長安淨影寺の慧遠法師のこと。

【八不顯實】 三論宗の根本義。

【一心三觀】 天台宗の根本義。

【慈恩滿洲】 法相宗の慈恩と滿洲の慧沼。

【三草二本】 法華經の小草中草上草大樹小樹の喩。法相宗にて五性各別の典據とす。

【香象清涼】 華嚴宗の祖賢智と中興の祖澄觀。

【十玄八相】 華嚴宗の觀法のこと。

【光室二師】 普光と法常。俱舍論の記及び疏を作る。

【礪宣】 法礦律師

め、互に佛教に通ず、威儀禮魏として、數天給を感じ、妙解蕩蕩、頻りに心佛を見る。此の如きの高僧、古今の間、多なる哉、大たる哉、豈言語の及ぶ所ならんや。此を震旦弘傳の相と謂ふなり。

【二七】 日本國の如きに至りては、人王第三十代欽明天皇の御宇第六年乙丑年に當る。十一月、百濟國の聖明王より、金銅の釋迦像一軀、及び幡蓋と、若干の經論とを獻す。天皇歡喜し、即ち見て之を崇めたまふ。時に臣下之を敬せずと雖も、遂に寺宇を建て、佛經を安置す、其後、漸漸三寶興建す。第三十一代敏達天皇元年壬辰正月一日、聖德太子和國に誕生し、更に佛法を弘め、廣く天下に滿つ。伽藍諸處、度人無量なり。守屋の逆臣、定慧の弓箭を被り、高麗の兩僧、弘通の稱譽を得たり。邪見を降伏し、三寶を紹隆し、衆生を拔濟し、佛事を施作す、千古百來、何の處か之に過ぎん。偏に是れ上宮太子善巧の力なり。

【二八】 爾りしより已來、高僧頻りに出で、廣く佛法を傳へ、太聖垂跡して三寶を弘む。慧觀僧正は三論の深義を傳へ、玄昉僧正は、法相大乘を弘む。華嚴圓宗は道瑠律師之を傳へ、戒律と天台は、臨眞和尚之を弘む。傳教大師重ねて天台を興し、弘法大師盛に眞言を開く。俱舍成實も各傳承あり。此等の諸德或は唐より此に至り、或は此より往還す。自餘諸師弘傳甚だ多く、茲に前後如上の法を甄ぶ。或は玉泉の流れを汲み、或は慧日の光を傳へ、或は清涼の滿月を受け、或は玉花の門葉となる。或は南山真松の下にイみ、或

道宣律師。

【慧影】成實宗の

【行觀】一行阿闍梨

の祖、一行阿闍梨

【一】佛教の渡來

と聖德太子を明す

【八】日本諸宗の

弘傳を明す

【大聖垂跡】佛菩薩

の日本に垂れて高僧

となりたまふ

【玉泉の流】天台

宗のこと

【慧日の光】三論

宗のこと

【清涼の滿月】華嚴

宗のこと

【玉花の門葉】法相

宗を指す

【南山貞松の下】律宗

をいふ

【西湖靈芝の蘭】これ

も律宗をいふ

【奇龍】眞言宗

【大雲】俱舍宗、

圓觀法師、

八宗綱要上

は西湖靈芝の蘭に遊ぶ。或は青龍深く海底を極め、或は大雲遍く四面を覆ふ。大小兩乘、

性相二宗、教觀二門、顯密二教、各各傳通して稱計すべからず。七大の諸寺肩を竝べて鑽

仰し、南北の二宗、美を諍うて依學す。五に是れ龍象の徒衆、俱に入天の大帥なり。厥餘

の邊方亦隨つて弘通し、古より今に至るまで踵を繼いで絶えず。末法味薄けれども、教

海本より深し、其奥を釣らんと欲するに及ぶこと能はず、大なる哉、得て稱すべからざる

者なり、此を日域弘傳の相と謂ふなり。」

【二九】問ふ、『三國弘傳の相、略知ること既に兩り、然るに、今日域所傳の佛法、總じて

幾許有りや、請ふ、重ねて之を明せ。』答ふ、『日域の教、昔より、觀ぶ所は、本只八宗なり、

今に至るまで改めず、其中間異宗無きに非ず、然りと雖も、古今の共許して、觀ぶ所は、

それ管八宗のみ。』

問ふ、『八宗とは云何。』答ふ、『八宗と言ふは、一に俱舍宗、二に成實宗、三に律宗、四に

法相宗、五に三論宗、六に天台宗、七に華嚴宗、八に眞言宗なり。』

問ふ、『此八宗の中、幾くか是れ小乘、是れ大乘なるや。』答ふ、『俱舍、成實、及び律、

此三宗は皆是れ小乘なり、法相、三論、天台、華嚴、及び眞言、此五宗は竝に是れ大乘な

り。』

問ふ、『此八宗所談の義理、各聞くことを得べきや。』答ふ、『諸宗の義趣は深奥にして

知り難し、一宗尙未聞を嗜む、況んや八箇の宗に於てをや、故に堆名目を列ね、粗一義を

述ぶるのみ。』

俱舍宗

寺西大寺元興寺大
安寺藥師寺興福寺
法隆寺。八宗の概觀
を明す。
【本只八宗】 八宗
と定まりたる濫觴
は、聖武天皇が良
通僧都に寺職を司
らしめ、八宗兼學
研尋せよと詔せら
れたるに依る。
【一】 俱舍宗の名
稱を明す。
【無漏の慧】 煩惱
なき悟の智慧をい
ふ。
【涅槃】 梵音ニル
ヴァナ(Nirvana)
滅没と譯す。煩惱
を斷じて佛果を得
たるをいふ。
【四諦】 苦集滅道
の四眞理をいふ。
【法】 認識の對象
となる全てのもの
がら。
【法相法】 一定の
性質と相狀とある
ものがら。
【依主釋】 六合釋
の一。一言の中に
主と從とある中、

【一】 問ふ、『何故に俱舍宗と名くるや。』答ふ、『俱舍とは是れ本論の名なり。具に之を言はば即ち論に題して、『阿毘達磨俱舍論』と云ふ。論の一字は是れ漢語、餘の六字は竝に梵語、阿毘、此に對と云ひ、達磨、此に法と云ひ、俱舍は藏と云ふ。謂く對法藏論なり。謂く無漏の慧、之を名けて對と爲す、對に二義有り、一には涅槃に對向するが故に、二には四諦に對觀するが故に。法に二義有り、一には勝義法、是れ涅槃なり、二には法相法、四聖諦に通ず、謂く、無漏の慧、涅槃と四諦とは對向し、對觀するが故に。藏に二義有り、一には包含、二には所依、包含の義とは、此論『發智論』等の諸の勝義の言を包含するが故に、名けて、藏と爲す、對法の藏、依主釋なり。所依の義とは此論『彼發智論』等に依りて造るが故に爾り、全く本論の對法藏の名を取る、對法藏を有するが故に對法藏と名く、是れ有財釋なり。』論に具なる題名、其義此の如し。今此俱舍を以て宗と爲す、故に俱舍宗と名く。』

【二】 問ふ、『此論、如來滅後幾許年を経て、誰人か造るや。』答ふ、『此論如來滅後九百年の時、世親菩薩の造る所なり。二十部の中には、是れ薩婆多部なり。源『婆娑』より出で

從が主に依つて出
來たる語を解釋す
るをいふ。

【有財釋】六合釋
の一。甲の語をそ
のままとりての語
とするが如き語を
解釋するをいふ。

【二】婆娑論の結
集を明す。

【薩婆多部】説一
切有部と譯す。論
藏を主とし、經律
藏を伴とせしより
紛議起りて、遂に
一派となる。俱舍
宗の教義は主にこ
の部に依る。

【健駄釋】印度の
西北、月支國のこ
と。

【迦膩色迦】佛敎
に歸依し、佛敎者
を保護して佛典の第
四結集をなさしめ
たる有名なる王。

【懸記】豫言。

【六通】天眼通天
耳通他心通神足通
宿命通漏盡通。

【五明】聲明（音
樂）、工巧明（建築）
醫方明（醫學）、因

て、勢ひ諸敎を挾む、「婆娑」は是れ「發智」「六足」を本とす。如來滅後四百年の初め、健駄
羅國に國王有り、迦膩色迦と名く。其王、佛經を敬信し、尊重す。有日、僧を請じて宮に
入れて供養す。王因つて道を問ふに僧の説不同なり。王甚だ怪む。瞻尊者に問うて曰はく、

「佛敎、源を同うし、理、異趣無し、諸徳の宣唱、爰ぞ異なるや」尊者答へて曰はく、「何
れの説も皆正し、修するに従ひて果を得、佛既に懸記す、金杖を折るが如し」と。王此語を

聞き、因つて問を爲して曰はく、「諸部の立範孰れか最も善なるや、我修行せんと欲す、願
くは尊者説き給へ」尊者答へて曰はく、「諸部の中、有宗に越えたるは無し、王修行せんと

欲せば、宜しく此に遵ふべし」と。王即ち歡喜し、此部の三藏の法門を結せしむ。有徳の諸
僧四方より雲集し、凡聖極めて多く、煩亂すべからず、遂に凡僧を簡び、唯聖僧を留む、

聖僧尙繁し、有學を簡び去りて、唯無學を留む、無學復多し、總集すべからず、無學の内
に於て、定、六通を滿じ、智、四辯を圓にし、内、三藏に閑ひ、外五明に達し、爾も結集

に堪へたるもの、留むる所の徳聖唯四百九十九人有り、遂に世友尊者を以て、是して五百
人と成す。即ち世友尊者を以て推して上座と爲す。是に於て五百の聖衆、初め十萬頌を集

めて、素坦覽藏を釋し、次に十萬頌を造りて、毘奈耶藏を釋し、後に十萬頌を造りて、阿
毘達磨藏を釋す、即ち大毘婆娑是なり。五百の羅漢既に結集し已りて、石に刻し、誓を立

て、唯自國に聽して外國に許さず、方に夜叉神に、勅し、城門を守護して散出せしめず。

【三】然るに世親尊者、舊有宗を習ひ、後經部を學ぶ、將に理に當れりと爲し、有宗の

明(論理學)、内明(宗教學) 小乘聲聞の證位。

【夜叉神】 印度の神の名。

【三】 俱舍論の成立を明す。

【長老】 學徳すぐれたる僧を呼ぶ稱。本國 世親の生國。

【四】 俱舍論の體講弘傳を明す。【東夏】 支那のこと。

義に於て收拾の心を懷く。是非を定めんと欲し、名を潜めて重ねて往く、時四歳を經たり。屢自宗を以て頻に他部を破す。悟入尊者、詰せられて通すること莫し。尊者、定に入りて、是れ世親なりと知り、私に之に告げて曰はく、「此部の衆中、未離欲の者は、長老の破を知らば、必ず害を相致さん、長老、速に本國に歸還すべし」と。時に世親、本國に至りて、已りて『毘婆娑』を講ず。若し一日講すれば便ち一偈を造り一日の中に講ずる所の義を攝し赤銅葉に刻して此偈を書寫す。此の如く次第に六百頌を成し、『大毘婆娑』を攝し、其義、周く盡せり。頌を香象に標し、鼓を撃ちて宣告す、「誰か能く破する者有らば、吾當に之を謝すべし」と。竟に一人の斯偈頌を破する無し。此偈頌を將ちて、人をして賚らして迦濕彌國に往かしむ。時に彼國王及び諸の僧衆、聞いて皆歡喜す、謂へらく己が宗を弘むと。悟入非なることを知り、怪を諸人に告ぐ。遂に請うて釋を造らしむ。世親論主即ち王の請に應じ、爲に本文を釋す、凡て八千頌有り。後に彼釋を見るに、果して悟入羅漢の言ふ所の如し。時に悟入尊者の弟子衆賢論師、論を造りて『俱舍』を破す、『俱舍卷論』と名け、世親をして見しむ。世親即ち讀して、名を改め、即ち『順正理論』と爲す。彼衆賢論師、亦此『俱舍論』を造る、譯して四十卷と成す。『順正理論』は、譯して八十卷と成す。故に知んぬ、此『俱舍論』は、源・婆娑論より出づることを。

【四】 問ふ、「此論の興起は既に九百の時なり、其東夏に傳ふる是れ何れの時ぞや。」答ふ、「此論翻する時に即ち二代有り。初めは陳朝の眞諦三藏譯して二十卷と成し、即ち自ら疏を

【通學三藏】玄奘三藏のこと。

【五】俱舍論の所立を明す。

【顯密】顯は表面密は裏面。

【六】俱舍論の主張を明す。

【一切諸法實有】一切の諸法は現在過去未來にも實有といふこと。

【法體恆有】諸法の實體は現在過去未來の三世に恆有るといふ意。

【法救】次下に由づる四人は婆娑論結集の時の重なる人なり。

【類不同】例せば鐵が鐵になれば鐵が銅の類を得ずといふが如し。

【相不同】物が過去にある時は過去の相が表面に現れて現在、未來の相が裏面にかくれ、現在の相は現在、過去未來の相が裏となるが如し。

作り五十卷有り、亡逸して傳はらず。後唐朝の玄奘三藏、永徽年中に、慈恩寺に於て譯して三十卷と成す、今即ち此本なり。然らば即ち此論既に世親論主の造る所、故に世親菩薩を以て本祖師と爲す。大唐國の中に、通學三藏妙に之を翻譯し、門人、普光法師、寶法師、各疏を作りて之を釋し、及び餘の諸師皆撰ばずといふこと莫し。乃至日本に傳へて今に絶えず、相承跡を繼ぎ、諸師競ひ學ぶ。」

【五】問ふ、「此宗唯有宗を述ぶるや。頗は餘を兼ぬる有りや。」答ふ、「此論、正しく有宗を述ぶ。故に所立の義、薩婆多を本として之を製造す。然も時に彼經部の義に友ふ。故に論文に云はく、「迦濕彌羅の義理成ず、我多く彼に依りて對法を釋す」と上。又云はく、「經部の所説理に違せざるが故に」と上。二宗を取捨する顯密の意趣、此等の文に依りて其義知るべし。」

【六】問ふ、「此論何を以て其宗旨と爲すや。」答ふ、「既に有宗を述ぶ、故に一切諸法實有と説き、以て其宗と爲す。若し密に之を言はば、經部の義無きに非ず、今顯意に約すれば、唯是れ有宗の三世實有、法體恆有、總じて是れ此宗所談の義なり。然るに三世實有を説くに諸説同じからず。即ち四説有り。一には法救尊者の云はく、「類の不同に由りて三世異有り」と、二には妙音尊者の云はく、「相の不同に由りて三世異有り」と、三には世有尊者の云はく、「位の不同に由りて三世異有り」と、四には覺天尊者の云はく、「待の不同に由りて三世異有り」と。今世親論主、並に此四家を評し、世有尊者を以て最善と爲す。若し經部

【待不同】例せば一人の女を子に對せば母といひ、夫に對すれば妻といふが如し。

【七】俱舍論の組織を明す。

【有漏無漏】迷ひと悟を意味す。

【諸法の體】一に有する本體。

【八】五位七十五法を明す。

【色法】物質。

【五根】五官。

【五境】五根の對境。

【無表色】善惡二業を起すべき潛勢力をいふ。

【心法】精神。

【心王】外境の全體に關する認識思考をするもの。

【心所有法】心王に所有せらるる法即ち心王は外境の全體を認識するが心所はその一部分を認識す。

【大地法】心王が起る時、必ず背く伴うて起るの意。

宗は、過未は無體、唯、現は是れ有なり。此「俱舍論」は、既に是れ對法なり、故に此れ論藏なり。」

【七】問ふ、『此論總じて何等の義を明すや。』答ふ、『此論三十卷、總じて九品有り、一に界品、二に根品、三に世間品、四に業品、五に隨眠品、六に賢聖品、七に智品、八に定品、九に破我品、略頌に云はく、界二根五世間五、業六隨三賢聖四、智二定二破我一、是名俱舍三十卷と。其破我品は別の正頌無し、經中の伽陀を聚むるのみ。此九品の中、初めの二品は、總じて有漏無漏を明し、後の六品は、別して有漏無漏を明す。總明の中に就いて、初の界品は、諸法の體を明し、次の根品は、諸法の用を明す。別明六の中、初の三品は、別して有漏を明し、後の三品は別して無漏を明す。有漏を明す中、世間品は果を明し、業品は因を明し、隨眠品は縁を明す。無漏を明す中、賢聖品は果を明し、智品は因を明し、定品は縁を明し、其破我品は無我の理を明す。一部三十卷九品の始終、明す所の義理分齊此の如し。』

【八】問ふ、『此宗幾種に諸法を攝するや。』答ふ、『七十五法に諸法を攝し盡す。七十五法とは、一には色法、此に十一有り、五根と五境と及び無表色となり。二には心法、此は唯一なり、六識の心王は、總じて一なるが故に。三には心所有法、四十六有り、分ちて六位と爲す。大地法の十と、大善地法の十と、大煩惱地法の六と、大不善地法の二と、小煩惱地法の十と、不定地法の八と、合して四十六有り、六位の心所と名く。大地法の十とは、

意。

【大善地法】心王

が善の作用を爲す

時にのみ起るもの

【大煩惱地法】心

王が煩惱的に起る

時にのみ並び起る

心所。

【大不善地法】心

王が悪の作用を爲す

時にのみ並び起る

心所。

【小煩惱地法】時

には起り、時には

起らぬもの。

【不定地法】前の

五種の心所の何れ

にも屬せぬ心所。

【不相應行法】心

王又は心所に非ず

色法又は心法にも

非ざるもの。

【無爲法】不變常

住のもの。

【九】修行の階級

を明す。

【修因證果】修行

得果。

【波羅蜜】布施、

持戒、忍辱、精進

禪定、智慧の六波

羅密。

【最後身】煩惱を

『俱舍』の頌に云はく、「受と、想と、思と、觸と、欲と、慧と、念と、作意、勝解、三摩地

とは、一切の心に遍す」と上。大善地法の十とは、又同頌に云はく、「信と、及び不放逸と、

輕安と、捨と、慙と、愧と、二根と、及び不害と、勤とは、唯善心に遍す」と上。大煩惱地

法の六とは、同頌に云はく、「癡と、逸と、怠と、不信と、憎と、掉とは、恆に唯染なり」

と上。大不善地法の二とは、頌に云はく、「唯不善心に遍するは、無慙と及び無愧となり」

と上。小煩惱地法の十とは、頌に云はく、「忿と、覆と、慳と、嫉と、惱と、害と、恨と、詭

と、誑と、憍と、是の如きの類を名けて小煩惱地法と爲す」と上。不定地法の八とは、略頌

に云はく、「尋と、伺と、及び悔と、眠と、貪と、瞋と、慢と、疑となり」と。四には不相

應行、此に十四有り。『俱舍』の頌に云はく、「心不相應行とは、得と、非得と、同分と、無

想と、二定と、命と、相と、名身と等の類なり」と上。五には無爲、此に三種有り、一に擇

滅無爲、二に非擇滅無爲、三に虚空無爲なり、此を七十五法と名く。七十五の中、前の七

十二は、並に是れ有り、後の三は是れ無爲なり。一切の諸法、此二に過ぎず。有爲法の中

に漏と無漏と有り、無爲は是れ無漏なり。故に此宗中に七十五を建て、諸法を攝し、窮盡

せざる莫し。』

【九】問ふ、『此宗の中、三乗の因果、云何が建立するや。』答ふ、『三乗の中に於て、聲

聞は三生六十劫を経て修行得果す、方便に七階有り、果には即ち四級有り。緣覺は四生百

劫を経て修因證果し、因行積集して直に無學に登る、多階有ること無し、唯一の向果な

持てる最終の身、佛の證果に入る直前身。

【無餘涅槃】 悟滅を得て肉身までりしたる後をいふ。

【二〇】 我空法有を明す。

【生空】 衆生空、即ち衆生は五蘊假和合の故に。

【法空】 生空のみに非ず、諸法に一定不變の實體なく五蘊その儘空なりといふこと。

【一】 成實宗の名を稱明す。

【二】 成實論の製作弘傳を明す。
【上足】 高弟の意

り。菩薩は三阿僧祇劫を経て、諸の波羅蜜を修し、百劫の中に相好の業を植ゑ、最後身のなか、金剛座に於て斷結成佛し、化緣已に盡きて無餘涅槃に入る。斯れ迺ち聲聞は四諦を觀じ、緣覺は十二因緣を觀じ、菩薩は六度を修す。

【二〇】 問ふ、『此宗、幾の空を明すや。』答ふ、『唯生空を明し法空を談ぜず。生空と言ふは即ち我執を遣る、五蘊の中、人我有ること無し、唯是れ五蘊の和合聚成するを假に名けて人と爲す、實人有ること無し、此の如く觀するが故に、我空の理を證す。然るに其法體は三世實有なり、此義に由るが故に、他宗にては名けて我空法有宗と爲すなり、』

成實宗

【一】 問ふ、『何故に成實宗と名くるや。』答ふ、『成實論』を以て所依と爲せば、成實宗と名く。成實と言ふは、如來所説の三藏の中の實義を釋成するが故なり。故に彼論師の述懐の文に云はく、故に我正しく三藏の中の實義を論ぜんと欲すと。『已上は彼論の第一』

【二】 問ふ、『此論は、如來の滅後幾年にして誰人か造るや。』答ふ、『如來の滅後九百年の中に、薩婆多宗の學者俱摩羅陀が上足の弟子に訶梨跋摩有り、師の見解是れ甚だ淺劣なりと嫌ひ、諸部の最長の義を簡び取りて以て一類と爲して宗を成す。姚秦の朝代に羅什三藏翻譯して之を弘む、一部十六卷二百二品有り。震旦の諸師多く章疏を造り、乃し日域に

【三】成實宗は大乗か小乗かを明す

【分通大乘】一部分大乘の教義に通ずるの意。

【四】成實論は二空を説くを明す。【無我觀】法無我觀、法空に同じ。

【二執】我執、法執。

【五】修行の階級

至るまで以て之を依學す。

【三】問ふ、『此論宗は二十部の中、正しく何れの部に攝し、又最長の義とは是れ何等の義ぞや。』答ふ、『成實論』所依の本部を定むるに、諸解不同なり、或が云はく、「多聞部に依る」と。或が云はく「經部に依る」と。或が云はく、「大を探りて小を釋す」と。或が云はく「曇無德部に依る」と。或が云はく、「諸部の長を取る」と長なり。或が云はく、「化地部に依る」と。又梁の三大法師とは、謂く、光宅寺の法雲法師、開善寺の智藏法師、莊嚴寺の文曼法師なり、此三家は、並に『成實論』は是れ大乘なりと云ふと云。天台、嘉祥は並に小乗と判す。南山、靈芝は俱に分通大乘と云ふ。四分律と。同計なり。此の如く諸師の異説不同なり。然も淨影天台已後は、多分共に評して『成實論』は是れ小乗中の長と云ふと云。但し南山律師は、教は是れ小乗、義は大乘に通すと云。小乗の中にては、多く云ふ、成實は多く經部に依ると云。或は曇無德部となり云。

【四】其最長の義とは、此宗の中、具に二空を明す。故に觀に二種を立つ、一には空觀、觀中に水無きが如し。五蘊の中に人我無きが故に、是れ人空觀なり。二には無我觀、瓶體、實無きが如し、五蘊の諸法は皆假名なるが故に、是れ法空觀なり。既に二空を明す、故に其義最長なり。問ふ、『若し爾らば二執を斷すべし、一空を顯すが故に。』答ふ、『然らず。二空を談すと雖も、唯見思を斷じて、所知障を斷ぜず、當是れ智解甚深の故に。』

【五】此論の中に二十七賢聖を明し、以て賢聖の階位を攝す。其二十七とは、一に隨信

を明す。

【八十四法】 成實宗にては萬有を八十四法に分つ。

【一滅諦】 人空法空の上に更にその空も亦空なりといふ。

【虛通妙通】 微妙の融通といふ意。

【一】 律宗の名稱を明す。
【二】 印度に於ける諸律の成立を明す。

行、聞思の位に有り。二に隨法行、四善根の位に有り。三に無想行、即ち前二人、見道に入るが故に。此れ之三人を預流向と名く。四に須陀洹果。五に一來向。六に一來果。七に不還向。不還果の中に十一人を開く、一に中般、二に生般、三に行行般、四に無行般、五に樂慧、六に樂定、七に轉世、八に現般、九に信解、十に見得、十一に身證、並に前の七人を合して十八と成る、有學の人と名く。自下の九人は、竝に是れ無學なり。一に退法相、二に守護相、三に死相、四に住相、五に可進相、六に不壞相、七に慧解脫、八に俱解脫、九に不退相なり。並に前の十八を合して二十八賢聖と成る。八十四法に諸法を攝め盡す。

律宗

【一】 未だ大乘に進入せずと雖も、小乘の中に於て尤も優長なりと爲す。定に怪むべし、是れ大乘歟。一切諸法、唯一滅諦に歸し、空理寂然として、諸法此上に立す。實法の堅情は氷の如く釋け、假有の萬像は林の如く森し。虛通妙通、其旨深し。

【一】 問ふ、何が故に律宗と名くるや。答ふ、律を所依となすが故に、律宗と名く。

【二】 問ふ、律に幾部有りや。答ふ、律に諸部有り。謂く、二部と五部と十八と五百となり。是れ如來の在世、五十箇年、機に隨ひて散説す。滅後の弟子、座に昇りて結集し名けて一部の八十誦律大毘尼藏と爲す。佛滅百年、五師瀉瓶、純らは是れ一味にして未だ異

【二部】 上座部、大衆部。

【五部】 薩婆多部、曇無德部、摩訶僧祇部、彌沙塞部、迦葉遺部。

【二八】 小乘二十部より上座大衆を除きていふ。

【五百】 小乗の五百部。

【一大藏】 經律論の三藏を合せ呼ぶたるもの。

【三】 律藏の支那譯を明す。
【受體】 戒體のこと。受戒せし者が永くその戒を失はぬやうに相續せしむる戒の力をいふ。
【隨行】 戒體の力に依りて永く戒をたもち行ふこと。

見を分たす。一百年の後、漸く二部五部及び二十部、乃至五百を分ち、異見競ひ鼓すこと、猶し浩波の如し。經論も亦然り、三藏等の教は、一類をもて分るが故に。其中の律部、計に隨ひて異成す。故に一大藏、分れて諸部となる。此の如きの諸部、數多けれども、二十部の内に出不ず。故に律部の中にも二十部有り、天竺の間に諸部並び弘まる。

【三】 然るに震旦に傳ふるに、總じて四律及び五論有り。其四律とは、一には「十誦律」譯して六十一卷を成す、是れ薩婆多部の律なり。二には「四分律」譯して六十卷を成す、是れ曇無德部の律なり。三には「僧祇律」譯して四十卷を成す、此れ根本二部の中、窟内の上座なり、大衆の名、二部に通するが故に。四には「四分律」譯して三十卷を成す、此れ五部中の彌沙塞部なり。迦葉遺律は唯戒本を傳へて、廣律は未だ流はらず。四律並びに震旦に傳じ、悉く行はる。然も獨り後代に流はるもの、唯曇無德部の四分律宗のみ。其五論とは、一に「毘尼母論」、二に「摩德勒伽論」、此は薩婆多律に依る。三には「善見論」、此は「四分律」を解す。四には「薩婆多論」、此は「十誦律」を釋す。五には「問了論」、此は正量部の律に依る。自外の毘奈耶律、及び新譯有部の諸律、並びに震旦に傳はる。然るに「四分」の一律、此土に縁深し。昔智首律師已前は、諸部雜亂して未だ是れ専ら、概ばす。智首律師、南山律師或は「五分區分鈔」を製し、或は震旦を検し、初めて受體を興すや、専ら「四分」によりて受體を明し、唯曇無に憑りて隨行を談ず、爾りしより已來、乃し日域に至るまで、唯此部を傳ふ。故に且く「四分」一律に就いて興起の根元を述べ、傳弘の由來を明さん。

【四】四分律宗の起源を明す。

【五】四分律宗の支那日本流傳を明す。

【廣律】四分律六十卷を指す。【毘盧舍那殿】東大寺の大佛殿をいふ。【戒壇院】戒律を受ける式場。

【六】四分律宗相承の系統を明す。

【總別】總は律全體を指し、別は四分律宗を指す。【理在絶言】道理が十分に顯れて言論説明の必要なきこと。

【四】問ふ、『四分律宗は何の時に興るや。』答ふ、『未分已前は一味瀉瓶なり。如來在世には機に隨ひて散設す。佛滅百年は結集流傳す。一百餘年の時、曇無德羅漢、見に隨ひて誦出し、以て一部を爲す、此れ此時、此部始めて分出せり。』

【五】問ふ、『震旦、日本は何れの時に傳ふるや。』答ふ、『曹魏の世、法時尊者、受戒を創め、姚秦の世、覺明三藏、始めて廣律を傳ふ。是れ震旦傳戒の由來なり。』

日域に至りては、昔天平年中、日本の永徽、普照、此二師唐朝に往き、大明寺の鑿眞大和尚を請す。即ち請ひに應じて日本に來至す。途の難極めて多し、而も之を奈ともせず、十有二年、海中難を忍び、逆浪六廻、志都て倦まず。第六度の時、遂に日本に來至す。請じて東大寺に入らしむ。聖武天皇、王子、百官、歡喜感悅し、即ち毘盧舍那殿の前に、壇を築いて受戒を行ふ。天皇、皇后乃至四百餘人、竝に皆受戒す。後に大佛殿の西に遷して、別に戒壇院を建つ。爾りしより已來、年年受を行つて今に絶えず。日本の諸州、戒律の教宗、厥時廣く行はれ、依瓶せざる莫し。又唐招提寺を建てて戒律を傳弘し、今に至るも續續として絶えず。戒律の教宗、日域に傳流するもの、偏に是れ鑿眞大和尚の力なり。

【六】問ふ、『此宗幾くの祖師を立つるや。』答ふ、『迦葉尊者自ら宋朝の近來に至るまで其數總別甚だ多し。謂く、佛は是れ教主なれば、理在絶言なり。迦葉尊者、阿難尊者、末田地尊者、商那和須尊者、優婆鞠多尊者、曇無德者と云ふ。曇摩迦羅者と云ふ。法聰律師、

法聰律師、

【七】四分律宗の分派を明す。法蘊律師の著四分疏十卷をいふ。

【亂文】文章の美しきこと。道宣律師の行事鈔等の五大部を指す。

【受隨相稱】受體と隨行と一致すること。

【大小途和】大乘小乘が互に調和すること。

【解行相應】智解と修行、即ち理論と實行が相應すること。

道覆律師、慧光律師、道雲律師、道洪律師、智首律師、南山律師、周秀律師、道恆律師、省躬律師、慧正律師、法寶律師、元表律師、守言律師、無言律師、法宋律師、處恆律師、擇悟律師、允堪律師、擇其律師、元照律師是なり。若し別して當律の初興に據らば、南山律師に至るまで、驗して九祖と爲す。法正尊者自らして之を取るが故に。南山已後は次第前に同じ。若し日本の弘傳に依らば、南山律師、弘景律師、鑒眞大僧正、法進大僧都、如寶小僧都、豐安僧正等是なり。

【七】問ふ、『四分律宗も頗し異解分流有りや。』答ふ、『唐朝に之れ有り。謂く、相部の法蘊律師、終南山の道宣律師、西太原寺の東塔の懷素律師、各異義門業を立てて、互に諍ふ、此を律の三宗と名く。鑒眞和尚は相部の大疏、南山の亂文竝に日本に傳へ、諸寺諸山、竝に彼唐朝の三宗を講通せしむ。後には唯南山のみ遺れり、自餘の諸宗は廢絶して行はれず。良に以れば、南山の宗義、受隨相稱ひ、行相備足し、大小途和し、解行相應するが故なり。古今の諸師俱に競うて嘆美し、諸宗の賢哲竝に翫んで依學す。『行事鈔』の如き、七十三家互に記解を造る。自界他方俱に承奉を致すこと、誰か祖師の如き有らん、賢哲の嘆する所の人、何ぞ其れ此の如くなるや。汎く之を言はば、『四分律藏』翻譯已來、諸師疏を製すること二十家に將んとす。然も要を取りて之を言はば三疏に過ぎず。慧光律師の『略疏』四卷、相部律師の『中疏』十卷、智首律師の『廣疏』二十卷、此を三要疏と名く。然も唐朝の三宗、確宣素の義も、以て攝束して諸解多く此三に在り。相部の『大疏』は、

【自界他方】南山律師の住處を自界といひ、其他を他方といふ。

【東京】唐の洛陽(マ)梵音カラム(kauma)作法と譯す。戒の作法をいふ。

【八】止作二持の概觀を明す。

【止持戒】惡を止むる戒を持つこと。即ち諸惡莫作。

【作持戒】善を作すと。即ち業善奉行。

【說戒】罪を懺悔する作法。

【具足戒】僧の二百五十戒。尼の三百四十八戒をいふ。

【九】比丘の具足戒を明す。

【四波羅夷】死罪に相當せる佛教中の最大罪なり。

【十三僧殘】波羅夷に次ぐ大罪なり。

【尼薩者波逸提】捨せざれば地獄に墮す罪。

崇岳律師、記を作りて解釋す、『節宗義記』十卷是なり。智首律師の『大疏』は、既に是れ南山の所承、故に南山と一途なり。東塔律師の『四分開宗記』十卷、獨り天下に流行す。五に美を盡すと謂ひ、俱に指南と稱す。唐朝の末、東京に競ひ起る。又玄仲律師の『毘尼討要』三卷、餘家と少しく異り、『四分』の『大』小『等』の疏も是なり、俱に多分は南山に同じ。此六家の章疏、日本に竝に傳ふ。今は盛んに南山一家を依學し、兼て崇岳新家の義を奉行す。

三宗律義の不同は、繁きを恐れて述べず。南山律師、章疏を製作す、總じて五大部有り、一に『行事鈔』三卷分ちて十二に、『戒疏』四卷となす。三に『業疏』四卷となす。四に『捨毘尼義鈔』三卷唯上中のみあり、今四卷に分つ。五に『比丘尼鈔』三卷となす。戒本、羯磨竝に注解を作り、及び小部の律章、自餘の諸文、部帖多多具に擧ぐべからず。南山律宗正しく依學する所は、即ち此五大部等なり。其本所依は即ち『四分律』六十卷是なり。其論釋を言はば、即ち『善見論』是れなり。

【八】問ふ、『此宗何の法義を明すや。』答ふ、『此宗、戒を明す。二種有り。一に止持戒、五篇の諸の止惡門なり。二に作持戒、說戒等の諸の修善門なり、如來所說の一切の諸戒は、二持に攝束し、皆悉く窮盡す。故に本律の正宗所說の義理、唯此止作の二持のみ。初の二部の戒本是を止持と名け、後の二十撻度、是を作持と名く。二部の戒本とは、僧尼の二部なり。比丘、比丘尼の持つ所を具足戒と名く。』

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【九】戒本所說の二部の戒の中、初めに僧戒を明さば、僧に二百五十戒有り、分ちて八

【波逸提】懺悔せざれば地獄に墮す
 【提舍尼】僧衆の前にて懺悔すれば消罪する罪
 【百衆學】僧衆の學ぶべき一百戒の誦を止む
 【七減諍】僧衆間の諍を止む
 【突吉羅】輕き惡行
 【偷蘭遮】麤惡
 【惡作惡說】突吉羅罪を二分し、身口に云ふを惡說とす

段と爲す。一には波羅夷、此に四戒有り、姪盜殺妄なり。二には僧殘、此に十三戒有り、一に故出精戒、二に觸女人戒、三に麤語戒、四に嘆身索供養戒、五に媒嫁戒、六に有主房戒、七に無主房戒、八に無根謗戒、九に假根謗戒、十に破僧違諫戒、十一に助破僧違諫戒、十二に汚家損謗違諫戒、十二に惡性拒僧違諫戒なり。三には二不定、一に屏處不定、二に露處不定なり。四には尼薩者波逸提、此に三十有り、長衣と離衣と長鉢と乞鉢等なり。五には波逸提、此に九十有り、小妄語と兩舌語と掘地と壞生と飲酒と非時食等なり。六には四提舍尼、蘭若受食と學家受食等なり、七には百衆學戒、齋整著衣と戲笑と跳行等なり。八には七減諍、現前毘尼と憶念毘尼等なり。此八段に具に二百五十戒を攝む。

【二〇】八段を攝束して以て五篇と爲す。一に波羅夷、二に僧殘、此二攝罪は即ち前段の如し。三に波逸提、前の捨墮と單墮とを合して一と爲す、總じて百二十戒を攝す。四に提舍尼は前の如し。五に突吉羅、二不定と百衆學と七減諍とを合して以て一篇と爲す、總じて一百九戒有り。此れ果罪及び急要の義に就いて、立てて五篇と爲す。自外の諸罪は六聚を立てて之を收攝す。一に波羅夷、二に僧殘、三に偷蘭遮、四に波逸提、五に提舍尼、六に突吉羅、是を六聚と爲す。若し吉羅を開すれば、即ち七聚と爲り、五は全く前の如し。六に惡作、七に惡說なり。七聚の中、夷と殘と墮罪と及び提舍尼とは、攝罪、篇門に同じ。偷蘭の一聚に、五篇の外の、聚門の吉の外の一切の因果輕重の諸の罪を攝す。惡作、惡說は、篇門の吉と及び餘の一切の因果の吉罪とを攝す。故に六聚を離れて更に罪有ること

【二】比丘尼の具足戒を明す。

と無し、六聚と七聚と罪を攝し盡すが故に。

【二】次に尼戒を明さば、比丘尼の戒、本律の説相、唯三百四十一戒有り。東にて六段と爲す。一に八波羅夷、二に十七僧殘、三に三十捨墮、四に一百七十八單提、五に八提舍尼、六に百衆學なり、尼には二不定無し。其七滅諍は古來の證論なり、或は有るべしと、或は有るべからずと云。今南山律師の義は必ず有るべしと云。本律の支略するが故に、七段なるべし。故に七滅を加へて總べて三百四十八戒有り。此れ亦五篇を出でず。比丘戒に準じて知るべし。此を二部の廣律と爲す。本律前半に説く所の法門分齊此の如し、止持戒なり。

【三】二十韃度を明す。
【韃度】梵音クハ
ンダ(Khandha)篇
と譯す。

【三】止作二持と
五大部を明す。

【三】次に作持門の韃度の法とは、本律の後半二十韃度なり。一に受戒韃度、二に説戒韃度、三に安居韃度、四に自恣韃度、五に皮革韃度、六に衣韃度、七に藥韃度、八に迦絺那衣韃度、九に拘睺彌韃度、十に瞻波韃度、十一に呵責韃度、十二に入韃度、十三に覆藏韃度、十四に遮韃度、十五に破僧韃度、十六に滅諍韃度、十七に尼韃度、十八に法韃度、十九に房舍韃度、二十に雜韃度なり。此を二十韃度と名く。此等は並に是れ作持戒なり。

【三】然るに二段の本律、互に通ずること無きに非ず。止持に作有り、作持に止有り、互に通ずること有りと雖も、多分に就いて前後兩段を判じて以て二持に配す。若し五大部に對すれば、『事鈔』と『戒業』兩疏とを三大部と名く。『戒疏』は即ち止持の行相、防止隨持の事、詳なり。『業疏』は即ち作持の修行、羯磨攝僧の義、明かなり。『事鈔』は止作を雙

【衆自共三行】四人以上の作法を衆人。二人三人の作法を共行一人の作法を一行といふ。

【四】具足戒の數を明す。

【威儀】規律のこと。

【五】七衆と戒數を明す。

び明し、衆上。自一人。共二人。三の三行、二持備足す。其ニ鉢の一部分は別して尼の二持を明し、『義鉢』の一部分は多く止持を解す。故に祖師の諸文唯二持に有り。此二持の戒に總有り、別有り、總じて之を言はば、一切の諸善皆二持に攝す。別して之を言はば、唯戒律の二宗に就いて之を明す。今の二持とは、且く戒律の一門に就いて之を言ふ、若し總門に就いても其義無きに非ず。

【四】問ふ、『僧尼の具戒は此に局るや。』答ふ、『然らず。僧尼の具戒は無量無邊なり。若し數限を定むるは、且く縁に隨ひて制するが故なり。僧尼の戒量に各三重有り。僧戒の三とは、廣は則ち無量、中は則ち三千の威儀、六萬の細行、略は則ち二百五十戒なり。尼戒に三重有りとは、廣は則ち無量、中は則ち八萬の威儀、十二萬の細行、略は則ち三百四十戒なり。經に五百戒と説くも、是れ名有りて相無し。大智律師の云はく、『境に托して言はば、戒は則ち無量なり、且く二百五十を列ねて、持犯の綱領と爲す』と上。尼戒も亦爾り。故に僧尼の二衆、具戒を受くる時、並に此の如き無量無邊等の戒を得、量、虛空に等しく、境、法界に遍し、圓足せざる莫し、故に具足戒と名く。

【五】其五戒、八戒、十戒、六法等は、皆具戒の中より之を抜き、漸く機根を誘うて以て具戒の方便と爲し、漸漸に進登して、遂に具足無願位を成ぜしむるが故に。是故に總じて戒を言はば四位有り、五戒と八戒と十戒と具戒となり。若し六法を加ふれば總じて五類なるべし、佛法の七衆建立する所以なり。其七衆とは一に比丘、二に比丘尼、此二衆は並

【式又摩那】正學女、學法女と譯す

【沙彌】勤策男と譯す

【沙彌尼】勤策女と譯す

【優婆塞】近事男と譯す

【優婆夷】近善女と譯す

【二六】律宗の判教

化制二教を明す

【化制二教】一般に衆生を教化して道に進ましむる教を化教といひ、衆生の護るべき法律を制定したる教を制教といふ

に具足戒なり。三に式又摩那、此は六法を受く。四に沙彌、五に沙彌尼、此は並に十戒なり。六に優婆塞、七に優婆夷、此は並に五戒なり。前の五衆は是れ出家衆、後の二は在家なり。式又と沙彌と及び沙彌尼との戒相は、標數十戒等なりと雖も、護持に至りては並に其位に同じ。其八齋戒は、在家衆の爲に出家の戒を授く。然も位は唯在家にして優婆塞、優婆夷の攝なり、七衆の外に別衆無きが故に。其五戒とは一に不殺生戒、二に不偷盜戒、三に不邪淫戒、四に不妄語戒、五に不飲酒戒なり。八齋戒とは、前の五は上に同じ、但邪淫を改めて以て不淫と爲す。六に香油塗身戒、七に歌舞觀聽戒、八に高廣大床戒、九に非時食戒なり。『薩婆多論』に云はく、「八箇は是れ戒、第九は是れ齋、齋と戒と合せ數ふ、故に九有るなり」上。十戒と言ふは、前の九は上に同じ、第十は捉金銀寶戒なり。其六法とは、一に殺畜生、二に盜三錢、三に摩觸、四に小妄語、五に飲酒、六に非時食なり。此七衆の中、男衆に三有り、比丘と沙彌と及び優婆塞となり。女衆に四有り、即ち餘の四、是なり。

【二六】問ふ、『此宗、幾教を立てて諸教を攝するや。』答ふ、『南山律師、化制二教を立てて一代教を攝す。亦化行二教とも名く。其化教とは、經論所詮の定慧の法門、『四阿含』等是なり。其制教とは、律教所詮の戒學法門、『四分律』等是なり。今此宗の部は、即ち律藏教なり、戒を以て宗と爲す。戒行清淨なれば、定慧自ら立つ、故に先づ戒を持ち、業非を制禁し、然る後定慧、煩惱を伏斷す。已上南山道の爲に戒を制す、本世福に非ず。』

【二七】持戒の果報を明す。
【應果】應供の果報。人の供養に應じ得る資格ある人をいふ。

【世善】世間の幸福。

【八】四分律宗の位置を明す。

【五義分通】四分律宗が分通大乘なることを證明する五通りの理由。

三乗の聖道、戒に非ずんば立せず、故に如來最初に戒を制したまふ意茲に在り。」

【二七】問ふ、「常途に言ふが如き、五戒と八戒とは人天の報を感じ、十戒と具戒とは唯應果を得と云。此義如何。」答ふ、「義、未だ必ずしも然らず。若し五八戒を持ち、因に任せて報を感ずれば即ち唯人天、十戒具戒、因に任せて果を感ずれば、即ち是れ小果なり、此義に依るが故に、常途に爾云ふ。若し意樂に約すれば其義爾らず。故に大智律師の云はく、「戒に四位有り、五八十具なり、若し鈍根に約すれば通じて世善と爲る。若し上智を論ずれば、俱に道基となる」と上。故に知んぬ、戒法は機に隨ひて異有り、此は是れ今宗の所談、祖師、建立の意致なり。」

【二八】問ふ、「四分律宗は、大小乗の中、正しく是れ何れぞや。」答ふ、「律宗は諸家の所判不同なり。慧光律師の云はく、「四分の一律宗は、是れ大乘」と云。法蘊、玄暉等の師は玆に云はく、「唯是れ小乗」と云。南山律師の云はく、「此四分宗は義、大乘に當る」と云。今此義に依りて盛に所憑と爲す。故に『業疏』の中に五義分通を立つ、謂く、齊婆の廻心と、施生成佛、共に佛道を成ぜん」と、議、塵境を了すると、相召んで佛子とすると、捨財を用ふるは輕しと、遂に餘部に超え、定に深義と爲す。上の諸戒を束ぬるに、總じて四科有り、一には戒法、如來所制の法、萬境に通ずるが故に。二には戒體、受者の所發、心府に領納するが故に、今四分宗は、『成實論』に依り、非色非心を體と爲す。三には戒行、受の上に隨持し、三業運造するが故に。四には戒相、美德外に彰れ、持相軌とすべきが故に。一切

【一九】三教の教例を明す。

【行果】修行を因として證の果を得

【性空教】小乗教

【相空教】權大乘

【唯識圓教】實大乘

【圓融三學】戒定慧の三學互に融通無礙す。

【諸宗所談の戒體】俱舍宗の色法戒體説、成實宗の非色非心法戒體説、法相宗の心法戒體説をいふ。

【唯識教】法相宗を指す。

【三聚淨戒を明す。】三聚淨戒を明す。

【藏識】第八阿頼耶識。

の諸戒成く此四を具す。」

【二九】問ふ、「今宗の所立、及び祖師の意致、大小乗の中、何れの行果を本とするや。」答ふ、「此教の所依は本是れ小乗なり、四分の本律は、元小乗に被るが故に。然も義は大乗に當る、機根漸進の故なり。當分小乗の故に小として兼ねざる無く、分通大乘の故に、大として期せざる無し、此は是れ今教所説の所旨なり。若し南山律祖の意に據らば、如來一代所説の法門、大小の諸教、分ちて三教と爲す。一には性空教、一知の小乗は即ち此中に攝す。二には相空教、一切の大乘の淺教は悉く攝す。三には唯識圓教、一切の大乘の深教は悉く攝す。今四分宗は即ち性空教の中の一、唯識圓教は、是れ祖師の域心なり、圓融の三學、無礙の圓行の故に。『業疏』の中に、諸宗所談の戒體を明すに、三宗の義を出し、有宗と空宗とは竝に性空教に攝し、圓教の妙體は是れ唯識教なり。」

【三〇】大小の二宗、各三學を立つ。且く大乘圓教の三學とは、戒護即ち三聚淨戒なり、藏識の種子を以て其體と爲す。定慧は即ち唯識の妙行、止觀並び運んで以て其相と爲す。戒即定慧なれば、一法として定慧に非ざるなく、定慧即戒なれば、一法として戒に非ざる爲し、此を圓融三學の行相と名く。其中の戒は、即ち前に標する所の三聚淨戒なり。謂く、攝律儀戒、一切の諸惡皆悉く斷捨するが故に。攝善法戒、一切の諸善、皆悉く修行するが故に。攝衆生戒、衆生を荷負し、遍く利益を施すが故に。此三聚亦圓融の行の故に、三聚互に攝し、諸戒融通す。不殺生の如き、即ち三聚を具す。乃至一切の諸戒皆爾り。一

【生佛平等】衆生と佛と平等なること。

【白四羯磨】具足戒を受ける時の作法の名をいふ。

戒を持つに随ひて三聚全具す。是れ一行と雖も、廣く萬行を攝す、故に一念と雖も、頓に三戒を經、三戒を壞せずして一念を立て、一念を退せずして而も三戒を經、長短無礙、生佛平等、諸法互に遍く、相即無盡なり、豈深妙に非ずや。攝善と攝生とは目く略して論ぜず、其律儀戒に亦三種有り。一に別解脱戒、二に定共戒、三に道共戒なり。其初めの別解脱の中に三業有り、即ち身語意所持の戒なり。身語の二戒に共と不共と有り、意戒の戒は唯是れ不共、故に聲聞の受くる所は、唯此身語の一分、共門の分齊なり。『四分律』等の説く所の戒相は、即ち此分齊なり。但し『四分律』は分に意戒に通ず。此義に依るが故に。今大乘宗は、此共門の戒を三聚の中に入れ、會して大乘に歸するが故に、小乘律所説の戒行皆是れ三聚圓頓の大戒にして更に別相無く純一圓極なり。彼七衆の軌則全く小律に同じ、律儀戒の中に之を建立するが故に。此れ即ち南山大師教觀の宗旨、學者受隨解行の域心なり。然るに此三聚戒を受くるに通受有り別受有り、三聚通じて受くるが故に通と云ひ、別して律儀を受くるが故に別と云ふ。今祖師、所立の白四羯磨圓意の戒法は即ち彼別受に當る。然る後、菩薩戒を受くるものは、即ち通受に當る。故に今律宗の學者、通別の二受、義遍く壇場に納め、『四分』林網に戒相を護る。通別の二受、名は法相の家より出で、義は南山の林に有り、五篇七衆の制は、聲聞の叢に起りて、行は大乘の園に互る。明かなるかた『瑜伽大論』の誠説、南山高祖の定判、行者の域心當此宗に有り、大覺の妙果、豈夫れ驗ならんや。

八宗綱要下

凝然大德述

法相宗

【一】法相宗の名解を明す。
 【性相】性は體性本體、相は相狀、現象。
 【唯識宗】本宗はものの本體を我等の心識なり、と云ひ、一切の現象界は鬼も佛も皆この心識より現出するものなりとす。

【二】法相宗の所依の經論を明す。

【一】問ふ、『何故に法相宗と名くるや。』答ふ、『諸法の性相を決判するが故に、法相宗と名くるなり。況く此宗を言へば、總じて四名有り。一には唯識宗と名く、此宗の大意唯識を明すが故に。二には應理圓實宗と名く、一切の法門皆理に應ずるが故に。三には普爲乘教と名く、五乘を攝するが故に。四には法相宗と名く、其義前の如し。今は其一を擧ぐるなり。』

【二】問ふ、『此宗は何等の經論に依憑するや。』答ふ、『唯識論の中に、六經と十一部の論とを引く。其六經とは、『華嚴』と『深密』と『如來出現功德莊嚴』と『阿毘達磨』と『楞伽』と『厚嚴』と是なり。十一部の論とは、『瑜伽』と『顯揚』と『莊嚴』と『集量』と『攝論』と『十地』と『分別瑜伽』と『辨中邊』と『二十唯識』と『觀所緣』と『雜集論』と是なり。若し總じて之を言はば、五部の大論、十支の論等、皆彼所依なり。然も『解深密經』と『瑜伽論』と『唯識論』等と、特に所學の指南と爲す。』

【三】印度の法相宗を明す。
【五部の大論】瑜伽師地論、分別瑜伽論、大莊嚴論、辨中邊論、金剛般若論。
【非空非有中道の妙理】萬有を以て空に非ず有に非ざる中道なりとの妙なる眞理を示す。

【四】支那の法相宗を明す。

【三】問ふ、「此教は、誰を以て祖師と爲すや。」答ふ、「此教、三國の次第相承、分明なり。如來滅後九百年の時、彌勒菩薩、都率天より、中天竺阿瑜遮國に降り、瑜遮那の講堂に於て、五部の大論を説きたまふ。補處の薩陞、位、十地に居す、是れ即ち如來在世親聞の所傳、非空非有中道の妙理、諸教の中に於て、寔に明鏡と爲す。「瑜伽論」の如きは、卷軸百卷有り、諸教悉く判するが故に、「廣釋諸經論」と名く。次に無著菩薩有り、位、初地に居す。慈尊に次いで廣く此宗を傳へ、慈氏の教文、咸く委解を加へ、釋尊の所説、廣く論釋を造る。次に九百年の時、世親菩薩有り、弟なり。四善根の中、明得の薩陞、無著菩薩に承け、廣く此宗を傳へ、慈氏の論に依りて盛に論釋を施す。初め小乘を學び、五百部の論を造り、後に大乘を弘め、亦五百部の論を造り、一代の教文、皆悉く通達す。次に護法菩薩有り、深く世親の論を解し、遠く慈氏の教を弘む。賢劫の一佛、空中に告明し、外道の邪執、口を閉ぢて瘧の如く、異部の小乘、舌を卷いて訥に同じ。故に西天の外道小乘、竝に稱して云はく、「大乘に唯此人有り」と。云。次に戒賢論師有り、傳法の大将、當時倫を絶し、法相の法門、咸く傳へ、一代の教義皆解す。此五大論師は俱に是れ天竺傳法の匠なり。

【四】次に大唐の初蓮に玄奘三藏有り、遠く流沙を涉り、賧に天竺に往き、遂に戒賢論師に謁し、廣く此宗を傳ふ。戒賢論師、三藏を待つこと良久し、即ち五部の大論、十支の論等、凡そ法相の法門遺すこと無く皆傳へ、遂に震旦に還り、盛に此宗を弘む。三千の門

【四人の上足】神昉、嘉尚、普光、窺基の四大弟子。

【五】日本の法相宗の三傳を明す。

【六】法相宗の判教を明す。三時教判。

【聲聞乘】緣覺乘をも含む。

【外道實我執】外道の一派にして、吾吾には眞實の我といふ主體が實在せりと執着するをいふ。

徒、七十の達者、四人の上足有り、一朝歸仰し、四海朝宗す。自餘の諸の經律論翻傳極めて多し、是れ大唐法相の始祖、天竺相承の第六なり。次に窺基法師有り、是れ三藏の上足にして、智解、倫を絶し、三藏に繼いで、廣く此宗を傳ふ。斯れ廻ち百本の疏主、十地の應迹、盛徳、出萃、世を擧つて歸仰し、慈恩大師と號す。次に淄州の慧沼大師あり、慈恩大師に繼ぎ、盛に此宗を敷く。次に樸楊の智周大師有り、淄州大師に稟け、廣く此宗を傳ふ。此れ竝に大唐國相承の次第なり。

【五】日本に流傳するに至りては、總じて三傳有り。一には日本の智通、智達の二人、玄奘三藏に稟く。二には新羅の智鳳禪師、玄奘三藏に承け、始めて日本の義淵僧正に傳へ、相宗を維摩堂に弘む。三には日本の玄昉僧正、入唐して樸楊大師に受學し、還りて善珠僧正に授く。爾りしより已來、次第に相承し、滿寺修學して今に絶えず、竝に是れ龍象の衆徒、智辯の鋒、寔に利し、咸く是れ師子の盛徳、決擇の音極めて猛し。和國一字、盛に法相を敷く、何れの宗か之に及ばんや、三國の相承、一も墮つること無し。

【六】問ふ、「此宗幾時の教を立てて一代教を攝するや。」答ふ、「三時教を立てて一代教を攝す、是れ則ち『解深密經』の誠說分明なるが故なり。一には有教、佛初時の中に、彼聲聞乘に發趣する者の爲に、外道實我の執を破し、我空法有の旨を明す、諸部の小乘は皆此教に攝す、且く此は有の義に約す、餘は皆攝すべきが故に。二には空教、第二時に於て、大衆に發趣する者の爲に、諸法皆空の旨を明し、以て前の實法の執を破す。三には中道教、

【我空法有】 俱舍宗の世界觀。

【發趣大乘】 小乘の人の中に於て機根向上して大乘教の方面へ廣立つものをいふ。

【偏有偏空】 有空の一個にかたよること。

【依他】 依他起性のこと。

【三性】 遍計所執性、依他起性、圓成實性。

【三無性】 相無性、生無性、勝義無性。

【二邊】 有と空との二邊。

【正路】 中道の真理。

【七】 三時の次第を明す。

【年月次第】 釋尊の五十年間の御說法を年時の順序にて三時に區別すること。

【義類次第】 教義の淺深に依つて分類し順序をつけること。

【八】 三時の教理

第三時の中に、非空非有の旨を説き、以て前の偏有偏空の執を破す。然らば則ち初時は唯依他に約して有と説き、第二時は唯我執に約して空と説く、未だ是れ三性、三無性、顯了の設に非ず。故に前二時を名けて未了評論安足處所と爲す。第三時の中に具に三性、三無性を説く。遍計所執の故に有に非ず、依他起性の故に無に非ず、是れ則ち非空非有中道の妙理、元より二邊を離れ、直に正路に入る。一代の中、尤も甚深にして、八萬の間、特に微妙たり。『華嚴』『深密』『金光明』『法華』『涅槃』等の諸の深大乘は、皆此中に攝す。諸部の『般若』は、皆第二時に攝し、諸部の小乘は竝に初時に攝す。』

【七】 問ふ、『此三時とは、年月の次第と爲んや、義類の次第と爲んや。』答ふ、『學者の異義同じからず。或は云はく、『年月の三時』と云。或は云はく、『義類の次第』と云。或は

『義類年月兼帶の三時』と云。』

【八】 問ふ、『第三時の中の中道とは、但三性に約して立つるか、頗し一法の中に有りて中道を明すや。』答ふ、『此に二義有り、一に云はく、『三性對望の中道』と云。二に云はく、『一法の中道』と云。然るに多くは是れ三性對望の中道のみ、亦一法の中道もあるべしと云。』

問ふ、『第二時中、如何が空と説くや。』答ふ、『此に二義有り、一に云はく、『遍計所執に約し、密意を以て皆空と説く』と云。一に云はく、『三無性に約して空と説く』と云。』

【九】 問ふ、『此の幾許の乗を立つるや。』答ふ、『此宗の教の中に三乘五性を立つ。其五性とは、一に定性聲聞、二に定性緣覺、三に定性菩薩、四に不定種性、五に無性有

【一法の中に有り】を明す。
 【二法の中を明すや】三性の中、唯一性づつの上にて中道義をたてるかとの問なり。
 【九】五性各別を明す。
 【定性】最初より善識なり聲聞なり緣覺なり得る性質あるをいふ。
 【不定種性】先天的に本性が一定せず努力修養によつて悟り得る性質。
 【無性有情】迷の世間を離れ得る性質を缺き人天界以上に進み得ぬ衆生を明す。
 【入寂の二乘】無餘涅槃に入りたる聲聞、緣覺。
 【還生】再び三界に還り生ること。
 【灰身滅智】身は灰となり、心は滅すること、身も心も共に絶對の虛無空寂になること。

情性なり。二乘は自の乘の果に隨ひ、並に無餘入寂す。菩薩種性は二利の行滿じ、大菩提を證す。無性有情は、法爾として無漏の種子有ること無し、唯有漏の種子のみ有り、若し昇進して人天の中に生るれば、之を以て上と爲す。

【二〇】問ふ、『入寂の二乘に還生有りや。』答ふ、『此れ無し。無餘に入る者は灰身滅智して諸識皆滅す、何ぞ還生有らん。』不定性の人は必ず廻心向大し、都て入寂無し、廻心の時、十信の初心に入り、初住より僧祇の位に入り、乃至成佛す。衆生の機、法爾として此五性の差別有り、故に佛、此一の機根に隨ひ、彼に相應の法を授く、故に必ず五乘を成す。謂く、無性有情は是れ人天乘、三乘定性を以て三乘と爲し、不定種性は應に隨つて三に通ず、故に五乘有り。若し唯出世に就かば即ち三乘を立つ。普爲乘の名、定に茲に由る。』

【二一】問ふ、『彼法華等、既に一乘と説く、故に定性の二乘も皆成佛すべし、何ぞ強ひて五性を立てんや。』答ふ、『彼法華等は是れ密意の説なり、且く不定性に約して一乘と説く、五性俱に成佛すと謂ふには非ざるなり。縱ひ一切と言ふも、是れ少分の一切のみ。無始より法爾として、五性の差別は改むべからざるが故に。』

【二二】問ふ、『三乗の修行得果の相如何。』答ふ、『聲聞は三生六十劫にして應果を證し、緣覺は四生百劫にして其果を證し、菩薩は三僧祇を経て大覺の果を得ず。』

【二三】問ふ、『菩薩の位に就いて總じて幾種を立つるや。』答ふ、『因果合論するに總じて四十一位を立つ。謂く、十住、十行、十廻向、十地、佛果なり。若し等覺を開すれば四十

【諸識】 眼耳鼻舌
身意の六識。

【二】 法相宗の一
乗の解釋を明す。

【一乘】 一佛乘。
全ての衆生が佛と
なり得ることを説
く教をいふ。

【三】 三乗の行果
を明す。

【應果】 應供の果
報。

【一】 菩薩の四十
一位を明す。

【因果合論】 菩薩
の修行中を因位と
し、佛の悟を開き
たる位を果位とし
菩薩の位と佛の位
とを合せ數へるこ
とをいふ。

【十信】 眞理を信
じ佛道に入るに十
階級あり。

【十住】 十信より
進みて眞理に安住
する位。

【十行】 十住より
進みて利他の行を
修むる位。

【十廻向】 十行の
修行の功德を廻向
して、上は佛果を

二位なり。然も法雲地に攝す。又十信を開すれば五十一位なり、然も十信を以て初住に攝するが故に、慈恩大師は唯四十一位を立つるなり。若し西明法師は、具に五十二位を立つと云。此四十一位、束ねて五位と爲す。一に資糧位、是れ地前の三十心なり。二に加行位、第十廻向の後に四善根を開いて、以て見道の加行方便となす。三に通達位、是れ初地の入心、見道の位なり。四に修習位、初地の住心より乃至十地是なり。五に究竟位、謂く、佛果なり。是を此れ五位の修行と名くるなり。

【二四】 問ふ、「三乗の人、何等の障を斷するや。」答ふ、「二乗の人は、唯煩惱障を斷じ、菩薩大乘は具に二障を斷す。二障とは、一に煩惱障、二に所知障なり。二障に各二有り。謂く、分別と俱生となり。菩薩地前に分別の二障の現行を伏し、所地に彼二障の種子を斷す。二地已上乃至十地に、地地に漸く俱生の所知障を斷じ、第十地に至り、俱生と煩惱障との種子を斷す。二障の習氣は、二地已上、應の如く漸く斷じ、佛果に登る時一時に斷盡す。」

【二五】 問ふ、「三祇の間、各何の位を經るや。」答ふ、「三賢、四善根は並に初僧祇、初地より七地に至るまでは是れ第二僧祇、八九十地は是れ第三僧祇なり。三祇を過ぎ已りて即ち佛果を證す。菩薩の四十一位、束ねて四依と爲す。地前は是れ初依、五恆沙の佛を供養す、初地より六地に至るまでは是れ第二依、六恆沙の佛を供養す。七八九地を第三依と爲す、七恆沙の佛を供養す。第十地は是れ第四依、八恆沙の佛を供養す。三祇の間合して

もとめ、下は一切衆生を救済する位なり。

【十地】一切の佛法は菩薩の證りたる眞理の地より出るこの眞理の證に淺深あるが故に十位に分て十地と名く。

【等覺】菩薩の最上級、佛より一段下の位。

【法雲地】十地の第十位。

【四善根】煥、頂忍、世界第一法の四通りの禪定に入る位。

【二四】三乗と二障を明す。

【煩惱障】我執を基として起す一切の煩惱。

【所知障】認識の對象となる本體界現象界に達し得ざる知識上の障。

【二五】三僧祇と四依を明す。

【二六】五位百法を明す。

【末那識】意識な

二十六恆沙の佛を供養す。此三祇の間萬行並び修し、六度圓滿す。地前には相唯識を修し、地上には性唯識を顯す。

【二六】問ふ、「此宗幾ばくの法數を立てて諸法を攝するや。」答ふ、「百法を立てて諸法を攝し盡す。問ふ、「其百法とは何ぞ。」答ふ、「束ねて五位と爲す。一に心王、八種有り、眼と耳と鼻と舌と身と意と末那識と阿頼耶識と是を八識と爲す。二に心所有法に五十一有り、合して六位と爲す。一に遍行の五とは作意と觸と受と想と思となり。二に別境の五とは欲と勝解と念と定と慧となり。三に善の十一とは信と精進と慚と愧と無貪と無瞋と無癡と輕安と不放逸と行捨と不害となり。四に煩惱に六有りとは貪と瞋と癡と慢と疑と惡見となり。五に隨煩惱の二十とは惡見に五を聞く、身見と邊見と邪見と見取見と戒禁取見となり。六に隨煩惱の二十とは怨と恨と覆と惱と慳と嫉と誑と詔と害と僞と無慚と無愧と掉舉と憍沈と不信と憍怠と放逸と失念と散亂と不正知となり。六に不定に四有りとは悔と睡眠と尋と伺となり。六位合して五十一有る也。三に色法に十一有りとは、眼と耳と鼻と舌と身と色と聲と香と味と觸と及び法處所攝の色となり。此に五種有り、極略と極適と受所引と定所生と遍計所起色と、此れ並に法處所攝の色なり。四に不相應行法に二十四種とは、得と命根と衆同分と異生性と無想定と滅盡定と無想定と名身と句身と文身と生と老と住と無常と流轉と定異と相應と勢速と次第と方と時と數と和合性と不和合性となり。五に無爲法に六有りとは虛空と擇滅と非擇滅と不動と想受滅と眞如となり。是れ百法なり。一切の諸法、略するに之に過ぎ

り。然し第六識と混雜するゆゑ特に梵語にて呼ぶ。

【阿頼耶識】 藏識と譯す。一切諸法を現出する種子を藏せる識の意。

【二七】 五蘊、十二處十八界の三科を明す。

【蓋度界の三科】 一衆生に屬せる一切諸法を或る義門によりて三種に分類すること三科といふ。

【行蘊】 余て選りかはる無常變化のものに名けていふ。

【二八】 五重唯識觀を明す。

【二九】 四分安立を明す。

す。

【二七】 問ふ、「蘊處界の三科に色心等の法を攝す、今の百法と其義如何。」答ふ、「百法の

中、心王と心所と及び色法とを束ねて五蘊と爲す。色蘊は是れ色法、受想二蘊は即ち是れ

心所、識蘊は是れ八識心王、自餘の心所等は、竝に行蘊の攝なり、蘊には無爲を攝せず。

其十二處は色を廣じ心を略す、蘊に準じて知るべし。其十八界は色心廣く説く、亦無爲を

攝す。」

【二八】 此宗の本意は、只唯識を明す。一切の諸法は皆是れ唯識にして、都て一法として

心外に有ること無し。故に慈恩大師の云はく、「心外の法有れば生死に輪廻し、一心を覺知

すれば、生死永く棄つ」と已。然も諸法の差別有るは皆唯識の所變なり、識を離れて別法無

し、一切の境界は皆心識に歸す。總じて此義を明すに五重唯識有り。一に遣虛存實識、遍

計所執は是れ虛なりと遣り、依他と圓成とは是れ實なりと存するが故に。二に捨遣留單純識、

依他の内境は外に濫するが故に、此を捨して唯識と名く。三に攝末歸本識、見相二分の末

を攝して、自體分の本に歸するが故に。四に隱劣顯勝識、劣の心所を隱して、勝の心王を

顯すが故に。五に遣相證性識、依他の事相を遣り、唯識の理性を證するが故に、前の四

は相唯識、第五を性唯識と爲す。

【二九】 此心の用に總じて四分有り、一に相分、二に見分、三に自證分、四に證自證分な

り。『分量決』に云はく、「心用の分限四種に差別す、故に四分と名く」と已。然るに四師の

【心の縁所】心に認識さるるものをいふ。

【三】三性を明す

【四縁】因縁、等無間縁、所縁縁、増上縁。

異説有り。一に安慧菩薩は唯一分を立つ、是れ自證分なり。二に難陀菩薩は二分を立つ、是れ相見分なり。三に陳那菩薩は三分を立つ、相分、見分及び自證分なり。四に護法菩薩は四分を立つ。即ち前に列ねたり。今は即ち護法盡理の説なり、故に四分を立つ。相貌差別して、心の所縁と爲る、故に相分と云ふ、能く前境を縁す、見分と云ふ、能く見分を縁す、故に自證分と云ふ、能く自體分を縁す、故に證自證分と名く。此四の中、相分は唯是所縁にして縁慮の義無し、其後三分は能所縁に通ず、是れ即ち八識の心王心所に各四分有り、八識の體は各一なりと雖も用を論ずれば即ち四分有り、是故に八識各四分有るなり。

【三】此宗、眞妄の義を明すに、總じて三性を立つ。一に遍計所執性、是れ當情現の相なり。此に亦三を分つ、能遍計、所遍計、遍計所執なり。前の二は依他に攝し、遍計所執は、是れ當情現の相なり、無に於て有なりと謂ふ、虛妄の執著なり。二に依他起性、四縁所生の諸法なり、因縁和合有の故に。三に圓成實性、諸法の理性なり、圓滿、成就、眞實の三義を具するが故なり。此三性の中、所執は既に是れ妄有、依他は即ち假有、圓成は是れ眞有、遍計所執は既に是れ妄執、依他と圓成とは即ち妙眞なり。三性互に別にして相亂通せず。然も依他の事法は、圓成の理性と非一非異なり、相は體を離れず、體は相を離れざればなり。『三十頌』に、三性を説くの偈に云はく、一彼彼の遍計に由りて種種のものを遍計す、此遍計所執は自性、所有無し、依他起の自性の分別は縁に生ぜらる、圓成實は

【三】 三無性を明す。

【無自然性】 萬有は因縁和合によりて生じたるもの故不變實在の本性なきことをいふ。

【三】 四智、四涅槃、三身を明す。

【二轉の妙果】 煩惱所知の二障を轉じ捨て得る菩提涅槃の二果をいふ。
【法身】 佛の自性なるが故に。
【報身】 修行の因によりて酬ひられたるが故に。

彼が上に常に前を遠離せるの性なり、故に此と依他と異にも非ず、不異にも非ず、無常等の性の如し、此を見ずして彼を見るには非ず」上と。

【三】 此三性に對して三無性を明す。即ち遍計と依他と圓成とを翻じて、次の如く相生、勝義の三無性を顯す。故に『二十頌』に云はく、「即ち此三性に依り、彼三無性を立つ。故に佛、密意もて一切法は無性なりと説きたまふ。初めには即ち相無性、次には無自然性、後には前の所執の我法を遠離せるに由るの性なり」上。上の三性の如く亦識を離れず、彼三無性も三性に依りて立つが故に、『唯識論』に云はく、「應に知るべし、三性も亦識を離れず」上と。又云はく、「即ち此前の所説の三性に依りて立つ、彼後に三種の無性を説く」上と。

【三】 諸位の修行は皆唯識を觀じ、佛果の所證は但唯識を證す。故に萬行は唯識よりして起り、萬徳は唯識に依りて感ず。此宗、八識を轉じて四智を成ず。其四智とは、一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智なり。初地に入る時、六七二識を轉じて、妙觀、平等の二智を得し、佛果に至る時、五八識を轉じて、圓鏡成事の二智を得す。此時四智圓滿し、二轉の妙果朗然たり。其所證の理に四の涅槃有り、一には本來自性清淨涅槃、二には有餘涅槃、三には無餘涅槃、四には無住處涅槃なり。初めの一は凡夫も亦具す、中の二は聲聞緣覺も並びに得す、唯佛果如來は此四種を具す。此四、總束して清淨法界と名け、前の四智を加へ以て五法と爲す。五法と三身と相攝するに『唯識論』に二師の解有り、其初師の意は、清淨法界、大圓鏡智を以て法身と爲し、平等、妙

【化身】衆生の機根に應じて權化の身を現するが故に

【三】法相宗の批評を述ぶ。

【五位】資糧位、加行位、通達位、修習位、究竟位。

【使習】正使と習氣即ち煩惱とその習慣氣分。

【四句百非】四句とは、諸法は空なり、有なり、空に非ず有に非ず、空なり有に非ず、百非とは、有に非ず、空に非ず、有空に非ず、有空に非ざるに非ず等なり。

【一】三論宗の名稱を明す。

【二】三論宗の所依の論を明す。

觀を以て報身と爲し、成所作智を以て化身と爲す。第二師の意は、清淨法界は是れ自性身、四智の上の相は是れ自受用、平等性智所現の身は他受用、成所作智所現の身は是れ變化身、妙觀察智は是れ說法斷疑の智なり。此宗の正義は、是第二師を指南とす。

【三】當に知るべし、五位の修行は運運として窮盡し、二障の使習は蕩蕩として斷滅す。三祇の廣劫に萬善成滿して一念に攝在し、佛果速疾なり。有漏の八識は轉じて四智を得し、二轉の妙果は三身圓滿す、寂寂として澄み、照照として朗なり。加之、五乘普く攝化し、三乘各至極し、一乘は方便、三乘は眞實なり。正體智の前には眞理寂然、後得智の中には衆生普く化す。依詮談旨には三性三無性鏡を懸け、廢詮談旨には四句百非慮を息む。性相の決判此宗に如くは無く、義理の極成何の教か之に及ばん。自證三身の月圓に、化他五乘の光朗なり。自證化他、甚深廣大なり、上乘の所旨、義理圓足す。法相の宗旨大概此の如し。

三論 論 宗

【一】問ふ、『何が故に三論宗と名くるや。』答ふ、『三部の論を以て本所憑と爲すが故に、三論宗と名く。』

【二】問ふ、『其三部とは何ぞ。』答ふ、『一に『中論』四卷、龍樹菩薩の造、二に『百論』一

【通申の論】諸經に共通して教義を申す。
【別申の論】或る特殊の經典の意味を説明したるものをいふ。
【二諦】眞諦と俗諦。

【三】有所得の破邪を明す。

【内外】佛教内の大小二乗と、佛教外の外道とを指す。

【四】無所得の顯正を明す。

卷、提婆菩薩の造、三に『十二門論』二卷、龍樹菩薩の造、是を三論と名く。然るに若し『智論』百卷を加ふれば即ち四論を爲す、亦是れ龍樹菩薩の造なり。此四論の中、三論は是れ通申の論、通じて大小の諸教を申ぶるが故に。『智論』は即ち別申の論、別して『大品般若』を釋するが故に。『智論』若し具に之を譯すれば是れ千卷なるべし、羅什三藏、九倍を減じ、簡を取り翻じて百卷と成す。三論の中に就いて、『中論』は正しく小乗を破し兼ねて外道等を破し、大乘の義を顯す。『百論』は正しく外道を破し、傍ら自餘を破し、大乘の義を顯す、『十二門論』は並に小乘外道を破し、正しく大乘の深義を顯す。三論の所明は二諦に過ぎず、凡そ此宗の大意、破邪、顯正の二門を軌と爲す。論に三有りとも雖も、義は唯二轍のみ。破邪は則ち下、沈淪を救ひ、顯正は則ち上、大法を弘む。振領提綱、唯此二轍、頗る大宗を成す。

【三】問ふ、『其破邪とは何等の邪ぞや。』答ふ、『總じて一切の有所得の見を破す。略して之を明さば四見を出でず。一には外道實我の邪見を破し、二には毘曇實有の執見を破し、三には成實偏空の情見を析し、四には有所得大乘の見解を摧く。内外盡く破し、大小遍く析す、當有所得は通じて皆遣破す、故に破せられざる莫く、責められざる莫し、此を是宗の破邪の義と謂ふ。』

【四】問ふ、『其顯正とは何等の正を顯すや。』答ふ、『破邪の外、別の顯正無し、破邪已に盡れば有所得無し、所得既に無ければ、言慮寄ること無し。然も破邪に對するが故に亦

【戲論】實際に契ひたる正當論に非ざる空理空論。【至道】眞理の奥に至れる轉迷開悟の道。

【心行處滅】心に考へ得ざること

【五】眞俗二諦を明す。

【緣生】因緣和合して生ずること。

【四中】中道の眞理を四通りに分つ【眞際】眞如の極致。

顯正有り、源窮めざれば則ち戲論滅せず、毫釐も盡きざれば、則ち至道顯れず、源として窮みざる無し、故に戲論斯に滅し、理として盡さざる無し、故に玄道是に通ず、言に寄せ、正を談ずるに顯明ならざる莫し。問ふ、『若し爾らば其顯正の義とは如何。答ふ、至道は是れ玄極、言論及ばず、有と言へば則ち愚に返り、無と語れば則ち智に非ず、善吉呵せられ、身子責めらる。有に非ず、無に非ず、亦有亦無に非ず、非有非無に非ず、言語道斷、心行處滅、湛湛として寄る無く、寥寥として據を絶す、知らず何を以てか銘けん、強て顯正と名く。問ふ、『言語俱に絶し、有無俱に遺る、即ち是れ空の義、何ぞ顯正に關せん。』答ふ、『既に有無を遺る、何ぞ空に住せん、佛道の大體、寔に寄るなきものか。有無俱に絶するが故に、所得有ること無し、顯正の旨、此に窮まる。』

【五】問ふ、『既に有無を遺る、若し爾らば緣生の諸法云何が立することを得ん。』答ふ、『緣生の諸法は是れ假有、假有は即ち無所得なり。二諦所以に立し、四中之に依りて成す。俗諦を以ての故に、眞際を動ぜずして諸法を建立し、眞諦を以ての故に、假名を壞せずして實相を説く。故に空は宛然として有、有は宛然として空、色即ち空、空即ち色の旨、茲に有り。二諦は唯是れ教文、境理に關せず、緣に寄するを以ての故に二諦有り、理實を以ての故に二諦を混ず。有は是れ空の有なるが故に、有と言ふも有に非ず、空は是れ有の空なるが故に、空と言ふも空に非ず、非有の故に有に即して空と談じ、非空の故に、空に即して有と説く。諸佛の説法、常に二諦に依るとは、即ち其義なり。此宗顯す所は、即ち此

【六】三論宗の成佛論を明す。
【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。
【一念成覺】一念のうち佛の覺を成就すること。

【客塵】煩惱のこと。
【始覺】先天的に有せる佛性を本覺といふに對し、煩惱を斷じ、この本覺をみぎだし覺りたる處を始覺といふ。

無得の正觀のみ。故に古人の云はく、八不妙理の風は、妄想戲論の塵を拂ひ、無得正觀の月は、一實中道の水に浮ぶ上と。無得を以ての故に假名の諸法、法爾として森羅たり、上に準じて知るべし。」

【六】問ふ、『此宗如何が成佛の果を談ずるや。答ふ、『一切の衆生は本來是れ佛、六道の衆生は本自ら寂滅なり、迷も無く、亦悟も無し、豈成と不成とを論ぜんや。故に此宗には迷悟本より無し、湛然寂滅なり。然も假名門の中に迷悟成不成を論ずるのみ。此義に由るが故に成佛に遅有り、速有り、根に利鈍有るに由るが故なり。一念成覺は是れ短、三祇成佛は即ち長、一念、三祇を虧へず、三祇、一念を妨げず、一念即ち三祇、三祇即ち一念、一夕の眠りに百年のことを夢み、百年のこと、還つて故の一夕なるが如し。三祇を経るが故に萬行積成し、一念に有るが故に佛果速疾なり。問ふ、『三祇の積行とは幾くの次位を経るや。答ふ、『三祇の菩薩は五十一位を経て然る後に佛果に至る。故に此宗に五十二位を立つるなり。此宗の意、覺體は本有、迷ふが故に生死有り、迷を返して源に還り、但客塵を拂ふ時は、本有の覺體、宛爾として顯る、此を名けて始覺の佛と爲す。當に知るべし、迷に對するが故に悟を立て、悟に對するが故に迷有り。悟發けば則ち迷無く、迷無きが故に、何の悟か有らん、迷無く悟無く、迷悟本より無し、本來寂滅なり。迷悟染淨は是れ假名の施設、無得の正觀は即ち妙に至道を極む。』

【七】問ふ、『其八不とは何ぞ。答ふ、『不生不滅、不斷不常、不一不異、不去不來なり。』

【七】 八不中道を明す。不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不生、即ちこの八種の否定によりて中道の義を顯す。

【八】 四種の釋義を明す。

【依名釋義】 直接的解釋法。

【因緣釋義】 眞は不眞等の反顯的解釋法。

【見道釋義】 理教釋義の法。

【無方釋義】 自由なる解釋法、この四種の解釋によりて無所得中道に導き入る。

【九】 四重の二諦を明す。

【四重の二諦】 これを以つて迷情を拂ふ。

【一〇】 三論宗の判教を明す。二藏三轉法輪。

【根本法輪】 上智の菩薩の爲に說法せしもの。

【枝末法輪】 愚鈍

八迷を遣るが故に此八不を説く。此即ち今宗所顯の理なり。

【八】 此宗、一切の法を釋するに四種の釋義有り。一に依名釋義、二に因緣釋義、三に見道釋義、四に無方釋義、一切の法門此を以て釋す可し。

【九】 亦四重の二諦を立つ。一に有を俗諦と爲し、空を眞諦と爲す、二に有空と俗を爲し、非空非有を眞と爲す、三に空有と非空非有を俗と爲し、非非有非非空を眞諦と爲す、四に前を以て俗と爲し、非非有非非空を眞と爲す。斯れ廻ち外道と毘曇と有所得大乘とを破するが故なり。

【一〇】 問ふ、『此宗幾許の教を立てて諸教を攝するや。答ふ、『二藏と三轉法輪とを立てて一代教を攝す。二藏とは一に聲聞藏是れ小乘教なり、二に菩薩藏、是れ大乘教なり。大小の二教は此中に攝盡す、此は『智論』に依る。三轉法輪とは、一に根本法輪『華嚴』是れなり、二に枝末法輪、『阿含』已後、『法華』に齋來まで竝に是れなり。三に攝末歸本法輪、『法華經』宣たり。一代の諸教一切攝盡す、此は『法華經』に出づ。大小の二乘、顯理同一なれども、機に隨ふが故に散異す、諸大乘教は、顯道無二なれども、緣に對するが故に別有り。諸大乘經を判するに、各等勝劣の三を立つ、一切の教を判するに取て偏解無し。』

【二】 問ふ、『此宗誰を以て祖師と爲す乎。答ふ、『祖師の血脈、三國相承して、師師踵を繼ぐこと、此宗定に明かなり。初は大聖文殊師利菩薩を以て高祖と爲し、次に馬鳴菩薩を以て次祖と爲し、次に龍樹菩薩、妙に此宗を弘む。龍樹は龍智菩薩及び提婆菩薩に授く。

諸大乗經を判するに、各等勝劣の三を立つ、一切の教を判するに取て偏解無し。』

の衆生の爲に方便の教を説法せしもの【攝末歸本法論】愚鈍の衆生を上智の菩薩に引き上げべき説法【二】三論宗の三國相承を明す。

【龜茲】支那新疆省の北、古來佛教の盛んなりし土地【生肇融叙】道生僧肇、僧融、僧叙【影觀恒濟】曇影慧觀、道恒、曇濟

此二大論師は肩を竝べ化を施し、龍智は清辨菩薩に授け、清辨は智光論師に授け、智光は師し光菩薩に授く。彼提婆菩薩は、智解甚深にして辯才倫を絶す、大いに外道を破し、盛んに佛教を弘む。論師は此宗を羅曠羅菩薩に授け、羅曠羅は沙車王子に授け、王子は羅什三藏に授く。

羅什三藏は姚秦の世震旦に來至し、大に經論を翻じ、専ら此宗を傳ふ、四論は即ち是れ

什師の翻する所なり。翻譯の美、古今に譽を流し、深智の才、三國竝り震旦の尊ぶ所、門徒嚮仰すること衆星の白月を圍むが如く、朝代歸宗すること衆流の大海に會するに似たり。

生、肇、融、叙、肩を竝べて相承け、影、觀、恒、濟、志を同じうして美贊す。遂に曇濟大師をして踵を繼いで弘傳し、以て道朗大師に授けしむ。道朗は僧詮大師に授け、僧詮は法朗大師に授け、法朗は嘉祥大師に授く。嘉祥大師は本胡國の人なり、幼にして父に隨

ひ漢地に來り、法朗大師に從つて三論を受學す。定に法門の綱領、古今に拔出し、威德魏魏として象王の威を現し、智辯明明として日月の照を奪ふ。製作繁多にして廣く部帙を施

し、三論、法華、竝に心府と爲し、大小兩乘、悉く玄底を窮む。三論甚だ盛なること専ら此師に在り、諸祖の中特に大祖と定む。解釋理を盡す、之に加ふべからず。遂に三論

を以て高麗の慧灌僧正に授く。

僧正日本に來り、廣く此宗を傳ふ。慧灌は福亮僧正に授け、福亮は智藏僧正に授け、

智藏は竝に道慈律師、賴光法師に授く。道慈は善義大德に授け、善義は勤操僧正に授け、

【二】三論宗の批評を述ぶ。

【普賢道論】布貴山に住せる道詮法師。平安朝初期の三論學者。

【四河の派流は同じく無熱に出で、世界の中央に無熱池あり、池の四方より四大河を出す。】

【七宗】八宗のうち三論宗を除く。

【一】天台宗の名稱を明す。

【二】天台宗所依の經論を明す。

【判教】釋尊一代の教説を判別すること。

【伊人法師】天台宗第九祖、荆溪大師。

【諸法】十界三千の諸法をいふ。

勤操は安澄大徳に授く。是の如く相承して今に絶えず。明師挺出して互に大義を弘む。

【三】明かなる哉、三國の傳承墮ちざることや。故に義淨三藏の云はく、「天竺に二宗有り、『瑜伽』と『中論』となり」云。教理甚深なること何の宗か此に及ばん。普賢道詮言へること有り、「四河の派流は同じく無熱に出で、七宗鑑を分つこと俱に三論に出づ」と。當に知るべし、諸宗は是れ三論の末、三論は是れ諸宗の本なり。豈龍樹の心府に入らざるの宗有らんや。諸宗悉く崇めて大祖と爲す者をや。

天台宗

【一】問ふ、「何故に天台宗と名くるや。」答ふ、「山に従つて名と爲す。此宗は彼山従りして起るが故なり。」

【二】問ふ、「此宗何の教を所憑と爲すや。」答ふ、「法華を以て所依の本經と爲し、以て一代の諸教を判す。然も判教の綱網、諸義成く引くが故に、伊人法師の『義例』に云はく、一家の教門所用の義旨は、『法華』を以て宗骨と爲し、『智論』を以て指南と爲し、『大經』を以て扶疏と爲し、『大品』を以て觀法と爲し、諸經を引いて以て信を増し、諸論を引いて以て助成す。觀念を經と爲し、諸法を緯と爲し、部帙を織成すること、他と同じからず」と。

【三】天台宗の歴史。

【智者大師】名は智顛、天台大師ともいふ。

【法華三昧】天台宗の一心三觀の觀法に入ること。

【三昧】禪定のこと。

【三】と云ふ、「此宗は、誰を以て祖師と爲すや。啓ふ、「天台の智者大師を以て宗師と爲す。然も慧文禪師、「智論」に依りて一心三觀を立て、以て南岳の慧思禪師に授く。慧思禪師は、靈山に「法華」を聴き、憶して當時に有り、法華三昧を行じ、位、六根淨に登る。「智論」の三智一心心得の文、「中論」の三諦の偈、妙に心府に領し、深く定慧を發し、三昧成就し觀解圓明なり、遂に法を天台の智者大師に授く。智者大師、亦昔靈山に於て同じく「法華」を聴く、南岳大師に謁するの時妙に憶識を得たり。法華三昧を修して位、五品に居し、一家の大宗を建て、身に十徳を具す。慧文、南岳は唯義綱を提げ、天台大師に至り、廣く教時を立てて具に一代を判す、此宗、盛に興ること當此祖に有り。次に章安大師有り、天台大師に承け、廣く此宗を傳ふ。天台は唯散説し、章安悉く結集して以て一宗の典籍を成じ、以て一家の綱目を作る。次に智威大師、章安大師に承け、廣く此宗を傳ふ。智威は慧威大師に授け、慧威は玄朗大師に授け玄朗は妙樂大師に授く。妙樂大師、廣く祖文を解し、並に記章を製す。天台の「止觀」と「玄義」と「文句」とに、應の如く「輔行」と「釋義」と「疏記」を作る。諸家の記章は今師に及ばず、自餘の祖文、解判せざる無し、故に古今特に依承し、諸方歸して所憑と爲し、妙に祖意を得、唯今家の記頗る大宗に符ふ。義通法師、智禮法師、淨覺法師等、皆此後を承く。妙樂大師、法を道邃和尚に授く、則ち法門の靈府なり。行滿、道暹、及び智雲等、皆妙樂に稟け、肩を並べて行化し、互に龍象と爲す。

爰に日本の傳教大師、大唐國に渡り、道邃和尚に謁し、廣く此宗を傳へ、鴻觀遺すこと

無く、傳寫盡く遂げ、日本に還りて之を叡岳に弘む。義真和尚、慈覺大師、智證大師、是の如き等の祖師先徳、互に相承流傳し、今に絶えず。日本一國、處として弘まらざる無く。異國諸州に傳聞して、盛に學ぶ。時は末法と雖も、人の歸仰此宗に過ぐる無し、貴い哉大いなる哉。

【四】 教觀二門を明す。
【教觀二門】 教門とは教義的理論の方面。觀門とは修行的實踐の方面。

【五】 天台宗の判教を明す。五時人教の總説。

【六】 化法の四教を明す。

【七】 三藏教を明す。

【四】 問ふ、「此宗、幾時教を立てて一代教を判じ、又何なる法門を明すや。」答ふ、「一宗の大義は教觀の二門なり。教門と言ふは、義解神を養ひ、佛道圓に開くが故に。觀門と言ふは、觀行進登し、證覺妙に發くが故に。其教門とは、四教、五味、一乘、十如是等なり。其觀門とは、十二因縁、二諦、四種三昧、三惑義等なり。」
【五】 一代の教を判ずるに、教に約して四教有り、時に約して五時有り。四教の中に亦二種有り、一には化法の四教、是れ釋義の綱目なり、二には化儀の四教、即ち判教の大綱なり。兩種の四教合して八教と爲る。

【六】 問ふ、「且く化法の四教とは何ん。」答ふ、「一には三藏教、一切の小乘は此教の中に攝む。二には通教、諸大乘の中、通じて三乘に被むるは此教の分齊なり。三には別教、諸大乘の中、小と共ぜず、獨り菩薩に被むるは即ち此教に攝む。四には圓教、諸大乘の中、圓融相即、無礙の法門は即ち此教に攝む。」

【七】 初に三藏教とは、小乘教の中、諸部流を分つ、然も要を取らば唯四有り、一に有門小乘、即ち毘曇是れなり、二に空門小乘、是れ『成實論』なり、三に亦有空門、謂く『毘

勒論』なり、四に非有非空、是れ『迦旃經』なり。彼『毘勒論』と及び『迦旃經』とは未だ震旦に傳はらず。

且く有門『毘曇』の所説に就いて之を明さば、此教の中に、三乗の修行得果の相を明す。先づ聲聞乘に七賢七聖有り。其七賢とは、一に五停心、二に別想念處、三に總想念處、此三は是れ外凡にして順解脱分の位なり。四に數法、五に頂法、六に忍法、七に世界第一法、此四は是れ内凡にして順決擇分の位なり。其七聖とは、一に隨信行、二に隨法行、三に信解、四に見得、五に身證、六に時解脱、七に不時解脱なり。初の二は並に見道にして、鈍根の者を隨信行と名け、利根の者を隨法行と名く。鈍根の者修道に入りて信解と名け、利根の者、修道に入りて見得と名く。此信解、見得の二人、滅盡定を得するを還身證と名く。鈍根の人、羅漢果を得るを時解脱と名け、利根の人、羅漢果を得るを不時解脱と名く。七聖有りと雖も、唯是れ四果の聲聞なり。得果は極速は三生、極遲は六十劫にして即ち證りを得るなり。其緣覺乘に即ち二種有り、一は部行獨覺、二は鱗喻獨覺なり。部行は佛世に出づるが故、部類衆多なり、鱗喻は唯獨一の故に佛世を知らず、極速は四生、極遲は百劫にして彼の果を得るなり。菩薩は三僧祇を經、亦百劫を遷て、然る後に菩提樹下に成佛す。三乘俱に見思の惑を斷ず。三乘の所觀、互に各同じからず、聲聞は四諦を觀じ、緣覺は十二因縁を觀じ、菩薩は六度を修す。三乘の得果は並に無餘に入り、灰身滅智す。此教は生滅の四諦、十二因縁、六度、二諦等の法を明す、是れ界内の事教なり。

【滅盡定】一切の心想が滅し盡きて寂靜となる禪定のこと。
【時解脱】衣食住等外界の事情調ひて得道するもの。
【不時解脱】事情を俟たず解脱するもの。
【界内】三界内といふ。見思の三惑を具へたるものが生死する世界。
【事教】不生不滅の本體界眞如のこゝとを説く教を理教生滅の現象界の事相を説くを事教と云ふ。

【八】 通教を明す

【乾慧地】 煩惱を斷つ智慧位。

【性地】 見思の二惑を伏して法性の空理を見んとする位。

【出假利生】 差別界に出現して衆生を利益すること。

【九】 別教を明す
【習種性】 空觀を修め習ふ種性のこと。

【性種性】 本性眞空の道理を證る位
【道種性】 中道の妙觀を修める位
【聖種性】 無明の惑を破る位。

【八】 二に通教とは、此に四門有り、多く空門を明す。此教に三乘共の十地を明す。其

十地とは、一に乾慧地は是れ外凡の位なり。二に性地、是れ内凡の位なり。三に八人地、四に見地、三界の見惑を斷ず、是れ初果なり。五に薄地、即ち一來果、六に離欲地、是れ不還果、七に已辨地、是れ羅漢果なり、聲聞は初より此に至り、乃至無餘灰斷す、八に支佛地、習氣を除き、空觀に入る、緣覺、此に至りて證果入寂す。九に菩薩地、是れ出假の位、菩薩此に至りて動もすれば摩訶を逾え、出假利生し、道觀變流す。十に佛地、菩薩、最後身に餘の殘習を斷じ、七寶樹下に、天衣を座と爲し、成道し乃至入寂す。此教に無生の四諦、十二因緣、二諦等の法を明す、此れ界内の理教なり。

【九】 三に別教とは亦四門有り、多く亦有亦空門を用ふ。此教に五十二位を明す、一に

十信、是れ外凡の位、假より空に入る。二に十住、是れ習種性の位、初住に三界の見惑を斷じ、次の六住に三界の修惑を斷じ、後の三住に前惑の習氣竝に塵沙の惑を除く、此位に空觀成就し、傍ら假中を習ふ。三に十行、性種性の位、正しく假觀を習ひ、傍ら中觀を習ひ、塵沙の惑を破す。四に十廻向、是れ道種性、中道觀を修し、無明を伏す、此住行向は是れ内凡の位なり。五に十地、聖種性、六に等覺、上の二は竝に無明を破し、分ち中道を證す、分證位と名く。七に妙覺、是れ極聖の位、無明を破し、佛果を證す、即ち七寶を座と爲し、成道す。此教に無量の四諦、十二因緣等を明す、此れ界外の事教なり。此宗、障を明すに總じて三惑を立つ、一に見思の惑、二に塵沙の惑、三に無明の惑なり。見

【一〇】 圓教を明す
【六即】 圓教に分つ六段の修行の階級

【理即】 眞如の道理上からは迷の衆生も眞如に等し、故に衆生のことを理即位といふ。
【即來藏】 佛性ともしいふ。

【三諦】 空、假、中の三諦、眞如の徳を三方面から見たる名。

【觀行即】 觀心修行にとりかかりたる位。

【五品位】 隨喜品、讚誦品、說法品、兼行六度品、正行六度品の修行をする位。

【二】 四教の佛身佛土を明す。

思は是れ界内の惑、故に藏通二教の三乘の所斷なり、塵沙、無明は是れ界外の惑、故に別圓二教の所談なり。五十二位、具に此三惑を伏斷す、圓教の六即亦爾なり。

【一〇】 四に圓教とは亦四門有り、多くは非有非空門に約す。此教に六即の位を立つ。一に理即、一切衆生の一念の心、即ち如來藏の理、此心、即ち三諦の妙理を具して不可思議なり、是を理即と名く。二に名字即、上に説く所の一實菩提を聞いて、名字の中に於て通達し、解了し、一切の法は皆是れ佛法爲りと知る、是を名字即と爲す。三に觀行即、是れ五品の位なり、十心具足し、十法成乘、觀なり、讀誦經典、更に説法を加へ、兼行六度、正行六度、此等の行を修するが故に、五品の位と名く、是れ外凡の位なり。四に相似即、是れ六根清淨、鐵輪十信の位なり、初信に三界の惑を斷じ、次の六信に三界の惑を斷じ、後の三品に、習氣竝に界外の塵沙を斷じ、無明の惑を伏す、是れ内凡の位なり。五に分眞即、是れ十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。四十一位の中に於て、各一品の無明を斷じ、各一分中道の理を顯し、竝に八相成道して衆生を度し、普門示現して機根を益す、名けて分證位と爲す。六に究竟即、等覺一轉して妙覺に入り、佛果圓滿し、斷證窮極す。此教に無作の四諦、十二因縁等を明す。

【二】 問ふ、『四教の所談、佛果三身の中、何れぞや。答ふ、『藏通二教は是れ應身、中に於て藏教は劣應身、通教は勝應身なり。別教は他受用身、圓教は自受用身なり。理智冥合、融通無礙の三身即一の如來なり。』

【四】德波羅蜜 常樂我淨の四徳をいふ。

【二】化儀の四教を明す。

【三】五時五味を明す。

問ふ、「四教の佛、何等の土に居するや。答ふ、「此宗に四種の佛土を立つ。一に同居土、凡聖雜居の故に。藏教所談の劣應身の佛、此土の中に居す。中に於て二有り、一に同居の穢土、娑婆等の如し。二に同居の淨土、安養等の如し。二に方便有餘土、三界の外に有り、唯三乘の人、三界の身を離れて彼淨土に住す、通教所談の勝應身の佛、即ち此土に居す。三に實報土、別教の十地、圓教の十住已上の菩薩、無明の惡を斷じ、中道の理を顯はし、彼土に住す。若し教主に據らば、別教に明す所の他受用身なり。四に寂光土、唯佛の實身、彼淨土に住す、機根離絶し、佛佛の境界なり、即ち是れ四德波羅蜜周遍寂照、理智冥合、法身所住なり。四教の佛は、此の如きの四土に居す。此四教を以て如來一代大小の諸教を判するに窮盡せざる莫し、化法の四教大概此の如し。」

【三】次に化儀の四教とは、一に頓教、『華嚴經』の如し。二に漸教、『阿含』『方等』一般若の三時なり。三に不定教、機解、同じからず、同聽異聞す、大を聞いて小を解し、小を聞いて大を解す等なり、然も互に相知るを、不定教と名く。四に秘密教、一會の説、機に對して異説す、或は小を説くの座に一實の法を説き、或は大を説くの座に而も餘法を説く、然も互に相知らず、故に秘密教と名く、是を總じて化儀の四教と名くるなり。當に知るべし、化儀の所説は化法を出でず、化法の説儀は化儀に過ぎず、故に八教を立てて以て判解と爲す、即ち大綱網目なり。

【三】其五時とは、華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃なり。化儀の次第、一代の諸教、

【五味】乳味、酪味、生酥味、熟酥味、天台大師は五時に配當す。
 【四】天台宗の觀法を明す。
 【七重】藏教、通教、別接通、別教、圓接別、圓教。
 【三種三昧】常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧。
 【一心三觀】空假中の三諦を一念の心に具へてをることとを觀きはめること。
 【無明】煩惱の異名。
 【常樂】常樂我淨の四徳。
 【五】天台宗の批評を述ぶ。
 【超八の極圓】化儀化法の八教を越え至極圓滿の教。
 【一】華嚴宗の名稱を明す。
 【二】華嚴宗の所依の經典を明す。
 【五印】東西南北

此五に過ぎず。名けて五味と爲す。

【四】此宗、百千如、三千世間、一念の中に頓具し、不縱不横なり。二諦を建立するに、總じて七重有り。四種三昧を爲す。一心三觀具足圓滿し、相即自在、無礙圓融、凡に即して佛を見、佛に即して凡を現す。三千理に有れば同じく無明と名け、三千果成すれば、常樂と稱す、今『法華』の妙旨定に鼓に有り。

【五】諸教の中に此教、最長たり、諸宗の中に深奥と爲す。超八の極圓、厥旨深高、速疾の大果又妙なり。

華嚴宗

【一】問ふ、『何故に華嚴宗と名くるや。』答ふ、『華嚴經』を以て其所憑と爲す、故に爾云ふなり。

【二】問ふ、『華嚴』に總じて幾の經有りや。』答ふ、『若し委しく之を論すれば十類の別有り、然も要を取りて言はば、只三本有り。一には上本の『華嚴』、十三大千世界微塵數の偈、一四天下微塵數の品、二には中本の『華嚴』、四十九萬八千八百偈、一千二百品、この二本の經は龍宮に攝在し、閻浮に傳はらず。三には下本の『華嚴』、十萬偈、三十八品、此は閻浮に傳へ、五印盛に弘む。此を三本の『華嚴』と云ふ。下本經十萬頌の内、震旦に傳

中の五印度。

譯するに三譯を經たり、東晉の朝の代、覺賢三藏、翻じて六十卷と爲す、彼梵本を得るに三萬六千偈有り。次に大唐の朝、喜覺三藏、翻じて八十卷と爲す、彼梵本を得るに四萬五千偈有り。後に大唐の朝、般若三藏、貞元年中に翻じて四十卷と爲す、唯是れ入法界の一品なり。

【三】華嚴宗の相承を明す。

【三二】問ふ、『是宗誰を以て祖師と爲すや。』答ふ、『香象大師を以て高祖と爲す、然るに具に之を言はば七祖を立つ。第一に馬鳴菩薩、第二に龍樹菩薩、第三に震旦元祖杜順禪師、是れ文殊の應迹、終南山に居し、『華嚴法界觀』、『五教止觀』、『十玄章』等を製し、此宗を流通す、論して帝心尊者と號す。第四に智儼禪師、杜順師に承け、盛に此宗を弘め、製作多なり、雲華寺に居し、雲華尊者と號す。第五に香象大師、智儼禪師に承け、廣く華嚴を敷く、一朝の國師、四海の重寶、經を講すれば天の雨花を感じ、義を開けば日より五光を出す、大唐の則天皇后、論して、賢首菩薩と號す、經論の解釋、製造極めて多し、大經の本疏、餘經の別章、諸論の義記、一宗の總義、解釋して遺すこと無く義理悉く述ぶ、凡そ華嚴の甚深なること管此祖に有り。第六に清涼大師、香象大師に承け、華嚴の教を弘め、智解深廣にして、諸宗に兼通し、此圓宗を以て其心府と爲す、『大疏』、『演義鈔』及び自餘の章疏を製し、其數多となり、一朝歸宗して以て國師と爲し、十誓堅固にして終身懈らず、清涼山に居す、論して華嚴菩薩と號す。第七に宗密禪師清涼大師に承け、盛んに華嚴を弘め、諸宗に兼通し、製作甚だ多し、圭峰の草堂寺に居す、論して定慧禪師

【四】華嚴宗の判教を明す。小乗教を明す。

【羊鹿】羊鹿牛の三車法華經譬喩品に三車の譬喩あり
【化城】法華經化城喩品。

【染不染】漏、無漏に同じ。

と號す。此七祖は、淨源法師、勅を奉じて之を記せり。若し震旦のみに據らば、杜順已下唯五祖を立つ、日本に翻ぶ所は、特に四祖を仰ぐ、杜順、智儼、香象、清涼なり。日本に流傳するには、道璠律師をもつて其始祖と爲す、律師は香象大師に承け、律師、良辨僧正に授く。爾りしより已來今に至るまで跡を繼ぎ、血脈相承して敢て中絶せず。

【四】問ふ、『此宗幾の宗教を立てて一代の法門を攝するや』答ふ、『五教十宗を立てて一代の法門を攝す、其五教とは、一に小乗教、二に大乘始教、三に大乘終教、四に頓教、五に圓教たり。』

初めに小乗教とは、如來世に出で、一乘を説いて衆生を開化せんが爲の故に、菩提樹下に本教一乘を説き、高山先づ光を受けて大益を獲、日輪初めて耀照して群機を覺せしむ。然るに小志の衆生、深法を聞くに堪へず、故に如來、一乘の中に於て三乘を分別し、漸く淺機を誘ひ、以て大道に趣かしむ。此中の小乗教は、是れ如來權方の施設、暫く羊鹿を授けて以て小志を誘ひ、假に化城を設けて勞窮を息めしむ。故に所説の義理、機の淺近に隨ひ、詣る所の果證は、唯狹劣を存す。此の如く誘攝して漸く大乘に趣かしむるが故なり。』
問ふ、『此經の中に説くところの義理其相如何。』答ふ、『所説の義理は衆多無量なれども、且く一二を擧げん。謂く法相を言へば即ち七十五數、爲無爲の相、歷然たり。法源を談ずれば即ち六識三毒、染不染の義宛爾たり。因果の證入は只入寂を存じ、三祇の進趣は専ら五分に有り。外道邪見の幢は塵の如くに碎け、分段見思の員は雲の如くに晴る。然れども

【五】大乘始教を明す。

【偏小】小乘に偏りたること。

【法苑】法門のこと。

【自用】自受用身のこと。

【緣起】眞如の本體より因縁によりて現象界の一切萬有が起ること。

【六】大乘終教を明す。

【不二の定門】眞如の體と萬有の相とは全く異りたるものに非ざること【第一義空】眞如の異名。

未だ法源を盡さず、故に諍論極めて多し、二十部の黨類は、即ち此教の相貌なり。」

【五】次に大乘始教とは、此教、既に小乘を出て始めて大乘に入る、故に少しく影小教に似たりと雖も、多く直進の深義を談ず。三祇の修行は、極證の大果に趣き、二空の顯證は、高く偏小の情を出で、百法の鏡明かにして、決擇分明なり、故に諍論斯に止んで法苑即ち平なり。四智の心品は、自由の月明かに、三身の妙果は斷證の光圓なり。八識の建立は、法相廣く張り、二諦の法門は重重深奥なり。二障伏斷して衆惑、水の如く消し、六度の修行自他竝に運ぶ。妙理冲遠、寔に小乘の闕ふ所に非ず、大義深玄廻に羊鹿の權車に超ゆ。然も眞如は無知にして緣起の途未だ通ぜず、事理不則にして相融の門未だ開けず、故に五性機を分かち、出世に成と不成と有り、二乘差有りて佛果に越と不趣とを立つ、是れ有性、無性の隔別、定性と不定との差異なり。故に此教、無性は生死を出でず、定性は都べて廻心無し、即ち此教の意なり。退いて大衆上座の黨を出づと雖も、進んで未だ隨緣皆成の談に及ばず、始教の名、寔に此に由る。

【六】次に終教とは、此教は諸相融即して不二の定門に入り、眞如隨縁して森羅の法苑に榮ゆ。故に如來藏海、八識に通じて氷水、有性、無性、皆成を唱へて虚空、依他の無性は即ち是れ圓成、衆生の煩惱は即ち是れ涅槃なり。第一義空は眞妄を該ねて寥寥、生住異滅は三時を離れて絶絶、是れ即ち大乘の深義、方に此中に盡き、法義の建立、既に此教に窮まる。然れども未だ事事無礙を斷ぜず。未だ主伴具足を明さず、又泯絶の門未だ絶ぜず、

【七】頓教を明す

【一念不生】 想慮を絶つて一念も起さざること。

【五法】 名、相、妄想、正智、如如の五。

【三自性】 遍依圓の三性。

【毘盧果徳】 差別の諸法はそのまま毘盧舍那佛の絶對の相なりと。

【八】圓教を明す

【事事無礙】 一事一物皆宇宙の全體なりと。

【體相】 眞如の體と萬法の相。

【主伴無盡】 一を絶對とすれば他の一切はこれに攝まる。

【十玄緣起】 事事無礙の道理を十種の方面より説く。

【六相圓融】 總相、別相、同相、異相、成相、壞相。

【三生證果】 見聞生、解行生、證入生の三生を経て佛果を證る。

昇進の相に位を立つ、是故に猶名けて漸教と爲すなり。

【七】次に頓教とは、此教は、一念不生を即ち名けて佛と爲す、法相の差異都べて亡泯し、眞性の妙理直に顯現す、一切の所有は唯是れ妄想、一切の法界は皆是れ絶言なり。五法三自性俱に空亡し、八識二無我雙べて呵遣す、階位悉く泯じ、佛不、都べて絶す。然も未だ森焉たる諸法は、皆是れ毘盧の徳果、浩然たる衆相は、俱に是れ佛海の妙相なることを知らず、故に尙淺教と號す。

【八】後に圓教とは、此教、事事無礙を明して、諸法の體相を窮め、主伴無盡を談して、果相の圓備を彰す。故に十玄緣起、諸法を融じて即入し、六相圓融、衆相に通じて無礙なり。一即多にして隔無く、多即一にして圓通し、九世を攝して以て刹那に入れ、一念を舒べて永劫を該ぬ、三生の證果、還つて本成を彰し、十信の道、圓にして果海に没同す。行布の施設、備に多劫を經、圓融の妙義、現身に果を證す。行布、圓融を礙へず、圓融、行布を妨げず、故に一切相即相融することを得、是れ是教の意なり。

如來の所説、一代の教文、淺深區なりと雖も(難)の字は誤か)此五に出でず、定に諸法を判じて遺すなく、法門を攝して餘す無し。此五の中初めの一は小乘教、後の一は一乘、中の三は竝に三乘教なり。始終の二教は是れ漸、合して頓漸二教と爲し、漸の中に始終を分つが故に三と爲る。此五總束して以て一大善巧を爲す、廣大の法網、攝法の分齊は、圓教備足せり、四法界中、收攝し、窮盡するが故なり、凡そ一代の最長、諸宗の玄底、此圓

教に如くは無し、唯此教のみ窮極す。華嚴は須彌の如く、諸教は郡山に似たり、諸教皆華嚴の大海に會し、三乘竝に今經の廣苑より出づ、故に此教、名けて根本法輪と爲す、圓極自在の教なり。

【九】 十宗を明す

【九】 次に十宗とは、上の五教を宗に約して之を分つに、十宗に過ぎず。一に我法俱有宗、二に法有我無宗、三に法無去來宗、四に現通假實宗、五に俗妄眞實宗、六に諸法但名宗なり。已上の宗は並びに小乗教の中に之を開く。七に一切皆空宗、是れ始教なり。八に眞德不空宗、是れ終教なり。九に想相俱絶宗、是れ頓教なり。十に圓明具德宗、是れ圓教なり。

【一〇】 五教の行位を明す。

【一〇】 問ふ、『五教の行位、其相如何。』答ふ、『小乗教中の行位の分齊、全く小論に同じ。

大乘始教は、亦二乗の位を明し、其菩薩乘には五十一位を立つ、其十信を以て立てて位と爲すが故に、此れ直進の機に據るなり、或は三乘共の十地等を立つ、此れ廻心の機に據るなり。終教は、一切の衆生皆佛道を成す、四十一位を立つ、其十信を以て位と爲さざるが故に、等覺の一位は開合の異なり。頓教は、泯絶無寄なれば、本より位を立てず。圓教に二有り、一に同教一乘、全く終教に同じ、二に別教一乘、全く三乘に別なり、彼と同じからざるが故に。此に二門有り、一に次第行布門、因果次第し、進修し、證入するが故に。二に圓融相攝門、因果融攝し、無礙にして即入するが故に。行布を以ての故に不可説不可説微塵數の劫を経、圓融を以ての故に一念速疾に佛果を證す。此教に三生成佛を立つ、

【一】 四法界を明す。

【二】 圓教の佛身佛土を明す。

【三】 華嚴宗の批評を述ぶ。
【會三歸一】 三乗教を融會して一乗教に歸入せしむること。

見聞、解行、證入是れなり。

【一】 圓教の義理、四法界の中に一切攝盡して餘有ること無し。一に事法界、二に理法界、三に事理無礙法界、四に事事無礙法界なり。

【二】 問ふ、「此宗、佛の身上に幾種を立つるや。」答ふ、「五教同じからず、且く圓教の中に土の三類を立つ、皆是れ華藏莊嚴世界にして淨穢融即し一多無礙なり。佛に十身有り、衆生身、國土身、業報身、聲聞身等なり、一切の諸法、佛體に非ざるは無し、萬德莊嚴、包攝無窮の故に。斷を言へば即ち一斷一切斷、證を言へば即ち一成一切成なり。

【三】 十身具足の毘盧遮那、最初に無盡の玄宗を開顯し、一切諸法此中に皆盡く。淺近の機の爲に、漸漸分流し、乃至法華の會三歸一は、遂に華嚴一乘に悟入せしむ。一代の化儀は、唯此經を舒べ、終窮の攝歸は唯此經に入る。舒ふれば即ち一代の八萬、森羅として交絡し、卷けば即ち九會の妙說、深廣該攝す。「大方廣佛華嚴經」とは、理智冥合、題名に已に顯はる。華嚴海會の善財童子の一生證入は、後會に定に明かなり、速疾の大果を得んと欲せば、此經に過ぎたる無し。教理甚深、何れの宗か之に及ばん、十玄緣起の花は鮮かなり、六相圓融の月は朗かなり、衆經の之首、諸宗の尊主、洋洋たり蕩蕩たり、得て稱すべからざるものは、唯此經宗のみ。

眞言宗

【一】眞言宗の名稱及び經典を明す

【二】眞言宗の相承を明す

【一】問ふ、『何故に眞言宗と名づくるや。』答ふ、『此れ』大日經』、蘇悉地經』等の秘密眞言教を以て其所憑と爲す。故に爾云ふなり。』

【二】問ふ、『此宗は誰人か之を傳弘するや。』答ふ、『如來滅後七百年の時、龍猛菩薩、南天の鐵塔を閉いて金剛薩埵に遇ひ、受職灌頂し、然る後廣く之を流傳す。金剛薩埵は親り大日如來に承く、大日如來は是れ教主なり。龍猛菩薩は之を龍智菩薩に授け、爾より已來、善無畏三藏、金剛智三藏、一行禪師、不空三藏、惠果和尚、互に各跡を繼ぎ血脈流傳す。』

日域の流傳に至りては、弘法大師、海波を渡りて惠果阿闍梨に謁し、廣く此宗を傳へ、遂に日本に還りて盛んに此宗を開く。爾より已來、日本一國、花落田舎、受學せざる無く今に至りて絶えず、凡そ此教の日域に盛なるは、偏に此れ弘法大師の力なり。大師は此れ大權の應迹、盛德絶倫、行業無雙なり。顯密の諸宗遺すこと無く、大小の三藏に兼通し、皆悉く窮盡す。護法感通、威驗才藝、豈大師に及ぶの人有りらんや。寔に千古を照すの明燈、來後を耀かすの日月なり。遂に高野山に入定す。人天歸敬し、八部尊重す、内證外用不可思議なり。

【八部】天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽。

【三】眞言宗の判教を明す。

【異生羶羊心】生死する凡夫のこと

【四】大日如來の果海を明す。心王に心王覺體。心王にくらぶべき覺の本體。

【心數眷屬】心所にくらぶべき眷屬の意。

【五智】法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

【四大乘宗】法相三論、天台、華嚴

八宗綱要下

【三】問ふ、『此宗幾くの教を立てるや。答ふ、『十住心を立てて大小顯密等の諸教を攝し、窮盡して遺すこと無し。』問ふ、『其十住心とは何ぞ。』答ふ、『一には異生羶羊心、二には愚童持齋心、三には嬰童無畏心、四には唯蘊無我心、五には拔業因種心、六には他緣大乘心、七には覺心不生心、八には一道無爲心、九には極無自性心、十には秘密莊嚴心なり。是を十住心と名く。初めの三住心は是れ世間乘なり、中に於て第一は是れ三惡道、第二は即ち人乘、第三は是れ天乘なり。後の七住心は是れ出世間乘なり、中に於て第四は聲聞、第五は緣覺乘、總じて是れ小乘なり、後の五は大乗なり、他緣と覺心とは是れ三乘教、一道と極無とは即ち一乘教、第十は是れ金剛乘教、最尊最極の實教なり。九種の住心は皆是れ權乘、並に是れ因位なり、第十住心は獨り是れ實果なり。』

【四】大日如來は心王の覺體、摩數の諸聖は心數の眷屬にして五智の所成なり。依正の二報は、本有金剛界、自在大三摩耶、現覺諸法本初不生、大菩提心、不壞金剛光明心殿となり。三十七尊九會曼荼茶、十三大會四重曼荼茶、重重帝網、摩刹の聖衆となり。是れ正報、依正無盡にして自在圓滿、高く諸宗に超えて聳聳、廣く衆典を包ねて廓廓たり。然れば即ち顯乘の大果すら未だ此堂に上らず、出世の小聖、豈に室に入ることを得んや。是を以て四大乘宗は、空寂を以て實理と謂ひ、九界の情執を心城を覆うて、未だ閉關せず。唯此密教のみ明かに實理を見、深く心城に入る、密嚴の華藏に、摩數の諸尊、森羅として住し、一切の衆生、萬德の妙用、歴然として具す。故に一切衆生は皆是れ毘盧遮那なり、一切の諸

相は、悉く是れ覺王の境界なり。

【五】 六大、四曼、三密を明す。
【六大】 地水火風空識。
【四種曼荼羅】 大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅。
【三密】 語密身密意密。

【五】 此宗六大を建立して總じて佛體を明す、四種曼荼羅は此上の相貌、三密相應は即ち其業用なり。六大の中、前五大は是れ理、第六の識大は即ち智、理智の上に各相用有り、四曼三密、建立する所以なり。智は即ち金剛界、理は是れ胎藏界、是を兩界兩部の大日と名く。所以に六大は即ち大日如來を成ず、一切の諸法は六大を離れず、六大法性は諸法に周遍す、故に一切の諸法は大日に非ざる無く、大日如來は法界に周遍す。當に知るべし、兩部は是れ大日如來理智の徳なることを、理徳無量なるが故に、胎藏に四重の聖衆有り、智徳無量なるが故に金剛界に三十七尊有り、兩部不二を理智冥合と爲す。

【六】 此宗は、佛に四身を立つ、自性と受用と變化と等流となり、是を四種法身と名く。五方、五智以て四身を成ず。即身成佛し、大覺速證す、毘盧の覺王、之に登りて方に極まり、即事而眞にして、森然たる諸相、宛爾たる諸法は、皆是れ眞如なり。

【七】 顯教は是れ釋迦の説、密教は即ち大日の説なり、是故に二教の説主炳然として差別す。若し實義を得れば即ち二佛無二なり。此釋迦を離れて別に大日無し。故に十住の階級、劣を捨て勝を得るは皆是れ遮情の分齊、十心の諸法平等にして坦然たるは即ち是れ表徳の義門なり。常差別門、常平等門、不二にして二、二にして不二、表徳の故に一塵も捨てず、皆毘盧の妙徳なり、遮情は顯乘に通じ、表徳は密乘に局る。

【八】 故に此教の意一切の諸法は皆是れ大日にして、眞如は即ち我身、佛法は即ち吾體

【即事而眞】 事に即したるまま眞。
【七】 釋迦顯教と大日密教を明す。
【遮情表徳】 遮情善惡の區別なく一切皆大日法身の功徳の表現とみる。
【八】 眞言宗の批評を述ぶ。

【四重祕釋】眞言宗にて文字事物を解釋する四重の方式。淺略釋、深祕釋、中深祕釋、祕中深祕釋。
【舍生】生死の苦をのがれ出でんと願ひもとめること。

【一】禪宗を明す

【本來無一物】本來一物も無く迷とか悟とか區別するものなしの意。

【五家】臨濟、曹洞、雲門、潯仰、法眼。

【一】淨土宗を明す。

【具縛の凡夫】煩惱を具へこれに束縛せらるる罪惡の凡夫。

なり。四重の祕釋は重重深奥にして深妙なり、三密の業用は密密にして祕奥なり。若し此教を離るれば、永く成佛の路無し、舍生を出でんと求むるもの、豈信行せざらんや。眞言祕教の大概は此の如し。

禪宗竝淨土宗

【一】夫れ諸宗の義相、冲遙として測り難し、今一毛を滴らして以て初心を露す。日本傳ふる所、昔より已來、共に許して、翫ぶ所は唯此八宗のみ。然るに八宗の外、禪宗及び淨土教盛に弘通す。

彼禪宗は、佛法の玄底にして、甚深微妙なり、本來無一物にして、本より煩惱無く、元是れ菩提なり。達磨西來し、文字を立せず、直指人心、見性成佛せしむ。餘宗の、森森たる萬法相違の法義、重重論を扣くに同じからず。天竺の二十八祖、心を以て心に傳へ、彼第二十八祖達磨大師、梁の世に之を傳へ、漢地にては乃至六祖まで次第に相承す。然るに五祖の下、南北の二宗初めて分れ、六祖南宗の末、漸く五家を分つ。

道瑤律師は北宗の禪を承け、之を日本に傳へ、又傳教大師は、大唐國より此宗を傳ふ、佛心宗と名く。近來名徳亦宋朝より之を傳へ、日本の諸處に盛に以て弘傳す。

【二】又淨土の宗教、日域に廣く行はる。凡そ此教の意、具縛の凡夫、淨土を欣樂し。

所修の業を以て淨土に往生す。西方の淨土は、緣此土に深し、念佛の修行は、劣機、特に淨土に生れ易しと爲す、後乃至成佛す。汎く之を言はば、一切の諸行、淨土に廻向するを淨土門と名け、萬行を修行して此成を期するを聖道門と名く、諸教諸宗は皆是れ聖道、往生を欣求するは是れ淨土門なり。

源「起信論」に出で、繼いで龍樹の論教に在り、天親菩薩、菩提流支、曇鸞、道綽、善導、懷感等、乃し日域に至るまで咸く解釋を作りて競うて弘通し、日本近代已來、此教特に盛なり。

若し此二宗を加ふれば、即ち十宗と爲る。然も常途に因る所は、其常八宗のみ。

【三】 結論。

【三】 以前列ぬる所の諸宗の次第は、是れ淺深の次第に非ず、唯言に隨つて列ぬるのみ、何れを列ぬるも得べきが故に、且く上の如く之を列ぬるのみ。人身聖教、受け難く値ひ難し、適ま受値することを得たり、豈默止するを得んや。仍て管見を擧げて以て來縁を結ぶ。微功朽ちずんば、必ず菩提を證せん。

【四】 著者の跋文

【四】 文永五年戊辰正月二十九日、豫州の圓明寺の西谷に於て之を記す。予一宗の教義も尙ほ軌とする所に非ず、餘宗の教觀、一も知る所無し。唯、名目を擧げ、聊か管見を述ぶ。仍て錯謬極めて多く、正義全く闕けん。諸の識見ある者之を質せ。

八宗綱要卷下終

華嚴宗沙門 凝然廿九年

昭和四年十二月一日印刷
昭和四年十二月十日發行

昭和國譯大藏經 宗典部 第十卷

編纂者

昭和國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同 興舍
代表者 井波康三郎

不許複製

發行所

東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社

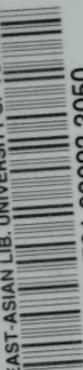
東方書院

電話下谷四二五九
振替東京六六一一





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3050